

『ゼネバスの娘—リフレイン—』

城元太

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゼネバス皇帝の娘として生を受け、ガイロス帝国での虜囚を経てヘリック共和国の大統領に登りつめた女性、ルイズ・エレナ・キヤムフォード。その激動の人生を、惑星Ziの歴史と共に辿っていく

目次

21	(2053年)	139
20	(2053年)	129
19	(2053年)	118
18	(2053年)	114
17	(2053年)	109
16	(2052年)	99
(2052—2054)		
15	(2051年)	90
14	(2051年)	81
13	(2046年～2051年)	74
12	(2042年～2089年)	68
11	(2041年)	60
10	(2039年)	56
9	(2034年～2039年)	50
(2034—2051)		
8	(2052年)	41
7	(2052年)	36
6	(2052年)	30
5	(2052年)	22
4	(2052年)	15
3	(2051年)	10
2	(2051年)	5
1	(2051年)	1
(2051—2052)		

43	42	(20080—20096)	41	40	39	38	37	36	35	34	33	(20056—20080)	32	31	30	29	28	27	26	25	24	(20054—20056)	23	22
(20080年)	(20080年)		(20080年)	(20064年)	(20057年)	(20057年)	(20057年)	(20057年)	(20057年)	(20057年)	(20056年)		(20056年)	(20056年)	(20056年)	(20056年)	(20056年)	(20056年)	(20056年)	(20056年)	(20054年)		(20054年)	(20053年)
312	306		301	293	284	276	271	263	253	242	233		227	217	209	199	190	183	174	167	161		152	143

61	60	59	58	57	56	55	(2101—2111)	54	53	52	51	50	49	(2099—2101)	48	47	46	45	44
(2111年)	(2101年)	(2101年)	(2101年)	(2101年)	(2101年)	(2101年)	(最終章)	(2101年)	(2101年)	(2100年)	(2100年)	(2099年)	(2099年)	(2099—2101)	(2089年)	(2088年)	(2080年～2096年)	(2080年)	(2080年)
461	452	444	436	424	415	404		395	388	382	376	368	359		351	344	336	327	320

(2051―2052)

1 (2051年)

海風が、少女の頬を刺すように吹き付けていた。

空一面を覆う鉛色の雲から微細な雪の粒が舞い、忽ち背後へと流れ去って行く。

激しい向かい風に今にも吹き飛ばされそうな痩身を必死に堪えつつ、少女は海を見つめ続けていた。

肩に羽織った純白のコートが、音を立てて激しくはためく。

衣服の間から垣間見える少しだけ日に焼けた素肌は、少女が北の大地の住人ではないことを物語っていた。

彼女自身にも聞こえないほど、小さな声で呟いた。

「お父さま」と。

岸壁に碎け散る波濤はうねりを上げ、全てを飲み込むように逆巻いていた。

2051年3月。春の訪れが程近い北の孤島で、ゼネバス帝国は滅亡した。中央大陸デルポイをヘリック共和国と二分した巨大な国家は、幾許かの残滓を歴史に刻んで消え去っていった。

波濤の前に佇む少女は、その残滓の一人である。

エレナ・ムーロア。皇帝ゼネバスの娘であり、玉容とも呼び傲わされる美貌の持ち主である。本人の望んだことではなくとも、その才媛は広く帝国臣民から慕われ、武骨な軍事国家のゼネバス帝室に咲いた一輪の花蕾であった。

帝国は、兄ヘリックII世の興した共和制国家と敢えて対抗するように、様々な面で古い世襲制度を残していた。皇位継承権は、ゼネバスの父ヘリックI世が定めた男子による継承のみに固執した帝室典範のため、エレナに皇位が譲られることは無かった。典範を改訂し、正式に皇位継承を承認させる審議も何度かされたが、帝室内での元老同士の対立や、権力を巡る派閥の確執があり、共和国との戦争継続による混乱も加わり改正の叶うことはなかった。

私的な時間にゼネバスが嘆いた言葉を何人もの側近が耳にしている。

「エレナが男だったら」

『歴史は繰り返さないが、韻を踏む』。ある小説家の言葉だが、皇帝ゼネバスと同じ嘆きを時代の為政者達が何度となく韻を踏んできた。世襲制の専制国家において、一刻も早く後継者を育てることは肝要であるが、ゼネバス帝国はそれを成し得ず、結果として帝国滅亡の遠因にもなったのである。

「エレナ姫、お身体に障ります。もうお戻りください」

「もう少し。もう少しだけ見せて」

鉛色の空と、沸き立つ白い波の先に横たわる故郷デルポイを臨むべくもなく、黒いゾイドによって撃ち抜かれた父ゼネバスの行方も知れるはずもない。

それでも少女は、肩まで伸びた淡いブロンドの髪を雪交じりの風に叩かれながら、波濤を見つめ続けていた。

彼女は名目上「保護」されていた。

国家併呑という形での究極の援護を行った暗黒軍団ガイロス帝国の最大の誤算は、優秀なゼネバス帝国軍人に忠誠を尽くさせるための象徴たる皇帝を葬り去ってしまったことであつた。

皇帝専用ゾイドの機体が、デスザウラーもしくはアイアンコングという情報の錯綜も災いした。重力砲による圧倒的な破壊力の差を見せつけたデッドボーダーの操縦者でさえ、初めての中央大陸での戦闘に緊張していたという理由もある。

何より、皇帝自らがゾイドに搭乗し決戦を挑んで来ることを、暗黒軍の兵士全員が予想だにしなかった。彼らは勇猛果敢な戦士ゼネバスを知らず、後継者も決められぬ、老いた君主ゼネバスのみしか想像できなかつたからだ。

ほぼ全員が生死を共にした皇帝親衛隊の中、重症故に殉死の叶わなかつた捕虜から皇帝戦死の事実を伝えられた時、暗黒軍二カイドス島上陸部隊司令はすぐさま代替策を練り直す必要に迫られた。

皇帝に代わる象徴を「保護」すること。武装を解除され、捕えた帝

国軍兵士、及び最後までニカイドス島にまで付き従ってきた非武装の民衆に向けて呼びかけた。

「ガイロス帝国は、皇帝の遺児、エレナ姫を丁重に保護したい。所在を知る者は名乗り出よ。報告者には相応の褒賞を用意しよう」

最後まで皇帝に従ってきた忠臣ばかりであり、暗黒軍の見え透いた策略に乗るほど愚かではない。民衆にも、彼女の所在を告げる者は一人としていなかった。

一日経ち、二日経ち、三日を経過した時、上陸部隊司令はたちまち痺れを切らした。このままでは、自分がガイロス皇帝に粛清される。彼は部下に命令した。

「捕虜を拷問にかけてでも、エレナの行方を探せ」

捕虜たちが見守る中、捕虜の兵士から長身の青年が引き立てられた。

彼女が彼女をよく知り、彼女も彼をよく知っている。そしてその事実を暗黒軍もよく知っていた。

エレナ姫はこの中に必ずいる。それを話しさえすれば、楽になる。暗黒軍は、全ての捕虜に聞こえるように、青年に語りかけた。

兵士は無言であった。ただ、鋭い視線を投げかけながら。

予想した行動である。暗黒軍は予定された作業を開始した。

衆人環視の中での拷問である。その方法を語ることは避けたい。

それでも青年は、歯を食い縛り、流れ出る血潮にも耐えていた。そして叫んでいた。

「自分は平気です。エレナ姫はここにはいない。顔も知らない」

暗黒軍にとつても、これは賭けであった。拷問という原始的な尋問で結論が出せなければ、暗黒軍の真意を知られることになる。名目とはいえエレナ姫の保護と謳っている以上、力づくでの方法は危険でもあった。

誰もが青年の姿に目を背けていた時、一人だけ真正面を向いていた少女がいた。その瞳には、燃えるような怒りが浮かんでいる。隣にいた女性が、思わず口にした。

「姫様いけません」

「やめてください」

少女は立ち上がった。周囲から、絶望とも諦観ともつかない声が漏れた。

「わたしがエレナ・ムーロアです。その人を解放し、治療をしてください」

当初の目的を達成し、安堵の表情を浮かべる暗黒軍の司令の姿があり、どんな仕打ちにも耐えていた拷問台上の青年が、がっくりと膝を着いて座り込んだ。

「エレナ、貴女はいつも僕の気持ちを裏切るんだ」
そう呟いて。

暗黒軍に保護されたエレナは、申し訳程度に仕立てられた帝室専用のホエールカイザーの一室に詰め込まれ、アンダー海、トライアングルダラスの彼方の暗黒大陸ニクスに向けて連れ去られた。

新たな悲劇の始まりを嘆く様に、夜空に流星が舞っていた。

2 (2051年)

三方をアンダー海で囲まれた、ここキシウムビタ城にエレナは「保護」されていた。この場合、保護と拘束という言葉は同義である。周囲には監視が置かれ、自由に野外に出ることも儘ならない生活を強いられる。時折海風に身を委ね、今は亡き父の姿を波間に思い描くことしかできなかつた。

遠方に、装甲の隙間から緑色の燐光を放つヘルデイガンナーと言うゾイドが這いまわり、彼女の姿を一瞥すると、城壁の裏へと消えていく。

エレナはゾイドが大好きだった。帝室専用のシルバーホーンを皮切りに、デスザウラーを除く殆どのゾイドのコクピットに座つたことがある。

それでも目の前で燐光を放つ暗黒軍のゾイドは大嫌いだ。

父の仇、祖国の仇、他にも理屈では割り切れないさまざまな感情が重なって、黒いゾイドを目にする度に、虫酸が奔るような嫌悪感に苛まれた。

城内に戻るとすぐ、伴って行動していたキャロラインが雪で湿つたコートを受け取り暖炉の側へと彼女を導く。

コートの下から、北の大地には不釣り合いな淡いパープルのハイネックタイプのワンピースドレスが現れる。二の腕まで被つた純白薄手のロンググローブから露わになる肩と、膝に達しないスカートから伸びた脚が柔らかな曲線を描く。

ドレスと色を揃えた白い縁取りのブーツは少女の細い脚部を膝まで被い、肩に掛かつたシースルーのショールから、冷え切っていた肌が暖炉の炎で温められ、幾分上気し赤く火照る。艶やかな肩と鎖骨は、妖艶な色香を漂わすには未熟な少女の愛らしさを放っていた。

胸の中央に、金糸に提げられた蛇と剣をあしらつた金色のブローチが輝く。今は亡き帝国、ゼネバスの紋章であり、今の彼女にとって精一杯の抵抗であつた。

嘗てゼネバス帝国での自分の位置づけを、聡明な彼女は理解してい

た。

父が力の象徴であるならば、自分は優しさの象徴になろう。16歳の彼女は、思春期に見られる理由のない反抗を抑えつけ、勉めて帝国民衆の前に立っていた。

客観的に、彼女は自分の美しさを認識していた。

政治とは、政策であると同時に幻想でもあり、理性と感情は政治の両輪となる。だからエレナは、自分の持つ美しさと若さを訴える姿で民の前に立った。敢えて地底族の血をひく証を示す素肌を露わにすることこそが、若い自分にできる最大の貢献と知っていたからこそ。

しかし、デルポイを離れた囚われの身の彼女にとって、その服装は徒に肌を晒すだけのものだ。それでも彼女は、あの温かい民衆の姿と父との記憶、そして朋友と共にゾイドで自由に大地を駆け回った思い出を胸に抱き続けるため、敢えてこのドレスを身に纏っていたのだ。

「温かいお飲み物を御用意致しました」

「お酒は入っていないですよね」

「存じております。御心配なく」

キャロラインは微笑みながら、エレナの横のテーブルに、蓋の付いた白磁のティーカップを置く。彼女はデルポイ以来の忠臣であり、世話係であり、友人でもあった。5歳年上で幼い頃より皇女付きの世話役として教育を受け、帝国首都での参賀を含め、一時占領していた共和国領での巡幸にも常に付き従ってきてくれた。

エレナは冷え切った両手をカップに添えて、香りを楽しもうと蓋を開く。

「熱っ」

「お気を付けください。カップは熱くなっておりますので」

キャロラインは少し笑いながら告げる。

「そんなことわかってるわよ。今実感したわ」

幾分不満げな表情を浮かべ、エレナは注がれた琥珀色の紅茶に癒されていた。

幽閉されて以来、単調な毎日が続いていた。

暗黒軍の策略は手に取るように判る。ゼネバス帝国の遺児である自分を擁し、デルポイに戦いを挑むこと。ゼネバス帝国滅亡による空白地帯を埋め、そこに育まれている人的資源をそのまま手に入れること。北極圏に近く、年間の半分以上を雪と氷と暗い極夜に閉ざされ、人口の増加もままならないニクスから、明るい太陽が降り注ぐ南の大地をめざすこと。

彼らには国家間での「共存」という概念がない。暗黒軍と呼ばれる所以は、暗く閉ざされた自然ゆえの、暗い殺戮の歴史に縁取られてきた結果でもあった。

帝国滅亡のあの日から既に三か月が過ぎ、ニクスの短い夏が始まるうとしている。鉛色の雲間からは、時折水平線に貼りついたような弱い日差しが太陽が見えた。夏至が近づくとともに、白夜の季節も巡って来る。

しかし、この地の夏は不快だった。

永久凍土の溶ける僅かな期間を待ち構えていた無数の生命が、泥濘の中一斉に孵化する。風が止んだ晴れ間には、空一面が黄色くなるほど小さな羽虫が飛び交うのだ。ただ種の維持のためだけに舞い、子孫を残した後には数センチ層の死骸を成す。人に危害を及ぼすものではないが、迂闊に羽虫の群れに巻き込まれば、忽ち口と言わず耳と言わず飛び込んでくる。衣服の隙間に入り込み、鋭い爪で肌を傷つける。自ずと外に出るのは、僅かに雪が舞う風の激しい日に成らざるを得ない。

今日は羽虫は発生していない。彼女は窓の外を眺め、戻ることの出来ない故郷に想いを巡らしていた。

故郷デルポイの夏は劇的だ。夏始と呼ばれる急激な気温変化に、季節は一斉に変化する。花が咲き鳥が舞い、人が歌う。中央山脈に端を発する雪解け水が音を立てて流れ、豊かな実りを齎した。それに比べ、暗黒大陸の夏はあまりに辛い。

「キャロル、私たちは幸せだったのね」

「何のことですか」

「なぜガイロス帝国が、私たちの国土を欲するのかよくわかったわ。冷たく、暗い大地。なぜこの星には、生まれながらにしてこれ程の差がついてしまうのかしら」

「私などにお答えできることはありません」

それはキャロラインに問いかけるといよりも、自分自身への問いかけであった。

他人の痛みを知る。

エレナは傷病兵を見舞い、血だらけの包帯を巻き直し、時には命尽きた無名の兵士の遺体に縋り、辺りを憚らず大声で泣いたこともある。それはパフォーマンスなどではなく、父譲りの豊かな感情の表れではあった。だが国軍兵士への愛情とは執着という言葉にも置き換えられた。身内の者だけしか愛させないのでは永遠に平和は訪れない。

後に開花する、父ゼネバスを超える彼女の政治的な才覚の片鱗は、この時既に示されていた。

時ならぬ轟音が、城の上から響く。歪なダイヤモンド編隊を組んだ赤いゾイドが、雪混じりの空を飛び去って行く。

「まだ塗装も変えていないなんて」

キャロラインが不満そうに呟いた。

ゼネバス帝国から接収したレドラーが、慣れないガイロス兵を乗せての慣熟飛行訓練を行っているのだ。海上が飛行訓練場になっており、単調な海岸線の中、このキシウムビタ城が一つの航路目標になっていた。明滅する赤い航空灯が、古い時代に建てられた城壁に不釣り合いに光っている。

戦争は避けられない。彼女は冷静に判断を下していた。

見せ掛けだけの平穩は続いている。ゼネバス帝国との戦いの傷の回復と、旧帝国領への占領支配政策の徹底を図っているヘリック共和国。未だ兵の習熟が上がらず、ディオハリコン不足によってごく限られたゾイドしか準備できていない暗黒軍。互いの利害が一致しての仮初の平和。それさえ過ぎてしまえば、必ずどちらかが兵力を動かす。

その時、暗黒軍の陣頭に立たされるのが自分であることを、彼女自身
が痛いほどにわかっていた。16歳の少女が負うには、あまりに重
い責任であった。

旋回したレドラーはエレナたちの頭上を掠め、代わってシンカーの
編隊が、やはり歪なダイヤモンドを描きながら窓の外を飛び去って行
くのであった。

3 (2051年)

新たに発生した中央大陸と暗黒大陸との対立に於いて、先に行動を起こしたのは共和国側であった。

2051年10月、ヘリック大統領の解読したH Z暗号の内容をもとに、暗黒軍最終兵器破壊を目的として、共和国第一次上陸部隊はアランダ海に漕ぎ出す。また、デルポイで異常現象が相次いで発生し、原因が暗黒大陸からの謎のエネルギー攻撃によるものと断定されたからでもある。

ここで当然の疑問が湧く。

子供の作った暗号文に、どれ程の信憑性と機密性があるのだろうか。

謎のエネルギーが、なぜ暗黒大陸からやってきていると断定できるのであろうか。

H Z暗号を解読したのはヘリック大統領本人で、内容の解釈は自由にできる。

中央大陸での異常現象は、後の惑星大異変の前兆に他ならない。当時の共和国科学省もその事実を把握していたことが判明している。

共和国政府が欲していたのは、かつてゼネバスを追放したと同じように、肥大化した軍産複合体(MIC)を背景とした戦闘維持のための捌け口と、未だ統一ままたない旧帝国領国民を束ねるための謀略であったと推察する方がより自然である。

無論、共和国政府のみを責めるのは酷である。現にギルベイダーによる渡洋爆撃を暗黒軍が敢行している以上、最終兵器の存在は証明されている。

それでも、爆撃の理由を作ったのは上陸部隊を二度に亘って送り込んだ共和国側であり、上陸部隊が攻め込まなければ、或いは暗黒軍側はビームスマツシャーの研究、及びギルベイダーの建造を遅らせていた可能性もある。両大陸が戦端を開かなければ、僅か5年後に訪れる惑星大異変の彗星衝突にも、冷静に対処できた可能性もある。

時代は悲劇に向かって着実に動き出していた。

遠雷のような響きを耳にしたのは、エレナが暗黒大陸での二度目の冬の訪れに気付いたころだった。日に日に短くなる太陽の輝きに、暗鬱な極夜の到来を感じていた時、鉛色の雲を横切る巨大な影を目にしたのだ。

「マッドサンダー……？」

厳密には、飛行用に改造された共和国上陸部隊のマッドフライであるが、彼女にとって与り知らない事である。

信頼を寄せていた恩師マイケルの操るデスファイターを一撃で粉砕し、帝国首都の再陥落を促した巨大ゾイドだが、不思議とエレナにはマッドサンダーに怒りが湧くことはなかった。囚われの身の今、彼方のデルポイの香りを放つ懐かしさを重ねたためであろう。

身を乗り出しマッドフライの行方を確かめようとした目の前を、更に巨大な黒いゾイドが耳を弄する轟音を伴って、地を這い飛び去って行った。

デスザウラーのフレームからディオハリコンの燐光が輝いている。両肩より突き出したプロテクターから陽炎のように熱気が噴き出し、ホバリングによって機体は滑るように移動していく。後頭部が極度に肥大化し、巨大な斧を携えている。

「姫様、あれは確か」

「マイケル先生のデスファイター……違う、もっと凶悪なゾイドよ」

エレナたちが目にしたもの、便宜上「デスエイリアン」と呼称されている改造ゾイドであった。

暗黒軍は、ゼネバス軍で稼働可能なゾイドを接收しただけではなく、様々な改造ゾイドの設計図をも入手していた。ギルベイダーさえ基本設計はマイケルが父ドン・ホバートを凌ぐために計画していた、巨大飛行ゾイドの設計図を一部利用したものである。

デスファイターの機動性に注目した暗黒軍は、ギルベイダー完成を待つ間に再度デスファイターの建造と更なる改造を命じ、戦線に投入していた。

真つ赤なゼネバスカラーに彩られていたはずのデスファイターが、嫌悪感を催す黒い機体に置き換えられていたことに、マイケルの業績

を土足で踏みにじられるような屈辱感を味わっていた。

エレナは知らない。この時デスエイリアンの操縦席に座っていた人物と、H Z暗号の発信者の存在を。

コクピットは絶え間ない騒音に晒されていた。

両肩に装備されたホバーから噴き出すジェット推進の奔流は、予想外の轟音となって響いてくる。後頭部から張り出した暗黒粒子吸収版の風切音も、言い知れぬ不快な響きとなって続いている。

デスエイリアンと呼んだのは、彼自身だった。

エイリアン 異邦人という呼称は、絶妙のカリカチュアだ。

異邦人とは俺たちのことじゃないのか。それともガイロスの奴らか。

一人乗りのコクピットで、彼は彼自身を憫笑していた。

デルポイから接收されたデスザウラーを、未解析のエネルギー鉱石ディオハリコンで再調整し、コアとの同調が不十分な機体を過剰改造の上に空力学さえ無視して異様な突起物を装備させている。

この機体は長く生きられない。過剰に供給されるエネルギーでコアの劣化は進み、増加された装備が関節部への大きな負担を強いる。例え戦闘で勝利しようとも遠からず自己崩壊を起こす。改造ゾイドの宿命とはいえ、生命として、戦友としてのゾイドへの畏敬は感じられない。暗黒軍はゾイドを使い捨ての武器としか考えていないことに、操縦者としても、このゾイドが哀れだった。

「シユテルマー中尉、ブラツディゲートへの方向がずれている。確認の上至急進路修正を実行せよ」

ノイズ混じりの通信が響き、聞こえぬように小さく舌打ちする。

「こちらデスエイリアン、シユテルマー。予定進路上に磁気異常を確認、若干の進路修正を行うも、目的地到達時間に変更はない。機関正常、出力は予想以上だ。敵上陸地点に到達次第、再度報告する」

彼は最初から迂回するつもりであった。彼女の囚われている城の臨める場所まで。

漆黒に塗られた水平線が迫り、古城には不釣り合いな航空標識灯が見えてくる。キシワムビタ城だ。

「エレナ姫……」

音声を記録するのは緊急用のボイスレコーダーのみで、戦闘に勝利すれば自動的に消去されるだろう。

見下ろす古城は、かつて王女として尊崇された彼女にはあまりに暗く、みずぼらしい城だった。

これが俺たちの置かれた立場なのか。

悔しさよりも諦めが先に立った。

彼もまた、眼下の古城から見上げる少女がいたことを知らない。

沿岸の空軍基地から炎が上がっている。

ホエルカイザーが撃沈され、巨大なコンテナ状の機首が屹立していた。軍人の習性なのか、敵を前にし、今までの葛藤も機体の騒音も意識の外に弾かれていた。

「目標地点に到達、これより戦闘に移る」

ホバーの噴出を最大にして機体を突入させていた。

滑走路はデッドボードーの残骸で溢れている。

「なんだこの戦い方は。重力砲も満足に使いこなせないのか」

頭上には煩わしく青い翼竜型が舞う。

レイノスとかいったな。小賢しい。

レーザーアックスで一閃すると、青い翼が切断されバランスを失いくるくと面白いように墜落して行った。

親玉はどこだ。指揮官をつぶしてやる。

冷徹な炎が宿る瞳の先に、強行着陸と襲撃を終え、いましも離陸しようとする飛行用マッドサンダー、マッドフライが映った。

破壊の代償は払ってもらおう。

デスエイリアンのホバー移動はシュテルマーの操縦技術と相まって電撃のようだった。

レーザーアックスが振り下ろされ、離陸中の無防備な体勢、更には改造ゾイドの宿命の機体の重さが回避運動を取る余裕を削いでいた。

ローリングチャージャーの部分でマッドフライは真つ二つに切断された。巨体が爆破炎上する。

一面炎の輻射を浴びながら、デスエイリアンは鬼神の如く戦場に佇

んでいた。

「やはりここが俺の居場所なんだ」

ボイスレコーダーだけが、その眩きを記録していた。

トライアングルダラスによる通信の途絶と、暗黒大陸の地形に対する情報不足、加えて中央大陸建造のゾイドの冬季仕様改造の不徹底。加えてデスエイリアンの活躍もあり、結果として共和国第一上陸部隊は、バーナム川に初雪を降らせることが出来ず、壊滅を迎えたのだった。

4 (2052年)

海岸線には、打ち寄せられた残骸が延々と続いていた。

所々に雪を被り、破壊された切断面から石化した機体の内部が覗き、時折打ち寄せる波が錆を洗うのか、波が引くたびにどす黒く変色した血のような海水が流れ出ている。

正午近くになって漸く昇った太陽も、あと僅か数時間でまた水平線に没する。その僅かな時間に、エレナの視察は行われていた。

数日前のことである。

「戦場視察ですか」

「お受け願います」

ヴァーノン中佐というガイロス広報担当官は、前触れもなくキシワムビタ城にやってきた。エレナの戦場視察の日程から巡幸のコース、護衛の人員など全てを決定しており、最初から拒否をする選択肢は与えられていない。エレナの存在価値はそれだけの為と認識していたからだ。

共和国の第一次上陸部隊を撃退したとはいえ、暗黒軍も無傷ではない。そして未だ戦闘に慣れていない暗黒軍兵士に代わって、多くのゼネバス兵が作戦に参加し死傷している。共和国の脅威に備え暗黒大陸南西沿岸のブラッディゲートからカオスケイブにかけて警戒を続けている兵に向け、本人の知らないところでエレナによる慰問と視察を兼ねた巡幸を実施することが決定されていたのだった。

不満はあるが、納得しなければならぬことだ。エレナが視察を了解すると、ヴァーノン中佐は慇懃無礼な態度で戻って行った。その不遜さに激しい不満を漏らすキャロラインを見ながら、エレナはしかし、漸くこの鳥籠のような城から出られることに、少しだけ心躍った。かつてのゼネバスの兵に出会えるのが嬉しかった。

あのドレスを着て行こう。ゼネバスの紋章は、見つからないように付けて行こう。少しでも勇気づけられればそれでいい。今、私に出来ることを精いっぱいやろう。数か月ぶりの外出に胸を膨らます姿は、普通の少女そのものであった。

彼女の期待は完膚なきまでに打ち破られた。

人の死体こそ無かったものの、撤去のされないゾイドの残骸は、凄惨な戦闘の痕を如実に物語っている。暗黒軍は、それを敢えて撤去をしないことで、共和国の再上陸が行われる際の障害物として利用しているのだ。

渚に横たわる巨大な機体はマッドサンダー（厳密にはシーマッド）、青い残骸はカノンフォートとレイノスと言ったはず。横たわる機体の装甲に無数の銃創が刻まれ、砲身や脚部が無造作に散乱している。

共和国の新鋭レイノスの残骸はひときわ多かった。

（何か聞こえる……）

エレナは、スクラップ置き場のように青い翼が無造作に集められた残骸の中に、微かに動く機体を見つけた。積み上げられた他の機体に挟まれ、右の翼がようやく動く程度だが、それでも出来る限り首を伸ばし、水平線の彼方のデルポイを見つめている。

「姫様、どこへ行かれるのですか」

「あのゾイド、まだ生きてる。助けなきや」

「システムはロックされているはずです。お止めください」

キャロラインの言葉を振り切り、彼女はするするとレイノスのコクピット近くまで残骸の山を登った。

本来であれば、特定のコードナンバーを認識させなければキャノピーが開くことはないが、そのレイノスのキャノピーは損傷し、瘦身の彼女であれば充分操縦席に滑り込めるほどの亀裂が入っていた。ドレスとシヨールの裾を気にしながらシートに座る。新型ではあるが、よく使いこまれた機体の様だ。コンソールを操作してみる。システムは作動しない。

あたりまえよ。でも、ここの配線をバイパスすれば……

エレナの器用さは職人氣質の祖父と母譲りであり、加えて恩師マイケル博士の指導の賜物である。携帯している小さなナイフを使って配線を接続し直し、スターボタンと思しきスイッチを入れてみた。

“ If lucky, she is waiting for you.”

コクピットにアップテンポのロックの歌声が響きわたった。パイロットの趣味だろうか。命を擦り減らす戦闘中であっても、常に歌声を忘れなかったらしい。その曲は、どこまでも広がって行く自由さと、青空を想像させた。

「ねえ、このゾイド、動かさないかしら」

残骸の山の麓で様子をうかがっていたキャロラインが、当惑の表情を浮かべる。

「無理ですよ、こんなスクラップ。きつと置いて行かれたのです。とにかく早くお戻りください。いつこの山が崩れるともかぎりません」もちろんそんな忠告を聞くエレナではない。システムの立ち上げに成功すると、今度は機体操作を試みていた。翼が僅かに動く。他のレイノスの残骸を振るい退けた。脚部に動力を回す。飛行ゾイドの細い脚がギシギシと音をたてて伸びあがって行く。

もう少し持ち上がれば残骸から脱出できるかもしれない。

壊れたキャノピーから雪が吹き込む。外が見えてきた。もう少し、もう少し。

突然、スクラップの山が音を立てて崩れ出した。微妙なバランスを取りながら積まれていた残骸が、エレナの起動で崩されたのだ。彼女を乗せたまま、レイノスは残骸の山から滑り落ちる。その先には冷たい初冬の海が広がる。死ぬことはないだろうが、水を被ることは免れない。コートの下にはいつもの薄手のドレスだけだ。

気に入っていたのに、今日は着替えなければならぬかな。

直前に衣服のことが気になっていた。

金属の擦れる音が響き、シートは激しく上下する。レイノスが滑り落ちる音とは別の、低い振動が聞こえてくる。

何かが突進しながら近づいてくる。

視界に緑色の燐光が入った。

あれはデイオハリコン。暗黒ゾイド？

もう少しで水面だ。冷たそう。

彼女は思わず目を瞑っていた。

波打ち際まで滑り落ちると、急に背中シートに引つ張られる反動

を感じた。共和国製の衝撃吸収性ヘッドレストが柔らかく彼女の頭部を受け止めると、嘴まで海水に浸かりながらも直前でレイノスの機体は動きを止めていた。滑り落ちる加速がついていなかったのでコンソールに頭をぶつけることは避けられたが、折角束ねたブロンドの前髪に幾つかのほつれ毛を産んだ。

またキャロルのお小言を聞かなければならないかな、あの人長いのよね。

それにしても、よく水際で止まったなあ。タイミング良すぎ。

軽い眩暈を伴って、改めて周囲を見回す。背後に黒い影、そして緑色の燐光。

「ダークホーン……」

割れたキャノピー越しに見えたのは、エレナの乗ったレイノスの尾部を咥え、水際の僅か手前で水中に没するのを押さええているダークホーンの姿だった。

ゼネバスが初期に開発したレッドホーンが改造され、より強力なゾイドに生まれ変わっていたことは知っていた。ディオオハリコンによって出力が大幅に増強され、共和国の新型ゾイドにも充分対抗する能力を授けられていたことも。新たに装備された武骨なハイブリットバルカンが、以前の機体との破壊力の違いを顕示している。

レイノスが情けない叫び声をあげていた。無理もない。突然見知らぬ人間に機体の起動をされて、残骸の山から滑り落ち、そのうえ尻尾を引っ張られ宙吊りの姿勢をとらされているのだから。

ダークホーンの隣では、腰を抜かしたようにへたり込むキャロラインの姿がみえる。

どうやらこのダークホーンに助けられたようね。癩に障るけれど一応お礼を言わなければ。

動力が回復したため、キャノピーは自動でせり上がった。エレナはパープルのブーツが海水に浸るのも構わず、レイノスのコクピットから降り立つ。巨大なクラッシュヤーホーンが屹立する前に立った。

「助けて頂いたこと、感謝します。私はゼネバス帝国……」

「存じ上げております」

機体の外に装備されたスピーカーからではない。ダークホーンのコクピットが開き、中から直接答えたのだ。聞き覚えのある声、それも昔からの。

クラツシャーホーンの影から、コクピットのシートより立ち上がる姿がある。剃刀のような鋭い視線を湛えている。

「シユテルマー！」

「相変わらずのお転婆ですね、姫様。お元気そうで何よりです。

キャロライン殿も変わりないか」

代わる代わる二人の姿を見つめると、改めて敬礼をする。

「ブラッディゲート方面駐屯部隊所属、シユテルマーです。エレナ姫様の護衛の為に参りました」

暗黒軍制式の赤いパイロットスーツに身を包んだ姿は、幼い頃より王宮で顔を会わせてきたひとであった。

彼はゼネバス帝国の英雄ガンビーノ將軍の遺児で、父の死後ゼネバス皇帝によって保護され、男子のいない皇帝によって息子のように育てられてきた。エレナより一つ年上の彼は、年齢も近いことからキャロラインとともにエレナと学んだ友人であった。

ある事件により将来を絶望視されたものの、彼自身の持つ優秀な判断力と父譲りの勇敢さから、帝国内で若くして皇帝からの信頼を与えて、将来を嘱望されていた士官であった。

ニカイドス島での尋問の傷も癒えた後は、暗黒軍の皇帝武官付親衛隊中尉の地位を与えられた。「二君に仕えず」が父からの戒めであったが、彼には戒めを破つてでも、守らなければならないものがあつた。他ならぬ、ゼネバス皇帝の忘れ形見、エレナのことである。

彼は既に制式に量産体制の整ったダークホーンに乗り換えていた。緒戦で搭乗したデスエイリアンは、すぐにコアの限界を迎え作動を停止した。

ゼネバス帝国の物は使い捨てにされることを知った。目の前にいる、再会に少し瞳を潤わせた可憐な少女も、同様の扱いを受けることを思うと居た堪れなかった。

「本日の巡幸の護衛を仰せつかりました。警護の部隊が参りますの

で、暫くお待ちください」

コクピットから降り立ち、エレナの目の前で跪いた。

彼の形式に囚われた姿に、母国の滅亡の悲哀をまざまざと見せつけられる思いであった。

エレナもまた、彼が人質である自分の為に軍務に就いていることを知っている。一つ年上でしかないのに、シユテルマーは身長以上に離れて大人びていた。父を亡くしたことが、彼の成長を否応なしに促進させていたのかもしれない。それだけに、頼りになる兄のように、そして少女特有の淡い想いを抱きながら、遠いあの日に王宮の庭を幾度となく一緒に歩いた。ガイロス帝国軍人と化した彼を目の前にし、もはやあの頃には戻れないことを思い知らされた。

ヘルデイガンナーが2機近づいてくる。式典がはじまるのだ。ふと、彼女は彼に話しかけた。

「シユテルマー、このゾイドを、私にもらせませんか」

飛行型のゾイドを所有することが、彼女の脱出を援助することになるのは判っている。それを敢えて願う彼女の言葉に、彼は少し思案した。

「このコアは生きています。共和国の技術を研究する必要もあるでしょう。幸いデッドストックになるパーツは散乱しているのだし、1機再生してキシウムビタ城で飼育することはできないでしょうか。乗って逃げたりはしません。だって、そんなことをしたら忽ちヘルデイガンナーの対空砲の標的になってしまうことぐらいわかります。

お願いします。籠の中に、故郷の香りのする鳥を飼ってみたいのです」

その比喩が、何を意味するのか痛いほどに理解できた。

「善処します」

表情を変えずに、シユテルマーは答えた。

感情を交えず、冷たい口調であったが、エレナはいつぱいの笑顔を浮かべていた。彼のそんな態度は、必ず望みを叶えてくれる証拠だと知っていたからだ。

巡幸の準備を整えたヘルデイガンナー部隊に向かいながら、エレナ

に見えぬように苦笑を浮かべていた。

5 (2052年)

キシワムビタ城の上空をレイノスが悠々と舞う。

エレナの願いが叶い、数々の機体検証が行われたのち、共和国製のこの青いゾイドの1機が、彼女の元に送られてきたのだ。

リミッターが付けられ、一定の高度以上は飛行できない。ブースターにも出力を抑制する装置が取り付けられている。操縦系のシステムはロックされ、そのままコクピットに座っても操縦はできないはずになっていた。

(ガイロスの技術者は、マイケル先生には及ばないわね)

ゾイドのメカニズムに精通しているエレナにしてみれば、そんなシテムロックなど造作も無く解除できた。敢えてそれをしなかったのは、自分に戻る場所などなかったからだ。あれから少し語り合ったシユテルマーだが、彼も全てのゼネバス兵の立場も、同じような籠の鳥だった。だとしたら、同じ籠の鳥同士、ゾイドだけでも空を舞わせたい。レイノスの修理には、そんなエレナの気持ちも込められていた。

「あのゾイドで飛べば、デルポイに戻れるでしょうか」

紅茶を運んで来たキャロラインに話しかける。

「お気持ちお察しします。けれどもあの機体の航続距離でギリギリ。トライアングルダラスを迂回したら、燃料はなくなるでしょう」

「そうですね」

翼を取り戻し、空を舞う喜びに酔い痴れるように、レイノスは飛び続ける。

エレナはレイノスを眺めつつ、白磁のティーカップを唇につけた。

「熱っ」

「だから、お気を付けてください。火傷しますよ」

窓の外には、北の大地の太陽が高く昇ろうとしている。

三度目の夏だと、心の中で呟く。単調な生活の中、彼女は時折焦燥感に苛まれた。

人生でも最も有意義な時期に、自分は籠の中に押し込められてい

る。

軍人としてのシユテルマーは、少なくとも自らの能力を生かしているのだから、ある意味自分より幸せではないだろうか。それに比べ、ただゼネバス兵動員の象徴として飼われている自分など、害は有っても役になど立っていない。ゼネバス帝国滅亡と同時に自分も滅びていればどれほど楽であつたらうか。陰鬱な城での生活は、快活なエレナの感情にも暗い影を落としていた。

あれから何度も兵の前に立ち、予め指示された事だけを言わされた。「ゼネバス帝国とガイロス帝国の共闘」「ヘリック共和国の脅威」「父ゼネバス皇帝のための復讐戦」。齒の浮くような綺麗事、偽善に満ちた正義感、矛盾に満ちた戦意高揚だ。型通りの棒読みで、精一杯「言わされています」という意思表示をするのが限界であつた。

一度「父はガイロスに殺されました」と叫んだこともある。たちまち旧ゼネバス兵の中で動揺が起こり、水面に波紋が広がるように、怒りと悲しみと憎しみを伴った慟哭が湧き上がった。大規模な暴動に至る危険性を察知した暗黒軍の治安部隊は、まずは演台から丁重に彼女を退去させた。引き摺られるように連行された集会場奥の部屋に、無数の悲鳴と銃声が数時間響き亘って聞こえていた。

「エレナ姫、不規則な発言はあれほど控えるようにと念を押したではありませんか」

ヴァーノン中佐という男は、憐みとも侮りともつかない笑みを浮かべて、エレナの眼前に顔を近づけた。

「この銃声が何か、聡明な王女様であれば察しが付くでしょう」

銃声は、銃撃戦の様な間断のないものではなく、数分おきに定期的に発射されている。その度に短い悲鳴が重なって起こる。銃殺刑の執行だ。

「姫様の語られたことは、既に知っていますですよ、ゼネバス兵達はね」

無言のまま睨んだ。

「憤りのお顔もまた美しいですね」

ヴァーノンは嫌らしい笑みを湛えたままだった。

「ただ、これも彼らは知っているのですよ、自分たちの帰る場所が失われていることに。」

お判りでしょう。中央大陸は既にヘリック共和国の占領下です。以前あなたの父君がバレシア湾に再上陸し、たちまちの内に旧領土を回復してしまった事例を反省し、共和国は強力な治安部隊を帝国領に派遣して、統治しているのです。

ここにいるのは優秀なゼネバス兵のみです。彼らがこの中央大陸に戻れば、帝国の勇者であればこそ、復讐心に染まった共和国国民が見逃すと思いますか」

聞こえるように、深い溜息をついた。

「もう、このニクスにしか、彼らの居場所はないのです。形ばかりのガイロス帝国への忠誠を誓っていることぐらい、我々だってわかっています。」

ただ、せめて玉容と言われた王女の姿を見せてやるのは我々ガイロス軍の務めと思い、こうして機会を与えてやっているのに、今回姫様は台無しにしてしまった。

処刑されるのは数十人で済めばいいのですが」

言葉を区切りながら、執拗に念を押す話し方だった。

エレナは自分への屈辱は耐えられたが、数分おきの銃声は耐えられなかった。両耳を塞ぎたかったが、押さえつけられた両手では、それもできなかった。

「姫様、不要な発言は今後控えることをお勧めしますよ」

ヴァーノン は背中を向けると、立ち去って行った。その時、少し背中を丸めた。嗤ったのだ、ゼネバス兵の暴動を。

悔しかった。死にたいくらいに悔しかった。しかし、仮に自分が死んでゼネバス兵が抛り所を失い暴動を起こせば、今以上の大虐殺が起こらないとも限らない。

生きなければならない。生きてここから自分が去ったことを示さなければ意味がない。彼女には自分の命さえ、自由にならなくなっていたのだ。

レイノスの舞う姿を見ながら、エレナは現実を逃避し夢想の世界に

浸った。夢見がちな少女の幻想にしては、あまりに悲しい夢であった。

（お母様が話してくれた昔話。青い鳥は幸せを運んでくる、そして囚われの姫は、いつか白馬に乗った勇者が助けに来てくれると。でも、青い飛行ゾイドは来ても所詮私と同じ籠の鳥。白馬がやってくることもないのでしょいか）

突然、目の前を青い翼が蔽った。

レイノスが飛び方を急に変え、着陸態勢に移っている。飛びながら頭部を巡らし、何かに聞き耳をたてるようにしている。限られた飛行範囲内の一画、最も南東の、中央大陸に近い端に着地すると、頻りに羽を地上で羽ばたかせていた。

背中 of 3D電子式レーダーが作動している。レイノスは、盛んに打ち出される共和国特有のサイクルの電波を、微弱ながらも受け取っていた。嘗ての味方の電波に反応したのだ。

エレナとキャロラインは顔を見合わせた。

「共和国がまたやってくる。この暗黒大陸に」

レイノスが、故郷を懐かしむような声で鳴き続けていた。

暗黒大陸に夏を告げる白夜が訪れる頃、ヘリック共和国軍による第二次上陸作戦が敢行された。

共和国軍の攻勢は一方的だった。

新型ゾイド、ガンブラスターの威力や、タートルシップの輸送力にも要因はあるが、攻勢の最大の原因は、暗黒軍の油断にあった。

当初暗黒軍側では、前回の上陸地点であるニフル湿原の西側、首都ダークネスに近いカオスケイブ付近を再上陸地点として予測、首都からも近く兵力の多くをそこに配置していた。これに対し共和国軍は、第一次上陸部隊が苦戦した理由に、ブラッディゲート付近の断崖とカオスケイブの迷路のような構造が機動力を生かせずに壊滅した原因と判断し、ダークネスからは距離のあるニフル湿原東側の、より平坦な海岸線に兵力を集中させたのだった。

前回はシーマッドやウルトラザウルス、フロートを着させたグスタフなどによる限定兵力しか派兵できなかったが、今回は巨大輸送艇

ターゲットシップのパイロードにより兵力は拡充され、万全の攻撃態勢を整えた上での作戦行動だった。

第一次上陸作戦の敗北から約半年。共和国の生産性は、間違いなく暗黒軍を凌駕していた。

間断ない砲撃に指示が掻き消され、味方部隊との連絡がつかない。眼前には、二重、三重の螺旋状の曳光が渦を巻き、警戒を怠って直立していたデッドボーダーを2機纏めて撃ちぬいていく。

共和国の新型ゾイド、ガンブラスターのローリングキャノン、別名黄金砲の攻撃だった。

前線で防御するシユテルマーは、歯噛みをする思いで部隊の統率を行っていた。

(ハルダウン(※稜線の影に隠れて砲撃すること)は常識だろう。相変わらず重力砲の使い方が出来ていない)

「ヘルデイガンナー部隊を回せ。砲撃を敵の前面に集中。デッドボーダー部隊は後退だ」

姿勢の低いヘルデイガンナーなら、あの金色の奴からも一時は弾道を避けられる。

「側面から我々ダークホーン部隊が突き崩す」

硝煙の中、地響きをたて黒い巨体が群れを成し、一つの塊となって突進していく。シユテルマーの率いた軍団は拠点ごとに進撃する共和国軍を撃破した。出力の上がったダークホーンなら、宿敵ゴジュラスMk-2でさえも互角に戦えた。直線的にしか動けない高速ゾイドのシールドライガーは、装甲が薄い分破壊しやすい。マッドサンダーさえ、マグネーザーからの間合いを見切れば戦えないこともなかった。

だが、他の部隊は。

連携がとれていない。弾道の真正面に立ち上がった的になっている。無線機の多用で回線が混乱し指示が伝わらない。なにより、ガイロス兵と旧ゼネバス兵との戦歴の差が如実に現れている。

戦闘は理屈の無い殺し合いだ。小さくまとまっていた部族間の諍いなど比較にならない。どれ程強力な武器を持っていても、使えなけ

れば意味もない。

シユテルマーがどれ程焦燥感に駆られても、暗黒軍の劣勢は挽回できなかつた。態勢を整えるための後退を何度も進言したが、旧ゼネバス兵である彼の意見は受け入れられず、結果暗黒軍は大量の損害を受けて海岸線から敗走した。

暗黒軍にとっては後々まで屈辱的となる「エントランス湾」という名称を付けて共和国軍は橋頭堡を築いた。暗黒大陸上陸作戦の緒戦は、完全に共和国軍の圧勝であった。

「敵上陸部隊がビフロスト平原を突破、前線が維持できません」

部隊の通信兵が悲痛な叫び声をあげている。

海岸沿いに立ち昇る黒煙を見ながら、シユテルマーは繰り返す舌打ちをした。

共和国を侮りすぎだ。奴らは恐ろしく合理的だ。一刻も早く乾坤一擲の打撃を与えない限りは進撃を止めさせることはできない。

ふと、彼は共和国軍の進軍方向にある場所に気が付いた。ダークホーンのкокピットにある兵力配置図と、崩壊した暗黒軍の退却方向と共和国軍の進出方向を重ね合わせる。通信網も崩壊状態の為、退却中の仮設司令部からの情報は得られないが、ある不穏な予兆が脳裏を横切っていた。

海岸線に沿ってカオスケイブを避けるように進撃する共和国部隊の目指す先は、当面は首都ダークネスだろう。補給線の確保と橋頭堡を構築するため進撃速度は遅れる可能性もあるが、それが完了してしまえば間違いなく海岸線上の軍事施設を破壊して行く。手にした配置図上に、共和国軍を示す青い矢印を書き込むと、矢印の先に小さな城が記されていた。

シユテルマーは、自分の抱いた不安を確かめるように、手にした配置図の上に共和国軍の現在地と進行ルートを示す矢印を書き込んだ。矢印の先には、自分が生涯をかけて守ると誓ったひとの居城がある。

通信兵のレシーバーをもぎ取ると、簡易暗号コードに変換した電文をグスタフで移動中の仮設司令部に送信する。

「キシワムビタ城防衛の為、前線の2時間維持は可能か」

“不可なり”

即答であった。

戦う気があるのか！

シユテルマーはレシーバーを叩きつけた。

支えきれない。このままでは、キシワムビタ城が呑み込まれる。彼はダークホーンを恨めしげに見上げた。

こいつは空を飛ぶことが出来ず、単機では作戦行動も不可能だ。もつと優秀で強力なゾイドでなければ、共和国とは渡り合えない。そして、密かに心に想い続けるひとを守る事さえできないのだと。

「強力なゾイドが欲しい。例えそれが悪魔の翼となろうとも、俺は力が欲しいのだ」

次々と巻き起こる爆音の中、彼の慟哭は掻き消されていった。

キシワムビタ城の鐘楼からも、ブラッディゲート方面での攻防は推察された。海岸線に沿って黒煙が次第に近づいてくる。嫌らしいまでに纏わりついていたヘルデイガンナー部隊も、今は増援に投入されて城を守るゾイドはいない。代わりに、デイバイソンの突撃でも容易には突き崩せない城門は固く閉ざされた。

城壁の内側の中庭に、頻りに首を動かして戦火の方向を見つめるレイノスがいる。共和国の発する通信サイクルを感じ取っているのだ。今はレイノスを撃ち落とすヘルデイガンナーはいない。

「レイノス、行きなさい」

エレナは思いきり大きな声で叫んだ。

「誰もお前を留めることはできない。今なら飛べる。籠の中から飛び出して、自由な空に戻っていきなさい」

レイノスが少しだけ頭をエレナに向けた。彼女の気持ち伝わったのだ。しかし、彼女によって命を救われたこのゾイドは、彼女の行く末を気遣う様に、なかなか空へと舞い上がろうとはしなかった。それどころか、ロックされているはずのコクピットのキャノピーを開いたのだ。

「いいのよ、あなたはあなたの主人の元に戻りなさい。きっと待っていてくれる。あなたのことを待っていてくれる。あなたのコクピッ

トに響いた、あの歌声のように」

レイノスのキャノピーが閉じられた。少しだけ振り向くと、喜びの声をあげて、鉛色の空をブラッディゲートの方向へと飛び立っていった。

背後でキャロラインが無言で見つめていた。エレナが何を思い、何を覚悟しているかを知っていたからだ。兵火は次第に接近してくる。赤々と点る標識灯が、今は恨めしいように輝いていた。

6 (2052年)

「前方500mに、敵の拠点らしき建造物を確認。周囲に戦闘ゾイドは確認できず」

「古城のようですね。あの灯りはなんでしょう」

「航空標識の類だろう。戦闘とは直接関係のない遺跡かも知れない。研究者としての御意見を伺いたいところですね」

「僕も暗黒大陸に渡るのは初めてです。中央大陸部族紛争時代の資料だって、信頼に足るものは残っていないのですから。敵の罨や、何処かに隠れて攻撃の機会を狙っている、なんてことはないですよね」

「おやおや、アイザック將軍の御子息にしては気弱な発言ですね。勇敢に戦死された父上殿や兄上殿も、さぞやお嘆きの事でしょう」

悪意を込めた皮肉を投げつける士官にも、彼は全く動じないどころか微笑みさえ浮かべている。

「父と兄は偉大でした。僕は臆病者で、戦うのが嫌いです。だからこうしてチャンスさんに一緒に来てもらっているのですから。どうですか、あのお城。できれば調べたいのですが」

肩透かしを食らって言葉を失った士官は、決まり悪そうに手にした双眼鏡を覗きこんだ。緩やかな丘陵の頂から、古城の全貌が見渡せる。カノンフォートが7機、ガンブラスターが1機、そして遠方には、周囲を索敵する為のシールドライガーMk-2がデビルメイズの断崖の間を遊弋している。彼らは軍の本隊とは独立した、大統領直属の暗黒大陸調査部隊であった。

戦闘ゾイドの指揮官はチャンス少佐だが、調査にあたっては可能な限り科学者であるシュウの意見を取り入れよと命じられていた。よって勇猛果敢なアイザック將軍の下で戦ったチャンスにしてみれば、あまりに無警戒で調査に没頭するシュウに対し、皮肉の一つも溢したくなったのだ。

「カノンフォート小隊を先行させます。シュウ博士は安全を確認してから入ってください」

「いや、一緒に行きますよ。みなさんばかり危険に晒すのは申し訳あ

りませんか」

言うが早いか、彼は愛機カノンフォートに乗り込むと、斥候部隊の3機とともに、前方で沈黙を保つ古城に向けて進んで行ってしまった。

後方で呆れるように青いゾイドを見つめ、チャンス・グレゴール・オストロム少佐は呟いていた。

「臆病にして大胆。若干15歳での博士号取得。我々軍人には予想もつかない御仁です、あなたの御息は」

シユウと呼ばれた少年は、中央大陸沿岸地域での活発な地殻変動の原因を究明する為、ヘリックII世大統領に志願し共和国第二次上陸部隊に随伴し暗黒大陸に渡ってきた地球物理学者で、ブラッドロック戦役で名を馳せた名将アイザックの次男である。戦争を避けて軍務につかず、研究員の道を歩んできたが、研究に対する執着は父や兄にも勝るほどで、今までも活火山の火口や巨大なクレバスの底、圧壊寸前のアクアドンでの海溝調査、地質調査に夢中になりメタロゲージでライオンタイプの野生ゾイドに追い回されたという逸話などの数々の冒険譚を有する人物だった。驚愕すべきは、それらの危機をこの若い科学者が全て切り抜けてきたということである。彼がどの様にして危機を脱して来たかは、残念ながら多くを語ることは無かった。科学・宗教・歴史、凡そ知識と名の付くものであれば、全てに貪欲に挑んで来た彼にとって、目の前に現れた魅力的な古城に挑むのを押しとどめることなど出来はしなかったのだ。

「こちらシユウ機、周囲異常ありませんか」

並走するカノンフォート小隊に連絡を送る。標識灯は無機質に点滅し、内部からの抵抗を予想することはできない。頭一つシユウのカノンフォートが前に出た。

城壁の中央に固く閉ざされた古めかしい城門が付いている。潮風に晒され、朽ち果てる寸前の門額に古代ゾイド文字が刻まれていた。画像解像度を上げモニターに映し出す。

「キシウムビタ……」

辛うじて判読できた城の名を声に出すと、シユウは深く頷いた。そ

して改めて城門を見つめた。

「開けてくれ。と言って、開けてくれるはずもないか」

シユウはコクピットを離れ、するするとカノンフォートの背中に装備された二門の重撃砲の砲身に飛び乗ると、城壁の上に機体を摺り寄せた。足場を確認したカノンフォートは、砲塔を直角に曲げ、最大仰角をつけた砲身に跨るシユウを城壁の上に放りあげた。かなり強引な方法だが、彼の身体は僅かな放物線を描き比較的緩やかに——つまりそれなりに——城壁の床面にぶつかって、城内への侵入を成功させた。

「シユウ博士、御無事ですか」

ヘッドインカムから、他のカノンフォート小隊機の操縦者の声が聞こえる。兵士にしてもまさか砲塔を振り回して中に入ることなど予想していなかった。

「あんまり大丈夫ではないかな。手袋の片方を無くしたよ。あれ、気に入っていたんだけどね」

城壁の内側の壁面に階段が設置されている。シユウは周囲を警戒しつつも、城内の敷地へと降りていった。

人の住んでいる気配はあるが、警報装置を含め、侵入した彼の進路を防ぐ物は何もない。拍子抜けしたまま城の内部を見渡す。石積み様式がデルポイのものとは著しく異なっていた。石材も中央大陸で産出されるものとは違っている。航空標識灯は無理やり設置させられているのが見て取れ、接続部分の石積みが醜く歪んでいた。

「もったいないな、こんなに貴重な建造物なのに」

標識灯を見上げながら、彼は視線を正面に落とした。

ふと、目の前に人影が見えた。瞬時に側面に跳び退き、シユウの背後から迫ってくる。気配を感じ仰け反って身を低くすると、インカムを吹き飛ばして頭上の空気を細い脚が薙ぎ払って行った。シユウはそのまま地面に倒れ込むと、前転をして身体を起こす。ブラウンの髪の毛を束ねた若い女性が、彼を睨みつけていた。

「ちよつと、待ってください。別に怪しい者では……」

そこまで言って、彼は言葉を切った。

「……ありますね。でも、戦う意思はありません。信用できないのであれば、ほら、ご覧ください。両手をあげますよ、武器もありません。応援を呼ぶ無線機も、今の蹴りで吹き飛ばされました」

シユウは無抵抗の姿勢を彼女の前に晒した。緊張感のない言葉に、殺気も薄らいで行く。

「僕はシユウと言います。中央大陸の地殻変動を研究する為、上陸部隊と一緒に来ました。ゾイドに乗っているけれど、軍人ではありません。まずは話し合いませんか」

身構えた女性が、シユウに近寄ってきた。胸元、腰、足など、武器を隠し持っていていそうな箇所を確認する。

「申し訳ありませんが、インカムを拾ってもいいですか。通信が途切れると、外の部隊が攻撃を開始するかも知れないので」

「信用できるわけではないですよ！」
「信用してください。僕はこの城が壊されるのを見たくありませんから」

不思議な少年だとキャロラインは感じていた。彼女のローリングソバットを擦り抜ける程の反射神経を持ちながら、全く殺気がない。その間にも、彼はすたすたと落ちているインカムの元に歩いていくと、何事も無かったように通信を開始した。

「小隊長さんですか。シユウです。中に無事入れたのですが、城門を開けるのに時間が掛かりそうです……。そうなんですよ、錆び付いているようでして……。貴重な文化遺産なので、砲撃で破壊したくないので、もうしばらく待っていてください……。中には誰もいません、退却した後みたいです。なんなら先に戻ってもいいですよ。その時はチャンス少佐によろしく……。そうはいかないですか、じゃあ、まあ、とにかく待っていてくださいね」

緊張感のない会話のあと、彼は再び両手をあげた。「とぼけた奴だ」。キャロラインは呆れると同時に少年の年齢に似合わない豪胆さに驚愕していた。

「ええと、お姉さま、とでもお呼びしたらよろしいでしょうか？」

「あなたは一体何者なの！」

油断させて逆襲するのかもしれない。鋭い言葉を発しても、彼の態度は相変わらずである。

「えっ、さっき言いましたよ。共和国地球物理学者のシユウです」
「キャロル、その人、信用しても大丈夫だと思います」

エレナは一部始終を見ていた。殺意があればここまで無防備な行動はしない。それに彼の姿が、何処か恩師マイケルとも重なっていた。

「地球物理学者といいましたね。共和国の科学者がなぜこんな危険な事をしているのですか」

エレナの問いかけにも、少年は淀みなく返答する。

「知的探究心の成せる業、とでも申しましょようか。こんな時でもない、暗黒大陸の研究はできませんからね……。自己紹介はこれくらいでよろしいでしょうか」

戦場での逼迫感がまるでない余りに自由な人物で、エレナも拍子抜けしていた。

「あの、そろそろ手を降ろしてもいいですか。疲れてきたので」

「わかりました。自由にしてください」

「姫様！」

キャロラインが振り返ったが、後方の警戒を怠ったことに気付き、直ぐに正面に向き直る。それは彼女の警戒は杞憂に過ぎず、シユウはそのままの場所を動いていない。

「姫様、ですか。もしかしてガイロスのお姫様とか」

「失礼な、エレナ様はゼネバス皇帝陛下の……」

「キャロル」

キャロラインはシユウのタイミングをずらす会話に嵌り、思わずエレナの出自を語ってしまっていた。

「エレナ姫、存じ上げております。あなたが、あの玉容と言われた方ですか。失礼しました。大統領から、お話しは聞いております」

完全にエレナとキャロラインは混乱した。この少年はヘリック大統領とも知り合いだという。彼の言葉から察するに、エレナの伯父ヘリックⅡ世とも面識があるのだろう。一介の兵士でないことは間違

いない。エレナは彼が風族の人間であることを示す緑の目を見つめて尋ねた。

「どうやら詳しいお話をする必要がありそうですね」

丁度その時、シユウのインカムが共和国軍からの短い通信を受信した。彼の表情が硬くなる。

「残念ながらその時間は無いようです。この城に向かって、ダークホーンの一団が接近しています」

7 (2052年)

ダークホーンの突進は泥のように遅く思えた。

漸く共和国軍の包囲網を突破し、掻き集められるだけの兵力を携え、キシウムビタ城へと進撃できた。シユテルマーの機体と合わせた五機のダークホーンが、デビルメイズの渓谷を疾駆していく。暗黒大陸で小隊を編成し、共に戦ってきた部下達だ。

シールドライガー、アロザウラー、デイバイソン。途中、何機もの共和国軍ゾイドを蹴散らした。疾風迅雷の如く疾駆するシユテルマーのダークホーン部隊を遮るものは皆無だ。軍人は常に冷静でなければならぬことを知っていても、彼には堪えることなどできなかった。

ガイロス帝国は、エレナ・ムーロアを本当に必要としているのか。ゼネバス兵を動員する以上、必要な象徴であるはずだが、今回は見捨てたように援軍を渋った。何か別の理由が存在しているのかもしれない。

それでも、彼の私的な感情とは無関係なことだ。自分はエレナを守りたい。それ以外、自分がこの世に必要とされる理由がないのだから。

彼女の死は、自分自身の存在価値の消失とも繋がっている。だから絶対に彼女を救わなければならない。彼は沸き上がる焦燥感を抑え付けるのが精一杯であった。

遠く航空標識灯が見える。キシウムビタ城の標だ。

周囲には数機の共和国軍ゾイドがある。

先遣隊だろう、一機だけあの黄金砲がいる。あとはカノンフォートが数機。

「エレナ姫は自分が守る」

シユテルマーは秘めた想いを呟いていた。

※

「ヘリック大統領はエレナ姫を受け入れる準備を整えています。大統領は純粹に弟ゼネバスの娘を守りたいと思っていますのです。この古

城は僕の趣味ですが、姫様には似合いません。身の安全と自由は僕が責任をもつて保障します。頼りなく見えると思いますが、僕の父はあなたの伯父ヘリック大統領とも懇意にしていました。兄の名付け親も大統領ですから、僕もそれなりに信用があります。

東のエントランス湾に共和国の橋頭堡が確保されています。お願いです、一緒に共和国へ脱出しましょう」

少年科学者の真剣な表情は、偽りを言っているようには見えなかった。

エレナは速断を迫られた。

やっと訪れた脱出の機会だ、どの様な形でも利用したい。仮に王女の身分を隠してしまえば、暖かな日差しに包まれたデルポイでの生活が待っている。でもシユテルマー、あなたはこの大陸にいる。私のためにここで戦っている。

脳裏に無数のゼネバス兵の死体が重なった。死体の山の頂で、声を殺して笑っている男がいた。ここにいたら、もつともつと犠牲者が増えてしまう。やがてシユテルマーまでも。

「伯父に会いに行きます」

エレナの決意は固まった。シユウが微笑む。

「ご案内します。僕のゾイド、カノンフオートへ」

ラツタルにスカートの裾が絡んで登りにくい。ブーツのヒールも装甲板の隙間に挟まり足をとられる。身軽な格闘服に着替えていたキャロルが羨ましく思える。

滑り込んだ機内は、閉塞感を少しでも和らげるために青白色の塗装が施されていた。コンソールに浮かび上がる緑の光に照らされて暗い印象はなかった。

ガンナーシートを挟み込んで砲身の底が突き出しているが、細身の女性二人であれば十分な広さの空間であった。

「カノンフオート、発進します」

二人が付けたノイズキャンセルヘッドホンを通じてコクピットからの通信が送られてきた。キャロラインは咽頭マイクを装着すると、すかさず砲塔のコンソール系を確認していく。

「念のため聞いておくけれど、マニュアルでの砲撃は可能なのね」

“可能です。でも、味方を撃たないでくださいね”

「馬鹿な事を言わないで。これから保護を求める相手を攻撃するわけがないでしょ」

エレナは彼女がゾイドを操作するのを初めて見た。備え付けられたスイッチを次々と操作する姿はとても初めてには思えない。

「キャロルはいつゾイドの操縦を」

「詳しいことは後程ご説明します。以前ミンクスにおりました」

キャロラインの操作に合わせて、カノンフォートの砲塔が180度旋回する。遠心力で二人の身体がシート右側に吸い寄せられた。

“ミンクス”。何処かで聞いた名だ。確か女性のみで編成された部隊だと思う。永くキャロラインは学友として選ばれた臣下の娘と聞かされてきたが、それが娘を最後に守る為の父の配慮であったことに、エレナは初めて気が付いたのだった。

「試射させてもらう。操縦席、反動に注意しろ」

キャロラインの口調が変わっていた。照準らしきモニターに、二つの小さな十字が点滅する。

“そんな無茶な。闇雲に撃たれては困ります”

「脚部スタビライザー確認、ゾイドコアへのリンク正常。姫様、ヘッドホンを押さえてください」

シユウからの通信を無視して、彼女は操作を続ける。

シート両脇の銃底の移動により、重撃砲が仰角を付けていくことがわかる。気忙しく叩いていたコンソールの手を止めて、キャロラインは発声した。

「斉射一撃。目標、後方の断崖」

“ちよ、ちよつと待ってください。目標、後方の断崖？ 距離……75？ 斉射……”

砲塔ごと巨大なハンマーで叩かれたような轟音が鳴り響いた。ノイズキャンセラーとは名ばかりだ。コンソールの中に備え付けられたモニターが、砲弾の着弾方向を追っていく。キシワムビタ城の真下、ゴツドクライと呼ばれた城門状の断崖の一部に命中し、平坦な海

岸部分に岩石の破片が落下して、追撃する暗黒軍の進路を防ぐ形となつた。

「あのお城を壊さないでくださいよ」

コクピットからシユウの泣きそうな声が送られてきた。

「あなたそれでも共和国の軍人なの」

「だから僕は科学者です」

相変わらずが噛み合わない会話をしているが、エレナには食い違ふ二人に妙な一体感を感じた。何なのだろう、この二人は、と。

「ダークホーン部隊との距離は」

「えーと、小隊長さん、敵との距離はどれくらいですか……後方2kmより猛進中、信じられないスピード、間もなく敵の射程に入る、だそうです」

「応戦するわよ」

再び砲塔が旋回した。

「本隊と合流します。そこでガンブラスターに乗り換えるので、お姉さまはこのままカノンフォートで脱出してください」

「誰がお姉さまよ。それより大丈夫なの、私たち帝国の人間にゾイドを預けるなんて」

「僕のゾイドだし、僕は軍人じゃないので。それにあなたたちは大丈夫だと思いません。」

大統領の姪御さんだし、人質の救出も頼まれていたから丁度いいでしょう。

ただし、少しの間は身分を隠しておいてくださいね。味方の中にもまだゼネバス帝国を恨んでいる兵士はいますから。とりあえず、ガイロス帝国の政治犯の娘とそのボディガードとでもしていてください」

突進するカノンフォートは最大速度で駆け抜けていく。突然、頭上を幾筋かの銃弾が突き抜けていった。ハイブリットバルカンだ。

「現在ジャミングテイルを作動させているので、敵の全天候3Dレーダーは十分に索敵できないはずですが。ただ、無駄弾を撃つと逆に位置を探られるので注意してください」

「あんたもよくしゃべるわね」

キャロルもね、とエレナは心の中で呟いていた。

砲塔のモニターに、共和国の調査部隊本隊らしきゾイド群が見えてきた。シユウのカノンフォートが到着すると、空かさず頭部コクピットにタラップが横付けされる。コクピットから這い出したシユウを、上官らしき軍人が眉を顰めて見上げていた。苛立ちを隠さず怒号を投げつける。

「遅いぞシユウ。直接戦闘に突入する。参戦するのか」

「ガンブラスターを起動させます。お姉さま、姫様をお願いします」

「その呼び方を止めなさい」

「はい、お姉さま」

言うが早い、シユウは眼下の無数の砲身が黄金色に輝くゾイドのコクピットに滑り込んでいた。漆黒の暗黒軍の機体と対照的なゾイドであった。

カノンフォートのキャノピーは解放されたままで、空かさずキャロラインが砲塔のハッチを開き操縦席に向かう。

「姫様は砲塔にいてください。頭部よりも装甲が厚いはず、それに少しでも共和国の兵に接触しないで済みます」

「私たちはどうするの」

「これで逃げられるだけ逃げます。共和国の伯父上様にお会いすることが第一です」

格闘服姿のキャロラインが飛び乗る。状況の飲み込めないチャンス少佐は、有らん限りの罵声が無線に乗せて浴びせかけた。彼女はそれをも無視して、一直線にダークホーンの迫る方向とは逆にカノンフォートを走らせた。彼女にとっては、エレナを護ることだけが全てであった。

8 (2052年)

(エレナ姫……)

ダークホーンのセンサーが漸く敵を補足した。砲撃によるがけ崩れが進路を塞ぎ、本隊との合流の時間を費やされた。

派遣した偵察隊から、キシワムビタ城にエレナはいないことが確認されている。

リミッターのついたままのレイノスに乗って脱出したか？

否。

彼は直観で、前方の敵に拉致されたのだと察知した。

絶対に取り返してやる。

シユテルマーはダークホーンの最大出力で突進を続けた。

唐突に、緊急回線を経由して師団本部からの通信が入った。追撃の最中にも関わらず、至急確認の指示が忌々しい。ディスプレイに平易な通達文が表示されていく。

彼は目を疑った。喜怒哀楽という感情全てを緬い交ぜにしたような、複雑な感情が沸き上がる。独白さえない。ヘルメットを被っていても、眉間の皺が深く刻まれて行くことまでわかる。

“大尉、追撃中止の指令が出ています”

苦悩を断ち切ったのは、後続のダークホーン部隊からだった。追撃しているものの、他の兵士にも動揺が走っているに違いない。まして今の彼の行動は独断専行に近いものであったから尚更だ。しかし、彼の決意はより確実なものとなった。

「追撃は続行する。何としてもエレナ姫を奪取するのだ」

進軍の先に、敵部隊らしきゾイド群を補足していた。

「ローリングキャノンへのエネルギー供給、斉射可能まであと10秒」

コアに命の炎が宿り、低重心の攻撃型ゾイドが機動を開始した。脚部の関節が短い分、ガンブラスターの移動速度は遅い。しかしそれを補うように、文字通りのハリネズミのような武装が施されている。黄金砲はもとより、機体を保護する超電磁シールドの装備は、マッドサウンダーの反荷電粒子シールドを応用した共和国の最新鋭防御システ

ムである。

モニターにダークホーンの一団が迫る。暗黒軍本隊から突出した独立部隊の様だ。シユウは、部隊の目的がエレナにあることを感じ取っていた。

「他のゾイド部隊はガンブラスターの射線後方に下がってください。ローリングキャノンの一斉射を行います。敵が怯んだら、間を措かずに重撃砲を連続発射、徹底的に沈黙させましょう。」

「いきますよ。頼んだぞ、ガンブラスター」

頭上でローリングキャノンのバレルが回転を始めた。砲身にエネルギーが送られていくのが判る。実体弾の装填も完了した。

「目標、前方のダークホーン」

黄金の火箭が一齐に奔っていた。

シユテルマーの部隊兵は、彼と共に幾つもの戦場を潜り抜けてきた精鋭である。みすみす敵の射撃目標になるほど愚鈍ではないが、周囲に隠れる場所の無い開けた海岸線では、退避する崖も窪地も存在していなかった。エレナを追うことだけに執着してしまったことと、先の通達に対する動揺による、シユテルマーのミスであった。

彼の搭乗するダークホーンが黄金色の火箭が伸びるのを視止めた直後、急制動を掛けて横へ跳び退いたが、後方から加速をつけていた他の機体は一度に2機が砲撃に呑まれていた。

機体性能の差だけで、ここまで損害が拡大するものなのか。敵のゾイドは信じられないくらいに出力が高い。これが技術力の差か。与えられたゾイドで戦う他ない。敵の弱点はどこだ。

背中の回転砲群は、射線を前方放射状にしか向けられない。側面からの攻撃に対して電磁シールドで防御されるといふ情報が入っている。となれば、まずは射線上から退避することが先決だ。

シユテルマーは大きく弧を描いて迂回するようにダークホーンを走らせる。

ガンブラスターは予想以上の機動性を持っている。側面に武装が無いことも敵は理解しているはずだ。周囲を固めるカノンフオートが、間断なく重撃砲の砲撃を繰り返していた。

「中央の黄金砲を沈黙させる。キュヴィエの機体は周囲の青い牛を狙え。シャーフハウゼンは私の援護をしろ」

残った合計3機のダークホーンが、それぞれに花卉が開く様な隊列を組みながら攻撃を開始した。

先行したのはシュテルマーの機体であった。黄金砲の火箭が伸びる。一斉射撃ではない。敵も出力を絞っているのだ。

「舐められたものだな」

一瞬、歩幅を変えて銃撃をやり過ぎした。側面から迫っていた1機のカノンフォートが狙いをつけている。次の瞬間、そのカノンフォートはハイブリットバルカンの餌食になっていた。

「よくやった」

僅かに乗機の頭部を振って合図する。まだ黄金砲の側面を撞く態勢ではない。上空からレイノスが現れた。忌々しい青いゾイドだ。ハイブリットバルカンを最大仰角に構えて威嚇射撃をする。シュテルマーには命中させるつもりはなく、射線を避けたレイノスが、確実に照準に捉えた別のダークホーンに撃ち抜かれていた。

カノンフォートは残り2機。1機が今、クラツシャーホーンに粉碎された。3対2、それも1機は小型ゾイドである。共和国軍は明らかに分が悪かった。

その時シュテルマーは、ガンブラスターの後方に1機のカノンフォートが逃走していく姿を見つけた。

目の前の敵は囷か。あれにエレナ姫が捕えられているに違いない。その彼の僅かな心の迷いが、3機のダークホーンの前オーメーションを崩した。

隊長シュテルマーの機体が更に突出する。防御陣に穴が開いた。狙い澄まされたガンブラスターの砲門が、ダークホーンに叩き込まれた。

1機のダークホーンが横転擱座する。これで2対2。しかしシュテルマーはエレナ達の操縦するカノンフォート目掛け一直線に突進していった。

シユウは、ダークホーンがエレナたちのカノンフォートを狙ってい

ることを察知した。通常の兵士であれば、目先の敵と戦うものだ。無理に戦闘を回避したことにより、敵は損害を拡大させているにも関わらず追撃を継続している。暗黒軍にとって彼女が如何に重要なのかを改めて知った。

シユウにとつても共和国にとつても彼女は重要である。彼はエレナたちのカノンフォートに向けて突進するダークホーンの進路に、ガンブラスターで立ち塞がった。

「何処からでもかかって来い！ でも、なるべく正面から」

こんな場面で、共和国の新型ゾイドと直接対決するとは予想外だった。残弾も少なく、最大出力を強いてきたコアも限界気味だ。装甲の彼方此方に被弾し、防御能力も低下している。なにより味方が皆やられていた。

自分の所為か。それでも生きている最大の意味は、エレナを守ることだった。彼女が敵の手に堕ちることは、自分の存在を全否定されるのと同じはずだった、あの緊急連絡が入るまでは。

しかし、軍人としてこの戦いだけは決着を付けなければならない。共和国の奴らにゾイドが単に出力や火力だけで戦うのではないことを思い知らせてやる。

決意の瞬間から、シユテルマーの目標はカノンフォートからガンブラスターへと変わっていた。

「これがゼネバス帝国の開発した旧式ゾイドを改造したものなのか！」

シユウは、ハイブリットバルカンをまるで竜巻の様に乱射して、ガンブラスターを翻弄する暗黒ゾイドダークホーンに恐怖した。黄金砲の発射態勢が整わないうちに、敵は小火器を撃ち込んで射角の外側へと回避する。機体全体に電磁シールドを展開して攻撃を防いでいるが、このままではいずれエネルギー切れとなる。格闘兵器では、敵のクラッシャーホーンに勝るものを持ち合わせてはいない。黄金砲の威力を生かせないまま、これでは破壊されてしまう。

「父さん、兄さん。僕に力を貸してください」

電磁シールドを叩きつけるハイブリッドバルカン攻撃に耐えなが

ら、シユウは齒を食い縛っていた。

もともと戦争をするために上陸したのではない。あの時エレナに語ったように、純粹に暗黒大陸の地形や地殻変動の状況、そして文化を知りたかったからここに来たのだ。大統領は僕の身を案じてカノンフォートと最新式のガンブラスターを与えてくれた。でも、それは僕自身への配慮ではなく、父と兄を戦死させてしまったことへの罪滅ぼしだろう。この上僕まで死んでしまっただけでは、残された母や父と兄との知人に申し訳が立たないからだ。それでも大陸に渡ったのは、何処かに父たちへの劣等感があつたのかもしれない。

でも今は戦わなければならぬ。なぜなのかはよくわからない。どうしても守りたいんだ、あの女の人を。

敵のゾイド乗りは優秀だ。素質や性能だけに頼っていたのでは、とても勝てそうにない。ガンブラスター、多分君の電磁シールドと装甲板が僕の命を救ってくれたとしても、君のゾイドコアは燃え尽きてしまっただろう。こんな半端なパイロットであることを許してくれ。今度ゾイドに乗るときにはもっと操縦技術を上げておくよ。せめて今は全力を尽くして、彼女たちを逃がしてあげることには付き合ってくれ。

電磁シールドで守られたコクピットの中にも、容赦なく敵の攻撃のよる振動が響いていた。

シユテルマーも焦っていた。いくら新型とはいえ、ここまでエネルギーが持つものなのか。このままではこちらのコアが焼き切れてしまう。ほぼ孤立状態だ。頃合いを見計らって脱出しないと、下手をすれば犬死になる。

当初の目的とは違ったが、エレナを守ること以外に自分の生きる義務ができたのだ。

一気に決着をつける。

黄金砲の砲身の先を躲しつつ、次第にダークホーンの攻撃の輪が狭められていった。

「……しまった」

「いまだ」

互いにその声を聞き取ることに出来ない二人が、同時に叫んだ。ガンブラスターの電磁シールドが消滅したのだ。既に十分な攻撃距離に迫っていたダークホーンが、その頭部中央のクラッシュャーホーンを閃かせた。

お前はよくやったよ、敵ながら賞賛してやる。

せめて一撃でコアを貫いてやる。

ガンブラスターの中心線目掛けて、黒い竜巻が突進していった。

突然ダークホーンが弾かれた。丁度ステイラコサウルスの特徴である首の後ろ側、装甲が厚く直接機体の行動に影響のない襟の部分に、重撃砲の砲弾が命中したのだ。

シユテルマーは周囲を確認した。カノンフォートのジャミングテイルのため十分な索敵が出来ない。白煙の向こう側に青い機体が浮かぶ。

まだ残っていたのか、青い牛め。

だが、様子が違っていた。青いゾイドは停止している。背中 of 砲塔には金色の髪を靡かせる人影が見える。モニターの解像度を最大に上げ確認した時、思わず操縦桿から手を離しコクピットハッチを跳ね上げていた。

「エレナ姫」

砲塔のハッチに凭れ掛かるように立ち竦んでいたのは、紛れもなくそのひとであった。

「シユテルマー、もう止めてください」

カノンフォートがゆっくりとした足取りでダークホーンに近寄ってくる。頭部コクピットも開放され、それを操るのが学窓を共にしたキャロライン・ラーレナスであることも分かった。逃走途中のカノンフォートのモニターに映った、シユウのガンブラスターと死闘を繰り広げている黒い機体、唯一残ったダークホーンに示された燐光を放つ機体番号が、レイノスを見つけた時に再会したシユテルマーの機体と同じことにキャロラインが気付いたのだった。

「籠の中から鳥は飛び立ちました。一度逃げた鳥を無理やり捕えようとしても、いたずらに傷付けるだけです」

「一時の気まぐれで飛び立った鳥ならば、やがては主の手元に自ずと戻って来ます。野生を知らない籠の鳥は、野生に生きるには辛過ぎます」

エレナは彼の言葉を聞いて悲しくなった。どんなに互いを理解したつもりでいても、まだ伝わらないものがあつたことに。

「私は伯父の元に行きます。今のあなたなら共に行けるはず。もし私を守るというのならば、黙って私に従ってください」

彼はその命令に従うことを屈辱と感じるだろう。しかしエレナには彼がどうしても必要な存在だったのだ。

暫しの時が流れた。

「お断りします」

鋭い視線が彼女に向けられた。

「どうして、なぜなのシユテルマー。私が必要な必要としていることは知っているでしょう」

エレナは叫ぶ。もはや懇願であつた。愛しい人に共に来て欲しいという、王女という立場など振り切つた願いであつた。それでも彼の決意を揺るがせることが出来なかつたのだ。

「姫様。どうやらこれでお別れの様です。身分違いのことながら、お慕いしておりました。これまでの数々の御無礼をお許しください」

「あなたは姫様の気持ちが変わらないの！」

コクピットからキャロラインが叫ぶ。しかし彼女の声も、彼の心に響くことはない。

「自分はゼネバス軍人として、王室の忘れ形見であるあなたをお守りしておりました。ですがそれはあなた個人への忠誠ではありません。あくまでゼネバス皇帝陛下への忠誠です。

これだけはお知らせしましょう。お喜びください。皇帝陛下が御存命であることが、先ほど公表されました」

エレナは絶句した。父が生きている。

その時、シールドライガー Mk-2の一群が接近してきた。

「シユウ、生きているのか」

ガンブラスター、そしてカノンフォートのコクピットに響き渡つた

のは、チャンス少佐が率いる増援部隊からの通信であった。

時を同じくして、シユテルマーのダークホーンがディオハリコンエネルギーギーを最大出力にして最期の突進を始めた。

またゾイドを殺すことになるが、せめてこの包囲網を突破するまでは持つてくれ。

緑色の燐光を放つ黒い竜巻になったダークホーンは、シールドライガーの群れの中央を蹴散らしながら突進していく。ゾイドの生命と引き替えの捨て身の突進を追撃できるゾイドはいなかった。

お父さまが生きています。

エレナは喜びとともに、大きな疑念を抱いた。なぜ父は今までその生存を隠していたのか、それも他ならぬ娘にも。もちろん、ガイロス皇帝の陰謀による隠蔽の可能性もあるが、隠す意味は何なのか。むしろ父と娘の双方を手中に収めていることを示した方が、よりゼネバス兵への忠誠を誓わせることが出来ただろう。まるで切り捨てるようにキシワムビタ城の護衛部隊を引き上げさせたことの方が謎なのだ。

「大丈夫でしたか」

ぼろぼろのガンブラスターのコクピットから、シユウが這い出した。

「酷くやられました。生きてるのが不思議なくらいです」

黄金砲の殆どの砲身がへし折られ、超電磁シールド発生用のコーンも黒く焼き切れている。脚部関節も悲鳴を上げていた。

「キシワムビタ……『戦いを好む場所』。まさにその通りになりました」

「いったい何のこと」

キャロラインがコクピット越しに問いかけた。

「古い言語です。あの城の名前の意味です」

見渡せば、敵のダークホーンの他に、カノンフォートやレイノス、そしてシールドライガーなどの残骸が累々と散らばっていた。そして、この戦いが一層激しさを増すであろうことを、彼女なりに予測していた。

空に流星が奔る。

エレナは、戦争以上に悲劇的な事件が起こるのではないかという不穏な予感が横切った。

そしてこの大陸の何処かで、あの流星の下にいる父を想っていた。

「お父さま」

娘の声は流星の輝きにも似て儂く、父に届くことはなかった。

(2051—2052)

了

(2034―2051)

9 (2034年〜2039年)

エレナの生母エーヴと、父ゼネバスとの出逢いは劇的であった。

アルダンヌ会戦直後。つまりゼネバス帝国が新型ゾイドを前面に押し立て大攻勢を図り、中央山脈以西の帝国領支配を盤石にした頃である。

皇帝ゼネバスは、演習と巡幸を兼ね領内視察を盛んに行っていた。僅かな警護の兵を連れ、中央山脈付近の演習地に隣接する虫族が住む村に立ち寄った時、突然軍服姿のゼネバスに詰め寄り意見した、と言うより「文句を言った」女性があったのだ。

「軍隊が工房を壊してどうするのよ」

事の発端は、納期間際に作業を完遂し納入を待つのみとなっていた製品が、前日ゼネバス達が行った演習の流れ弾の破片が飛来し工房を直撃したことだった。村にはゾイドの表皮を加工して増加装甲や打撃武器を作る工房が立ち並んでいた。エーヴの父カジミエシユは名の通った職人で、再統治した帝国の要請により連日突貫作業を繰り返していた。流れ弾による人的被害こそ無かったものの、完成品は破壊されしまう。怒りの収まらないのは、父を手伝い、父以上に作業を熟^{こな}していた娘エーヴである。窘^{たしな}める父を振り切り演習場に乗り込もうとしていた矢先の、ゼネバスの訪問であった。

突然の出来事に驚くゼネバスに、彼女は切々と訴えた。

「私たちの皇帝陛下は、私たちを愛していたからこそ戦ってくれた。なのにあなたたち軍隊が民を守れなかったら、皇帝陛下の御心を裏切ることになるのよ。軍隊があつての民ではなく、民があつての軍隊とということがわからないの」

上辺だけを着飾り、社交辞令を繰り返す王宮の中より、ゼネバスの心に響く言葉であった。誰よりも皇帝である自分を愛し、軍を律する言葉でもあった。

ゼネバスはその場で素直に詫び、深々と頭を下げる将校を前にして

エーヴも素直に謝罪を受け入れた。納期延長手続きを約束すると、名前を告げずに去っていった背後で、事の経過を見ていた村人が囁いた。

「いまの、皇帝陛下じゃないか……」

皇帝の肖像は広く亘っており、冷静に彼の顔を見つめればそれが皇帝ゼネバスであることは彼女もわかつたはずだ。ところが怒り心頭に達していたエーヴには、ふらりと現れた将校が、よもや皇帝とは判断できずに、勢いに任せての「文句」となっていたのだ。

小さく消えていくゼネバスの背中を、改めて見つめる彼女の心は如何ばかりであっただろうか。

後に王宮に召喚されたエーヴは、正式にゼネバスからの求婚を受けることとなる。

ゼネバスと兄ヘリックⅡ世との大きな違いは、それぞれの人間性にあると言えよう。兄弟は共に人間味に溢れ、常にユーモアのセンスを失わない前向きさと、時に冷徹に使命を遂行する合理性を兼ね備えていたが、兄ヘリックは後者が勝り、弟ゼネバスは前者の人間味が勝っていた。帝国領内の国民からゼネバスが支持され続けたもの、時に激しい感情を剥き出しにして行動する皇帝が、皇帝と呼ばれるような雲上の人物ではなく、自分たちと同じ人間の君主としての愛情を抱かせたからだ。共和国政府が旧帝国領に於いてどれ程合理的な善政を布こうとも、感情に訴えかけるゼネバスには及ぶことがなかった。それこそが、ゼネバス自身も気が付いていなかった、彼のカリスマ性の顕現とも言えよう。

2034年はゼネバス帝国にとって躍進の年であった。開発が本格化した新型ゾイドが次々と戦線に投入され共和国軍を粉碎、宿念の仇敵であったゴジュラスを圧倒するアイアンキングの配備も完了し、資源に乏しく常に劣勢を強いられていたゼネバス帝国にとって、積年の屈辱を雪ぐ快挙となった。

加えて帝室に小さな喜びが加わった。ゼネバスの第二夫人エーヴが懐妊したのである。

軍略に於いては無類の能力を発揮する皇帝ゼネバスも、出産を控え

た産院では不器用な父親でしかなかった。終始産屋の前を気忙しく歩き回り、事あるごとに看護師に「二人とも無事なのか」と問いかけた。皇帝に対して不敬な振る舞いも出来ず、看護師たちは非常に困惑したと言われ、あまりの忙しなさに同席を頼まれたマイケル・ホバート博士が「もう少し落ち着かれた方が宜しいのでは」と何度も声をかけたと伝えられる。

月が満ち、この世に生を受けた証となる元気な産声を耳にした瞬間、産院の外にいたゼネバスは、皇帝らしからぬ歓声を上げた。

ゼネバス帝国第一皇女、エレナ・ムーロワの誕生である。

授かったのは皇位継承権のない女兒であった。ゼネバス帝室典範は、正室は同族の地底族より迎え入れなければならぬとの厳重な縛りを皇帝に課していた。地底族出身故に虐げられたゼネバス自身が定めた法であったが、それが自身の地位を苦しめることになるだろうと、反乱を起こしたばかりの若きゼネバスには予想もつかなかっただろう。

皇帝として世嗣の誕生を逃した落胆はある。しかしそれを上回る大きな喜びを得ていた。新たな肉親の誕生が何より嬉しかったのだ。

産院のベッドに横たわりながら、看護師から皇帝の喜びの様子を伝えられたエーヴは、安堵の微笑みを浮かべながら言ったという。

「陛下は優しくて寂しがり屋なのよ」

エレナの誕生は共和国にも伝わってはいたが、当時新型ゾイドの開発競争の真ただ中であり、エレナが世嗣でなかったことも、共和国側報道機関の注目を得られなかったようだ。新たに開発された高速ゾイド、サーベルタイガーによって共和国は苦戦を強いられていた最中でもあり、ヘリックⅡ世大統領は、軍の総司令官として、ゾイド開発の指揮者として、そして政治家として多忙な日々を送っており、側近の一部が敢えて情報を抑えた節がある。

もしヘリックが姪の誕生を知っていれば、後にゼネバスが腕輪を送ったように、同様の祝福を兄は行っていたに違いない。

ゾイド開発競争により、両国のパワーバランスは激しく変動する。

2039年に戦況は一変した。

ヘリック共和国は当時最強のゾイド、ウルトラザウルスを開発し一
大攻勢をかける。

帝国首都は陥落し、ゼネバスは僅かな手勢と共に暗黒大陸へと脱
出、ダニー・ダンカンを初めとする優秀な配下を数多く失い、技術力
の圧倒的な格差を見せつけられたのだった。

エレナやエーヴを中央大陸に残していく他に手段はなかった。ト
ビー・ダンカンの操るシュトルヒが帝国王宮を飛び立ち、共和国の追
撃部隊を引きつけている間に、エーヴたちゼネバスの姻族は密かに義
父カジミエシュの手引きによって中央大陸付近の山村に避難して
いったのである。

中央山脈西側の麓、虫族の生活するケツク村。エーヴがゼネバスと
出会った故郷の場所からは少し離れるが、気候や風土に大差はない。

陥落した帝都を離れ、エーヴの父カジミエシュの手引きによってエ
レナたちが隠遁している先がここであった。

「お母さん、お祖父ちゃんにこれ作ってもらったよ」

青い瞳を輝かせながら、少女は母親に、手にしたゾイドの玩具を誇
らしげに示した。精巧に作られたそれは、小さいながらも今にも動き
出しそうである。「よかったわね」と母が微笑むと、少女は玩具を手
しながら遊び友達の名前を言って駆け出しに行く。

「ブローニャに見せてくるー！」

風に靡く少女の金色の髪を見送りつつ、母親は小さく溜息をつい
た。

「お父さん、なんでサラマンダーなのよ」

母親は与えられたゾイドが共和国のものであることが不満らしい。
少女の駆けていく方向を振り返りながら、初老の男性が笑いながら母
親に近づいてくる。

「ゾイドに罪はないだろう。良いものは良い。それが何処の国のもの
であろうと。エレナには、物事を色眼鏡で見て欲しくないんだよ」

「それにしたって、ゴジュラス、ゴルドス、サラマンダー。今度はアイ

アンコングにしてよね」

エーヴも、父の前ではエレナと同じに我儘を言う娘であった。

エーヴは出自を隠すために、敢えて自分を「母上」とは呼ばせず、身の回りの慣習も庶民の生活と同様にして、村人の中に溶け込んでいた。庶民出身のエーヴはもとより、宮廷育ちであったエレナもこの一年半の内にすっかり村の生活に馴染んでおり、移築した祖父カジミエシュの工房に出入りするようになっていた。

エーヴは母親としての務めは充分に果たし、不在の父親に代わって祖父カジミエシュがその役割を担っている。エレナは自然に囲まれ健やかに育っていた。

家族が引き裂かれてしまったことは不運かもしれないが、エレナにとつてこの期間は必ずしも不幸ではなかった。

祖父カジミエシュは、それまで王女として手の届かなかった場所にいた代償を払うかのように、父親代わりとして可能な限りの愛情を孫娘に注いだ。故郷に戻ったエーヴも、格式ばった王宮の生活から解放され、喜々として父の作業の手伝いを行った。名目上は姿を隠すためというが、実際は鬱積していた不満を解消するのも目的であった。豊かとは言えない生活だったが、村人との温もりに満ちた触れ合いは、エレナの成長に大きな影響を与える。

エレナは手にしたサラマンダーを滑空させる様に操りながら、中央山脈の稜線を見つめた。晴れ渡った青空の下、凝結した水分がまるで緩やかな滝のように山肌を流れ落ちている。波濤の如きミストラスの動きを望みながら、幼い少女は父への思いを巡らせていた。

お父さん。

お父さんはいまどこにいるの。お母さんはがんばっているけれど、寂しがっているよ。遠く離れた海の向こう側で、お仕事をしているのは知っているけれど、早くみんなと一緒に暮らしたい。贅沢なんていらない。強くて優しいお父さんと、また一緒に暮らしたい。

「エレナちゃん、それどうしたの」

エメラルド色の瞳をいっぱい輝かせた少女が駆け寄って来た。グレーの髪の毛に黄色い大きなリボンが揺れる。

「またお祖父ちゃんに作ってもらったの」

「いいな、私にも貸して」

エレナは素直に手にした玩具を友だちに渡すと、手を繋いで村の広場に向かって駆けて行った。無邪気に遊んでいることが、母への最大の貢献であることを、若い少女は理解していた。

(お父さん、早く帰って来て)

少女の願いは、遠からず叶えられることになる。

10 (2039年)

第二夫人エーヴとの馴初めを語った以上、第一王妃マリーとの逸話を語らなければならぬだろう。脱出したゼネバスが正室を迎えたのは捲土重来を誓った時期と重なっていた。

ゼネバスは来るべき中央大陸への再上陸に備え、デイメトロドンなどの新型ゾイド開発に専念し、中央大陸から秘密裏に脱出していた旧臣たちを集め、上陸予定地バレスシア湾の地形確認などを精力的に行っていた。エレナ達が無事であることは把握していたが、安全を優先させ接触は最低限のものとし、書簡のやり取りなども途絶えていた。

故郷を逐われ雪と氷に閉ざされた異郷の地で雌伏する孤独な君主には往々にして心の支えが必要である。

ガイロス皇帝はとある提案をする。ゼネバスと姻戚関係を結ぶこと、つまり政略結婚である。相手はゼネバスの母デキツエリと同じく地底族の出身で、叔父ガイロスに連なる名家の娘、マリーであった。

ガイロスは猜疑心の強い皇帝である。デルポイとは比較にならない厳しい自然の中、絶えず反乱の萌芽を抑圧し続け、一代にして大陸統一を成し遂げるには病的な慎重さが必要だったのかもしれない。そして行き過ぎた猜疑心は容易に疑心暗鬼に変化する。ガイロスは常に側近に対する粛清を行い、多くの無実の犠牲者を生み出していた。

敗残の皇帝ゼネバスを受け入れたのは義侠心などという綺麗事ではない。ガイロスが望むのは、実り豊かな中央大陸、デルポイの大地である。大陸を二分する戦争が終了し、一つの統一国家となってしまうのは、来るべき中央大陸侵攻の障害になることは明白である。少しでも戦いを長引かせ、デルポイの兵力を疲弊させなければならぬ。

ゼネバスの受け入れは互いの利害が一致した上での協力であり、常に距離を置いた関係を保っていた。その証拠に、ゼネバスは仮面の下、ガイロスの素顔を一度も見ることが無かったが、ゼネバスもそれを不遜と思うことは無かった。

政略結婚とは時代がかった黴臭い政策だが、古臭い世襲制度には有

効であった。

軍人ゼネバスは、敗残の地で妻を娶るのを不謹慎ではないかと葛藤した。何よりデルポイに残してきたエーヴへの気兼ねもある一方で、皇帝ガイロスの提案を無下に断ることはゼネバスの生命にも危機が及ぶ可能性さえある。

彼は付き従ってきた側近たちに相談した後、ガイロスの提案を受け入れるべきとの結論に達する。

その上でゼネバスは、真剣な顔で側近たちにもう一度相談したという。

「優しく美しい人であろうか、母上のように」

その問いに即答できた者はいない。

初対面の際ゼネバスは緊張し、マリーと視線を合わせるのに苦勞した。エーヴとの馴れ初めとは異なり全く性格も判らない。ましてガイロスに連なる女性である。

「ゼネバス・ムーロワ様、お目通りが叶い光栄の至りです」

正面を見据えた彼の前には、柔らかな微笑みを浮かべた女性が立っていた。ドレスの両裾を摘み敬意を込めた優雅なカーテシーをしている。貴族特有の立ち居振る舞いは、正室としても、帝国国民の前に立つ容姿としても申し分ない。ノースリーブドレスで露わになった肩の肌は、地底族の特徴である赤みを帯びた色を湛え、幾分褐色がかった黒髪が靡く。継母にあたるジェナス家出身のヘリックⅡ世の母にも似た、目鼻立ちがはつきりとした芯の強そうな女性である。

マリーもこの婚姻が政略であることを納得していた。彼が海の向こうに先妻を娶っていることも承知済みだった。婚姻の拒否が自分を含めた一族全てに災いを被ることも知っていたが、それとは別に、初めて出会ったこの敗残の皇帝が人間味に溢れた一人の男性ともわかった。一目逢った時から、マリーはゼネバスを愛することができた。これもまたゼネバスの魅力であろう。ゼネバスが望んだように、彼を母のように受け入れる気持ちも固まった。

残された問題は、ゼネバス自身である。申し出は男からするもの、という妙な執着により、婚約の儀は遅れに遅れたという。その過程を

全て記述していると別章を設ける必要が生じるため、説明は割愛する。

二人は結ばれた。

大陸への帰還を準備する傍ら、後継者誕生への期待は大きく高まった。私生活の面でゼネバスは戦争と離れ、妻を愛する満ち足りた時期を過ごす。ゼネバスはマリイを心の底から愛し、マリイもゼネバスと同じくらいに愛した。二人は幸せだった。家庭生活に於いては、何の問題もなかった。

しかし、最大の懸念があった。

時間が足りなかったのかもしれない。過剰な期待が、母体に負荷を与えていたのかもしれない。ただの偶然かもしれない。そして考えられる最大の理由は「血の縛り」によるものかもしれない。

二人の間に子供が生まれることがなかったのだ。

最初、夫ゼネバスは気に病むことはないと思えた。ところがニクスでの生活が半年たち、一年たっても懐妊の兆候が見られない。いや、厳密に言えば懐妊しても生を受けないまま早産したことが2回続いたのだ。医師に相談しても互いの身体に問題はなかった。問題は、互いの血にあったのだ。

ゼネバスの母デキチエリとマリイは同じ地底族の名家出身であり血脈が繋がっていた。マリイとゼネバスとの間にはいわゆる遺伝上の障害があり、後継者を誕生させることができなかった。専門的には劣勢有害遺伝子（生存力ポリジーン）のホモ結合による発育不全である。

マリイは女としての務めが果たせない事に落胆した。それは彼女の身体の問題ではなく、ゼネバスとの血縁上の障害である以上、彼女に責任は一切ないのだが。

同様に落胆したのは、後継者誕生を望むガイロス・ゼネバス両帝国の側近である。政策としてしかマリイを見ていない人々にとって、彼女は価値のない存在となった。マリイは悩んだ。そんな妻を夫ゼネバスは常に庇ったが、彼自身も庇いきれない歴史の流れが再び動き出そうとしていた。

Day、中央大陸再上陸の準備が整ったのだ。

ゼネバスは再びデルポイに戻らなければならない。後継者が誕生していれば再上陸と帝国首都奪還の祝賀に、堂々と正室マリーを発表できたろう。ところが暗黒大陸で娶った後継者を伴わない見知らぬ正室に、臣民がどのような感情を抱くか懸念された。

「マリー、私とデルポイに行こう」

周囲の意見になど気にかけないゼネバスは、愛する妻に声をかけた。

だが、マリーは決して首を縦に振ることをしなかった。

彼女は自分が夫と共にデルポイに渡れば、この不器用な夫は彼女を気遣い決して第三の側室などを娶ることをしないのを知っていた。そしてデルポイには最初に愛した女性と娘が待っていることも。

皇帝として何より必要なのは後継者を設ける事であり、それが出来ない以上重荷になることは耐えられなかった。夫ゼネバスは、自分以上にゼネバス帝国を愛しているからだ。

旅立つゼネバスの背中も見ずに、マリーは私室に閉じこもった。皇帝の地位を思えばこそゼネバスとはもう会えない。そして彼との別れを決意した。

マリーは実父を通じ、訣別の意思を込めてガイロス皇帝にゼネバスとの離縁と新たな婚姻の斡旋を願った。ガイロス皇帝も継嗣の出来ないマリーの事は伝え聞いており、彼女の申し出を断る理由もなく、次の夫となるべき貴族を選び出した。

適任者は直ぐに決まった。ガイロス皇帝の側近として長く仕え戦いにも長けていた神族の名家、プロイツェン家の子息である。

婚姻への段取りは滞りなく進んでいた直後、マリーは自分の身体の変調に気が付いた。

(まさか……)

それは、去って行った者との愛の結晶であった。

11 (2041年)

バレシア湾は朝風の時刻を迎えていた。僅かな気温と気圧の変化によって沿岸地域には朝靄が立ち込める。視界は20m以下に閉ざされ、海岸線は白い闇に包まれていた。

鏡の如く鎮まった海面に、停泊するウルトラザウルスの影が映り込むことはない。その飛行甲板から1日の始まりを告げる新兵訓練の掛け声が聞こえてきた。

静寂を切り裂いて、海面から放射状の火箭が広がった。空中で放物線を描き標的に殺到する。燃料タンクに命中したのか、炸裂音が連続して発生し基地に黒煙が立ち昇った。

低い機械音が響いてくる。沖合から巨大な何かが接近しているのだ。朝靄の中、巨大な口を開いた輸送艦から、次々と赤と黒の新型ゾイドが吐き出された。

D | d a y、中央大陸再上陸作戦発動。

ゼネバスが海の向こうから帰ってきた。第二次中央大陸戦争の開始である。

想像を超えた出力で電波妨害を行う新型ゾイドデイトロドンの大量投入と、シーレーンを分断するウォディックの沿岸での遊弋は、連動して旧帝国領での残存勢力の再蜂起を促し、進駐する共和国軍を掃討してしまった。

短期間に共和国が中央大陸全土を管理支配することに無理があった。占領政策が完全に整っていない中央大陸旧帝国領での通信網の遮断は、統治する共和国軍にとって致命的であった。なぜなら占領方針に於いて軍と政府の確執が少なからず存在し、結果大統領直接の指示に従って漸く運営していたという実情があったからだ。そのため、占領軍は極力武装を抑えた形で統治に当たっており、帝国領全土を掌握するには十分な兵力がなく、進出してきた帝国軍に対抗できなかったのだ。更には故郷を遠く離れた帝国領に派遣されていた共和国の兵士達の間にも、戦闘終了の後も占領地での緊張した月日を送る事への厭戦感も募っていたのだ。帝国軍の進攻は、彼らの故郷への帰還の理

由としては充分すぎた。引き波のように去って行く共和国占領軍を尻目に、旧帝国領の人々は歓喜した。

ゼネバス皇帝が帰ってきた。「我々の皇帝陛下がお戻りになられた」。旧帝国領の人々は口々にその名を叫んだ。

「ゼネバス帝国と皇帝陛下に栄光あれ」と。

帰還した帝国軍は、瞬く間に大陸の中央山脈西側半分にあたる旧領を回復してしまった。

ゼネバスは、真つ先に妻と娘の待つケック村に向かいたかつたはずだ。だが、中央山脈付近に位置するこの虫族の村は、まだ充分な国力を回復していない帝国にとって、共和国による再侵攻の危険性も残っていた。もし彼がケック村に直進すれば、その先に隠遁されている妻子の所在も明らかになる可能性がある。

彼は敢えて帝国首都と王宮の奪還を優先し、大陸の西側を大きく迂回する形で中央山脈付近への進出を行った。

但し、この皇帝自らの発案による作戦行動の背景には、或いは暗黒大陸で結ばれた地底族の女性との関係を気遣い、最初の妻への言い訳を考えていたのではないかと囁かれている。

連日の帝国軍勝利の報せに、エーヴは夫の帰還を待ちわびていた。再上陸から早くも1か月が経過し、帝国領の回復も達成された。軍の内部でも身を隠している彼女たちの所在を詳しく知る者は少ない。後は秘密裏に帝国の使者が出迎えに来ることを待つばかりである。

ところがゼネバスの性格をよく知る彼女でさえも、夫の行動全てを予測はできなかつた。出迎えに来たのは、代理の使者ではなかつたのだ。

ある朝、村にレッドホーンを引き連れた部隊がやってきた。解放戦以降のよくある単純な軍の巡回と考え、エーヴ達は遠くでレッドホーンの赤い機体を眺めていた。

赤いゾイドの周りに軍を募って駆け寄った村人たちの人垣が出来ていたが、不意に海が割れるが如く人垣が開かれた。中央に体格の良いパイロット服の男性が立っている。脱いだフルフェイスのヘルメットの下から現れたのは、長く待ち焦がれた顔だつた。

エーヴはその場に立ち尽くしていた。声が詰まって出てこない。「お父さん、お帰りなさい」

先に声をあげたのは、祖父に漸く作ってもらったアイアンキングの玩具を手にしたエレナであった。

「ただいまエレナ。大きくなったな」

「うん、たくさん食べて遊んで、（※小声で）勉強していました」

逞しい肩がエレナを持ち上げ、少女は歓声を上げる。

「……重くなったな」

「お父さま、レディに失礼ですわ」

エレナは6歳になっていた。

娘に先を越され、駆け寄るタイミングを失ったエーヴがゆつくりと歩み寄る。

「お帰りなさい。ゼネバス皇帝陛下」

「エーヴ、それに父上殿。待たせて済まなかった」

家族再会の瞬間であった。

一歩引いて傳かすずく祖父カジミエシュたちを目にして、エレナは青い円らな瞳で、怪訝そうに父を見た。

「なぜお祖父ちゃんがお父さんに頭をさげるの。目上の人は大事にしろと教えてくれたのに」

ゼネバスは笑った。

「そうだなエレナ。父上も顔を上げてください」

エーヴも笑った。カジミエシュも、周りの村人たちも一斉に微笑んだ。ゼネバスは国民の心の中に帰ってきたのだ。

エレナは、肩の上で父の温もりを感じていた。

ゼネバスは帝国領回復の余勢を駆って、一気に共和国首都攻略を目指した。最終目標は中央大陸の統一である。積年に亘る共和国と兄ヘリックⅡ世への雪辱に燃えるゼネバスは、アルメーヘンでの国境の橋争奪戦を代表とするように各地での激戦を制し、帝国の領土拡大を盤石なものにした。しかし、単に共和国への憎悪だけがこの戦勝の原動力とは思えない。ゼネバスの行動には、来るべき暗黒軍の侵略に一刻も早く備える必要を感じた上での戦略と思える節がある。

亡命中も決して心を許さぬ冷たい大地の独裁者ガイロスに、ゼネバスも大きな疑念を感じていたことだろう。それを防ぐためにも、一刻も早く中央大陸を統一しなければならぬと。

武骨な彼には、兄との和平という手段を選ぶことだけは受け入れられなかったのではないか。兄を屈服させたうえで、兄を守る。軍人として歩んできた義務を必要以上に自分自身に課した、彼の悲劇だろうか。

一方、宮廷に戻った家族にとって、共和国との戦い以上に重要な問題が持ち上がっていた。エレナの教育である。

ゼネバスの暗黒大陸脱出中に、祖父の元でエレナは他人への思いやりや、ゾイドの修理作業を通じての生きる力を会得していた。されど継承権はない王女であっても王族としての教育は必要である。

まず、家臣の娘であるとして5歳年上のキャロライン・ラーレナスが選ばれ、学問を含めた身の回りの世話をする年の近い学友となった（※前述の通り、実際は女性部隊“ミンクス”所属の少女兵）。肝心の指導者であるが、このころのエレナはゾイドの改造に勤しむ、少女とおよそかけ離れた趣味に没頭していた。大部分は祖父カジミエシユの影響だが、操縦する事よりも内部の機関の仕組みに興味を持って、時間が許す限り解体と組み立てを繰り返していたのだ。気性の強さは両親譲りで、自分の気の向いた時以外は決して机に向かおうとしない。様々な家庭教師をつけてみたのだが、全員が二日を待たずして根をあげていった。

エレナが7歳の誕生日のことである。彼女の誕生祝賀会とは別件で、王宮に見慣れた訪問者が現れた。

「マイケル少佐、いや、博士と呼んだ方が良いか。一体なにが起こったというのだ。そんなに息を切らして」

「マイケルで結構です。それより皇帝陛下、折り入ってお願ひがあります。共和国の新型ゾイドの件です」

マイケル・ホバート。帝国ゾイド開発のトップであるドン・ホバートを父に持ち、自らも様々なゾイド開発を行う若き技術将校である。また、彼はゼネバスの数少ない心許せる部下であり友人でもあった。

彼の手には、不鮮明な画像を印刷したものが握られていた。幾分呼吸が整った頃、徐おもむろに語り出した。

「共和国が、サーベルタイガーのフレームをコピーした高速ゾイドを開発したという情報を得ました。すぐにでもサーベルタイガーの強化策を練るとともに、共和国の技術的な解釈を知りたいのです」

「青いゾイドの話は聞いている。まだサンプルは集まっていないが、データが収集され次第、すぐにでも連絡する。それまで待っていたまえ」

この若い技術者は、常に偉大な父の影を追ってきたため、少しでもそれを超える業績を得ようと懸命であった。彼にとつての新型ゾイドの登場は、共和国であれ帝国であれ興味をそそられる事件であったのだ。

「マイケルおじさま、ごきげんよう」

気付くと、足元でピンクのスカートの両端を掴んで会釈する少女がいた。宮廷の庭で遊んでいた彼女は、マイケルの姿を見た途端に駆け寄ってきていた。

「これはエレナ様、お誕生日おめでとうございます。でも僕はまだおじさま」と呼ばれたくはないのですがね」

エレナは、ゾイド技術者のマイケルが大好きであった。彼は彼女の興味のある全てを教えてくれたから、また、ゾイドについて熱心に興味を持つこの王女に対し、マイケルも頻繁に知識を与えていたのだった。

「今日はどんなことをお教えくださるのですか」

「皇帝陛下とお話をしてからだね。少々お待ちください」

「マイケル、高速ゾイドの件は了承した。あとはエレナの相手をしてくれたまえ」

父の言葉を聞いて、彼女はマイケルの腕を引っ張りながら、お気に入りのゾイドの前に駆けていく。苦笑しながらも走って行くマイケルとの姿は微笑ましかった。まるで本当の兄妹のように戯れる姿を見て、ゼネバスには一つの考えが浮かんでいた。彼女にとっての最高の誕生日プレゼントである。

「僕がエレナ様の家庭教師に？」

マイケルは目を丸くして激しく首を左右に振った。

「冗談は止めてください。一介の技術者に、王女様の教育など責任が持てません。他に専門家がいるでしょう。それに今は父の開発した巨大ゾイドの運用試験中なのです」

「それに関しては、トライアウトをトビー・ダンカン中尉に任せてあるから心配はない。それよりも、姫の教育者に関しては、思いつく限り試した結果なのだ。私からの頼みだ。娘に立派な知識を伝えてやってくれないか」

皇帝に頼まれては、マイケルに断ることなどできなかつた。

「身に余るお言葉です。承知しました。皇帝陛下の御命令であれば御受けします。

でも、知りませんよ。将来エレナ様がゾイドを設計するようになっても」

「それもいいだろう」

ゼネバスは見上げるエレナの背中に触れた。

「これからマイケルがエレナの先生だ。しっかりと学ばせてもらいなさい」

既に家庭教師の件を伝えられていたエレナは、満面の笑みを浮かべている。

「マイケル先生、よろしくおねがいします」

少女の可憐な笑顔は、もはやマイケルの選択肢を全て奪っていた。

彼は、ゾイド開発とエレナの家庭教師とを兼任することとなった。

彼はエレナの興味が向いている分野を手掛かりに、言語や歴史など他の分野も織り交ぜて知識の裾野を広げていった。学問とは学ばされるものではなく学ぶものであり、自分の興味がある部分を伸ばすには、自ずと苦手な部分も取り入れる必要があることを伝えていった。結果として分野よっての好き嫌いの垣根は取り払われ、乾いた大地が水を吸収するように、エレナはありとあらゆる知識を会得していった。優秀な素質と、優秀な指導者の賜物ともいえるが、それ以外にも新たな要因が加わっていた。

剃刀のように鋭い視線をした少年だった。一つ歳は上だという。子どもというには、常に暗い影を引き摺っている。

「シュテルマーだ。王宮の親衛隊付で面倒をみることとなった。見た通りお前と同じくまだ勉強が必要な年頃だ。キャロラインと共に、マイケル先生に指導をしよう。仲良くしてやってくれ」

「シュテルマーです。エレナ姫様、並びにキャロライン様。よろしくお願ひします」

父ゼネバスが紹介し終わると同時に、少年は静かに挨拶を交わす。はにかみや恐れなどが全くない。そして紹介した父にも、何某かの蟠りの様なものが受け取れる。

罪滅ぼし。後に彼の父との過去の軋轢を知ってからのことではあるが、少年は父と繋がる「ガンビーノ」の姓さえ捨て去られ、シュテルマーという別姓を名乗らなければならなかった。生い立ちの厳しさが、冷徹な性格を育んだのかは定かではないが、少なくともエレナが持っている子どもの無邪気さを完全に抜き去ってきたような姿だった。

シュテルマーはエレナに劣らず優秀だった。ただ彼女と異なるのは、学習を通して新たな知識の発見や技術の習得に喜びを感じているのではなく、彼がただ機械的に知識を会得しているということであった。エレナにはゾイドのシステムの一つ一つを理解するたびに喜びが生まれたが、シュテルマーにはそれが無い。ただ語彙が一つ増えるだけだった。

それでも、エレナには大きな出来事だった。マイケルの授業は楽しかった。それ以上に、大人たちに囲まれた環境の中、同年輩の男の子と一緒に勉強できるのが新鮮だった。カジミエシュのもと、中央山脈の村に隠遁していた時期以来である。

負けず嫌いのエレナは、一つ年上のシュテルマーに負けられないように熱心に学習に励んだ。シュテルマーは将来の親衛隊付となるための訓練とエレナの護衛職を兼ねていたため、学習時間は彼女ほどとれなかったのだが、それでもマイケルの授業と提出される課題の全てを期限までに終了させていた。

「姫様もシュテルマーも勉強し過ぎです」

決して能力は低くないキャロラインだが、競い合うように学習する二人に根を上げていた。

ゼネバスの思惑は的中した。あれだけ机に向かうことを嫌がっていた娘が、二人の学友と一人の優秀な科学者を付けることで、見違えるように学習を始めたのだから。そして幾度となく呟いていた。

「エレナが男子であったならば」

12 (2042年～2089年)

マリーは、後宮のバルコニーから夜空に欠けた三日月を見つめ苦悩を募らせていた。

胎内に育まれている新たな命は、紛れもなく海の向こう側に渡ったひとと繋がっている。共に過ごした日々の間には、望んでも得られなかった愛の標が、その別れの直後に訪れる皮肉な運命を呪った。この世に生まれる子供は、生まれながらにして父を知らず、そして名目を重んじる家で、母親の元からさえも引き離されるかもしれない。

マリーは自らの身体を傷つけ墮胎することを考えたが、理屈では割り切れない感情が、彼女の行動を妨げた。期せずして得られた唯一の血の繋がりを断ち切ることが出来なかったのだ。

解決する手段も得られないまま、やがて月が満ちた。

マリーが産み落とした嬰兒は、銀髪・白い肌・緋色の瞳を持つ地底族の身体的特徴のない男子であった。名家プロイツェン家は神族に連なる家系を持つため、父親側の血を強く引く子としてその出自を疑う者はいなかったが、生物学上での理由は異なっていた。

常染色体劣性遺伝の偶然によって生み出されたアルビノ、別名先天性色素欠乏症と呼ばれる症状であった。紫外線耐性が弱く、重度の場合日光を浴びることさえ危険であるが、生まれた男子の症状は軽度のもので、弱い陽射しの暗黒大陸での生活には全く影響ないものだった。生気に満ちた産声をあげ、産後の経過も良好なその子は、プロイツェン家の将来を担う貴重な継嗣として一族より最高の祝福を受けた。しかし、彼女の心だけは穏やかではなかった。専門的医学知識を持たない彼女にとって、生まれた子どもは呪われた血の縛りが招いた結果と思われたのだ。

数日が経過し、漸く見開かれた嬰兒の緋色の瞳に見つめられたマリーは、偽りを重ねてしまった己の業の深さと、本来の夫である人物の血の呪縛を感じずにはいられなかった。それでも抱いた小さな命が精一杯の背伸びをする姿を見つめると、母としての無償の愛情が留まることなく溢れ出た。

愛した人との愛の結晶。誰が唱えるともなく何百回も聞かされてきた陳腐な言葉と考えてきたことが、現実にはその言葉通りであることを実感していた。

この子を立派に育てよう。そしていつの日か時が訪れた際に眞実を語ろうと。

その子はギウンター・プロイツェンと名付けられた。

マリーの新たな夫となった男性は、権力欲に取りつかれた哀れな人物であった。

ゼネバスの去った後、ガイロス皇帝から提案された婚姻を逡巡することなく受け入れた。その姿は権力に逆らわない為というよりは、時の権力に媚びるようにも見えた。

しかしそれを彼の素性だけに押し付けるのは酷である。

誰もがガイロスの猜疑心を恐れていた。他愛の無い行動でも、容易に粛清の対象に転化することは、周囲の数多く事例が示していた。

またプロイツェン一族にとっても、彼が宮廷に要職を得る事への多大な期待を背負わせ続けて来たのだ。皇帝仲介の婚姻を機会に、その後の権力の掌握を考えれば、自分自身の意思など抱く余地は無かった。

表面上、彼は彼自身の息子とされたギウンターを愛おしんだ。ただそれは皇帝ガイロスの知る範囲までで、権力闘争に明け暮れる日々の中、いつしか仮の父と息子の関係は距離を置いたものとなっていた。

後に思春期を迎えたエレナがゼネバスを激しく憎んで避けたのは、彼女が父を愛していた感情の裏返しである。だがギウンターとその仮の父とは、愛情も憎しみも無い、その本来の位置づけの他人の関係だった。彼にとってどこかで、ギウンターが自分の血の繋がらない息子であることを察知していたのかもしれない。母子の元から常に離れて政争に明け暮れた彼は、惑星大異変の最中に行方不明となり、未だ消息は掴めていない。

マリーは母親として、そして時には不在の父親役として、優しくも厳しくギウンターを育てた。熱心に教育に情熱を傾ける母の姿に、プ

ロイツェン家の一族も諸手を挙げて協力をした。学問から武芸の鍛錬、そしてゾイドの操縦技術。本人自身も知ることの無い、遺伝的な障害さえ感じられることなく、ギユンターは逞しく成長していった。マリーはその子を抱いた時から誓った約束を遂行する為、いつの日にか告げるであろう真実を書簡に纏め、人知れず隠匿した。天変地異でも起こらぬ限り、自分以外には開かれることの無い場所へ。

ガイロス皇帝は、通常世襲君主にありがちな一夫多妻の婚姻形式を取らなかった。それは生涯妻とした女性は一人きりであったということではない。一人の女性のみへの愛を貫きたいというような誠実さではなく、後継者が複数誕生することを極度に恐れたという理由からだ。

この稀代の霸王は、徹底した粛清と恐怖政治によって一代で部族対立の続く暗黒大陸を統一した。その戦い方は、僅かでも抵抗の姿勢を示した部族の指導者血族全員を抹殺し、その傘下にあったゾイド全ても破壊するという徹底した殺戮であった。

暗黒大陸には、中央大陸と異なり、古代ゾイド文明にも連なる言語を有する民族が存在していた。彼らはオーガノイドシステムとは別のテクノロジー——ディオハリコンを利用する技術や、ギルベイダーの素体となるドラゴン型ゾイドの成育など——を継承しており、それが第一次大陸間戦争時の暗黒軍優勢の要因にもなった。そこでガイロスは、彼らの技術が今後流出する可能性を恐れ、ガンギャラドの完成後には技術を継承してきた彼らを全て抹殺してしまった。

後の西方大陸戦争開始時に、ドラゴン型ゾイドの投入とディオハリコン搭載ゾイドの再生産が行われなかったのも、この時の古代ゾイド文明を引き継ぐ民族の消滅により、テクノロジーが断絶していたという理由があったからだ。

ヘリック・ゼネバスの抗争に明け暮れる中央大陸にとって、ニクスは暗黒大陸と呼ばれる謎の存在であったが、ニクスにとってデルポイの戦乱の情報は、ゼネバスの亡命時に詳細に伝えられ、詰る所それが血族同士の争いに過ぎない事を知っていた。

ヘリックI世による統一と、その息子ヘリックII世とゼネバスによ

る抗争は、猜疑心の強い皇帝ガイロスに、複数の継嗣を持つことをためらわせた。もし後継候補者同士で対立が発生すれば、漸く武力で捻じ伏せてきた各部族の軍閥達が再び蜂起するかもしれない。皇太子は一人で充分という発想も、中央大陸戦争の経過を見守ってきたからこそであろう。

皇帝ガイロスが最初に授かった男子は心身に障害を持っていた。理由はゼネバスとマリーの間のそれと同じである。そして後継者として役に立たないと判断したガイロスは、誕生したての嬰兒を即刻処理してしまったと言われる。その子は最年少で粛清された一人に数えられることとなった。

長寿のゾイド人にすれば、長期に亘り後継者誕生の可能性がある。仮に最初の何人かが不適であつても、見極めた上でその成長の度に粛清し、新たな皇太子の誕生を待つこともできる。更に、もし妻である皇后が受胎の生物的な能力を失ったとすれば、スぺア部品を交換するように新たな王妃を迎えればよいだけのこととしか、ガイロスは考えていなかった。そこには恋愛感情というものとは程遠い、ただの子供を産む機械としての認識しかなかった。

それが本当に二番目に生まれた、最初の王妃との間の子であつたかどうかという確証はないのだが、次に生まれた男子は、幸いにして心身ともに健常だった。ガイロスはその子を仮の後継者として、極力健康状態に留意し養育していった。

残念ながら、彼の個人名は伝わっていない。正式に皇太子の地位となつていたのか、それとも全く後継者の地位に就くことはなかったのか、憶測は様々であるが、後の皇帝ルドルフの父である事だけは確かである。便宜上ここでは仮に、彼を「皇太子」と称することとする。

この時期の、ガイロス帝国内での動向の殆どが不明となっているのは、やはり惑星大異変による資料や記録の散逸の為である。元来秘密主義のガイロス帝国に加え、大陸が二分され、首都もダークネスからヴァルハラに遷都された混乱により多くの情報が失われ、ガイロス帝室での動きを把握することは現在至難のこととなっている。

やがて皇太子は成人し、生涯の伴侶を得た。彼は父ガイロスに似

ず、妻を精一杯愛していたといわれる。そして彼が嫡子ルドルフを得たのが、未だに惑星大異変の混乱の残る2089年であった。

この頃彼は、極度に自分の行動全てに干渉し、信賴の置ける旧来の忠臣であつても依然次々と肅清を続ける父ガイロス皇帝に対して疑念を抱く様になつていた。

ガイロスの統治の仕方は、かつてゾイド星での部族間抗争が繰り返されていた頃であれば維持できたのかもしれない。だが、ヘリック共和国という仮初にも共和制を謳った国家が成立し、市民権思想が暗黒大陸にも流布していた以上、一部の貴族層からも皇帝への反感が高まつていた。

父との確執を抱えた皇太子に対し、共和制を目指す貴族グループの一団が、皇太子を掲げたクーデターを画策した。皇帝ガイロスの廃位と、新たな皇帝の擁立である。

皇太子自身の与り知らない所で計画された陰謀は、理想主義に燃える貴族知識層の未熟さと、彼らの団結力の弱さに阻まれ、決行以前に敢え無く鎮圧され、連座した者達は一様に肅清された。

巻き込まれた形となつた皇太子も、父の肅清の憂き目に遭つてしまった。この時ガイロスは、初めて人を殺すことに躊躇いを見せたとされる。それまで行つてきた肅清が、皇太子と雖も例外を認めるわけにはいなくなつていたからだ。

帝室に衝撃が奔つたのは言うまでもない。間もなく後を追うように王妃が自害し、残されたのは、ガイロス本人と、未だ乳飲み子であるルドルフ（幼名は不明）だけとなつてしまった。謀反を起こした皇太子の子であつたため、ルドルフの後継者としての地位も危ぶまれたが、長寿のゾイド人としてもさすがに老いを自覚していたガイロスは、ルドルフの廃位を決断できず、結局、新皇太孫として擁立されることとなつた。

このクーデターの恩恵を最も受けたのは、他ならぬギウンター・プロイツェンである。皇太子が肅清され有力な後継者を失い、やがて訪れた皇帝の崩御と幼帝の即位によって摂政の職を獲得。権力を掌握し、その間、着々と反乱の総仕上げを行つたのであるから。従つて誰

もが、裏で謀略を巡らしていたのは彼であると想像する事だろう。

クーデターの責任を負って粛清された首謀者と思しき貴族に、謎の資金源が存在していたことが判明している。それは決してギョクンターが提供したものではないことも、彼の残した記録により証明された。

手掛かりとなるのが、クーデターを計画していた貴族の所有ゾイドの中に一機だけ、非常に珍しい機体が存在していたことだ。

メガトプロス。かつてチエスター教授救出に活躍した、ゲリラ戦には最適の2080年代には絶滅寸前の貴重な機体である。惑星大異変以降、帝国共和国の所有ゾイドの垣根は曖昧にはなっていたが、反乱に非常に有利なこの24ゾイドを、果たして彼らは何処から入手したのであろうか。

このことから、謎の資金源に加え、反乱の背後には未だに正体の掴めない共和国諜報機関破壊工作部隊の暗躍（※『消された死竜』参照）もまことしやかに語られているが、真相は不明である。

13 (2046年～2051年)

エーヴが逝去したのは、エレナが12歳の誕生日を迎えた春であった。

人が孤独を感じるのは、決して一人きりでいることだけが理由ではない。例え周りに誰も居なくとも、心の繋がっている誰かを思うことができれば、寂しくはないものだ。対してどれほど周囲に人間が溢れていても、心が通わないのであれば一人きりで居る時以上に孤独感が増す。家族という絆で繋がれているはずの父と娘は、同じ王宮に居ながらも、その広大な佇まいにも似た希薄な関係へと帰着していった。

母の死を境に、親子の間に心の溝が深く刻まれることを互いに感じていた。

エーヴの死因は、慣れない王宮での生活による心労といわれている。だが、ゼネバスが暗黒大陸に亡命中も父カジミエシユの工房で働き、心身ともに健康であったエーヴが容易に心労で倒れるとは信じがたい。

ここで、当時まことしやかに流れていた噂に、彼女が毒殺されたという情報がある。

帝国は決して一枚岩ではない。前年にレッドリバー戦線をヘリツクII世自らが操縦する改造巨大ゾイド「ケンタウロス」によって突破され、帝国による中央大陸支配に陰りが見えてきた時期だけに、地底族のエスノセントリズムを唱える集団が虫族出身の側室エーヴを暗殺し、再び地底族の正室を迎え入れようとしていたとの説もあるのだ。勿論、彼女の偶然的死を利用して、敢えて帝室に揺さぶりをかけるために流された後付けの噂ということも考えられる。現在に至っても、真相は藪の中である。

ゼネバスの悲しみは大きかったはずだ。もし帝国が攻勢を仕掛け共和国を圧倒していれば、必ず彼は側近の眼も憚らずに嘆いたことだろう。しかし、共和国が地力を発揮してじりじりと旧支配地奪還を繰り返していた頃である。加えて帝国占領下の共和国首都に於いて、共和国の頭脳とも呼ばれたゾイド開発主任のハーバート・リー・チェス

ター教授が共和国特殊部隊によって奪取されてしまったことも、帝国の威信を大きく傷つけていた。

ゼネバスは君主として、そして軍の最高権力者として規範を示さねばならない以上、悲しみを押し殺してでも陣頭に立たなければならなかったのだ。

それに反し、少女エレナには母の死を受け入れることが出来なかった。

そして肉親の死にも悲しむ姿を見せない父に、言い知れぬ憤りを抱いたのだ。

以前から、父への不信は募っていた。祖父カジミエシユとともに過ごしたケツク村の生活では、母は輝いていた。ところが帝都の王宮入城以降、母は確かに心労が重なっていたのだ。デスザウラーの戦線投入により共和国首都が陥落し、支配領域の増えた分戦意高揚のための各地への巡幸や、皇帝に代わっての政務の処理、恩賞の授与など、勝利が彼女への負担も増やしていた。平民出身の母には、王宮内には夫であるゼネバスしか頼るべき人はないのに、反攻を続ける共和国軍への迎撃に手一杯の皇帝は、いつも母の側にはいなかった。そしてそんな父の立場を理解できるほど、エレナは大人ではなかったのだ。娘の気持ちを感じ取れぬほどゼネバスは愚鈍ではないのだが、家庭と軍事作戦を同時に成り立たせるほどにも器用でもなかった。

前年に結ばれたヘリックⅡ世とローザの間に男児が誕生し、叔父となったゼネバスが祝福の証としての腕輪を送った背景には、彼が亡くしてしまった己の伴侶への罪滅ぼしの意味合いも入っていたのかもしれない。

エーヴの逝去以降、母の担っていた政務が、思春期を迎えた少女の肩に背負わされることとなる。エレナがもし、普通の家庭に生まれ、普通の生活をする、普通の少女であれば、恐らく父の仕事を嫌って部屋に閉じこもったことだろう。不幸にも彼女は十分に聡明であり美しく、そして自分の置かれた立場を弁えていたため、普通の少女の様な我儘を通すことができなかった。

この頃エレナは、ニクスで父がもう一人の女性と結ばれていた事実

を知った。それも彼女の母エーヴが先に結婚したにも関わらず、虫族出身というだけで第二夫人の地位に置かれ、後から結婚した女性はガイロス皇帝の血を引く名家出身の地底族のために、正室第一夫人の地位を得ていたこともである。その女性との間には継承権を持つ王子の誕生を得なかったため、周囲ではエレナには敢えて伝えることを控えていたのだが、折り悪く思春期の揺れ動く少女の潔癖を重んずる心に大きな衝撃を与えてしまっていた。彼女には、父の行為を理解できなかったが許せなかったのだ。

華やかなライトパープルのドレスを纏った愛らしい王女が戦地を巡幸する。

エレナが手を振れば、兵士もそうでない者も歓喜の声を上げる。

煌びやかな金糸に連なったゼネバスの紋章が輝くと、力の象徴ゼネバス皇帝と、優しさの象徴エレナ王女という帝国の誇りの双璧が帝国の大衆の心に描かれた。余談だが、この巡幸時、エレナの背後には常に侍女キャロライン・ラーレナスが寄り添った。凛々しくも、常に控えめな姿で王女の背後に立つ当時17歳のキャロラインは、一部ではエレナ以上の支持を受け「バレッタ（髪飾り）」と呼ばれ、その二つ名が定着していったという。

笑顔で手を振る姿の心の中で、エレナは、ケック村であれば思い慕っていた父ゼネバスを、自分がいま信じられないほどに憎んでいることに気付いていた。

憎んでいるのに、父の責任の一端を負っている。地底族の標として、自らの肌を晒すような姿であっても、それは父を愛した母の為であって、決して父のためではないのだと言い聞かせながら。

そして呪っていた。ゼネバス・ムーロアの娘として生まれたこと、忌むべき裏切りの一族の血を引いてしまったことを。その証拠に、侍女キャロラインは王宮で一切の言葉を交わさず擦れ違う父と娘の姿や、私室で祖父カジミエシュが作ったデスザウラーの玩具に向けて、紙屑の玉を投げつけ囁いていたエレナを垣間見ている。

「デスザウラーなんて嫌い。お父さまは大嫌い」

彼女にとっては、帝国の支配地を拡大させたデスザウラーは母の仇

に思っていたのかも知れない。

少女にとつては過酷な、親しき者との次なる別れが訪れた。

「マイケル先生……」

王宮外苑広場に佇む真紅のゾイドを前にして、エレナは言葉を詰まらせる。

デスファイターはデスザウラーの改造機であったが、制式塗装の黒と異なることと、なによりマイケルが設計した機体であることが大きく印象を変えていた。

「行かないでください。嫌な予感がするのです」

それでも不安は拭えない。漸く絞り出した言葉は彼女の気持ち全てであった。

マイケルも、目の前の母を失ったばかりの少女を支えてやりたかった。だが同時に、皇帝ゼネバスへの恩義と軍人としての義務、そしてなにより技術者としての好奇心が、彼を留める術を失わせていた。

「塔上の悪魔」と呼ばれたアイアンコングをたちどころに葬ったゾイドとは何なのか、その正体をこの目で見届けたい。もはや勇気と呼べる行動で無いことを彼自身も気が付いていたにも関わらずに。「もう……もう……帰って来てくれないような。お母様だけじゃなく、先生までいなくなったら、私は……」

途切れ途切れに続く言葉が何を伝えたいかはわかっていった。マイケルは出来る限りの優しい声で嗚咽を堪える少女に語りかけた。

自分自身の抱える葛藤を隠しながら。

悲しいまでに、自分が狡い大人であることを実感しながら。

「エレナ様は僕を信じてくれないのですか」

俯くエレナは無言である。

「父が設計して、僕が改造して僕が操縦するデスファイターが、そんなに簡単に倒されてしまうと思うなんて、心外だよ」

エレナの嗚咽が止まった。恩師へ向けた疑念の言葉に気付いた瞬間だ。

「エクスカリバーにダブルキャノン。シールドーホバーだって装備されています。出力も通常のデスザウラーの二倍近い。例え共和国の

新型ゾイドがどれ程強力でも、僕のデスファイターに敵うものなどないと思いませんか」

背部に括り付けられた巨大な電磁剣は、陽射しを乱反射させて輝いている。確かに帝国に存在する全てのゾイドの中でも最強であることは、他ならぬエレナにも理解できた。

もしかすると杞憂に過ぎないのかも。恩師マイケルが、負けるはずなどないではないか。自分はただ、母の死の直後であったために気落ちして不穏な予測を抱いたにだけではないかと。

「必ず帰ってくるよ、約束して頂けるのですね」

「やっとお顔をあげてくれましたね。勿論です。お約束します。帰ってもう一度、皆様たちと勉強しましょう」

涙を拭うエレナの前で、マイケルは凛々しく敬礼をした。

「マイケル・ホバート技術少佐、ただいまより首都防衛の為に出击します」

「御無事でお帰りください。私の心からのお願いです」

エレナはマイケルの厚い胸に抱きつき、その温もりに顔を埋めた。パイロットスーツに機械油の匂いが染みついていた。

兄の様に慕っていた恩師との、やはりそれが永い別れとなった。

デスファイターが滑るように進撃していく方向を、エレナは視界から消えても暫く見つめていた。そして思った。

父と、伯父ヘリックⅡ世の始めた戦争の原因とは一体何なのだろう。

互いに人民の幸福を得る為に始めたものではなかったのか。

戦争という究極の暴力が生み出した結果は、幸福どころか不幸しか生まれてこない。

この星に飛来した地球という星の人々は、核兵器という最悪の破壊兵器を所有したという。しかし、ここゾイド星では、それを生成する技術も、材料も生み出されることも遂になかった。ただあるのは、より強力なゾイドを大量に生産し、戦うことである。放射能汚染という何千年にもわたる恐ろしい被害はないが、人の命を奪うことにかわりはないだろう。

この戦争が、いかに多くの才能の、伸びるべき運命を滅ぼし去ったか。悔やんでも悔やみきれない。それは帝国が、死竜「デスザウラー」を開発した時に、既に気付いておくべきであったのかもしれない。

彼女が初めてデスザウラーを目にした日を思い出す。マイケルの父、ドン・ホバート博士が実験場に臨席していた。居並ぶ王族や軍の首脳を前に出現した黒い巨大なゾイドは、名前に違わぬ凶悪な容貌をしていた。禍々しいまでに研ぎ澄まされた破壊衝動が、機体の全てから放出されている。凶悪さと美しさが同居していたからと思っていた。敵に勝つには、凶暴さも必要なのだと。

それはこのゾイドの最大の武器を見るまで抱いていた感情である。賞賛と誇りは、一條の光によって奪い取られた。

光芒の中心で輝く青白いチェレンコフ放射光。周囲には荷電粒子発射により原子核構造を破壊されたプラズマが纏い、撃ちだされる粒子の摩擦熱によって熱せられた空気が赤く縁取りを残す。光圧が射線上の気体分子を切り裂いて、野獣の咆哮にも似た轟音を発する。

命中した先に残る物はガラス状に変成した砂状の残滓のみで、全ては無人の荒野と化した。

大口径荷電粒子砲の、恐るべき破壊力だった。

エレナは、これがゾイドの持てる力なのかと身震いした。禁断の力、開いてはならないパンドラの箱を解放してしまつたと。そしてこのゾイドが敗れる時は父の帝国が敗れる時となる事も。

奇しくもエレナの予想は的中した。ゼネバス帝国最強の改造ゾイド、デスファイターの敗北とマイケル技術少佐の戦死（この時点では、帝国側に於いて彼の生死が確認できなかったため）は、孤独な皇帝ゼネバスを打ちのめした。

「兄には妻もいる、子も産まれた。だが、私の周りには誰もいない。たった一人の甥をこの手に抱くことさえできない。マイケル、私には、君が本当の弟の様に思えてならなかったのに」

両手で顔を覆い、慟哭するゼネバスの姿は、まさに帝国の現状そのものであった。ゼネバスを支えるべき妻は無く、友人を失い、娘は自分を拒んでいる。

彼には誰もいなかった。その孤独感が「新しい友人」と称した暗黒軍を招き入れる原因となったのだ。

エレナがその時の父の姿を知るのは、ニカイドス島に立て籠もった後のことであった。最後の決戦にデスザウラーで臨んだ父の姿を遥か遠くで見送った後、彼女は自分が取り返しの付かない仕打ちを父にしていたこと、父を追い詰めたのが娘である自分自身だということに気づき、心底から後悔の念に苛まれるのであった。

14 (2051年)

ニカイドス島に死竜が舞い上がった。

内臓が口から飛び出るような不快感。外の景色が猛烈な渦を巻いて眼下に流れ去って行く。体中の血液が逆流して頭部に流れ込み息苦しい。

嘔吐感と眼球の充血、意識が遠くなる。間接が軋み、金属の引き千切られる音が響く。デスザウラーが悲鳴を上げる。重力を遮断され機体全体に不均等な捻れが生じた巨大ゾイドは、生きたまま八つ裂きにされているのだ。空中で散った残骸が舞っている。あれは腕、あれは脚、あれは、あれは……。

突然、身体に重さの感覚が戻って来た。あの暗黒ゾイドの放った光線の影響が無くなったのだろう。自由落下、というものか。空を飛べない機体で、空から海面に叩きつけられるのだ。

人生が走馬灯の様に流れるというのは本当だった。脳裏に武芸を重んじた父、美しい母、優しくも競い合った兄、愛しい妻と娘、その他無数の人々と戦いの記憶が、自分の野心に満ちた人生を責めるように駆け巡って行った。

首に提げていたペンダントが目まぐるしく回転するコクピットの中で煌めいていた。初めての妻に送ったゼネバスの紋章を象った美しい首飾りであり、エーヴの遺品であった。エレナも同じものを持っていたはずだ。彼の幸せの絶頂期にあった頃の思い出だった。

あつけないものだ。人の最期とはこんなものなのか。虚無の余韻に浸る暇も無く、デスザウラーの胴体に繋がれたままの頭部コクピットごと、灰色の海面に叩きつけられた。

記憶が飛んでいる。全身が痛い。淡い陽の光が見上げる水面から射し込んでいる。皇帝専用の特殊な機密式コクピットが直接の水没を防いだのか。キャノピーの隙間からは次第にひび割れが広がり微細な水滴を滴らせている。

デスザウラーは陸戦ゾイドだ。水中からの脱出機能は備えられていない。一刻も早く脱出しなければ機体ごと圧壊してしまう。

耳が痛い。気圧が上がっているのだ。万力で頭を締め付けられるような痛み。

キャノピーを蹴る。思いきり蹴る。これが生への執着なのか。もう充分生きた。でも、死にたくない。

もう一度蹴る。また蹴る。爪先が痛い。だが、蹴る。

ハッチが開いた。水が鏡面の様に留まっている。内部気圧が高いため一時的に空気と水とが吊り合って、機内に流れ込むのを防いでいたのだ。

それも数秒のこと。怒涛の様に流れ込んだ水流は、機内の残された空気と共に身体ごと機外へ吐き出して行った。

息が続かない。肺が水圧で圧迫される。それでも淡い光を放つ海面は頭上のすぐそこだ。あと少し、あと少し。まだなのか、空気がある場所まで。

ぽつかりと海面に顔が浮かんだ。兄と遠泳を競い合った頃を思い出す。周囲には無数の残骸と機体から流れ出た油膜がガラガラと光っている。浮かんでいる残骸に捉まろうとしても油で滑って捉まりにくい。それでも漸くオイルタンクのフックのような部分に足を引っかけ、立ち泳ぎの姿勢で海面に半身を出すことに成功した。

ニカイドス島が燃えている。時折輝く緑色の光はデッドボードアの重力砲だ。

私の部下が殺されていく。私のゾイドが破壊されていく。私の野心も奪われた。

生き延びてしまったことを心底悔やんだ。呪った。

ただ、一つだけ心残りがある。

島に残してきた愛娘、エレナのことであった。

※

ニカイドス島での戦闘により行方不明となったゼネバス・ムーロアの生存が確認されるまでの約2年の空白期間にも波乱の展開があった。

操縦していた皇帝専用デスザウラーより脱出した彼は、同島の西岸に満身創痍の状態で打ち寄せられた。失血による意識の混濁と低体

温症による身体能力の低下により、冷たい大陸の北で動けないまま4日間意識を失っていたのだ。

彼が生死不明となっている間、暗黒軍はエレナを発見し同島からの撤退を開始すると、撤退の間隙を縫って周辺海域ではゼネバス帝国に所属していた海族の漁民たちが非武装の水上ゾイドで出漁を始めた。

表向きには、春季の潮流の変化に伴い一刻も早く漁業の再開を望んだものと、暗黒軍に拿捕された折に漁民たちは説明していた。だが実際はゼネバス兵生存者を救出する為に行われた自発的な行動であった。

というのも、彼らの居住する中央大陸北西のニカイドス島からウラニスク海沿岸地域には、先の暗黒軍デッドボーターの重力砲で海上に投げ出されたゼネバス軍の兵士が多数漂着していた。その多くは水死していて遺体は痛々しく欠損していたが、2割ほどは生存しており、その場合漁民の手によって手厚く保護され暗黒軍の目の届かない場所で療養された。最期まで勇敢に戦ったゼネバス兵は、旧帝国領の漁民にとっては英雄であり、彼らの名誉にかけても必ず救い出さなければならぬ命と考えたからだ。

海族の漁民タクチエルは、初めて出漁してからまだ半年しか経ていなかった。

出征した父の戦死により、先代からの漁場と退役したブラキオスを改造した漁業用ゾイドを譲り受けたが、父から充分に漁の技を伝えられなかったため、毎日不漁に泣かされていた。追い打ちをかけるように、帝国軍・共和国軍、そして暗黒軍の漁場への侵入である。潮目にある好漁場も、落下したゾイドの破片によって荒らされ、漁獲量は父の代の半分以下に減っていた。

その日彼はいつものように定置網を仕掛けた後、周辺の漁場に漂うゾイドの残骸回収を行っていた。少しでも元の漁場に戻すために、鉤状の金具をワイヤーの先に結び付け、海底に沈んでいる残骸を回収していた。残骸は魚の産卵場所となり好漁場となるといわれるが、ゾイドの装甲板の中には、腐食せずいつまでも鋭利な刃物のまま海底に残り、仕掛けた漁網を引き裂いてしまう場合が往々にしてあったから

だ。

タクチエルは沖合からニカイドス島の沿岸にブラキオスの舳先を向けた。

ふと、島の岩だらけの海岸にくたびれた海草の塊のようなものを見つめる。彼は、海草の塊のようなものに目を凝らした。

他の漁師たちが、何人もの兵士とその何倍もの水死体を連日漁村に運び込んでいるのを見ていた。

海草にはあり得ない、宝石のようなものが光る。彼は身震いした。ゼネバス兵に違いない。水死体か、それとも生きているのだろうか。

岩礁の僅かな足場にブラキオスを上陸させ、横たわる兵士の生死を確認する。顔に深く刻まれた皺に砂が入り込んでいる老兵だった。パイロットスーツの端々が破れ、夥しい傷が露わになっている。首にゼネバスの紋章を象った美しいペンダントを提げ、その輝きがタクチエルを導いたのだ。

死人と同じ顔色だが僅かに息がある。肌が氷の様に冷たい。彼は横たわる長身の兵士をやつとの思いでブラキオスに運び込むと漁村へと急いだ。その兵士の正体が誰であるとも知らずに。

タクチエルが運び込んだ兵士は、すぐさま漁村の集会場の裏の納屋に運び込まれ、駆け付けた村医によって治療が施された。左足が骨折し、全身が細かい傷で覆われていた。骨折の治療と共に傷の化膿を防ぐための消毒が行われ、彼は全身包帯まみれの姿と化した。部屋の中が暖かくなるに伴い、皮膚感覚が戻ってきたのだろうか、時折低く呻き声をあげた。

ぼろぼろの軍服では、階級の判別はできなかつた。それと、これまで見たことの無いゼネバスの紋章のペンダントを持っていたが、その価値がどれ程ものかを知る者はいなかつた。

兵士は記憶が混濁しているらしく、村人への問いかけにも反応は薄い。少なくとも佐官クラスであることは予想されたため、警戒はより慎重になった。

これまでも、村には何度も暗黒軍の部隊がやってきて、脱走もし

くは負傷している兵士がいなかを探していた。その度毎に、診療所からは患者を納屋などに移し、探索の目を逸らしてきた。代わりに水死した死体を見せて、引き取りを願うと、殺し合いに慣れていない暗黒軍兵士は長居もせずに戻って行った。今回も、同様の手段で保護をし、療養が済んでから、彼の処遇を考えればいい。村人たちはそう思っていた。

兵士が意識を取り戻したのは、救出されてから更に4日たってからであった。包帯まみれの右腕が、何かを掴むかのように天井に向かって延ばされているのを、様子を見に来たタクチエルが気付いたのだ。

「兵隊さん、気が付きましたか」

その声に応じて、彼の瞳が開かれる。タクチエルは顔中にも巻かれた包帯の隙間で、瞳孔が一気に収縮するのをはつきりと見ていた。

彼は少しの間首を巡らし、周囲を確認していた。ゆっくりと伸ばした腕を降ろそうとして、頰れるよう右手を倒した。苦痛の為か、呻き声が高まった。驚いたタクチエルは、診療所へ医者を呼びに走っていった。

見覚えのない天井。

潮の香りと、生臭い漁具の匂い。

引き戸の隙間から射し込む光が、ここが衛生施設を完備した、軍の建物ではないことを示していた。

僅かに動く包帯にまみれた右手をかざしながら、彼は考えていた。生き残ってしまったのか。

全身が痛い。どうやら左足は折れているようだ、感覚が鈍い。一体あれからどうなったのだろう。マイケルが戦死してからのことが、よくわからない。一時的な記憶喪失というものか。それにしても、私は誰だったのか。ガイロス？ ヘリツク？ 誰だそいつらは。

まだ、思い浮かぶ人がいる。エーヴ？ マリー？ 思い出せない。もう一人いる、明るい笑顔を湛えた少女だ。私の娘だ。名前は、名前……

「エレナー！」

叫び声と共に、彼は半身を跳ね起したが、その反動でまた床に臥

せってしまった。

「意識が戻ったようですね」

気が付くと、周囲には幾つかの人影が取り囲んでいた。身なりから、海族の漁民であることだけは判ったが、自分の置かれた状況はまだ呑み込めなかった。

「ここはどこだ」と言おうとしていたが、なぜか上擦って声がうまく出ない。彼の脳裏では会話するための文が組み立てられているのに、口をついて言葉が出てこないのだ。

乳児の喃語のようになにか話せない彼に、村医は静かに語った。

「肺を圧迫されて、一時的な発声障害を起こしています。慌てずに療養すればすぐに回復します。安心してください」

強い大陸北部訛りの口調を聞いて、彼はニカイドス島の戦闘までの記憶を一気に取り戻した。そして叫んだ少女の名前が誰であるかということも。見守る漁民たちの様子から、どうやら彼をかつての皇帝と知る者はいない。であれば、体調が回復するまでここで暫く様子を見るのも可能だと思った。添え木を当てられた左足を左手でそつと確認し、緊張していた全身の筋肉の力を抜いて、深く息をつく。引き戸の隙間から、煌めく波濤に浮かび上がって、古ぼけたブラキオスが見えた。

ゾイド、この星になくはない金属生命体。きつとあの機体が、私を助けてくれたのだろう。

久しぶりに味わった人々の温もりに包まれながら、彼は再び眠りについていた。

目を措かずに見舞いに訪れる漁民の会話から、病床でもゼネバス帝国その後の様子が窺われた。ニカイドス島に集められたゼネバス軍残存兵力は現在も暗黒大陸への移送が続けられ、間もなく全兵力が移動を完了するらしいとのことだった。表面上は沈黙を守っているヘリック共和国も、何れはこの場所まで進出してくるに違いない。衝突を避けるためにも、一刻も早く暗黒軍は撤収作業を完了しなければならなかったのに、これほどの時間がかかったのは、大型ゾイドの移送の問題であった。

暗黒軍としては、ゼネバス帝国最強ゾイドであるデスザウラーを、一機でも多く接収したかった。後に様々な改造を施される機体として必要なゾイドであったからだ。但し巨大輸送船ホエールカイザーであっても、デスザウラーの搭載数は限定されていた。頻りに哨戒を繰り返すレイノスを脇目に、薄氷を踏む思いで移送作業を継続していたのだ。

その中で気掛かりな話を漁民から聞いた。彼は敢えて、漁民の訛りの強い言葉が聞き取れないような素振りをして、表情を動かさず床に臥せていた。

「エレナ様が捕まったそうだ」

毛布の下で身を固くした。戦闘の混乱の中、久しく音信が絶えてきた娘の所在が、遠く海を隔てた暗黒大陸に移されたことを初めて知ったのだ。娘の身上を憂い枕元に置かれたペンダントを見つめた。

ガイロス皇帝は、ゼネバス兵を動員するために決してエレナを殺すことはないだろう。しかし、まだ少女といえる娘に、北の大地での生活はあまりに酷い。親の責任を娘に負わせるのは親として受容できることではなかった。なんとしても暗黒大陸に渡り、娘を解放するためにガイロスと交渉しなければならぬ。

漁民が去った後、彼は納屋にあつた作業服を探し出し、引き戸の外へと抜け出した。

納屋にあつた手ごろな棒切れを杖代わりに使ったところ、左足の添え木は完璧に歩行を補った。痛みを感じることは少なく、体中に負っていた傷も老齢ながら普段の鍛錬の賜物なのか、忽ちの内に回復していた。顔の包帯を取り去ると、渚に停泊している旧式なブラキオスを視止めた。

その時タクチエルは、また引き揚げたゾイドの残骸を集めていた。目の前には山と積まれた破片が散らばっている。

漁場の復元は程遠いと実感し、溜息をついた。「今日も不漁だ」と。ふと渚に目をやると、自分のブラキオスに誰かが乗り込もうとしている。曲も強く、父と自分以外には懐かなかつたゾイドだ。慌てて駆け寄っていったものの、人影はブラキオスの長い首に軽く跳ね飛ばさ

れていた。

「大丈夫ですか」

見るとあの老兵だった。あの怪我からこれほど短期間で回復するとは驚異的であった。もしかすると暗黒軍の追っ手を気にして脱走しようとしたのかもしれないと思い、タクチエルは倒れたままの彼に話しかけた。

「兵隊さん、あんたを売るような真似をする村の人間はただの一人もいませんよ。なにせ、皇帝陛下がお亡くなりになり、エレナ様も連れ去られたんだ。身体を大事にしてくださいよ。もしかしたら、ヘリツクの奴らと戦う時、力を貸してもらうかもしれないのだから」

倒れた兵士に手を差し出すと、兵士は予想以上に強い力で握り返してきた。

「頼みがある。私をニカイドス島につれて行ってはくれまいか」

これが怪我人の力、そして敗残の兵かとは思えないほど力強かった。

「無茶を言いますね。戦争は終わっています。兵隊さんみたいな人が行ったら、忽ち捕まって暗黒大陸に連れていかれますよ。ここで大人しく養生してください」

タクチエルの言葉に反し、老兵が思いきり立ち上がった。

「他言無用だ。私がその皇帝ゼネバスだ」

暫しの沈黙。見覚えのある肖像がタクチエルの脳裏を過る。鋭い眼光。^{やっ}？れているのに威厳が残る。嘘をつくにも他に言い方があるはずだ。まさか目の前のこの人物は。

「皇帝……陛下？」

「ゼネバス・ムーロアだ」

バネ仕掛けの様に跳び退くと、タクチエルは砂浜に平伏した。ブラキオスに捉まりながら立ち上がったゼネバスは、近寄って再び身を屈めると、タクチエルに話しかけた。

「助けてくれたこと、改めて礼を言わせてもらおう。敗残の身の上ゆえ、恩賞を渡すこともできず、遺憾に思う。その上危険を冒させるのは気が引けるが、先の私の願いを受け入れてはくれまいか」

恐縮しきっている若者には、ゼネバスの言葉が聞こえていないようだった。それだけ純真なのだろう。繰り返し言葉を重ね問いかけた。

漸く返答を受けたのは、それから数分を経てからだった。

「皇帝陛下さまの御命令であれば従います。ですがあの島にはまだ暗黒軍の連中が残っていて、帝国兵を根こそぎさらっています。皇帝陛下さまのお命が危険でございます。この地で私どもの皇帝さまとしてお残りいただけないのですか」

ゼネバスは、ゆっくりと水平線の先に浮かぶニカイドス島を見つめた。

「気持ちがありますがたく受けよう。だが、私にはまだやらねばならぬ仕事が残っているのだ」

その時また、一隻のホエールカイザーが飛び立っていった。

急がなければなるまい。手にしたペンダントと、灰色の巨鯨型輸送ゾイドを交互に見ながら、彼は水平線の向こう側に横たわっているであろう暗黒の地を睨んでいた。

15 (2051年)

漂着した兵の遺体から借り受けた、尉官の階級章が付いた軍服は、長身で筋肉質のゼネバスには窮屈だった。逞しい頸部にはきつく、襟を閉めることが出来ない。添え木の付いたままの左足も入りきらず、止む無く足の部分を切り裂いて穿いている。迂闊に見つかることの無いように、ゼネバスの紋章を象ったペンダントは添え木の中に埋め込んだ。布生地 of 傷みが著しいため、彼の姿は敗残の兵の出で立ちそのものであった。

あの漁村の純朴な若者のことが、心に刻まれていた。

「ならば私もお供いたします」

説得が叶わないと見たタクチエルは、自らブラキオスでの敵基地突入を申し出てきた。彼が暗黒軍の基地を襲い、その混乱に乗じてゼネバスを捕虜収容所に侵入させようと言うのだ。それは余りにも無謀であった。

「貴殿の気持ち、ありがたく受け取っておく」

ゼネバスは、素朴で未だに自分を皇帝として心を寄せてくれるこの若者を、自分の都合の為にこれ以上巻き込むことが出来なかった。ブラキオスで島まで送り届けてくれること、それだけを彼に願った。彼は不服そうではあったが、尊崇する元皇帝の言葉に逆らうことなど出来ず、素直に舳先をニカイドスに向けてくれた。

ゼネバスは、この青年の恩に報いる為、何か礼ができないかと考えた。しかし、今の身の上では何一つ与えるものなどない。唯一手元に残っているのは、妻エーヴとの思い出もあり、娘エレナとの繋がりを示すゼネバスの紋章だが、それを手放すわけにはいかなかった。聞く所によれば、漁場は残骸で荒らされ、思うように漁ができなくなっているという。ふと小さな悪戯心いたずらが浮かんだ。

いずれ進攻してくるであろう共和国軍に、漁場の残骸を処理してもらえばいい。そのためには一寸した細工が必要だ。彼は一通の手紙を認めた。内容は次のようなものだった。

“この海域には、ゼネバス帝国軍が開発した秘密兵器が沈んでい

る。敵を再度打ち破り、この地に戻ってきたときに引き上げて利用する為、海底の残骸の中に隠しておいた。残骸を全て回収しなければ絶対に見つからないだろう。くれぐれもこの手紙が、敵の手に渡ることのないよう注意せよ。ゼネバス・ムーロア”

意味深に皇帝のサインを残し、流出した機密文章と思わせるように暗号化した。乱数表など無いので、記憶の奥に残っていた、かつて兄と戯れに作った少年時代の暗号を使ったのだ。

解読するのは容易だろう。所詮子供の作ったものだ。

これを兄が見れば、共和国軍は必死になつて海底の残骸を回収する事だろう。この暗号は、兄と彼しか知らないのだから。

「共和国軍がここまで進攻してきたら、この手紙を渡すのだ。あるゼネバス軍の将校の死体から見つかった、とでも言えればいい。きつと貴殿にとって良いことがあるはずだ」

静かに微笑むゼネバスから薄汚れた手紙を押戴いたタクチエルは、有り難くも不思議そうな表情を浮かべていた。

別れ際、その漁民がブラキオスの背中の操舵席から身を乗り出し、いつまでも手を振り続ける姿を思い出し、思わず目頭が熱くなっていた。

こんな自分でも心を寄せてくれる民がいる。この気持ちは何としても次の世代に繋ぎたい。

エレナであれば、必ず成し遂げてくれるだろう。それは親の主観ではなく、皇帝としての客観的な視点から判断できるものだ。娘を救い出したい、その思いが彼を突き動かした。叶うならば、兄ヘリツクの元に身を寄せても構わない。この中央大陸を治める為に、彼女は必要な人材になると確信していた。

タクチエルから伝えられた、島の岸壁に作られた天然の隧道を抜け収容所の内部への侵入に成功した。地元のものしか知らない、下草に覆われた出口を右足で蹴破ると、仮設の収容施設群の裏手の雑木林の中に出た。脚を引き摺りながら地表に出たが、周囲に監視する兵も無く、また戸外に出ているゼネバス兵もいなかった。

人氣が絶えている。

既に大方の兵士たちを收容し、残っているのは搭載数の限られるデスザウラーのみであった。宿舎の窓から、ゼネバスはそつと中の様子を覗いた。部屋の中には、数十人の抑留兵が無気力に座り込んでいる。視線は虚ろで物憂げに沈んでいる。ガイロスの警備兵はここにもいない。彼は思い切つて中に入つて行つた。

彼の姿に注目する兵はいなかった。ただ無言で座り込んでいる。その精気のなさに、ゼネバスは改めて自分の犯した罪を痛感していた。

戦に勝つことだけを目的にしてきた兵士には、敗戦、そして心の支えとして来た皇帝の喪失が無気力を形成してしまつたのだろう。部屋の一画にある壁際に腰を下ろすと、ゼネバスはそのまま眠りにつくような姿勢で、周囲を窺い続けた。

彼の座つた先、一番近い距離に、階級章もないまま俯く兵士がいる。ゼネバスは事態を一刻も知りたいたため、思い切つて小声で話しかけた。

「エレナのごことは判るか」

言つてから、敬称を付けていなかったことに気付いた。不審気に顔を上げたその兵士は、気怠そうに答えた。

「エレナ様ならもう暗黒軍に連れていかれたよ」

既に知っている情報である。ゼネバスは重ねて問いかけた。

「いつ頃かわかるだろうか。それに我々が移送される時期も」

視線を合わせないまま兵士は語つた。

友人らしき兵への拷問に耐え切れず、名乗り出たこと。そのまま早い時期に移送されたであろうこと、そして自分たちが移送されるのも、さほど遠い時期ではないことも。

「あんたはどこの部隊の所属だ」

判り切つている事実を聞き返す老兵に、疑問を抱くのは当然であったが、兵士は直ぐに自分で自分の言葉を遮つた。

「どうでもいいことだな。皇帝は死んだんだ。もう所属部隊など意味のないことだ。今の質問は忘れてくれ」

そしてまた俯いた。

丁度その時、食事の時間らしくゼネバスの座った反対側の宿舍の机に、か細く湯気の立ち上がる幾許かの食料が運び込まれてきた。給仕を担当させられているのも抑留兵らしき者達だった。人数の割には量が少ない。不審に思ったが、その理由はすぐにわかった。

誰も手を付けないのだ。虚無に囚われた人々の群れは、ガイロスから提供される食料など食べる気がしないということだ。数十分後に一切汚れることの無い食器類が回収されていく。

ゼネバスには耐えきれなくなった。娘の救出は必要だが、第一に救うべきは、この多くの抜け殻のような抑留兵であると。暗黒大陸に連れ去られた兵は、ここに残る者達以上に虚無感に苛まれていることだろう。今はこの敗残の姿を隠れ蓑に暗黒大陸に渡り、娘を救い出すと同時に兵達へせめて自分の生存を知らせ、少しでも生への執着を取り戻させることが必要だと痛感した。

彼自身、その決断が矛盾と無謀に満ちていることは承知していた。果たして、長年に亘って戦を続けてしまった元皇帝を受け入れてくれるだろうか。

受け入れたとして、自分の存在が再び戦乱への兵の動員に繋がることにはならないか。

娘を探し出す手立てなどない。いままで自分の周りを取り囲んでいた側近は一人も無く、老いた身体と引き摺る左足を携えて、どこまで使命を果たせるのか。

なにより、これからの移送途中で、自分が元皇帝と察知され、娘と同様に拉致されてしまえば、全ての計画は敢え無く頓挫するだろう。

だが彼は動き出していた。止めることは出来ない。それが彼自身の持つ、最大の能力であったからだ。

「エレナ、待っている。必ずお前を救い出してやる」

左足の添え木に手を当てながら、ゼネバスは呟いた。

程なく、ホエールカイザーによる、最終移送が開始された。

雷雲渦巻くトライアングルダラスの近傍を掠め、次第に弱まる陽の光を感じながら、ゼネバスの乗ったホエールカイザーはアンダー海を渡っていく。眼下に広がる海の色が、暗緑色から灰色へ、そして空も

赤みがかっていった。

寂しい場所だった。暗く冷たい北の大地に閉じ込められた人々の住む場所に向かう中、抑留された兵士達は激しい寂寥感に襲われた。一度渡ったら二度と戻れない。この冷たい場所で、死ぬまで戦わされるのかと。

変化のない水平線を見続けて約半日の行程が経過した。エンジンが音を変え機体が下げ角を取り始めたことで、兵達は漸く絶望的な旅路が終着点を迎えたことを感じ取った。

機体底の小さな窓から、暗黒大陸の地表が現れる。デビルメイズ、ゴツドクライ、ブラツテイゲート。クレバスに沈む地形は、それが地の底まで続くような深い裂け目を刻み、ここが故郷と同じ星かと思えるほどの異様な光景を顕していった。

着陸脚が降ろされたのだろう、ガタガタと機体の底から機械音が響く。鹵獲されたデスザウラー全てが、機体の振動に同調したのか、激しく軋みながら揺れている。装甲板を拘束するチエーンが不快な摩擦音を上げ、今にもデスザウラーごと倒れ込んでくるような不安に襲われる。

ホエールカイザーは意に介さず着陸態勢に入り、僅かの振動を伴っただけで静かに着陸を終えた。エンジンが停止しデスザウラーさえそのまま収まる巨大な格納扉が開かれると、目の前には暗黒大陸に広がる陰鬱な軍事基地が横たわっていた。

風が肌寒く、兵達は皆一様に襟をたて、肩を竦めて格納庫から大地に降り立った。

無数のホエールカイザーが駐機し、それと同様の大きさの巨大な格納庫らしき建物も林立している。首都ダークネスに近い、ここは暗黒軍の一大軍事拠点となっていた。

中央大陸と大きく違うのは、基地の周辺に人々の生活の香りが感じられない事だった。

一部の秘密基地などを除き、通常その周辺には基地で勤務する兵員達の家族や取引をするための商店など、ある程度の賑わいを伴うものだった。しかしここには何も無い。無味乾燥という言葉がそのまま

当てはまる寂しい場所だった。

進路を指し示された兵の群れは、格納棟らしき建物に向かって歩かされていく。ゼネバスにとつて、この光景を見るのは二度目だったが、このような格納棟は以前には存在していなかった。明らかに、D—day以降建造されたものだ。「何のために」。その疑問はすぐに明かされた。

鹵獲されたゾイド群が整然と並んでいる。真つ先に目につくのは、かつて動く要塞と称された機体、暗黒軍によつて強化改造されたダークホーンであった。

既に量産体制へと移行しており、次々と配備が開始されていた。そしてその傍らには、新たに生産されるのではなく、暗黒軍仕様の機体の改造を施し強化されつつあるアイアンコングと、異様なまでに頭部の肥大化したデスザウラーがあつた。

コアに緑の燐光を放つデイオハリコングが注入され、休眠状態にも関わらず悶え苦しむように低い咆哮を続けている。コアとの適合性を無視して出力上昇を強制的に行っていることがわかる。兵達は目を背けた。

暗黒軍側が旧ゼネバス軍ゾイドの接收と改造に力点を置いたのは、使い慣れた機体をゼネバス兵に操縦させることにより、予想される共和国軍との緒戦を有利に運ばせようとしたからだ。後発のダークホーンが、デッドボーダーの生産数を上回ったこともその証明といえるだろう。同様の理由でデスザウラーやアイアンコングが改造の対象になつていたことは言うまでもない。改造の過程で失敗し、廃棄されたゾイドも数多い。ギルベイダーやガンギャラドが本格的な量産体制に移行しても、圧倒的にゼネバス兵を戦線に投入し続けた暗黒軍に於いては、最後までデスザウラーとアンアンコングが改造ゾイドの素材として利用され続けた。

改造用の格納棟を抜け、仮設の無数の宿舍が並ぶ場所に着いた。所属の確認を事務的に行われた後、人数ごとに宛がわれたナンバーの宿舍に入るよう指示された。

ゼネバスは、正体を明かすわけにも行かず、咄嗟に思い浮かんだ偽

名を記入した。

“ガンビーノ”と。

暗黒軍が最重視したのはゾイドのパイロットであった。操縦していたゾイドの機種により振り分けられ、それによって宿舎のランクも変わっていくようだった。

ゼネバスは敢えて、歩兵の少尉として申告をした。監察官は露骨に嫌な表情をして、歩兵に宛がわれる宿舎を指示した。それは古びた建材で作られた、仮設宿舎としてもいまにも壊れてしまいそうな建物だった。中に入れば、所々から隙間風が吹き込んでいた。三段に作り付けられた簡易ベッドが左右に二列、合計6人の収容だが、中央の床にもう一人が横たわること7人を収容することになっていた。

ベッドは固く、薄い毛布が3枚しかない。暗い灯りと中央のスピーカーのランプだけが部屋を照らしていた。

屈辱的であった。抑留されてきた兵士達にとっての苦惱は計り知れない。

長旅の疲れも重なったのか、誰しも無言で寢床に潜り込んだ。時折乾いた咳と、鼻をすする音だけが響いていた。

ゼネバスにとって注目もされない一兵卒として潜り込めたことは、エレナの居場所を探り当てるために有利に働くことと思えた。

いずれ必ず機会が巡って来る。そしてその望みは、呆気なく実現へと向かっていった。

移送の翌日のことである。宿舎から出て、抑留された兵士達は収容所の中央広場に集められた、幽鬼のように気力を失っている兵に向かって、監視塔に取り付けられたスピーカーから仰々しい口調での放送が流れ始めた。

「勇敢なるゼネバス帝国の同胞諸君に朗報である。

貴公らの為に、今は亡き貴国皇帝の御息女にして、玉容と呼び傲わされし姫君、エレナ姫がこの施設を訪問なされることとなった。姫様に於かれては、父の仇を取るためにもヘリック軍との徹底抗戦を主張されておられる。このニクスの地に身を寄せ、健気にも諸君らの為にいらして頂いた。詳細な時刻は追って通達するが、明日、姫様が御出

でになること、まずはお知らせしておこう」

水を打ったように静まり返っていた兵が、放送が終了した瞬間一斉に歓喜の声を上げた。

エレナ様が、姫様が御越しになられる！ 俺達の為に、ここに来てくれる！ 暗く打ち沈んでいた兵士たちの、一転して喜びに溢れる姿があった。

人は誰かに出会うだけで、ここまで変わることが出来ることに、ゼネバスは驚愕していた。そして娘がどれほど兵士達に慕われていたことも。

自分には及ばないと思った。やはり世代は変わりゆくものなのだと。

兄ヘリックも子どもを授かった。兄の性格からして、嘗ての父ヘリックI世の犯した過ちを繰り返さないように、恐らくその子に政治も兵士の道も進ませることはないだろう。

それでも自分の帝国は兄の国とは違う。親の罪を娘に負わせるのは忍びないが、いまゼネバスの民を纏められるのはエレナしかない。

沸き立つ兵士たちの姿を見ながら、ゼネバスは、明日再会できるであらう娘の姿を思い描いていた。

翌日エレナは現れなかった。

通達では、姫は急病のため急遽訪問を取りやめることになったとだけ、連絡が流れた。

エレナの来訪を心待ちにしていた兵士たちの落胆の様子は痛々しかった。それはゼネバスとて同じである。彼らは知らない。エレナが前日「父はガイロスに殺されました」と叫んだ事で暴動に発展し、一時巡幸を見合わせる事になったのを。

急病とは何なのか、果たしてエレナ姫は無事なのか。様々な憶測が飛び交い、大きな期待を破られた反動で、兵達は一層無気力になって行く。そしてその虚無感が、あらぬ方向に向かって暴走しようとする様を、ゼネバスは目の当たりにしていた。

「暴動だ」

一人の兵が言った。誰も口にしようとしなかった言葉が湧き上がったのだ。

丸腰の敗残兵に、暴動を起こしたところで勝機はない。だが彼らは自暴自棄的な感情に支配されていた。

「死んでも構わない」

それもまた言うてはならない、そして誰もが思っていた禁断の言葉であった。

ゼネバスは、このままでは全員が殺戮されることを予測した。拉致されたとはいえ、かつては自分を慕い自分の為に戦った仲間である。皇帝の地位など意味はない。もし自分が名乗り出れば、あるいはエレナと同じように兵達にも生きる希望を与えられるかもしれない。

もしかしたら敗戦の責任を問われ兵たちに責められ、彼自身が殺されてしまう危険性もあった。

それでもいい。自分一人の犠牲で兵の不満が解消されるのであれば。

これまで決して肌身離さずに携えてきたゼネバスの紋章が、今こそ役に立つときだった。

「エーヴ、私はエレナを守れないかも知れぬ。その時は死した後、死の国で詫びさせてもらおう……だがなエーヴ。お前は天国に行っているだろうが、私は地獄行きだ。死後に出会うことも叶わぬかも知れぬがな」

彼はもう一つ決心していた。ガイロス皇帝と再び見え願いを通すとしたら、ただ一つを望むつもりだった。

彼がガイロスの下に身を寄せる代わりに、エレナを解放することを承認してほしい。人質となるのは、彼だけで充分であることを強調し、この大陸の何処かに囚われているエレナを自由にする事だけを望もうと。

「看守棟に行くてくる」

ゼネバスはぼろぼろの軍服と、左足を曳きずりながら収容所の最高責任者のいる建物に向かって歩き出して行った。

(2052―2054)

16 (2052年)

中央大陸以上に起伏に富んだ地形の暗黒大陸に対し、共和国軍が空からの進攻を考えサラマンダーの改装に着目するのは極自然な流れであった。『鋼鉄の翼』を電磁フロートシステムで強化し、空戦性能を更に高めたサラマンダーF2、通称『ファイティングファルコン』が、黄金の翼をエントランス湾の共和国軍前線基地に並べたのは、第二次上陸部隊が到達してから半年が経過した豪雨の日であった。

降り注ぐ雨滴の中に居並ぶサラマンダーを部屋の窓越しに見上げながら、エレナは幼い日に祖父から受け取った小さな玩具を思い出していた。

中央山脈を流れ落ちるミストラルを浴びながら、青空に翼を広げて野山を駆け巡ったあの日。いつも傍らにいた祖父と母もこの世を去り、長閑な^{のどか}辺境の村も戦火に巻き込まれたとの噂を聞いた。村人たちは、そしてエメラルドグリーンの瞳を持つ幼馴染みの少女は健在なのだろうか。

F2の青いキャノピーの端から、雨が筋となって頭部側面を流れ落ちていく。後に判明するが、この時暗黒大陸に投入されたサラマンダーF2は、全機が未帰還となる。

視線を部屋の中に戻すと、整然と分類されてはいるが大量の物で溢れ返っていた。古びた書物、分類番号の貼られた石片、束ねられた無数の写真、そしてベッド。サラマンダーが見下ろす窓の下の僅かな空間にコーヒーマシンが置かれ、ここが生活空間であることを示している。

マイケルの部屋もこんな風だったと、エレナは思い返していた。違ふのは本の背表紙である。技術書ではなく歴史書や地図、気象学や言語学の書物など、手にして開いてみても理解できないものが殆どだ。

屋根を打つ雨音だけが響く部屋の中、エレナはキャロラインと共に、この部屋の主が父の手掛かりを持って帰ることを待っていた。

雨具を着ながらも、横殴りの雨の為に全身びしょ濡れとなったシユウが戻ったのは数時間の後、豪雨が辛うじて小降りになった頃であった。

「僕が外に出る度に雨が降ってくる」

雨雲の切れ目から、微かに星が瞬く。季節は巡り、再び闇に閉ざされる冬が迫って来ている。闇夜を悩ましげに見上げながらシユウは呟いた。

「この時期にこの地域で、こんな雨が降るなんて……」

「父の所在はわかったのですか」

雨具を脱ぎながら不平を零すシユウの言葉が終わらない内に、エレナは開口一番に問いかけた。シユウは頻りに言葉を選んでいるようであった。その様子を見たエレナは問いを重ねた。

「わかっていることだけで結構です。もし、シユテルマーの情報が偽物で、父が死んでしまっているのであれば、甘んじて現実を受け入れる覚悟はできています。お願いです、本当のことを話してください」

視線を逸らしていたシユウも、意を決してエレナに向き直った。

「では、わかった事だけ申し上げます。なお僕には大統領からの特命が与えられているので、最高機密の情報も含んでいます。姫様たちを信頼してのことなので、仮に今後僕以外の人間と接触する機会があったとしても、くれぐれも他言無用でお願いします」

彼のいつになく真剣な表情を前にして、二人は無言で頷いた。

「ゼネバス皇帝生存の情報は、兄である大統領閣下本人が確認したそうです」

その言葉を聞いた瞬間、エレナから喜びに満ちた安堵の溜息が漏れた。

お父さんが、生きていた！

少女時代に抱いた素直な父への思いが蘇っていた。その時のエレナにとって、ゼネバスは皇帝などではなく、中央山脈の麓で待ち焦がれた愛おしい父親であった。

ところが安堵するエレナの姿を見ても、シユウの表情は曇りがちだった。

「嫌喜びをさせてしまつて申し訳ないのですが、この話には続きがあるのです。

実は、ゼネバス皇帝生存を裏付けたのは、あなたの父君と大統領、つまり弟から兄へ、暗黒帝国への警戒を促す最期のメッセージが発見されたからなのです」

「最期のメッセージ？」

エレナが言葉を繰り返す。安堵の感情が暗転した。

「暗黒軍の裏切りの経緯に加え、敵が開発中の最終兵器と称されるものを一刻も早く破壊するようにと記されていたそうです。長い間戦い続けて来た、弟から兄への懇願の様な文章が認められていたのです……」

父が懇願？

エレナの心にも、深い疑念が湧き上がった。

あの父に限って、誰かに懇願などするのだろうか。ましてやヘリツクⅡ世に。

情報が漠然とし過ぎている。これではまるで、暗黒大陸に共和国を呼び寄せているようだ。敢えて戦端を開かせ、双方に消耗戦を強いらせるかのように。命と引き換えに残したメッセージにしては、余りに稚拙とは思えなかった。

「機密事項なので、詳細は内務省からも発表されていないのですが、文面からはゼネバス皇帝が最期に残したものと推測されただけで、生存の確証は何もないのです」

エレナの表情を窺いつつ、次第に伏し目がちになりながら、シユウは語尾を小声にして話を終えた。

キャロラインは、ただ黙ってエレナの後ろ姿を見つめている。

三人の間に沈黙が流れ、屋根を打つ激しい雨音だけが部屋の中に響いていた。

沈黙を最初に破ったのは、シユウだった。

「これは取引とお考えください」

エレナは当惑した。取引とは一体何なのか。

「あの時、皆様たちは僕のガンブラスターをダークホーンから救つて

くれました。その時操縦していた元ゼネバス兵の、シユテルマーさん、ですよ、彼と会話しましたね。なんでも構いません。彼は何か言っていますか。特にその『最終兵器』について」

「あの状況で、そんな話が出るわけじゃないでしょう」

キャロラインが割って入った。微かに目じりに涙を溜めたエレナに寄り添いながら、厳しい視線をシユウに向けた。

「失礼は承知しています。僕もお姉さまの話は嘘ではないと思います。ですが共和国軍は今、少しでも情報が欲しいのです。第二次上陸部隊を派遣してから既に半年が経過し、エントランス湾を中心に暗黒大陸各地の秘密工場らしき場所を探索しているにも関わらず、『最終兵器』の手掛かりが得られないのです。もしそれが存在しないのであれば、先のあなたの父君の暗号文も偽物となり、ゼネバス皇帝生存の証拠も消滅します。だからどうか、どんなことでもいいのです。思い出すことはありませんか」

エレナは傍らのキャロラインと顔を見合わせた。彼女も黙って首を左右に振るだけだった。シユウの質問に、有効な記憶など一つもなかった。

「本当に、何も……」

シユウはエレナの言葉の途中で頷き、石片標本の並べられた棚の前の椅子に腰を下ろした。

「これも極秘情報ですから、他言無用ですよ。実は最終兵器に関連のあると思われる証拠が確認されています」

棚の石片を一つ摘むと、シユウは視線をそれに落としつつ話を続けた。

「軍のシールドライガーが、暗黒軍に鹵獲されたアイアンコングと交戦の際、いままで見たことも無い光輪によって一撃で切断されたそうです。恐らく最終兵器に搭載する実験兵器ではなかったかと司令部で判断しています。最終兵器は、確実に開発されているのです」

エレナにとって複雑な感情が渦巻いた。

最終兵器が存在すれば、ゼネバスの生存の可能性も高まる。しかしそれが完成することは、命懸けで危機を伝えた父の意志を無駄にする

こととなる。謎の光輪は、最終兵器の存在を裏付けているようであったが、父の生存の確証を得るには程遠いものであった。

「僕はこれからサラマンダーで航空哨戒をしながら、大陸内部まで進出します。チャンス少佐には申し訳ないのですが、内緒で直接大統領閣下にお二人の事をお伝えしました。」

喜んでいましたよ。すぐにでも中央大陸に渡る手配をすると言っていました。次の便のタートルシップで、デルポイのバレシア市に戻り、そこからは大統領閣下が直々にお出迎えなされるそうです。ご安心ください」

「姫様、これで中央大陸に帰れますね」

キャロラインがエレナの手を取り微笑んだが、エレナの中には割り切れない思いが燻っていた。

「シユウ博士」

「シユウで結構です、エレナ様」

「では、私もエレナで結構です」

「姫様、それは」

「そうです。あまり軽々しく本名を名乗られてはまずいでしょう。何か別の名前が必要ですね……そうだ、ルリーズというのはいかですか」

シユウは石片から視線を上げて、閃いたように言った。

ルリーズ。悪くない名だ。エレナは二回、口に出して繰り返した。しかし彼はなぜその名前を不意に思いついたのかが不思議であり、怪訝そうな表情を浮かべるエレナに、その疑問に応じるかのようにシユウは続けた。

「いえ、ゾイド星で発掘された約320万年前の化石人類の女性に付けられた名称なのですが……」

「姫様に原始人の名前を紹介したの！」

キャロラインが怒り出し、思わずエレナは宥めに入って行った。宥めながらしかし、彼女はある決意を固めていた。

ルリーズ。ありふれた名前。原始人にさえ与えられるほどの。彼らしいセンスだ。

そう、ありふれた名前の方が都合がいい。これからの事を考えればなおさらだろう。

「シユウ、お願いです。私を暗黒大陸に残してください。父を助けたのです」

石片を掴んだまま身を竦めているシユウと、それに掴み儘ろうとしているキャロラインが同時に振り向く。エレナは続けた。

「父がまだこの暗黒大陸にいるかもしれないのです。父を残し、自分だけ中央大陸に戻ることはできません。もし今デルポイに渡って伯父に会えたとしても、必ず後悔に苛まれることでしょう。せめてもう少し、父の手掛かりを探ってみたいのです」

その決断が、どれほど身勝手な願いであるかは知っていた。恐らく父がこの場にいたとしても、彼女の願いを拒むであろうことまで含めて。

繰り返し言葉を変えて彼女の決意を翻そうとした二人だが、努力は徒労に終わった。説得に疲れ根負けしたシユウは半ば尊敬するような表情を浮かべ、キャロラインは早々に説得を諦めていた。

「わかりました。エレナ様、いや、ルイーズ。お二人を正式に僕の調査団に加えるよう、これから大統領に根回しします。何れにしても調査は継続するつもりでしたからね」

シユウは窓の外の、再び激しさを増した雨の様子を見つめた。

「お気付きですか、この異常な天候を。水蒸気の蒸散の少ない高緯度地域なのにまるで熱帯の様な豪雨が降っています。明らかに気流が変化している。テレコネクションによるブロッキング現象が起きているに違いないのです。」

幸い、首都天文台にパブロ・ディエゴという友人がいました。変わった人で、進化生物学を専攻したのに何の因果か星を見ているのです。彼が送ってくれたデータによると、ここ数年で大気圏に突入する流星の数が跳ね上がっているのです」

二人は、シユウに変わり者呼ばわりされる人物がいることにも驚いたが、確かに彼の語ることは現在の天候に照らし合わせても納得ができました。

「このところ流星雨の出現が頻繁になっているのも気掛かりです。

確証はまだありませんが、宇宙規模での何かが動き出していて、その影響で中央大陸の崩壊が助長されているのではないかと思えるのです」

激しさを増して降り続く雨を、エレナは不吉な予感と共に見つめていた。その予感が的中する前に、何としてでも父との再会を果たし、救い出す。

先ほどの件を蒸し返して言い合いを続ける二人が、今は何よりも心強く思えた。

シュテルマーは去って行った。でも私は一人ぼっちではない。例え敵となっていた伯父ヘリックⅡ世の力を借りても、必ず父を救い出すのだと。

（お父さん、待っていてください。必ず私があなたを救い出します）

息で曇った窓ガラスに、彼女はその細い指先で、小さなゼネバスの紋章を描いていた。

同時刻、彼女の知る二人の人物が、彼女と同じように暗黒大陸に降り続く豪雨を見つめていた。

灰色のカーテンとなって辺り一面を覆い尽くす雨の中、灯された明かりによつて辛うじてそこに存在することがわかる程度の、小さな建物であった。周囲に巡らされた鉄条網には、軍の施設を示す「フンスリュック基地」という案内板が掲げられている。

「シュテルマー大尉殿、雨がそんなに珍しいですか」

建物の中、香りを樂しむように口元に白磁のティーカップを近づけ、長椅子に深々と凭れた暗黒軍の佐官と、少し結露した窓を前に立つシュテルマーとがいた。

雨など珍しくも無い。

彼は生存が確認されたという元皇帝ゼネバスとの面会が、未だに許されないことが恨めしかった。

ゼネバスは首都ダークネスに移送されたと伝えられ、一部の旧ゼネバス兵達が実際に元皇帝と謁見し、感涙に咽びながら宿敵ヘリック共和国との戦闘継続を誓ってきたという話を聞いていた。それがガイ

ロス側の流したデマではないことは確かだろう。

彼のゼネバスとの謁見を妨げていた理由に、キシウムビタ城防衛の為の独断先行による命令違反が挙げられていた。エレナ一人を守るために率いていた精鋭ダークホーン部隊を壊滅させ、自機さえも破壊してしまった。そんな彼を迂闊にゼネバスに謁見させれば、どの様な事態が発生するかわからない。ガイロス側にとっては、彼の父ガンビーノとゼネバスとの確執など知らず、ただ単に忠実な親衛隊の生き残りとしてしか認識していなかったのだ。

そして彼自身もまた、この状況を甘んじて受け入れていた。ガイロス側の疑念を払拭する為にも、戦場で結果を出す他にない。新型ゾイドの投入時には様々なトラブルが付き物であるが、敢えて初陣の危険を冒すことで暗黒軍内部での立場を回復させようとしたのだった。それがいずれ元皇帝ゼネバスとの再会に繋がるものと信じて。

地表に僅かに現れた監視棟の真下、地下のフンスリュック大空洞を利用した空間には広大な秘密工場が築かれ、完成を目前にした「最終兵器」が、今まさにコアに命の火を灯されようとしていた。それは彼が待ち望んだもの、求めていたゾイドであった。ゼネバスの生存が確実であればそれでいい。自分が行うべきことは他にもある。地下工場の様子を映し出すモニターに目をやりながら再び窓の外を眺めていた。

「余程私と顔を合わせるのが嫌いとお見受けする。結構。憎まれるのには慣れております」

「ヴァーノン中佐、他意は有りません。自分はただ一刻も早く空に飛び立ちたいだけです」

感情の込められない事務的な返答だった。背後の佐官は気にもかげずに薄笑いを浮かべていた。だが次に投げかけられた話題は、悪意に満ちていた。

「大尉殿もいかがですか。この紅茶、なかなかのもので。

中央大陸は恵まれていますね。我々ニクスの地では、このような贅沢品、滅多に手に入る物ではありません。キシウムビタが破られ、残された姫様の置き土産を押収しなければ味わうこともできなかつた代

物です」

シユテルマーは思わず振り向いた。

「城の一件については、貴公も不運だったことは認めましょう。まさか間に合うとは」

振り向いた視線が偶然重なり、ヴァーノンは咄嗟に視線を逸らす。「失敬、此方の話です。それよりも貴殿は姫様とは少なからずの因縁がある身でしょう。久しぶりに姫様と同じものを味わうのも一興かと」

佐官が手にしている器が、想いを寄せていた女性のものであったこと知らされた。見覚えがある。白磁の器は可憐で美しく、そして儂げで、訣別したそのひとの面影を何処かに宿しているようだ。しかし、いまそれを手にしている者を見るのは辛い。動揺を表情に出さないように必死に堪えた。

今は遠慮しておきます、と答えるのがやっとだった。

見るとその佐官は、薄いファイルを手にして彼を凝視していた。

「残念ですね。まあいいでしょう。今日は茶を飲むために来てもらったのではないのですから。実は面白い情報を手に入れたのですよ。

『最終兵器』をお披露目するには、絶好のイベントとなるものを」

ファイルを掲げながら、彼は自慢げに語り出した。

「先週、成層圏付近を飛行していた我が軍のブラックシャトルから、第三衛星軌道の更に内側に、直径数百m程の岩塊が非常にゆっくりとした速度で、ゾイド星を周回しているとの報告を受けました。このところの流星群の中で、地表に落下し損ねた岩塊が、偶然ゾイド星の重力圏に捉まっていたようです」

片手でファイルを開きながら、ヴァーノンはあるページを指さした。

「この岩塊、重力的に非常に不安定で、少しの刺激でたちまち隕石と化して地表に落下させることが可能だそうです」

彼は紅茶を飲み干した。

「これを敵の橋頭堡に叩き付ける。その混乱に乗じ『最終兵器』で蹂躪する。面白いプランだとは思いませんか」

最大のプロパガンダとなることは理解できた。共和国にとっては衝撃だろう。だがこの男は、自分たちの住む大地に隕石を落とそうとしているのだ。

「小賢しいエントランス基地など消滅させてやりましょう。奴らに訪れるのは、天より降り注ぐ地獄の業火と、巨大な黒い翼となるのです」

ヴァーノンは、まだ笑っていた。それも心底楽しそうに。

ギルベイダーの完成は間近であった。

漆黒の星空が広がる眼下には、薄い大気のヴェールを纏った惑星が横たわっていた。水平線が緩やかな弧を描きコバルトブルーに照り返している。二つ目の月が遠くに浮かび、地表とそれとの見かけ上の中間地点に歪いびつな形をした岩塊が漂っていた。

真つ黒な飛行体が接近している。デイオハリコンの燐光が、それが暗黒軍の放った機体であることを示していた。天空に溶け込んだ暗黒の飛行体は無音の宇宙空間で背部のウエポンベイを開いた。せり上がる巨大な電磁砲が徐々に射角を取りながら砲身を岩塊へと向けていく。

閃光が奔る。岩塊に命中し小爆発が起こった。爆発によって僅かに軌道が変化する。一度ではない。岩塊に何度も閃光が突き刺さっていた。

変化は微小なもので、時速数千kmの速度で互いに成層圏上空を移動しているとは想像もできない。眼下は煌めく赤道付近の海から暗雲渦巻く磁気嵐帯へ、そして白い大陸氷河に覆われた極冠地域へ。再び回帰線を経て輝く海上へ。僅か数時間で惑星を周回する軌道上で、作業は着実に進行していった。

照射する電磁砲の出力調整と方位と発射角の指示が機内に飛び交う。目まぐるしく変化する数値を読み取りながら、火器管制の兵士が報告を続けている。

「地上部隊との連絡を受けました。計画通り落下予想時刻に攻撃を開始するそうです」

機内には緊張に満ちた時間が流れていた。出力を上げすぎれば、岩塊は軌道から飛び出して宇宙へと去っていくだろう。だが不足であれば、味方の基地へ落下する危険性もある。任務はあまりに重要で、圧迫される船内宇宙服の中、更に呼吸は息苦しくなっていた。

「軌道の大气濃度急上昇、予想外です。拡散により光圧不足、十分な加速を与えられません」

ブラックシャトル『チャレンジャー』の艇長は臍ほぞを噛んだ。今更いまさら出

力不足など補いきれない。この任務が、暗黒軍にとって重要なデモンストラーションとなることを繰り返し強調された。計画が失敗すれば、自分はおろかシャトル搭乗員全員の粛清さえ考えられる。危険を冒してでも照射を続けなければならない。

「機体を岩塊に接近させ攻撃を継続する」

搭乗員4名が一齐に振り向いた。重力の不安定な軌道上で岩塊に接近することがどれ程危険を伴うか皆理解していたが異論を唱える者は居なかった。艇長と同様この作戦行動の失敗の結果がどうなるかを知っていたからだ。

操縦席の正面に岩塊が視界一杯に迫ってくる。大気の薄い空間では距離感が掴めず、今にも手が届きそうな錯覚に陥った。

「照射、継続します」

閃光がまた奔る。音もなく火花の散る岩塊。僅かに揺れた。ほぼ同速の相対速度の最中、標的の岩塊が微妙に傾くのを感じた。

「岩塊、落下軌道に入りました……馬鹿な、緊急事態です。この機体に向かって進んできます！」

観測員が叫ぶ。

「モーター全噴射、至急落下軌道から脱出、衝突を回避」

「慣性制御できません、機体強度も持ちません」

「構わん、全噴射、亀裂が入っても回避しろ」

「間に合いません。岩塊、相対速度を上げ接近してきます。距離10万！」

「衝突予想時間は」

「あと10秒」

「間に合わない……すまん、みんな。自分のミスだ」

艇長が最期の言葉を告げたとき、岩塊は4人の命を乗せたブラックシャトル『チャレンジャー』を機体ごと飲み込んで惑星表面上へと落下の角度を取っていた。爆発は無音の空間で美しい輝きを放っていた。

漆黒の星空に、白い尾を曳く流星が落ちて行った。

それは最初、天空に現れた白い点であった。

今まで降り注いでいた、緑やオレンジ色の輝きを放つ他の流星群とは明らかに違っている。岩塊は地上十数万kmの衛星軌道を外れ、放物線を描きながら弧の傾きを次第に下げていった。大気との摩擦熱によつて燃え上がり、落下時の姿はゾイド星各地で目撃された。赤道から極冠へ、そしてまた赤道へ。歪な岩塊は炎の塊となつて、地表目掛けて加速を付けていく。途中岩塊は崩壊し、数千の炎の雨となつて共に落下を続けた。

落下の進入角がほぼ30度に近づいたところ、その落下予想地点が海岸沿いに近づいてきた。

無数のゾイドが立ち並ぶ前線基地。中央には円盤型の輸送艇が浮遊している。その中心目掛けて、天空から多数の炎の雨を伴った巨大な火の玉が降り注いだのだった。

エントランス湾共和国前線基地は阿鼻叫喚の地獄絵図と化した。

タートルシップが燃えている。落下地点から巨大な火柱が噴き上がった。爆発の中心地にいた兵士は自分が何故死んでしまったのかも知ることなく消滅した。ここでは全ての物質が高熱により溶解し、溶鉱炉のように燃え上がっている。連鎖的に燃料倉庫が爆発を繰り返す。高熱によつて暴走したゾイドが次々と自爆していく。

基地駐屯のロジャース少佐は、辛うじて回避したカノンフォートを操りながら呆然と基地の様子を眺めていた。

「まさに地獄絵だぜ、こいつは……」

彼は、本当の地獄とは現世にあったことを知る。

硝煙の中、炎の壁の背後から不気味な影が火の粉を纏いながら次第に形を成してく。

オレンジ色から黄色へ、そして赤へ。熱波が去り火の粉が拭い去られたとき、巨大な黒い翼が広がっていた。

真っ赤な光輪が立続けに放たれる。ゴジュラス、ガンブラスター、ウルトラザウルスが真っ二つになる。

狂喜に満ちた雄叫びがエントランス湾に鳴り響いた。

暗黒軍「最終兵器」ギルベイダー降臨の刻であった。

共和国軍によると落下した隕石の内部からギルベイダーが出現し

たとの記録が多数存在するが、それが暗黒軍によって描かれた最高のシナリオであった事まで言及している資料は少ない。爆発の炎の中から攻撃時刻を合わせてフンスリュック基地より飛来し攻撃を行ったために、あたかも隕石内部から出現したかのような印象を与えたのだ。

“演出”は最高の効果を残した。共和国軍に施設の損害以上の大きな衝撃を与えたからだ。だが命を懸けてその“演出”を行ったブラックシャトル『チャレンジャー』の犠牲は隠蔽された。

暗黒軍側では『チャレンジャー』は共和国軍に拿捕され、ギルベイダーの攻撃により撃墜されたとの記録に書き換えられているが、事実上記の如く隕石落下の際に殉職していたのである。

なんというゾイドだ。出力を最大にしているのに未だにコアには充分な余力がある。

コクピットのシュテルマーは驚愕していた。デスザウラーやデスイリアンなどと比較にならない強力なゾイドだった。厳しい自然環境の下で生きてきた素体ゾイドの優秀さとゼネバス帝国から奪取した様々な技術とが結実し、それまでの巨大ゾイドとは一線を画す性能を示していた。機体の装甲・機動性・破壊力、どれひとつ取っても圧倒的で、ウルトラザウルスは愚かマッドサンダー、デスザウラーさえ対抗できないことがすぐにわかった。

自分が望んでいたものが遂に手に入った。ところがあれほど待ち焦がれた機体であったのに、眼下に広がる炎の帯を見下ろしながら彼は激しい寂寥感に苛まれていた。

俺は誰を守るといふのだ。

皇帝陛下には未だ謁見が叶わず、想いを寄せていた人も既に海の彼方に去った事だろう。

肉親を持たず、戦友たちも全て失った。

敵を恐怖と絶望のどん底に叩き落としたところで自分には何も無い。

皮肉にも基地の爆発から逃れることの出来た大型飛行ゾイドがギルベイダーの背後に現れた時、反射的に彼の思考は切り替わり機械の

様に正確に戦闘態勢へと移行していた。

黄金の翼を煌めかせたサラマンダーF2が3機、暗黒大陸の哨戒から帰還したところに基地の炎上を確認したのだ。復讐に燃えるサラマンダーは猛然と襲いかかってきた。

所詮旧世代の機体だ。演習にもならない。

ビームスマツシャーを立て続けに発射すると、数十秒も経たないうちに撃墜していた。

モニターに次の攻撃目標が表示された。受信確認の返信をするとシユテルマーは南の大陸に進路を向けた。

「これよりヘリック共和国首都への渡洋爆撃を敢行する。後続部隊は本機に続け」

黒い翼が翻った。コクピットのキャノピー越しに、光るギルベイダーの眼が赤く浮かび上がっていた。

18 (2053年)

共和国首都攻撃に参加したギルベイダーは先行生産型(尾部の切断翼が一枚)2機と、通常型(切断翼が2枚)4機。加えて護衛に35機のレドラーが随伴した。

低空進入と呼ばれる飛行法で共和国レーダー網を掻い潜り首都への直接攻撃を可能にしたのは共和国軍本土防衛部隊の油断でもあった。この惑星には存在しない核のような大量破壊兵器でもない限り場当たりの奇襲攻撃で大きな被害が発生することは通常ない。

漸く飛行編隊を編成できる程度の生産数しか揃えられなかったギルベイダーの攻撃で共和国側に約8万人の死者を出す被害を及ぼした理由には、このゾイドの性能を最大限に発揮するための残酷で巧妙な攻撃方法が採用されていたからであった。

(1) 先行するパスファインダー機(投下誘導機・シユテルマーが操縦)が超低空で首都の中心地区に侵入し多数の閃光弾を含むクラスター爆弾を投下する。

(2) その炎をマーカーとして各機は約半径14kmの距離を保って旋回を開始する。この時ギルベイダーの頸部前面に装備されたニードルガンが連続発射され、旋回する円周に沿って地上構造物を破壊、直径28kmの瓦礫の帯が描かれる。

(3) 十分に破壊された家屋や建築物は、続いて同機体の胸部に装備されたプラズマ粒子砲によって一斉攻撃を開始される。10,000℃以上の高熱粒子によって点火された炎の円はその円周内部からの避難民の脱出を完全に閉ざす。

(4) ギルベイダーは同心円状に攻撃範囲を広げ炎の帯の直径を約30kmにまで拡大。共和国首都中心部の平均気温を15℃以上一気に上昇させた。

丸い炎の檻に閉じ込められた首都住民は、急激な気温変化に汗ばみながらも直接攻撃に移らない。『最終兵器』に疑問を抱いた。

暑いと言っても決して耐えられない暑さではない。ギルベイダー6機では都市部全てを焼き尽くすほどの火器は搭載できない。或い

は共和国国民に対しての示威行為としての攻撃で本格的な破壊は目的ではないのかとも思えた。

しかし、その戦慄すべき攻撃方法はすぐに彼らに示された。

暗黒軍は既に成層圏のブラックシャトルによる観測によって共和国首都上空にブロッキング現象により発生した勢力の強い寒気団が居座っていることを察知していた。通常であれば強風を伴う一過性の降雨で終わるものだが、プラズマ粒子砲によって描かれた超高熱の巨大な炎の円は首都上空の寒気団との極端な気温差により劇的な気圧変化をもたらし、寒気団の中心を刺激して首都に猛烈な突風を招き入れたのだった。

物が燃えるには酸素が必要である。

吹き込んだ突風は、共和国首都という巨大な鉦^{たたら}への強力な鞆^{ふいこ}として、大量の酸素を送り込んだ。

強風に煽られた炎の帯が渦を描いて次第に円の中心部に向かって収束していく。幾つかの炎の帯がやがて見上げるような竜巻となり、火災旋風となって首都中心を呑み込んだ。この時の火災旋風は瞬間的に秒速200mに達し、その温度も1,000〜4,000℃の超高温となって殆どの物質を融解させた。

高層建築物などの火災旋風発生障害物が残っている場合にのみビームスマツシャーが撃ち込まれ、炎の渦の燃えるに任せられた。

限られた機数で大規模破壊を行うための、自然現象を利用した徹底的な殺戮である。それは今までガイロス皇帝が他の民族殲滅の際に多用した方法であった。気温が低く可燃性の建材があまり利用されていない暗黒大陸の住居の焼き討ちには、季節によって吹き荒れる突風を利用した焦土作戦が行われて来た。同様の方法を規模を大きくして中央大陸で実施しただけである。ただし、その効果は暗黒大陸と比べて桁違いに拡大した。

天空にも届く地獄の業火が首都を覆い尽くす。人為的に発生された火災旋風は上昇気流に乗って高度4,000mにも達し、この炎の柱は首都から約600km離れたクロケット砦や、約700km離れたマウントアーサーからも確認されたという。

地表の人々は、家屋の中に避難していた者を含めて舞い上がったガラス片や金属の残骸によつて家屋ごと切断され、肉塊となつて宙に浮いた。浮き上がった肉塊も数秒を経ずして炎の渦の中で燃え上がり消滅した。また、切断されずとも生きたまま宙に舞い上がり人型をしたまま一瞬のうちに黒焦げとなり消滅した者も多々目撃されている。燃え上がったのは生身の人体だけではない。首都防衛にあたつていたベアフアイター、アロザウラー、ガンブラスターなどもほぼ同様に燃え尽きて行つた。

三日後、かつて首都の中心部だった場所に残つたのは直径33kmに亘つて黒々と描かれた巨大な同心円状の破壊の跡であつた。

大統領府は同心円の僅かに外側に位置し、不幸中の幸いとして辛うじて延焼を免れていた。もしシユテルマーの最初の攻撃でマーカーとなるクラスター爆弾の閃光位置が少しでもずれていれば、大統領本人を含めた共和国の政治機能も破壊されヘリック共和国も崩壊していたかもしれない。

首都攻撃に参加した全てのギルベイダーがフンスリュック基地に帰還した。

コクピットから降り立つたシユテルマーは、耐Gスーツのヘルメットを脱ぐと同時に地面に叩き付けた。

「なぜレドラーを出撃させた」

出迎えた整備兵に不満をぶつけたところで事態が戻らないことは知っている。だが、わかっているにもかかわらず許せないほど激昂していた。

巨人機ギルベイダーであれば、トライアングルダラスを迂回しても共和国首都までの往復の航続距離に充分な余裕があつた。一方航続距離の短いレドラーを中央大陸に到達させるためには暗黒大陸東部ヴァーヌ平野の南方基地から発進させた上で空中集合させ、なおかつ片道燃料と呼ばれる帰還の見込みのない攻撃隊として出撃させる方法を取る他ない。そこまで護衛に拘つたのは、共和国が再配備したサラマンダーF2への警戒があつたからだ。

今回の首都攻撃作戦に際し出撃するギルベイダーは必要最低限の数であり、一機でも欠ければ火災旋風を発生させることが出来ない可

性能もあつた。装甲や攻撃力には絶対の自信はあつたものの、万が一共和国側ゾイドの捨て身の攻撃にあえば撃墜されるとも限らない。攻撃を成功させるためにも壁となつて護衛する飛行ゾイドが必要とされ、その為にレドラーは出撃した。そしてそのコクピットに座つていたのは祖国を追われた同胞、旧ゼネバス兵達であつたのだ。

シユテルマーは護衛など必要としていなかった。自惚れなどではなく、自分の操縦技術と機体性能があれば容易に成功できる作戦と考へていた。

まるで捨石同然、これでは犬死ではないか。

プラズマ粒子砲での攻撃直前に、ガンブラスターやサラマンダーによつてギルベイダーの盾となつて次々と撃墜されていく真つ赤なレドラーの炎の帯が、地上の円状の炎と重なつて目に焼き付いていた。またも仲間を犠牲にして自分が生き残っている。その巡り合せに生き残つた自分自身が許せず、やり場のない怒りを爆発させていた。

レドラーからの最期の通信を幾つも受信していた。

“ゼネバス・ムーロア皇帝陛下、並びにゼネバス帝国に栄光あれ”
嘗ての忠臣の生き残りを未だに死へ誘う元皇帝ゼネバス。彼には理解が出来なかつた。一刻も早く元皇帝に謁見し、その真意を問いた
だす必要がある。自分の父のような犠牲者をこれ以上出さないた
めにも。

ふと見上げたギルベイダーの口元が、僅かに上がったように見え
た。

“まだ破壊が足りない”と呟くかのよう

19 (2053年)

切断された黄金の翼が地表に突き刺さっていた。

瓦礫の破片一つ一つがまだ熱く、破壊の跡からは未だに硝煙が燻っている。残骸を取り除くには危険過ぎて、地下施設に生存者がいても容易に救出は叶わない状況であった。

隕石落下の爆発とギルベイダーによる攻撃によってエントランス湾前線基地は完全に破壊され、その機能も停止していた。

エレナは廃墟と化した前線基地をただ茫然と眺めていた。

基地の方角から火柱が噴き上がり、空を覆い隠す巨大な黒い翼が現れた。基地から離れた宿舎から二人が駆けつけた時には、既にその黒いゾイドが破壊の限りを尽くしていた。

丁度調査部隊を率いて暗黒大陸内陸を哨戒していたシユウのサラマンダーF2が帰投していた。本隊とは別行動をとっていたため隕石落下に巻き込まれることがなかったのだ。一面炎の海の上、黄金の翼を煌めかせた3機のサラマンダーが空中戦に突入したが決着は呆気ないままでにってしまった。

ギルベイダーの翼と背中から繰り出されたビームスマツシャーがサラマンダーを切り裂き、地上に叩き墜とした。

「シユウ！」

キャロラインが悲鳴を上げた。落下地点より小さな炎が噴き上がりサラマンダーの機体ごと呑み込む。切断された黄金の翼が遅れて地上に突き刺さった。

既にエントランス基地はギルベイダーにとって価値の無いものとなっていた。周囲を睥睨すると、水平線に貼りつく極地の陽射しを受けながら、黒い翼は狂気の叫び声を轟かし南に向けて灰色の海の上を這うように飛び去っていった。

炎の壁が全てを焼き尽くすまで、二人には成す術も無かった。

鎮火したのはそれから20時間後であった。

破壊を免れた一台の通信機器から、雑音が混じる放送が間断なく流れている。トライアングルダラスを経て伝わってくる情報は、ギルベ

イダーによる共和国首都空襲の惨状であった。本土通信員の悲痛な叫びだけが響き、死傷者は数え切れず軍の様子も伺えない。技術力で圧倒していると自負していたヘリック共和国軍に言い逃れようも無い敗北の現実が突き付けられた。

エレナとキャロラインは、鎮火したエントランス湾上陸基地で救出された兵士達の治療にあたっていた。

攻撃が行われる前、まだエントランス湾に安穩とした雰囲気蔓延していた頃、基地では「ルリーズ」の名前を得たエレナは注目の的であった。

今まで遺跡と地層と岩石にしか目を向けなかった調査隊責任者のシユウが突如二人の若い女性を伴って自分の宿舎に戻ってきたということもあるが、何より彼女の伏し難い美しさが話題の中心となったからだ。

彼女らは表向きガイロス帝国政治犯の家族として保護を求めて共和国側に亡命してきたことになっていた。姪の立場を慮って正体を明かすことの無いようにとの大統領の通達があったからだ。キシワムビタ城に囚われ暗黒大陸の風土に馴染んでいた彼女達は、暗黒大陸出身の人間として周囲に疑念を抱かれることなく亡命者の娘とその侍女という立場で基地外縁の女性兵士用の宿舎に保護されることになる。

予測された事態であるが、兵士の中にはかつてゼネバス帝国のプロパガンダで表出したエレナと「ルリーズ」がよく似ていると言う者もあった。

だが、ゼネバス帝国が滅亡しニカイドス島からキシワムビタ城に囚われている間の彼女の変容は劇的であった。

父ゼネバスと反目していた頃の思春期特有の硝子細工ガラスのような儂げな美しさは、積み重ねられる数々の試練により彼女の品位を研ぎ澄ダイヤモンドした。気が付けばその数年間で彼女の魅力は磨き抜かれた金剛石のように輝くようになっていた。

仮に少女時代のエレナを「ルリーズ」の隣に並べてみてもその面影は殆ど見られないだろう。新たな名前を得たことも大きな節目と

なっていた。彼女は心身ともに成長していたのだ。

付け加えると「バレツタ」キャララインは、ゾイド用の搭乗服を普段から着用することにより優雅な侍女としての姿を覆い隠し、優秀な女兵士——むしろこの姿の方が本来のものなのだが——として常にルイズⅡエレナに付き従った。シユウは敢えて情報を攪乱させるために「キャララインは共和国が任命した女性護衛官である」という噂を流し、彼女の素性も煙に巻いた。

共和国軍前線基地に溶け込んだ二人の女性はあくまで調査部隊のシユウに雇われている地形アドバイザーとして残留し、ゼネバスの行方を追った。

そして何度となく溜息をついた。数日措きに帰還する調査隊のサラマンダーからは、生存しているはずの父の情報がもたらされることになかったのだ。

陰鬱とした気持ちに陥ることを避ける為、その度毎に自分を励ましつつ次の情報を待っていた。

気分を紛らわすため、エレナはシユウの私室から幾つかの古代遺跡関係の資料を持ち出した。彼の専門の地球物理学の書物はあまりに専門的過ぎ、到底理解できなかつたからでもある。

彼女が興味を持ったのは古代ゾイド文明であった。未だ充分に解析されていない暗黒大陸奥地のトロローヤ遺跡には現ゾイド人とは別種の古代ゾイド文明の手掛かりが残されていると言われ、蓋し暗黒大陸こそが本来のゾイド人の発祥の地という説があることを知った。シユウを初めとして中央大陸の考古学研究者たちが挙つて暗黒大陸研究を試みたのも同様の理由からである。これとは別にニクスとデルポイ両大陸の西方に横たわるエウロペ、別称西方大陸にも数多くの遺跡が残り、一部は未だ機能が停止せずに文明の残滓を砂漠の底に隠しているということも知った。

彼女はかつて恩師マイケルから全ての知識を授けられたと思っていたが、シユウの所有していた資料はマイケルのそれとは全く違っていた。まだまだ自分の知らないことがあるのを知りなぜか嬉しくなつた。

広い世界に目を向けたい。もつともつと知識の幅を広げていきたい。そしてこれ以上の戦争の惨禍を繰り返さないような互いに互いを理解する世界が築けないのだろうかと思つた。父と伯父とが戦争に及んだのは互いの理解が足らなかつたから。そして世界に目を向ければ北の大地にもう一つの脅威があつたことなどすぐにわかつたはずだ。視野狭窄に陥り身内の諍いを繰り返すうちに、もつと大切なものを見失う悲劇はもう二度と起きて欲しくはない。もし父と再会が叶うのであれば父に言つてやりたい。

「お父さんは頭が硬いのよ」。

そしてどんなことをしても伯父と父とを仲直りさせてやるのだと。

しかし。

そんな資料も石片も焼き尽くし、ギルベイダーは飛び去つて行つた。

焼け跡に覆い被さるよう到大粒の雨がまた降り出した。舞い上がった粉塵が雨粒を真つ黒に染めている。

天空に雷鳴が轟き、あたかも暗黒の地に踏み入れた共和国軍の過ちを責め立てるかのような豪雨だつた。

かつて“ミンクス”に所属し応急処置の技術も習得していたキャロラインは適確に救出作業の介助を行つた。

「ルイーズ様はお戻りください。ここは危険です」

開かれた装甲式コクピットからキャロラインが叫んでいる。あれからそのまま与えられたカノンフォートを操り、前足や角を使って撤去可能な残骸を取り除いていたのだ。

だがそう言われて惨状をただ見過ごすことなどできず、エレナは少しでも多くの命を救うことを願ひ残骸の撤去作業現場から離れ救出された怪我人の治療を行つている仮設テントへと向かう。テント内で治療の指揮を行つている軍医らしき人物に直接協力を申し出た。

「あんたがルイーズさんかい。わかつた、誰でもいいんだ。手伝つてくれ」

セーラブと名乗つた軍医の背後には、泥と油、そして血に塗れた兵

士がベッドの上で無数に横たわっている。激痛が奔るのか終始奇声を上げてもがき苦しんでいる。右の大腿部に黒焦げになって倒れたゾイドの装甲板の一部が突き刺さり血が流れ続けている。かつてゼネバス兵の野戦病院を訪問したこともあるが直接治療したことなど勿論ない。当惑して立っている彼女に容赦なくセーラブの怒号が飛んだ。

「押さえて」

二の腕までを覆う厚手の手袋を嵌めさせられると、別の女性看護師に腕を掴まれ兵士の右肩と右腕の上に両手を載せて押さえつけるように言われる。兵士の口に布切れが詰め込まれた。背後には鋸を構えたセーラブ軍医が立っていた。

切断手術、手術と言うには余りに粗雑な処置だが、同様の治療を彼女はそれから数時間継続させられた。

最初の内は気付かなかつたのだが、治療を受ける重症者の身体の傷口近くには一様に奇妙な記号が付けられている。記号は4種類あり、エレナが処置を施しているのは主にその内の2種類だった。見ると看護兵が横たわる多くの傷病者の合間を縫いながら、次々とその記号を書いている。

何を示すかはすぐにわかった。重症群、中等症群、軽傷群、そして死亡群に分類し、最優先で治療に当たる必要があるものと、蘇生可能性のないものとの区分をしていたのだ。残骸の撤去が終わり傍らに戻ったキャロラインから「トリアージ」という用語を初めて聞いた。

「大丈夫ですよ」

ぼろぼろになった兵士を笑顔で勇気付けながら握った手のもう一方では死亡群を示す記号を書く。内臓のはみ出た人。両足の吹き飛んだ人。顔の半分が焼け爛れ、脳漿が包帯から滲みだしている人。エレナに充てられた仕事は、付けられた記号に従い救える命には応急処置を、救えない命には小さな注射を打ち、永遠の眠りにつかせることだった。

血塗れの両手で無数の返り血を浴びながら、エレナは治療と永遠の安らぎを与える残酷な作業とを続けた。汚れた彼女の両頬に白い二

筋の涙の跡が描かれていた。

小型ゾイド用のサーボモーターに腰掛けたまま、その兵士は虚ろな眼でテントの底から流れ落ちる雨垂れを見つめていた。左の二の腕から先が無い。切断された傷口に巻かれた包帯は赤黒く滲んで血液が滴り落ちている。失血による意識障害か、或いは既に死んでいるのか、半身を豪雨に洗われながらも身動き一つしない。エレナが真横から近づいても視線は瞬きもせず雨滴に固定されたままだった。首から提げた認識票に名前が記されている。額の裂傷から流れ出た血糊がチェーン伝いにこびり付き、判読は困難だったが辛うじて読み取れる名前を呼びかけた。

「リチャードさん、そこでは濡れてしまいます。テントの奥に入った方がいいですよ」

振り向くことは期待していなかった。降り続く雨滴と一緒に、その兵士の生命も暗黒大陸の大地に吸い込まれてしまっているかのようであったからだ。

彼女の予想に反し、兵士はゆっくりと首を回して頷いた。テントの支柱に捉まって立ち上がろうとする。足元がふらつき倒れ込んだ。

彼は反射的に左腕を伸ばし、彼女に縋ろうとした。したのだが、切断された腕の先端は虚しく空を向いただけで、差し伸べるエレナの細い腕を掴むこともなくそのまま仰向けに倒れ込んだ。激しい雨垂れが身体を打つ。黒い雨の飛沫の中、泥水の中でのたうつ瀕死のウオディックの様に彼は泥まみれとなって藻掻いていた。

立ち上がることなど無いと思い込んでいた彼女は、そのあまりに悲惨な姿に思わず自分の濡れることも厭わずに彼を支えた。北の大地の激しい雨が血の足りない抜け殻のような彼の身体を芯から冷やし、恰も氷の塊のような肉体を彼女は抱きかかえた。

死亡群を示すトリアージの記号が書かれていたが、抱かれた右手の力強さはまだ彼が死から遠い位置に居ることを推測させた。例え一人でも助けられるものならば誰でもいい。彼女は書かれた記号が油混じりの水溜りの中で消え失せることを確認した上で、再び軍医の元に運び込んだ。

「重症者です。緊急処置をお願いします」

横たわるベッドの上、彼は彼女を見つめ微笑んだ。

「ありがとう」

辛うじてそれだけ聞き取れたのであった。

それから更に数時間後、エレナはキャロラインと背中合わせになり、泥の様に疲れ果てて治療所の裏手で仮眠を取っていた。

「御無事ですか」

「キャロルと同じぐらい……」

「疲れている」という言葉が続かない。最早感情の入り込む隙間も無い程、機械的に怪我人たちを処理してきた。ふと、キャロラインが背中越しに上を向く。

「あいつも、死んだのかな」

エレナに答えることは出来ず、また、キャロラインも答えることなど望んではいなかった。

(お父さん、一体どこに居るの)

黒い雨は、父への思いさえも掻き消すように激しく降り注いでいた。

※

幾分やつれてはいたが、見紛うことも無いかつての皇帝の姿がそこにあつた。

跪くシュテルマーを前に一瞬懐かしそうな眼をして俯いた。

「シュテルマー大尉、ゼネバス・ムーロアとの謁見を許す。顔を上げるように」

仮面の奥と同時に、背後のスピーカーから機械的に処理された声が響く。

ガイロス皇帝に謁見する事も、彼にとっては初めてであった。

不気味、というよりは滑稽な姿だと感じていた。目の前にいる人物が、果たして本物のガイロス皇帝であるという保証はどこにもない。いや、むしろ自分の様な命令違反を繰り返す兵士の前には、決して本人は現れないだろうと思った。

常に仮面を被り決して正体を見せない恐怖の皇帝は、実はただ猜疑

心が強すぎる小心者ではないか。その証拠に隣に立つ戦士ゼネバスの方が仮面の人物よりも何倍も偉大に見えたからだ。

ただしゼネバスも老いていた。かつて自分の父ガンビーノを死に追いやった頃の猛々しさは失われ、故郷を追われた老人の様に瞳には寂しさが宿っていた。

「ゼネバス閣下、お懐かしゅうございます。元親衛隊にして閣下の御慈愛の下過ごしてまいりましたシュテルマーです。御存命の事を知りつつも我が身の不徳の致すところにより、今日まで御尊顔を拝することが出来ませんでした。重ね重ねの御無礼お許しください」

ゼネバスは彼の言葉を一つ一つ噛みしめるように聞いていた。そして少しして口を開いた。

「貴君のことは聞いている。暗黒軍にとっても、数々の戦績を残しているそうだな。我らゼネバス兵の誇りだ。これからも精進し、ガイロス皇帝陛下の為に戦ってくれ」

「勿体無いお言葉です。今後も最大限の努力を続けて行く所存です」
それが、ガイロス皇帝の前で取り繕っているゼネバスの皮肉であることは容易に理解できた。父の件は別として、ゼネバスにはどこかしら子供のような遊び心に溢れていることも知っていた。それが彼の魅力であり、多くの人々を惹きつけてきたカリスマ性であることもシュテルマーにはわかっていたからだ。言葉の裏側に隠れている言葉、「何れ時と場所を選び、詳細に語りたい」という意味を理解した。

目の前の仮面の人物はやはり無能な替え玉だろう。二人のゼネバス軍人の様子をうかがい知ることが出来ないようであった。

「このたび共和国首都攻撃を成功させた巨大ゾイド、ギルベイダーの初号機を御披露したく思います。ガイロス皇帝陛下もよろしければご覧にならませんか」

仮面の裏側で、当惑する替え玉の表情が手に取るように判る。独断での行動が、替え玉である人物への粛清にも繋がるため軽々しく行動ができないのだ。

「余は政務がある」

それ以上の言葉は無かった。

「ギルベイダー、大いに興味がある。皇帝陛下、是非ともガイロス帝国の戦力、シユテルマー大尉に伴い拝見したい。お許し願えるか」

ゼネバスの言葉が幾分高圧的になっていくことに気付き愉快になつた。

「良きに計らえ」

まさに有り合せの言葉を放つ替え玉が、むしろ哀れになつた。シユテルマーは再び跪くと、皮肉を込めた最大限の礼をして玉座を後にした。

ウイングバリアー装備の為、機体に傷跡は残っていない。

弱々しい陽射しを受けながら、ギルベイダーは不敵な姿を晒していた。

「エレナ様にお会いしました。キシワムビタ城を脱出した後、共和国軍の調査隊と行動を共にしているようです」

彼が最初に発した言葉だつた。周囲には強い風が舞い、二人の会話を聞きとることは困難だつた。

「残念ながらその後の消息は掴めていません。自分の周囲を煩く嗅ぎまわる人物がひとりいるのです」

「情報はそれだけで充分だ。」

私の娘だ、簡単に死んだりはしない。お前も知っているだろう」

ゼネバスが少し笑つた。やはり気概は衰えていないようだ。

「閣下にお伺いしたいのです。我々ゼネバスの兵は、いつまでガイロスの為に戦わなければならぬのでしょうか」

ギルベイダーを見上げるゼネバスの背後から、シユテルマーはその背中を真っ直ぐに見つめ問いかけた。答えは期待していなかった。強風に掻き消され聞こえないかもしれない。また、答えが存在しないかもしれないからだ。

背中を向けたまま、ゼネバスは自分自身にも言い聞かせるように語つた。

「私は取引をしてしまった。エレナを救う代償に、私の兵士と、そして兄の国とを」

シユテルマーはゼネバスの前に回つて駆け寄つた。

「エレナ様を救う代償とは一体何のことですか。また、ヘリック共和国とは」

ゼネバスの表情は苦悶に満ちていた。

「お前が独断先行し、キシワムビタでエレナを逃したことは知っている。だがあれば共和国軍の調査隊が接近していることを察知した上での措置だったのだ。」

私がニカイドスからお前の父の名を騙り抑留施設に収容された後、この、ゼネバスの紋章を翳して正体を明かした」

ゼネバスは首から下げた金色の首飾りを手にした。

「私は娘を救う代償に、全面的なガイロスへの協力を誓った。継承権の無い娘と元皇帝本人とでは、やはり私の方が価値があると見做してくれたのだよ」

その笑顔も歪んでいた。

「ガイロス皇帝は城の警備を解くことだけ承認した。エレナが共和国の手にわたっても、新たな人質が得られたのだから。そして私は、我が帝国に関する一切の情報提供を強いられた。ニカイドスから運ばれた重要機密書類の中にあつた設計図、かつてマイケル・ホバートが設計し、開発を提案した対ウルトラザウルス用巨大飛行ゾイド——結局資産と期間の関係で、採用されたのはデスバードであつたが——そのパズワードを明かし、開発したゾイドが、これなのだ」

「ギルベイダーが、マイケル先生の……」

待つてください。確かこのゾイドの基本設計は、我が帝国の亡命技師であるケネス・オールドヴァインと伺っておりますが」

「あんな三下の技術将校など、マイケルの足元にも及ばない。大方自分の手柄としてガイロスに取り入つたのだろう。私は正面から兄との決着をつけるつもりだった。戦術上必要とはいえ、共和国の民を必要以上に殺害するためにマイケルもこのゾイドを設計したわけではない。私は兄をも裏切つたのだ」

共和国首都爆撃の先頭を切つたのは他ならぬシユテルマーであった。彼にしてみても、マーカーとして撃ち込んだクラスター爆弾がその後どの様な戦略で利用されるか充分知らされていなかった。結果

として共和国に大打撃を与え、こうしてゼネバスとの謁見を許されたのだが、彼にしてもやはり代償は大きかった。

ゼネバスは空を見上げた。いつしかまた大粒の雨が降り始めていた。

「不思議なのだよ。無責任かもしれないがこの戦いが間もなく終わるような気がしてならない」

雨を避けるため小走りでギルベイダーの翼の下へと移る。

「地上の争いなど洗い流す、いや、浄化するといった方がいいかもしれないが、遥かに大規模な事件が起こるような気がする。この空の彼方からやってくる何かが」

エレナが予兆を感じたと同じように、その父ゼネバスも、迫りくる宇宙からの危機を察知していた。それは彼らが持つ血が、危機を知らせ合っていたのかもしれない。

広げた黒い翼の下、降り注ぐ雨粒を見つめながら二人は佇んでいた。

暗黒大陸から、今は星空を臨むことは出来なかった。

20 (2053年)

死を目前にして歯止めを失った人の力は想像を超えている。止血処置を行おうとしても、周囲から無数の掌が伸びて治療の邪魔をする。エレナの腕には、厚手の布地の衣服の上から付けられた爪の跡が赤黒く無数に残っていた。払い退けても払い退けても這い寄る傷病者に、弱者への労りというまともな感覚さえも麻痺していく。

サラマンダーF2の翼は未だに突き刺さったままだった。地上を離れるにつれてそれは小さな墓標と化し、やがては眼下に広がる雲海に埋もれて行った。

(お父さん。少しだけここを離れます。必ず戻ります。待っていてください)

重症者達の間断ない呼び声に、包帯や水筒、消毒薬に鎮静剤を抱えた看護兵が駆け回っている。その殆どが四肢の何れかを欠損するか、或いは眼球を包帯で覆われていた。奇声を発し続けている者がいる。彫刻の様に一切の動きをしない者もいる。辛うじて命を長らえても、手足を失い視覚や聴覚を奪われ心を失った兵士たちの、ここはまるで生きる者達の棺の様であった。機体の底から低い機械の音が響いてくる。気流によって激しく揺さぶられることが続き、応急処置の機材が甲高い音をたてていた。

エレナは横たわる兵士の水差しを支え目の前の医療器材のチェック表を確認していた。

偶然、機体の窓から緑色の尾を曳く流星が流れるのが見えた。空気の薄い上空では地上の混乱など無関係に星々がより一層輝いて見える。

「ルリーズ、鎮静剤のアンプル三つ、大至急」

セーラブ軍医の呼びかけに、彼女は直ぐに薬箱を抱えて駆け寄って行った。

彼女が中央大陸への帰還を決意したのは、二日前のことであった。

落下した隕石の中から現れた黒い翼への恐怖と基地崩壊に伴う心身への衝撃がASD(急性ストレス障害)患者を大量に生み出した。

フラッシュバックする記憶にパニックとなる兵士が続出し、基地内部は軍隊組織の体を成さなくなっていた。首都機能を一時的にセシリア市に移したヘリック共和国は、旧ゼネバス帝国領内に駐留していた部隊を引き抜きエントランス湾に派遣、戦闘不能となり治療が必要と認められる兵士達との交代を通過した。共和国軍内部でも決して兵力の工面は楽ではなかったが、暗黒大陸に仲間を見捨てるような事態だけは避けたかった。政府への信頼にも関わる事であり、後方で武器を握る部隊にとってもギルベイダーの渡洋爆撃によって何処も同じ状況にあることが奇しくも判明してしまったからだ。

派遣された上陸母艦タートルシップがエントランス湾に到着すると、新品のゾイド群と入れ替わりに幽鬼のような傷病兵が乗り込んだ。無数の担架に担がれ視線の定まらない怪我人の群れを見て、上陸した部隊は改めてここが戦闘の最前線であることに戦慄していた。

エレナにとってこの帰還は本来の目的とは異なっていた。伯父に会って自分を含めて父ゼネバスの救出を願うことではなく、あくまで看護の為、兵士達の付添として中央大陸の治療機関に随伴するつもりであった。理屈より行動が先に立つのはやはり父譲りである。彼女は横たわる何人もの患者の手を握り、声をかけ、勇気付けながら、中央大陸までの長い旅路を過ごしていた。

「少しお休みになってください」

キャロラインが近寄ってくる。彼女の瞳も充血していた。何日もゆっくりと眠っていないことがわかる。

「キャロルこそ休んでください。トビチョフまでまだ距離があります。2時間後に必ず交代しますから」

その言葉にキャロラインは素直に頷いた。自分の説得に応じる彼女ではないことは知っていたし、自分自身も心身ともに疲れ切っていたこともある。

「では、失礼します」

機体奥の仮眠室に向かうと、周囲は再び意味の繋がらない呻き声に支配されていた。

やがて機体の窓から陽射しが流れ込んできた。広がる雲海の波頭

から太陽光が見えてきたのだ。光が温かい。紛れも無く故郷ふるさとの陽射しだった。眼下に広がる中央山脈の雪を抱いた峰々が、白く眩しく彼女の瞳に飛び込んできた。

意識が幾分正常に戻っている兵士達の中にも、次第に小さな歓声を上げる者が現れた。故郷の大地に戻ったことが、彼らの精神に良い兆しを与えているのだろう。目的地トビチョフまでまだ数時間ある。彼女は壁に凭れ掛かると、窓の外を流れる金色の雲の端を見つめながら暫し微睡の中に身を委ねて行った。

「ガニメデ市ですか」

タートルシツプは、ダリウス市での補給を終えると再び新たな目的地を示された。

艦長からの、半ば予測していたその言葉を聞くと、エレナを含め随伴してきた看護兵及び状況を理解できるだけの精神の残っている傷病兵達は一斉に落胆の溜息をついていた。

最初の目的地であるトビチョフ市に到着後、同市内の医療施設への傷病兵受け入れを要求したが、この街が旧帝国領であったこともあり緊急処置を要する患者を除き市側からの事実上の受け入れ拒否をされてしまった。

本来であれば共和国政府が傷病兵引き渡しの手続きを完了させ、例え旧帝国領であっても優先的に患者の受け入れを認めさせなければならぬ。ところが首都機能の麻痺により手続が遅れ、トビチョフ市側にも何の連絡も伝えられておらず受け入れ態勢が全く取られていなかったのだ。首都に問い合わせてみたところで通信は繋がらず、数時間後に漸く繋がった通信も担当者不明の回答しか得られない。巨大な輸送艦が何日も空港に停泊することが煩わしくなった市側では、極力早急な退去を要求する始末であった。

的を射ない発言を繰り返す政府の担当官と、露骨に退去を示す市の代表との協議により、次の目的地として指定された場所は更に中央大陸を南下したダリウス市であった。タートルシツプは止む無くその指示に従い、一路ダリウスに向け出航した。

一日半の行程を経て、漸く到着した工業都市ダリウスはかつてデスザウラー初号機を建造した町であり充分な医療施設も揃っていた。ところがこの都市でも感情的にまだ共和国兵を受け入れる素地が整っておらず、政府の指示が伝わっていないことを理由にして、またも一切の患者の受け入れを拒否した。

たらいまわしに旧帝国領を移動しなければならぬのは、このタートルシツプがバレシア市から回航されてきた整備不良の機体であり、航続距離も不十分で飛行高度を上げることができず、中央山脈を越える飛行能力が失われていたからであった。このまま受け入れを拒否され続ければ、最悪の場合大陸南部のプロレシオ海まで南下し共和国領のクーパー湾に行くことを想定しなければならぬ。共和国政府の混乱は理解できたが移送される兵士達が哀れであった。

ダリウス市で申し訳程度の燃料と食料の補給が完了すると、再びタートルシツプは飛び立った。次の目的地に指定されたのが、旧帝国首都にも近い分共和国の統治も比較的進んでいるガニメデ市であった。その街までまた2日の行程である。これまで5人の兵士が息絶えていた。飛行の経過がもどかしく、エレナは共和国の組織も十分に機能しないことを実感していた。

誰の為の政府であり、誰の為の政治なのか。苦しんでいる人々を見捨てるのが政治ならば、そんなものは政治ではない。

怒りはなかった。組織の問題であれば感情をぶつけても解決にはならない。如何に効果的に問題を処理するかが政府に課せられた対応力である。もし自分がその立場に立ったならば絶対に同じことはない。

誰に語るのではなく、彼女の中に政治に対しての意識が芽生えていたのである。

ようやく到着したガニメデ市は、温暖な気候に恵まれた美しい都市であった。夕暮れの中を長い影を曳くタートルシツプが入港する。機体が夕日に映えてオレンジ色に輝く。暗黒大陸の季節は既に冬期に移行していたのに、この中央大陸南部の町は未だ夏の名残を思わせる温かい風が優しく渡り、誰が植えたのかも知らない赤や黄色の花が

飛行場の端の蔓棚に咲いていた。

彼女の待ち望んでいた故郷の景色が一面に広がっていた。少女時代この町に一度だけ訪れたことがある。あのときはマイケルも一緒だった事を思い出した。戦災を免れた美しい街並みは昔のまままで、タートルシップから降り立ったときなぜか瞳に涙が溢れていた。

(お父さんと、もう一度一緒に見たかった)

結果的に父を見捨てるように戻ってきてしまった。そして先に故郷の地を踏み締めた自分に後ろめたさを感じていた。

それでも必ず再び暗黒大陸に戻り、再会を果たすと心に決めていた。

今回の帰国は、帰還ではなく、付き添いなのだ。

そう言い聞かせると、エレナは深呼吸をして患者の移送作業にとりかかって行った。

幸いガニメデ市では患者の受け入れを拒否されることはなかった。着陸したタートルシップに横付けされたグスタフのコンテナの中に傷病兵が移送されていく。初めて見る旧帝国の街並みに、物珍しげに眼を見張る兵もいたが、大部分の兵士達は何の感情も示さずにただ淡々と医療施設へ移送されていった。

「宜しくお願いします」

「お疲れ様でした。後は私たちにお任せください」

到着したガニメデの医療施設の看護師が力強く答える。その言葉に随伴してきた看護師の全員が肩から大きな荷物を降ろしたような感慨に満ちた安堵感を抱くことができた。息つく暇も無く看護に当たってきたエレナにとつても、漸く憩いと呼べる時が訪れた。

夜半に搬送作業が終了した後、着の身着のまま機内控室のベッドに倒れ込んだことまでは覚えている。寝入り端の微睡さえも無く、エレナとキャロラインは深い眠りに落ちて行った。

目覚めた時には、既に太陽は高く昇っていた。作業終了から半日以上が過ぎていて、傍らには安らかな寝息を立てるキャロラインがいる。一つの仕事を成し遂げた充実感を味わいながら、彼女は両手を上げて小さく背伸びをした。

「眩しい……」

思わず目を細める。故郷の太陽はとても明るく温かい。機外に出て真昼の陽射しを浴びた時、久しく忘れていた感覚が呼び戻された。彼女は、自分の全身から鱧（す）えた臭いが漂っていることに気付いた。血と汗と消毒薬の匂いが、身体中、髪の毛にも滲み込んでいるような感覚だった。しっとりとした微風も今は臭いを一層きつくさせる気がする。

もはや落ち着いてはいられなくなった。

エレナの気持ちの一部がかつての王女に戻っていた。

「キャロル、起きて。髪を洗いたいの。どこかシャワーを浴びる場所を探して」

機内に戻りキャロラインを無理やり起こす。まだ眠たげに眼を擦りながらも「バレツタ」は主人の「髪を洗いたい」という半ば強引な命令に忠実に従った。

幾分ふらつく足取りで、基地の管理棟に向かって歩き出す。建物の中に入ると言葉少なに方向を示していく。どうやら彼女はここ旧帝国所属ガニメデ基地をよく知っているようであった。生あくびを噛み殺しながら指をさす。

「こちらです」

立ち昇る湯煙が二人の女性の裸体を優しく包んでいた。

流れ落ちる水音と二人の声が反響している。

「痒いところは御座いますか」

「額の上と頭の真ん中。両耳の生え際。それとうなじ。ついでに背中も」

「……お背中は何ほどお流ししますので少々お待ちください」

つまりは、髪が生えている部分全てである。頭皮を包み込み洗い女性の指の優しい感覚が心地よい。キャロラインが自分以上に疲れていることは知っていた。しかし、今は何もかも忘れて甘えさせてもらうことにした。

「ありがとうございます……。ああ、気持ちいい」

思わず溜息が漏れる。

「お流しします」

シャワーから温かい水流が注がれた。白い泡の上を無数の水滴が軽やかに滑り落ちていく。纏わりついていた泡が消え去ると、上気してさくら色に染まった素肌が現れた。左右の鎖骨に挟まれた胸の上に、金色の輝きを取り戻したゼネバスの紋章が光っていた。

湯気に曇る鏡の中、彼女は改めてその首飾りを手にして見つめた。私は決して諦めない。必ず父を救い出すその日まで、この紋章に誓って。

その後二人は、互いに髪を洗いあつた。

乙女たちの至福の時であつた。

※

PTSD（心的外傷後ストレス障害）とは、一か月以上精神に障害が継続する症状であり「攻撃の直後にPTSDになった」というのは用語の概念としては誤っている。それでもASD（急性ストレス障害）からPTSDには容易に連続する症状であり、共和国軍がトラウマの原因となる暗黒大陸の戦場から早急に兵士達を引き離れた対応は正しい。しかし、その後の対応のまずさはこれまで記した通りである。

軍は一人でも多くの兵士を欲していた。従って、戦死という形で兵を失うのはもとより、PTSDとなり戦場に復帰できない兵士が増えることも恐れた。エレナを乗せたタートルシップが旧帝国領を放浪している間に、軍はその失策を補うためにも、最高の治療と施設の整っている最も近い場所を探し出した。

ガニメデ市を指定したのは、トビチヨフ、ダリウスのようなその場凌ぎの移送ではなく、本格的な治療を施すために検討された結果であつた。

車椅子や松葉杖、ベッドに横たわつた数多くの傷病兵が、無表情のまま施設の廊下を行きかっている。白く統一された建物の内部は、消毒薬の匂いの他に、仄かに甘い花の香りが漂っていた。施設長による、精神衛生上効果があると思われる措置であり、加えて室内には微かにクラシックの穏やかな調べが流れていた。

エレナとキャロライン、そしてタートルシップで随伴してきた看護兵及びセーラブ軍医達は、そこで真新しい白衣——厳密に言えば少し青味がかっているが——を受け取り、移送してきた傷病者の看護に当たっていた。暗黒大陸から脱出した傷病兵は最初109名であったが、その後11名が死亡した。彼女達は少しでも患者の生存に協力するために、この施設の臨時職員という形で勤務していたのだ。

ガニメデ市は旧ゼネバス帝国首都の衛星都市であり旧軍の施設も数多くあった。キャロラインによれば、この建物は元は陸軍病院だったそうだ。以前は武骨で無機質な建物だったが、共和国統治となり内部が大幅に変化し、非常に快適になっているという。

彼女たちには、なぜ旧帝国領の町にこれほどの施設を整備したのかが不思議であった。

「ルイーズ、リチャードさんを診察室まで付き添っていつてくれ」

キャロラインはその時別の患者の付添をしていた。既に彼女達は「ガイロス帝国の政治犯の家族とその護衛」というような垣根が取り去られ、非常に有能な新人看護師として職員の間で扱われていた。彼女が「はい」と返事をした時既に、指示したセーラブ軍医も急ぎ足で別の診察室に向かっていた。

王女として帝国の民衆の前に立ち、そして暗黒大陸で抑留された兵の動員に利用されてきた彼女にとって、それは漸く得られた社会的な居場所となっていた。誰かの為になれるのがこれほど充実するものなのかと実感していた。決して嬉しいものではない。今も死の瀬戸際で苦しんでいる人々がいるのだから。ただ、今の自分に出来ることを後悔せずに精一杯やれた。彼女は病室に向かうと、指示された患者を診察室まで付き添っていった。

表情に変化が少ない。現実感が消失したように、視線は空を見つめている。時折失った左腕で顔や背中を掻こうとしてそこに何も無いことを知り、改めて消え去った肉体を見つめ思い起こし、そして頭を抱え込んだ。聞こえない声で慟哭している。意味を取ることは不可能であった。

スキャンニングされた脳髓の断面図を見ながら、医師は説明を始め

た。

「扁桃体の過剰活性と、内側前頭前野の機能に異常が見られるわね。典型的な症例ね。このままではフラツシユバックが続いてトラウマが固着するでしょうね」

女性医師は冷静に分析していた。年齢はキャロラインより少し年上ぐらいだが、その言葉は知識と経験に裏付けされた絶対の自信が感じられる。シユウと同じく、共和国は若い人材に恵まれていて、更には女性であつても社会に積極的に進出していることがわかる。

彼女が旧帝国領のガニメデに派遣されたのも、戦争体験の後遺症を研究する権威であり、第二次中央大陸戦争の終結後、激戦地であつた帝国首都周辺で多数のPTSDの発症がみられたためであつた。

この医療施設自体ヘリック大統領の肝煎りで設立されたものであり、噂に聞く所では共和国の有力な財団により運営されているという。

「このままでは社会復帰は無理でしょうね」

「そんな……」

冷たく言い放つ女医にエレナは憤りを感じた。心情的に納得できない。あまりにも冷淡で思いやりもない。エレナは女医が首から下げているネームカードを睨んだ。そこには「精神臨床医 ジュディー・ハーマン」と示されていた。

「あなたがいま何を考えているかわかるわ。」

なんて冷たい医者なんだろう、思いやりも何もないひどい人間と思っているわね。

でも遠回しに言つて時間をかけて、診断を曲解させて手遅れになるよりずっといい。それに勘違いして欲しくないのは、治療法があるからこそ言い切れるのよ」

そこまで言つてジュディーはにっこりと微笑んだ。初めて見る美しい笑顔だつた。

「あなたは優しい人ですね。名前は？」

エレナは気持ちを読まれていたことに当惑し、動揺した。

「ルイーズ、と言います。あの、なぜ私の考えを……」

「私は精神科の医師よ。そのくらい表情で判断できなくて精神医とは言えないでしょ。」

……ルーズ、素敵な名前ね。320万年前の化石人類にそんな人もいたかしら」

共和国にはシユウのような人材が、良い意味でも悪い意味でも数多く存在することに、彼女は閉口した。

21 (2053年)

門扉には「チェスター財団寄贈」と刻まれていた。キャロラインの言う旧陸軍病院の施設の裏側に真新しい建物が造られていた。医療施設にしては奇妙に機械油の匂いが漂っている。清潔な施設には違いないのだが、何処か小さな町工場のような装いだった。異様に長い建物で、待合室を兼ねる受付には既に数十人の列が並んでいる。そしてその列には一様に手足を失った人々が並んでいた。車椅子に乗った人も多くリチャードに付き添ってやってきたエレナにはその光景は痛々しかった。

よく見ると並んでいる人々には民間人も数多く見受けられる。ガニメデ郊外は激戦地であったため、傷病者も数多く発生したのだろう。

同じ敷地内ということもあり、患者であるリチャードのカルテは既に送られている。エレナは特に紹介状を持つことも無く、ただ待合室の中で自分たちの名前が呼ばれることを待っていた。ジュディー女史には「すでに発注済み」と言われていたが、待ち時間は長くなりそうであった。

リチャードは相変わらず無表情のままだった。彼女の診察によると、精神の回復には肉体の回復が必要とのことだった。彼は左腕の喪失以上の喪失感が精神に負担をかけていると診断された。まずは優秀な左腕を取り戻し喪失感を補うことにより改めて精神面での治療を行うという。

そのことが最初何を意味するか解らなかったが、指示を受けた施設にやってきてエレナは漸く理解できた。

ここは義手や義足を製造し提供する施設のようだ。切断された神経を接続する関係上、医療施設に併設されたのだろう。

中庭では、明るい日差しのもと庭一面に咲き誇る鮮やかな花の中でリハビリを行う義足の患者たちが懸命に歩行訓練を繰り返していた。ふと、どこからか懐かしい声が聞こえてきた。聞き覚えがある男性の声だ。

父や祖父ではない。家族とは違った、しかし家族同然に過ごしたひとの声だった。

声の主を探しエレナは辺りを見回した。遠くの病室の方から薄い灰色の作業服を着た男性が二人近づいてくる。その内の一人に彼女の目は吸い寄せられた。

「……今度の発注は左右の脚、合計22セットだって。相変わらず人使いの荒い女史だなジュデイーは」

「仕方ありませんよ。いまあれだけのものを作れるのは、帝国領内にはあなたしかいないのですから」

「褒めても何にも出ないよ。僕にはロフタス君の給料を査定する権利はないのだからね」

「別に世辞を言うつもりはありません。事実ですから」

「気持ち悪いな、何か彼女に言われたのかい？」

エレナは思わず立ち上がった。その顔に見覚えがあった。5年前、自ら戦闘に志願し、自らが設計した機体に乗って戦い倒れた人物。既にこの世を去ったと思っていた人物であった。

「マイケル先生」

彼女は人物の背後から追いつき声をかけた。

一瞬立ち止まり振り向いた。

その顔は、紛れもなく彼女にとつての恩師。そして密かに慕っていた年上の憧れの男性でもあった。

最初彼は当惑していた。

「僕の名前を知っている？ 申し訳ありませんがどなたでしょうか。僕にはあなたの様な美しい女性の知り合いはいないのですが」

「マイケル先生、お久しぶりです。お忘れですか。私です、エレナです」

「エレナ……エレナ様！」

その言葉を待たずに、エレナは嘗ての恩師、そして兄のように慕っていたゾイド技師に人目も憚らずに抱きついて泣いた。そして泣いた。思い切り泣いた。

今まで彼女は、どれ程苦しくても、どれ程悲しくても、人前で声を

出して泣くことはなかった。

だが、今は泣いていた。それは嬉しさのあまりに流れ出た涙であった。止め処なく、溢れるように、喜びと共に泣いていた。嗚咽がなかなか止まらない。言葉を発しようとしても一切言葉にならない。でも、嬉しかった。本当に嬉しかった。

愛しい人との再会であった。

「あなたがあの、お転婆エレナ様ですか。信じられない。女の人は変わるものだとは知っていたがこれほどは。まだまだ勉強が足りないな、僕も。」

エレナ様、お美しくなれましたね」

「先生こそお上手になりましたね。私はあれから何も変わっていないつもりです」

ぐしやぐしやに泣きはらした顔で漸く見上げると、マイケルも同様に目じりに涙を湛えていた。

「どうしてこんなところに。それにその格好。いつから看護師の仕事をして……」

そこまで言ってマイケルは口を噤んだ。傍らには訝しげに様子を窺うロフタスと呼ばれた同僚らしき男性と、突然の感動の再会を見守る人々が取り囲んでいたのだ。

彼女の本来の立場から判断して、白衣に身を包んでいる理由が何かは語らずとも凡その見当が付いたのだろう。

マイケルは彼女の両肩をそっと抱き囁いた。

「ここは人目もあります。詳しくは後ほどお話しましょう。僕は今、この義手・義足製造部門の特別顧問をしています。ガニメデ市には2週間ほど滞在予定です。ええと……ルイーズさん、ですね」

白衣に付けられた名札を読み取ると、咄嗟の判断で彼女の呼び方を変えた。

「ルイーズ、君も仕事があるだろう。勤務時間はいつまでだろうか」
そういわれて、本来の目的を思い出した。

「リチャード・ジー・キヤムフォード様、診察室5番にお進みください」

間が悪い事に、丁度受付から名前を呼ぶ声が聞こえ、呼び出しに思わず振り返る。マイケルもロフタスを振り返った。今は互いに職務に責任を持つ身の上だった。

エレナが退勤後に宿舎に帰る時間を伝えると、マイケルは時計を見た。

「その30分後なら会えるだろう。今日の夕刻、この場所に来てくれるかい」

「はい喜んで」

そう言うと、彼は羨望の眼差しで見つめていたロフタスの元に戻っていった。

「あの美人、お知り合い？」

「ああ、昔家族ぐるみで付き合っていた家の娘さんだ。戦争で死んだと思っていたのだが、生きていてお互いに驚いてしまったのさ。待たせて悪かったね」

「いいんですか。用件は私だけでも出来ますよ」

「いや、気にしないでくれ。彼女とは約束をした。時間をロスした。急ぐぞ」

振り向いて、彼女に小さく手を振った。名残惜しいがやむを得ない事だった。

そして彼女にとって衝撃的な事実がもう一つ訪れた。

振られたマイケルの左手の薬指に、銀色の指輪が光っていたのだ。

22 (2053年)

ガニメデ城の裏側、草深い森林に囲まれた幽谷に、その屋敷はひっそりと建っていた。山から流れ出る沢のせせらぎが心地よい。僅かに肌寒いながらも、辺りを漂う水滴がしつとりと肌を被って清々しかった。

小道を抜けて辿りついた先には、古く小さな城門と比較的新しい扁額が掲げられている。

「キリンデイニ宮、ここですね」

どこか遠くで小鳥の囀りが聞こえてくる。門をくぐった中庭で、綺麗に手入れをされた草花と、蔦の絡まったアーチが出迎えた。

静寂な中、穏やかに呼吸をする多くの人の気配が感じられる。集会場とも広場とも言えない、半分ほど草葺の屋根に覆われた場所に、無言で佇む多くの人々の列が並んでいた。

彼らも一様に身体の一部を欠損し、義手や義足で補っている。

回廊を抜け奥の部屋へと進む。木々の緑と花の色が美しい。

その奥に、突如として場違いなものが現れた。

巨大な芋虫型ゾイド、モルガの姿だった。

「お待ちしておりました」

モルガの前に、満面の笑顔を湛えた黒縁丸眼鏡の人物が座っていた。

リチャードを含めた義手・義足の装着を完了したASD患者の治療に当たり、ジユディー・ハーマンが次に示したのは、彼らをガニメデ城の奥にある同市統監府総統ミスター・ジェンチェンの設立した療養施設「キリンデイニ宮」に移送し、精神の回復を行わせることであった。

周囲からも尊敬の念を込めて「ミスター」と呼ばれているジェンチェン・パルサンポという人物は、嘗て皇帝ガイロスによる暗黒大陸統一の過程で弾圧を受けた古代ゾイド人の末裔の地底族であった。デイオハリコンやドラゴン型ゾイドなどの技術を受け継いできた民族であったが、その技術が中央大陸に伝搬することと、逆にその技術

によってガイロス帝国に反旗を翻すのを恐れたこと、何より彼らの所有する技術とディオハリコンを産出する領土を根こそぎ奪い取る為に、彼らは故郷の大地を逐われたのであった。民族への徹底破壊を行うガイロスの追撃を逃れ、当時中央大陸戦争開始以前のアンダー海を、戦鬪ゾイドとして改造されていない野生ゾイドで命懸けで中央大陸に脱出し、中央大陸の山麓に小さなコミュニティを作って密かに暮らしてきたという。

ゼネバス帝国が崩壊し共和国政府にとって新たな統治者が必要となった時、彼らへの視線が注がれた。同じ地底族であれば統治への受け入れが容易ではないか。共和国政府は彼らの長であるジェンチェンを総統に抜擢し統治に当たらせたのだった。

彼らの統治方法は独特であった。非暴力を貫き戦鬪ゾイドも所有しない。それでも非常に安定した統治が成されていたのだ。

一部、宗教的な儀式が行われているのではないかと疑う者もいたが、彼らの統治は特定の神を拝むような偶像は一切なく、また教義らしきものも見当たらず結局一種の哲学的な思想を実践する社会集団であることまでが理解されていた。そしてその集団では高度な精神修養が行われ、多くのPTSD患者などの回復に効果があることを証明したのが、他ならぬジュディー・ハーマンであったのだ。

エレナは、かつての想い人を奪われた相手の指示を素直に受けることに感情的に気が進まなかった。加えて向かうキリンディニは遠く、更に気が滅入っていた。

マイケルの紹介により再び暗黒大陸に向かうのは3週間後と決まったが、それまで何もせずにいるわけにもいかなかった。既に彼女たちは完全に従軍看護師として勤務を宛がわれてしまっていたからだ。

※

傾きかけた夕日が山の端に向かって降りて行く。

風が通るバルコニーの下、リチャードは静かに佇んでいた。

向かい合った人物の黒縁丸眼鏡に陽射しが照り返し、輝きを周囲に散らしている。

二人はしばらく無言のままだった。心地良い緊張感の中、時は着実に経過していた。

「風が、変わりましたね」

ミスター・ジエンチエンが静かに呟き、彼は無言で頷く。二人を見守るエレナにはそれが何を意味するのか理解出来なかった。

彼は時折左の腕に右手を添え、夕日に映える森の木々を見つめている。そしてふと囁いた。

「私は新しいゾイドを探す旅に出ようと思います」

「それは、何のためにですか」

ミスターの問いかけに彼は力強く応える。

「この星の何処かに、生命力と野性味に溢れた、我々がまだ出会ったことのないゾイドがいる予感がするのです。戦うだけが真価ではないゾイドが」

そうして彼は、エレナを真っ直ぐな瞳で見つめた。既に心身ともに回復していると思われる彼の申し出に彼女は当惑していた。

このキリンディニ宮で彼に何があったのだろうか。エレナは逡巡しつつ言葉を返す。

「お気持ちわかります。ギルベイダーに対抗できるような強力なゾイドが必要なのはヘリック共和国の誰もが望むところでしょう」「いいえ」

彼は冷静だった。

「私は復讐を望みません。左腕を失うことでこうして多くの人々と出会い、そして新たな人生の目的を見つけることができたのですから」傍らでミスターがそっと頷きながら微笑んでいる。眼鏡の奥の視線は優しく包み込むようであった。

「怒ったり、脅えたり、暴走したり。ゾイドとは実に不思議な生き物です。コクピットを取り付けてみても、操縦できるとは限らない。」

だからこそ面白い。コクピットの中で恨み言を溢しながらも、操縦者は存外にその機体と繋がりが合っているものです。

今の我々は、外装や内部機構に手を加えすぎることによってゾイド本来の生命の輝きを削っている。戦闘の道具としてしか見ていない。

しかし、ゾイドとは本来生き物だ。戦う理由などその本当の存在理由に比べたらちつぽけなものだ。

金属生命体としてこの世界に生まれ、成長し、子孫を残し、死んでいく。命のサイクルの中で、小手先の改造などはね除けるような、生命力に満ち溢れた野生体に私は出会いたいのです」

「それをどこで探すのです。中央大陸ですか。それとも暗黒大陸で？」

彼は太陽の沈む方向に目を向けた。

「まだ我々が到達しきれていない西の大陸、古代の遺跡が数多く残る未開の大地、エウロペです」

夕日がエレナを含めた三人の姿を染めていく。真っ赤な光の中で、リチャード・ジー・キャムフォードは遥かに臨む西の稜線を見つめ続けていた。

「キリンディニ、水の深い場所」ですか」

「よく御存じで。古代ゾイド語を理解されているとは。お若いのに素晴らしい」

シユウの書棚にあった古代ゾイド文明の言語を、エレナも多少なりとも理解していた。その音韻が、「キシワムビタ」同様に古くからの言語を想像させたからだだった。

「私が暗黒大陸を脱出してヘリック大統領に保護されてから、既に40年以上が過ぎました。もはやここは第二の故郷ともいえる場所になっていきます。といっても、私が住んでいたのは中央山脈の東側。麓に降りても小さな村落しかない辺鄙な場所で、共に逃れてきた者達と小さなコミュニティを作っていました。」

ゼネバス帝国が陥落し、その統治の為に、地底族出身という理由で私は召喚されました。もともと私は政治など向いていないのですが、大統領への恩義もありましたのでお断りするのも失礼かと思ひ、統監府総統という大役をお受けすることになりました」

“ミスター”と呼ばれるガニメデ市統監府総統、ジェンチェン・パルサンポは、終始穏やかな笑顔を絶やさずに語っていた。

「ここは戦争に疲れ、精神を病んだ人々が一刻も早く立ち直る為に作った心の宮殿です。科学の一つである医学では肉体の傷は治せません。しかし心に負った傷は外からの働き掛けでは治せません。その治療のお手伝いが少しでもできればと思いますここに故郷の名前を冠して築きました。差し出がましいかもしれませんが、私に今できる最善の事はこの程度なのですから」

そう言うときまた彼は笑った。血色の好い肌に刻まれた皺も、年齢を感じさせることより何処かユーモラスで、そこにいるだけで落ち着いた気分させるような不思議な人物だった。

「リチャードさん、といいましたね。彼もここに来て、随分と回復しましたよ」

「はい。先ほどの会話でよくわかりました。彼があれば回復するとは思いませんでしたから」

幾分当惑した表情を浮かべつつも、自分の患者の回復は嬉しかった。

ミスターは相変わらず微笑んでいる。

「左手の義手操作も順調の様です。それにしても最近の義手の技術は素晴らしいですね。私も少し触らせていただきましたがまるで本物の腕の様でした。さぞかし名のある方がお作りになられたのでしょうかね」

ミスターは背後のモルガを見上げた。

「このゾイドは、傷つき、戦場に見捨てられていたものを回収して私が直したもののなのです。武装も取り去って、今は殆ど野生ゾイドと同じ能力しかありませんが奇妙に懐いてくれました。ちよつとした外出には便利な生き物ですよ」

エレナは、これほどまでにゾイドを慈しむような瞳で見る人物に出会ったことはなかった。そしてそれは決してゾイドだけに向けられたものでないことも判った。彼は地上に存在するありとあらゆるもの、いや、精神を含めた森羅万象をも愛することが出来る人物なのだと思います。その優しい瞳が、言葉にならない表現出来ない何かを放っていたからだ。エレナは以前から抱いてきた疑問を彼に投げかけた。

「お伺いします。あなたは暗黒大陸でガイロス皇帝による徹底した弾
エスニッククレンジング
圧、民族洗浄により故郷を追われた古代ゾイド民族の末裔と聞いて
います。あなたたちにとって暗黒軍と皇帝ガイロスはいわば憎む
べき敵、忌むべき悪魔のようなものでしょう。いま共和国は暗黒軍と
戦い、ここにいる傷病者のように、傷つき戦場に倒れる戦いが続いて
います。この機会を利用して再び暗黒大陸の地に帰り故郷の文明を
再建しようとは思わないのですか」

モルガを見上げていた視線を、彼はもとに戻した。

「私の故郷は既に中央大陸となりました。小さな場所に拘り心を縛ら
れるのは精神の健康にも良くありません。強いて言えば私の故郷は
このゾイド星。金属生命体を育んだ豊かな惑星なのです」

「私には理解できない。なぜあなたはそれほどまでに人を許せるので
すか。例えばそれが肉親や信じる人々を奪った相手であっても」

「あなたは『愛情』とは何か答えられますか」

ミスターは突然問いかけた。戸惑いつつもエレナは答える。

「愛情ですか。それは愛する者への無限の慈しみ。それを傷つけよう
とする者から守りたいという気持ちだと思います」

彼は微笑みを絶やさず。

「それは正しい答えです。でも身内だけに注がれる感情は愛情ではあ
りません。それは『執着』というものです。小さな世界に閉じこ
もった狭い関係だけを守る我儘な感情です。自分だけ、自分の家族だ
けが幸せで、周囲全部が不幸な世界を考えてみてください。果たして
そこであなたたちだけが幸せに暮らせるでしょうか。

幸せとは、自分を含めた周囲全ての人間、そして世界と一緒に巻き
込んで幸せにならないければ意味がないのです。自分が幸せになるた
めには、見知らぬ誰かも幸せにしなければなりません。例えばそれが、
自分の敵であっても」

「そんなバカな」

彼女にはまだ納得できなかった。仲間を死に追いやり、更にはそれ
をあざ笑うかのように振る舞う敵を知っていたからだ。許せない、彼
女の中には抑えている激情が燦っていた。

「すぐに理解しなくてもいいのです。ただ、人は誰しも誰かに愛情を注がれて文明を築きあげてきました。もし人が愛情を持たなかったら、未だ我々はゾイドと同じように個体ごとに存在し、文明という絆を作り上げることなどできはしなかったでしょう。」

戦争という巨大な悲劇が人への不信感を広げるのは判ります。それでも私たちは人間の可能性をもっと信じてよよいとは思えません。少なくともここへきて、心を取り戻すことが出来た人々も大勢いるのですから」

それ以上彼女は言葉を発することができなくなつた。説得や論破されたのではなく、目の前の人物の慈愛に満ちた言葉に最早反論することが心苦しくなつてしまつたからだ。

理解はできても納得はできない、まだそんな中途半端な気持ちであつた。

「いいですよ、娘さん。ゆっくりと、ゆっくりとね」

彼の微笑みには絶対に敵わないことだけは判つた。

リチャードたちの回復は目覚ましいものであつた。会話さえもできなかつた人々が、見る見るうちに精気を取り戻し、義手や義足に拘らず生きる喜びを取り戻して行つた。回復が確認された人々は再びチエスター財団の施設に戻り、リハビリに励むことになつた。

但しリチャードは充分な回復が見られた直後、突然キリンデイニを離れ西方大陸へゾイドを探す旅に出ることを申し出た。重度のASDだったため軍籍は既に除隊済みであり軍規に触れることも無かつたのだが、その提案はあまりに唐突であつた。

最後に会つた時、再び彼の意志を確認してみた。その時はキャロラインも一緒であつた。

「ゾイドの根源に触れてみたい。一度は失つた命です。その残りの全てを捧げてでも悔いのない事をしてみたいのです」

彼の決意は変わっていない。それは個人の意志に任されることであり、彼女が決める事ではない。あの時黒い雨に打たれながら呆然としていた姿を知るエレナにとって、彼の回復は素直に嬉しかった。同

時に暗黒大陸への移動が近くなり、ここで彼との別れが来ることは自分の扱った患者としても寂しい気持ちになっていた。

「ルリーズさんにはいろいろとお世話になりました。もしお会い出来る機会があればお礼をさせてください」

「ええ、その時は喜んで」

二人は固い握手を交わした。

互いに暗黒大陸の戦闘を潜り抜けてきた戦友に近い感情であったかもしれない。

ふと、エレナは彼の中に自分の良く知る人物の姿が重なっていることに気が付いた。

夢見がちで、一度決めたことは無謀であつても突き進む姿。失敗しても後悔をしないという高潔さ。

(お父さん?)

リチャードの中に父の影を重ねていることに気付き、不意に胸の高鳴りを覚えていた。

「これだけは約束して欲しいのです」

リチャードが険しい表情となる。胸の鼓動を抑えつつエレナは短く「はい」と答えて彼の言葉を待った。

「生きて帰ってきてください」

それは戦地に赴く戦友への感情とは違うものだった。

「あなたもお元気で。見つかるといいですね、素晴らしいゾイドが」

キリンディニの扁額を背にした坂道を、エレナは二度振り返りながら手を振った。

「ルリーズ様、素晴らしいゾイドとは一体なんのことですか?」

「秘密です。いずれ機会があればお話ししますよ」

怪訝な顔をするキャロラインを後に、エレナは長い坂道を軽やかに下って行く。

看護師と患者、ただ擦れ違っただけの刹那的な接触。彼との出会いは幻のようであった。互いに互いの存在は忘れ去られ、もし次に出会ったとしても知らないまま通り過ぎるに違いない。でも、それでも

構わない。出会いとはみな偶然の積み重ねなのだから。

そして思った。立ち止まっていることはできない。三日後の暗黒大陸へのタートルシップでの渡航へ向け準備をすることを。

今度こそ、父を救い出す為に。

(お父さん、待っていてください)

この頃から、中央大陸に住む人々は宇宙からの異変に気付く様になっっていた。

毎晩のように降り注ぐ流星雨が次第に数を増し、時には真昼の様な明るさで天空を彩るようになっていたからだ。

しかしギルベイダーによる定期的な都市攻撃は継続されており、人々が宇宙に目を向ける為の余裕はなかった。共和国軍側では迎撃のための対空装備を充実させ、大量のサラマンダーやレイノスを配備することによりその黒いゾイドに敵わないまでも、先の首都空襲のような大規模な被害を食い止めることで精一杯であった。

この星の人々は、外惑星軌道より迫る巨大彗星「ソーン」の影を突き止めることに遅れていた。

惑星大異変まで、わずか2年しか残されていなかった。

23 (2054年)

エレナ達の搭乗したタートルシップは、ウラニスク市で建造された最新の機体であった。外見こそ変わらないが中央山脈さえ越えられなかった整備不良の機体ではなく出力・搭載量・巡航速度など大幅に改良されていた。搭載されるゾイドもマッドサンダーを含めガンブラスターやキングライガーなどの最新のゾイドであり、一路エントランス湾に向けて航行していた。

周囲の空域にはギルベイダーの攻撃から護衛する為にレイノスやサラマンダーF2が哨戒している。打ち続く暗黒帝国の定期爆撃に對抗する為にも、共和国は持てる全兵力を投入して是が非でも敵の基地を叩く必要に迫られていた。

彼女たちが新たに随伴することになったのは、エントランス湾基地から同時に脱出した、かつてシユウの保護役であったチャンス少佐率いるシールドライガーMk-2部隊であった。

彼は復讐心に満ちていた。

確かにシユウは特異な人物で、少佐自身もその奇抜な行動に何度となく困惑させられたが、その実かつての上官アイザック將軍の息子ということと、奇抜ながらも決断力と行動力そして研究者としては惜しい程の勇敢さを兼ね備えていた人材であった。常日頃から苦言を呈していたのも、この若者を育て生き残らせるための老婆心のようなものだった。

次の世代を引き継ぐのは自分の様な軍人ではなく、彼のような有能で敵味方に拘らない新しい感覚を持つ者ではないかと感じ始めていたのだ。

その息子の様なシユウを、あの黒いゾイドは一閃で切り裂いた。

直接攻撃では太刀打ちできないのは知っている。ならば敵の本拠に侵入し、出撃前に破壊をすればいい。既にサラマンダー洋上部隊の決死の探索により、フンスリュック基地の大凡の位置は判明していた。今回は基地潜入部隊のキングライガーに加え、後続のホワイト大佐率いるウルトラザウルス飛行艇が一日遅れで到着する予定であっ

た。

「少佐殿、^{クレイジーホース}「暴れ馬」より入電。洋上部隊のサラマンダーF2が基

地に到着し、そのまま暗黒大陸内部への哨戒を開始したそうです」

「クルーガー大尉か。奴めまた命令違反を繰り返すつもりか。これ以上若い連中のお守りは御免だ。返信はしなくていい。磁気異常のため受信不能としておけ」

眉間に皺を寄せながらチャンスは呟いた。

「シユウ、待っているぞ」

極地に近づくにつれ次第に暗くなっていく空と海とを見つめながら、エレナは思いを強くしていた。

（戻って来ました、お父さん）

高緯度地域は冬季の極夜に入り、正午過ぎには星が瞬いている。雲上を進むタートルシップの窓から流星を三つ数えた。

あれ以来、エレナはミスターの言葉を繰り返していた。

『愛情ではなく、執着』

人を愛することは大切だ。勿論、恋愛感情を含めて。でもミスターは敵までも愛しなさいと言った。憎い者ほど愛さなければならぬ。彼の笑顔をみれば、人がどれ程優しくなれるかわかる。同時に、人はどれ程醜くなれるのかもこれまで見てきた。

矛盾。ダブルスタンダード。葛藤。迷い。

『いいのですよ、娘さん。ゆっくりと、ゆっくりとね』

あの場所でのリチャードの顔も忘れられない。それはとても穏やかなものであった。

戦場に赴く自分の存在とは何なのか。

父を探し、救い出すことが目的だったはずなのに、何か別の意志に動かされているような気がする。

結論がでない。これではまるで循環論法^{トートロジー}ではないか。

もしシユウだったら何と答えてくれたろう。

もしシユテルマーだったら。

そしてお父さんだったら。

「ルイーズ様、間もなく到着です。ベルトを装着してください」

キャロラインの隣で降下する機外の景色を見つめながら、彼女は未だに悩み続けていた。

その後の共和国の死闘を記すのは辛い。

連日の様に爆弾の雨が降り注ぐ。

共和国領の主だった都市は空襲の洗礼を受け、その度毎に数百人単位での犠牲者を生み出していた。

対する共和国軍のエントランス湾前線基地ではギルベイダーの秘密基地捜索を行い、フンスリュック基地への直接攻撃を敢行する。だが、予想を超えたギルベイダーの耐久性能により作戦は失敗。その後乾坤一擲の攻撃をこめたベルガー提督率いるサンダーパイレーツ艦隊も撃破され、最早ギルベイダーに対抗する手段は残されていなかった。

それはかつて、ゼネバス帝国が味わった絶望にも似ていた。

ウルトラザウルスが投入され圧倒的な火力によって蹂躪されたこと。

マッドサンダーの登場によりデスザウラー無敵時代が終了したこと。

それ以前にも、戦闘ゾイドすら満足に配備されない時代にビガザウロを中心とした戦闘部隊によって帝国領を次々に攻め落とされたこと。

戦争は勝利が続く際には批判は起こらず、敗北を知って初めてその過ちに気が付くものである。共和国政府は、打ち続く敗北がやがては政府への批判へと変わり、崩壊したゼネバス帝国同様にヘリック共和国でも内部分裂を起こす危険を恐れるようになった。

共和国大統領ヘリックⅡ世は、その建造を承認し難かったが、齎された二つの情報が遂に決断させた。

一つは、共和国諜報機関の活動によって暗黒大陸での弟ゼネバス・ムーロアの生存が確認されたことである。

ギルベイダーの空襲以来、特に旧ゼネバス領での帝国民の動向が不安視されるようになっていた。暗黒大陸から帰還したエレナ達の乗ったタートルシップ受け入れを拒否したように、統治する共和国政

府の指導を受け付けず、独自に都市ごとの武装を進めるようになっていたからだ。

共和国軍自体、その主力の多くを暗黒大陸に投入し続けていたため、苦肉の策として各都市の自警団的な軍隊に頼らざるを得なくなつたのだが、これは非常に危険な傾向であつた。もし各都市が独立し、二大勢力ではなく群雄割拠の状態になれば、それはもはやガイロス帝国の望むところである。そのために、かつての皇帝ゼネバス・ムーロアを奪還し、暗黒軍に動員されている旧ゼネバス兵の戦意を喪失させ、旧帝国民統治の象徴として再び利用する必要があつたのだ。兄ヘリックにとってそれがどれ程不本意であつたか容易に推察されるが、中央大陸に住む全国民を團結させるためにも必要な作戦であつた。

なおこの作戦の隠匿名は「マドレーヌ作戦」と呼称された。真偽は定かではないが、兄ヘリックによると弟ゼネバスの好物は母が焼いたマドレーヌ菓子であつたためと言われている。

もう一つの情報は宇宙からの脅威である。空襲や天候不順により観測が滞っていた外宇宙からの脅威が目視されるまでに接近してきたのだ。巨大彗星ソーンである。

国立天文台の軌道計算の結果、彗星は辛うじてゾイド星近傍を通過することまでわかつていたが、その過程で第二衛星Seを巻き込み、衛星への衝突、若しくは重力圏を離脱させ、数多くの天災を起こすことが予測されていた。

ヘリックは二つの決断をした。

一つはグランドパロス山脈の地下に眠る、巨大移民船グローバリーⅢ世号の修復である。万が一ソーンがゾイド星に衝突すると判明した場合、政府首脳は住民を見捨てても脱出しなければならない。無慈悲とも冷酷とも言われようとも、彼らが今まで築き上げてきた歴史と文明と知識をここで絶やすことはできなかつたのだ。ヘリックは、せめて自分の席を別の若者に譲る事だけを確認し、この巨大移民船の修復を開始させたのだつた。

そしてもう一つが、文字通り空前絶後と呼ばれる最強ゾイド、キングゴジュラスの建造である。グローバリーⅢ世号のワームホールド

ライブの技術を応用した禁断の破壊兵器の建造を、ギルベイダーへの対抗の為に遂に着手してしまったのだ。

力と力をぶつけ合う死のシーソーゲームの結果、後に惑星大異変を誘発させてしまう呪われたゾイドを共和国は完成させてしまう。

※

先陣のレドラーの襲撃と、その後方から悠々と飛来し的確にビームスマッシュヤーを放つギルベイダー。エントランス基地攻撃には常に単機で飛来し、数機から十数機のゾイドを破壊すると決して止めを刺すことなくまた飛び去って行く。

共和国軍がエントランス基地を放棄し、中央大陸の守りを固めてしまわぬようほどほどの攻撃と破壊を繰り返し漸進的に追い詰める。基地が残っている以上兵力の投入を止めるわけにはいかない共和国軍は、タートルシップの輸送を継続し国力を次第に疲弊させられていった。

これもガイロス皇帝の行っていた民族殲滅の為に戦略であった。強い相手には時間をかけて懐におびき寄せて殲滅する。暗黒大陸に上陸部隊を派遣してしまった段階で、共和国軍はガイロス皇帝の術中に嵌っていたのだ。

負傷者は毎日数十人単位で発生し、月に一度飛来するタートルシップに載せられバレスシア市、若しくはクック市に移送され、代わって多くの兵士が再び派遣されてきた。無数の生贄を呑み込みながら、暗黒大陸の戦闘は続いていた。

生死が背中合わせの戦場で、エレナはその日も傷病者の治療と看護、そして最期を看取ることを繰り返していた。思い出されるのはミスター・ジエンチェンの言葉であった。

本来父を救出するために戻って来たはず。しかしいつの間にか手段が目的にすり替わってしまったている。

自分は今、人の命を救うという重要な仕事をしている。例えば救えなくとも、精一杯の努力をしてその人の最期を看取っている。苦悶し、毒づいて死んでいく者も多いが、最期に「ありがとう」と私の手を握りしめたまま死を迎える者も少なくない。死に直面して綺麗ごとな

ど何一つない。誰だって生き残りたいのだ。

けれどこの込み上げる虚しさはなんだろう。どんなに目先の負傷者を救ったところで争いの根本に届くことはない。看護師という無上の愛情を注ぐ名誉な仕事に就きながら、私は悩んでいるのだ。

私は何の為に生まれたのか。

ゼネバスの娘として生を受け、紆余曲折はあったものの概して少女時代は幸せな日々を過ごしてきた。暗黒軍に拉致され、抑留されたゼネバス兵動員の為の道具としても使われた。今は一介の看護師として存在するだけで、末端の被害者を救うことは出来ても根本に横たわる原因を断ち切る事は出来ない。

暗黒帝国皇帝ガイロスにも連なる呪われた血を帯びているからこそ、私にしか出来ない何かがあるのではないか。父や伯父にも成し得なかった大切なことが。

『幸せとは、自分を含めた周囲全ての人間、そして世界と一緒に巻き込んで幸せにならないければ意味がないのです。自分が幸せになるためには、見知らぬ誰かも幸せにしなければなりません。例えばそれが、自分の敵であっても』

敵を幸せにすること。

キシワムビタに捉えられ、大量の羽虫が湧く暗黒の大地の不遇を目にしてきた。

受け入れを拒否され、目前で息絶えていく傷病兵を見た。

国家の威信という見えないものによって、今も犠牲になっていく人々がいる。

何より人には家族が有り、知人がいて、恋人がいる。人が一人死ぬ毎にその数倍、数十倍の悲しみが人の世界に広がっているのだ。

ゾイドが本来優しい生き物であることは誰よりも知っている。だから例えその身を犠牲にしてもコクピットに座るパイロットを命懸けで脱出させるようなことをするのだ。

私たちは長い間ゾイドに甘え続けていた。これからはゾイドを含めた、全ての生き物が幸せになれる世界をつくらなければ、その全ての生物が生き残れないのではないだろうか。

でも私に出来ること、私にしか出来ない事とは一体何なのだろう。患者に包帯を巻く彼女の頭上で真つ赤な光輪が飛び去って行った。

「ビームスマッシュャーだー！」

仮設テントを薙ぎ倒し、頭上をギルベイダーが飛び去っていく。しばらくすると方向を変えて再び地上攻撃を開始した。軍事施設への攻撃から、戦闘継続への直接の影響の少ない病院施設への攻撃に移行したのだろうか。ゾイドや燃料貯蔵庫ではなく対人攻撃を繰り返していたのだ。ビームスマッシュャーが狙い澄ましたように人間を切り刻んで行く。蒸発し切断される肉体の群れ。血の匂いが飛び交う凄惨な光景が繰り広げられていた。迎え撃つシールドライガー Mk-2 やガンブラスターもこの黒いゾイドには全く太刀打ちできない。

屋根を吹き飛ばされ、内部が丸見えになった病院テントの真上から、ギルベイダーが不気味な顔を覗きこませていた。

その口元が僅かに上がったように見えた。いやらしいまでに嬉しそうな顔に見えたのだ。

“見つけた、今日の獲物だ”

あたかもそう呟くように。

爆発が起こり、エレナは5mほど吹き飛ばされた。

咄嗟に頭だけは押さえたものの、右手が無理な方向に曲げられたのか、立ち上がろうと手をついても力が入らない。右ひざが擦りむけて血が滲んでいる。

身体中泥まみれになり、目が開けられない。

ギルベイダーは地上に降りていた。ニードルガンを撃ち放ち、対人殺傷攻撃をしている。徹底した恐怖を植え付け敗北感を味あわせるための、やはりガイロス皇帝の常套手段であった。

看護兵の群れを見つけた。一際高くギルベイダーが叫んだ。

白い影が横合いから突進し、ギルベイダーの頭部に体当たりした。

チャンス少佐のシールドライガー Mk-2 だった。

「逃げる、出来るだけ遠くに」

外部スピーカーの音量を最大にしながら少佐は叫んだが、共和国の誇る高速ゾイドも桁違いの破壊力をもつ巨大ゾイドには到底対抗し

うることは出来なかった。

背部の小さなビームスマッシャーがシールドライガーの脚部に撃ち込まれ、左前足と右後ろ脚を同時に切断しその動きを停止させた。キャノピーを僅かに逸らして胴体部分にニードルガンを叩き込む。忽ち機体は穴だらけになり機能は停止していた。

嗜虐心を満たすように、ギルベイダーは執拗に看護兵達を襲い続けた。

止めを刺さず、ただ走らせる為に。

「ルイーズ様、走れますか」

「大丈夫、脚力には自信があるんだから」

だが右手の痛みに耐えながら疲れ切った身体を酷使するにも限界があつた。

足がもつれる。泥の水溜まりに前のめりに倒れ込んだ。背後を見上げる。

“もう追いかけてこも飽きたね”

ギルベイダーの顔はそう言っていた。

頭部のツインメイザーが白熱する。エレナとそれを庇って仁王立ちするキャロラインに向けて発射態勢をとっていた。

彼女は自らの生涯の最期を悟り、目を瞑ることなく黒いゾイドの頭部を見据えて叫んだ。

「私が死んでも何も変わらない。殺すのなら思いっきり派手にやってみなさい。」

代わりにその残虐さは語り継がれ、いつしか己の身に降りかかるのを忘れない事ね」

ツインメイザー発射直前、エレナの脳裏には父の面影が奔っていた。

（死にたくない、死にたくない……お父さん、ごめんなさい）

ギルベイダーの背後で起こる衝撃。甲高い金属の衝突する音が響く。

敵の背中に何かが攻撃を仕掛けたのだ。

腹を着き、地上にのめりこむように這いつくばる黒い翼。頭部は宙

を向き、ツインメイザーの射線が虚空の彼方に伸びていった。

射撃ではない。重金属の塊のような何かが直接ぶつかった、いや、蹴とばしたのだ。

ゾイドだろうか。エレナはこれほどのキック力を持つゾイドを知らなかった。敢えて言うならデイベイソンだが、現在のエントランス基地には配備されておらず、ましてギルベイダーの背部に跳び上がることはできない。

空中に、黒雲を背景にしながらトリコロールカラーに黄金の煌めきを纏う機体が浮かんでいた。

ガンブラスター？ 違う、あれは飛べない。

目を凝らす。泥粒が入ってまだ痛い。

次第にその神々しい姿が見えてきた。

それはまるで、かつて母エーヴから語られた神話の勇者が乗る天馬のようであった。

「オルディオス……。シユウ、遅いぞ」

ぼろぼろのコクピットから這い出したチャンス少佐が呟いた。

エレナの目の前に、白いゾイドが舞っていた。

(2054―2056)

24 (2054年)

ギルベイダーのコクピットで、デニケンは激しく苛立っていた。

非軍事施設を破壊するために地上に降りてしまったことが、この無敵の黒いゾイドにとって最大の失策となった。時空を切り裂くように突然現れた白い馬型ゾイドは、離陸のタイミング毎にギルベイダーの背中を蹴り付け離陸を阻止する。決して重量級の機体ではないが、鋭く繰り出される白い蹄はギルベイダーの機体に突き刺さり、ウイングバリアーの防御をも貫いて機体の破損箇所を増やしていった。

不快な衝撃が何度もコクピットに届いてくる。翼、頸部、背部ビームスマツシャー、致命的ではないものの、徐々に火器管制装置に赤い表示が増えていく。

背部小型ビームスマツシャー装置破損、頭部右ツインメイザー破損、尾部切断翼欠落。生殺しのように続く蹄の蹴りつけは、決して忍耐強いとは言えないイマヌエル・デニケン中尉を逆上させるには充分であった。

背後のゾイドに命中するはずもない左翼ビームスマツシャーと胸部プラズマ粒子砲を闇雲に発射する。その瞬間を狙って、白いゾイドは左翼の付け根に向けて弾丸の様に急降下した。激しい衝撃とともにギルベイダーの左翼が捻じ曲げられる。発射直前のビームスマツシャーは、オルディオスの全重量をかけた右足の蹄によって発射の軸線がずらされ内部爆発を起こし左翼ごと吹き飛んだ。同時に地表に向けられてしまったプラズマ粒子砲の輻射熱が、発射した粒子砲自体と頸部のニードルガンをも破損させ、なおかつ融解した大地に四肢をめり込ませる結果ともなってしまった。

歩行することも叶わずその場でもがき苦しむギルベイダーに、オルディオスは止めの一撃を加えた。

頭部プロテクターに装備されたサンダーブレードが黄金色に輝き、残されていたビームスマツシャー発射口に突き刺さる。激しい放電

と共にギルベイダーの右翼が吹き飛び、泥濘の大地に倒れ込んだ。四肢を奪われ両翼を失った巨体が擱坐する。キャノピーの奥の赤い眼光が消えた。

ついに共和国は、ギルベイダーに勝利したのだった。

破壊を免れたコクピットから両手を上げたデニケンが地表に降り立ち、オルデイオスのコクピットからも操縦者が現れた。機能を停止したギルベイダーはエントランス基地の兵士達に取り囲まれ、その中にはキャロラインに肩を支えられた泥まみれのエレナの姿もあった。「あれは」

エレナは、白いゾイドのパイロットがヘルメットを脱いだ瞬間シユウである事に気付いた。支えるキャロラインも驚きと喜びの感情を抑えながら見つめている。

両手を上げたままのデニケンは、周囲の憎悪の視線に気圧されながらも気丈に言い放った。

「捕虜身分の保証を要求する」

シユウはデニケンに近寄り静かに問いかける。

「なぜ戦闘とは無関係の施設を攻撃した」

穏やかな口調であるが、言葉の中には抑え込まれた怒りが覗われる。

「戦略上必要な攻撃をしたまでだ。ここでの尋問を拒否する。即刻しかるべき場所へ移動したい」

「答えろ。言っておくが僕は軍人ではない。だから軍人同士のルールは無関係だ」

それは今まで見たことも無いシユウであった。

「あのゾイドのコクピットに座った時から、破壊衝動のようなものが生まれなかったか。これまでにない残虐な気持ちだ」

「確かに破壊的な気持ちにはなったが、それは戦闘での当然の感情だろう。それよりお前が軍人であるなしに関わらず一刻も早い保護を願いたい」

周囲の射すような憎悪の視線が注がれ、デニケンは委縮し始めてきた。シユウが問いかける。

「生きていたいですか」

「当然だ」

返答を聞いた直後、シユウの左拳がデニケンを殴り飛ばした。それは、共和国兵の中に積み重なった憎悪の感情を昇華させるための彼自身の判断による行為だった。もし何の行動も起こさず、捕虜として保護しようとするれば、周囲に渦巻く憎悪の念が敵のパイロット一人に集中し、残虐な私刑に至る可能性も想定されたからだ。

シユウにしてみれば一触即発の状況で打った苦肉の策であったのだろう。仰向けに倒れた敵兵の身体に寄り添うと庇うように周囲を見渡した。

「看護兵はいないか」

デニケンは担架に乗せられ、捕虜収容施設に移送されていった。

「皆さんには、御心配おかけしました」

「心配なんかしてなかったわ」

キャロラインの言葉にシユウは苦笑した。言葉とは裏腹に、彼女の瞳が潤んでいるのをエレナは静かに見守っていた。

左手と額に包帯を巻いたチャンス少佐、シユウを知る調査団の生き残りの兵士、そしてギルベイダーを撃破した勇士の姿を一目見ようと集まった人々の中、彼はこれまでの経緯を語り出した。

ビームスマツシャーによって撃墜されたサラマンダーは、墜落途中自らの命と引き換えにシユウをコクピットから脱出させた。基地の炎上によって発生した気流は、射出された落下傘を海上まで運び、基地周辺海域で遊弋していたサラマンダー洋上部隊を護衛するウルトラザウルスに発見され収容された。炎上する基地を前にして一刻も早い脱出を図った部隊は、そのまま進路を中央大陸に向けていた。脱出の衝撃による意識の混濁と海上落下時の低体温症に苦しんでいたシユウは、エントランス基地への連絡を取る事もできず、仮に出来たとしても基地側の受信施設は全て破壊されていたため、その後の消息を伝えることが出来なくなっていたのだった。

傷も癒え、首都の内務省に赴いた彼は、大統領本人に直接基地の惨

状を報告した。同時に姪であるルイーズ・エレナが行方不明である事を伝えると、その時ヘリックは無言で立ち上がり、彼に背中を向けた。

「マドレーヌ作戦に期待しよう」

呟いたのはそれだけだった。

為政者としてのヘリックは、弟ゼネバスに次ぐ重要人物としてエレナを認識していたに過ぎないが、伯父として弟の血を継ぐ姪を救えなかったことへの葛藤も渦巻いていた。

未だに暗黒大陸の調査が終了していないことと、まだエレナが死亡したと確認されていないことを踏まえ、再び暗黒大陸への渡航を希望するシユウに、ヘリックは開発されたばかりの新型ゾイドを与えた。

「それがこのオルディオスです」

彼は眩しそうに白いゾイドを見上げた。久しぶりに雨雲の切れた空から、陽射しがカーテンのように降り注いでいた。

「先ほど敵に妙な尋問をしていたが、やはりあのシステムのことか」

チャンス少佐が待ちきれないように問いかけた。シユウは相変わらず滔々と話を続けるため、漸く訪れた発問の機会を逃すわけにはいかなかったのだ。

「技術的な事は判りません。ただし、ゾイドが潜在的に持つ闘争本能のみを増幅、尚且つその残虐性を増した情報を操縦者に逆流させ、徹底的に破壊と殺戮を行わせるシステムと言われています。未だに解明はされていませんが、僕の知る限りでは滅んでしまった古代ゾイド文明に繋がる謎のシステムが、この黒いゾイドに限定的に組み込まれている可能性があります。本体はほぼ無傷で手に入れられた機体です。このままタートルシップに載せて中央大陸で解析してもらいましょう」

オルディオスの背後では、ギルベイダーの巨体がタートルシップ格納庫へ回収されようとしていた。

後に判明する事だが、この機体に搭載されていた暗黒軍のオーガノイドシステムの原型“ダイレクト・リンク・システム”はオルディオスとの戦闘により完全に破損していた上、開発途上故に共和国技術局

側でも解析も出来ず、後の西方大陸戦争時まで解明は持ち越されることとなる（なお、ギルベイダーの機体自体は改修され、共和国側の改造ゾイド、シルバーベイダーのフレームとなったことを付け加えておく）。

「さて、チャンスさん。大統領からの特命を受けて参りました。

マドレーヌ作戦への参加です。御迷惑かもしれませんが、もう一度僕と一緒に来てもらいたいのですが、宜しいでしょうか」

包帯の下でチャンス少佐が苦笑した。

「大統領の特命を断れるほど自分は偉くはないぞ。最初から人を巻き込むつもりだったのだろう、違うのか」

「まあ、その通りです」

シユウは変わっていない。敵のパイロットを殴り倒したとき、一瞬彼も戦争によって心が荒んでしまったのかと疑ったエレナであったが、その飄々とした風貌とデニケンへの最大の思いやりのための行為であった理由を知り、胸を撫で下ろしていた。

「では、チャンス少佐の看護担当者が必要となりますね」

キャロラインが有無を言わず話に割り込んでくる。先を越され、エレナは彼女の背後で数回大きく相槌を打つことしかできなかった。シユウに対しては彼女とエレナの立ち位置が逆転していた。シユウは複雑な表情を浮かべる。

「お二人の処遇については……」

チャンス少佐達一般の兵士を前にして、ルイズの身分を明かすことが出来ず口籠る。機先を制してキャロラインが告げた。

「決まりましたね」

再びエレナは、父の救出という目的に向けて大きく前進することとなった。

オルディオスの配備は暗黒軍に大きな衝撃を与えた。戦線への投入以来、半年以上に亘って無敵を誇っていたギルベイダーが立て続けに撃破されたからである。

更には同機体が共和国軍に500機以上配備されたという情報が駆け巡り、それまで一方的に中央大陸への空襲を繰り返してきた暗黒

軍も、一時渡洋爆撃を見合わせる事態となった。無論これは共和国軍の流したフェイクであり、猜疑心の強いガイロス皇帝であるからこそ通じた情報戦略であることは広く知られている。共和国は漸く空襲の脅威から逃れることができたのだった。

ところでギルベイダーのコクピットの設計思想は、デッドボーター、ヘルデイガンナーに連なるキャノピー方式である。シユウの戦果に前後して『暴れ馬』ロイ・ジークルーガ中尉によって撃墜された機体は、有人戦闘ゾイド最大の弱点であるコクピットへの直接攻撃によって敗れ去っていた。この為、次に開発された大型ゾイドであるガンギヤラドにはゼネバス帝国由来の装甲式コクピットが採用されることになる。

一方の共和国軍側ではオルデイオスの完成によりギルベイダーへの対抗手段を得たとはいえ、未だに劣勢は挽回されていなかった。バトルクーガー、ゴッドカイザー等の新型ゾイドの開発は継続されていたものの、共和国軍の戦略の優先順位は、第一にキングゴジュラスの完成と戦線への投入、第二にマドレーヌ作戦であった（尚、グローバリィIII世号の修復は極秘事項であったため、実質的にマドレーヌ作戦は三番目に位置づけられていた）。

双方一歩も引かない決戦の上空に、巨大彗星ソーンが接近を続けていた。

25 (2056年)

エレナをゼネバス兵動員の為のプロパガンダとして利用し、シユテルマーの周囲を煩く嗅ぎまわっているという男の存在は聞いていた。ゼネバスの前に恭しく跪き、謁見を許されたにも関わらず、男はなかなか顔を上げようとしなない。

形式通りの儀礼的な会話の後、男は顔を伏せたまま本題を切り出した。

「敵は新たに投入されたペガサス型ゾイドを全面に押し立て、大陸深部の首都方面に向け侵入して来ました。

我が軍も、ガンギヤラドやアイスブレイザーなどの新型ゾイドを投入し迎え撃ちましたが、敵は物量に任せて着実に制圧範囲を広げ、カオスケイブ、デビルメイズを越え、現在ニフル湿原にまで迫っております。

最前線で奮戦する勇敢なるゼネバス同志の為にも、是非とも元皇帝陛下のお力添えを願いたく、本日は参内致しました」

共和国軍の進出速度が予想以上に早いことに驚く。そして、かつての同志が戦闘の前面に押し出され、異郷の地で次々と斃れているという現実にも。その男が何を言わんとしているのかは自ずと理解出来た。

「最前線への巡幸をせよ、というのだな」

「御高察の通りでございます」

拒否という選択肢がないことも知っていた。目の前の佐官も態度こそ丁寧だが、立ち居振る舞いの端々に侮蔑とも憐憫とも受け取れるような仕草が見え隠れする。

ゼネバスに再びシニカルな悪戯心が湧き上がって来た。この佐官が自分の要求にどう答えるかを。

「ヴァーノン中佐と申されたな。巡幸に当たり条件を出したい。いつまでも髀肉之嘆を託っているのは性分ではないのだ。

私に一台ゾイドを貸与して頂きたい。小型ゾイド、そうだな、ハンマーロックが良い。私自らが操縦し、戦場に到着すればどれ程兵士を

鼓舞できるか」

佐官は徐に顔を上げ、感情の無い平板な口調で答える。貼り付けた様な無表情であった。

「閣下の御要望には最大限沿いたい所存ではありますが、突然ゾイドと申されましたも。護衛であればダークホーン中隊を随伴させます。御心配には及びません」

かつて皇帝時代には、最低でも十個師団を率いた自分の護衛が、今は中隊規模に低下しているとは。ゼネバスは煮え滾るような屈辱感を必死に抑え、今の彼に出来る限りの丁寧さで、目の前の無表情な佐官に要求を続けた。

「護衛などいらぬ。私を道化師扱いするな」

精一杯抑制して、これがゼネバスの限界であった。佐官は恐れるどころか、先ほどの無表情を崩し口角を上げる。

「わかりました。御用意致しましょう。幸い先日回収したハンマーロックが改修を終えたとの報告を丁度受けております。中央大陸からの最後の機体です。貴重なゾイドですが、どうぞお使いください」
元来の所有者が誰であったのかを知った上で、その男は放言している。彼の逆襲はまだ続いた。

彼はゼネバスを説き伏せる材料を二つ持っていた。鞭と飴の順序で提示するのも、彼の話術の常套手段である。まずは相手の感情を逆撫でし、徹底的に追い詰める情報を事前準備しておくのであった。

「ところで、閣下にお尋ねしたき義が御座います。」

閣下は以前、ウラニスク湾の漁民に御自分の書簡を託してはおられませんか」

思わず表情が強張る。瞬時に純朴なタクチエルという若者の顔を思い浮かべた。

「閣下の御名の入った不審な書簡を保持していた漁民がおり、確認のため接收致しました。念のため鑑定したところ、閣下の筆跡に酷似したものでした。」

単純な暗号文らしきもので記されていたので、すぐに解析が完了しました。

内容に関しては理解に苦しむ部分もありましたが、少なくとも暗号化のパターンは把握しております。何か御記憶が御座いますか」

再び跪き、時折上目遣いでゼネバスの様子を窺う。返答をせずにいると、構わず彼は続けた。

「我が軍の戦略の基本は、強力な敵は可能な限り引き寄せてから叩くことです。

書簡の信憑性については半信半疑ではありましたが、敵を誘引し兵力を漸減してから本土を攻撃する為に、試みとして『最終兵器』を餌に敵に発信してみました。

共和国は見事に策に乗り、ブラツディゲートでの第一次上陸部隊の撃破と、敵の呼称するエントランス湾での攻防戦へ導くことができました。

閣下には、当時ニカイドスで偽名を名乗られていたため、御承認を得られませんでしたが、本日謁見の機会を得られたので、改めて御報告させていただきます」

ゼネバスは身を固くして彼の言葉を聞いていた。

よもや自分の残した書簡が、暗黒軍の手に渡り兄の国を巻き込み戦乱を拡大させたとは。そして現在前面で死闘をしているかつての同胞は、暗黒軍の戦略上、所詮時間稼ぎのための囷に過ぎないことも知った。ゼネバス兵と共和国軍とを戦わせ、敵が疲弊した時期を狙ってガイロス本隊が叩く。なぜ共和国軍の進出速度が早いのかも納得ができた。

兄の国を新たな戦乱へ導き、多くの同胞を戦渦で失い、なおかつ自分を救ってくれた純朴な青年さえも巻き込んでいる。その原因全てが彼自身にあったと気付かされたのだ。

「その時の漁民はどうした」

絞り出すような声で、ゼネバスは尋ねた。

「古びたブラキオスを破壊したというだけで、その他の情報は残っておりませんが」

若者にとって、あのゾイドがどれ程貴重なものか。破壊されたと言うことは、彼も無事ではないだろう。仮に無事であっても漁を続ける

ことは困難となったに違いない。

ゼネバスは、今更ながら己の軽率さに臍を噛んだ。

「どうかお気になさらずに。決して閣下への不審が高まることの無いよう取り計らっておきます」

この男は全てを見越した上で話を持ち出したのか。ゼネバスの思考の中で、気泡が無数に湧き上がってくるかの如く、抑え込んだ怒りの炎が燃え滾っていた。意に介せず男は言葉を繋ぐ。

「それと、本日は閣下にとつて由縁のある方をお連れしました。よく御存知の方と思います。旧縁を温め直すのも一興かと」

ヴァーノンが短く合図をする。

背後に人影が現れた。

怒りに満ちていたゼネバスは、その人物を見た瞬間にそれまでとは全く別の感情に支配され言葉を失った。

幾分痩せたかも知れないが、あの頃と殆ど変わってはいない。奥床しく控える姿は彼女の内面をそのまま映し出すかのように。

聞き取れないような、そして聞き逃すことのできない、透き通った懐かしい声がした。

「皇帝陛下、再びお会い出来る機会をお待ちしておりました……」

言葉の末尾は、噎び声となっていた。

「マリー……」

共に暮らした女性が、彼の前にいた。

王宮に設けられたゼネバスの私室に、窓から差し込む白夜の陽射しが、無言のまま立ち尽くす二つの影を長く引いていた。

マリーが召喚されたのは、ヴァーノンの打算によるものである。反骨心旺盛なゼネバスが、容易に巡幸の要求に従わないことを予測し、彼を情報部の意向に従わせるために利用したに過ぎない。鼻先に餌をぶら下げられるような屈辱的な手段ではあるが、全てを納得した上でも、ゼネバスはその手段に懐柔されてしまっていた。

自分の単純さに呆れながらも、互いに魅かれ合い共に暮らした女性との再会は、老境に達している身の上とはいえ切なくも甘い感情が込

み上げた。

「姑息な真似をしてくれたものだ」

対峙する沈黙を破ったのはゼネバスであった。

但し、発した言葉も二人の間に漂う重苦しい空気を振り払うほどの効果はない。

再び訪れた沈黙の後、漸くマリーも口を開いた。

「中佐からお話を聞きました。少しでも陛下のお力になればと思
い、恥を忍んで参内いたしました」

「他人行儀は止めてくれ」

感情に任せて言い捨てた後、彼は自分の言葉の矛盾を悔いた。

今は他人ではないか。マリー・プロイツェンという別姓を名乗る嘗
ての妻に、今更昔の夫としての威厳など意味の無い事だ。

「すまぬ。粗野な物言い、許して欲しい」

依然彼女は口を噤んだままである。儂げな微笑を湛えたまま、僅か
に視線を横に逸らして立っている。

「恥じる必要などない。全ては私の責任だ。ただ、既に他家に嫁いで
いることを知っていた故、会うことは敢えて避けてきたのだ」

「存じております。それに例え陛下が私を嫌いになられても、私は陛
下をお慕いしておりました」

ゼネバスは面映ゆくなり、彼女に背を向ける。

「それは元皇帝という権威に対してのことか」

くすつ、と小さく笑う。振り向くと、口に手を当てて微笑むマリー
の姿があつた。

「天邪鬼なのは変わりませんね。あれからお歳を重ねておられるはず
なのに」

「すまぬ。いつも御見通しだったな。素直に喜んでいい。これで良い
な」

「はい」

応えると同時に、マリーはゼネバスの胸に飛び込んでいた。

白夜の陽射しに、影が一つになった。

「あれから変わりはないかったか」

「それを私に言わせるのですか」
「すまぬ」

マリイが再び笑う。

「さきほどから陛下は謝ってばかりでございませう。いつからそんなに素直におなりですか。エーヴ様に叱られましたか」

彼女にとつても出すことが躊躇われるはずの名を、屈託なく言い退けた。他の女性を愛したことを知った上で、ゼネバスを受け入れた彼女らしい言葉だった。その心遣いに打ち解けたゼネバスも、自分でも驚くほど素直に答えていた。

「いや、どちらかといえ、娘に叱られていた」

「エレナ様のことですね」

「ああ、エーヴやそなたよりよっぽど口煩い。一体誰に似たのであろうか」

静かに笑いを堪えるマリイにゼネバスは困惑する。

「……お判りにならないのですか」

「私はエレナほど頑固者ではないぞ」

「親子という証拠ですね。どうやらゼネバスの娘は、父親譲りのお人柄のようで」

今度はゼネバスが沈黙する番であった。不服そうに、抱き合ったままの彼女から視線を逸らす。

二人にとつて、永遠とも一瞬とも思える時間が過ぎた後、マリイが囁いた。

「陛下、内密のお知らせが御座います」

口調が先ほどと打って変わって真剣になる。ゼネバスは再びマリイの瞳を見つめた。

「これは母親である私しか知らぬこと。ですが陛下にだけはお伝えしておきます。

あれから私は懐妊し、一人の男子を授かりました。

名をギユンターと申します。肌の色こそ違えども、面影が陛下とよく似ております」

「それは、まさか……」

二人は再び離れ、見つめ合った。

「ムーロワの世継、陛下の息子です。私は命に代えてでも、この子を
守っていく所存でございます」

激しい衝撃が胸を打った。

自分に息子が生まれていた。エレナとは別の、男子が。

ゼネバスは、喜びとも悲しみとも言えない複雑な感情が込み上げる
のを実感した。

待ち望んでいた継嗣が既に生まれ、嘗ての妻が育てていたという現
実。

そしてその妻は他家に嫁いでいる現実。

運命の皮肉に、ゼネバスは掻き筆られるような焦燥感を覚えた。

マリーだけに任せることは出来ない。どんなことをしても、我が子
を守っていかねばならない。それが自分たちが続く、新たな世代を築
くもの達である以上。

ゼネバスは窓の外を見上げた。

そこに、巨大な彗星の姿が横たわっていた。

26 (2056年)

彼がギガノトサウルスの噂を聞きつけたのは、この西の大陸に渡って間もなくであった。

「南の巨大な竜」を表す名称からも、その野生体が南半球特有の種類であることがわかる。

収斂進化という用語程度は、専門家ではなくも一応知っていた。北半球固有種の巨大肉食恐竜型野生体がゾイドゴジュラスの原型となったように、同種の野生体がニツチ(生態的地位)を埋めるため、南半球にも収斂進化の末に存在している可能性は以前から示唆され続けていた。

但し、長引く戦渦により西の大陸深部への探索は遅々として進まず、数例の現地目撃談を除いては、その存在は殆ど謎となっていた。限られた資料から得られていたのは、その野生ゾイドは、頭蓋の特徴がゴジュラスというよりはアロザウラーの近種であること。体軀も幾分細身であり、歯列もより鋭いものであるという程度のことしかなかった。

屍骸を含め、野生体が捕獲されたという記録はなく、その成体がどれ程の大きさに成長するのかも未確認である。一部、ゴジュラスと同程度の大きさとの報告もあったが、問題はその移動速度であった。

最高速度約200km、到底信じ難い。同クラスでこれほどの速度を出せれば、充分高速ゾイドとも呼べる。

多くの謎を秘めた巨大ゾイドは、彼の興味を惹くには充分であった。

西へ進むに連れて、疎らまばになっていく入植地。この大陸の奥地には、未だ手つかずの自然が残っている。植生は大きくは変わらないものの、時折遭遇する野生ゾイドの形態は、明らかに中央大陸のものとは異なっていた。

レッドラストと名付けられた砂漠地帯を越え、極端に狭まった北部と西部を繋ぐ地峡を渡り、そこから更に南に進路を取る。南緯15°を越えた辺りから、突然植生は大きく変化した。

大陸氷河に覆われた南方大陸を起源とする南極地域の寒流が、南エウロペ西岸の海岸線に沿って北上している。その為、位置的には亜熱帯に属するはずのこの地域の気候を、極端に寒冷なものに変えていた。

海岸から渡ってくる海風と、地表が発する熱との気温差により、海岸線周辺は常に真つ白なシーフォッグに覆われ、視界は数十mに届かない。

未開の原生林と、白い闇に包まれた海岸線を、纏わり付く霧の湿気を浴びながら彼は一人で彷徨した。

切り立った断崖に砕ける波濤の音も、生い茂った森林に吸い込まれ、海がどの方向にあり、どれ程の距離があるのかも掴めない。あたかもこの世界に、自分一人しか存在しないのではないかとも思えるほど、周囲は静寂に包まれていた。

ただ彼は、自分が一人ではないことを証明するものを常に身に着けていた。

時折微細に響く機械音。備えられた超小型のコアが、やはり超小型のサーボモーターを作動させる音が、彼の左腕から聞こえていた。彼の生体部分が放つ電気信号を受容し、瞬時にして運動に変える。

装着した最初の内は、見る度に戦闘による悪夢を呼び起こす禍々しい物体にしか思えなかった。

だが、あの深山幽谷の中で過ごした日々が、彼を変えた。

不気味な腕の作り物は、やがて製作者の優しさに満ちた芸術品であることを。

失ったものより残されたものの尊さを知ること。

何のために生きるのか、ではなく、何のために死ぬのかを考えることを。

戦場を離れて以来、生きる価値などないと自分自身を全否定してきた。しかし必要なのはどのように“生きる”かではなく、どのように“死ぬ”かということに気付いた時、彼の世界は有限であるからこそ広がって行った。

彼も、少年の頃からゾイドは大好きだった。いつの頃から、雄々しい

戦闘ゾイドを操縦することに憧れるようになった。軍に入隊し、共和国ゾイド乗りの頂点であるゴジュラスドライバーを目指し不屈の努力を重ねた。

念願叶ってそのコクピットに身を委ねる事が出来るように成った時、時代は既にデスザウラーが全てを圧倒していた。強化された量産型のMk-2を以てしても、性能の差を埋めることは如何ともし難く、嘗ての主力機は雑兵同様の扱いとなり、支援のための砲撃を行う砲台と化していた。

やがてゼネバス帝国は崩壊。引き続き勃発したガイロス帝国との戦争で、彼はデスザウラーをも上回るギルベイダーの攻撃により、搭乗機は切り裂かれ、自らも左腕を失った。

失血のため消えかかる意識の中、彼は思っていた。

「自分たちは、何処まで強くなればいいのかだろうか」

力を欲すると同時に、力を憎んだ。

力とはなにか。それは相手をねじ伏せるものことだろうか。

『暴力によって一つの問題を解決する。するとそこから、新たな問題が生み出される。だから、暴力での解決は本物ではありません。非暴力の解決は、百パーセント満足がいかないかもされない。しかし少なくとも、新たな暴力という副作用は生まれないのです』

深山幽谷の宮殿で、あの人物が語っていた。

我々は、ゾイドと共にこの星に生まれた。

ゾイドと繋がるのが、我々の生きる術である。

しかし、現在の我々とゾイドの関係はどうだ。

戦闘のためだけに成育され、改造され、果てはプログラミングされている。

野生の息吹を持つ、生命としてのゾイドは認められないのか。

この星に育まれる生命の源を明かすためにも、野性味に溢れたゾイドに出会ってみたい。そして共に生きる望みを叶えたい。

だから旅に出た。「自分探しの旅」ならぬ「ゾイド探しの旅」に。それこそが自分のレゾンデータルであると思えたから。

左腕は相変わらず低いモーターの音を響かせている。これも一種

のゾイド、機械生命体だ。既にゾイドが自分の一部となっている以上、この旅に十分な意味は存在している。

左腕を見つめながら、彼は取り留めもない出来事を回想していた。そういえば、あの女性の名は何と叫びたのだろうか。

有り触れた名前のように、すぐに思い出せないが、金色の髪が風に靡く素敵な人だった。

幽谷の宮殿で、最後に静かに語り合ってからどれ程の星霜が廻ったのだろう。魅力的な女性であったことは確かだが、瞳の奥に輝く光が、彼女の意志の強さを表していた。

凜々しく引き締まった眉と、花のような笑顔が、その人が強さと優しさを兼ね備えていることを示していた。

旅の途中で多くの人々と出会い、その中にも数々の魅力的な人物もいたというのに、未だに彼女の面影が離れない。

記憶が混濁していた地獄の戦場で、彼女と出会っていたらしい。

周囲を白熱に染め上げる天空からの飛来物、出現した黒い翼、降り注ぐ黒い雨。

現実という悪夢を越えて、いまここに自分が存在できるのも、彼女がいたからこそだ。

もし、この旅の目的が達成されたら、必ず彼女に会いに行こう。

「でも、あの人は今どこに」

自分でも愚かな事と思う。

海を渡って広がった戦場の中、彼女は自分が知らない場所で、今も傷病兵の為に尽くしているに違いない。再び出会うことなど、露ほども叶わぬことだろう。

もし出会えたとすれば、それは奇跡だ。

そして自分は、奇跡など信じない。

人は絶望的になると神々に祈り、神々は絶望的になると嘘をつくものだと戦場で知った。

この想いは孤独による気の迷いなのだ。

彼は心の中で苦笑していた。

密林に、時ならぬ咆吼が轟く。

地表が揺れる。地震ではない、重量物が駆け巡っているのだ。

咆吼は一方から聞こえるのではない。少なくとも2箇所、多くて4箇所から間断なく聞こえてくる。

突然、彼の頭上に巨大なゾイドの頭部が出現した。霧に覆われた林中、最初どんなゾイドかわからなかった。頭部に続いて長大な頸部が現れ、その先端が霧に隠れる頃に漸くずんぐりとした胴体が現れた。その奥には更に頸部と同じくらいの長さの尾部が続いていた。

セイスモサウルスと呼ばれる竜車型（竜脚類）ゾイドの野生体だ。ギガノトサウルス同様、エウロペにのみ棲息する固有種。このゾイドを見るのも彼は初めてであった。無敵とも思えるほどの巨体を有していたが、その様子はどこかおかしい。

何かに脅えている。彼の目前を、大地を揺らして決死に駆け抜けていく。

引き続き密林から咆吼が聞こえる。距離が狭まっているようだ。

彼は気がついた。これは狩りだと。

風上から追いついてる囀のハンターが獲物を追い込み、逃げた先には止めを差す別の個体が待ち構えているに違いない。哀れなセイスモサウルスは、ハンターの術中に陥っていることも知らず、次第に罠に向かつて追いついて立てられているのだろう。一連の行動から、ハンターは真社会性を有する、非常に高い知能を持つ生物ということがわかる。

霧の奥から湧き上がる振動。再び巨大な影が現れる。ハンターの一匹に違いない。

その影はあまりにも速く、全景を捉える前に彼の前を駆け抜けた。辛うじて彼が判別できたのは、それが肉食獣らしき獣脚類という程度だった。

やがて、二匹の駆け抜けた密林の奥から悲壮な慟哭が響く。そして間もなく、先ほどから響いていた咆吼が一際高く吠え立てた。捕らえられたものと捕えたもの双方の叫びに違いない。

地表が再び大きく揺れ出した。数匹の巨大な物体が叫び声の起こった方向に進んで行く。

共同ハンティングの獲物を、互いに分け合うために集まっているの

だ。

彼は、ハンティングの現場に向かって駆けだした。

ブツシュを抜け、幾つかの切り傷を受けながら彼が辿り着いた先では、文字通り野生の姿そのものの死闘が展開されていた。

巨大な野獣が、セイスモサウルスを襲っている。二匹が頸部に喰らいつき、一匹は腹部を喰い破ろうとしていた。

身体の大きさこそゴジユラスに準じているが、ゴジユラス野生体とは明らかに違う。何より動きの敏捷さは比較にならない。報告通り、幾分細身で頭部も小振りである。アロザウラーの亜種と聞いていたが、セイスモサウルスに食らい付く度に、それとの大きな相違である。幾つもの背鰭が、波を打つように揺れていた。

襲撃の手順は、まず視覚や思考を司る頭部を襲い、獲物の動きを止めること。

決して頑丈とは言えない竜脚類の頸部に、ハンターは執拗に鋭い牙を立てている。

やがて頸部は音を立てて垂れ下がり、表皮一枚で繋がっているだけの金属の塊と化した。

切断された頭部からは、だらしなく垂れ下がった機械的な舌部が伸びていた。

辛うじて立っている胴体腹部に、先ほどから攻撃を加えていた一匹と合わせ、首を落とした二匹が喰らいつき、間断なく表皮に牙を立て喰い破ろうとする。三匹の鋭い歯列が全く同じ場所を襲う見事な連携であった。

セイスモサウルスの首の付け根と左前脚の間の表皮に大きな亀裂が奔った。食い破られた表皮の下から、内臓を思わせる原色の金属器官が現れた。神経節や血管を思わせる無数のケーブルが体内からはみ出すと同時に、赤黒い循環液が湯気を揚げて滴り落ちる。傷口に頭部を突っ込み、コード類を引きちぎりながら食らい付くハンターの群れ。獲物を前にして、緑色の眼光が満足げに輝いている。

セイスモサウルスの腹部傷口が光り出した。コアが剥き出しになる前兆である。ハンター達にとって、直接エネルギーを摂取できる貴

重な部位だけに、各個体は垂涎しながら腹部に齧りついていた。

ハンター達にとってアクシデントが起こる。

蹂躪されたと思えたセイスモサウルスの尾部が、突然唸りを上げて一匹のハンターを跳ね飛ばしたのだ。

ゾイドはコアさえ無事であれば、頭部がなくても活動することが可能な場合がある。このセイスモサウルスも、頭部を失ったとはいえ後肢から尾部の作動系は無事だった。生命体の純粋な防衛本能が、襲いかかるハンターを追い払おうとしたのだ。

格闘には不向きと思われがちな雷竜だが、その長大な尾部を勢いを付けて振り回せば、ハンター側も思わぬ逆襲に遭う。左前肢を失い、頭部を欠いているものの、セイスモサウルスは視覚に頼らず周囲のハンターの気配に向けて、しなる鞭のような尾を振り回し始めた。不意を突かれて跳び退いたハンター群は、攻めあぐねて身構える。

すると霧の奥から一際高く、長く轟く咆哮が起こった。

先ほど吹き飛ばされたハンターが、唸りを上げるセイスモサウルスの尾を物ともせず突進してくる。瞳の色は怒りのため真っ赤に染まっていた。立ち塞がる木々を薙ぎ倒し、暴風のように迫り狂うその個体は、戦闘ゾイドであるゴジユラスやデスザウラーをも凌ぐ凶暴な姿であった。

ハンターの突進に、頭部の無いセイスモサウルスの身体が備える。

ハンターは尾の振り回される範囲の外で地面を削りながら立ち止まった。間合いを読み切ったのだろう。瞬時に前傾姿勢となり、二列に並んだ背鰭を突き出す。

彼はハンターが何をするのか全く理解できなかった。

次の瞬間、背鰭の前から3番目の二枚が、激しい光芒を放った。

ただの光ではない。背鰭から放たれた光の矢は、ゾイドコアを源とする指向性と質量を持った素粒子のバンチ（粒子の束）であった。空気の分子と激しく反応し、小規模な雷鳴にも似たプラズマを発生させる。光圧が周囲に漂う霧のカーテンを吹き飛ばし、白い闇は一瞬にして晴れ渡る。彼は数日ぶりに青空を仰ぐと同時に、身体が激しく後ろに吹き飛ばされることを実感した。圧縮された空気の塊が、ハンター

の背鰭を中心にして半球状に広がったのだ。強い向かい風に押されながら、彼は必死に瞳を凝らして光の行方を追った。

光の矢が手負いのセイスマサウルスに突き刺さる。

ハンターの牙をもつてしても容易に食い破れなかった表皮を、光の矢は左後肢上方から右前肢下方を串刺しにして、いとも容易く貫いた。

途端に力なく頽れるセイスマサウルスの巨体。忽ち石化が始まる。コアを射貫かれたのだ。

彼は、中央大陸からやってきた人間としては初めて、その野獣の怒りの攻撃を目撃した。

後に、ゴジュラスギガと呼ばれるギガノトサウルス野生体固有の武器、ゾイドコア砲。

北半球のゾイドゴジュラス野生体は、地球から飛来したクローネンブルグ博士の改造によりレーザー兵器を搭載されたが、この野生体は改造を施されずとも光学兵器を使用することができたのだ。

身体が巨大化すれば、体積は身長の上乗りに反比例して熱の発散面積を失っていく。内部に籠もる熱を発散するために、背鰭は大型の恐竜型ゾイドには不可欠の器官であるが、このギガノトサウルス野生体は、体内の熱を直接獲物への攻撃に振り向ける機能を有していたのだ。

自然の中で育まれた、想像を超える合理的な機能。あたかも盲目の時計職人が精巧な懐中時計を組み上げた如く、収斂進化の究極の到達点を彼は目撃したのだ。

止めを刺した個体が、長く勝利の慟哭を上げていた。

密林に響き渡るその雄叫びは、新たな王者の降臨を顕すかのようにであった。

「ついに見つけた」

彼は思わず歓喜の声を上げる。

しかし、光圧によって吹き飛ばされた青空の一辺に、白く長く尾を曳く彗星が顕れていた。気がつけば、日中にも関わらず、緑やオレンジの輝きを帯びて流星雨が天空から降り注いでいる。

リチャード・ジー・キヤムフォードは、その時宇宙からの脅威が迫っていることに漸く気が付いたのだった。

月明かりに照らされ、白く輪郭が浮かび上がった雲が夜空を流れていく。窓から差し込む月明かりの中、少年が静かな寝息を立てて眠っている。部屋のドアが静かに開かれ、軍服に身を包んだ男性が少年の寝顔を見つめていた。

肩に毛布を掛け直し、そつと少年の頬に手を当てる。小さく寝返りを打つが少年が目覚めることはなく、男性は静かに部屋を後にした。閉じられたドアの向こう側、男性の背後には、ガウンを纏った女性が立っていた。

二人の視線が交叉する。

「出撃されるのですね」

「君にはすまないと思っている。が、これは私に課せられた責任なのだ」

「謝るぐらいなら、出撃はお止めください」

静かな、しかし厳しい口調であった。言葉を返せず沈黙する男性に、彼女は美しい微笑みを湛えたまま答える。

「後悔などあなたらしくもありません」

最初から覚悟はしています。あなたは私の夫である前に、国民にとっての大統領なのですから。

後のことは任せてください。御無事でお帰りになる事をお待ちしております」

男性は、彼女を強く抱きしめた。

暫しの別れを惜しむ為、数分の間互いの温もりを確かめ合った後、男性は彼女から身を離すと、一步の間合いを空けて見つめた。そして彼女に向かって敬礼をする。

「行ってくる、ローザ」

「行ってらっしゃい、大統領閣下」

奥の部屋で、少年は変わらず静かに眠っていた。

流星は未だに降り注いでいた。

※

オルディオスの投入によって、ギルベイダーへの対抗策を得た共和国軍だが、敵の首都であり重要な軍事拠点でもあるダークネスを臨むニフル湿原にまで進撃した時点で、大幅に停滞してしまう。

一つの理由は、ギルベイダーによる本土空襲の被害が、ここに来てボディーブローの様になっており、共和国軍の後方の補給線を滞らせてしまったことだった。武器弾薬を始め、兵員の食料や日用品など、必要とされる大量の物資の生産が間に合わなくなってしまったのだ。

また、大氷原の戦いや、中央山脈でのヘリツクルート確保の戦いなどで、寒冷地に対する戦闘に熟知していた共和国軍も、意図せずして発生したダイポールモード現象（大洋の西側で豪雨が降り、東側で早魘が起こること）の降雨による永久凍土層の融解により、泥濘と化した湿原に足場を取られていた。グスタフは動けず、大型ゾイドはおろか中型のゴルヘックスでさえ進むこともままならなくなっていたのだ。

オルディオスやバトルクーガーは、四肢と低空飛行を行い進軍することもできたが、主力であるウルトラザウルスやマッドサンダーなどの支援がなければ暗黒軍との戦闘は行えない。加えて、海岸線からはニュータイプに改造されたブラキオスの一群が、共和国軍の進路に対し思い出したように砲撃を繰り返し、迎撃に向かった共和国軍の攻撃部隊は本隊から離れた途端にギルベイダーによる襲撃を受けるといふ繰り返しになっていた。

強い敵は誘き寄せて叩く。暗黒軍の伝統的な戦闘方法は、依然継続されていた。

巧みな暗黒軍の戦闘方法も共和国軍を悩ませていたが、それ以上に深刻であったのが磁気異常であった。

オルディオスを含めて、飛行ゾイドの殆どはマグネツサーシステムという地磁気との反発によって飛行するシステムを利用していた。ところが、巨大彗星ソーンの接近に伴い地磁気に著しい変動があり、サラマンダークラスの大型ゾイドの飛行に支障が現れるようになっていたのだ。殆どの飛行ゾイドは悉く機能障害を起し、辛うじてダブルソーダーの哨戒飛行が出来る程度に低下していた。対照的に、ギル

ベイダーとガンギヤラドは、ゾイド星の北の磁極に近い暗黒大陸に起源をもつゾイドのため、磁力線耐性が強かった。機動性の低下は認められたものの、依然飛行能力を失うことは無く、共和国軍の攻撃を継続することが可能であった。

更には、降り続く豪雨が、光学兵器を主力とした共和国軍の攻撃力を奪った。雨の中ではガンブラスターの黄金砲も威力は半減する。シールドライガーMk-2のダブルキャノンも、撃てないのであれば高速ゾイドにとってデッドウェイトにしかならない。純白の美しいゾイドも、暗黒大陸の地では泥に塗れた無残な姿を晒していた。

中央大陸の明るい陽射しから長く離れた共和国軍兵士達の間にも厭戦感が高まり、士気は上がらない。泥沼を踏み締め進軍する歩兵と、やはり泥沼に嵌りながら進むゾイド操縦者との間にも軋轢が生じていた。互いに神経質な操縦を強いられる苦悩と、自らの脚が泥濘に嵌り無数の小さな虫に皮膚を食い破られる苦痛を慮る余裕がなかったからだ。

戦争は、文字通り泥沼化していた。

エレナは陰惨な戦場の姿を再び目の当たりにしていた。

シユウの駆る煌びやかなオルディオスの姿も、悲惨な現実の前には霞んでしまう。連日の如く傷病兵が運び込まれる。以前と違い傷病者の後方への移送は速やかに行われていたが、負傷者が出ているという現実に変わりはない。

齎される情報から、暗黒軍が次第にダークネス方面に退き、まるで共和国軍を導き入れているように移動していることがわかる。ゼネバスが首都ダークネスに生存している可能性が高い以上、マドレーヌ作戦は進行しているともいえる。従って作戦の中止はない。

エレナはやり切れない気持ちで一杯になっていた。

「あなたはどうか考えていますか」

前線が進むにつれ、頬が落ち次第に無口になって行くシユウに、エレナは問いかけた。

彼は視線を定めず、オルディオスのパイロットスーツを着込んだまま、冷めたコーヒーを口にしていた。

「敵の策略にまんまと嵌められましたね。第一次上陸部隊を送った段階で、既に共和国軍は泥沼に陥ってしまったのですよ。今にしてみれば、あなたの父上殿の暗号も僕たちを誘き寄せたと思えます」

降り止まない小雨の中、弱く光る白夜の太陽が地平線に張り付いている。

「進退窮まっていることは事実ですが、あなたの父上を救出することは重要です。一刻も早くマドレーヌ作戦を完了させ、中央大陸に戻りましょう」

「ありがとう、シユウ」

テントの外でルイーズの名を呼ぶ声がする。戦場での従軍看護師には、僅かな憩いの時間も与えてもらえないのだ。立ち上がろうとした時、シユウは彼女に呟いた。

「この星は、もうおしまいかも知れません」

エレナは一瞬耳を疑った。何処までも楽天的で明るい彼が、これほど絶望的な言葉を口にするとはなかったからだ。

「送られてきた天文台からの情報と、僕が独自に計算した結果によると、いま見えている巨大彗星はこの惑星の衛星軌道に侵入します。質量と進入速度からして間違いなくロツシユ限界を超えて破碎され、惑星の地表面に大量の岩塊を降り注ぐはずですよ」

この星の金属生命体が漸進的に進化を続けてきた理由に、定期的な生命の大量絶滅の痕跡が地層に刻まれています。そのサイクルが丁度今の時期と重なっているのです」

エレナには、彼の言葉の全てを理解することはできなかったが、この星に脅威が迫っていることだけはわかった。

「対策はないのですか、シエルターを建造するとか」

「無駄です。大量絶滅が一度発生すれば約数十年から数百年に亘って影響を及ぼし、生態系を根こそぎリセットさせます。それ故に優れた生命体であるゾイドが発生出来たのです。僕たちはとんでもない時代に生まれてしまったのです」

エレナは衝撃の為に暫く口を噤んでいた。

「伯父様は、ヘリック大統領は御存知なのですか」

「先日報告させて頂きました。折り返し送られてきた書簡には、極秘事項として扱うようにとの確認印がされていました」

既に共和国首脳は、この宇宙規模の大災害を予想しているという事実に、彼女は意識が遠退くほどの不安を覚えた。戦争などしている暇はない。一刻も早くこの星に住む人々の力を合わせて、宇宙からの脅威に立ち向かわなければならぬ。

「そしてもう一つ。一部の科学者達のなかで、大統領府に招集されて以降、戻ってこない人たちがいるのです。僕も呼ばれましたが、御覧の通り暗黒大陸にいたので行けませんでした。大統領からは、マドレーヌ作戦を速やかに完了し、あなたとあなたの父上と共に戻ることを極秘に厳命されました」

「二体、それは……」

エレナは問いかけた後、彼が何を言おうとしているのかも予想が付いていた。

まるで空想上の絵物語の結末か、あるいは極度の選民思想に偏った宗教伝説の如き現実が、共和国の何処かで進行しているに違いないのだ。この星を捨て、何処か別の星へ旅立つために。

シユウは悲しげな顔でエレナを見上げた。

「僕は断るつもりです。この星を捨て、ゾイドを捨てて逃げる事なんてできはしない。この作戦が終われば、お二人を送り届けた後、この星に残るつもりです。」

僕の席は、そうだな、お姉さまに差し上げます。

人の短い一生の間、いや、種の存続する期間でも、滅多に巡り会うことの出来ない貴重な経験ができるのです。科学者として本望ですよ」

彼は遠い目をしていた。純然たる探求心が、例え自分の命と引き替えにしても見（まみ）えたい一大イベントを心待ちにしているかのよう。シユウは決して厭世論者ではない。彼なりに悩んだ末に到達した結論なのであろう。とすれば救済の手段は残されていないのかも知れない。

エレナは受け入れることなど出来なかった。命に代えてまで経験したい知識など存在しない。彼の姿勢は間違っていると。

再び彼女の名を呼ぶ声がするが、その呼び声は湧き上がった外の響めきに掻き消された。

突如として地の底から湧き上がるような振動が周囲を襲う。地震とは違った揺れ方に、二人は思わず外に飛び出した。

最前線のニフル湿原、海岸線の臨める仮設司令部のテントの外で、水平線上に悪夢のような威容の軍団が姿を現していた。

周囲に五隻のウルトラザウルスを従え、その背後には舟艇に搭載された長大なロングレンジキャノンを背負うゴジュラス Mk-2 が牽引されている。フロート製の装備されたマッドサンダーと、希少な改造ゾイド、グレートマザーまで引き連れていた。

剣山の如く重火器の砲身が林立する後方、これまで最大を誇ったウルトラザウルスさえ華奢に見えるほどに、巨大な新型ゾイドが半身を海上に浮かべている。

まるでそのゾイドが嵐を生み出しているかの如く、直上に纏わり付くように雷雲が湧き上がっている。地震のような震動は、明らかに巨大ゾイドの方向から発生していた。

胸部に取り付けられた三つのリボルバー式の砲門が、鈍く暗黒大陸の日差しに輝く。広げた両腕は、デスザウラー以上に凶悪なものである。

エレナには、そのゾイドがデスザウラーやギルベイダーを凌ぐほどの巨大さを誇りながら、ゾイドとしての威圧感や嫌悪感を一切受け取ることができなかった。

最早それは、金属生命体とは言えない化け物のような存在であった。

頭部の赤い一本角がゆつくりと明滅し、次第に進路を陸上に向けて突き進んでくる。

「とうとう完成させてしまったんだ」

傍らに立つシユウが呟いた。

「あのゾイドは」

「キングゴジユラス。封印されていたテクノロジーを応用した、共和国軍の最終兵器です」

共和国軍の暗黒大陸最終上陸作戦「リベンジ・オブ・リバー」発動。

この星の歴史全てを終末に導くかの如く、キングゴジユラスは一際高く咆吼していた。

28 (2056年)

マルダー、ツインホーン、ゲーター、イグアン……。

嘗てのゼネバス帝国機甲部隊が蘇ったかのようなのであった、ただ一点を除いては。

それらの機体全ての装甲が、漆黒に緑色の燐光を放つデイオハリコンに置き換えられていた。ゼネバスの操るハンマーロックもその例外ではなく、見慣れた小豆色と鈍い銀色の塗装ではなくなっていた。

デイオハリコンの影響なのか、コアの出力が上昇していることもわかるが、明らかにオーバーロード気味で機体に負担がかかっている。短時間であれば中型ゾイドをも凌ぐパワーと敏捷性を発揮できるかも知れないが、それだけ機体の寿命を削ることだろう。自分たちが今まで築き上げてきた技術を踏みにじられるような屈辱感を噛み締めながら、ゼネバスは巡幸予定地点に向かって機体を進めていた。

周囲を護衛するダークホーン部隊から入電した。

「慰問部隊は漸次待機、特命あるまで現地点で進行を停止せよ」

状況が分からず、とりあえず進路左に機体を寄せて停止する。随伴していた伝令らしき歩兵が、ゼネバスの搭乗するハンマーロックに駆け寄り敬礼をした。

装甲式コクピットを開き応じる。

「一体何が起こったというのだ」

小型ゾイドとしては高い位置にあるハンマーロックの操縦席から、身を乗り出して問いかける。

「前方、ニフル湿原にて敵増援の上陸部隊が出現。現在海上での迎撃戦を敢行中ですが、敵の兵力は強力で、防衛戦は突破されつつあるとのことです」

ゼネバスを見上げながら、伝令兵は精一杯の声を張り上げ報告する。

「敵兵力はどれほどのものか」

ゼネバスを護衛するイグアンのパイロットが、ハンマーロックの隣から問います。

「確認された限りでは、ウルトラザウルス級5、マッドサンダー5、Mk-2装備のゴジュラス2、そして機種不明の超巨大ゾイドが1との報告です」

「機種不明？ 新型か」

詳細は不明です、とだけ答えると、伝令はそのまま先頭のダークホーンに向かい駆け出していた。

この局面で共和国が新型を投入するというこの意味を、ゼネバスは大凡予測がついていた。兄が動き出したのだ。それも死力を尽くして。ウルトラザウルスを従えて、尚且つ超大型と目視される以上、恐らくはギルベイダーをも上回る破壊力を秘めているに違いない。恐ろしい事が起こる。これまで経験したことの無いような。

撤退命令を受けた部隊が、ダークネス方面に進路を変えるのを見ながら、ゼネバスはハンマーロックのкокピットからニフル湿原方向の海岸線を見つめた。白夜の広がる青味がかかった灰色の空の一面に、不自然な積乱雲が湧き上がっていた。

※

海岸線から、悪夢のような軍団が次々と上陸を始めている。

周囲を打つ豪雨は勢いを増し、降り頻る雨滴の中に多くの大型ゾイドが霞む中、ただ1機、雨滴にも霞むことなく、恐ろしい程の速度で突き進む巨大なゾイドがあった。

共和国最終上陸部隊の編成は、前方にマッドサンダーとグレートマザーが、中央にゴジュラスを牽引するウルトラザウルスが配置され、^{しんがり}殿をキングゴジュラスが護衛していた。

彼らの接近は早々に帝国海軍に察知され、ブラキオスを主力とした水上部隊とウオディックを主力とした潜水艦隊が全兵力をあげて迎撃に向かった。それに前後し、フンスリュック基地より待機中であったギルベイダー1機がスクランブル発進をして、一足先にニフル湿原付近海上に飛来した。

最高速度マツハ4を誇るギルベイダーだが、鈍足の共和国最終上陸部隊に対し戦闘速度で接近することを怠っていた。亜音速の巡航速度で接近する全幅約40mの黒い翼は、上陸部隊からも遠景から目視

される。それがギルベイダーにとっての致命的なミスとなった。

その機体のパイロットは、愛機が崩壊する瞬間を最期まで見届けていたに違いない。本当の悪夢とは、夢の世界にはない事を知ったはずだ。

ビームスマッシュャー発射態勢か、或いはプラズマ粒子砲を準備していたかは判らない。射撃の軸線上に、赤い角を持つ巨大ゾイドを捉えた時、機体全体に爆発したような振動が発生した。耳を弄する轟音と、大脑を切り刻まれるような極度の不快音。パイロットの残されていた視覚に映ったのは、目の前のコンソールからギルベイダーの巨体が砂の様に崩壊していく姿であったはずだ。

ウルトラザウルスの艦上でその光景を目撃していた共和国軍兵士は、味方の作り上げた兵器に身震いしたはずだ。なぜならそのゾイドは、常識を超えた「音」を使って、長く最強ゾイドの地位に君臨してきたギルベイダーを一瞬にして葬ったからだ。

ギルベイダーの赤い偏光ガラスに覆われたコクピットがまず崩壊する。続いて格闘戦でも苦しめられたチタンクロウが砂礫と化しボロボロと海上に落ちていく。発射間際だったのか、装甲板の接合面に沿って崩壊した黒い両翼のあった場所には、形成不完全のビームスマッシュャーの光輪が残っていた。胴体、背部フェルタンク、後肢、尾部。乾いた砂で造形された像を、強力な風圧で吹き飛ばすような破壊。最後の爆発すら許さないほどの強力な音波兵器。スーパーサウンドブラスターの破壊力は、子供の砂遊びの如く最強ゾイドを消滅させた。

海上に幾つもの長い首が擡もたげた。遅れて到着したブラキオス部隊であり、水面下にはウオディック部隊も待機していた。指向性を持つソニックブラスターが、共和国上陸部隊に向けて発射されていたはずだ。

ウオディックが音波砲を搭載している理由は、水中では屈折により光学兵器が使用できない代わり、空気より密度の高い分確実に標的を破壊できるからである。スーパーサウンドブラスターはその音波砲を数千倍、数万倍に強化したものと考えればいい。つまり密度の低い

空気中の物質でさえ破壊するスーパーサウンドブラスタ―を、海中に向けて発射すればどうなるか。

指向性を極限までに高めている為に、円状のソニックブームがキングゴジユラスの口蓋から先にかけて形成され、白い輪が間断なく発生していた。海上に擡げていた幾つものブラキオスの首は一瞬にして崩壊した。少し遅れて水中から幾つもの水柱が立ち上がる。水という媒体は、ウォディックと残されたブラキオスの胴体に爆発することだけは許したのだ。キングゴジユラスが首を巡らせる度、薙ぎ払われた幾つもの爆発が海中から続き続ける。

発射の軸線は、その白い輪によって目視することはできるが、防ぐことは不可能であった。速い。その動きはあまりに速すぎるのだ。

キングゴジユラスは、ウルトラザウルスを凌ぐ巨体でありながらまるで小型ゾイドの如く軽々と海岸線に上陸を果たした。重さを感じられない。ウルトラザウルスのような重量感はなく、敏捷な肉食獣のしなやかさで巨体を軽々と作動させている。

それは機体を取り囲む重力フィールドによるものであり、周囲には一般の物理法則が通じない空間が展開していた。全長36mの巨体が時速140kmで移動する恐ろしさは、恐怖を通り越し滑稽さまで感じられる。悪い冗談、馬鹿馬鹿しい戯言。この世のものとは思えない存在。それが目の前で動き、戦っているのだ。

遮断された重力によって変化した気圧が機体の上空に集中し、激しい雷雲を伴った豪雨を降らせる。

降り頻る豪雨の中浮かび上がった巨大な影に、赤い眼と角が明滅していた。

「あれはゾイドなのでしょうか」

見上げるエレナが問いかけ、同様に見上げるシュウが、視線を固めたまま答える。

「どういうことですか」

「金属生命体とは思えない。ゾイドとしての存在感も全然感じられない。まるで機械の塊そのもの」

キングゴジユラスが西を向いた。ゴジユラス2機を引き連れて、そ

のまま大陸深部に進撃を開始する。

白夜の薄暗い空一面に薄い赤紫色の炎が燃え上がった。それまで微弱に輝いていたオーロラが、天空の導火線に点火したかのように無数の光芒を放ち、二重三重のカーテンに変化する。暗黒大陸の空は、嘗て見たことも無いオレンジ色に染まり、光の大蛇が巨大な蜷局（とぐろ）を巻きながら北に向かって突進を始めた。

「ポールワードエクспанション（極方向爆発）だ。通常の太陽風の数十倍の荷電粒子が放出されている。太陽極小期なのにプラズマシートが伸びて来るなんて。」

……すると、まさかあのゾイドが電磁波の発生源なのか」

シユウが慌ただしく出撃準備を始める。

「何が起きたのですか」

「サブストーム（極光嵐）の爆発です。水平方向に太陽があるのに、磁気嵐が極方向から発生している。彗星とは別の磁極がこの惑星の双極子磁場を刺激しているのです。オーロラ爆発がブレイクアップすれば大量の誘導電流が発生し、殆どの電子機器が破壊されてしまう」
彼はキングゴジュラスを睨みつけた。

天空のカーテンに断続的に緑色の炎が点火し次々と燃え上がる。首を廻しても見切れない光の饗宴に、エレナはシユウの説明が理解できないながらも明らかに異常現象が発生していることを理解した。

「僕も出撃します。誰が操縦しているかは知らないけれど、あなたの父上を救うことが先決です。キングゴジュラスが進撃すれば敵の防御網にも穴が空くはず。王宮に先回りしてゼネバス皇帝を救出します」

パイロットスーツを整え右手にヘルメットを持ったシユウの左手を、エレナは咄嗟に掴んでいた。

「私も連れて行ってください」

「だめです。あなたは自分の立場が分からない人ではないでしょう。それに僕がお姉さまに叱られます」

「理屈じゃないのです。もう時間がない。キャロルには私が説明します。だからどうか私を、私を父の元に……」

痛い程に左腕を握り懇願するエレナに、シユウは冷徹になり切るこ
とができなかった。彼の脳裏に亡き父アイザックの面影も過ぎつて
いた。父への思慕は、彼にしても痛いほどに判る。兄を亡くし、父を
亡くした悲しみを思い返すほどに、彼はエレナを振り切れなくなつて
いった。

「僕は奇蹟を信じません。所詮偶発性によつて引き起こされた事象に
過ぎないと思つています。だけど、今はあなたたち父娘（おやこ）の
絆の可能性を信じましょう。」

パイロットスーツを着てください。オルディオスのコクピットは
狭いですよ、覚悟してくださいね」

「はいー」

エレナはシユウがコーヒーを飲んでいた後ろのロッカーを開き、自
分の体格に適する小さめのスーツを手を取った。白衣のまま着込む
には無理がある。やむなくシユウには後ろを向いてもらい、耐G機能
を持つタイトなパイロットスーツを素肌に纏った。冷たいスーツの
質感が戦場に赴く緊張感を高める。シユウは身じろぎもせず後ろを
向いていたが、着替えが終わるころ徐に口を開いた。

「ルリーズ、いいですか」

「もう少し……待ってください」

最後のベルトが留められず、エレナは何度も位置を確認してはやり
直す。なかなかフラスナーを上げることができない。背後で悪戦苦
闘する彼女を知らないまま、彼は背中越しに語り始める。

「生きて中央大陸に戻り、あなたとあなたの父上、そしてお姉さまをグ
ランドバロス山脈まで送り届けたかった。義務でも使命でもなく、た
だ皆さんを救いたかった。でもどうやらそれは不可能のようです。
申し訳ありません。許してください」

丁度フラスナーが上がり、エレナはパイロットスーツを着終えたと
ころだった。

「いいですよ、シユウ」

振り向いた彼に、エレナは右手の拳を宙に突き出した。

「私達だけ助かって、幸せだと思いますか」

シユウは何時になく寡黙である。エレナはにっこりと微笑む。

「愛する人を救うために誰かが犠牲になつても、遺された人たちはそれだけ重荷を背負いこむことになる。幸せは一人のものではなく、みんなで分け合うものよ。行きましよう、生き残るために」

打ち沈んでいた表情が、次第に生氣を漲らせていく。彼も利き腕の左拳を差出し、エレナの拳と軽く叩きあった。

「参りました。さすがはゼネバスの娘です。僕のオルディオスは少々じゃじゃ馬ですが、ルリーズが乗るにはぴったりですね」

「それは褒め言葉として受け取っておきましょう」

駆けだす二人の前で、黄金の武器を持つ白い天馬は最後の使命を果す為、純白と緋色に彩られた翼を雄々しく羽ばたかせた。

※

仄暗い格納庫の中、巨大な物体の鼓動だけが響いている。目を凝らしてみてもその全体像を把握することができない。配電盤が操作され、一斉に点灯されたライトに浮かび上がったそのゾイドは、グロテスクなまでに歪な様相を呈していた。

「皇帝陛下専用建造された最強の改造ゾイド、ギルザウラーだ」

誇らしげに語るヴァーノンの背後に、デスザウラーの機体にギルベイダーの翼とダークホーンのハイブリットバルカンを備えたゾイドが聳えていた。個々のゾイドの特徴的な武器を装備した、確かに最強のゾイドとも見えるが、部品の接合は急造感が否めず機体としての統一感を欠いていた。

美しく無い。そしてこの機体では勝てない。シユテルマーはゾイド乗りの直感として受け取っていた。

「この機体で戦えと」

「不服か」

吐き捨てるように短く答えると、ギルベイダーの耐Gスーツを着たままのシユテルマーを睨みつける。彼は臆することなく反問した。戦術的にも愚行としか思えないからだ。

「事態が急を要することは判るが、皇帝専用機をなぜ自分に与えるのだ。磁気嵐の中の緊急招集の為止む無くギルベイダー初号機で参内

したが、自分にはロールアウト直後から搭乗してきた初号機で戦い抜く自信がある。今更別の機体に乗換えるつもりはない。それに中佐殿が言われるように、これは皇帝が操縦する為に建造されたものであろう。自分如き輩が扱う代物でもあるまい」

会話をしている瞬間にも、敵の超巨大ゾイドが王宮に接近している。シユテルマーは口調が早口になるのを自覚していた。

頻りに視線を左右に巡らしている。ヴァーノンは最初から意見を聞く気など持ち合わせていないらしい。やがて視線を左側に落とすと、徐に髑髏にも似た不気味な仮面を取り出した。

「貴殿の初号機は有効に使わせてもらおう。案ずる必要はない。何よりデスザウラー、ギルベイダーの操縦を熟知した優秀なパイロットは貴殿しかいないのだ。この仮面を被り皇帝陛下の身代わりとなって、敵の侵入を防ぐことが今回の任務だ」

その仮面に見覚えはあった。あの時、謁見した王宮で見たガイロス皇帝の仮面だ。耐Gスーツのヘルメット越しには到底被り切れそうもない。彼の懸念を察してか、ヴァーノンは自分の顔と並べるように仮面を持ち上げた。

「何もこの仮面を被って操縦しろとは言わない。コクピットの中に置いておくだけでいいのだ。帝国臣民に対し、皇帝陛下が勇敢に戦っている姿を伝えることができさえすればいい」

彼はその時理解した。今までガイロス兵の盾となって散って行ったゼネバス兵を何人も見てきた。そしてついに自分の番が巡ってきたことを。

しかし当然の如く湧き上がる感情がある。なぜガイロス皇帝の為に戦わなければならないのか。

「ゼネバス殿が行方不明なのは御存知か」

そんな考えを見透かしたようにヴァーノンは衝撃的な事実を告げた。

シユテルマーの表情が一瞬にして強張る。そんな情報は一切把握していない。やはりこの男は切り札を残していたのだ。

「巡幸地であるニフル湿原最前線にてダークホーン中隊とともに連絡

が途絶えている。磁気異常の為に通信も通じず、撤退命令も届いていないことだろう。

敵の進路上に、丁度行方不明となった地点が重なっている。閣下が存命であれば必ず敵の超巨大ゾイドと接触することとなる。閣下自らが操縦されているハンマーロックなどひとまりもないであろう。少しでも対抗できる機体を使って閣下を救出したいとは考えないかね」

事態は一刻を争う。ギルザウラーという機体をどこまで操れるか、どれ程の能力があるかは未知数だが、少なくともギルベイダー以上の戦力ではありそうだ。

シユテルマーは無言で仮面を受け取ると、ギルザウラーの搭乗エレベーターに向かっていった。改造ゾイドのコアの鼓動が過剰なまでに鳴り響いている。気がつけば、鼓動は彼のものと同調していた。コクピット後部に仮面を放り込み、周囲に林立する整備塔を排除させる。形式的な出撃コールを宣言する。

「ギルザウラー起動」

開きつつある格納庫の扉の向こう側、空には長く尾を曳く巨大彗星が横たわっていた。

一瞬の判断が明暗を分けた。

衝撃波を直接受けた機体は砂細工同然に崩れ去り、咄嗟に近くの窪地に滑り込んだハンマーロックだけが辛うじて破壊を免れていた。戦士としての判断力と、単なる偶然に恵まれた。かといって全く被害を受けなかったわけではない。コンソールから飛び散った電気的な火花が瞬間的に噴き上がり、自動消火装置が作動するまでコクピット内は数秒間だけ炎が充満した。

無数のハンマーで装甲板を叩かれるような轟音が去った後、ゼネバスは周囲が異様な静寂に包まれていることを感じた。衝撃波による轟音で聴覚が鈍っていたこともある。だが実際に、殺伐とした静寂が接近して来るのだ。

岩陰に身を潜めたままコクピットを開き周囲を見渡す。そこに広がっていたのは、森林に無秩序に投棄されたゾイドの残骸であった。

林立する樹木によって拡散された衝撃波は、直撃を受けた機体同様に地上のゾイド群を崩壊させるには至らなかったが部隊が消滅した事実には代わりない。堅牢を誇るダークホーンは装甲板に乾いた泥細工の様な無数の亀裂を負って摺座し、スーパーサウンドブラスターの衝撃でコアの過剰活性が励起され最終的には内部崩壊へと導かれた。首や四肢等の関節部から内部爆発によって機体は切断され、吹き飛んだ部品が茂みの中に散乱していた。大木の枝にダークホーンの頭部や前肢が垂れ下がる光景は痛々しいまでに悲惨であった。

小型ゾイドは機体ごと崩壊し、残骸の中のディオハリコンの燐光のみがそこに機体が存在した残滓となった。森林の中で小規模な火災が発生している。物質硬度の違いにより崩壊に取り残された炸薬が、破碎の残り火によって燃え上がっているのだろう。

ゼネバスは、それを初め蜃気楼の類と思い込んでいた。ウルトラザウルス以上の巨体でありながら移動に伴う振動を一切感じさせない。まるで実体のない虚像が地表を滑るが如く移動してくる。動きがあまりに素早い。吐き気を催す程に不気味な俊敏さで接近する。後方

には沛然として驟雨が降り注ぎ、周囲の森林地帯を吹き荒ぶ雨滴のヴェールが包み込む。

あれはゾイドではない。この長年にわたる戦乱によって命を失った亡者達の怨念の集合体だ。

戦略も戦術も存在しない。補給線の確保も無関係にして援護さえ必要としない。意志を持つ災害の元凶が、いまゼネバスの目前を通り過ぎようとしていた。

※

「お願いだから、真っ直ぐ飛んでください」

木の葉のように翻弄されるオルディオスに、シユウは何度も懇願していた。

帝国首都ダークネスに向けて進撃したキングゴジュラスを追跡するため飛び立った二人ではあったが、地上を時速100kmほどで進撃する重量物を、磁気異常によるマグネツサーシステムの機能不全、加えて激しい豪雨と向かい風に揺さぶられ、音速で飛行可能なゾイドが追い付けないでいた。元来ゾイドの搭乗にも慣れていないシユウとエレナも、振動により胃液が逆流する不快感を味わっていた。

「見えました、キングゴジュラスです」

風雨の為に全身像は確認できないが、頭頂の赤い角の輝きが灯台の如く存在を顕示している。周囲に追従する機体は他にない。漸く二人は最前線に到達したのだった。

敵の接近を告げるアラート音が短く響く。シユウは咄嗟に3Dレーダー画面を確認した。

「前方より敵接近。機影4、大型です。ギルベイダーに違いはない」

僅かに切れた雨雲の隙間から、赤い眼を光らせたギルベイダーが、漆黒の翼を広げキングゴジュラス目掛けて接近をしていた。

※

ギルベイダーのコクピットの中、イマヌエル・デニケン中尉は漸く与えられた雪辱の機会に狂喜していた。捕虜交換条約により数週間を経て帰還した帝都ダークネスで、彼は軍司令部より屈辱的な処遇を与えられた。仮にもギルベイダーの操縦を任されるまでに築き上げ

てきた彼のプライドを、あの白いゾイドはずたずたに引き裂いたのだ。臥薪嘗胆の思いを秘め、営倉の中で屈辱の日々を堪え忍び、遂に復讐の機会を得られたのだ。

与えられたのはギルベイダー初号機。DLSの装備されていないロールアウト直後から実動を重ねてきた歴戦の機体である。以前の操縦者が誰であるかわからない。最終局面を迎えた戦況により不足した操縦者を補うため、営倉の中の自分に急遽役割が巡ってきたのだろう。何としても手柄を立て汚名返上しなければならぬ。この作戦行動は彼にとつて千載一遇のチャンスといえた。

僚機に3機のギルベイダーを伴い、接近しつつある敵の新型巨大ゾイドを迎え撃つ。同時に後方から、皇帝の搭乗するギルザウラーが出撃すると伝えられた。

もしギルザウラーの目の前で敵のゾイドを破壊すれば、最高の栄誉に能くすることも可能だろう。初号機故に機体劣化による耐久性に若干の不安が感じられたが、今更些細な事に拘ってはられない。

「ダークネス司令部に報告。目標を肉眼で確認」

沸き立つ黒雲を纏いながら、敵の巨大ゾイドが目の前に現れた。

ギルザウラーの接触までにはまだ充分な余裕がある。改造ゾイド故にバランスが悪く、ホバリング程度しか飛行できないことが推測された。それでも皇帝は着実に接近してくる。敵がどれ程の戦力を有していたとしても所詮は単機に過ぎない。ギルベイダー4機の一斉攻撃を以てすれば容易に撃破可能と思える。その時は、引導を渡す役割を皇帝陛下に残しておくことも考えるべきかも知れない。デニケンの思考の中で栄光の未来が駆け巡っていた。

コクピットで乾いた唇を噛み締めたその時、彼は敵巨大ゾイドの上空に忌々しい白い機影を確認した。

あの時のゾイドだ。

「本機はオルディオスを排除する。部隊は赤い一本角に突入せよ」

栄光の未来が吹き飛び、復讐の炎が燃え上がる。デニケンはオルディオスに向かって突入していった。

※

「前からギルベイダーが」

「回避行動に入ります。舌を噛まないように」

エレナは機体の左右にビームスマッシュヤーが飛び去っていくのを確認し、背筋が凍りつく感覚を味わっていた。マグネッサーのみでは対応し切れない為、シユウはオルディオスの四肢を思い切り空中で振り切り慣性によって漸く攻撃を躲したのだ。今戦ってもオルディオスには到底勝ち目はない。機体を激しく揺らしながら、シユウは急降下の姿勢をとっていた。

※

直下にはキングゴジユラスが威容を誇っている。3機のギルベイダーが一斉にビームスマッシュヤーを撃ち放った。大小12の光輪がキングゴジユラスの巨体に殺到する。

光輪が砕けた。キングゴジユラスの重装甲に触れると同時に、赤いガラス皿が飛び散る如く全て消し飛んだ。頭部ブレードホーンから放出されるグラビティモーメントバリアにより荷電粒子が干渉無力化され、装甲に傷一つ負わせることもできなかつたのだ。

1機が急降下を開始する。ニードルガンを撃ち込むためだ。正面にキングゴジユラスを見据え加速する。

次の瞬間、エレナも、ゼネバスも、ギルベイダーのパイロット達も、信じ難い光景を目撃した。

キングゴジユラスが跳んだ。頭部を上に向け、少しだけ両足の膝関節を曲げて勢いを付けた後、大地を蹴って全身が空中に舞い上がったのだ。最後まで地上に残されていたクラッシュヤーテールが下方に伸び切り垂れ下がる。そして伸ばした左腕のビツククローが飛行するギルベイダーの尾部を掴み、地上に降り立つと同時に叩き付けた。

引き摺り下ろされ、贖う術を失い四肢を上にして仰向けになったギルベイダーが蜿もがいている。キングゴジユラスは躊躇ためらうことなく踏み付けた。

金属が擦れ合う音と内部の循環装置が破裂する音、そして金属生命体としての悲鳴が周囲に鳴り響いた。雨に混じった潤滑油が一斉に噴き上がり、口腔からも破壊された内部部品が無数に吐き出される。

機体重量は軽減されているがゼロではない。Fllma、つまり加速度が膨大であれば破壊力は増大する。キングゴジユラスの脚部は想像を超えた速度で叩きこまれたのだ。

一度で大破したにも関わらず、キングゴジユラスは執拗に踏み付ける。僅かに翼と尾の先が震えていたが、間もなく微動だにしなくなっていた。

二度、三度……。四肢も翼も胴体も、踏み潰されて原型を失った黒い金属の残骸が、キングゴジユラスの足元で豪雨に打たれていた。

近接戦闘のリスクを警戒した残り2機が、キングゴジユラスの周囲を旋回し始めた。だが攻撃の間合いを取らせるほど、この最凶のゾイドは甘くはなかった。

胸部リボルバー式の砲身が回転を開始する。程なく目も眩む光芒が、降り頻る驟雨の中に螺旋の光条を描いて放たれた。

集束すると思われた光は、突如として拡散し、無数の矢となって二機のギルベイダーに殺到した。荷電粒子砲、レーザービーム砲、超電磁砲。それぞれの特性を融合し、偏光の原因となる雨滴や空気分子までも空間から吹き飛ばして射線を確認する。原理はガンブラスタアの黄金砲と同じだが、出力と破壊力が指数関数的に跳ね上がっていた。

蜂の巣になる、という表現があるが、まさにそのものだった。黒い機体に無数の赤い水玉模様が描かれ、穴だらけとなって落下した。カタルシスも何もない、スーパーガトリング砲の攻撃による、悪夢の光景だった。

※

「しつこい奴ですね」

デニケンのギルベイダーは、執拗にオルディオスを追撃していた。その白いゾイドに、嘗て屈辱を受けたパイロットが搭乗していることも知らずに。

彼にとっては最早、皇帝を前にしての軍功など目的からは吹き飛んでいた。牽制の為に尽きることなく撃ち続けたニードルガンが、遂にオルディオスの翼を貫いた。ただでさえマグネツサーが不安定化し

ている上に右翼の半分を欠損した白い天馬は、忽ち重力の井戸に捉えられた。覆い被さるように飛来したギルベイダーは、捕らえた獲物を着実に叩き落とす為、胸部のプラズマ粒子砲を発射した。

激しい振動と共にフレームを除いて翼を破壊されるオルディオス。暗黒大陸固有種の磁気嵐に適応性のあるギルベイダーとの戦闘は、この状況下あまりに分が悪かったのだ。

「脱出しましょう」

「無理です、高度が低すぎる。何とか不時着してみます」

雨滴でパラシュートが開ききらない危険性もある。そしてこれ以上自分の搭乗したゾイドを失いたくない。咄嗟には説明し切れなかった言葉を呑み込み、シユウは決死の着地を試みた。

四肢の関節を浅い角度で曲げ、着地時の衝撃吸収態勢を取る。重量物となるグレートバスター砲を強制パージ。尾部を水平に持ち上げ、可能な限り空気抵抗を増やす。フレームのみとなった翼にも、コアから供給可能な限りのエネルギーを送り、残されたマグネッサーステムで地表との磁気の反発を生み出すことも継続した。

迫り来る地表を前にシユウは叫んだ。

「歯を食いしばって」

数秒後、オルディオスは激突同然に地上に落下した。

※

空中のギルベイダー初号機で、復讐を成し遂げたデニケンが勝ち誇っていた。後方から味方の識別信号を発する機体が接近してくる。認識コード、皇帝ガイロスの専用機。

どうやらこれから陛下の御前で自分の勇姿を見せることが出来るらしい。

赤い一本角の巨大ゾイドを確認する。

どれ程強力であっても所詮同じゾイドだ。デニケンは敵の正面を避け十分な距離を取って攻撃の機会を狙う。情報にある音波兵器も先程のリボルバー式の回転砲も、背後からの攻撃には使えない。機体を敵の背後に向けたまま攻撃態勢を取る。

ビームスマツシャー、ニードルガン、プラズマ粒子砲、重力砲、ツ

インメーザー。

一斉射撃の火箭が伸びる直前、デニケンの意識は肉体とギルベイダー初号機と共に、この世から消滅していた。

※

岩陰から戦闘の経過を窺っていたゼネバスは、一斉射撃に移ろうとしていたギルベイダーが、天空から飛来した真っ赤な隕石によって貫かれる光景を目撃した。赤い矢に射られた黒い機体は胴体中央部から押し折られ、内部から炎を噴き出し落下した。その直下に火柱が立ち上がる。おそらく直径数mほどの小さな隕石であつたに違いない。だが音速の数十倍で飛来した物体は、ギルベイダーのウイングバリアーも重装甲も貫いて、操縦者自身も気付かぬままに機体を消滅させたのだ。見上げる天空には炎の雨が無数に輝いている。その多くが、海の向こう側、中央大陸に向かっていった。

「ついに始まったのか」

その時ゼネバスは、茫漠とした思考の奥で、眼前で繰り広げられる壮大な滅亡への秒読みとは全く別の事を思い浮かべていた。

「あのゾイドがあれば、ギンクスターを救うことができる」

※

頭の中で逆流するような怒りの感情。これほどまでに自分が感情的になれることに、彼は驚愕していた。禁断の技術の封印を解いてしまったことを心底後悔していた。キングゴジュラス、最早それは敵を徹底的に破滅に導く破壊兵器に過ぎないことを。

眼前に存在する敵は全て破壊した。もし味方であっても、進路上に存在すれば踏みつぶしたかも知れない。だから単機で、ダークネスのガイロス王宮に向けて進軍を開始していた。途中、幾つの敵を葬ったかも知からない。ギルベイダー、ガンギヤラド、デッドボーダー。初めて上陸した暗黒大陸の大地を、驚異的な機動性で突き進んでいく。

まだ結ばれる前の女性と共に改造ゾイド「ケンタウロス」で戦場を駆け巡った時の感情とは全く違っていた。背負うものが大きすぎる。この惑星の存亡が掛かっているのだ。もはや敵に情けなど掛ける余裕もなく、老いたこの身を捧げることで積年の戦いに終止符を打つこ

とができるのであれば命さえ惜しいとは思えなかった。

「ローザ、許してくれ。どうやら君の元には帰れそうもない」

自分の命と引き替えに、ガイロスと差し違える意志を固めていた。

そんな彼が正気に戻ったのは、正面にオルディオスが落下した時だった。

純白に黄金の武器を備えた機体が、ギルベイダーに翼を貫かれて落下していく。それでもパイロットは機体を捨てず、辛うじて不時着を成功させた。その最後まで生に拘る姿を見たとき、彼は思い出したのだ。

——御無事でお帰りになる事をお待ちしております——

妻の言葉、そして家族の思い。死んではいけない。そして見殺しにしてもならないことを。

隕石に貫かれ、残ったギルベイダーが墜落したことを確認すると、彼はキングゴジュラスの進撃を停止させ、倒れているオルディオスのコクピットの真上に覆い被さる姿勢をとった。重力制御が切断されると同時に脚部が地表にのめり込んでいく。

キングゴジュラスのコクピットから降りるには、本来専用のボーディングタワーを利用しなければならない。それ以外には緊急用の簡易ラダーがあるのみで、直立状態で地上約30m付近から儂げな蜘蛛の糸のようなワイヤーを頼りに降りる他ない。

可能な限り前傾姿勢をとらせてみても、キングゴジュラスの頭部からオルディオスのコクピットまで約10m近くの高低差がある。それでも彼は雨の中に身を躍らせた。

降り続いていた豪雨は幾分小降りとなったものの、依然足元は泥濘に覆われている。足場を確認しながら落下したオルディオスの機体上に降り立った。

飛行機能を失い、頭部を地表に預ける体勢でオルディオスは着地していた。落下の衝撃で開いたコクピットの中に、二人の兵士が意識を失っていた。

吐瀉物が気道を塞いで窒息する危険性もある。状況を確認する為フルフェイスのヘルメットを脱がせると、その下から見覚えのある顔

が現れた。

「シユウ、君だったのか」

アイザック將軍の遺児、共和国でも指折りの優秀な青年科学者。大統領府の執務室で、何度も大陸崩壊の原因追究の必要性を説かれていたことを今更ながらに思い出す。

口元に耳を近づける。呼吸は正常で軽い脳震盪を起しているらしい。彼はシユウの後方に座るもう一人のパイロットに視線を注いだ。ヘルメットの後ろからブロンドの髪が覗いている。

ヘルメットの下から美しい女性が現れた。出会ったことの無いその女性の顔に、ヘリックにとって懐かしい面影が重なる。遠い過去に袂を分けた最愛の弟。彼らの血の縛りが、直感的な理解へと導いたのだ。

「エレナ姫なのか」

彼女はコクピットの中で、眠るように気を失っていた。

※

敵の巨大ゾイドのコクピットに繋がれた搭乗装置が、ゼネバスの見上げる先にあった。今ならあのゾイドを奪うことが出来る。雨に紛れ、漆黒のハンマーロックでキングゴジュラスの背後に接近し、機体を降りて這い寄る。敵は撃墜されたオルディオスのパイロットを救出するらしい。歩兵を伴わず闇雲に進撃するなど、戦術の基本も知らない素人に違いない。

死角になる場所を探りながらオルディオスの頭部に這い上がり隙を窺う。キングゴジュラスのパイロットがオルディオスの後方のパイロットのヘルメットを脱がせたとき、大きな隙が出来た。

一瞬の間合いを措いて羽交い締めにし、両手をひねり上げる。ゾイドの操縦のみならず格闘技にも精通しているゼネバスには造作もないことであつた。敵は老齢のようだ。簡単に横転し右腕を押さえる。ゼネバスは同時に首を締め上げながら問い詰めた。

「起動キーをよこせ」

しかし、その人物を知っていた。

「ヘリック！」

「ゼネバスか」

奇しくも、長年隔てられていた兄弟は、降りしきる隕石の下で再会を果たした。

30 (2056年)

突然の再会に、暫く言葉を失っていた。

痛みの為に横転したヘリックであったが、ゼネバスが手を離れた隙に素早く身構えていた。背後には未だ気を失っているシユウとエレナがいる。

「まさか、ここで会うとは」

「それはこちらと同じだよ、ゼネバス」

一時的に豪雨が止んだ中、二人は数十年ぶりの会話をしていた。

「偉大なる大統領殿が、こんなところで何をしている」

ゼネバスが皮肉を込めて問いかける。それはヘリックにとっても同じ疑問であるが、その理由に答え合う余裕は無かった。

「最早この惑星には時間がない。そのけじめを付けるためにも、私は自ら戦場に赴いた」

「兄上には似合いませんな」

ゼネバスは冷笑を浮かべる。

「笑わば笑え。この老体に鞭打ってもやり遂げねばならぬことがあるのだ」

「命に代えても、ということか」

「如何にも」

無限とも思える沈黙が二人の間に流れる。

「お前には、この星を脱出し、新たな地平で生きて欲しいのだ。今からでも遅くない。最後の私の願いを受け入れてくれ」

「何のことだ」

到底冷静にはなり得なかった。積み重ねられた昔年の恩讐は、容易に二人の溝を埋めることなどできなかつたのだ。

「詳しいことを語っている暇は無い。巨大な彗星がこの惑星近傍を掠め大異変を起こすのだ。このキングゴジュラスをもってガイロスを滅ぼし、星の民を引き連れて宇宙に脱出する。その方舟に、お前はそこにいるお前の娘と共に乗り込んで欲しいのだ」

「今、何と言った」

ゼネバスが驚愕の声を上げる。兄との再会以上の衝撃であった。

「コクピットにいる女性のことだ。お前の母上にも似た美しい女性だ。一目見てわかったよ、彼女がお前の娘、エレナ姫ということだ」
その時、オルディオスのコクピットでシユウの意識が漸く戻っていた。頭部プロテクターからコクピットに流れ込んだ雨の滴が彼を目覚めさせたのだ。意識を取り戻した直後に、オルディオス頸部の鬘（たてがみ）の上で言い争う声が聞こえる。一人は大統領であること、そしてもう一人がゼネバスであることも理解した。

シユウは、オルディオスのコクピットをそつと持ち上げ、後方でまだ意識を失っているエレナに声を掛けた。

「ルイーズ、起きて。起きてください。あなたのお父さま、ゼネバス皇帝がいます」

呻き声を上げるものの、意識は混濁したままだった。

シユウは、思いきり彼女の肩を揺さぶり、父親との再会を果たしてやりたかったのだが、落下直後で怪我の状況もわからない。迂闊に動かして彼女の身体に取り返しが付かない事態を招くことを恐れ、軽く彼女の頬を叩く程度のことしか出来なかった。

無情にも時間は過ぎていく。雨が上がる代わりに、激しい隕石群が周囲への落下を始めていた。

「あのゾイドの破壊力を利用すれば、隕石を防ぐこともできるはずだ」
ゼネバスが問いかけにヘリックは答えた。

「キングゴジユラスは戦闘用だ。この星を守るようには作られていない」

「だから兄上は真面目すぎるのだ」

兵器は運用法次第で、いくらでも応用は可能だとゼネバスは考えていた。

「起動キーをよこせ。私が有効に使ってやる」
「出来ない相談だ。それにキングゴジユラスは固有の生体反応を照合させなければ……」

そこまで言って、彼は自分の迂闊さに口を噤んだ。自分以外に作動出来ないように、敢えてその装置を装備させた。つまり兄弟であるゼ

ネバスであれば、装置はパイロットとして認識してしまう。いまここに、キングゴジュラスを操縦出来る人間が三人いた。ヘリックとゼネバス、そしてエレナである。

ゼネバスにとって、兄の沈黙が何を示すかなど問題ではなかった。搭乗さえできれば操作は可能と考えていただけだった。

ヘリックに突進する。身構える彼は咄嗟に身体を躲したつもりだった。

「やはり甘いな」

ゼネバスは躲した方向向きを変え、右足を軸にしてヘリックを投げ飛ばす。背中を激しく打ち、肺を圧迫されたヘリックは呼吸を一瞬失い、激しく咳き込んだ。

搭乗ラダーに手を掛け、ゼネバスが見下ろす。

「残されたこの星の民を束ねられるのは、私やガイロス皇帝のような輩ではない。兄ヘリックよ、それがあなたの義務であり責任だ。

これは私がやるべきことだ。戦乱を招いた元皇帝として、また、ゼネバス・ムーロアという人間としても。

そして次の世代に繋いでいく。それこそが、我々老人の役目というものだろう。

エレナに伝えてくれ。

父は己の業を拭うため旅立つ。支えてくれる人々と共に強く生きろと。

娘を守ってやってくれ。私はもう一人、守らねばならぬ者のために行く。

これを、エレナに頼む」

ゼネバスが首に提げたものを引き千切り、横たわるヘリックの傍らに投げた。

焼け焦げたゼネバスの紋章であった。

「待て……ゼネバス……」

「さらばだ、ヘリック兄さん」

ラダーが上昇していく。天上の世界に彼を導くように。

恐ろしく長い搭乗ラダーだった。漸く達したコクピットに座る。

コンソールの脇に黒い手形が示される。

「生体認証装置か。厄介なものを」

最早躊躇する暇はない。ゼネバスは構わず左掌を手形に合わせた。ムーロアの血が、彼にこのゾイドの起動を承認させた。

認識完了の表示が明滅し、コンソールに灯りが点る。周囲を見渡すモニターが一齐に映し出される。予想外に円滑に起動した為、拍子抜けする程であった。

鹵獲した共和国製ゾイドの操縦にも精通していたゼネバスにとって、基本操作が同じキングゴジュラスの操縦など造作もない。

モニターの一つに、白いゾイドのコクピットに横たわる人物が映る。最大望遠にする。もう一人のパイロットが頻りに目覚めさせようとしていた。

頭部が動いた。軽く頸を振って、半身を起して周囲を見回す仕事まで確認できた。すぐにまた身体を横たえたが、どうやら命に別状はないようだ。

モニターの中のその人物が誰であるか、ゼネバスは判っていた。

髪も伸びて髪型も変わり、あれから幾分身長も伸びたようだ。華奢だった身体つきも、暫く見ぬ間に女性らしく成長していた。母にもエーヴにも似ている。そして自分にも。

最後に一度、抱きしめてやりたかった。

それが出来ずとも、会って話をしたかった。

せめて、旅立つ我が身と別れの言葉を交わしたかった。

そして、彼女が一人ではなく、ギンター・プロイツェンという弟がいることを告げてやりたかった。

全ては叶わぬ願いとなった。

「エレナ、お前達が生きるこの星を、私は守り抜いて見せる」

キングゴジュラスの脚部が周囲の泥濘を巻き上げて浮上を開始した。

ようやく声が出せるようになったヘリックのもとに、シユウが駆け寄った。

「大統領閣下、御無事ですか」

「シユウ、弟を、ゼネバスを止めてくれ」

進軍を開始したキングゴジュラスのクラツシャーテールが大地を削って行く。

後方から地響きを立てた一群が接近してくる。キングライガーとキングバロンの混成部隊、そしてその後方に2機のゴジュラスMk-2が突進してくる。

横たわるオルディオスにも目もくれず眼前を走り去った。彼らにとって、ヘリック大統領の搭乗しているはずのキングゴジュラスこそが重要であり、それ以外の目標は目に入らなかったのだろう。

更に後方からマッドサンダーとシールドライガーやコマンドウルフを引き連れた部隊が現れた。

その中に一台、繰り出される新型ゾイド群の中に混じって既に旧式となった青いカノンフォートが混じっていた。

機体番号を確認する。

「あれは僕の……お姉さまだ」

後続部隊に加わって、あの日以来戦場を共にしてきたカノンフォートを操り、離れていたエレナの髪飾り（バレッタ）が到着したのだった。

一時戻った意識だが、未だに混濁していた。閉じた瞼の裏側に映る網膜の像が眩しい。ルイズという、いつの間にか自然に自分の名前になっていた囁きが聞こえる。

もう、目覚めなければ。

ゆつくりと目を開けた時、彼女は横たわる自分の周囲で、3人の人物が覗きこんでいることに気付いた。

「ルイズ様！」

キャロラインが思いきり抱きしめた。まだ朦朧とする中、エレナは彼女に抱かれたまま辺りを見回す。

キャロルがいる。シユウがいる。そしてもう一人、老成した男性が見守っている。誰だろう、誰かに似ている。まさかこの人は……。

「お父さん！」

キャロラインの腕の中、エレナは叫んだ。背格好が良く似ている。

だが、その男性は違っていた。

「エレナ姫だね」

やはり違う。父ではない。口調も、髪の色も。それでも他人とも思えなかった。

「ヘリック大統領ですよ」

傍らに立つシユウが紹介した。ヘリック大統領、彼女の伯父。そして父の兄。

でもなぜ共和国総司令官がここに。

「すまない。君の父上を戦場に向かわせてしまった」

事態が呑み込めない彼女は、しかし父親が近くにいる事だけは察知した。すぐさま声をあげる。

「お父さんはどこ、私の父はどこへ」

「ガイロス王宮に向かった。私に代わってこの星を救うために。これを君にと」

ヘリックの手に、焼け焦げたゼネバスの紋章が残っていた。

(一体何を言っているのだろう)

混沌に閉じ込められたままのエレナに、更なる混沌が押し寄せていた。地の底から湧き上がるまだ微弱な振動を、その時彼女は感じ取っていた。

※

驚異的なパワーと機動性、キングゴジュラスの操縦は快適だった。ゾイドの操縦技術に於いては兄よりゼネバスの方が遥かに上回っている。皇帝とはいえ権威や貴種に拘らず、自らを鍛え上げてきた彼であれば造作もないことであった。後方からはゼネバスが搭乗しているとも知らない共和国軍ゾイドが追隨している。

悪い気分ではない。予備用の共和国軍ヘルメットを被りバイザーを降ろせば、口元は兄ヘリックと見分けがつかないほどだ。

「共和国軍大統領、及び総司令官として命令する。全軍、ガイロス王宮に向け突入せよ」

何の抵抗も無く受け入れる共和国兵に、ゼネバスはコクピットで苦笑していた。

だが前方に巨大な岩塊が飛来するのを目視した時、彼の思考は凍り付いた。

隕石がこのゾイド目掛けて落下してくるのだ。

キングゴジユラス内部を循環するエキゾチック物質は、重力制御を行うとともに高緯度地域に降り注ぐ隕石群を呼び寄せていた。強大な破壊力を手にすると同時に、大きな災厄をも呼び込んでいたのだ。

最初から心は決まっていた。全ての落下物を破壊しこの星を守る。それが娘エレナのためであり、生まれた嫡子ギユンターのため、この星に残される無数の民のため、そして新たな世代にこの世界を繋げるためであるからだ。

コアの出力を上げれば上げるほど隕石群が迫ってくる。

「いいだろう、全て破壊してやる」

ゼネバスは火器管制を全て解除した。

空に向けたスーパーサウンドブラスターの光輪が広がり隕石群が崩壊していく。胸から放たれるスーパーガトリング砲が撃ち洩らした隕石群を消滅させる。無限に続くような隕石の雨を、キングゴジユラスは単機で破壊し続けていた。

エネルギー出力のゲージも無限に供給されるようであった。これならばこの星は救える。ゼネバスは戦いに明け暮れた人生の最期を飾るにふさわしいステージを得られたことに歓喜していた。最早悔いはないと。

当惑し、その行動を共和国軍ゾイドが訝しむ。

「大統領閣下、王宮への攻撃許可をお願いします」

「各機の判断に任せる。私はここで隕石を防ぐ」

次々に各ゾイドから指示を求める通信が入る。切断しようにも大統領搭乗という特殊なゾイドだけに回線は開放されたままに設定されているらしい。構わずゼネバスは天空に向けて火器を撃ち放っていた。

進軍を停止し、逡巡する共和国軍ゾイド群の一面を赤い光輪が引き裂き爆発が広がる。

空中から異形のゾイドが舞い降りる。

シユテルマーの搭乗する皇帝ガイロスの専用機、ギルザウラーであつた。

31 (2056年)

シュテルマーは怒りに燃えていた。眼前のゾイドが皇帝ゼネバスを消滅させたと思ひ込んでいたからだ。

ニフル湿原での衝突で、無数に飛び散った慰問部隊のゾイド群の破片が確認されたことを知った。その殆どが原型を留めず、ゼネバスの搭乗したハンマーロックは判別できないほどに破壊されたことになっていた。この最凶のゾイドは、自分が最後まで守り貫こうとしていた人を遺体さえ残さずに消滅させたのだと。

最早、皇帝ガイロスの名代などという名目は要らなかつた。

この悪霊のようなゾイドを破壊する。そして亡き皇帝ゼネバスの魂に報いる。

絶対に、貴様だけは許せない。

シュテルマーはギルザウラーのコア出力をレッドゾーンにまで押し上げた。

隕石破壊に手一杯のキングゴジュラスを守るため、まずはキングバロンとキングライガーの高速部隊が立ち塞がった。

「忌々しい」

加重力衝撃テールが音速で振り落とされる。跳び退いたと思う先に背部の小型ビームスマッシャーを撃ち込んだ。忽ち切断され崩れ落ちる白い機体群。

周囲に砲撃が開始された。ゴジュラスMk-2のバスターキャノンが交叉砲撃を行い牽制している隙に、もう一台のゴジュラスがギルザウラーに躍りかかった。

シュテルマーが冷徹に電磁クローで薙ぎ払うと、ゴジュラスは左腕と左のバスターキャノンを失い泥濘の大地に倒れた。

マッドサンダーがマグネーザーの唸りをあげて突進してくる。デスザウラーにとって天敵とも呼べる武器も、ギルザウラーが飛びあがってしまえば対処は容易であった。反荷電粒子シールドの及ばない後方に、姿勢を変えて降り立つ。それまで右手に存在しなかつた光の剣が現れる。マイケル・ホバートが改造ゾイド「デスシャドー」に

実験的に搭載したビームソードである。無防備の後方をとられたマッドサンダーは、背後からハイパーローリングテャーザーをビームソードに貫かれ、加速をつけたまま機能を失い、遙か遠くで前のめに倒れて行った。

次々に襲い来る共和国軍の部隊に、シユテルマーは次第に焦燥感を濃くしていく。無数に湧いてくる敵のゾイドを、いつまでも相手にしていられない。

再びキングバロンが飛びかかった時、ギルザウラーの眼前で黒い渦に呑み込まれて消滅した。

「皇帝陛下、御無事ですか」

眼下には数台の赤い高速型ゾイドが立っていた。

デスキヤットのMBH砲という兵器だ。背中の砲身が立ち上がり、盛んに共和国軍へ牽制射撃を始める。

だが、それ以外には増援はいない。

その時、大半の帝国部隊は大陸南岸の共和国軍上陸地点周辺で最終決戦を開始していた。本来主力となるはずのガンギヤラドや鹵獲したアイアンコングなどが全て海岸線で戦っており、僅かにデスキヤットの新鋭部隊だけが王宮に残されるのみであったのだ。

更に、後方の丘にそびえる帝都ダークネスのガイロス王宮の一面に動きがある。噴煙をあげ城の一部が浮上し、飛び去ろうとしているのだ。

「ギルザウラー、応答せよ」

共和国軍以上に忌々しい人物の通信を受け取った。あの男だ。

「これより我々は極地域に近いヴァルハラに移動し、そこで再起を図ることとする。護衛を願う」

勝手な事を言う。言われずとも敵は全て殲滅する。シユテルマーの表情には、既に冷徹な殺戮マシーンと化した冷笑が湛えられていた。

幾つもの共和国ゾイドを葬り、中心で気炎を吐く赤い一本角に辿りつく。

その時思った。このゾイドは何をしているのだと。

空に向かつて降り注ぐ隕石を撃ち落としている。胸のリボルバー式の砲門も、全て空へと向けられている。その後方にはダークネスの市街が広がり、あたかもガイロス帝国の民を守るかのように。

そんな愚行があるのだろうか。敵の民を守るなど。

シユテルマーは知らない。その時キングゴジュラスを操るゼネバスが、首都ダークネスの何処かにいるという自らの嫡子ギユンターを守るための盾となっていたことを。

隕石に夢中で、何処を見ても無防備だった。牽制のため、彼は手始めにビームスマッシュヤーを撃ち込んだ。

グラビティモーメントバリアーによって光輪は砕け散る。やはり防御性能は完璧だ。

「これならどうだ」

光の剣、レーザーサーベルを一閃する。信じられないほどの速度でクラッシュヤーテールがギルザウラーの右腕を薙ぎ払った。その間身じろぎもせずに隕石を撃ち落としている。

まるで自分の存在を無視するかの如く振る舞うこのゾイドに、言い知れぬ怒りを覚えた。

自分は皇帝ゼネバスの仇を取るために挑んでいるのに、貴様は正義の御印を掲げ、この星を守ろうとしている。ならば自分は何なのか。これでは虫けら以下ではないか。

復讐心に駆られた彼には、そのゾイドのパイロットが何を願ひ、何を成し遂げようとしているのか判断する術を失っていた。

加重力衝撃テールをフルパワーで打ち込む。最初ビツククローで防御していたキングゴジュラスも次第に防ぎきれなくなり、遂には左腕を失った。同時にギルザウラーの尾部も崩壊する。

腕一本に尻尾一本。割に合わない。彼は立て続けにハイブリッドバルカンを打ち込む。折れた左腕の跡に打ち込むものの、バリアーは傷口も確実に塞ぎ、傷一つ付けられない。恐るべき耐久性に、彼の怒りは頂点に達した。

前傾姿勢をとり背部のフュエルタンクを持ち上げ、オーロラインテイクファンを回転させる。ギルザウラーの各部が鈍い輝きを帯

びだす。

出力はレッドゲージのまま。最大出力を越えた大口徑荷電粒子砲の発射態勢を取る。口腔にエネルギーが蓄積し、コアが脈動する。

荷電粒子の奔流が目標に向かって放たれた。雨滴による拡散もものともせず、近距離のキングゴジュラスを直撃する。硝煙に包まれるダークネス市街。ギルザウラーの荷電粒子砲は周囲全てを焼き払って爆風の中に包み込んだ。

炎と煙に包まれ、閉ざされた視界の奥を窺う。シュテルマーは驚愕した。硝煙の中で蠢動するものがある。

身を躲す猶予も無く凶悪な鋼鉄の爪が飛び出し、ギルザウラーの顎を掴んだ。巨体が引き寄せられる。ギリギリと装甲板が軋む音を聞きつつ、シュテルマーは晴れていく硝煙の中に、不気味に光る赤い角を見た。

やはりこいつは悪霊だ。

怒りに震える赤い眼光は、ギルザウラーの頸部を根こそぎ握り潰そうとしている。キングゴジュラスの胸の上で赤い光が明滅する。近接戦闘兵器であるガンフラツシャーが、頸をおさえられたままのギルザウラーに撃ち込まれたのだ。

ウイングバリアーで守られた装甲は、最初ガンフラツシャーの攻撃にも耐えていた。だが間断なく撃ち続く光の弾丸は程なくバリアーを破り、機体の実体面に到達し無数の銃創を刻み始める。ギルザウラーは堪らず悲鳴を上げる。

罅り殺しであった。

ガンフラツシャーの衝撃を浴び続けながら、シュテルマーは悪霊のような無敵のゾイドが、悲痛なまでに何かを成し遂げようとしている事に気付いていた。降り注ぐ隕石群を一身に受け、敵の都であるダークネス市街を守り抜こうとしていた。それを妨げる者には一切容赦なく捻じ伏せる。

共和国軍兵士というものは、例え敵であれ、非戦闘員は必ず守り抜くものなのだろうか。いや、そんなはずはない。作戦行動に支障を来してまで敵の民を守り抜くなど、兵士として矛盾が生ずる。兵士個人

には判断力など不要だ。必要なのは命も惜しまず命令に従うこと。敵の首都攻略の局面に至って突如作戦行動を変更させるなど有り得ない。

有り得ない。つまり、あのゾイドの操縦者も、共和国兵で有り得ないということか。

では、誰が操縦しているのだ。共和国軍が総力を注いで造り上げた、あの悪霊のようなゾイドを。

彼は左腕に鈍痛を覚えた。最初、何かの塊が落ちて当たっただけかと考えた。次第に増してくる痛みに思わず左腕を押さえると、耐Gスーツの表面にドロリとした液体が付着していることに気付いた。目の前に翳した右の掌は鮮血で染め抜かれていた。左腕に差し渡し30cm程の装甲板の破片が突き刺さっていた。腕の筋繊維を切断したらしく感覚が死滅している。破片とスーツとの隙間から間断なく鮮血が迸る。

睡魔に襲われる。失血による意識障害だ。瞼が重くなる。目を閉じることが死に繋がるのも判っている。判っているのに、眠いのだ。腕の激痛さえ眠りを誘う。

自分は死ぬのか。これまで見送ってきた幾多の戦友の元に逝けるのだ。漸く死地を得ることが出来た。

シユテルマーは、静かに瞼を閉じていた。

消えゆく意識の中で、彼を激しく叱責する声を聞いた。懐かしい声だった。

「起きろろ」と言っている。「こちらに来るには貴様はまだ早い」とも。誰だ、この声は……。

彼の失神と共に、ギルザウラーの機体も力なく項垂れた。既に抵抗力の欠片も無くなった皇帝専用の改造ゾイドを、キングゴジュラスは興味なさそうに振り落とすと、再び天空に向けてスーパーガトリング砲とスーパーサウンドブラスターを放ち始める。

彗星ゾーンと衛星Deとの衝突によって発生した隕石群は、主に低緯度帯に数多くの落下を見た。キングゴジュラスに引き寄せられた多くの隕石群も、その破壊力によってダークネス周辺への落下コース

を描いていたものも破碎された。ここでキングゴジュラスに搭乗するゼネバスにとつても予想外であったのは、破壊は外部から行われるだけではなかったことだった。

先にシユウが予測した如く、隕石落下による海洋底の地殻変動は暗黒大陸のプレート破碎を導いた。

足元から突き上げるような衝撃が奔る。地球物理学で呼ぶプレートの重なり合う部分“和達・ベニオフ面”での地殻変動が、リヒタースケール10にも及ぶ超超巨大地震を暗黒大陸の地に誘発させた。皮肉なことに、負の質量を持つエキゾチック物質は、上面に位置するニクスプレートの質量を軽減し、直下に位置するテュルクプレートとの移動を加速させてしまった。

足場を取られ、巨大な建物が地盤沈下していくかのようにキングゴジュラスが傾いていく。無限と思えたエネルギーも、既に生成したエキゾチック物質が対消滅を反応し尽くし、表面のグラビティモーメントバリアーも生成を失いつつある。

激しい嘔吐感に苛まれゼネバスは咳き込んだ。掌で拭うと、口と鼻と、そして耳からも大量の血液が流れ出ていた。

耐Gスーツを着用していなかったゼネバスの肉体を、スーパーサウンドブラスター連射による影響が着実に蝕んでいた。激しい振動が心臓、肝臓、脳髓など身体の重要な器官全てに襲いかかり、内臓からの内出血という症状で破壊したのだ。戦闘による高揚感と顕在化した出血を伴わなかったため、ゼネバス自身も自分の身体の変調に気付くのが遅れ、それに気付いた時には既に彼の身体は内部からズタズタに引き裂かれていた。

自分の血に染まったコクピットの中で、ゼネバスは自らの成し遂げられたことに満足していた。

最早、自分に出来ることは無い。この惑星の行く末は既に我々老人の手から離れたのだ。煉獄の如き浄化の炎は地表を焼き尽くすかもしれないが、それでも人類はしぶとく生き抜く事だろう。

兄よ。いまなら素直になれる。

すまなかつた。許してくれ。己の野望を成し遂げる為、無数の民を

巻き込んでしまった。

弟の最後の我儘を叶えてくれるだろうか。

娘を、エレナの事を……。

都市の残骸に押し潰された破片の下より、黒い翼が浮上した。全身穴だらけになり、両腕と尾を失っている。奇跡的に破壊を免れた頭部コクピットで、右手一本で操縦桿を握るシュテルマーの姿があった。

激しい震動が再び彼の意識を呼び戻した。応急処置ではあるが左腕の止血処理を行い、朦朧としながらも強靱な精神力のみを支えに意識を集中させていた。破壊された市街の瓦礫の上を僅かに残るマグネッサーを使い、ホバリングしながら摺座状態のキングゴジュラスに向けて進んで行く。

既にギルザウラーに使用可能な武器は残されていなかった。

残されたのは、彼自身であった。

もし機体が生きていれば一溜りもないが、横たわるキングゴジュラスの頭部にギルザウラー頭部コクピットを強引に寄せる。

キャノピーを強制排除し、彼は傾いたキングゴジュラス頭部側面に降り立つ。後方に載っていたガイロス皇帝の仮面が、下方の亀裂の中に落下していった。

「姿を見せる、話がしたい」

彼は光の消えた頭部ブレードホーンに右手でつかまり、生身の体をキングゴジュラスの左目の前に晒す。

恩讐を越えて聞いてみたかった。なぜダークネスを守ったのかを。コクピットが開かれることは無いと思った。パイロットが生きていれば振り落され、死んでいれば当然開かない。彼は死に場所を求めたに違いない。力なく項垂れる左腕を見ても明白であった。それでも構わなかった。

予想に反して、彼の問いかけにキングゴジュラスのコクピットが開かれていく。僅かに血の臭いがする。

(馬鹿な。なぜ敵に身を晒す)

シュテルマーは、不完全に開かれた隙間から操縦席の中を見た。

ヘルメットは被っていないかった。老兵らしき操縦者が血塗れで横

たわっている。ゆつくりとこちらを向いた。

彼は言葉を失った。そんな彼の呆然とする姿を見て、ゼネバスは苦しそうに言葉を発した。

「ガイロスではなくお前だったのか、あのゾイドを操縦していたのは」
なぜ皇帝ゼネバスがこの機体を操縦していたのか彼には理解できなかった。

「すまなかった。そして、ありがとう。こうしてお前に送って貰える事、本望だ。

息子は立派なゾイド乗り成長したと、ガンビーノに伝えておく」
そう言うとゼネバスは激しく吐血した。今まさに一言話す度に命が削られていく。彼にとってそれ以上ゼネバスが語る事を望まなかった。

ゼネバスの言葉に、あの時自分を現世に留まらせた声の主が亡き父ガンビーノに違いないと気付いた。父は自分の代わりに皇帝ゼネバスを呼び寄せたのだ。

「己の業の深さを感じたよ。それでもこの惑星に住む人々全てを巻き込んで去るほど傲慢ではない。去るのは私だけで充分だ。私の兵達を頼む」

突然、通信機からノイズ混じりの声が響く。女性の声だ。辛うじて聞き取ることが出来る。繰り返している。『お父さん、お父さん』と。その声に聴き覚えがあった。

「エレナか……無事だったのだな……」

ゼネバスの最期の言葉が終わる途中で、キングゴジュラスの装甲が急激に収縮した。対消滅したエネルギーの代償に、機体の一部が重力崩壊を開始したのだ。

時を同じくして、地の底から突き上げる振動が湧き上がる。

最初は静かに、次第に揺れは加速度を増し、やがては辺り全てのものが激しい振動を開始した。摺座したキングゴジュラスの上に立っていたため最初の振動には耐えられたが、巨体をも呑み込む亀裂が地表に奔り次々と建造物が沈んでいく。

『お父さん、返事をして。シユテルマーなの、そこにいるの』

間違いない。エレナの声だ。

「早く、お父さんを助けて。お願いです、お父さんに会いたい。会って話をしたい。謝りたい。一緒に暮らしたい。お父さんと、お父さんと……」

通信が切断される。一際巨大な隕石が、東の地平に落下するのが遠望された。

不吉な予感が過ぎった。まさか、エレナが隕石の直撃を受けたのではないかと。

彼女の無事を憂慮する余裕もなかった。激震に見舞われた暗黒大陸は上空に激しいオーロラの輝きを帯び、プレート活動が一層活性化されていた。

キングゴジユラスも沈んでいく。途中まで沈んだ後に、直下から突き上げる震動が発生した。大地の隆起が切断された左右の地面を鬨ぎ合い、見る間に市街の奥まで伸びていく。割れて沈むのではない。持ち上がっているのだ。隆起の反動でシユテルマーはね飛ばされた。ゼネバスを救い出す余裕などなかった。開いたコクピットの間隙から、魂を失った亡骸が赤い鮮血の尾を曳きガイロスの仮面と同じ亀裂に落下する瞬間だけが眼に焼き付いた。

噴煙と硝煙と大火災。ダークネスの都は、戦火を遙かに上回る炎に包まれる。

隆起した地層の上の建造物に立ち尽くし、燃えしきる炎の海を見ながら、シユテルマーは世界の終焉に立ち会ってしまったことに呆然としていた。

だが、ゼネバスと、父ガンビーノとの声を思い出したとき、猛然と生への執着が湧いた。

あの声は失血が生んだ幻聴に過ぎない。父の思いはあの幻聴と同じだろう。

生き残ることが自分の義務ならば、汚名を受けようと生き残ってみせる。彼はキャノピーの吹き飛んだギルザウラーを振り返った。

まだ翼は残っている。どこまで飛べるか判らない。北東へ飛ばばヴアルハラだ。

「頼む、ギルザウラー」

炎の海の中、残骸同然の黒い翼が舞い上がった。

32 (2056年)

「お前を肅清する。その理由が理解できないほど、お前は無能ではあるまい」

緊急脱出するガイロス宮殿飛行基地の中、一人の佐官が皇帝の前に跪いている。

周囲には銃を構えた護衛兵が一斉に銃口を向けている。髑髏の面を付けたままのガイロス皇帝は、佐官の目の前に立ち、見下ろしながら言い捨てる。

「皇帝陛下、自分には決して叛意など抱いたことは御座いません。全ては帝国と陛下の為に」

「反問するのか」

ヴァーノンは口を噤んだ。

「ゼネバスは最後まで偉大な戦士であった。それを無為な巡幸などさせたが為に、見殺しにした罪状、許し難い。また、予の専用ゾイドを独断で起動させ失ったこともだ。

これまでどれ程の貴重な兵士を失ったか。己の罪状を肝に銘じることだ。

この王宮から突き落とすことも厭わぬが、貴下のこれまでの功績に免じ、命だけは助けてやろう。

西へ行け。エウロペの地に我が帝国の礎を築き、いつの日にかその地に進出する日に備えるのだ」

「御意のままに」

策士策に溺れる。敗残の兵がそこに在った。

※

「お父さん、返事をして、お父さん！」

エレナは、キングゴジユラスのкокピットで発したゼネバスの最期の会話を聞いていた。

ヘリックより伝えられた周波数を元に、未だにコアの健在なオルディオスの通信装置を利用し、開放されたままの通信回線を通じ、その行動を追跡していたのだ。故障していた送信機能が回復した時に

は、既にギルザウラーとの死闘が終わった後であった。

ノイズ混じりの中、最期の言葉だけは異様なまでの明確さで、オルデイオスのコクピットに伝わっていた。耳を傾けるヘリック、シユウ、キャロライン、そしてエレナは、父を奪い、その最期を看取った者が、旧知の間柄にある人物であることに気付いてしまった。

通信が途絶える。シユウが呟いた。

「オーロラ準風の爆発です。誘導電流で、完全に通信機能を失いました」

身じろぎもせず、エレナは立ち尽くしていた。これ程残酷なことがあるのだろうか。嘗て学窓を共にし、密かな想いさえ抱いていた者との決別を。

血が出るかのように噛みしめた唇は、微弱に震えていた。

「シユテルマー……」

大地が揺れる。一刻の猶予もない。

「脱出するぞ」

ヘリックが言った。

「絶対に生き残る。全てはそれからだ。エレナ姫、君の父も必ずそれを望むはずだ」

間断なく大地は震動を続ける。

「海岸線にウルトラ艦隊が残っている。シユウ、オルデイオスは走れるか」

「可能です。でも、カノンフォートは置いていきます」

「なぜ、私とずっと一緒だったのに」

キャロラインが思わず声をあげた。

「ギルベイダーの攻撃にも耐えて、中央大陸から戻って来るまでずっとエントランス湾で待っていてくれたのです。何としても海岸まで駆け抜けて見せます」

「あの中型ゾイドではもうこの混乱の中を駆け抜けることはできない。僅かではあれ、飛行能力が残るオルデイオスを頼る他ないので」

「ゾイドだって命があるのよ。それを見捨てるなんて私にはできない」

い」

「僕にとってあなたの命に勝るものなどありません」

彼女の言葉を制して、シュウが力強く言い放った。

「すみませんお姉さま、大きな声を出して。だけどあなたには生きて欲しいのです。僕と一緒に」

隕石の降り注ぐ中、二人の視線が重なる。突然の告白にキャロラインは息を呑んで黙り込む。

終焉を迎えようとする絶望的な世界の中で、花開いた一縷の希望であつた。

一方、隕石群の落下は容赦してはくれない。

「躊躇している暇はない。シュウ、オルディオスを起動させてくれ。エレナ姫を後部シートに頼む」

ヘリックとキャロラインはオルディオスの後部パワーコネクターの前に簡易シートを設け、そこに身を寄せ合って身体を括り付けた。隣では、隕石落下に脅えるカノンフォートの姿があつた。落下の轟音に負けずに、キャロラインは声を張り上げる。

「あなたも生き残って。もしも私を許してくれるなら、その時もう一度コクピットに座らせてね」

心を通じたのかも知れない。戻らぬ主との別れを惜しむ悲しい鳴き声をあげると、落下する隕石群の方向に駆け出していく。

「ありがとう。私の、私達のカノンフォート」

キャロラインはその青いゾイドに向かい、静かに敬礼をした。

オルディオスのコクピットから見えるように、ヘリックが思いきり右横に腕を伸ばし、サムズアップをする。

「オルディオス、最後の任務だ。僕たちみんなを助けてくれ」

コンソールに向かい、シュウは囁いた。

エレナは父の最期とシュテルマーとの決別で、暫くは抜け殻のような気持になっていた。

ここまで父に会いたい一心で旅を続けて来たのに、その目的達成を目前にして、全てを失ってしまった。隕石の落下で燃え上がる大地にも、何の脅威も関心も持てないほどの虚脱感に襲われていた。

だが、彼女の目の前で行われたシユウの告白は、氣力を失ったエレナに不思議な感動を与えていた。

こんな状況でも希望を捨てないシユウ。そしてそれを受け入れたキャロル。彼はさつきまで、この星は持たないと言っていた。なのにあの自信に満ちた口調はなんなのだろう。

前方のシートからシユウが問いかける。

「ルイーズ、大丈夫ですか」

エレナは涙を堪え、精一杯氣を張って答える。

「ええ、大丈夫です」

「嘘が下手ですね」

すかさず前を向いたままのシユウが応える。

「無理をしないでください。なぜ閣下が後部シートにあなたを乗せたかわかりますか」

「え……」

エレナは当惑する。

「そこならば、泣き顔が誰からも見えないからです。思い切り泣いてください。僕に構わず」

その言葉に、エレナはいままで堪えてきた思いを曝け出した。

「お父さん……」

エレナは号泣した。涙が止め処なく流れ、張り裂けんばかりに泣き叫んだ。

「お父さん……お父さん……お父さん……」

言葉は意味を成さなかった。

ただ父を呼んでいたかった。嗚咽を堪えず叫ぶ声は何度も途絶え、その度大きく息を吸い込んでもう一度泣いた。

手にした父のゼネバスの紋章を見つめ、そしてまた泣いた。

父との思い出が何度も何度も脳裏を駆け巡る。

膝の上、初めてゾイドに乗せられたこと。

王宮の庭園で、父と追いかけていた日々。

ケック村に迎えに来た後、レッドホーンの上で燥はしやいだあの日。

父と母と、マイケルと連れ立って訪れたガニメデの町。

意味もなく、父が嫌いで、長く背を向けた日々。

最後に擦れ違ったのは王宮の廊下だった。亡くなった母エーヴ以外に妻を持った父が許せず、目を合わせずに俯いた。あの時は、父との別れよりもマイケルとの別れの方が辛かった。そして後に知った。キャロルがミンクスに所属していたこと。父を孤独に追い込み、ガイロスの兵を導いてしまったこと。最後まで娘のことを案じ続けたことを。

大異変の騒音も聞こえない。何度も泣いた。声が枯れるまで泣いた。いつまでも泣いた。

思いきり泣いた後、ふとオルディオスの蹄ひづめの響きが耳に届いてきた。

顔はぐつしよりと濡れていた。頬も、顎も、掌も。耐水性もある耐Gスーツの襟や裾から滲みこんだ涙が皮膚に伝わり、熱く肌を締め付けた。

だが、思いのほか気持ちは澄み切っていた。泣き腫らした頬に、シユウがナプキンを差し出す。

(一体どこから出したんだろう)

ゾイドのコクピットには似つかわしくない可愛らしいものだ。それもまた、彼一流の優しいユーモアなのだろう。

嬉しかった。そして改めて思った。一人ではないことを。

『私たちは人間の可能性をもっと信じてもよいとは思いませんか』

人の命には限りがある。しかし、限りあるからこそ尊い。

別れが悲しければ悲しいほど、その人と過ごした時間が喜びに満ち溢れていたものだったことの証となる。

今、自分は父との永遠の別れを悲しんでいる。だからそれだけ、父と過ごした時間は素晴らしかったのだ。

命に限りがあっても人間の可能性は無限だ。世代を重ねる事により、人はより素晴らしい未来を築き上げることも出来る。父の成し遂げることの出来なかった希望を紡ぐのは自分達若者なのだ。

肉体が滅んで骨となり土となっても、それがやがて新たな物質を構成し必ず新たな生命の礎となって甦る。それこそが物理的な輪廻で

あり真理である。間違いなく人は生まれ変わる事はできる。

悲しむときは悲しもう。そして前を向こう。

(ミスター、少しだけわかりました。あなたの言葉が)

「シユウ、今度こそ本当に大丈夫です」

「そのようですね」

シユウが少し振り向いた。

「これだけはお礼を言わせてください。僕はルイーズから二つの勇気を貰いました。

一つはこの星で生き残る勇気、そしてもう一つが、お姉さまに告白する勇気です」

エレナは微笑んだ。そして「幸せになってくださいね」と呟いた。

蹄（ひづめ）の響きが心地よい。

「じゃじゃ馬オルディオス、いいゾイドですね」

「そう、最高です。僕のゾイドは全て。あなたの悲しみも涙も、全部受け取ってくれましたよ。

知っていますか。勇者と王子様は、姫君を救うために白馬に乗って現れるのですよ」

「それはシユウが勇者で王子様ということですか」

「その通り。最高の褒め言葉ではありませんか。

……絶対生き抜きましょう、宇宙になんて逃げずに」

「はい。この星に生きる、人とゾイドと共に」

揺れる大地を蹴り、オルディオスが嘶きながら海岸線に向けて駆け抜けて行った。

遙か上空に、第三宇宙速度で引力圏を振り切ろうとする巨大移民船の光が浮かんでいた。

(2056—2080)
33 (2056年)

惑星大異変による隕石落下の衝撃は、暗黒大陸の地殻変動を誘発し、続発する大地震により少年の住み慣れた屋敷は破壊された。

母は崩れ落ちる家屋の石壁から咄嗟に少年を押し出すと、そのまま壁の下敷きとなり息絶えた。瓦礫の下から覗く優しかった母の手と、その奥から流れ出た赤い血の色が少年の記憶に刻まれている。

非力な少年の力では、母の骸さえ救い出すことも出来なかった。崩壊寸前の家屋の前で、母の亡骸に追い縋って泣き叫ぶ少年は、奇跡的に震災を逃れた祖父母によって引き剥がされ、直後に屋敷は全壊した。普段より家庭から遠ざかっていた父の行方は未だ不明である。

余震が一応の終息を見せ、数か月ぶりに屋敷跡に戻った時、そこは見覚えある家具が散乱し、歴史ある家財も散逸する廃墟と化していた。

異臭を放つ廃墟跡で、無残な姿となった母の骸が見つかった。

愛おしい母との思い出を探すため、瓦礫の山を掻き分けた。すると、崩壊した壁と柱の隙間から、裏に母と少年の名が刻まれ嚴重に封印された手紙が発見されたのだった。

母は、秘密を墓場まで持つていく心算であつたらしい。但しその記録を手紙として残していたということは、彼女の何処かに真実を伝えたい気持ちも存在したのだろう。

少年は誰にも気付かれないように手紙を持ち帰り、一人で封を解いた。

そこに記されていた事実は、少年にとって衝撃であつた。母の苦悩と自分自身に繋がる血の縛り。繰り返される骨肉の争いの結論を出せぬまま、この星は大異変の洗礼を受けたのだ。

少年は混乱の極みとなった首都ダークネスで、数日後ある葬礼がひっそりと執り行われることを知る。

祖父母にも告げず、寸断された交通機関を乗り継いで、彼は漸く儀

式の会場に辿りついた。

元皇帝という人物の葬儀とは思えないほど質素なものだった。但し、数千万人もの死者を出した大災害の直後という事実を鑑みれば、止むを得ないことだったろう。

葬列者の影に隠れつつ、少年は棺に縋りつきたい思いに駆られた。一度も会ったことの無い父である筈なのに、彼の生涯を賭けて成し遂げたことを知るほどその姿が思い浮かび、切なさが込み上げた。そして母を失い、真の父も失ったことを知った。

葬列の中央に、喪服に身を包んだ若い女性がいた。

彼女が喪主であることも知っていた。そして彼女が、継嗣の権利を持たないことも。

俯く素顔は窺い難かったが、ふと彼女が空を見上げた。

美しく、凜々しい女性であった。広がる青空を見上げる姿は、父譲りの気概なのか、父の死も大異変も乗り越えようとする決意が感じられる。姉は弟の存在を知らず、弟は姉の存在を知った。

少年はその時思った。自分に課せられた使命は、この争いの根源となった血の縛りの縛りを断ち切ることだと。

「エレナ・ムーロア、我が姉よ。亡き父の意志は僕が継いで見せる」
荒廃した世界で、ギンターの野望は動き出していた。

※

「ヘリック、ガイロス両国の代表者にお伝えします。

私、エレナ・ムーロアは、西方大陸エウロペに渡ることを決意しました。グランドカスターロ惑星大異変の復興を最優先としている今、両国は私などに関わっている時間などないはずですよ。

代表の方々に於かれましては、それぞれにお立場もおありでしょう。

これは私の意志によって決断したのであり、両国の威信を汚すものではありません。

私は暫く隠遁生活を送り、この星の復興を見守って行きたいと思えます。戦いに明け暮れた父への、せめてもの罪滅ぼしとしても」

交渉の議場に響いた彼女の言葉は、一瞬にして両国代表者達を沈黙

させ、直後に賛同を表す拍手をもって受け入れられた。

ガイロス帝国の首都ダークネスに於いて、エレナはその身分を明かし父ゼネバスの葬儀の喪主を務めたことにより、ヘリック共和国政府によって身柄引き渡し要求を受ける立場となった。

ヘリック共和国側では、彼女は中央大陸の出身であり、ゼネバス帝国の継承権も存在しない以上、親族である伯父ヘリックⅡ世が保護するのは当然と主張。一方ガイロス帝国側では、小規模ながらも元皇帝ゼネバスの国葬を行ったのであり、彼女は父ゼネバス同様ガイロス帝国の臣民であり、その身柄を保護する権利があるとの見解であった。

両国とも、その実は彼女を保護することにより旧ゼネバス勢力の人心把握を狙っていることは明白である。両国間には未だ講和条約は締結されておらず、武力行使を以って直接彼女の争奪戦を行う事由はあった。だが、大異変の影響により戦闘ゾイドの運用は出来ず、国内の治安も儘ならない。不必要の衝突を避けたい両国にとって、エレナの確保を巡っては、互いの出方を窺う腹の探り合いとなっていた。

両国の意見は平行線のまま纏まらず、解決の糸口は掴めない。その間、彼女の立場は宙に浮いてしまった。

出口の見えない解決策に、先の折衷案を表明したのが、他ならぬエレナであった。

彼女は当事者として、交渉の場に呼ばれる機会を待っていた。ゼネバスの葬儀に出席し、身分を明かすことがどのような事態に繋がるかは、既に予想されていた。しかし、娘として父ゼネバスの最期を見送りがかった彼女は、それ以降の自らの処遇と惑星の混乱状況を見据えた上で、時宜に応じた発言の機会を慎重に狙っていたのだ。

閉塞した交渉会議場に出席し、水掛け論を延々と繰り返す両国代表の建前を一時間ほど聞き流した後、漸く巡ってきた本人の意志確認を求められた時、彼女は両国代表をゆっくりと見据えながら答えたのだ。

その凜とした発言の仕方は、あたかも亡き父ゼネバス・ムーロア皇帝を髣髴とさせるものだった。

アドバイザーとして同席していたチャンス少佐が、拍手の止まない

内に、空かさず立ち上がり補足を行う。

「エレナ様の待遇に関しましては、ニクスとデルポイ両大陸より等距離にあり、比較的開発の進んでいるロブ平野に、両国の負担によってその公邸を設けることとします。」

両国の代表者は、必要があれば公邸に参内し、情報を公開した上で謁見する事も可能とします。その他詳細は、なによりお住まいになれるエレナ様ご本人との御相談により決定したいと思います。

他に御質問、御提案などありますか」

言葉こそ丁寧だが、議場に低く響く少佐の声には怒気を含んだような迫力があり、額に大きな古傷を残すチャンス少佐を前にして、異論を述べる者は無かった。長い会談に辟易し、一刻も早く母国への帰還を望んでいた両国代表も、この折衷案に同意した。

一連の書類への調印式が進む中、エレナは父の姿を思い浮かべながら、心に誓っていた。

お父さん、私は新たな地平で生きていきます。

グランドカスターロウ

惑星大異変の終息と、ゼネバス・ムーロア会葬の儀の後に取り決められたのは、エレナのエウロペ移住という結論で終了した。

「エレナ様、本当に宜しかったですか」

護衛官としての役割を強調するため、キャロラインは式典用第一種軍装を纏い、議場に随伴していた。ダークグレーの単純な色調でありながらも、タイトな軍服は彼女の柔らかな身体の線をも強調し、議場に華やかさを添えていた。

「ええ。これが最良の方法と思います。後悔はしていません。それと、ルイーズでいい。その名で呼ばれるときつきまでの会議を思い出して息苦しくなるから」

キャロラインの軍装とは対照的に、エレナはゼネバス帝国皇女としてのイメージカラーであるライトパープルを更に淡くした、白に近い薄紫にパールコートされたフォーマルドレスを身に着けていた。少女の頃から好んで着ていたハイネックタイプのものになって、彼女の女性としての輝きを一層際立たせるホルターネックタイプの艶やかなドレスである。肩から二の腕までを被う透き通るヴェールの下

の胸元には、ゼネバスの紋章が二つ掛けられていた。一つは以前からの彼女のもの、もう一つは、今や父の形見となったものである。彼女の眩しい胸元の素肌に、黒く焼け焦げた父の遺品が不釣り合いに揺らぐ。時折彼女のものと重なり、小さく涼やかな音色を奏でていた。

常に束ねていた髪は、いつの間にか鎖骨に届くまでに伸びていた。看護師として勤務していた時に、作業の邪魔にならないよう束ねていたため気が付かなかつたのだ。髪留め（バレッタ）を外したブロンドの髪色は、ガンブラスターの黄金砲を上回る輝きを周囲に広げている。

エレナの唇に引かれた少し濃い目のルージュは、彼女の容姿を劇的に変えていた。上辺を飾る必要のない美貌ではあったが、公式の場に出席する以上ノーメイクというわけにもいかない。大異変直後の限られた物資の中から工面できた唯一の化粧品でメイクアップされた自分の顔を鏡に映したとき、彼女は漸く大異変の混乱が一応の終息を迎えた事を実感したのだった。

議場を後にし、設けられた控え室で、二人は漸く安堵の溜息をついた。

「ありがとうございます、少佐。おかげで交渉も成功しました」

二人と同様に、疲れ切った様子でソファアに座り込む武骨な軍人の姿があった。

「シユウの奴め、『少佐は顔が怖いから適任です』だと。自分の様な者があんなお偉いさんの前に出るなど人選の間違いも甚だしい。面倒な仕事を人に押しつけておいて、挙げ句の果てに本人が来ないとは。奴はどこまで軍人を手玉に取るつもりだ」

中央大陸復興事業に掛かり切りの青年科学者は、交渉の経緯をシミュレートした上で最高の演出効果を図るため、退役直前のチャンス少佐を交渉の場に送りつけたのだ。結果としては彼の思惑通りとなったが、それがまた少佐にとっては不満であったのだろう。憤然としてその場にはいない人物への不満を述べるチャンスではあるが、武力衝突を回避できた達成感からか疲労と同時に穏やかな表情も浮かべていた。

彼は感慨深げに額の傷に手を当てた。

「ギルベイダーとの戦闘での傷がこんなところで役立つとは思わなかったぞ。」

もしかしたら我々は、全員シユウの掌の上で踊らされているのではないか」

「そうかも知れませんね」

エレナはそう言って微笑んだ。

その時エレナは、葬送の列を見送る人混みの中で、彼女を見つめる赤い瞳の少年のことを思い出していた。不思議な少年であった。ほんの一瞬視線を交えただけなのに、妙に記憶に刻まれている。

思い過ぎしかも知れないが、少年の中に父の面影が重なったのだ。戦渦の惨状を駆け抜けてきたエレナは超自然現象など信じることもどなかった。にも関わらず、まるであの少年は父の魂が地上に還り、自分を見守っていてくれたのではないかとも思えた。視線を合わせた直後に幻のように消えていたことも彼女の思いを強くした。

「ティータイムです」

キャロラインの淹れた紅茶の香りが現実世界に呼び戻した。

目の前にカップが並べられていく。紅茶を前に数回逡巡した後、慎重に器に指を添え、飲み頃の熱さになっていることを確認し、更に口元に二三度近づけた後、漸くエレナは花卉のような唇をカップにつけた。

「そこまで慎重になさらなくても……」

ひとくち含んで再び深い溜息をつく。カップの縁に薄くルージユの跡が残された。

「……美味しい。デルポイ産の紅茶ともこれで暫くお別れです。大切に頂かないとね」

ふとエレナの口をついて出たその言葉にキャロラインの表情が曇った。長年共に過ごしてきたエレナでなければ判らないような微妙な変化だが、彼女の瞳はどこか寂し気であった。

もしかしたら、その時が来ているのかもしれない。

エレナは、長く自分に仕えてきた人物との別れを決意した。帝国が

滅んだ後も忠実に自分を守って共に戦場を駆け抜けてきた、親友であり姉でもあった女性だが、彼女の幸せを考えればいつまでの自分と共にあることはそれを逃してしまおうのではないか。

今、彼女の心の中に想い描いている男性がいて、その二人を引き離そうとしているのが他ならぬ自分であるとしたら、到底彼女のエウロペ同行を認める気にはなれなかった。

丁度チャンスに二杯目の紅茶を注いでいる時である。エレナは彼女の背中を見つめ、短く、そしてはつきりと言った。

「キャロルは中央大陸のシユウの元に行ってください」

ティーポットを傾けるのを途中で止め、傍らのテーブルにそつと置く。チャンスの前には、半分ほど紅茶が注がれたカップが残された。

ゆつくりとエレナの方に振り向く。物静かではあるが、幾分憤りを含んだ声で応えた。

「私はいつまでもルイーズ様と共にあります。私情を差し挟むつもりはありません」

予想通りの答えであつた。エレナが続けて問いかける。

「シユウが嫌いですか」

「はい、大嫌いです。顔も見たくありません」

「大嫌い」。それが彼女の気持ちの裏返しであることなどすぐにわかる。エレナも妥協はしなかった。

「嫌いでもなんでも構いません。もしあなたが意地を張るのなら、今日限りあなたの護衛官の任を解いてゼネバス領に退去させます」

「既に帝国はありません。ルイーズ様には私を解任する権利もありません。私は崩御された先帝より、生涯に亘って姫様をお守りすることを任せられ、マイケル先生からも同様の願いを託されました。既に任務を解くことなど無効です。私は絶対に姫様の側を離れません」

「いつまでも子供扱いしないでください。私はキャロルがいなくても立派にやっています」

「紅茶を飲む度に火傷をしておられる方のお言葉とは到底思えません
が」

「ここでは関係ない事でしょう。思考が頑迷ですね。いい加減素直に

なりなさい」

「その言葉、そのままお返しします」

「一人で中央大陸に戻るのが寂しいのですか」

「そんなわけありません」

「シユウが嫌いな」

「そんなわけありません」

キャロラインは暫し赤面して黙り込む。主導権を握ったエレナは、空かさずチャンスに話を振った。

「少佐、シユウはキャロルのことを何と」

突然の論争に啞然としていたチャンスであったが、話の流れから状況は理解できたようだ。

『お姉さまに宜しく』としつこく言っていたが、それ以上は自分で会って確かめることだな。自分も少しは奴の弱みを握っておきたい。この件は是非とも協力させてもらおう」

想いを見透かされ、口を一文に結んだまま立ち尽くすキャロラインであったが、意を決して口を開いた。

「御無礼をお許してください。お心遣い身に染みました。ルーズ様のお側に仕え、いつまでもお守りしたかった。でもそれは、自分の臆病な心を覆い隠す為の詭弁でした。」

以前、マイケル先生が仰っていましたね、『人は成長するものだ』と。幾多の戦乱を掻い潜り、多くの人々と出会って、姫様は成長なされました。先ほどの議場での演説を拝聴し、その確信はより強いものとなりました。

もう私の役目は終わったようです。これからは私も自分自身が幸せになれるように努力していきます。それが姫様……ルーズ様の望まれることであれば」

抑えていた感情を吐露した後、彼女は顔を上げてエレナを見た。

「エウロペは未開の地です。野生ゾイドや終戦後に遺棄された野良ゾイドが未だにうろついていると聞きます。どうかくれぐれも野良ゾイドにはお気を付けください」

別れに際してまで、彼女はその身を案じていた。野良ゾイドの事は

知っていたが、エレナの決意を翻す程の脅威とはなり得ない。それは護衛の任を請け負っていた彼女の最後の枷であつたのだろう。途中で何かを投げ出すことが出来ない性格なのは、エレナが誰よりも知っていた。

傍らでチャンスが大きく力強く頷いている。「後は任せておけ」と。込み上げる思いをエレナは必死で抑えていた。きっと今泣いたら、キャロルは旅立てない。笑って、笑って送り出してあげなければ。

嗚咽を堪えながら、エレナは花のように微笑んだ。

「絶対幸せになってください。シユウに宜しく」

「了解しました」

軍装のままキャロラインが敬礼をする。

髪留めバレッタを外した髪が眩しく輝いている。

エレナにとって大切な人との別れと、そして新たな旅立ちが始まった。

34 (2057年)

西方大陸には、土着民や避難民などの住民は存在していたが、規模としては都市国家と呼べる程度の組織しか形成されていなかった。

ゾイド星の文明発生源は緯度30°。以上に存在する。具体例を挙げると以下の様になる。

- ① ヘリックシティー 北緯41° 東経78°
- ② ガリル遺跡 南緯30° 西経90° 付近
- ③ 旧首都ダークネス 北緯45° 西経90° 付近
- ④ 新首都ヴァルハラ 北緯60° 西経20° 付近
- ⑤ 古代遺跡テュルク 北緯60° 西経30° 付近

(猶、ゼネバス帝国首都は、北緯19° 東経16° 付近に位置するが、ヘリック共和国との分離によって新たに建設された都であるため、この適応からは外れている)

ゾイド星の地軸の傾きは約26°。（惑星大異変によつて、若干の変化はあった）（惑星大異変によつて、若干の変化はあった）（惑星大異変によつて、若干の変なので、①〜⑤は、全て南北回歸線の外側に位置している。

この星の文明発達には、必然的にゾイドの飼育と利用が関わっている。

大陸の大部分が南北回歸線内側の、温暖な熱帯地域に位置する西方大陸では、文明発展に利用できるような大型ゾイドが存在しなかったことが、文明との国家の発展を妨げていたとも考えられるのだ。

一般に、温暖な地域であれば生物の成長も進むと思われるが、それはガイザックやサイカーチスなどの昆虫型ゾイドの野生体のみと言える事であつて、それ以外のものには適用されない。恒温動物が、体積に対し熱の発散面積を減らすために、寒冷地で巨大化することはよく知られている。ゾイドコアという内燃機関を有するゾイドも、一種の恒温動物と考えることもできる。つまり、温暖な気候は、ゾイドの大型化を阻害する要因にもなつていたのだ。反証をあげるとすれば、気候の厳しい暗黒大陸には、ギルベイダー野生体など強力なゾイドが存在し、北上する寒流によつて低緯度でありながら寒冷な気

候の南エウロペ大陸西岸に、ギガノトサウルスやセイスマサウルスの野生体が存在したように。

また、熱帯地域に発生する強烈なスコールは、地表の養分を洗い流し、陸棲ゾイドにとって生命を育む金属イオンをも残してはくれない。

惑星の自転を起源とするコリオリの力によって赤道付近に発生する、流れの速い透き通った暖流は、海中に漂う微細なプランクトンの存在をも許さない。大型海棲ゾイドは、流れが穏やかでプランクトンも豊富な寒流の中にこそ、巨体を養う環境が整うことになる。これは、地球の極地方の海にしか、ウルトラザウルスをも凌ぐ巨大なモビーデイツク（シロナガスクジラ）が存在しないのと同じ理由である。

暗黒大陸の古代ゾイド文明が、ディオハリコンや重力砲などのゾイドの外的な武装強化に特化していったのに対し、西方大陸での古代ゾイド文明がオーガノイドシステムという内的なゾイドの改造に特化していった背景には、巨大ゾイドの育成を主眼としていたのではないかという考察が、後にシュウによって纏められた文献に記されている。

但し、赤道付近に位置する北エウロペに大型ゾイドの固有種が存在しないということが、即ゾイドの脅威がないというわけではなかった。

キャロラインがエレナとの別れ際に懸念したこと。中央大陸戦争、第一次大陸間戦争が終結し、活動を止めた戦闘ゾイドの一部が両国から最も近い北エウロペには数多く遺棄されていた。その中には、特に磁気嵐の影響の少ない小型の野良ゾイドが生き残り、移民したコロニーを襲う被害が発生していたのだった。

「お久しぶりです、エレナ様。覚えていらつしやるでしょうか」

そのグレーの髪の毛の女性は、診療所の前でセーラブ医師から受け取った名簿を元に、到着したばかりの新任看護師の確認をするエレナに駆け寄ってきた。

後ろ髪を黄色いシュシュで留めている。虫族特有の肌の色をした、

エレナと同年代の女性だった。

改めて名簿の名前と女性の顔を見比べた。イメージの中で、黄色いシユシユが大きなりボンに変わる。

「……ブローニーちゃん？」

記憶のキャンバスに、青空に舞う小さなサラマンダーと、中央山脈を流れ落ちるミストラルが描かれる。思わずエレナは手を取り飛び上がった。

それはかつて、ケツク村で共に過ごした旧友との、十数年ぶりの再会であった。

会談を終えたエレナが西方大陸に到着したのは一か月後であった。

大陸に渡るに当たり、エレナは公邸建設に対して一つの条件を提示していた。

グランドカタストロフ

惑星大異変による隕石の落下被害は、南北回帰線内に位置する北エウロペは深刻で、至る所にクレーター状の落下跡が残されていた。この大陸の人口密度はまだ低いため、人的被害こそ少なかったがそれは同時に医療施設の不足をも示している。被害を受け、怪我の治療も儘ならない住民に対し、エレナは無償で治療を施せる医療施設の併設を訴えたのだ。

旧帝国首都ダークネスからエウロペへ向かうためには、海上航路を利用する他ない。アンダー海の上を渡る風を浴びながら、エレナは水平線を見つめていた。

キャビンから出たセーラブ軍医が、エレナの立つデッキに近づいてきた。

「あんたも酔狂だね。マイケルさんから話は聞いたよ、あんたお姫様なんだって」

キャロラインと別れ、心を許せる者のいなくなったエレナにとって、彼の存在は心強かった。

かつて絶望的な惨状のエントランス湾から脱出し、共にガニメデ市で傷病者の治療にあたった上司とも戦友とも言えるセーラブは、エレナがゼネバスの娘と知った上でも以前と同じような気さくな態度で応じてくれた。何より恐縮して医療活動が滞るようでは被害者救済

などではしない。

一方で彼が勉めて陽気に振る舞う理由を知っているため、エレナは言葉少なに微笑むほか無かった。

セーラブは中央大陸に残してきた家族全員をグランドカタストロフ惑星大異変の惨禍によつて失つていた。帰るべき故郷を奪われた彼にとつて新たな身の置き場所を探していた時、丁度西方大陸へ渡航する医療関係者を募集している書類に接し、偶然エレナとの再会に至っていた。

「エウロペとはどんな場所なのでしょうね」

「行つてみればわかるさ。野良ゾイドがうようよしているとは聞いているがね。」

ただ、どこにだつていい事はあるものさ。新しい歴史を我々が作ればいいだけのことだ」

セーラブの返答は、彼自身へ語りかけるものでもあつたに違いない。

エレナたちが上陸したのは、エウロペの東岸、ロブ平原であつた。中央大陸以上に温暖なこの地は、暗黒大陸とはまた別の未開の大地が広がっていた。

公邸建設に先だつて診療所が完成していた。建設の開始に伴い医療施設の開設を心待ちにしていたエウロペの住民たちは、エレナたちの到着と同時に一齐に治療の為に施設を訪れた。

最初に訪れたのは中央大陸からの移民たちであつた。隕石落下で生じた山林火災に巻き込まれ強度の火傷が悪化していた者や、悪性の風土病で手足が壊死した者。そして野良ゾイドの襲撃によつて重傷を負い肢体不自由となつた者などで、時には居住している場所からアタックゾイドを使って三日の行程をかけてやってきたという患者もいた。

彼らはゼネバスの娘とも知らずにエレナの治療を受けながらその医療施設の存在を大陸奥地にも齎し、さらにその情報を聞きつけた住民が治療を訪れるという連鎖になつていった。

最初看護師として勤務していたのは、エレナを含む数名のみであつたが、増加する患者を扱いきれなくなつたところから、セーラブは中央

大陸に対し看護師の追加派遣を要請する。そしてユビト湾から新たにエウロペにやってきた看護師の中に、エレナは懐かしい友人の姿を見出したのだ。

「あなたが王女様と知ったのは、皇帝陛下が直々にエーヴ様をお迎えに上がられてからのことでした。カジエミシユおじさん達みんなが急にいなくなったので驚きました。

私はエレナちゃんがいなくなってしまっても寂しかった。

あれから村は戦場になることもなく、戦争を生き延びることはできました。ですが大異変の隕石が村を直撃し、多くの村人と共に私は両親を失いました」

エメラルド色の瞳を潤ませながら、ブローニャはエレナと同様に大異変に関わる波乱に満ちた体験を語った。

幸いにして重症を負うことなく大異変の災厄を免れた彼女はセシリア市まで移動できたものの、そこに広がっていたのはケック村を上回る都市の惨状であった。

その後の経過はエレナと似通ったものだった。動ける人間は少しでも負傷者を助けなければならぬ。寝食を惜しんで被災者の治療に当たった彼女は、いつしか看護師として各地への救出活動を行うようになった。既に両親を失い帰る村も無い彼女には、救済に当たっている時間こそが唯一の救いともなっていたからだ。

大異変の影響が次第に終息し、ブローニャはセシリア市に設けられた医療施設で正式に看護師資格を取得した。そして新たな勤務場所を考えていた時に、エウロペでの看護師募集に接したのだ。

「暗黒大陸から生還したエレナ様がここで救済活動を行っているという、私にも何か役に立てればと思いやってきたのです」

二人は互いに長く手を握り続けていた。

戦争と大異変で、この星はあまりに多くのものを失った。エレナもキャロラインと別れ、父ゼネバスを失い、シユテルマーとも絶望的な離別をした。

自分の元から数多くの人々が去っていく一方で、人と人との絆が予想外に強い事も実感していた。

「ルリーズ様、と呼んだ方がいいのですね」

「ルリーズで構いません。私はこの大陸で新しい生活を始めたのですから。」

よろしくお願いします、ブローニャ」

ロブ平野を渡る風が、二人の女性の頬を優しく撫でていった。

ブローニャたち新たな看護師を加えたことにより、診療所の運営は軌道に乗り始め、毎日数十人単位で訪れる患者たちもあまり待つことも無く治療を受けられるようになっていった。通院の為に露営をする患者の中には、野良ゾイドの襲撃を恐れ夜間の移動を避ける為に診療所の近くに仮設の宿舎を建設し、自分たちの治療が終了した後は無料宿泊所として開放をする者も現れた。いつのまにか、施設の周囲には村落にも似たコミュニティが現れるようになっていたのだ。

一方、建設されるはずであったエレナの公邸は、いつの間にか厳めしい姿に変わっていた。明らかに軍事施設を思わせるそれは、共和国軍が後に西方大陸進出のきっかけとなるロブ基地となる。皮肉なことに、堅牢な防壁で守られた施設には、更に野良ゾイドからの襲撃を恐れる住民達が数多く集まり、診療所と軍事基地という施設を中心にコミュニティが拡大発展していった。

協定の変化は、大異変後既に表出していた。破壊されたキングゴジユラスの残骸を解析し、磁気異常を相殺する機能を備えた小型中型ゾイドを、帝国共和国とも限定的に生産を開始していたからだ。

平和裏に進められたはずのエレナの西方大陸移動も、帝国側が共和国軍のロブ基地建設を理由にニクシーに進出、やがて帝国側の西方大陸進出の一大拠点として成立するニクシー基地の基礎を建設し始めていた。

「人はいつまで愚かな事を繰り返すのでしょうか」

公邸の代わりに建設された看護師たちの宿舎で、髪を梳いたブローニャが同じく髪を梳いているエレナに問いかけた。

「帝国も共和国もエウロペへの進出を咎めて競うように軍事基地を建設し始めた。あんなに戦争で人が死んだのに、なぜまた過ちを繰り返すようなことをするのかしら」

仄かに上気した頬を赤く染め、濡れた髪を頻りにタオルで拭いている。直接戦争で家族を失ったわけではないが、彼女にとっても戦争は忌まわしい出来事にならない。看護師として人命を尊び献身的に働くブローニャにとっても、今回の基地建設は納得のいかないものだった。

「それほど落胆する必要はないと思う」

彼女の懸念に反して、エレナは楽観的であった。

「確かに私たちは、戦争で多くの命を失いました。もう二度と起こしたくはないと思う。でも今まで戦争の中で生きてきた人たちは、急にそれと切り離されても生き方がわからずに混乱してしまう。」

軍事基地の建設は両軍の衝突を産む危険性はあるけれど、ニクシーとロブは遠いから、直接の衝突は考える必要はないと思うの。それに今は野良ゾイドの襲撃に備えるためにも、基地の存在は素直に心強いでしょう。

それに、政府主導で基地の建設が進めば未開のEUロペにも新たな開発の息吹を呼び込むことができる。氷河に鎖された暗い大地に閉じ込められていた人たちが、明るいこの大地に共に暮らすことができれば争う意味など無くなる。武器を捨てるのはそれからでも遅くないと思うのよ。どうでしょう?」

ブローニャは呆気にとられてエレナを見つめていた。彼女の考察が余りに正鵠を射ていたからだ。

「さすがです。やはり違いますね」

「いいえ、これはある人からの受け売り。ゆっくり、ゆっくりとね”」

髪を拭きながら、ブローニャは彼女の言葉に首を傾げる。エレナは楽しそうに笑っていた。彼女が嘗て出会った、深山幽谷に住む人のように。

深山幽谷で別れた人との再会は唐突に訪れた。

既に何件かの目撃例は挙げられていたが、軍事基地の近くということもあり油断していたことも事実だった。

その日エレナは、ブローニャと共に無料宿泊施設を回り、患者の治

療後の経過や医薬品の配布、包帯の交換などを行っていた。予定の作業が半分ほど完了し、医療品を取りに診療所に戻ろうとしていたときであった。

宿泊所の反対側、生い茂った林の奥から無数のシリンダーが軋む音が響く。ガサガサという多脚式ゾイド特有の足音が近づいてくる。一度だけ歩みが止まった後、林の奥から勢いを付けて飛び出してきた。

「野良ゾイドだ！」

宿泊所から悲鳴が上がる。簡易宿舎の壁を粉碎し、人体と同じ位の巨大な鋏が突き出される。

デスピオン。ゼネバス帝国スケルトン部隊に所属していた小型ゾイドであった。

磁気嵐はゾイドのサイズに比例して影響を及ぼす。つまり24ゾイドと呼ばれるこの小型ゾイドには、磁気嵐の影響は極めて微小でしかなかった。中央大陸戦争末期、共和国軍の鹵獲を拒んだ一部の24部隊の生き残りが機体と共に西方大陸に脱出し、その後機体のみが野生化したもので、主を失った後も戦闘行動のみをメモリーに刻まれたそれは、戦う敵のいない西方大陸で無為な殺戮を続けていた。

振り回される電磁波発生アームが建物を薙ぎ倒し、逃げ惑う人々を白い機体が追い立てる。但し、整備もされない機体は装甲板の彼方此方に亀裂が奔り、シリンダーの軋み同様円滑な動作は出来ない。本来であれば高速で移動できる能力も、戦争の終結と大異変の混乱で文字通り錆び付いていた。

それでも生身の人間にとって脅威には違いない。逃げることの出来る者は逃げた。なんとか歩くことの出来る者もその場を退避できた。しかし、中には何人もの歩行不可能な患者が残っていた。

勇気があったからではない。むしろ偶然であった。デスピオンの進む方向とは逆に逃げたエレナたちは、扉の開け放たれた宿泊所の中に、両足に怪我を負い、横たわって震えている少女を発見した。付き添う者も無く、外の状況が呑み込めずにただ怯えている。

エレナに見は過ごすことなどできなかつた。

「ブローニャ、手伝って」

少女を背負うと必死に駆け出す。その時機体を旋回させたデスピオンのセンサーに、3人の姿が捉えられていた。

ぎごちなく脚部を軋ませデスピオンが追う。速くはないが人の走る速さよりは充分に速い。エレナは背後に白い影が迫ってくるのがわかった。

「ルリーズ、早く、早くー!」

肩を押してくれるブローニャも、到底逃げる手段には繋がらない。電磁アームの微細な振動音が聞こえてくる。

かつてギルベイダーと対峙した時は、白馬に乗ったシユウが現れ倒してくれた。だが今は自称「王子」はキャロルの元へと飛び立ってしまった。それでも不思議と恐れはなかった。少女を救いたいが為にブローニャまで巻き込んでしまったというのに、冷静に脱出の方法を考えていた。

(必ず助かる手立てはある)

彼女が持てる思考をフル回転させているときであった。

デスピオンの真上の装甲、本来であれば操縦者が横たわる場所に、デスピオンの鋏と同じくらしいの大きさの岩塊が落下し命中した。見れば、基地建設用に積まれていた建材の一部である。拉げた装甲板が大きく歪み、不意の攻撃に追跡を止めた反動でコンソールが剥き出しになった。

「こっちだ」

鏝広の帽子を目深に被った人物が、建設途中の宿舍の上で手を伸ばしている。動きを止めたデスピオンを見ながら、エレナたちを建物の影に隠した。

左手で先ほどと同じぐらいの建材を持ち上げると、再起動したデスピオン目掛けて放り投げる。見事な放物線を描いた岩塊は、操縦席を被っていた装甲板を完全に吹き飛ばし、埃に塗れたシートを何年かぶりに陽の光の元に晒した。帽子を押さえながらデスピオンの背中に飛び乗る。死角であり、野良ゾイドも自分自身への攻撃は不可能であった。

「これだな」

その人物は、左手でコンソールの部品を引き千切ると地面に叩き付けた。小さな火花が散ると同時に、デスピオンの動きが急激に鈍くなくなっていく。作動系の制御盤を根こそぎむしり取ったのだ。鋏、脚、尾が項垂れる。

「やった！」

思わずブローニヤが駆け寄る。機体中央に光る青いセンサーが不規則な輝きを始めた。

「待って、様子がおかしい」

エレナは建物の影から叫んだ。

特殊部隊スケルトンの残っていた罠、所謂いわゆるブービートラップである。機体の作動が停止すると同時に仕掛けられた爆薬が機体ごと爆破する。ゾイドを動く地雷として利用していたのだ。

鰐広の人物が身を翻させた。

「伏せろ」

ブローニヤを庇って地に臥せると、次の瞬間大量の破片を撒き散らしてデスピオンは破碎した。その一部が弾け、その人物の左腕に衝突した。

エレナは思わず目を背けた。

破片の衝突の衝撃で、左腕が二の腕の部分から削げ落ち、皮膚一枚でぶら下がっていた。不思議な事に出血が一切ない。瓦礫を払い除け立ち上がったその様子も、苦痛に顔を歪めることもなくただ少し悲しそうに腕の付け根を見つめている。

宿舎の扉の後ろから駆け寄り、思わず垂れ下がった左腕を持ち上げた時、エレナはその腕が低い機械音を発していることに気付いた。

（これは義手。マイケル先生の……）

男性が帽子を上げてエレナの顔を見つめる。頬に幾つかの切り傷がついていたが、思いのほかに血色が良い。

「あ……ありがとうございます」

蹲っていたブローニヤが立ち上がり、エレナと同じように左腕を見つめる。

二人の女性から注がれる視線に気が付いた時、その人物は残っていた右手で帽子を振り払った。見覚えのある顔が現れる。エレナは驚きの声を上げた。

「リチャードさんですか」

「お懐かしい、御無事でしたか、ルーシーさん！」

「あの……ルーズです」

彼との感動の再会は、少々緊張感を欠いたものとなった。

人の出会いと絆の不可思議さを感じる余韻も無く、時代は淡々と流れていく。

エレナがヘリックからの書簡を受け取ったのは、彼女がエウロペに渡ってから半年後、リチャードと再会した翌日であった。

夕日を浴びながら、彼は病室の窓際に佇んでいた。デスピオンとの戦いで抜け落ちた左腕の義手も機能的には故障もなく、二の腕の接合面でのビス交換を行うだけで確実に再起動した。

「そこにいたのですか。気付かず失礼しました」

振り向いたリチャードの瞳には溢れんばかりの生気で満ち溢れていた。

(完全に、回復したんですね)

地獄のような戦場から脱出した直後の彼の姿を思い出し、自分のしたことを誇らしく感じていた。誰かを助けることが自分のこと以上に嬉しく思えた。そしてもう一つ、別の感情も。

後ろ姿を見た瞬間、エレナは締め付けられるような胸の痛みを感じた。呼吸が苦しく鼓動が早鐘の様に打ち付ける。その感情が何なのか、彼女自身も知っていた。

「探し物は見つかったのですか」

旅立ちの際に語った夢を訪ねると、微笑みながら頷いた。

「見つけました。素晴らしい奴らです」

「よかった」

会話は断片的であったが気持ちが通じ合っている。

彼にとっても、エレナは忘れ得ぬ女性となっていた。

「あの……」

「御用件があれば一階のナースセンターに寄ってください。まだ少し仕事が残っているので、後ほど」

何かを言いかけたリチャードを後にして、エレナは病室のドアを閉める。

これ以上彼の顔を見ていたら気持ちを抑えることができなくな

る。閉じたドアの反対側で、胸に手を当て大きく溜息をついた。

顔を上げると、少し離れた廊下の突き当たりに両手を胸の前で組んだブローニヤが何かを思いつめるような表情で佇んでいる。

彼女の視線は、エレナではなくエレナの凭れ掛かるドアに注がれていた。

「ルイーズは、リチャードさんとはお知り合いなのですよね」

彼との出会いはデスピオンとの戦闘後に簡単に説明をしていた。その運命的な再会に、セーラブ軍医を含めて周囲の職員全員が感嘆した。職員の中には、未だエレナがゼネバスの娘と知らぬ者もいて、祝福とも冷やかしくも取れる言葉を投げかけた。事実、エレナの中でも同じような感情が湧きだすのを押さえられず、まして嘗ての父を思わせる風貌が彼女の想いを募らせた。

そして同様の感情を抱いたのは、エレナだけではなかった。

「あの人は、自分が傷つくのも恐れず私を助けてくれた。左手がぶら下がっているのに立ち上がってにっこり笑い『怪我はありませんでしたか』と右手を伸ばしてくれた」

日暮れの診療所の中庭。二人の女性の影が夕日に溶け込もうとしている。

「戦争と大異変で荒廃した世界の中、彼は希望を捨てずに探し求めた夢を見つけた。何事にも恐れず突き進む姿に憧れます。」

あなたと彼との間にどんな過去があるかは知らないけれど、私もあの人の運命を感じました。この気持ちを隠したくはないのでお話ししておきます。

私はリチャードを愛しています」

ロブ平原を一陣の風が吹き抜けた。

第一次大陸間戦争に於けるヘリック共和国とガイロス帝国間での講和条約は、惑星大異変による混乱以降、正式な締結がなされないまま経過していた。

共和国側では、ゼネバス帝国との中央大陸戦争から数え約80年にも及ぶ戦乱が続いた。人知を超えた宇宙からの鉄槌を、戦いに明け暮れてきた人々がこれ以上の戦闘継続への警告と受け取ったのも想像

に難くない。厭戦感の高まる共和国内世論を受け、ヘリックは講和会議開催の提案をガイロス帝国側に申し出たのだった。

主眼となるのは、両国間の恒久平和の維持、武力による国際問題解決を放棄し、常に話し合いによる解決を目指すというものである。この際、共和国側からの提案であるため会見場の指定は西方大陸という条件だけを示し、帝国側に任せるという最大限の譲歩を行う。そして共和国・帝国双方にとっての第三者的な立会人の存在が必要とされた。

共和国側に保護されているとはいえ、誰もが想像する人物。旧ゼネバス帝国の後継者エレナが再び歴史の奔流の中に巻き込まれるのは正に時代の必然であった。

レツドラスト、カシル村。帝国側から会見場として提示されたのは、両軍西方大陸基地のほぼ等距離にある移民村であった。

レツドラストは北エウロペの低緯度高圧帯に位置する、その名の通り赤い砂漠土に覆われた広大な乾燥地帯である。酸化鉄やボーキサイトを豊富に含み、有機体の生物にとっては死の世界でも金属生命体ゾイドにとっては豊穡な栄養分を抱いた場所であった。中央大陸産の同種のゾイドであっても、機体の成長時に取り込まれる金属成分によつて若干の差異が認められる。全ての個体に当てはまる訳ではないが、中央大陸戦争時と西方大陸戦争時にゾイドの機体の色彩が変化した理由に、この西方大陸独特の風土も影響していた。

グスタフのコンテナに設けられたロイヤルルームとは名ばかりの一面で、エレナはカシル村に向かっていた。終息傾向にあるとはいえ時折発生する磁気嵐によつて停止を強いられる。エレナは部屋の中で大きく伸び上がり欠伸をした。

「さすがに飽きて来たかな、ルイーザ」

正面に備えられたケーブル通信のモニターに、見慣れてしまったヘリックの顔が映った。欠伸をかみこらし涙を拭きながら、エレナはモニターに応える。

「これから誰もが成し得なかった重要な会議が開かれるのです。今から緊張しては肝心な場面で身体が持ちませんので」

モニターの向こうでヘリックが笑っていた。

診療所に大統領の書簡が届いた後も、エレナは怯まなかった。

「ちよつとだけ、出かけて来ます」

それが自分に課せられた義務であれば喜んで受け入れるものと覚悟していた。内容を知ったブローニヤが不安そうに見つめる。

「和平は成功すると思う？」

「無理でしょうね」

エレナは即答した。

「時期が早すぎます。互いに和平への気持ちが醸成されていないのに、一時の世論に押されて講和会談を行っても流会するだけでしょう」

「ではなぜ、あなたはそれに出席するんだい」

セーラブが幾分批判めいた口調で問いかける。彼にしてみても、彼女がこの場所を離れることに賛同していなかった。

「失敗すると判っていても試みることは大切です。何度失敗しても少しだけ前に進めればいい。私はその為に出掛けるのです。そして戦争で手や足、そして命を失う人がいなくなれば私も幸せな気持ちになれるのですから」

エレナは微笑んで応え、西の方角を見つめる。

セーラブ達に引き留める言葉は無かった。

エレナにとって心強かったのは、カシル村までの移動に際しリチャードが水先案内人として随伴してくれていたことだった。

元共和国軍人であり、エウロペの深部にまで徒歩で走破した経験を持つ彼に、未だ充分なエウロペの情報を持たないエレナたちが同行を求めるのは自然な流れと言えた。

移動の為のグスタフのコンテナは数台に分けられている。要人であるヘリックとエレナの区画は、万が一の事態に備えてそれぞれの列の最初と最後に分けられ容易に行き来することができない。電波障害に対応する為、二人のコンテナの間には通信ケーブルが備えられ会話を行うこともできたが、それは所詮味気ないものである。

それよりも、エレナは隣のコンテナに設けられたリチャード達が待

機する区画に何度となく訪れていた。

進路を探る地図の前で、彼は数人の兵士と共に会話していた。大異変によつて磁気に変化し、コンパスは頼りにならない。従つてポイントとなる地形と大異変前の地図を元に光学機器での測量によつて進むことになる。大陸各地を彷徨し地形を良く知るリチャードの存在は、共和国の兵士たちにとつても心強かつた。

広げた地図を見ながら、彼は額の汗を拭う。彼女の区画と違い一部吹きさらしであつた。磁気嵐が続いているとはいえ、砂漠では砂嵐の方が遙かに恐ろしい。

グスタフの進路とは外れた地平に砂塵が渦巻いていた。遠くの景色は煙に巻かれて霞み、やがて視界から消えていく。

風は数分の内に一層強くなり、かなり大きな砂粒まで巻き上げた。捻じ曲がつて蛇のように地表を這う。徐々に辺り一面明るい赤褐色になり、風の中に砂粒に混じつた水晶の破片が飛散し煌めいていた。「あとどれくらいですか」

コンテナの転輪と接合部の擦れ合う音が響く中、砂塵を浴びながら彼が振り向く。

「夜までには目的地には到着します。会談の準備は翌朝ですね。」

「こんなところに来たら砂まみれになります、部屋に入っていてください」

彼女は髪が砂塵に靡くのを感じながら、幾分砂漠の照り返しに目を細めている彼を見る。

「いつまでも閉じ込められているのは性分に合わないの。何か手伝えることはありませんか」

いつもであれば涼やかで透き通る彼女の声も、車輪の響きの中では充分に伝わらない。砂粒が口の中に入るのも厭わず、エレナは出来る限り声を張り上げた。

「無理をしないで部屋に戻っていてください。後で冷たい紅茶を飲みに伺いますから」

彼の低い声は、張り上げずとも聞き取れる。エレナは見様見真似の敬礼をすると、素直に部屋へと戻る事とした。

やはり衣服の襞に砂粒が入り込んでいる。入り口で軽く払い、区画に入ると備え付けの簡易クーラーボックスから紅茶の葉を取り出した。デルポイから運んで来た貴重な茶葉も残り少ない。それでも彼女は惜しむことなくサーバに注ぎ出来上がりを待った。

「ルイーズ、大統領閣下から連絡です。モニター前に来て」

ブローニヤが彼女の着替えを携えて入って来る。

「また彼の所に行っていたのね。少しでも一緒にいたいのは判るけど、綺麗な髪が砂まみれになってる。それじゃあ嫌われちゃうわよ」
半ば呆れ顔、そして楽しそうに着替えを置いた。

「紅茶を淹れたの。三十分ほどしたら飲み頃になるからリチャードも誘って来てね」

「どつちが主賓なのかしら？ でもお邪魔させてもらうわ。楽しみにしてる」

ブローニヤで優しくエレナの髪の毛の砂粒を掃った後、着終えた彼女の衣服を持って去って行った。

日暮れの診療所の中庭、エレナは当惑する表情のブローニヤに問いかけた。

「あなたの気持ちを知った上で聞きます。私とリチャードさんと一緒に来ますか」

リチャードが同行を求められたことにより、物理的な距離はエレナが一段と近くなる。しかし、彼女にとってそれはブローニヤとの友情を前に、認めがたいものであったのだ。

「共和国軍では、私の世話係となる女性を探しています。だからあなたもこの会談に同行する機会もあります。でも、帝国側が罫を張り襲撃する可能性も高い。

それでも一緒に来る覚悟があるのでしたら、私はあなたを推薦します」

「行きます」

ブローニヤの気持ちに変わりは無かった。

エレナの話し相手として、そして最大の恋のライバルとして、彼女もまた乗員の一人になったのだった。

モニターの呼び出し音が鳴り続けている。軽く髪を梳かすと、着慣れたハイネックのワンピースに着替えモニターの前に座った。

「またデツキに出ていたのかね」

「それくらいしか楽しみがありませんので。ところで伯父様、冷たい紅茶など如何ですか」

「次の停車時にお邪魔するよ。それより例の宣言文の確認をした。原稿は手元にあるだろうか」

エレナは黒に金色のゼネバスの紋章のあしらわれたファイルを書類棚より取り出し、書かれた文字を真剣な視線で追う。

「準備できました」

「もう一度読んでくれるかね」

「はい。」

私エレナ・ムーロアは、亡き父ゼネバス・ムーロア元皇帝の名代（みょうだい）として、ヘリック共和国大統領ヘリック・ムーロアⅡ世に対し、ガイロス帝国代表者の立ち合いの元に、以下の宣言を致します。

一つ、皇女エレナ・ムーロアへのゼネバス帝国の主権移譲。

二つ、ゼネバス帝国の軍事力放棄、つまり恒久平和の確立。これにより、臣民であるゼネバス兵は速やかに武装解除に応じること。

三つ、ヘリック共和国、ガイロス帝国との大陸間戦争へのゼネバス帝国の完全中立を表明。これにより両国との不可侵を宣言し、ゼネバス兵は自衛行動を除くすべて戦闘行為並びに戦闘行為への協力を即時停止すること。

四つ、ゼネバス帝国はヘリック共和国の管理のもと、内政自治権を有すること。なおヘリック共和国はゼネバス帝国の安全保障の点に於いて全面的な責任を負うものとする。

五つ、帝国の皇室は皇女エレナへの移譲により立憲君主制とし帝国議会を持つこと。

六つ、上記の帝国議会議員はゼネバス帝国臣民により選出されるところ。またそれを選出する選挙権は帝国市民権を持つ成人の男女に限定する。

以上」

転輪の騒音に邪魔されない区画の中で、彼女本来の涼やかな声が流れる。

「見事だ。全く問題はないな」

「はい伯父様……。そろそろ大統領閣下と呼び方を変えて行った方が宜しいでしょうか？」

「好きにしてくれたまえ。大統領閣下と呼ぶ割に、全く尊敬の念が感じられない若者もいるからな」

モニターの向こう側、ヘリックが苦笑する。誰の事かすぐにわかった。

「二体、彼は何が専門なのですか。確か地球物理学が専攻と聞いていますが」

「もともと我々の理解を越えた人間なのだよ。今回の宣言も半分以上が彼の提案だ。散々私を扇動しておいて、今回の随員に指名した途端に遺跡研究と称してまた逃げられたよ」

「諧謔としたところは変わりない。実に彼らしい。」

「それと、彼の友人からの伝言だそうだ。「火傷していませんか」

一体何のことだね？」

エレナも笑った。

まだ素直になり切れていないのね。フィアンセ 婚約者と名乗れないんだもの。

それは、ヘリック共和国とガイロス帝国との講和条約締結の際、今度ガイロス帝国代表をホスト役として、今後のヘリック共和国とゼネバス帝国との関係を明示し、上記の如くゼネバス帝国を「平和の国」として存続させようとしたものだった。

1978年のゼネバス帝国の建国は、若き日のゼネバスの熱情に絆され結果的にヘリック共和国との間に戦端を開く形になってしまったが、本来であればゼネバス帝国の建国は共和国にとつては不満分子解消の棄民政策の結果であった。帝国の建国理念もあくまで中央大陸西方に移民した人々のもので、共和国と争うために生まれた国ではなかった。この理念に立ち返れば、ゼネバス帝国は上記のエレナの宣言によってすべての軍事力を放棄し「平和の国」とすることもあなが

ち無茶な提案ではない。

「根本的な間違いは、為政者だけでなく多くの人たちが中央大陸はひとつの統一国家によって統治されなければならないと思いついてしまったことです」

シユウはその部分を大統領に強調し、宣言文を起草した。

中央大陸に平和を築くには両国の保有する軍事力の拮抗によるものではなく、軍事力の放棄によって実現させること、そしてそのためには両国に「信頼」という土壌を築くことを主眼としたのだった。

「ルイーズ、この宣言をする以上覚悟が必要な事も覚えておいてください。情報発信の仕方と大衆側での受け取り方によっては、あなたはゼネバス帝国の裏切り者の烙印を押され命を狙われる危険性までも孕んでいます。人は理性だけではなく感情でも動くことも忘れずに。」

僕も今の段階で正式にガイロス帝国との講和条約が締結されるとは思えませんが、それでも万が一成功すれば今度はルイーズの番です。

未だに共和国軍を憎んでいる旧ゼネバス帝国出身者は多い。でも、戦争と大異変の惨禍に苦しんでいる人々もまだまだ沢山います。この気持ちとこの宣言が重なれば、或いは理想が現実になる可能性もあると思います。

僕もルイーズの言うように、人間の持つ可能性というものに賭けてみたいのです」

送られてきた映像には、シユウの背後で時折手を振るキャララインの姿も映っていた。左の薬指ではないものの、真新しい白銀色の指輪が光っていた。幸せそうだった。

宣言文を読み終えた後、エレナは少しだけ考えていた。

(もし今も父が生きていたら)

伯父ヘリックⅡ世、シユウ、そして他ならぬ自分自身。孤独な皇帝であった父に手を差し伸べることができれば、或いはこれまでの悲劇は回避できていたかもしれないということに。

時間は戻らない。今は可能性が低いとはいえ、ヘリック共和国とガイロス帝国との間に講和条約を締結するのが目的だ。

窓に夕日が射してくる。

あんなに長く続く綺麗な夕日は見たことが無かった。

空気中の埃のせいだろう。明るい紫色と生き生きしたオレンジ色、それにリチウムが燃えるような赤が混ざっている。これまでどんな画家のパレットでも見たことの無い組み合わせで、永遠に終わらないと思えるほどの素晴らしい眺めだった。

砂漠の地平に浮かぶ二つの月が、仮設デッキの手摺の影を長く伸ばしている。丁度直角になる影を描いて蒼い光が夜空に輝く。周囲を固めて待機するエクスグランチュラのゾイドコアの微かな鼓動が聞こえるほどに、砂漠の夜は静かに更けていく。少し遠くに、補給物資を搭載した同仕様のグスタフが4機並んでいた。

警戒の為にヘリッククの提案により、敢えて灯りを燈さないままテーブルが準備されていた。満天の星空と月明かりに白く輪郭が縁取られたヘリッククが、無言で夜空を見上げている。その届かぬ視線の先には、宇宙へと飛び去った移民船と、星になった無数の魂が映るかのよう。

「お待たせして申し訳ありません。伯父さま、こちらにどうぞ」

エレナは、時折飛来しては小さな刺し傷を残す羽虫を避けるため、無機質な砂漠色の軍服を羽織っていた。有機生命体にとって過酷な砂漠でも、他の生物の体液を吸いながら生きる命が存在していたのだ。

「星空の下で味わうのも好いだらう」

軽く礼を言うと、ヘリッククはゆっくりと腰を下ろした。テーブルには四つのカップが置かれ、二つの空席が残っている。紅茶を注ぐ仕草に伴い、エレナの胸元でゼネバスの紋章が金色に煌めき、時折涼やかな音を奏でる。旅の間に幾分日に焼けたとはいえ、彼女の白磁の様な肌が浮かび上がる。先にカップを手にしたヘリッククは、一口紅茶を含むと、エレナを見つめ陶然とした溜息をついていた。

「私も娘が欲しかったな」

エレナは静かに微笑んだ。

「御冗談を。ローザ様は娘と同じではありませんか」

「これは手厳しい」

ヘリッククは苦笑しながら額の汗を拭う。月明かりの中、無邪気に笑う老人の姿は、とても長年共和国軍を率いて戦い抜いてきた指導者には見えない。それは個人として最愛の人を想う平凡な夫の姿だった。

「お邪魔します」

軽食を携えたブローニヤがテーブルにトレイを置くと、深く目礼を行う。

「構わんでくれ。堅苦しい挨拶は息抜きにならぬよ。丁度良かった。いまルイーズに責められていたところであつたのだ」

空いている椅子を示し、ヘリックは気さくにブローニヤに席を勧めらる。恐縮しつつも、彼女はもう一度礼をして着座した。

「ルイーズもひどいです。大統領閣下も一緒だと言つてくれないんだもの」

「いいじゃないですか、人数が多い方が楽しいし。それに閣下も若い女性に囲まれることをお望みでしょう」

悪戯っぽくエレナが笑う。ブローニヤのカップにも紅茶が注がれた。

「失礼します」

「リチャード君、助けてくれたまえ」

来る早々に助けを求められた彼は当惑している。

「弟もやり込められていたと聞いていたが、ルイーズには敵わんよ。もう君に縋る他ない」

「失礼な。父とは関係ありませんわ」

そう言いつつ、今は微笑みながら父ゼネバスの話が出る自分に付き、時間の着実な流れを実感した。そしてまた、目の前にいる大統領ヘリックと父との違いを知った。孤独な皇帝であつた父は、自分の弱さを見せることが出来なかつた。母、マイケル、そして娘である彼女自身と、支えるべき人々が次々と去つて行つた。どれほど優秀な家臣を有していても、心の許せる家族の温もりを失つた時から、父の心は追い詰められてしまつたのだろう。ヘリックは一介の案内人に過ぎないリチャードに対してさえ、自分の弱さを曝け出すことの出来る強さを持っていた。それ故に彼は偉大なのだ。

「カシル村までの日程を説明してやって欲しいのだが」

席に着いたりリチャードに、二人の女性に目を遣りながら、汗を拭つたヘリックが問いかける。立ち上がり敬礼をしようとする彼を制し

「座つたまままで」と囁いて。

「ドスゴドス小隊が先行し、進路の確保を行っているそうです。磁気嵐はここ数日収まっていますが、警戒は必要です。カシル村には、まだガイロス帝国代表は到着していないと聞きました。恐らくは、私達と同様に村から離れた場所で野営をし、明朝合流場所に到着するものと思われます。代表团こそ確認されてはいませんが、敵の護衛部隊と思われるヘルデイガンナー数機を察知したそうで、間違いなく接近しているものと思われます」

エレナは嘗てキシワムビタ城の周囲を睥睨していた黒い機体を思い出した。そのゾイドだけは、未だに好きになれないでいた。

「正直なところ、私もこの講和が円滑に成立するとは思っていない」

リチャードの言葉が終わると同時に、幾分声を潜めてヘリックが告げた。

「それでもガイロス帝国が私の和平への呼びかけに応じてくれたことを評価したい。わざわざ希少なディオハリコンを装備した暗黒ゾイドまで送り込んで来たということは、彼らもこの会談の重要性を認識しているに違いない。あの国も、大異変後は一枚岩ではなくなったようだ。無論、何らかの謀略を警戒する必要もあるが。」

今回は私とルイズが直接出向くという最大限譲歩した形で漸く話し合いの席を設けることができた。この会談が、今後の両国の共存と繁栄への手掛かりになることを望みたい」

星空の下で語られるヘリックの言葉は、彼の平和への強い意志を示していた。

同時に、エレナは自信に満ちた伯父の言葉の端々に、時折垣間見せる焦燥感のようなものを感じ取っていた。

この時既に、彼は老いによる身体の変調に気が付いていたに違いない。偉大な共和国初代大統領は、自分が間もなく弟の後を追うことを知っていたのだらう。彼は戦争終結を急ぐ余り、キングゴジュラスという究極の破壊兵器投入の承認し、結果的に惑星大異変を誘発させてしまった。そして今、ヘリックは自分の存命中に和平を成立させるために、別の形振り構わない方法で今回の会談を設けた。でなければ、

共和国大統領と、ゼネバス帝国の忘れ形見といえる人物が、無防備な砂漠の真ん中に飛び込んで行く危険を冒す事を説明できない。

一方帝国側では、この頃皇帝ガイロスが大異変を機に退位を考えていたといわれる。理由は、当時成人した皇太子が、心身ともに衰えを見せてきた父に代わり、荒廃した国土再建のため精力的な活動を開始していたからだ。

若き皇太子は、信頼できる側近（主に青年将校）とともに地軸や海流の変化を有意に利用し、生活の基本となる食糧生産のための耕地改良を幅広く開始した。それまで戦闘用として重用され続けて来たゾイドを一齐に耕作地に投入し、更にはゼネバス製の小型ゾイドを民生用に改造して農業関係者に供与した。

数千年から数万年の間、永久凍土層に蓄積されていた腐葉土は、大異変後の温暖化による融解によって豊かな穀倉地帯を生み出していた。そのため農業改革の僅か半年後にして、ニクスの大地には信じられないほどの大量の穀物が実を結んだ。尽きることの無い大地の恵みは、帝国臣民に嘗てない豊かさを享受させ、同時に皇室への帝国臣民からの支持を広く集めることとなる。

若き皇太子が信頼の絆によって臣民達を豊かにする光景を目の当たりにした時、戦いに明け暮れ、激しい猜疑心故に同族でさえ肅清を続けた皇帝ガイロスにとって、自分の時代が終わったと実感するには充分であった。

臣民の生活の豊かさが、同時に思想的な多様性を育んだことは以前に述べた通りである。大陸間戦争を通し、ヘリック共和国に触れる事によって中央大陸から吹いた自由の風は、ニクスの地の人々にも新しい息吹を齎した。大異変の惨禍を経て気付いたことも多かったのだろう。単なる形式的な後継から、新たな国家の礎を築ける為政者として、皇帝ガイロスは皇太子に大いなる期待を抱いた。そしてその皇太子から提案されたこと。それが帝国議会の開設であり、共和国との和平であったのだ。それまで自由な言論の場も持てなかった帝国に、身分や家柄によって選出が制限されているとはいえ、仮初にも帝国議会というものが創設されたのである。時期を同じくして共和国ヘリック

ク大統領、そして皇帝ゼネバスの遺児エレナ・ムーロアの連名による講和会談の提案を、ガイロス帝国議会は受け入れたのだった。

「あの戦争の惨禍は絶対に忘れてはいけません。」

同時に人はいつまでも憎しみだけで生きてはならない。憎悪の炎は、恨みを晴らさない間その人の心を苦しめ続けます。恨みを晴らしても刹那的に嗜虐心を満たす以外何も残らず、破壊と新たな憎悪の感情を生み出すだけ。過去に犯した過ちを永遠に責め続けていたのは、互いに理解し合う機会を失います。

許し合い、尊重し合ってこそ、新しい時代が築けるのです」

「でも、愛する家族や恋人を殺された人たちにとって、敵を許すことなどできるのでしょうか。もし私だったら、『敵を許してあげなさい』と言われても、とても耐えきれない」

「ブローニヤ、耐えるのではなく、受け入れるのよ。戦争という大量殺戮に正義なんかありません。それは互いに自分の正義を振りかざした結果なのだから。見知らぬ隣人が無言で侵入して来れば誰だって身構えるでしょう。けれども、その人の家で火事が起こっていて、救済を求めていると知ったならば、きつと人は手を差し伸べると思います。」

人は本来優しい生き物です。相手の立場を思いやり学ぶことによつて、譲歩は可能になります。

自分が犠牲になるわけではありません。相手を思いやればこそ、相手の間違つた態度や甘えた姿勢には、毅然として指摘するのも優しさです」

「ルイーズさんのお話しに私も賛成です。例えとして、憎悪の感情を痒みを伴う小さな虫刺されのようなものと考えてみてください。最初に丁寧な薬をつけて、気にかげずにいればいつの間にか消えてしまうものであつても痒みに任せて掻きまれば、刹那的には快感を味わうことができます。だが掻きまられた皮膚は赤く腫れて、痒みは更に激しくなる。それでも掻き続ければ、最初小さかった物も皮膚に毒を回して大きく広がり、やがて大きな傷跡を残すことにもなる」

「リチャードさんの言うように消えてしまうものもありますが、小さ

な虫刺されでも猛毒のものもあります。症状の本質を適確に分析し、適宜対処しなければなりません。一番いいのは虫に刺されないようにすること、その為には多くの知識と経験が必要です」

「私たちは無数の命の犠牲によって、充分すぎるほどの知識と経験を得ました。私自身も左腕を失って。だから今後我々は、恨みを晴らす為にその知識を使うのではなく、共に歩み、互いに繁栄するために生かしていくことに使いたい」

「そうです。それが生き残った者達の義務であり責任であるのではないのでしょうか。もう国家や国境に拘る時代は終わりにしたい」

「じゃあ、国家という枠組みに拘らないのであれば、なぜリーズはゼネバス帝国の復興を願うのですか」

「残念だけど、全ての執着を拭い去る事の出来る人は、私を含め殆どいません。いまウルトラザウルスの格納庫ほどの部屋を個室に与えられたと想像してみてね。中を自由に使って良いと許可されても、結局は隅の壁際に寄りかかかってしまおうのではないのでしょうか。それもまた、人の特性なのだから。」

大きくは国家、小さくは家族という集団に所属することで、人は安心感を得られる。いつの日か人々の心が平和に満ち溢れば、国家も国境という概念も不必要となるでしょう。だけどそれが実現するには人の歴史が終わるまでかかるかもしれない。

我儘で、自分勝手に、感情的になれるからこそ、人は明日を生きられるのかもしれない。それを全否定することが、如何に愚かしいかわかっています。だからこそ、非武装でありながらも主権を有する国家という枠を再興する必要があるのです」

「私にとってゼネバス帝国が復活するのはとても嬉しい。故郷の青い空とミストラルが流れる景色が懐かしい。でも、一つの大陸に二つの国ができるのは、また戦争のきっかけにならないのでしょうか」

「仮にゼネバス帝国が今、もとの軍事国家という形で再建されたとしても、最早ヘリック共和国の存在なくしては成立し得ません。戦争をすることで国家が繁栄する時代など終わってしまった。必要なのは国家としての尊重、いいえ、その大地に住む人々への尊重です。シユ

ウが言うように、中央大陸は広い。とても一つの物差しでは計り切れない。

虫型、恐竜型、虎型に鳥型。色々なゾイドがいたから、この星の生命は成長していった。

みんなが違ったことをしてきたから、人の社会は成長した。

私たちは、例えば連邦共和制という形で地域の独自性を発揮させ、そこで統治を行ってもいいと思う。それが大陸西側の旧帝国領であれば、その地域に適合した政治形態で」

「そこまでお話を聞いてしまうと、どうしても具体的な事が知りたくなってしまう。どうでしょう、支障がなければルイズさんの考えを聞いてみたい。あなたが築く新しいゼネバス帝国とはどんなものになるのかを」

「そうですね。伯父さまには机上の空論と論されるかもしれませんが。けれども私は可能性に賭けてみたい。

良い機会です。伯父さまあの宣言の施行後に考えていたことをお聞き願えますか」

「……是非とも聞いてみたいね」

「はい。大統領閣下を前にして僭越ですが、忌憚のない意見をお伺いしたいと思います。

私が望む新たなゼネバス帝国は、高度な自治を有する国家です。独立し立ちできる能力を備えてからこそ、国家の独立は適うもので、独立に拘るだけでは危険です。主権や経済基盤も満足に整っていないのに闇雲に独り立ちすれば、権力は在らぬ方向に暴走してしまい、国民が飢餓に苦しみ経済破綻が発生してしまうかもしれない。必要なのは国家のプライドよりも国民の幸福なのです。

死者は蘇らない。ならば生きている者が互いに感謝をしながら精一杯努力する他ない。『ありがとう』の言葉の強さを、私たちは知っている。一人だけで幸せになるよりも、みんなが幸せになる方かずつと簡単だし、豊かにもなれる。それこそが、死んで逝った者達への最大の餞である^{はなむけ}と信じます。この惑星に生きる人間と……」

「……ゾイドと共に」

最後の言葉を閉めたのはリチャードだった。

エレナは会話を通して心地よい緊張感を味わっていた。彼の考えが手に取るように判り、また彼も自分の考えを汲み取ってくれる。滔々とした水の流れの如く、互いの気持ちが響き合い、忖度し合える関係にあることに、改めて気付いていた。

一緒にいて楽しい。そして安心する。見ている景色が同じなのだ。キリンデイニ宮で共に過ごしたからこそ、共通の意見となったのかも知れない。会話を通して互いが互いに影響を及ぼし成長させている。側にいることがこれほど居心地いいのは初めてだった。それは、護衛官として一方的に保護されてきたキャロラインや、憧れの男性であったマイケルと一緒にだった時よりも、同じ視線で立っていることへの喜びだ。

もつと一緒にいたい。ずっと一緒にいたい。

エレナは心の底から感じていた。

その人を想う度に締め付けられるような胸の痛み。理屈では割り切れない感情。それは友情でもあり、尊敬でもあり、恋愛でもあった。漸くわかったことがある。

私はこのひとを愛している。

誰にも負けずに、一生を共に歩んでいく自信もある。

死が互いを別つまで、いつまでも支え合って生きていきたい。

だからこの気持ちを、旅の終わりに伝えよう。

ヘリックは黙って二人を見つめている。ブローニヤが少し寂しげな表情を浮かべていた。

月光に、エクスグランチュラの砲身が鈍く輝いている。

夜の砂漠はまるで海原のようであった。

37 (2057年)

「人とゾイドとを幸せにするという目的は素晴らしい。しかし君個人の力が及ばない場合はどうするのかね。厳しい事を言う様だが、理想を高く掲げても、実現出来なければ意味は無い。草の根で一人一人に呼びかけ、互いの幸福を尊重し合う利他的精神を民衆の中に根付かせることは可能だが、この広い中央大陸、若しくはこの惑星全体にその意識を広げるのは個人の力では不可能だろう。それにどの様に答えるかな」

エレナは口を噤んだ。ヘリックが核心を突いてきたのだ。彼女もわかっていた。その問いかけへの納得できる解答を準備できなかった。

「国家とはその為に存在するのだと思います」

物静かな口調で、リチャードが二人の会話に滑り込んできた。

「先ほどルイーズさんが言っていた様に、人は定められた枠組みを求めます。最低単位である家族という集団であれば、家族の幸福を思いやることは簡単にできます。一般に執着と愛情は不可分なのです。から。国家という組織は、狂信的愛国主義シヨレビニズムと博愛主義の狭間で常に揺れ動いています。国家の品格とは、そこに所属する民衆の意識と知識水準によって定まります。それが高ければ自国のみならず他国のことも思いやることができますが、突然近代化の波に揉まれアノミーに陥った大衆をどの様に指導していくかは、国家の指導者に託された最大の責務です。

人は定められた量の器の中に理性と感情を湛えたまま行動します。民衆が激情に駆られて理性的な行動が出来ないのなら、感情に訴えて理性的な行動を律すればいい。個々に分断された個人も、ある象徴の下に纏めても良いと思います」

ヘリックの口元が僅かに綻んだ。

「君の意見も聞いてみたい、具体的にだ」

エレナとヘリックの論議が、いつの間にかヘリックとリチャードのそれに移行している。それが、ヘリックの策略と彼女たちが気付くのが

は後のことであるが。

「私はルイーズさんがゼネバス皇女であることを知ったのは再会の翌日で、それまでは優しくて立派な従軍看護師としか思っていないませんでした。」

驚きました。でも、不思議な事に違和感が無かった。心のどこかに、やはりそうだったのかという気持ちがあつたから。エウロペを流離^{さす}う間、何度もあなたの姿を思い描いていました。何かが違うのです、あなたの持つているものは。

カリスマ、という言葉を使いたくはありませんが、あなたは輝^{カリス}きを持つている。女性としての美しさだけではなく、人間としての美しさも。

ゼネバス帝国皇女という血筋は、伝統的な支配の裏付けとしては充分な価値があります。正式に宣言が承認されれば、その血統を最大限に利用しても良いと思います。

そしてその後、合法的な支配に移行すればいい。中央大陸に真の共和政が訪れるのは、時間は掛かるかも知れませんが、性急に動いて躓^{つまづ}くよりは遙かに正しい方法だと思います」

ヘリックの瞳が喜びに溢れるのがわかる。老獪な政略家の前では、2人の若者を己の思惑に導く事など造作もなく、リチャードもエレナも、様々な意味で見事に彼の術中に嵌っていた。リチャードがヘリックの術中に嵌ったのか、それとも嵌ったふりをしていたのかは判らない。いつの間にかリチャードは、秘めてきた思いを曝け出し、エレナは会話を聞きながら身体が火照っていった。虫除けのために羽織った上着の所為ではなかった。

ヘリックは身を乗り出す。駄目押しの段階に来ていることを察知したので。長い話が始まった。

「君は優秀な人物のようだ。人格的にも優れていることは認めよう。失った左腕以上のものを、あの人物の住むあの場所から得られたのだろう。」

だから私は賭けをしてみようと思う。中央大陸を束ねる大統領の言動としては軽率であるとルイーズにまた叱られるかもしれないが。

私もあの大異変で多くの貴重な人材を失った。そして私自身も老いた。いつ弟ゼネバスの後を追うとも限らない。その為にも、私の意志を継いでくれる人物を探し続けて来ていた。

また、あの日私はゼネバスから委ねられた。「娘を守ってやってくれ」と。その約束を果たせぬまま逝けば、そこでもまた弟に責められてしまう。だからルイーズの身近にいて、守り抜ける人物を探し続けて来た。

そしてもう一つ。今後世界は中央大陸と暗黒大陸という区分だけでは理解していくことは不可能だ。世界を知らぬ者は、自分の国も知らぬ者だ。ここ西方大陸を含め、広い世界に目を向け、人のみではなく、ゾイド、そしてこの惑星をも一つの巨大な生命体として目を向けられる人材を探していた。

私は自分がこの世を去った後、遺言としてこの共和国を連邦制に移行し、分割統治させる心算だ。自惚れでは無く、残念ながら今この中央大陸全土を統治できる人材は、私以外には存在しないだろう。幸い、といつては失礼かもしれないが、今はガイロス帝国も他国の侵略どころではない。各地域を州に分割し、その地域の実情に沿った統治を各知事に行わせ、一刻も早く大異変からの復興に取り組ませる。被害は地域によって多種多様だ。中央政府からの通達を待つていたのでは小回りが利かない。それに、未だに共和国への編入に蟠りわだかまを持つ旧ゼネバス帝国領の地域でも自治的な組織を立ち上げれば、幾分でも感情的には和らぐはずだ。明日のカシル村での会談が成立し、ガイロス帝国代表の立ち合いの下、ルイーズの言う高度な自治を行う新しいゼネバス帝国が建国できることが理想だがね。

私の最大の過ちは、後継者の育成を怠ったことだ。長引く戦争を戦い抜く為と、緊急回避的に為政者の地位に就き続けて来たが、気が付いてみれば後人を育てる暇もなく、自分一人が突出して前方に取り残されていたのだよ、あの日のキングゴジュラスのように。

息子には、絶対に為政者にも軍人にもなつて欲しくは無い。世襲制の誹（そし）りを受けてしまうからだ。息子が成長し、自らの意志でその進路を決定するのであれば止むを得ないが、その頃には、当然私

はこの世にはいないだろう。私の力が全く及ばない所で政治や軍人の道を目指すなら、それまで否定する権利は親にはない。

必要とされているのは、今私が斃れた後の責任を直近に果たせる人材だ。その為には残り少ない人生の中、大統領権限を発動してでも期待される人物を早急に育成し、後任にあてることも厭わない。私が建てた共和国は、本来民衆によって草の根から支持される人材こそを必要としているが、戦争が私の時間を奪った。これが大いなる自己矛盾であることも理解した上で、後継者を置きたいのだ。

リチャード君、ここまで話せば、私が何を言いたいかわかるだろう。私の賭けにつき合ってくれるかね」

それまで優しげな瞳をしていたヘリックが、鋭い眼光で彼を見据えた。

リチャードも視線を逸らさずに共和国大統領を見つめる。

「重大な職務をお受けする以上、幾つもの確認したい項目があります。ただ、今はこの一点だけ閣下にお伺いしたいと感じます。

私という人間を認めて頂き光栄です。ですが閣下に於かれましては、この狭いグスタフの荷台の上、限られた人材の中で私を比較されているのではないかと懸念しております。政治に関しては白紙の上、エウロペに関しても私以上に詳しい人物は多くいます。旅の疲れの為、目測を誤られているのではないのでしょうか」

「私を見縊らないでくれたまえ」

舌鋒鋭く切り返す。

「老いたとはいえ、人を見ぬく眼力だけは衰えていないつもりだ。君に十分な素質があると見抜いた上での判断だ。それに先ほと言ったはず、これは賭けなのだ。

天空から飛来する彗星を回避できないように、時に偶然は残酷な結果を齎すと同時に、思いもよらない幸運を齎す場合もある。楽あれば苦あり、などという御題目は懲り懲りだ。時には苦あれば苦あり、楽あれば楽ありの場合だ。全ての事象は無慈悲に存在し、人の努力など無視して進行する。私は君に賭けてみたい。もし君が無能な人物であれば、それは私が賭けに負けることだ。その時は、君の生

活だけは保障する約束をしよう。

先ほど言ったね、君が政治に関して白紙状態だと。私は政治をするため政治家になって欲しいのではない。人々の幸せを願うために政治家になって欲しいのだ。今私の周囲にいる人材は優秀だが、政治に浸かりすぎて周囲が見えなくなっている者も多い。広い世界と遠くの未来を見通せる人材が欲しい。そして見出したのだよ、君を」

エレナは一言も発することが出来ず、二人のやり取りを聞いていた。リチャードが、ヘリックに向かって無言で頷くうなずのを見るまでは。

直後に、背もたれに身体を委ね、微笑むヘリックの姿があつた。深い安堵の溜息とともに笑い声が響く。

「もう一つ、君を選んだ理由を言っていないのだが、ここで確認するべきかな」

カップを持って視線をエレナに向ける。

「男には女が必要なのだよ、女も同様にね。ヒトは数学的に性染色体の結合により両性同数の誕生は決定づけられていて、生物学的にも両性は支え合つて生きていくように出来ていると、シウウの奴が理屈を捏ねていたが、要は互いの気持ちが大切だとは思わないかね。つまりだ、お互いが好きだという感情こそが……」

「閣下、そこままで結構です」

リチャードが慌てて言葉を遮る。今度は彼が額の汗を拭う番だつた。伯父ヘリックも気が付いていたのだ。

一歩目を踏み出した時には、到達地点は遠く雲上に浮かび、容易に手に届かない場所にあることも知っていたが、彼は同じ目標に向けて歩むことを約束してくれた。権力を得る事が目的ではないが、目的を達成する為には必要なものだ。

見開いたままの大きな翠緑すいりよくの瞳から、止め処なく涙なみだが零れ落ちる。黄色いシユシユから解ほつれた後れ毛ごが、濡れた両頬ほおに纏まとわり付く。

グスタフが牽引するコンテナ内の洗面台の前に立ち、彼女はやつと泣いていたことを知った。

ブローニヤは、感情を抑制できない自分の幼さが苛立たしかつた。嗚咽なげきが込み上げることもなく、悲しみに打ち拉ひがれるわけでもない。幼馴染であり、親友でもあり、尊敬する皇帝陛下の娘である人物の幸せを素直に喜ぶべきと思うのに、この自分とは違う別の「本当の自分」が涙を流させているかのようだった。その証拠に、彼女は張り付いたような笑顔を浮かべたまま泣いていたのだから。

最初から結末は見えていた。再会したりチャードとエレナとの間は、目に見えない強い絆で繋がれていた。エレナのリチャードへの態度も彼女の心を掻き乱した。エレナほどの高貴で凛々しい女性が、彼と接するときには安心して心を預け、彼もまたそれを受け止めている。

何気ない仕草、言葉、笑顔。彼の全てが憧れだった。自分の入り込める隙間など無いことは判っているのに、感情の昂たかぶりを抑えられなかった。今までに付き合った男性もいたし、激しい恋をしたこともあるが、ここまで深い想いを胸に抱いたことはない。それだけ彼が素晴らしい男性なのだろう。

彼女が自分の敗北をまざまざと見せつけられたのが、あの夜の大統領を交えた会話であった。口惜しかった。精一杯背伸びをして、一生懸命になって会話についていこうとしたにも関わらず、三人は自分の知識の及ばない高い世界で談笑していた。そしてヘリツクが暗にリチャードとエレナを結び付けようとしていることと、彼がそれを拒まなかったことが、彼女の心を絶望の淵に立たせた。

(でも、諦められない。私は彼を死ぬほど愛してしまった)

エレナを貶おとしめて、自分に彼の眼を向けさせることも考えたが、その直後に彼女は自分自身への激しい嫌悪感せきあくなに苛いらまれた。彼は絶対に、そ

んな自分は受け入れてくれないだろう。他人の不幸を願う人間などに吊り合わない。

だから自分にしかできないこと、少なくともエレナ以上に誇れることは何かを必死に考えた。

鏡面の隣に開いたブラインド付きの窓の隙間から、砂漠の暗闇の中に黄色い警告灯を回転させ、周囲を巡回するエクスグランチュラの機体が僅かに見えた。新型とは言え、虫族の彼女にとっては馴染み深い機体だ。

かつて自分があれと同種のゾイドを操縦していたことを思い出した。第一次中央大陸戦争で遺棄されていた共和国軍のグランチュラである。村で修理されたグランチュラは、彼女が少女の頃に慣れ親しんだ機体であった。その操縦方法は独特で、蜘蛛型ゾイドの特色を最大限に生かした時、旧式ゾイドとは思えない時速330kmの瞬間速度をたたき出す。リチャードは幻の野生ゾイドを求めていたことから、間違いなくゾイド好きに違いない。もし自分があのゾイドを上手く操縦すれば、彼を振り向かせることが出来るかもしれない。リチャードの気持ちが少しでも揺れ動いたその時、勇気を奮って告白すれば、或いはチャンスが訪れるかもしれない。

短絡的で余りに夢想的な考えと自分を憫笑してみたものの、それが彼女の心の中で出来る精一杯だった。

明日でこの旅の目的も達成される。せめて彼との旅路を楽しもう。貴重な水の飛沫をあげて顔を洗い、涙の跡を拭いた。泣き腫らした頬が薄紅色に上気していた。

翌朝、蚕棚状に壁面に設けられたベッドの上、仕切られたカーテンの向こうからエレナの声が聞こえる。

「ブローニヤ、起きてますか。体調でも悪いのですか」

見れば太陽は既に昇っていた。昨晚は砂の匂いがする枕に顔を埋めたまま寝入ってしまったらしい。頬に枕の跡が残り、瞳も充血している。漸く立ち上がれるほどの個室区画の中で、彼女は自分にとってのこの旅の無意味さを噛み締めていた。

ついて来なければよかった。

彼との繋がりを少しでも持ちたいが為に同行したのに、これでは失恋旅行そのもの。
バカみたい。

出発に当たって、二人もの有能な看護師を引き抜かれ、困惑するセーラブ医師の顔を思い出す。おとなしく診療所で勤務していれば、こんな気持ちにならずに済んだのかもしれないのに。

カーテンの向こう側には、まだエレナが待つてくれているようだ。あなたは優しい。優し過ぎる。いつもなら、朝日と同時に起きてくる私を氣遣つてくれていたと思う。でも、この気分の落ち込みの原因が、あなたにあるとは言えない。

「ごめんなさい。少ししたら支度をして行きます」

カーテン越しに、出来る限りの元気な声を取り繕つて応える。心なしか声が上ずっている気がした。急かしても悪いと思ったのか、エレナは部屋に戻ったようだ。

いよいよ講和会談当日だ。周囲の護衛部隊と合わせる為か、グスタフの速度が幾分遅くなっている。

公私混同は避けよう。エレナには平和の懸け橋になつてもらわなければならぬのだ。きつと今頃は、エレナも着替えに悪戦苦闘しているころだろう。意外と不器用なところがある。特にファスナーの開け閉めが苦手なのだ。自分がいなければ礼服を着て公式の場に立つことも出来ない。その為に自分がここにいると言ひ聞かせた。その時の彼女は大人だった。

昨晩から着たままの衣服を全て脱ぎ捨て、髪を解いて備え付けの強力なブロワーで砂粒を吹き飛ばした。人肌の温風が心地よい。窓の外を流れる風景を見ながら、ブローニャは乳液を掌に載せ、普段より強めに頬を打った。全身の汗を拭い去り、自分の式典用の服装に着替えると、エレナの元へと急いだ。

到着したカシル村は、当時レツドラスト最大のコロニーといわれていたが、赤い水しか湧出しない井戸と、古代文明の石造りの遺跡をそのまま住居に利用した人口200人足らずの寒村であった。会談場所として帝国側からの提案理由は、そこに向かう行程には遮るものが

無く、両国にとつても相手の手の内を読み取ることができるとのことだった。

会談の事前交渉に当たった共和国代表は、若々しい帝国議会外務局担当者の真摯な姿勢に全面的に信頼を置いた。その時点では確かに、帝国側でも交渉の意志はあったが、共和国側では帝国の内情を察知し切れていなかった。

ブローニャは、赤い地平を這い蹲つくばって、陽炎の向こう側に揺らめく漆黒のゾイド群が接近する姿を視とめた。ギラギラと輝く砂漠の陽射しの下、そのゾイドが存在する一画だけが黒く切り取られたように見える。

砂漠を渡る風が激しく彼女の頬を叩く。ヘルデイガンナーというゾイドを見るのは初めてのことだった。

彼女の横には、姿勢を硬直させ、ゾイド群を見つめるエレナとヘルリック、そして政府随行員の姿がある。硝煙が立ち昇っている。戦闘が始まっていたのだ。

前方に一斉に護衛のエクスグランチュラが展開し、グスタフの周囲を固める。遠くではドスゴドスと呼ばれた機体が、盛んに敵を蹴り付けている。大異変前の戦闘と比べ小規模なものだったが、両軍の衝突に違いはない。

彼女にも状況はわかった。エレナはあの時、会談のテーブルに着くことが出来るだけでも成功だと語っていた。しかしテーブルに着くことは疎おろか、一切の会話も無く会談は決裂したのだ。エレナにとって忌まわしい記憶を持つヘルデイガンナーのみが存在し、ガイロス帝国代表団らしき姿を望むことは叶わなかった。

「やはり、無駄だったのでしょうか」

いままで聞いたことも無い、エレナの深い落胆の溜息だった。

共和国政府の読み違いは、外交交渉の窓口として認識していたガイロス帝国議会外務局が、実際には殆ど実権を有していないことだった。

共和国との講和会議を受け入れたのは、当時の新帝都ヴァルハラに発足したばかりの帝国議会であり、その権威は未だ貴族層や軍閥に比

べて遙かに低い地位にあった。ガイロス軍は議会の管理下にあるのではなく、皇帝直属の組織として、議会とは独立し並存している。皇太子の後援で成立した議会を快く思わない軍閥は多く、カシル村での講和会議参加を決定した帝国議会を、敢えて会議の開催直前で激しく糾弾した。

既に会議参加の為のガイロス帝国代表がニクシー基地に到着していたにも拘らず、基地内でこれを拘束し、代わって代表団に見せかけた戦闘部隊をカシル村に向かわせた。当然、これは外交交渉に於いて最低限の礼儀も欠いた許されざるべき行為である。

「ここまで絶望的な結果になるとは、私も思ってもみなかったよ。外交の基本も遵守出来ないとは」

ヘリックの言葉は重要な意味を含んでいた。外交の基本が成立しないということは、話し合いでの解決が閉ざされることになる。人は言語を媒介として不必要な争いを回避し、文明を培ってきた。言葉が通じることが、共存共栄の近道であると信じた。会話を拒否された時、その道も閉ざされる。

「レッドラストの戦い」と称される帝国側のこの一方的な襲撃は、ガイロス帝国の信用を失墜させると同時に、その杜撰な戦略は軍内部の混乱を覗かせた。

ガイロス軍の目的はヘリックとエレナの抹殺のほずであるが、大規模な軍を動かしての作戦行動は、最早「暗殺」などと呼べるものではなく、十分に全面戦争の戦端を開かせる切っ掛けと成り得る事件である。無論、全面戦争となっても稼働できるゾイドの数も少なく、大規模戦闘に発展することは不可能であることも見据えての襲撃であったと推察されるが、もし本当にヘリックとエレナの抹殺を計画するのであれば、彼らが軍の護衛を離れた時、つまり講和会議のテーブルに着いてから襲撃すれば確実に殺害できたはずだ。

わざわざ共和国軍の護衛部隊に守られた状態で襲撃している事実からも、ガイロス軍は最初から二人の殺害を本気で考えていなかったとしか思えない。

軍閥を中心とする帝国側の抵抗勢力の狙いは、帝国議会の権威を失

墜させることと、今後ヘリック共和国との和平交渉など一切行えなくすることのみが目的だった可能性も高い。狙い通り、以降両国政府間で正式な交渉が持たれる機会は永く失われることとなる。

この襲撃には旧ゼネバス兵は従軍していなかった。当然だ。ゼネバスの忘れ形見エレナを襲撃すると知れば、いつ寝首を搔かれるとも限らない。

また仮にエレナの暗殺が成功すれば、ガイロス軍に吸収されている旧ゼネバス兵達が一斉に反乱を起こすことも予想される。

更に、純粋なガイロス兵の中でも厭戦感が高まっており、一部の特佐や少佐の暴走に従うつもりのない兵士も数多くいた。休戦直後の弛緩し切った軍組織と、時宜を読み取れない愚かな士官たちの、これはまるで火遊びの如き戦闘であったといえる。

始末に負えないのが、事件の当事者達が至って真剣であるということだった。まだよく知らない武器を拾ったとき、それを使ってみたくなるのが、悲しい軍人の悪癖である。彼らはキングゴジユラスの残骸という未知のテクノロジを拾ってしまったのだ。

地表を突き破って黒い球体が出現した。地下から侵入し布陣していた新型ゾイドヴァルガが一斉攻撃を開始したのだ。

ブローニャは、ニードルアンカーと呼ばれる機体の固定装置を地表に打ちこんで、必死にヴァルガの体当たりを堪えるエクスグランチュラの姿を目の当たりにしていた。

進路を急反転させ戦場から退避を試みるグスタフに、ヘルディガンナーが追い続ける。背部からせり上がるロングレンジアサルトライフルの砲身がこちらを狙っていた。

補給物資を牽引してきたグスタフには、物資輸送以外に重要な使命が課せられていた。会議が決裂し戦闘に至った場合、大統領とエレナの搭乗するグスタフの囷となって守り抜くことだ。そのため仕様は全て統一され、機体番号も遠景からは目視出来ない程度のものしか書かれていない。

一機が牽引するコンテナを横に向け、ヘルディガンナーの進路を妨げるために停止した。敵と対峙するコンテナの背後に瞬時にエクス

グランチュラが這い寄り、コンテナを盾として砲撃戦を開始した。

豊富な兵装を駆使してヘルディガンナーを牽制する。ある機体はハイブリットガトリング砲で、またある機体は小口径高速キャノン砲で、またある機体はミサイルで。盾となるグスタフも巧みに移動し、動く壁となつて敵の進路を塞ぐ。

ブローニヤは、二台目のグスタフが停止しコンテナに横付けとなつたエクスグランチュラが瞬時に兵装を換装するのを見た。跳ね上げ式のコンテナの壁は重層構造になつていて充分な耐弾性能を有しているようだ。グランチュラは兵装を満載し再び戦闘へと向かつて行く。また別のコンテナからはエクスグランチュラ本体が出撃するのを目にした。

彼女にとつて、人が人の命を奪う行為を目の当たりにするのは初めてであった。緊張感で吐き気を催す。背中が震えが止まらない。迫る黒いゾイドが心底恐ろしかった。

「そんなところにいたのですか。早く隔壁内に退避してください」

リチャードが力強く彼女の手を引き、要人警護用の分厚い装甲コンテナに向かう。そこにエレナもヘリックも既に退避している。牽引するグスタフが一番近いコンテナであり、途中、むき出しの連結装置の上を何度か渡らなければならなかった。リチャードは外装の手摺に捉まり、右手で彼女を抱きかかえる。義手であれば握力も強く、移動も容易である筈なのに、敢えて彼は生身の右手を使っていた。

「ブローニヤ、リチャード、早く、早く！」

要人警護用コンテナの入り口から身を乗り出したエレナが手招きをしている。薄紫のドレスが硝煙に靡き、束ねた髪も風に叩かれている。差し伸べた細い腕が、頻りに彼女に向けて揺れていた。ブローニヤは、リチャードに抱かれたまま、エレナの手に縋りつく為彼女の手を伸ばした。

その時の彼女の中には、蓄積してきた悩みと想い、そして戦闘による恐怖心が混在していた。冷静であればそんな行動をすることは無かつただろう。

あと数センチでエレナの手が届く。

(いつまでもこうして抱かれていたい)

力強い男性を意識させる温もりに陶醉し、刹那の快樂に身を委ねてしまった。

ブローニャは開いた花卉が萎れるように、伸ばしていた腕を一瞬降ろした。

その躊躇いが、二人に次なる危機を招き入れたのだった。

ロングレンジアサルトビーム砲の閃光がコンテナの壁面を舐めるように這い上がる。1秒の何分の1かの照射は、攻撃の意図とは別に、装甲の施されていないコンテナの連結部分を見事に射抜いた。拡散して威力が減退していたとはいえ、真つ赤な火花を散らして黒い鋼鉄の部品が融け落ちる。堪らず身を竦め、後方の装甲コンテナにリチャードがブローニャを抱いたまま仰向けに跳び退いた。

「リチャード！ ブローニャ！」

グスタフに牽引されたままのエレナを載せたコンテナが、薄紫のドレスの裾を翻しながら視界の外へ消えていく。

武器弾薬を満載した装甲コンテナと共に、二人は戦場に置き去りにされた。

彼女は自分を取り返しもつかないことをしてしまっただのに気が付いた。

ヘルデイガンナーのみならず、ヴァルガの群れも孤立したコンテナ目掛け殺到する。

砂塵は一層強さを増して吹き荒れていた。

殺到するヘルデイガンナーとヴァルガの群れを前にして、コンテナに取り残されたブローニヤはリチャードの背中に震えながらしがみ付く他なかった。

一瞬の戸惑いが二人を窮地に追い込んでしまったことを激しく後悔した。

「ごめんなさい。あの時、私がルイーズの手を握っていたら……」

謝ってみたところで事態が好転しないのは知っている。それでも彼女の心には贖罪の言葉しか浮かばない。巻き添えにされるリチャードと彼を想うルイーズの、悲しい、そして自分に対する憎しみの表情が脳裏を駆け巡る。

全ては自分の所為だ。

この旅について来なければよかった。

彼を最初から諦めていればよかった。

あの時エレナと再会をしなければよかった。

自分さえ、大異変で生き残らなければよかった。

(あの時、死んでいればよかったんだ！)

彼女の心は罪悪感で押し潰される寸前だった。

「諦めるには早すぎます。今は冷静になりましょう」

リチャードは、しがみ付いているブローニヤの右手を強く握り、右肩越しに彼女の顔を見つめる。その時彼女の両の目からは、恐怖と後悔と罪の意識に苛まれ、大粒の涙が止め処なく流れ続けていた。

「大丈夫。きっと生き残ってみます。信じてください」

涙でぐしゃぐしゃになり、焦点の定まらない視線の中でも、リチャードの笑顔が見えた。

なぜ笑っていられるの。二人とも死ぬかもしれないのに。

「まずは中に入りましょう、こっちはです」

手を引かれ、薄暗いコンテナの中に入り込む。隔壁の段差に躓いて倒れそうになった時、彼はさり気なく支えて抱き寄せた。その力強さが「生き残って見せる」という彼の言葉を証明している。それだけで

今までの不安が消えていった。

分厚いコンテナの通用扉の奥に、幾つもの武器が圧縮され整然と並んでいる。そして中央に8本の歩脚と頭部の付属肢を精一杯折り畳んだエクスグランチュラが格納されていた。コクピットとハイパーレーザーファングの間に搭乗用の仮設足場が組まれている。リチャードに手招きされるまま、ブローニャは仮設足場に辿りついた。彼は特徴的な装甲キャノピーを開き起動操作をする。ディスプレイに灯りが点った。

「これで脱出します。乗ってください」

「でも、どこに……」

操縦席には一人座るのがやつとで、とても彼女の入り込む隙間はない。少し迷ったあと、彼は彼女の身体を引き寄せた。

「許してください。今はこれしかありません」

膝の上にブローニャを乗せ、直後に装甲キャノピーを閉じる。

狭い空間の中、互いの呼吸音まで聞こえる距離に身を置くのは、言い訳ができないほど刺激的だった。抱き着くことも躊躇われたので、キャノピー裏側についているフックに捉まり、何とか正面を向く。不謹慎とは思いつつも、再び彼の胸に抱かれる恍惚に浸ってしまった。

射撃統制システムを立ち上げ、浮かび上がるディスプレイの照準中央に、コンテナ解放用の緊急パージスイッチに狙いを定めた。

「いきます」

小口径ガトリング砲が火を吹く。爆煙の中にスイッチのパイロットランプが消え、次の瞬間コンテナの隔壁が四方に弾け飛んだ。薄暗い空間が一転し、砂漠の太陽が照りつける暑い戦場へとエクスグランチュラを解放した。

8本の歩脚を一斉に稼働させ、残った台座部分から機体ごと滑り落ちる。武器を満載した状態での移動は重々しく、機動性は著しく低下している。モニターを一瞥すると、敵の先陣はエレナ達の乗ったグスタフを追撃していた。後続部隊までまだ十分な距離がある。

機体側面に装備された箱から、ミサイルらしきものが炎を噴いて発

射されるのを見た。その直後、弾丸を発射し終えた箱は機体から切り離され、砂漠の大地に砂塵を舞上げ落下する。前方のヘルデイガンナーが、放たれた弾丸に貫かれたのか、黒い機体を横転させ弾き飛んだ。

置き去りにされたコンテナから唐突に出現した重武装のゾイドは、敵の隊列を乱すには充分であった。先陣を切ってグスタフを追撃していたヘルデイガンナーは、背後からの五連装ミサイルポッドの攻撃によつて全機が追撃不可能となった。丁度コンテナの脇を擦り抜けようとしていた機体も、三連装衝撃砲の直撃を受け、脚部に損傷を負い擱座する。後方から殺到する敵に対し、リチャードは機体尾部のニードルアンカーを地表に突き刺し、歩脚を一斉に横滑りさせ方向を反転させる。背部に装備されたハイブリッドガトリング砲、小口径高速キャノン砲、小口径パルスレーザーガン、マクサー20mmビーム砲を一斉に発射した。

機体が反動で震える。装甲キャノピーの向こう側で、重火器が唸りを上げて火を噴いているのがわかった。彼女の下で、彼は弾丸を打ち尽くした武装を次々と切り離していた。少しでも機体を軽くして、脱出への準備をしているのだ。

「見てください、味方です」

ディスプレイには共和国軍を示す識別コードを発した機体が接近するのが表示されていた。護衛部隊の別のエクスグランチュラとドスゴドスだろう。盛んに弾幕を張りヘルデイガンナーを牽制する。敵の奇襲は既に奇襲の体を成していなかった。杜撰な攻撃は、所詮杜撰な結果しか残せないのは自明であった。

少しだけ安堵の溜息を洩らす。彼の横顔を見つめる。

想いを告げる絶好のチャンスだ。「大好きです」と言つて強く抱き着こうとした時だった。

「どこも怪我はありませんか」

横を向いた彼と、視線が重なった。

「はい、大丈夫、だと思えます」

突然見つめ合う形となり、告白するタイミングを失う。彼も深い溜

息の後、視線を前方に戻し、独り言のように語り出した。

「ルーズさんと出会ったのも、地獄のような戦場でした」

一瞬にして、彼女の勇気が委縮する。

(なぜ今それを言うの?)

「出会いとは不思議なものです。見ず知らずの他人なのに、初めて会った気がしない。生まれ変わりなどあるわけがないのに、まるで肉親のように遠い昔に出会っていた気がしたのです」

一体何を言っているのだろう。それ以上、彼の話聞きたくはなかった。両耳を塞ぎたかったが、両手は手摺を握っていた。

「あなたはあのひとの親友だからお話ししておきます。まだ打ち明けていないのですが、覚えているのです。左手を失った瞬間も、トリアージで死亡群に判定されていたことも。」

常に冷静な振りをしているのも、感情に素直になつた途端、引き千切られた腕の痛みと、軍医に見捨てられた悲しみを思い出してしまふからなのです」

左腕を少しだけ持ち上げる。

「失ったものが多すぎる。多くの戦友を失い、一時期は心までも失った。」

可笑しなもので、今でも左手が時々痒くなるのです。もう生身の腕はそこに無いのに。

これ以上こんな気持ちを味わいたくはない。あなたはあのひとにとっての大切な友人だ。だから私にとっても大切な友人なのです。絶対に守ります」

彼女は彼の告げた単語を、心の中で繰り返した。

(……友人?^{トモダチ})

その時二人の機体の目の前に、突如地底からヴァルガが出現した。後続部隊の撃ち漏らした機体らしい。球体状に変形したゾイドはそのままエクスグランチュラに体当たり攻撃を仕掛ける。大きさに見合わない重量攻撃にニードルアンカーも破損し、最大の武器である小口径高速キャノンの左の砲座も吹き飛んだ。グラビティータックと呼称されるヴァルガの攻撃には、ガトリング砲やパルスレーザーで

は到底太刀打ちできない。唯一対抗可能なのがドスゴドスのターボアクセレイションキックだが、白兵戦での武器に過ぎず、同様の攻撃法を持たないエクスグランチュラには分が悪い。逃げ回るにもヴァルガの機動性は予想以上で、追跡を逃れるのは至難のことであった。

リチャードは精一杯機体を操縦しながら脱出と攻撃両方を試みたが、最初にヘルデイガンナー部隊を撃破したことが、後陣の追撃部隊の逆鱗に触れてしまっていたらしい。執拗に攻撃を繰り返すヴァルガに次第に追い詰められていく。味方の護衛部隊との距離はまだある。二連装、三連装衝撃砲を撃ち尽くし、武装を排除した後には、近接戦闘用の武器の選択肢が無くなっていった。

ヴァルガのグラビティアタックを受けた瞬間、思わずブローニヤは彼の首筋に抱きついていった。筋肉質だが意外に細身の胸板の温もりを感じた。胃液が逆流するような不快な振動の中、それでも彼女は訪れた至福に満足していた。

(もう、死んでもいい……)

「絶対に生き残ってやる」

彼女の想いに抗するかの如く、彼は囁いた。顔のすぐ横、機敏に周囲を見回す彼の表情は、未だ一点の曇りも迷いも無い。戦場の緊張の中、彼女は気付いた。彼の視線の先にあるものは、単なる生への執着ではない。互いに生き残る事、ブローニヤを含め、彼自身が生きる意義を認め、安易な死を否定していることを。そしてまた、その視線の先にあるひとが、自分でないことも。

私には、無理だ。

ブローニヤは、自分が彼にとって釣り合わないことを悟った。と同時に、彼女の思考の歯車が的確に動き出した。

彼は元ゴジュラスドライバーだ。グランチュラのような多脚式ゾイドには慣れていない。今、ヴァルガとの近接戦闘に苦戦しているが、エクスグランチュラとして新たに装備された武器ばかりに注目し、グランチュラ本来の武器に気が付いていないのかもしれない。彼女は巻き付けた左手を離し、コンソール左下に装備されているスイッチを指さした。

「電磁ネットワイヤーの発射装置です、これを使えばグランチュラはすごい速さで移動できます」

「なぜだ」

リチャードも必死であった。

「このゾイドには慣れてます、とにかく言う通りにしてください」

炸裂する着弾の中、ブローニャはありつたけの大声を出していた。

「わかった。やってみよう」

自信に満ちた彼女の声に、リチャードも納得した。

「まず全ての武器を捨てて、機体をできるだけ軽くします」

言葉に従い、彼はエクスグランチュラに残されていた装甲板を含む全ての武装を廃棄した。後方で甲高い金属音がする。追撃するヴァルガに廃棄した武装が衝突したのだろう。それでも敵ゾイドの進撃を阻むことは出来ず、不気味に距離を狭め続ける。

「風を読みます。キャノピーを開けて」

一瞬戸惑いを見せたが、彼はまた彼女の言葉に従った。

砂塵を含んだ強風が吹いている。ブローニャは機体の進行方向と直交して吹く風の流れを読み取った。

リチャードの握る操縦桿に、彼女は両手を添えた。

「タイミングを合わせます。合図と一緒にワイヤーを発射してください……。3、2、1、今です！」

エクスグランチュラの尾部に備えられていた装甲板が弾け飛び、電磁ネットワイヤーが白い軌跡を残し空中へと解き放たれた。彼女がコクピットから吹き飛ばされようとする瞬間、空かさずキャノピーを閉じる。ブローニャは彼の腕に抱き留められ、辛うじて空中に放り出されることを回避した。

グランチュラは、初期型ゾイドとしては驚異的な時速330kmでの速度を誇った。シールドライガーをも上回るこの速度を、鈍足の多脚式ゾイドであるグランチュラが為し得たのは、このゾイドが蜘蛛型であったからだ。

電磁ネットワイヤーは風に乗って長さ数十mから百m弱に亘って射出されると、一種のマグネツサーシステムとなって機体を空中に舞

い上がらせた。蜘蛛が宙を舞うバルーニングという行動である。風を読み、機体を宙に舞わせることによつて、その瞬間だけ驚異的な速度での移動が可能となるのだ。

エクスグランチュラはその重武装のみに着目され、グランチュラ由来の電磁ネットワイヤー射出装置は看過されていたが、機体にはその機能が残されていた。虫族であるブローニヤにとつて、少女の頃に何度も親しんだ操縦法が生かされたのだ。時速300kmには至らないものの、武装を解除されたエクスグランチュラは彼女の言葉通り驚異的な速度で砂漠の地表面を滑るように移動した。標的を失い、ヴァルガの追撃に隙が出来る。ブローニヤは続けて別のスイッチを指さした。同じく多脚式ゾイドであるガイザックに装備されている武装だ。「ポイズンジェットスプレーです」

彼が無言で視線を彼女に向け少し目を見開いた。それだけで全てが通じたようだ。嬉しかった。

グラビティータックを解除し再び一機のヴァルガが接近してくる。エクスグランチュラは歩脚を最大限に開き「尻尾を巻いて逃げる」という表現そのままに、後ろを向いて退却の姿勢をとった。ヴァルガの機首が下を向く。体勢を整えまたグラビティータックをかけるつもりだ。

機体の尾部をヴァルガの正面に向ける。破損したニードルアンカーを持ち上げる。ニードルアンカーのシリンダーの下から現れたのは小さな噴霧装置だった。射撃の軸線は確実にヴァルガを捉えていた。

「いっけー！」

叫んでいたのはブローニヤだった。尾部から放たれたポイズンジェットスプレーが、見事にヴァルガに命中した。グラビティータック直前の、球状に変化する前の中途半端な三日月型のまま、ヴァルガはシステムフリーズを起こし、その場で固まった。そして後続の機体も凝固したヴァルガに衝突し進路を塞がれる。

「もう一発！」

またブローニヤが叫び、呼応してポイズンジェットスプレーが発射

された。2台目のヴァルガが地表で擱座し、周囲には当面の敵の姿が無くなった。

見れば、遠方にいた他のエクスグランチュラとドスゴドスが接近し、装甲コンテナを牽引したグスタフと共に集結していた。ヘルデイガンナー部隊が退却を始め、ヴァルガも地底へと潜って行く。残された2機の擱座したヴァルガは共和国軍によって鹵獲された。脅威は去ったらしい。

いつの間にか、ブローニヤはリチャードにしっかりと抱きついていった。頬の髭がざらついた。

「あの……」

「ううん。わかってる。でも今は……」

彼が何を言わんかは知っている。でも、今はこうさせてもらおう。

ブローニヤは目を閉じ数分間、そのままの姿勢でいた。

※

「あなたが好きでした」

夕日の沈む砂漠で、互いの無事を確認した後、エレナの前でブローニヤはリチャードに告 カミングアウト 白をした。

なんだろう。恋が破れたのに、この晴れ晴れとした気持ちは。

周囲にはヘリックを含めた共和国軍兵士が、ゼネバス皇女護衛達成とは別のイベントで盛り上がっていた。戦闘が終わった憩いの時間、見つめ合う三人の男女を囲み、多数の兵士が沸き立っている。

「ルイーズ、こちらまでお願いできますか」

ブローニヤは振り向いて、エレナを手招きする。彼女の想いを知るエレナは、恐る恐る歩み寄る。当惑しているのは明らかだった。そんなエレナを前に、ブローニヤは吹っ切れた笑顔で告げた。

「もう、諦めました。彼の心を覗いたら、あなたのことしかないんだもの」

怪訝な顔で、エレナはブローニヤを見つめる。

「でも、けじめをつけさせてね」

次の瞬間、ブローニヤはリチャードに跳び付き、右の頬にキスをした。

兵士達から一斉に歓声が上がる。

夕日に染まったりリチャードの顔が、更に紅潮した。

「ちよつと、みんなの前でしょ」

「これでおあいこ」

驚くエレナの左頬にも、ブローニヤはキスをした。

「これで返したわよ」

ますます歓声を上げる共和国兵。目の前に大統領がいることも忘れていた。

「二人ともお幸せに。平和な家庭と世界を作つてね、リチャード・ジー・キヤムフォード。」

そして、ルイズ・エレナ・キヤムフォード！

思いきり背中を押されたエレナが、リチャードの胸の中に飛び込んだ。

歓声は最高潮に達した。

「若いことは素晴らしい。きっと彼らが、新しい時代を築いてくれるだろう」

慈愛と羨望が入り混じった視線を、ヘリックが投げ掛けていた。

この旅で見た何度目かの砂漠の夕日は、今日だけは称賛の輝きを放っていた。

旅の終わりに、二人は結ばれた。

40 (2064年)

誌面に目を落としながらリチャードが告げた。

「またゼネバス皇帝の御落胤ごらくいんが名乗り出たよ。今度も息子のようだ」

サーバにお湯を注いでいたエレナは、露骨に眉を顰めて呟く。

「お父様を何だと思っっているのかしら。そんなに節操なく継嗣を設けるはずなのに」

不機嫌そうにカップを手にとると、サーバに手を伸ばした。

「ちよつと待った。君は座っていて」

リチャードが手際よく受け皿を並べ、琥珀色の液体をカップに注ぐ。紅茶の香りが、幾分ささくれ立った彼女の気持ちを和ませた。

「それにしてもあれからもう7人目よ。いい加減にして欲しい」

「まあ、それだけ君の父上が敬愛されていたと考えるべきだろう。これほど急激に社会構造が変化すると、人が過去に囚われ易くなるのも仕方ないよ。それだけ平和になったということさ」

口元でカップの香りを楽しむと、リチャードは窓の外、朝日に映える澄み切った青空を見ながらもう一度呟いた。

「そう、平和になったのさ」

白亜に彩られたセシリア市の知事公舎のリビングで、朝食を終え暫しの寛ぎを味わっていた。2人の目の前の芝生を、古びたサラマンドアの玩具を持った少年が駆け抜ける。

「ロブ、しっかり前を見るのよ」

嘗てエレナが戯れた祖父との思い出の品が、今は息子のお気に入りであった。

世代を超えて受け継がれた小さな鋼鉄の翼が、少年の手の中で青空に溶け込む。

朝の陽射しが眩しかった。

※

リチャードの政界進出、及びエレナの共和国大統領に就任までの経過を簡単に確認しておく。猶、冗長な記述を避けるためここでは旧ゼネバス帝国領出身者を帝国出身者、統合前の旧ヘリック共和国

領に所属していた者を共和国出身者と称することとする。

2059年 リーバンテ島上陸作戦の直後、ヘリックⅡ世逝去。

2060年 中央大陸ヘリック共和国は分割統治体制に移行。各州国による連邦共和制開始。

同年リチャード・キカムフォード、セシリア州国知事選立候補。次点候補に追い継ぐも、三位で落選。

2063年 旧ゼネバス領での民主化を求める騒擾が多発。ウラニスク市での被害が最も大きく、死者3名を含む重症者20名が被害に。

2067年 セシリア州国現職知事死去に伴い補選が行われ、二代目知事としてリチャード選出、就任。

2070年 この頃より磁気嵐の影響力低下に伴い、各州国のエウロペ進出が本格化（開始は2030年頃より）。移民には特に旧ゼネバス系住民が多数を占める。

2071年 セシリア市州国に於いて、最も早くゼネバス系住民への市民権授与を承認。

2072年 ヘリックシティーでのゼネバス系住民への市民権承認。以降76年までに各州国での同様の決議が成される（最後に承認したのはグレイ市州国）。

2077年 南エウロペに州都ニューヘリックシティー建設。入植の中心地となる。

2078年 ヘリック共和国連邦、連邦議会により2年後に再統一を議決。

2079年 ガイロス帝国、共和国に対抗するために南エウロペに南帝都ガイロス建設。

リチャードもエレナも順当に政界進出できたわけではない。日常生活に不自由しない程度の経済的援助は伯父ヘリックを介して受けられたが、肝心の集票に関しては、リチャードの立候補直前にヘリックが他界したため十分な応援を受けることは出来なかった。

端的に評価した場合、リチャードは清濁併せ呑まなければならない為政者の職責を負うことを望んでいたとは言い難い。清廉な彼の性

格は、心の中で常に軋轢を抱え込んでいたに違いない。しかし、エレナを初め周囲に集まった多くの人々が彼を支え、彼もまたそれに応えた。彼は彼自身が思う以上に、時代に要求された人物であったのだ。彼が最初に直面した問題は、依然共和国領内に残る帝国出身者に対する差別である。共和国領、つまり旧ゼネバス帝国領を含んだ中央大陸デルポイでは、2050年代以降は種族の混合も進み純系の地底族や風族など種族の区分けも曖昧となっていた。生活様式も多様化し以前ほど種族と職能も判別できなくなっており、特に惑星大異変を挟んで殆ど意味を成さなくなっていた。

時として古い因習が唐突に復活する場合がある。大異変の復興が本格的に始まった2060年代後半、充分に共和国国民として受け入れられていたと思われた帝国出身者は、ただ移民というだけで理不尽な差別を受ける場面が多々見受けられるようになった。これは旧ヘリック共和国領の地方に於いて顕著で、セシリア州でも地方都市で住宅の提供や職業選択などで差別が見受けられた。

原因として考えられるのが、大異変後の中央大陸東側、旧ヘリック共和国領での慢性的な不況と天候不順である。旧ゼネバス領から流入した移民は低賃金での労働を受け入れたため、共和国出身者達の職業を奪うこととなる。また、大異変による影響により農業生産は著しく低下し、食料品価格の高騰に悩むこととなった。温暖化によって食料生産が飛躍的に上昇したガイロス帝国や、マザーブリーザー、グランドフリーザーと称される偏西風によって、大気中に漂う隕石衝突により舞い上がった雨滴の凝集核エアロゾルを一掃し、オベリア平原を中心に農業生産を充実させた旧帝国領と対照的な現象となった。蛇足だが、約40年に亘ってガイロス帝国が南方地域への進出を停止していたのは、偏に国内の食糧生産が安定し他国や他の地域への侵略の意義が薄れていたからである。

打ち続く経済上の混沌の中、共和国出身者の不満の捌け口は次第に帝国出身者に向けられていく。時には激しい暴力を伴って帝国出身者に対し牙をむく事件も発生した。表面上は双方の融和を唱えている各州国知事も、未だ市民権を得ていない帝国出身者に対しての保護

政策は選挙権を持つ共和国出身者の支持を失うのを恐れ、声高に主張することはしなかった。

リチャードはそのジューのミドルネームが示すように海族出身である（但し、海族も北方系と南方系に分類され、彼がそのどちらの系統に所属していたかまでは不明。彼の漂泊癖は、海族が古代から近世にかけて広大な海洋を駆け巡った頃の名残かもしれない）。従って第三者的立場でこの問題を黙殺することもできた。エレナにしても、父ゼネバスが風族と地底族の混血、更に母エーヴが虫族であり、地底族特有のオレンジ色の髪を有せず、殊更騒ぎ立てる必要もなかったはずである。それでも彼は、正面からこの問題に立ち向かっていった。

リチャードは、差別は自由な社会の発展を阻害し更には産業を含めた経済発展をも束縛すると主張した。帝国出身者の中には共和国出身者以上の高い技術力を持つ者もいる。労働力の提供に関しても、不当に低い賃金で就労させる雇用主があるからこそ雇用不安が発生すると批判した。怨恨を源とする差別は新たな怨恨を産むだけで経済成長にとつても何の価値もない事を強調し、中央大陸住民の融和と協力を訴えた。

具体的な政策として、

① 労働者への最低賃金の保証と引き上げ、宿泊施設の開設、雇用の採用時に於ける出身地や種族確認の廃止。理由は前述した通りである。

② 死刑制度の廃止。帝国出身の犯罪者に対する弾圧は厳しく、充分な抗告もできないまま不当な審議によって処刑される判例が報告されていた。住民の融和を唱える以上、安易に命を奪うことは統一の妨げになるとして戦時態勢からの脱却を図っていった。

③ 食料品不足に関しては、エウロペとの交易を活性化させ技術供与によって生産を拡大し、大規模な輸入を行い不足解消をする。

④ ③の政策に伴い、海上交通網の整備と護衛の充実を図る。戦闘が終了し縮小された軍人達を護衛任務に就かせることにより、一種の失業対策を図った。

⑤ 更には、エウロペへの積極的な移住政策の促進である。エウロ

ペにも定住していた先住民も存在していたが、赤道付近に位置する北、西エウロペ地域での大異変の被害は大きく、人口も大量に減少し、未開地以外にも開墾済みの耕作地さえ放棄されていた。エウロペ事情に詳しいリチャードにとって、地勢を読み取り適宜移住地を考えるのは有利であった。

⑥ 加えてここにも軍の派遣を要請する。理由は野生ゾイド対策である。アタックゾイドやガイサックなどの小型ゾイドの駆除を行い、状況次第では捕獲し利用した。

これらは大異変後の激変期だからこそ主張できた政策であった。労働者層からの支持と、新たな市場開拓の場を得た資本家、そして軍の支持を受け、彼は見事にセシリア州国第二代知事に選出されることとなる。この惑星の政治上で幸いだったのは、地球の歴史でコミュニストと呼ばれる過激な共産主義者やアナキストなどの思想が成立していなかったことだろう。彼の政策は、罷り間違えば上記二つの危険な思想に振り切られる可能性もあった。ゾイドと共に歩み、素朴な自然環境と共存し、極度に合理化された資本主義に至っていなかった社会は彼の政策を受け入れ、結果的にセシリア州国をいち早く再生させる。

これとは別の政策として、戦争が終結したことにより相対的に地位の向上した女性層へも、大異変によって減少した人口を増加させるための出産費用援助などを提案した。そして更に踏み込んだ形で、帝国出身者への市民権の授与と女性への参政権の充実を訴えている。この中には、一見彼の平和政策からは矛盾する女性兵士の増強も含まれていた。第一次大陸間戦争と第二次大陸間戦争との大きな変化の一つは、女性兵士の増加である。特にゾイド乗りの養成に於いてこの傾向は顕著で、第二次大陸間戦争では数多くの女性パイロットが活躍している。

前章で述べたが、共和国内でも戦争による男性人口の減少は、帝国ほどではないものの深刻な事態には相違なかった。当然女性への依存度が高まるのは理解出来るが、なぜ彼が敢えて緊張状態の途絶えた時期に兵役を増強したのだろうか。

考えられるのが、

(1) 女性の地位向上と、

(2) 女性による戦争理解の促進。

(3) そして戦争再開への歯止めである。

(1) についてはフェミニズムの1つとして女性兵士を多く登用すべきという主張から。女性的な視点から戦術戦略を俯瞰した時、往々にして過去の体験に縛られた古参の指揮官以上に的確な判断を下せる事例が報告されていた。それまで「戦いは男の仕事、女が口出しするな」の一言で幾つもの主張が圧殺されてきたが、最早その理屈は通じなくなる。硬直した価値観を打破するには、斬新な改革であったと言えよう。

(2) についてであるが、夫や息子との距離を裂かれた女性達は、戦場を知らないが故に時に妻として母としてヒステリックな熱狂を伴い積極的に戦争協力をする事があった。例えてみれば過剰なコミュニケーション終了を主張し、スローガンや空文を掲げ、個々の意見を抑圧し、残された者達への思想弾圧をした事例がある。戦場の現実が見えないから見えない分だけ不安となり、前述の一連の行動へと繋がるのだ。リチャードは、大異変直後の長期間戦端が開かれることの無い時期に女性を軍に参加させることにより、今まで戦場を知らないまま戦果に沸き立っていた国内女性(婦人)に対し、戦争の現実を広く認知させ、回避への努力を促す手段としたとも考えられる。

最後に(3)だが、軍事的にみると女性兵士というのは軍隊を弱める存在でしかない。身体的に女性は男性より兵士として劣る。軍とというのは一番弱い兵士を基準に考えなければならず、更に女性は男性より衣食住のコストがかかり、尚且つ未だ戦闘訓練が充分に修了していない女性兵士では戦争の再開は望むべくもない。

視点を変え、国家という枠組みで見た場合、女性は子供を産んでもらう必要があり、それが兵士になって戦死されると国家としての生産基盤と経済消費力が低下してしまう。にもかかわらず女性兵士を多く登用したのは、女性たちにも戦争の本質を理解してもらい、侵略戦争を否定する機運を盛り上げ、さらには女性の地位を上昇させるのが

目的であつたと考えられる。

彼の政策をもう一つ付け加えるならば、経済基盤が不安定化し、予算から交付金の捻出が出来ない状況に対し、利他心に基づいた相互扶助の考え方を繰り返し主張したことである。貨幣とは作られた価値であり、非常に便利なものであるがそれは所詮共同幻想に過ぎない。最終的にそれがどのような価値となつて人々に還元されるかを唱え、貨幣とは別の価値を見出すことに全力を尽くした。それまで経済不況に陥っていたと思われていた共和国だが、実際は余剰分を分配すれば充分国内人口を賄えるだけの生産力は残っていた。皮肉なことに、大異変で減つた人口も食糧充足に貢献していたからだ。

自分だけが幸せになるのではなく、自分も周囲も巻き込んで幸せになる事を周辺の州国まで拡大する。地球の経済学で「比較優位」と呼ばれるデヴィッド・リカードの提唱した自由貿易体制を知らずに実践していたのだ。

これらの政策は後に大統領となるエレナにも受け継がれることになる。

リチャードの軍人時代の友人知人、ヘリックの人脈、そして密かに展開されたシユウによる支援がじわじわと功を奏し、やがて彼はセシリア市州国を越えて周囲の州国にも支持層を広げ、同時期ガイロス帝国の南進に対抗するために持ち上がったいた共和国再統一後の新大統領の有力候補に挙げられるようになっていた。

当然であるが、彗星の如く現れた青年政治家を快く思わない勢力は存在するものである。彼の知事在職期間中、いわゆるテロ活動によって命を狙われたことは数回あり、未遂に終わった事件を含めると十数回に上る。

象徴的なのは、選挙演説中に彼に向けて放たれた銃弾が命中し、身体ごと演台から弾き飛ばされた事件である。

弾道から狙撃犯は直ぐに判明し即座に捕縛された。

騒然とする会場の中、捕縛された犯人は倒れたりリチャードが何事も無かつたかのように立ち上がる姿を目にした。

弾丸は金属製の義手に当たって弾かれていたのだ。

通常であれば中止となるものを、エントランス湾の惨状を記憶に残している彼はその後も演壇に立ち演説を続け、その豪胆さに聴衆は更に魅了されたと伝えられる。

「この機体が、あなたの話していたゾイドなのですね」

凶暴な面構えだ。試作機を示す黄色のサーボモーターが、黒と銀色の装甲にやけに目立っている。

不思議だった。殺し合いの道具に過ぎないと思っていたはずなのに嫌悪感が全く湧いて来ない。無数の直線が重なり合う幾何学的なデザインと、生命体としての強靱な意匠が混在している。野生体の機能を色濃く残したゾイドであることが、人によつて施された些細な改造などを超越してしまっているのかもしれない。

「今まで隠していて済まなかった。ただ、少し君を驚かしたかったんだ」

エレナは繋いだリチャードの手を思わず強く握り締め、そのまま自分の組んだ両手の中に包み込み、巨体を共に見上げていた。

共に歩む誓いを立て十数年の星霜が流れ、いつしか再会の日の思い出も記憶の彼方に霞んでいた。だが彼は、更なる夢の実現に向けて着実に努力を続けていたことに驚かされた。

エレナの唇から感嘆の溜息が漏れる。拙いこの一言しか思い浮かばない。

「カツコいい……」

眩きに過ぎなかったが、リチャードもまたその言葉を聞くと深い安堵の溜息をついていた。

「認めてもらえて安心した。君の平和を望む気持ちは痛いほど判っている。でも、どうしても成し遂げたいことだったんだ。

あのゾイドを、より洗練された形で完成させること。一頭でいい。このゾイドのコクピットに座り、共に大地を踏み締め駆け回りたい。そしてやつと十数年来の夢が叶ったよ。

軍はゴジュラスに代わる新鋭機として協力してくれたようだが、自分にとつてそんなことはどうでもいいことだ。操縦するんじゃない。繋がらあうための手段だ。ただ、名前だけは受け継ごうと思う。

「ゴジュラスギガ」。このゾイドの名だ」

古い友人との邂逅を懐かしむリチャードの姿がそこにあった。

二人でのエウロペへの旅を切り出されたのは、州国に分離していたヘリック共和国が、連邦制から再び統一国家へ復帰することを連邦会議で議決された直後であった。セシリア州国知事として多忙を極めてきたリチャードと、妻として母として、そして知事就任以来息をつく暇もなく最高の補佐役として支え続けて来たエレナには、旅の提案は余りに唐突であった。

大異変以降、分割自治されてきた中央大陸各州国が再統一され大統領制が再開すれば、近年圧力を増してきたガイロス帝国にも容易に対抗できる。また権力が集中すれば各州国知事の職務も軽減される。

しかしなぜ、新大統領候補として呼び声も高い彼が、この時期地方遊説など選挙運動を擲^{なげ}つてまで旅行をするのか、最初エレナには理解できなかつた。

政界への挑戦は、この星を活気に溢れた平和な世界にしようと誓って始めたことであり、あの日砂漠の月の下、ヘリックに問いかけられた時から道が定まっていたのだ。

セシリア市で多大な支持を受け、周囲の州国、そして大陸東側の旧ヘリック共和国地域でも彼を推す人々が多い。エレナは人生を共に歩んで来た血の繋がらない最も身近な家族が、父や伯父と同じ道を進んで行くことに、偶然からの必然、出自を隠しても贖^{あがな}えない運命を感じた。そして到達地点が手の届くところにまで見えてきていた。共和国大統領という目標である。

だが彼は直前になって回り道を言ったのだ。「旅に出よう」と。リチャードは二人きりの旅に拘った。幸い、ハーマン夫妻が快く息子ロブの世話を受け入れてくれたので、数日の間留守にすることに問題は無い。

彼が決して無責任な行動をしないことは知っている。それでもなぜこの時期に、わざわざエウロペまでいかなければならないのか、という感情は、エレナの中で繰り返し湧き上がった。

就航し始めたばかりのタートルシップ定期便で移動する中、彼は終始無言のまま西の彼方を見つめていた。

その理由がいま、彼女の目の前に現れたのだ。

後に、エレナの失踪後制式化される機体に対し便宜上、プロトゴジュラスギガ”と呼ばれる試作機は軍トリチャードの元、西方大陸口ブ基地に於いて完成していた。試作から配備まで20年ものブランクがあるのは、偏^{ひとえ}に戦況の推移によるものである。開発段階の80年代には未だ戦端は開かれず、主力機の配備の必要に迫られることはなかった。そして希少なギガノトサウルス野生体の捕獲は殊の外困難を伴ったことと、完成後残された設計図がリチャードの遺志を汲んだエレナが容易に戦線に投入する決断が下せなかったことが考えられる。

最後の理由として、試作機が十分な稼働実験を行えずに失われてしまったからだだった。

「操縦できるのですか」

エレナはリチャードの手を握ったまま、ギガを見上げて問いかける。

「稼働実験は明日開始する。野生の本能も強く、多少危険は伴うからロブを連れてくることを避けたんだ。

もしこれを見たら、真つ先にコクピットに座りたがるに違いないからね」

この惑星の住人は概してゾイドを愛しているが、少年に於いてはその傾向が顕著である。戦いや破壊に憧れるのではなく、ただ単に強いものへの憧憬だ。息子ロブも、ことゾイドとなると目の色が変わる。彼女も嘗て伯父ヘリックが語ったように、自分の息子を軍人の道に進ませることに反対していて、手を変え品を変えて進路選択を軍とは無関係の高等教育機関、或いは企業に所属させようと考えていた。

だが、思春期を迎えようとする少年は反って母親の選択に抵抗した。エレナも同じ年齢の頃、理由の無い反抗心を父ゼネバスに抱いた如く、今息子が同様の感情を抱いていることに過去の自分を振り返るようで懐かしくもあり歯痒くもあった。

このゾイドを見せたら間違いなく息子は軍人の道に進んでしまう。エレナは夫の選択の正しさを納得し、心の中でそっと胸を撫で下ろし

ていた。

「最初にコアの火入れ（動力の始動）を行い、手足や尾の関節部分の干渉を確認する。二日目以降に火器の発射実験をするんだ」

「火器ですか。でもこの機体には見当たりませんが」

リチャードは楽しそうに微笑む。

「それもその日のお楽しみだよ。それより行ってみないか。君と再会したあの場所と、診療所に」

ずっと胸の高さで握っていた右手越しに、彼の笑顔を見つめた。

政務に追われ、久しく陽の光の下で見ることの出来なかつた優しい笑顔だ。胸の高まりが数年ぶりに湧き上がる。一瞬出会った頃を思い出し、改めて隣に佇む男性と一緒にの人生を歩むことの出来た幸運を噛みしめた。

「そうですね。あれからここに來ることもできませんでしたから。セーラブさん達は元気でしょうか」

胸の高さに繋いだ両手を降ろして、ギガの格納庫に開いた僅かな天窓の空を見上げる。四角く切り抜かれた空が青い。明日は懐かしい場所を二人で訪れてみよう。きつと楽しいはずだ。息子には悪いが、青春時代の思い出に暫し浸らせてもらおう。

エレナはこの旅行が、二人にとってのまた新たな出発点になることを素直に期待し、明日を心待ちにしていたのだった。

「準備できるのはこれだけか」

暗く燻んだ赤い装甲板には、所々錆が浮いている。生命体であるゾイドの代謝が通常通り行われていない証拠だ。可動肢から軋んだ関節の擦れ合う悲鳴が響き、重々しい機体を更に鈍重にしている。頭部の襟の部分に備えられた六連加速荷電粒子偏向砲も一門から二門欠落している機体が多い。

嘗てはガイロス帝国全軍の情報を管理し越権行為も厭わなかった男にとって、6機のクリムゾンホーン部隊は余りに貧弱だった。

「廃棄寸前の機体を漸く稼働できるまでにしたのです。整備の連中の苦勞も察してやってください」

訴える整備士も正規兵ではない。文字通り寄せ集めの部隊で、制服も種族も統一性はない。

「エレナ姫がロブ基地に渡ったという情報は確かなのですか。大規模な護衛部隊が着いたという話も聞かない。我々の虎の子であるクリムゾンホーン全機を投入してまで、実行するほどの作戦とは思えません」

その男は嗜虐的な薄笑いを浮かべる。

「情報は何処からでも手に入るものだ。敵の敵は味方」なのさ。政敵を蹴落とす為に我々を利用したい共和国の輩もいる」

吐き捨てるように言い放った。

「それにあの女はそんな奴なんだよ。民衆の中に入ってみるといつても、所詮お姫様の飯事に過ぎない。都合よく帝国、共和国と渡り歩き、保身するだけの身勝手な女だ。私がこんな所に燻っているのも、全部あの女の為ではないか」

視線を逸らしたまま、その男はクリムゾンホーンの並ぶ倉庫の上の空間を睨みつける。

「皇帝の御為にとギルザウラーを起動させたのに、私の忠誠心は信じて貰えなかった。ゼネバス人風情を信用し、なぜ純粋なガイロス人である私を信じなかったのだ。それもこれも皆あの女の所為だ。」

ゼネバスの娘、無事にエウロペの地から出られると思うな」

誰もその男の話を聞いてはいないが、男は空中に向かつて未だに語りかけている。男を動かしているのは、恨みと憎しみの虚しい感情だけであった。

「磁気嵐が近づいてきている。好都合だ。ロブ基地もろとも破壊して、再びニクスの地に戻って見せる。皇帝陛下へ、私の忠誠心の証しを示すのだ」

ヴァーノンは、一人背を丸めながら嗤いを堪えていた。

(2080—2096)

42 (2080年)

くすんだ壁には蔦が這い、月日の経過を物語る。

あの日この場所を後にして、今日まで訪れることができなかった。開けた平地にぽつんと建っていたはずが、いつしか周囲には取り囲むように兵舎が並んでいる。なだらかなスロープを登りエントランスホールに入れば、途端に消毒液の香りが漂ってきた。

診察を待つ患者の中を気忙しく看護師達が行き交っていく。

薄く青みがかかった白衣が懐かしい。いるはずもない自分の姿をその中に探していた。

僅か数ヶ月、そこに所属していたに過ぎない。しかしその数ヶ月が彼女の人生にとって大きな出会いをもたらしたからこそ、止めどなく想いが込み上げてくるのだろう。

白衣の袖を半分まで捲り、前のボタンを上から二つ外したままの医師が通りかかる。二人は互いに目を合わせ、そしてすぐ正面を向き、並んで医師に会釈をした。気付いた医師が視線をゆっくりと向け、次に二人の顔をまじまじと見つめる。気難しそうに閉じていた唇が開き、大きく息を吸い込んだ。

「御無沙汰しておりました、セーラブさん。お元気そうで何よりです」

最初に声をかけたのはエレナだった。

「いつエウロペへ来たんだ。何の連絡も無しに」

吸い込んだ息を吐き出し感嘆の声を上げつつ、医師は強くリチャードの肩を叩く。

「昨晚到着しました。雑務が多かったので、つつい連絡をし損ねました。それにお仕事を邪魔しても申し訳ないと思ったので」

「相変わらず人を驚かせるのが好きな奴だな。ここにはいつまで居られるんだ」

繰り返し肩を叩き続けているため、リチャードの右肩が次第に傾いていく。叩かれながらも溢れるような笑顔を浮かべている。

「一、週、間、ほど、滞、在、する、予定、です」

リチャードの声は、セーラブに叩かれている為波打つようだった。エレナはその医師が以前と変わらず、いや、以前よりも意欲を増して活躍している姿を垣間見た。

「ルリーズ！ リチャード！」

白衣を着た看護師がカルテを手にしたまま駆け寄る。彼女がセーラブの意欲の源であることは知っていた。短くまとめた髪に黄色いシユシユがある。身体の線が丸みを帯び、一見して胎内に新たな命を宿していることが判った。

「ブローニヤ、久しぶり。やっとここに来ることができました」

まるで再会したあの日のように、エレナの両手をとって微笑む。輝く笑顔が零れる。

「あの事件からデルポイに渡ることとなり、それから息つく暇もなく日々の政務に追われてしまいました。伯父さまったら、リチャードが気に入ったのはいいのだけれど、沢山の宿題を残していくんですもの……」

「ルリーズ、お二人はお事中だよ。積もる話は後にしよう」

漸くセーラブの肩叩きから逃れられたリチャードが、そっとエレナの手を取った。

「そうですね。夜勤は入っていますか」

セーラブがブローニヤを見る。「予定はどうなっている」と尋ねているのだ。

「残念ですが、このひとは今晚当直で。でも、忙しければ是非来てください」

「シフトは明日じゃなかったか」

「あなたはすぐに忘れるんだから。今晚ですよ、しっかりしてください。それと診察は大丈夫ですか」

時計を見て、仕事を思い出した様子だ。

「まだここにいるのだろうか。明日でも明後日でもまた来るんだぞ」

慌ただしく廊下を早足で去って行くその後ろ姿を3人で見送った。

「ブローニヤ、幸せそうですね」

「もちろん、あなた達と同じくらいにね」

そう言つてまた微笑む。言葉に偽りは無い。

「お子さんは？」

仄かに頬を赤らめる。

「あと2か月。もう女の子つて判つてしまいました」

言葉とは裏腹に嬉しそうだ。

「名前、もう決めてあります。デキツエリン、素敵でしょ」

記憶の彼方に残つていた名前だ。それは父ゼネバスの母、地底族の霸王ガイロスの娘『デキツエリ』の名に倣つたものだった。

「あなたのおばあさまのお名前を頂くのは畏れ多いけれど、娘の名前に思いを込めて残しておきたかったの。私たちはゼネバス帝国で生まれ育つたことを。許してくれますか」

ブローニヤの思いは痛いほどにエレナに伝わつた。自分でさえ記憶の底に埋もれていた祖母の名を、友人が覚えていてくれた。改めて父の偉大さを噛み締めていた。

「おめでどう、ブローニヤ」

「ありがとう、ルイーズ」

二人は固く手を握り、互いを見つめ合つていた。リチャードは少し離れて二人を温かい瞳で見守つていた。

仮設の無料宿泊施設が立ち並んでいた平地は既がない。コンクリートに覆われた台地が広がり、奥にあった森林も切り開かれ、面影は消えていた。

「あの辺りですね、デスピオンに襲われたのは」

「もう野良ゾイドの襲撃も無くなったそうだ。軍がしっかりと管理しているし、自然に寿命を迎えた機体も多いのだろう」

視線の先には、共和国エウロペ派遣軍最大のロブ基地が広がつていた。磁気嵐の終息とともに、稼働可能なゾイドの数も増加している。軍備の増強に伴い、基地施設の拡張工事も断続的に行われ、無数の建築機材が作動していた。

「再会の場所に因んで、私たちはあの子にこの平原の名前を付けまし

た。皮肉なものですね」

軍への興味を着実に増している息子ロボの事を、エレナは思わず考えていた。

「まだ時間はあるさ。無理に抑えつけてもかえって反発するだけだよ。いまは見守ってやってくれ。男の子なんてそんなものさ」

「あなたもそうだったのですか」

「さあね」

「身に覚えがありません」と言わんばかりに、リチャードは頭を掻いていた。相変わらず駆け引きが下手なことに、エレナは少し首を傾げて見上げていた。ふと、彼の再会の言葉を思い出した。

「そういえば、誰だったのですか『ルーシー』って」

「何のことだい？」

覚えていないのか、それとも恍けているのか。リチャードは怪訝そうな顔で問い返した。

「あの日、私に最初に言った言葉です。『御無事でしたか、ルーシーさん』って。もしかして、エウロペでお付き合いしていた女性ですか」
「どうやら思い出したようだ。彼は子供の様に大袈裟に首を横に振る。」

「誤解だよ。ただ、君の名前が思い出せなかっただけさ」

「別に怒ったりしませんよ。昔の話だし、あれだけ長い間冒険していれば、女性とお付き合いすることもあったでしょう。隠さなくてもいいのですよ」

「気恥ずかしいのか怒っているのか、彼の顔が紅潮する。恐らく前者だろう。本当に判り易い。言葉とは裏腹に、エレナはわざと拗ねた様に横を向く。彼はますます狼狽する。彼女の悪戯心は未だ健在であった。」

「本当に間違っただけさ。それに君の名前は原始人の……」

言葉の途中、緑色の光芒が唸りを上げて飛来し、続けて砲弾らしきものが放物線を描き基地に殺到する。遅れて耳を劈く爆発音がロボ基地に轟いた。警報が輪唱を奏でる。基地では真っ赤な炎が立ち上がり、黒煙を上げて燃え盛る。

エレナは思わず彼の胸に身を寄せ炎を見上げた。リチャードも身動きせずにロブ基地の方向を見つめる。

基地が爆発している。連鎖的に燃え上がる炎の壁が伸びていく。事故だろうか。

帝国との戦闘も絶えて久しい。すぐには敵の襲撃を想起し難かった。しかし、炎の壁の向こう側、建物の影に隠れて見えないが、敵意を持った何か紛れもなく攻撃をしているのだ。

その時、彼の表情が動揺に歪んだ。

「あの場所にはゴジユラスギガのハンガーがある。このままでは焼け死んでしまう」

「行ってください」

咄嗟に答えていた。彼がエレナの顔を見つめた瞬間、何を考えているかすぐにわかった。

ここに妻を残して駆け出していくわけにはいかない。一方で、ゴジユラスギガも救いたい。満足なデータさえ収集していない稼働実験直前の貴重なゾイドだ。機体だけでも避難させたいに違いない。

「ギガは、まだ他の人間には動かせないんだ」

全身を真っ赤な炎に照らされながら、リチャードはエレナを見つめる。

「あなたの追い求めてきた夢です。あのゾイドを助けてあげてください」

彼の夢はエレナの夢でもある。リチャードは大きく頷き、近くの通話が可能な有線電話のある基地施設に向かって駆け出した。エレナはその背中を身じろぎもせずに見つめていた。彼の夢が失われる事の無いようにと、願いを込めて。

突然、背後から男性が低く呻吟しんげんする声が聞こえてきた。

マサム・ジヨーマー・シエーラブ・パーロルチン。

マケー・マガー・ナムケー・ゴウオニー。

ソソル・ランリク・イシー・チョーユルラ。

ギャルウエー・ユムラ・チャーツエルロー。

遠い昔に聞いた響き。あの深山幽谷で響いていた詩だ。うた

(古代ゾイド語?)

くぐもった口調と軍の建物に反響し、明瞭な聞き取りは出来ないはずなのに、シユウの書架にあった古代ゾイド文明の言語を一通り理解していたエレナにとって、その言語の把握は可能であった。

(虚無への礼拝を謳っている。でもなぜいまここでこの詩が)

パクパ・クンチョクスンラ・チエーツアルロ。

声は、着実に近づいて来る。

デイケー・ダーギー・トウーパ・ドウーチクナ。

チヨンデンデー・ゲルペーカブ・チャゴープンポリラ・ゲロンギ・

ゲンデウンチエンポタン・チャムセムペー・ゲンドウンチエンポタン・

タブチクトウシユエテ。

基地建造物の切れ目の地平に、砂煙をあげて突進するゾイド群が見えた。

接近するに連れ、そのくすんだ赤色の大型ゾイドが音源であることを知った。

43 (2080年)

音声を発しながらの攻撃は、みすみす自軍の位置を教えてしまうが、鬱々とした遺恨の感情を打ち付けるためと、生への執着を断ち切るため、その男は古来より語り継がれてきた詩を轟かせながらの襲撃を開始した。

テーツエ・チョンデンデー・サブポーナンワ・チエーチャウウエー・チューキ・ナムタンキ・テインゲージンラ・ニヨンパル・シューソー。『甚深顕現の禅定』か。笑わせてくれる」

唱えられる詩の詞を罵りながら、その男は磁気嵐に対応した特殊なゾイドを操っていた。乗り心地は限りなく悪い。間断なく響くコアの鼓動も喧しい^{かまびす}。なによりガイロス帝国純正のゾイドでないことが忌々しい。なぜ自分が直接戦闘に参加しなければならぬのかを、コクピットの中で有らん限りの罵詈雑言を並べ毒づいていた。

前方の共和国基地で炎が燃え上がった時、怨嗟に満ちた独白は途絶え、嘲諷の笑みで充たされた。

「五番機並びに六番機は砲撃を続行。二番機と三番機は私に続け。四番機は手筈通り工作部隊を護衛し、例の装置を敵基地の中心に設置せよ」

ヤン・テーツエ・チャンチュブセムパー・センパーチェンポ・パクパ・チェンレーシーワンチュ・シエーラプキ・パロルトウチンパ・サプモー・チューパニーラ・ナムパル・タシン・プンポガポ・テターラヤン・ランシンギー・トンパル・ナムパターオー。

後方で待機していた灰色のグスタフが突入して行く。横に張り出した歪な形のコンテナが牽引され、傍らにクリムゾンホーン1機が随伴していた。本来であればハリネズミの如く武装されていたはずだが、背中に備えられた左右のTEZ30mm2連ビーム対空砲、上面のAEZ72mm2連ビーム砲の砲身も幾つか欠損し、後方の砲塔はバーベツト部分が錆び付き回転不能となっている。四番機と称されたその機体も六連装加速荷電粒子偏向砲の二門が欠落していた。動く要塞の異名を持つゾイドの強化機は、砲撃可能な全ての火器を乱射

しながらロブ基地の深部に向けて突進していた。

ゾイド星系の太陽は、11年周期で増大と収縮を繰り返し、増大期には大量の太陽風（ \parallel 荷電粒子）を星系内に撒き散らす。その時期には、大異変以来刻印の如く残されたトライアングルダラスの強力な磁場と同調し、惑星表面に激しい磁気嵐を齎した。小型ゾイドに続き中型ゾイドも再生途上にあった共和国軍では、何機かのコマンドウルフを再配備し、基地の警備に当たらせていた。この時点で磁気嵐発生周期が重なりシステムダウンを引き起こし、満足に稼働できるのはエウロペで培養された茶色い装甲のガイサックのみとなっていた。軽量の蠍型ゾイドではクリムゾンホーンの突進に対抗する術もなく、あまつぎ剩え後続のグスタフにさえ薙ぎ倒され、踏み潰されていった。

奇襲のセオリーを完璧に遂行し、忽ちの内に基地中心にまでコンテナを牽引するグスタフは到達した。コンテナの周囲には、基地の守備部隊を次々と打ち破った5機のクリムゾンホーンが結集した。

「三番機、擱座しました」

随伴していた1機のクリムゾンホーンの姿がない。基地に配備されていた速射砲に脚部を射抜かれ、進撃中に落伍していたのだ。

「我らの崇高なる目的遂行の為の尊い犠牲だ。彼らには砲台となって接近する敵を惹き付けてもらう。ガイロス帝国に栄光を」

レシーバーを介したその男の口から、悲痛なメッセージが部隊に通達される。言葉に反し、男の口角は僅かに上がっていた。

「使えない奴だ」

決して拾われることの無い音量で呟く。その独白の内容とは裏腹に、後方に絶好の囷を残すことの出来た僥倖に、その男は満足していた。

「エナジーチャージャーの設置を急げ。作動を開始させる」

コンテナの隔壁が小爆発とともに振り払われ、内部から物々しい装置が姿を現した。遠隔操作によって作動すると、側面に設けられたスリットからオレンジ色の光を放ち、次第にその輝きを増していく。十数本装着されたケーブルに、血液が脈打つように内部で燐光を発する物質が循環していく。

「臨界まであと23分」

戦場、それも敵地の中心で過ごすには余りに長い時間である。

ヴァーノンは無焦燥感に駆られながら、その時を待っていた。

密かに随伴していたシークレットサービスが、リチャードの連絡と同時に、一人再会の場所に残されていたエレナを収容し、ロボ基地司令部へと送り届けていた。皮肉にも、この時シークレットサービスが使用したゾイドは、鹵獲した野良ゾイドであるモルガだった。地下に潜伏し、着実にその重装甲で要人を警護できる能力を買われ、二人が移動する場所に先行し、常に護衛の任に就いていた。

「知事は何処ですか」

司令部に退避したエレナは、妻としての立場から秘書官としての立場へと変貌し、次期統一大統領有力候補である夫リチャードの所在を即座に確認した。背後に二人のシークレットサービスを伴ったエレナの前で、基地司令部の指揮官らしき将官が緊張した面持ちで敬礼をする。

「ロボ基地司令、トロフイム・デムスキー中将であります。キヤムフォード閣下は17分前に我が軍のダブルソーダによって試作機ハンガーに移動されました。ロボ基地守備隊も多数随伴しており、万全の警備体制を取っております」

「無責任なことを言わないでください」

エレナは鋭く返した。

「これだけ通信機器にノイズが奔っている以上、強力な磁気嵐が発生しているのは明白です。中型以上のゾイドは稼働が困難になっていることも判ります。先ほど私が目撃したレッドホーンの改造機に対抗できるゾイドが、この基地に配備されているとは思えません。それともデイベイソングラスの突撃ゾイドでもあるのですか」

的確に状況を認識している彼女の前で、臨時司令部の幕僚たちは沈黙する。

「あなた達の責任を追及するつもりはありません。今は敵の正体と、襲撃の意図を確認し、一刻も早く対抗策を講じる必要があるのです。手持ちの兵力はどれ程ですか」

目の前のモニターに稼働可能なゾイドと機体番号が表示された。

「現在応戦中のガイサックが14機と、ダブルソーダが3機。他待機中のステルスバイパーが2機です。猶、新規に配備されたコマンドウルフは5機全機がシステムフリーズです」

エレナの表情が曇る。どの機体もあのゾイドに対抗しうる能力を有しているとは言い難かった。

「敵兵力が判明しました。クリムゾンホーン6機、グスタフ2機。随伴する歩兵は確認できず」

絶望的な情報であった。眩暈がするようなデータ群の明滅の中、通信兵が驚愕の声を上げた。

「ハンガーから有線での連絡を受けました。現在、試作機が稼働準備中です」

どうやらリチャードは、あの試作機の元に辿りつけたらしい。稼働実験も未実施の上、各部の調整も行っていないはずだ。そんな機体を操縦することなどできるのだろうか。エレナは言い知れぬ不安を抱いたまま、モニターを見つめていた。

※

ダブルソーダの飛行は、到底飛行と呼べるような代物ではなかった。磁気嵐の為機器が何度もトラブルを起し、地表を跳ねるように移動していたからだ。途中、何度も建造物に衝突しそうになったが、その度毎に辛うじて障害物を躲し、漸く試作機ハンガーにまで辿り着いた。地表に降り立つと、格納庫の正面に幾つもの黒煙が棚引いている。劫火はすぐ目の前まで迫っていて、格納庫が炎に包まれるのも時間の問題であった。

「コアの火入れを行う。始動を手伝ってくれ」

「無茶ですよ、素体と制御装置との調整もしていないのに」

「無茶は覚悟の上だ。みすみすこのゾイドを失うことはできない」

リチャードの不退転を示す視線に、その整備兵も彼の申し出を拒絶することなどできなかった。

「起動にはどうしてもコクピットでの操作が必要となります」

「基本はゴジュラスと同じだな。バックアップを頼むぞ」

リチャードは「格闘モード」と呼ばれる直立状態のギガに接続されているボーディングタワーを駆け上がり、未だに新品の塗料臭の残るコクピットに身を滑り込ませた。外部に接続された始動装置から、徐々にエネルギーの塊が送られている。基地から預かった始動キーを、コンソール右下に装着した。

こんな形での始動は望んではいなかった。戦闘ゾイドとして開発しながらも、戦闘に投入したくはなかったからだ。ただ、自分と共にこの広い西方大陸を駆け巡りたかった。その夢を叶えるためにも、今は多少なりとも無理をさせなければならぬ。

「準備完了です」

ディスプレイを確認する。リチャードは操縦桿を握り、儀式の如く高らかに宣言した。

「始動する。コードネーム、『ゴジュラスギガ』」

キャノピーの奥に緑色の眼光が点った。

※

磁気嵐の影響は、クリムゾンホーンの索敵能力をも奪った。全天候3Dレーダーが装備されていても、ステルス性の高いガイサクは周囲の建造物に紛れ、尾部のロングレンジガンで間断なく攻撃を繰り返す。互いに光学機器を介した、原始的な目視による攻撃方法しかない。クリムゾンホーンは、背部の偵察用ポッドを各機が僅かな飛行時間ぎりぎりまで飛行させ、周囲を警戒させていた。

「敵大型ゾイドを肉眼で確認。外見はゴジュラスと酷似。ライブラリ照合……アンノウン。データにない機体です。ゴジュラスの新型と推定」

五番機偵察ポッドからの報告が、指向性のあるマイクロウェーブ通信で届いた。ゴジュラスの名が出た途端、奇襲部隊の全機が凍りつく様な緊張感に包まれた。ベースとなったレッドホーンにとって、ゴジュラスは天敵とも言えるゾイドである。既に三番機を失っており、攻撃を受ければ少なからず損害は出るはずだ。ヴァーノンの一番機にも、大型ゾイド出現の報告は届いていたが、作戦目標はあくまでエナジーチャージャーの設置であり、対ゾイド戦ではない。

「五番機は装置から敵を遠ざけるため誘導しろ。グスタフはガイサックを踏み潰せ。死ぬんじゃないぞ」

了解、の通信と共に、五番機と呼ばれた機体が新型ゴジュラスの機影に向かつて去って行く。同時に、コンテナ部分を切り離れたグスタフもガイサックの群れに突撃する。「ガイロス帝国に栄光あれ」という最期の絶叫が聞こえる前に、その男は音声スイッチを切っていた。

単純なものだ。言葉で操れるのであれば容易い。

ヴァーノンは相変わらずコクピットの中で囁わさいを堪えていた。

「元は霸王ガイロスに縋りついて中央大陸から渡ってきた、余所者であるお前達にはわかるまい。生き残るべきは、暗黒大陸古来よりの民、古代ゾイド人の末裔である自分達こそ相応しいのだ。古いにしえよりの恩讐を、今こそ討たしてもらおうぞ」

その男の狂気に満ちた目の前で、エナジーチャージャーは更に輝きを強めていた。

※

エレナは、接近して通信を試みる以外の連絡手段がないことを悟った。

「ステルスバイパーを護衛に付けてください。私はモルガで出ます」

司令部内がどよめく。デムスキー中將と名乗った司令官が真っ先にエレナを押し留めようとする。

「お止めください、危険過ぎます」

「敵の攻撃意図が見えないまま、ただ無為に時間を過ごすことこそ遙かに危険でしょう。戦況が見える場所にまで移動し、敵の正体を把握します。他のゾイドは出せなくとも、迫撃砲や榴弾砲の類は交叉射撃で攻撃は可能でしょう。標的位置を知らせるので、モルガに通信ケーブル及び関係機器の搭載を準備してください」

彼女の気迫に気圧され、司令官は抗う術を放棄した。復唱することなく伝令し、格納庫のモルガへの準備を開始した。

「パイロットスーツを着ます。女性用のものを一着お願いします」

佐官の一人に伴われ、彼女は格納庫へと向かって行った。

※

ゴジユラスギガはコアの火入れと共に、言うことを聞かない子ども
の様に格納庫を飛び出した。コクピットからの操縦の為の電気信号
と、素体との同調が全く調整されていない。野生体が戦闘ゾイドに改
造され、電気信号に置き換えられた景色を初めて認識した時、気性の
荒いゾイドが往々にして陥る状態に、それは嵌りこんでいた。

なぜ自分はここにいる。自分は霧に沈んだ密林の中、獲物を狙って
仲間と共に駆け巡っていた。人間という小さな生き物に捕獲され、コ
アを休眠状態にされたことまでは覚えていて。自分は生き延びたは
ずだ。自由に生き、自由に駆け巡り、自由に狩ってきた。だが、今の
自分はどうだ。空腹感がない。それに見慣れた密林も無い。あるの
は見通しの悪い黒煙だけだ。

何処だ此処は。不思議な形の物が林立し、地表面はやたらに歩きに
くい。奇妙なゲージがついた視野に、自分の脚部が映る。

何だ此れは。妙な物が装着されている。両腕も必要以上に鋭く、硬
い物質に変わっている。身体も、尾も、背鰭も、そして顔まで違和感
のある硬いものに変えられている。

死んだのか。いや、自分は生きて、コアの鼓動を感じている。

頭部に別の意識を感じる。何かが自分の頭に乗っている。小さな
ものだ。微細な刺激を送ってくる。不快だ。

ギガは、自分の意図した動きとは違った動作を強いられる不愉快さ
に、思わず刺激に抗して逆の動きをしていた。

「暴走だ」

リチャードはコクピットの中で呟いた。操作とは全く逆の動きを
している。攻撃から避難する筈が、攻撃の中心に向かって走り出して
いるのだ。

「言うことを聞いてくれ。お前を守りたいんだ」

リチャードの思いも虚しく、ギガは立ち昇る爆炎の元に突き進んで
行く。突然、前方から呻吟と共に赤い塊が現れた。

テネー・サンゲキトウー・ツエータンデンパ・シャリーリーパー・
チャンチュブセムパー・セムパーチェンポ・パクパ・チェンレーシー・
ワンチュラ・デイケーシエー・メーソー。

「レッドホーン……違う、改造ゾイドだ。——幸ある者、神に述べる——
」。なぜキリンディニ宮の詩を」

クリムゾンホーン五番機が、暴走するギガに向かってAEZ72m
m2連ビーム砲を撃ち込んだ。射角が浅く、装甲板に黒く焼け焦げが
出来た程度であったが、その瞬間ギガが咆哮した。

「今は戦う時じゃないんだ。逃げてくれ、ギガ！」

しかし、退却させようと操縦桿を倒せば倒すほど、ギガは猛り狂っ
た。

自分の相手はお前か。自分をこんな体にしたのもお前の仕業か。
お前を倒せば、この身体は元に戻るのか。どうでもいいことだ。自分
はお前を倒し、コアを噛み砕いてやる。

本能的に認識した敵に向かい、ギガはハンティングを開始した。

44 (2080年)

ヴァーノンにとっての誤算は、磁気嵐の中でも稼働できる大型ゾイドを共和国軍が保有していたことであった。クリムゾンホーンを奇襲に選んだのも、両軍通じて磁気嵐の中で稼働できる最強の機体であったからだ。共和国は国内経済の立て直しに集中し、戦闘ゾイドの開発を中止していたはずだ。密かに送り込んだ諜報員の報告からも、連邦共和国各軍の動きはなかった。

ギガの開発はあくまでリチャードを中心に試みていたプロジェクトであり、その男の放った情報網に接触することなく行われていたため把握できなかったのだ。今更歯噛みをして仕方がない。まずは装置の臨界を待つだけであった。

※

「あれはいったい何?」

問いかけてみたところで、答えが返ってくることもないと知っているが、今はその言葉がエレナの口について出ていた。赤いゾイドに守られた装置が、徒ならぬ殺気を放っていた。

建造物の影に隠れ、モルガと2機のステルスバイパーが到着した時、中心に置かれたエナジーチャージャーはオレンジ色から黄色に光を変えていた。1機のガイサックが砲撃を行い、見事装置に命中させた。一矢を報いた茶色い小型ゾイドは、直後に4機のクリムゾンホーンの一斉砲火を浴び撃破された。攻撃を受けたはずの装置は、まるで何事も無かったかのように作動を続けている。上空に微細なオーロラが脈動を始めたそれは、惑星大異変の最中にみた光景に酷使していた。その装置から、奇怪な物質エキゾチックが生成されているに違いない。

「あれはいったい……」

二度目の同じ言葉は、それ以上エレナから続かなかった。嘗て禁断の巨大ゾイドとして残された、最強にして最悪の、そして父の棺となったキングゴジュラスの遺物、既存の物理学では説明できない驚異の技術を、あのレッドラストで襲ってきたヴァルガというゾイドも利用していた。時代も過ぎ、忘れ去られていたと思われた禁断の技は、

再び彼女の前に立ちはだかったのだ。

見れば、残っていた4機中3機が移動を開始した。エレナの搭乗するモルガとは逆方向だ。周囲を取り囲んでいたガイサクも多くが撃破され、残された機体も弾薬を撃ち尽くし補給の為退却している。小型ゾイドとは違う機影が突然建物の影から出現した。銀色と黒の装甲に、黄色いサーボモーターがやけに目立つ。

「ゴジュラスギガ！ リチャードなの」

その左腕には、腹部を突き破られ、高々と掲げられたクリムゾンホーン五番機の残骸が掲げられていた。

気持ちいい。自分の身体ではないと思ったが、とても力強い。目の前に現れた赤いゾイドなど怖くなかった。首の裏側に噛みつくと、呆気ないほど頸から引き千切ることができた。他愛ない。狩りの後の高揚感が足りない。腹立ちまぎれにコアを塗り取ると、腹部から引きずり出して噛み砕く。不味い。味覚が無くなっていた。だが、快感だ。

自分は強くなった、信じられないほどに。次の獲物はどこだ。相変わらず頭の上から微細な意識が送られてくるが、無視しても差し支えない。頭の天辺を叩き割って、別の意識を握り潰したかったが、生憎両腕が届かないので諦めた。それより狩りだ。視線の先に先ほどと同じゾイドが3匹現れた。嬉しい。

ギガは喜びの咆哮を上げていた。

全く操縦を受け付けない。ここまで野生の本能が強いと予想外だった。避難するどころか、敵を求めて彷徨する野獣と化した。周囲を敵に囲まれた。既に脱出は不可能だ。

「操縦を受け入れてくれ。お前の戦い方では無理だ、ここは南エウロペの密林じゃないんだ！」

生き延びるためには、戦闘を受け入れさせなければならぬ状況に陥っていた。激しく揺さぶられるコクピットで、リチャードは呼びかけ続けていた。

一方、前方に出現した3機のクリムゾンホーンは、間合いを取りながらじりじりと接近を始めていた。強化されたデッドクラッシュヤー

ホーンであれば、ゴジユラスのコアを貫く動作も容易だった。しかし五番機のコアの破片を噛み砕きながら出現したゴジユラス型の大型ゾイドは、ゴジユラスとは似て非なる全く別の機体であった。改造機ではないので性能は未知数だが、黄色いサーボモーターから推察して、未だ開発途上の試作実験機に違いない。その証拠に、機体の何処にも火器の類が一切装備されていない。作戦の目標はエナジーチャージャーを臨界に達すること、そしてそれまで装置を守ることである。凶暴なゾイドではあるが、3機の連携を図れば倒せない相手とは思えなかった。乱戦に突入した場合の対応策通り、戦闘態勢へと移行した。

ギガから最も距離を置いていた二番機が、対ゾイド三連リニアキャノンアームを牽制の為に撃ち込む。リニアキャノンは反動も強く、アームを展開した状態での発射はできない。収納状態の狭い射角のまま撃ち込まれた弾丸は、容易にギガに命中することはなかったが、暴走状態のギガの怒りを助長するには充分であった。本能の命ずるまま、再び咆哮する。伸びあがったその瞬間を狙い、四番機が頭部を低くしデッドクラッシュャーホーンを構え、ギガの腹部目掛け突進した。咆哮の途中で攻撃を受けたため、一瞬身を躲すことが遅れる。腹部装甲板の一部を削られ、ギガは痛みの悲鳴を上げた。

痛い。自分は強くなつて、痛みも感じないはずだ。

だが、痛い。

痛い、痛い、痛い。

怒りだ。赤いゾイドへの怒り。壊す。赤いゾイドを壊す。壊せば、この痛みも無くなる。

捕まえようとしたが、四足のそれは早く逃げていく。ならば自分も早く動けばいい。

ギガの眼光が、緑から赤に変化した。

「追撃モードだ」

操縦を受け付けないコクピットの中、リチャードはギガの意識が怒りに満たされるのを知った。頭部がガクンと下がる。クラッシュャーテールがガタガタと関節を伸ばしていくのが判る。ディスプレイに

表示されるアラートウィンドウが形態の変化を伝えていた。尾部が唸りを上げて虚空を切り裂く。次の瞬間、ギガは恐るべき加速度で追撃を開始した。

エレナはリチャードの乗ったギガが、一瞬にして姿勢を低くし、その巨体にしては信じ難い速度で疾駆する姿を目の当たりにした。「生命に満ち溢れた野生体を探す」と言っていた、彼の言葉に間違いは無かったが、同時に愛するひとを乗せたまま、そのゾイドは戦場を気儘に駆け巡って行くのだ。

距離を置いて砲撃していた二番機が、忽ちの内に追い縋られた。正面を向き直し、デッドクラッシュヤーホーンでの突進を試みる。だが、最高時速180kmを誇る追撃モードに変形したギガの前では、重武装化の為機動性を犠牲としたクリムゾンホーンの突進など止まっているのも同然であった。敵の突進を難なく躲すと、ギガは振り向きざまにしなやかな鞭の如くクラッシュヤーテールを叩き込む。背部の追加装備を根こそぎ吹き飛ばされ、原型であるレッドホーン同様となった二番機は、再度の突撃の為に転進する。しかし、機体が方向を変える前に、ギガは既に赤いゾイドの背後にピタリと並走していた。後ろを取られ、背部の火器を吹き飛ばされた二番機は、苦し紛れに機体をギガに幅寄せして、横からの体当たりを試みる。衝突直前の数十cmの位置でギガは華麗に身を躲し、執拗に追撃を繰り返した。クリムゾンホーンの体当たりを躲す姿は、まるでワルツを踊るかのように優雅でもある。まさしく楽しんでいるのだ。それも獲物を追い詰めるためだけに。

エレナは野獣そのもののギガの動きを、心底恐ろしく感じた。これがゾイド本来の姿なのだ。人に操られることなく、本能の赴くまま行動する生命体の姿だと。

左右の対ゾイド三連リニアキャノンアームが苦し紛れに展開するが、関節が伸び切る前にギガのハイパープレスマニピレーターが左側を塗り取る。隠し腕としての文字通りの奥の手は、何の意味も為さずに破碎された。満身創痍となり、機動性が著しく低下した手負いの獲物に対し、再び格闘モードに変化したギガが、口腔のギガクラッ

シャーファングを背中に思い切り突き立てた。装甲板が食い破られる音と、クリムゾンホーン本来の悲鳴が鳴り響いた。

ポンポ・ガポ・テターキャン・ランシンギートンパル・ナムトルヤンタクパル・ジェスターオー……。

装甲板自体を振動させながら響いていた呻吟の声は、金属生命体としての悲鳴とコアの出力低下により、音声のトーンを上げる。それまでの低い男性の声ではなく、嬰兒の嘆きのように。耳を塞ぎたくなる程不気味な響きがロブ基地中心に轟く。ガリガリと赤い装甲板が食い破られた。背中から腰にかけての部分が、ギガクラツシャーファングの形そのままに塗り取られる。ぽつかりと空いた空洞の中、コアが完全に露出する。止めを刺すべく、ハイパープレスマニピレーターを装甲の亀裂に突っ込もうとした時だった。

ギガの側面に幾つもの緑色の光芒が突き刺さった。爆風を浴びて格闘モードのまま横転するギガ。立ち昇る硝煙に包まれ、ゴジュラスの名を冠するゾイドは漸く動きを止めていた。

二番機が襲撃されている間、一番機を囲んで四番機と六番機が頭部フリルに装着された六連装加速荷電粒子偏向砲の照準をギガに定め、一斉射撃を行ったのだ。クリムゾンホーン最大の武器であり、一門で大型ゾイドを薙ぎ倒す威力を持つ砲撃を数発同時に被弾し、さしものギガも巨体を横転させ倒れ込んだ。

先程よりとても痛い。自分は強い。だが痛い。こんな痛みは初めてだ。

怖い。これ程痛いならば、自分は怖くて立ち上がれない。

仲間が獲物に逆襲を受け、死んで逝く姿は何度も見た。

仲間が死んでも、コアを喰らって自分のものにした。だから仲間が死ぬのは嬉しかった。でも、悲しかった。寂しかった。今度は自分が死ぬのか。悲しい。寂しい。死にたくない。だが、身体が動かない。強くなったはずの、この身体が。

死にたくない。死にたくない。死にたくない。

「ギガ、起きろ！ 起きて戦うんだ。死にたくなければ戦え！」

ギガの意識に、別の意識が流れ込んできた。

頭に乗っている小さなものだ。ずっと忌々しいと思っていたのに、今はその気持ち判る。それは、自分を助けようとしている。

動かない身体に、懸命に刺激を送って動かそうとしている。共に狩りをした仲間と同じだ。助け合って、巨大な獲物を狩るのは楽しい。身を寄せ合って、空から降ってきた燃える石を避けた時と同じだ。

それに従ってみよう。今の自分には、自分が動かせないのだから。頼んだぞ、小さい仲間よ。

コンソールに一斉に明かりが点る。制御系オールグリーン。操縦桿に手ごたえを感じる。

「わかってくれたのか……。ありがとう、信じてくれて。

行くぞギガ、敵を倒すんだ！」

ギガが咆哮した。それは仲間を得た喜びの叫びであった。

リチャードは暴走が始まってから操縦可能になるまでの時間を確認した。試作機である以上、実戦での貴重なデータも残しておきたい。ボイスレコーダーに記録されるであろう音声と、彼自身の高揚感を込めコクピットの中で高らかに告げた。

「ハイパーEシールドジェネレーター作動、標的に突撃する」

ギガの正面に、薄紅色に色づいたハニカム状のEシールドが半球状に展開された。間断なく降り注ぐ加速荷電粒子偏向砲の攻撃も振り払い、次第に間合いを詰めていく。シールド展開をして咆哮するギガの前に、クリムゾンホーンはじりじりと後ずさりを始めた。

気迫だ。仲間を、友を得たギガは、野獣を越えた力強さを備えていた。

一番機が脱落する。

「この場所を死守せよ」

ヴァーノンは吐き捨てるような通信を残したまま、エナジーチャージャーに向けて疾駆していく。だが、その激しく闊歩する脚部を狙うゾイドがいた。

ステルスバイパーの連装ロケットランチャーが、一斉に一番機の前足に集中する。関節部分を正確に射抜かれて、クリムゾンホーンはエナジーチャージャーの直前でその機体を摺座させた。次の瞬間、その

背中から偵察ポッドが射出されていく。

「追ってください」

モルガと二機のステルスバイパーは、小さなポットの先を追う。摺座したもののコアが無傷の一番機は、背部のリニアキャノンアームを展開させ、ステルスバイパー2機を掴んだ。互いに致命傷を与えることが出来ず、宙に浮かんだ鋼鉄の蛇がうねうねと蠢く。

「ルイーズ様、構わず脱出してください」

残されたモルガを捉える術の無いクリムゾンホーンは、ただエレナを見送る他なかった。彼女はどうしても確かめる必要があつた。あの装置が何なのか。そして飛び去った偵察ポッドの行方である。

「モルガを進めてください。あの装置の所まで」

エレナを乗せたモルガは、戦闘とは別に展開する事実を確認する為、進撃を続けた。

45 (2080年)

多少なりとも物理学を学んでいる者がいれば、その輝きが何を示しているか理解できた。粒子が光の速度を超えて移動するとき発生する青白い光、チエレンコフ光と呼ばれる通常の可視光とは異なった光である。

装置を中心とした空間が球体状の光芒に包まれ輝いている。その正面に、クリムゾンホーン一番機から脱出した偵察ポッドが不時着し、程なくエレナの乗ったモルガも到達した。脱出ポッドのキャノピーを蹴破り、中から赤い軍服を着た自動小銃らしき武器を携えた兵士が降り立つ。光の球体は次第に半径を広げている。不思議な事に、光が閉じ込められているかのように、光と影との境界が余りに明確だった。

降り立った兵士はその球体を見つめ狂喜していた。

モルガのkokピットから降り立ったエレナは、見覚えのある男の姿に、忌まわしい過去の記憶を呼び起こされた。

「これはこれはエレナ姫。久しく礼を欠いておりました。あの頃よりも一層お美しくなりましたな」

慇懃無礼な態度は変わらない。浮かべた笑顔は相変わらず厭らしく思えた。

「ヴァーノン中佐でしたね。一体何が目的ですか」

その男は、小銃を構えることなくエレナに対峙していた。

「御記憶に預かり光栄です。軍籍を解かれ落魄した身の上故、その階級で呼ばれるのも久しぶりで御座います。本当にお懐かしい」

強ち皮肉とも思えなかった。その男は確かに彼女との再会を懐かしんでもいたのだ。

「思い起せば、お父上を巡幸させ、無為に戦死させたのも私の責任です。それに加え、あなたの御友人であるシュテルマー大尉をギルザウラーに導いたのもまた私の一存。誠に申し訳なく、心底よりお詫び申し上げます」

贖罪のつもりなのだろうか。その男から語られる事実は、既に癒さ

れていたと思つた彼女の心の傷痕を記憶の奥底から呼び起こし、激しく掻き毟つた。

「お怒りの気持ち、お察しします。ですが、私の話も聞いて欲しいのですよ」

ふと、背後の球体を見上げる。光の半径は更に拡大している。エレナは堪えきれず叫んでいた。

「あなたの謝罪の言葉など、今は聞いている場合ではありません。その装置は何、いったい何をしようとしているの！」

「性急なところも、お父上譲りですな」

ヴァーノンが笑つた。誰でも判る程、厭らしく。

「お教えしましょう。これはエナジーチャージャー、共和国軍が我が国土を焦土と化した狂気のゾイド、キングゴジュラスの残骸からサルベージした未解析の技術の結晶でございます。技術局が小型化に成功したのですが、適合するゾイドの素体が見つからず、遺棄していた物を譲り受けました。ゾイドコアのポテンシャルにも匹敵する強力なエネルギーを生み出す可能性がありますが、実用化には困難を伴い、ゾイドへの搭載は将来に持ち越されることでしょう。エキゾチック物質、なにやらタキオンとか申しておりましたが、情報畑の私などに理解できるものではありません。ただ判るのは、光の速度以下では運動できないもので、それが通常空間と触れ合うと激しい対消滅を起こし、半径数kmに亘って全ての物質を破壊することです。

御心配には及びません。この装置は丁度このロブ基地を呑み込む程度の破壊力しかありませんので」

薄笑いを浮かべながら語り続ける。

「装置を停止させなさい」

「どうぞ御自由に。出来るものならば」

その男の口調が豹変し、球体は一層広がり続けた。停止する方法など思いつかない。

「エナジーチャージャーが臨界に達した時点で、俺達は勝利するんだ」

「こんなことをして、何の価値があるの」

「価値はある。ここで俺が引き起こした偉業が歴史に刻まれる」

言つて僅かに俯いた後、再び正面を向いた顔には薄笑いが消え、憎悪に満ちた醜悪な形相となつていた。

「俺はテュルクの古都トローヤに起源を持つ暗黒大陸古来よりの純粹な古代ゾイド人だ。お前の外祖父ガイロスによつて故郷を奪われ、仲間を殺され、技術を奪われた。一部は中央大陸に脱出したが、俺と俺の仲間が選んだのは、ガイロスへの絶対服従しかなかったのだ」

その話には聞き覚えがあつた。先ほどから響き続けている詩のことに加え、彼女にとつて確認せずにはいられないことがあつた。

「まさか、あなたはミスタージエンチエンと……」

「ジエンチエン・パルサンポは俺と同族だ。奴は暴力を否定し、争いを捨てたが、俺は納得できなかった。敵を愛するだと……反吐が出る。

仮面を被つた皇帝の恩為にと、奸智術策を巡らし俺は必死で働いた。だがどうだ。粛清は留まる事を知らず、古くからの盟友も全て殺された。そこで学んだんだよ、これこそが人間の本性だとね」

挑発している。わざと彼女を怒らせようとしているのも判つたが、恩師ともいえるミスターへの暴言だけは、許すことが出来なかつた。

「あなた、それでも人間ですか!」

「勿論ですとも。切れば血も出る紛うことなき人間だ。貴様は人間の価値観を定めることの出来るほど崇高な存在なのかね。自惚れるな。自ら神にでもなつたつもりか。

俺みたいな者も人間なんだよ。俺以下の奴らも人間なんだよ。常識ぶつて、人間の定義などするな。お前のようにニクス、デルポイ、そしてエウロペと渡り歩き、苦勞も無く生きて来た奴には、仲間も無く、保身のみ生きるしかなかった人間の悲しき、地の底を這いずり回つてきた者の気持ちなどわかるまいがな。

俺は死ぬ。死を覚悟した人間の恐ろしき、篤と味あわせてやる。

ゼネバスの娘よ、最後に礼を言う。臨界までの俺の時間稼ぎにつき合つてくれたことを」

エナジーチャージャの輝きが増し、球体が更に巨大化した。その男の挑発の理由を知つた時、臨界への秒読みが始まつていた。

※

脚部補助アンカーが地表に打ち込まれ、突進するクリムゾンホーンを前にギガが構える。ロケットブースター加速式クラツシャーテールが唸りをあげ、衝突寸前のクリムゾンホーン本体に叩き込まれた。重量100tを越える巨体が宙を舞う。落下の衝撃で、残されていた加速荷電粒子偏向砲全てがフリルから脱落した。もう1機のクリムゾンホーンも、デッドクラツシャーホーンを折られ背部の武装も破壊され、攻撃手段を失った。

テ・テシンテ、チタル・キューキー・テンパ・シントウ・シエーラ
プキ・パーロルトウチンパ・サポモーラ、チエーパルチャテ、デシン
シエーパ・ナムキャン・ジエース・イランゴー……。

機体から響く声は、クリムゾンホーンのシステムフリーズ状態に並行し、その囁きを次第に潜めていった。

リチャードはギガの動きを止めた。勝負はついている。彼の操縦を受け入れたギガのパワーは圧倒的だった。無駄に命を奪いたくは無かった。それが人でも、ゾイドであっても。

『真理を神も祝福している』か。命を失ってまで得る真理などあるはずがないだろう」

お前なぜ止めを刺さない。敵は殺すものだ。

「違うんだ」

ギガの意識がリチャードの中にも流れ込んでいた。いつしか二人の間には意識の共有が成立していたのだ。

「お前たちは無駄に狩りをしなかつたはずだ。生きるため、生き残るために戦い、成長してきた。弱肉強食は自然の摂理だ。無為な殺戮も、生命が進化する為には必要な行為だと思う。」

でも、今お前達ゾイドは絶滅に瀕している。隕石——お前の言う空から降ってきた燃える石だ——その為に多くのゾイドが死滅した。あのゾイドはこの激しい磁気嵐の中でも生きています。貴重じゃないか、あの大異変を生き残った仲間だろう。お前には別に食糧をやる、心配するな」

自分にはよく判らない。だが、判った。お前の言うことに従おう。

ギガとの会話を楽しむ。これ程嬉しい事はない。満ち足りた高揚

感の最中、彼は基地の中心で湧き上がる、巨大な光の球体の姿を目にした。戦闘に夢中だった。もう一つの脅威が残されていたのだ。

「ギガ、もう少し頼むぞ」

追撃モードに変化したギガが、光の球体のもとに疾駆していった。

※

チャンチュップセンパー・センパーチェンポ、パクパ・チェンレーシク・ワンチュクタン、タムチェー・タンデンペー、コルテータータン、ラ・タン、ラマイン・タン、ディサルチェーペー、ジクテン・イーランテー、チョムデンデーキー・スnpパーラ、ゴンパール・トウードー。クリムゾンホーンの呻吟が響く。残されていたもう一台のグスタフが、摺座した三番機と一番機を荷台に回収し、モルガに攻撃を開始した。脚部は破損していても強力な火器は健在で、忽ち周囲は炎に包まれた。一瞬の間をついて、ヴァーノンが三番機の偵察ポッドに搭乗した。前肢を失い前のめりに背中を持ち上げるクリムゾンホーンは、あたかも背部の偵察ポッドを頭部にした全く別機体の容貌に変化していた。突き出た2本の対ゾイド三連リニアキャノンアームが両腕の様に見える。正面に向け、これ見よがしに突き出されたその可動肢には、それぞれに引き千切られだらしなく垂れ下がった蛇型ゾイドの頭部が掲げられていた。

「ステルスバイパー！」

自分を守るために、又犠牲が出てしまった。エレナは目まぐるしく変化する戦況に、完全に混乱していた。

突然、頭の中に声が響いてきた。素朴で、武骨な響きだ。

「あれが、お前の仲間か」

「ああ、私にとってこの惑星で最も大切なひとだ」

続いて響いた声は、紛れもなくリチャードの声と判る。不思議な共鳴現象が、ギガの意識を通じエレナの元に届いた。見上げる先に、プロトゴジユラスギガの雄姿が聳え立つ。

ギガの赤い瞳と視線が交叉した気がする。次の瞬間、長大なクラッシュヤーテールを撓らせ、ステルスバイパーの頭部を得意げに掲げていたクリムゾンホーン三番機に叩き込んだ。ロケットブースターに

よって加速されたテールスタビライザーが突き刺さり、一番機諸共グスタフの荷台から転がり落ち横転する。途中右後肢が欠落し、一番機は下顎をだらしなく開いたまま停止した。三番機はそれ自体が重量物となって吹き飛ばされ、基地施設の一画に衝突し漸くその動きを止めた。左のリニアキャノンアームには、なぜかまだステルスバイパーの頭部を掴んだままに。

「無事だったのですね」

彼女の呼びかけに、今度は心の声が響くことはなかった。偶然であつたのかもしれない。それでも彼の想いに違いはないはずだ。ギガは頭部コクピットを精一杯下げてキャノピーを開いた。中で手を振るのが、紛れもなく最愛の夫であることに安堵した。

ギガの赤い眼が輝く。声の主はこのゾイドだったに違いない。エレナも手を振った。

「叶ったのですね、あなたの夢が」

地上から呟いたところで、コクピットに聞こえるはずもない。それでも満ち足りて手を振る夫の姿に、エレナも喜びを共有していた。二人の憩いが、次なる悲劇を導くとも知らずに。

大破したクリムゾンホーン三番機の背部、破壊を免れていた偵察ポッドが、戦闘で起きた火災の破裂音に紛れ密かに離脱し飛行する。二人が気付いた時には、緑と赤の物体は既にギガの目前まで迫っていた。そのままギガのコクピットに衝突すると、開いたままのキャノピーに機体を喰い込ませる。飛来した物体の奥、リチャードは目の前に自動小銃を構えたガイロス軍人の姿を見た。

「死ね」

表情の無い男だった。銃弾が、リチャードの胸を貫いた。

どうした、仲間よ。お前の意識が痛みを感じている。

ギガの本能が突き刺さった偵察ポッドを振り払い、男はポッドごと地表に落下していく。リチャードの胸からは大量の血が噴水のように噴き出していた。咄嗟の事で身を躲すこともできなかった。酷い圧迫感。失血による意識障害で痛みすら感じない。彼は自分の命が助からないことを悟った。落下した偵察ポッドを共和国軍兵士が一斉

に取り囲み、銃口を突きつける。蜘蛛の巣状にひび割れた緑色のキャノピーの向こうには、落下した際に拉げたコンソールに両足を挟まれた男が意識を失って横たわっていた。

「リチャード、リチャード！」

エレナは叫ばずにはいられなかった。すると、ギガが頭部を持ち上げた。キャノピーが閉じられていく。

無事だったのだろうか。それにしても一連の動作が不自然だった。

リチャードは、ギガが試作機故にボイスレコーダー機能が保証されていることを知っていた。コクピットでの会話は必ず遺される。自分の最期の言葉は最愛の妻に伝わるはずだ。

コクピットの中、リチャードは思いを込めた独白を語り始めた。

「聡明な君の事だ。もう気が付いていることだろう。もっともっと、君と人生を共に歩みたかった。もっともっと一緒にいたかった。約束を守れない私を許してくれるだろうか。ついでに、我が儘な私の最期の頼みを聞いてくれ。

決して復讐をしてはいけない。憎しみの感情からは何も生まれな以上、人間を恨むことはしないで欲しい。この意味が理解できるようになってから、あの子に伝えてくれ」

お前は何を守ろうとしている。あの仲間か。お前は痛くないのか。死にそうだ。

「多分だめだろう。ギガよ、君は生き残って別のパイロットに操縦してもらえ」

既にコクピットは血の海だった。胸の圧迫感だけで、痛みを伴わない事だけが救いだった。致命傷に違いないのに、思いのほか自然に喋れるのが自分でも不思議だ。胸を貫いた銃創を伝わり、噴出した血液が肺に達している。咳き込む力も無く、次第に呼吸が途絶えていく。消えゆく命の炎の中、彼は必死で願っていた。「ルイーズを救いたい」と。

あの光を止めたいのか。

「わかるのか。あの光の暴走はこの星に多くの死をもたらす。なんとか爆発を阻止したい」

自分はその方法を知っている。あれを止めるには、同じ光をぶつければいい。

「本当か。同じ光とは何だ」

自分のコアの光を全て注ぎ込む。そうすれば消える。

「32門ゾイドコア砲のことか。ギガ、お前も死ぬぞ」

仲間を守りたい。あの牝、ルイーズというのだな。お前の気持ちが判る。お前はあの牝を守るためなら、なんでもするつもりだ。こんなに強い気持ちは知らない。自分もお前と同じ気持ちになった。

今この光を止めなければ、お前の仲間も自分の仲間も幾つも死んでしまう。止められるのは自分しかない。仲間を救うため、自分はお前と一緒にしよう。

「そうか、わかってしまったのか。さすが私の見込んだゾイドだけある」

リチャードが、苦痛を堪えて笑った。

ゾイドと人は仲間だ。この星に棲む仲間だ。それを救うため自分は力になろう。

仲間よ、小さいものよ。僅かな時間であったが、繋がることのできたこと、嬉しかった。

「私もだよギガ。ありがとう」

彼は無言で封印を解く。最早発声する事も困難となっていた。

周囲が静寂に包まれる。聴覚まで失血によって失われた。

追撃モードに移行、クラッシュャーテール用脚部補助アンカー固定。

32門のゾイドコア砲の発射態勢をとったギガが、最期の雄叫びを上げた。

背鰭が、球体の光を圧倒して眩しく輝く。プロトゴジユラスギガの命の炎、そしてリチャード・ジー・キャムフォードの命の炎を宿して。

「さようなら、ルイーズ。愛しているよ」

プロトゴジユラスギガの全身が神々しい輝きに包まれた。背鰭から放たれた光の矢が球体に突き刺さる。ゾイドコアの発する膨大なエネルギーが一齐に解放され、ギガの背鰭を通して打ち込まれたのだ。エナジーチャージャーの周囲を覆っていた燐光が消し飛んだ。

中心で稼働していた装置が露出し、激しい爆発を起こしたが、爆炎は中心に向かって収縮し、やがて黒い点となって消滅した。特異点を中心とした爆縮、一種の重力崩壊が発生し、ロブ基地は何事も無かったかのように静寂に包まれた。残されたのは、破壊された基地と摺座したクリムゾンホーンの残骸、そして迫撃モードに変形したまま停止した、プロトゴジユラスギガの機体だった。

「リチャード、答えて、リチャード！ リチャード！」

無線に応答はない。エレナは息を呑んだ。ギガが石化していく。やがて脚部が崩れ落ち、頭部コクピットごと地表に落下した。

我を忘れて駆け寄る。コクピットは血の海だった。

「リチャード、リチャード！」

揺り動かしても、叫んでも、彼が微笑むことは無かった。

既に鼓動は事切れ、左腕義手のコアの振動が僅かな作動音を奏でるだけだった。

悲しくて、苦しくて、寂しくて、悔しくて。

エレナは涙を流すこともできなかつた。

46 (2080年〜2096年)

ヴァーノンは両方の足を足首から失い、車椅子に固定されたまま睨みつけていた。治療の途中、何度も自殺未遂を繰り返したため、両手は拘束具に繋がれた跡が残っている。予想された事ではあったが、その男に自ら犯した行為を償う意思など持ち合わせてはいなかった。意識が有る時は勿論のこと、鎮静剤を投与され、前後不覚の昏睡状態にある時でさえ叫んだ。「俺を殺せ」と。

法廷に現れたその男の姿など、二度と見たくもなかった。父を殺し、旧友を陥れ、その上最愛の夫まで奪った。八つ裂きにしても飽き足らないほど憎い存在であった。

「エウロペ住人、ヴァーノン・ワンギユルに関する査問を開始する」

状況は複雑であった。ガイロス帝国との講和条約は結ばれていない為、名目上共和国とは戦争状態である。しかし、リーバンテ島上陸作戦以降戦端は開かれず、事実上の休戦状態にある。加えて、退役軍人であるヴァーノンは一般人扱いとされ、行動を起こしたクリムゾンホーン部隊も在郷の盗賊と認定されていた。次期統一大統領候補として重要な地位にあたりリチャードではあったが、微妙なバランスを必要とする国際関係と、失脚を望んでいた対立候補並びにその支持勢力により彼の死は事故死扱いとされ、公式にもその詳細は語られることはなかった。一方、ヴァーノンを含め捕えられた襲撃部隊の生き残りの兵士（便宜上は盗賊）に対する査問も行われた。

ヴァーノンを除いた数人の生き残り兵全員は、事実上その男の謀略に乗せられたことは明白で、首謀者がヴァーノンであることもまた歴然としていた。首謀者である彼と、被害者である軍、そしてエレナが、度重なる査問の末、ついにその男との対面となったのだ。

「共和国とは気楽な国だな。俺みたいな人間を生かしておいて何が楽しい。食い物の無駄だ。さっさと殺せ」

厳粛を重んじる法廷でも、彼の言動は変わることはなかった。自由の利かない車椅子の上、四方を警備兵に取り囲まれたまま、薄ら笑いと暴言を繰り返し吐き続けている。

こんな男の為に、父や友人や夫は失われたのか。それだけではない。本人の語るところにより、エントランス湾への隕石落下、加えて亡命ゼネバス兵への多数の弾圧事件も繰り返していたことも告白している。

法廷から出されるであろう判決は、既に予測済みであった。命を以てその罪を償うこと。誰もが予想する結果である。その最後の査問に対し、証人として呼ばれたのが、エレナであったのだ。

彼女を証人席で見た時、その男はただせせら笑うだけだった。

エレナの中で憎しみが込み上げる。今すぐ車椅子の隣に駆け寄って、思い切り殴りつけたかった。彼女の膝の上には、夫の形見となった義手の入ったケースが握られていた。

査問は粛々と進み、ヴァーノンに対する罪状が述べられていく。どれ一つとつても、言い訳できないほどの罪であった。だが既に死を覚悟してしまった男には、何の感慨も起こさないうまく、無言のまま薄笑いを浮かべていた。

無数の軍関係者の証言が進み、ようやくエレナのもとに発言が回ってきた。

「証人ルイーズ・キャムフォードさん。証言をお願いします」

指名され、証言台に進む。掌には怒りの汗が滲み、事項をまとめた用紙も皺が寄っていた。相変わらずせせら笑うヴァーノンを横目に、エレナは深く息を吸った後、法廷に集まった傍聴人を前に語りだした。

「エウロペ住人、ヴァーノン・ワングユルの処刑回避、及び救済を要求します」

一瞬の緊張。続いているのだよめき。法廷内が低い声の喧騒に覆われた。静粛を要求するブザーが響く。再び静まり返った法廷の中、エレナは顔をあげて続ける。

「感情的には、私はこの男を許しません。殺しても殺し足りないほど、この男を憎んでいます。」

でも、ボイスレコーダーに遺された夫の言葉を聞きました。このまま私が感情に任せて処刑を願えば、この男の命を合法的に奪うことは

可能でしょう。しかし、それで解決できたといえるのでしょうか。

ここにお集まりの皆様を確認したい。この男は自らの死を願っています。処刑をしてしまえば、みすみすこの男の要求を通してしまいます。それでは罪の償いになどなりません。法廷は復讐の場ではなく更生の場です」

一度言葉を切った彼女は、思わず下を向き唇を噛みしめた。

(リチャード、本当にこれでよかったの?)

法廷が再びざわつき始め、喧騒がピークを迎える前に、彼女は話を継いだ。

「被害者として要求します。この男の極刑を回避し、生きてその罪を償わせることを。まずは失われた両足を回復させ、その後然るべき更生施設に收容してもらいます。提案ですが、人は愛されることによつてのみ愛することを学びます。收容先はガニメデ郊外のキリンディ二宮を希望します」

ヴァーノンの表情に変化はない。そこにミスタージエンチエンがいることも知らないのだろう。また、多くの傍聴人たちも、キリンディ二宮が何を示すかも知らないため、査問は自然と冷めていく。

「ルイーズさん、証言は以上ですか」

彼女は再び顔を上げる。

「詳細は提出書類に記載しました。私がここで述べたいのは以上です」

そこまで言うと、エレナは証言台を後にした。背後にヴァーノンの視線を感じる。が、振り返る気にはならない。未だに悔しかった。本当に自分の決断が正しかったなど、到底思えなかった。ただ、絶対になりたくなかった。例えば法に則っていたとしても、その男と同じ行為、憎しみに駆られ命を奪う行為を。

結果として、ヴァーノンは処刑を免れたことだけが後にエレナに伝えられた。彼女の証言以外にも、処刑回避の理由は幾つか挙げられた。まず被告が正規の軍人であったなら、軍事法廷による死刑判決はゆるぎのないものであったが、軍籍を抹消されていたその男には適用外であった。そして生前州知事としてリチャードが謳っていた

一般法廷における死刑の見直し政策も、彼本人を殺害した犯人に適用された。

彼女の主張は認められたが、それはただ虚しさをかき立てるだけだった。彼女の心と生活に空いた大きな空隙は暫く彼女を苦しめ続けた。

リビングの隣、彼の部屋にはまだ多くの物が残されている。彼のお気に入りの椅子、彼の愛読書、彼の執務机、彼のコート、彼の……。もう一度ドアを開けば、いつもの笑顔をみせてくれるのではないか。少しだけ部屋を出て行っただけではないか。まるでそこに彼がいるかのように、部屋には暖かい陽射しが射し込んでいる。こんなに物は揃っているのに、その中心にあるべき人がいない。いないのだ。

その後のその男の処遇も詳細に記されていたが、目を通す気分になれず、彼女が知ることは無かった。

リチャードが心血を注いで推進してきたギガノトサウルスの機獣化プロジェクトは、彼の死とプロトゴジュラスギガの喪失により後退を余儀なくされた。その後マイケル・ハーマンによって素体となるゾイドが解析された結果、封印武装32門ゾイドコア砲を発射した場合、エネルギーの一部がコクピットに逆流し、パイロットの生命を脅かす危険性が指摘された。リチャードの直接の死因は銃撃による貫通銃創での失血死であったが、何れにしても32門ゾイドコア砲を発射した時点で助かる可能性は低かったのだ。彼の尊い犠牲のもとに、装甲板を含め機体の改良案が提示され、最終的に古代ゾイドチタニウム採用が提案される。

しかし、プロジェクトでは肝心のギガノトサウルス野生体の捕獲が停止していた。技術的な解析は進んでいても、野生体の棲息領域に関する資料をリチャードが充分に残しておかなかつたのだ。南エウロペに関する地理データの不足と、ギガノトサウルスの生態研究の不備も原因だが、彼ほどの人物が資料を残さなかつた杜撰さには疑問符が付けられた。

これは憶測だが、リチャードは、大量のギガノトサウルスが、戦闘ゾイドに改造されることを望まなかつたのではないだろうか。自分

と繋がることの出来る一匹のプロトゴジュラスギガを育てた時点で、彼の望みは達成されてしまっていたのではないか。遺品となったギガのデータはエレナに渡され、彼女の気持ちの整理が着かないままその手で長く眠りにつくこととなるが、20年近くもこの強力なゾイドをエレナが公表しなかった理由は、夫の遺志を汲み取った彼女の配慮ではなかったかとも推測される。

ギガノトサウルスプロジェクトの無期限延期。結果的にゴジュラスギガの配備は、2104年まで持ち越されることとなる。

先の年表に引き続き、リチャードの「事故死」以降の経過を纏める。

2080年 リチャード急逝。同年、共和国再統一を目前にして連邦議会が紛糾。再統一を辞退する州国が多数出たため実現できず10年後に持ち越しとなる。

2084年 ルイーズ・キャムフォード、夫の後を受けセシリア州国四代目知事就任。

2086年 連邦議会、2年後のヘリック共和国連邦再統一を再議決。

2088年 ヘリック共和国再統一。ルイーズ・キャムフォード大統領当選。

2092年 ルイーズ大統領再選（二期）。

2096年 ルイーズ大統領再選（三期）。多選を避けるため、就任演説で任期後の勇退を示唆。

リチャードの死は、共和国内にも様々な波紋を生んだ。統一間近と思われた共和国連邦は、エナジーチャージャーをはじめとするガイロス帝国側の不穏な動きに対し連邦議会が紛糾。参加を辞退する州国が多数出たため実現できず、再統一は10年後に持ち越し（実際は8年）となった。一見矛盾した反応ではあるが、分裂していた各州国は一時的であっても自治権を手放すことを過剰に恐れてしまったためである。

2060年以来、連邦制に移行して、各州国は地域の現状に合わせて内政の充実と武装の強化を図ってきた。地域によってガイロス帝

国の脅威は異なる。仮に再統一によつて各州軍も統合された場合、それまで各州国の重要拠点防衛にあたつてきた貴重な戦闘ゾイドを首都防衛などの名目で引き抜かれ、弱体化することを危惧した結果であった。

セシリア州国では、知事であるリチャードの急逝を受けて副知事が代行となり第三代知事に就任していた。副知事であったその人物は、決して凡庸な人物ではなかったが、徐々に圧力を増すガイロス帝国の脅威と、偉大であるがゆえに越え難い前知事のカリスマ性に及ぶ所ではなく、セシリア州国の政治は滞つて行つた。

民衆の要求は、次第に亡き前知事の補佐役、そして明眸皓齒で聡明な知事夫人であるエレナへの立候補へと傾いていく。彼女にとつて、世襲染みた弔い選挙などに立候補するのは躊躇われたが、夫の成し得なかつた夢、父の抱いた理想を叶えるため、そして最大の理由は夫を失つた寂しさを少しでも紛らわせるために、次期州知事選に臨むこととなる。

結果は、エレナが副知事であつた現職の候補者に大差をつけて当選。セシリア州国第四代知事として就任する。前章で述べた如く、彼女は経済復興と磁気嵐の安定化に伴うゾイドを利用した政策を実践し、セシリア州国のみならず周囲の州国にも支持層を増やしていく。

ところで、ヘリックが逝去した60年代から80年代にかけて、中央大陸各地では相変わらずムーロア一族の落胤を名乗る偽貴族が現れ続け、その度毎に消えていった。その経過の中でエレナ・ルイーザがゼネバス・ムーロアの娘であり、帝国出身者であることも何度となく語られた。幸いといえたのが、大衆が何度となく繰り返されるゼネバスの忘れ形見に関する情報に興味を失つていたことである。彼女はその出自をしつこく追及されることもなく、知事職を意欲的に遂行していった。果たしてゼネバスの後胤の噂が大衆から出された自然な風評であつたのか、それとも意図して彼女の出生を隠蔽するために出された風評だつたのかは不明である。

さて、先に示した年表の如く、共和国統一の論議が再燃した頃、彼女は夫と伯父ヘリックと、そして父ゼネバスの成し得なかつた中央大

陸の共生を目差し、大統領職への立候補をした。

彼女の真意を知る者は少ないが、関係者からの証言を纏めると、彼女はゼネバス帝国、ヘリック共和国、ガイロス帝国、及び都市国家群が乱立したエウロペ大陸や、滅びてしまった古代ゾイド人の国テュルクなどの各地域状況を理解し、尚且つゾイドとの共存策を模索出来る境遇に在る者は自分以外に無い事を鑑み、立候補に至ったと分析している。

多くの候補が乱立する中、帝国領住民と女性票からの幅広い支持を受けたルイーズ・キヤムフォードが新大統領として当選、共和国領再統一と同時に更なる国内復興に向けて動き出したのだった。

悲しい事実、いや、彼女にとっては喜ばしいといえるのだが、多くの一般大衆にとって為政者の職責を全うできる者は僅かである。ヘリック、ゼネバス、そしてリチャードの如く、生来備え持つ適性、いわゆるカリスマが、やはり彼女には受け継がれていた。年齢を重ねる毎に輝きを増す美しさも、彼女の政策を助けたのもまた事実である。無論、寸暇を惜しんで政務に励み、僅かな時間を見つけては民衆の間に入って彼らが何を要求しているのかを機敏に察知し、短期的視野と長期的視点を使い分け、時宜に合わせた有効な施策を行った。同時に暗殺の危険を回避するため、周囲には念入りに大統領親衛隊を配置し、身を守った。どこまで危険を冒し、どこまで身を引くのか、それはキシウムビタ城を脱出し、ギルベイダーに対峙し、惑星大異変を生き抜いた経験のある彼女にとって知らず知らずのうちに身に付いた処世術と言えよう。

なお、彼女が初の女性大統領となる統一大統領選挙の開票結果が届けられたのは、2087年末のことである。エレナはそのとき頂点に達した。中央大陸デルポイの元首、父ゼネバス、そして伯父ヘリックも志半ばで終わった国家の成立を成し遂げた。ルイーズ・エレナ・キヤムフォード大統領の名が、惑星Zi、ヘリック共和国の歴史に燦然と刻まれたのだ。

「お父さん、リチャード、これからが本当の始まりです」

第一期の大統領就任演説を終えた後、彼女はウルトラザウルスの

デツキで青空を見上げていた。
静かに雲が流れ、風が吹いていた。

シュテルマーは、左腕の激痛に顔を歪めた。手にしていた工具が床に落ちて甲高い音をたてると、格納庫に冷たく乾いた反響が広がって行った。上腕部を右手で押さえてみたものの、痛みは一向に治まる気配も無い。古傷はこの時期必ず疼き、恰も死という贖罪を忌避する彼を責めたてるかのように年々酷くなっている。

古傷の疼きによる苦悩以外に、彼の心に痞^{つか}えているものがあつた。海の向こう、華やかな輝きに包まれた再生と繁栄の極みの中にある国、ヘリック共和国の動向である。

その人の名を耳にしたのは数か月前。共和国の大統領候補に、初めて女性の名前が挙がつた。ルーズ・キラムフォードという、ありふれた名前の政治家で、地道な慈善活動と民衆からの支持を受け、次第に共和国内部で確固たる地位を築き始めていると知った。

惑星大異変による済^{なしくず}崩しの休戦から約40年が経過した。戦いの中に身を委ねてきた彼にとつては、戦火の途絶えた瞬間から、自らの価値を確認する方法も断たれたように、無為に時間を消耗するが如く生きるようになっていた。

ただ、それは彼が軍人以外の生き方の出来ない不器用な人間ということではない。シュテルマーは、冷徹であると同時に賢明でもあり、決して安易な逃避をしたわけではない。だが、大異変の最中^{さなか}、旧帝都ダークネスで発生した動乱に巻き込まれた現実が、彼の人生を狂わせ、意欲を全て奪い去ってしまったのだ。

過ぎてしまった過去を責めてみたところで何も変わらぬことは判っている。判っているが、拭い去る事の出来ない記憶が、その後の彼の行動全てに付き纏い心を傷つけた。

意に反してガイロス皇帝救出の功績を評価された彼は、第一線から退いた後は、後人を育成するための軍人養成機関の教官に収まり、日々の暮らしに事欠かず生きることだけは叶っていた。その過程で、一時「家族」と呼ばれるものを有したこともある。しかし、心の中の大きく欠落した空間は、「家族」と呼ばれた女性に大きな苦悩を与えて

しまった。

「あなたは立派な方です。でも、あなたには私への心がありません。あるのは未だにこびり付いている血の匂いと、別の女の面影です」

律義で慎ましく人格的にも優れた人物であった。その聡明さ故に、女性として、「妻」として認めてもらえなかった彼女には、シユテルマーとの生活は耐えがたい拷問の様な日々であったのだろう。彼女は彼の心の中に見え隠れする別の女性の存在を、同じ女性としての感覚で捉えてしまっていたのだ。

もし彼女が、自分の保身のみを考えるもつと我儘な女性であれば、あるいは契約に基づいた形式的な共同生活も送れていたかもしれない。悲劇は、彼女が彼を本気で愛していたことと、彼が心の中で、二つのこと——戦争と想い人——を捨て去ることができなかったからである。

間接的とはいえ、その想い人が突然彼の前に現れたのだった。

『ルイーズ・キヤムフォードは、ゼネバスの娘だった！』

誌面に扇動的な見出しが踊っていた。不鮮明なモノクロ写真に吸い寄せられた。面影があの日少女に重なる。年齢を重ねる事によって、少女の頃よりも更に美しくなったと思えた。

密かに想い焦がれ、降り注ぐ隕石の中で悲劇的な決別をした可憐で儂げな硝子細工のような少女は、彼の知らぬ間に着実に進むべき道を見つけ、その目標に突き進んでいた。同時に、彼女が生涯を共に歩んできた男性の存在も知ったのだ。

故リチャード・ジー・キヤムフォード。ヘリック共和国連邦セシリア州知事であり、ヘリックⅡ世亡き後に長く空席となっていた統一共和国大統領として立候補していた人物だった。

ヘリック共和国は、惑星大異変後の政治的混乱を收拾するため、一時中央大陸の広大な領土を分割し、各都市に自治権を与える連邦共和政をとっていた。大異変による磁気嵐の発生と、被害状況の地域格差、なにより編入されたばかりの旧帝国領の各都市は共和国首都からあまりに遠く、通信網も交通網も寸断された状況下では、各都市の自治に任せるしか手段はなかったのだ。もし、ガイロス帝国との戦乱が

継続していたならば、これは本土に侵略を受ける危険性の高い統治形態であったが、共和国同様に大異変により多大な被害を受けたガイロス帝国にも戦争継続の余力は無く、半ば分裂状態とも言える連邦制であったとしても、共和政の維持は可能であったのだ。

共和国首都に近いセシリア州国で執り行われたリチャードの葬儀には、多くの市民が弔問に参列し、彼が形だけの偽善的な政治家でなかったことを証明した。

選挙公示直前での急逝であったため、夫の死去に伴い、それまで妻として支え、その遺志を継いで立候補をした女性がルイーズ・キヤムフオードであった。

安易に身内の者を代替者として立候補させることには、共和政を標榜する識者の間では批判もあつた。感情に流された集票を期待するのは、政治家としての手腕とは別物であるからだ。

事実上、為政者としての實力は、夫であるリチャードよりもエレナが上回っていた。それまで決して政治の表舞台には立たず、夫の影となり、寄り添うように支えてきた彼女は、夫の州知事としての評価を着実に上げていた。夫の死去を契機に、一転して政治の表舞台に立つことになった彼女は、説得力のある具体的な政策を掲げ、その演説を聴いた人々を納得させると同時に魅了していった。迫力ある口調と気品ある容姿。伯父と父譲りの理性と感情に訴えるカリスマ性が発現していったのである。

彼女の基本政策は『普遍的責任の遂行』であった。彼女の講演記録に、以下のような言葉が残されている。

「善意だけでは不十分です。自らにも責任を課さなくてはなりません。もしあなたが自分は役に立たないなどと思えば、あなたの隣にいる人もやる気を無くし、大きなチャンスを失ってしまうでしょう」

種族・信条・性別を問わず、あらゆる相手に対して深く関わること。つまり共和国を形成する国民個人が自らの価値を認め、行動するといふことである。

形式的なものではなく実践を伴うもの。彼女は、政治とは与えられないものではなく与えるものということを市民に訴え、荒廃した中央大

陸の大地に復興の息吹を呼び起こした。

そしてゾイドを、復興の為に最大限に利用した。ある時は緊急電源としてゾイドコアを利用し、未整備の通信網には移動中継基地としてゴルドスを使い、磁気嵐の中でも比較的影響の少ない低空での飛行するダブルソーダーを使って空路を確保、そして退役したグランチュラなどの小型ゾイドを建設作業に投入し、インフラストラクチャー等の整備に当てさせた。

長い間、戦うことにゾイドの最大の価値を求めてきた人々にとって、これは大きな発想の転換であった。

トライアングルダラスを起源とする激しい磁気嵐は、多くの戦闘ゾイドを無力化した。発生時期や継続時間の読めない磁気嵐の状況下では、到底戦闘などできない。

しかし、出力を抑え、突然の磁気嵐発生にもあまり影響を受けない土木作業などへのゾイドの使用は可能であった。

「ゾイドが動かなくなったら休ませればいいのです。焦ってはいけません。ゆっくり、ゆっくりとね」

復興作業協力時の彼女の言葉である。少女時代、ゾイドの構造に精通していた彼女だからこそ発想に至った政策だろう。使用法は限定されたが、これほど便利な機械、いや、生き物はいない。自らが作業用ゾイドを操縦し、それが磁気嵐の為に停止しても、その都度にこやかに笑って磁気嵐の収まるのを待った。そしてその間、人々と復興後の将来について語り合った。彼女は進んで民衆の中に飛び込んでいったのだ。

人々はゾイドと共に復興への歩みを着実に続け、それがまた彼女への支持に繋がって行った。

どの様な場合でも難点を探し出し、批判を加えることのみ執着する輩は存在する。そんな輩が暴き出した衝撃的な事実が、前述の項目であったのだ。

記事のリードには彼女のミドルネームが「エレナ」であり、旧ゼネバス領に残されていた様々な資料からも、紛れもなく「ムーロア」の血を引く女性であることを、センサーシヨナルに書き立てていた。そ

れでも批判できたのは彼女の持つ血の縛りのみで、政策自体への核心を突いた反論は伴っていない。所詮書きたい記事を書いただけで、その背景には彼女への政治上の対抗勢力の影が見え隠れしていた。

彼女の失脚を画策した上で、この記事を掲載させたのが対抗勢力の意図であったとするならば、謀略は大失敗となった。

大異変以降、旧共和国領内に自由な経済活動を求めて移住した人々や、大陸西部地域特産の物品を扱う旧帝国系の法人企業も進出し、セシリア市を含めて中央大陸内各地には旧帝国系住民が混在していた。

特に、帝国では戦闘で多くの男性兵士を失っていたため、女性との人口比の不均衡が発生し、適齢期の女性が経済的に豊かな共和国領の男性との出会いを求めて数多く移住していた。

共和国の女性は、よく言えば独立自尊、悪く言えば我が強く、結婚に至るまでの様々な条件を満たすことが男性側に求められる。一方、帝国側の女性は保守的な国家体制下に育ったため、良妻賢母を旨としたある意味男性の理想的な女性像になっていた。

争いの火種となりやすい旧帝国民との軋轢は、共和国男性陣の擁護によつて雲散霧消し、両国（両地域）相互理解の懸け橋となった。大統領夫人ローザは、一連の経過を「男の偉大なる愚かさ」と称したといわれる。

ゼネバスの娘という情報は、それら旧帝国系住民からのエレナへの絶大な支持を集めることとなった。また、旧共和国の傷痍軍人であった故リチャードとの、野戦病院で出会い結ばれたロマンスは、特に女性票の支持をも集めていった。

そしてルイーズ・キヤムフォード候補は、敢えて自分の口から真相を語らず、そのミステリアスな出生の謎が更に関心と呼んだ。保守とも革新とも解釈できる新たな立候補者の登場は、普段の選挙でも投票所に足を運ばない無党派層大衆の支持さえも取り付けてしまった。

彼女の政治力と悪意を好転させる境遇。ルイーズ・エレナ・キヤムフォードを取り巻く全てが、彼女を為政者としての道へ導いていたのだった。

この件は前章から引き継いだ考察課題であるが、長い目で見た場

合、彼女の選択が正しかったかどうかは批判の分かれるところである。

もし、正式にゼネバスの娘であると表明すれば、ガイロス帝国は第二次大陸間戦争に旧ゼネバス兵を動員して戦うことが困難となり、戦局は大きく変わったに違いない。

但し、共和国政治家としての彼女が、共和国国民の前でゼネバスの娘であることを公表した場合、果たして国民は彼女を大統領として認め従ったであろうか。彼女の初めての立候補当時も、依然集票力に根強く影響を持つ退役軍人の圧力団体の一部が、彼女の当選を阻止しようとして活動した経緯がある。公然の秘密である彼女の出生の謎が、そのまま周知の事実になった時、共和国の人々はどのように考えたかは、今となつては判断できない。彼女がゼネバスの娘であることを誇りとしていたことは確かであるが、夫リチャードの為し得なかつた業績を引き継ぐために、それを認める危険を避けたのかもしれない。これもまた、歴史の可能性である。

ガイロス帝国領内で、可能な限り集めることの出来た資料を前にして、シユテルマーは胸を打たれていた。

エレナ姫は、これから共和国の姫様になられるのでしようか、と。所詮、自分の様な者の器に収まりきるような女性ではなかつたのだと思つた。ガイロス帝国に身をやつし、日々無為に人生を擦り減らすだけの事実上の敗残兵に、何が残されているというのだろうか。死んでいった仲間たちへの手前、自らの命を絶つことは、それを弔う義務を負っている以上出来はしない。左腕の痛みと、無数に刻まれた手の皺に、既に自分が忘れ去られた存在であることをまざまざと自覚していたのだつた。

その後もシユテルマーは、共和国側から配信される彼女に関する情報を収集しようとしたのだが、突如としてそれに関する情報が封鎖されてしまった。これは、旧ゼネバス兵動員に障害となる彼女の情報が、帝国領内に流布することを遮るため行われた、ギョクンター主導による情報操作の結果である。以降、帝国内で彼女に関する情報は、殆どが封鎖されてしまう。また、帝国内でルイーズの素性を突き止めようと不穏な動きをする旧ゼネバス系の勢力には、病床とは言え存命中

のガイロス皇帝の威光を背景に、ギウンターは摂政の地位を利用して肅清を行った。但し、闇雲に処刑したのではない。その肅清対象となった人物が、信頼に値するゼネバスの同志であれば、軍籍・戸籍を抹消の後、影の兵団編成の礎としていった。そんなギウンターが着目した人物がシュテルマーであつたのだ。

ルイズ・キラムフォードのヘリック統一共和国大統領就任が決定したという情報が帝国に伝わった翌日、その人物は唐突に彼の前に現れた。格納庫で一人、訓練用ゾイドを整備している時、軍帽を目深に被つた男が訪れてきたのだ。

「シュテルマーとは、貴君のことか」

軍帽からは、長い銀色の髪が伸びていた。シュテルマーは、軍帽の下に覗く緋色の瞳に見えながら、目の前の人物が只ならぬ威圧感を備えていることにも気付いていた。

警戒しながら無言で頷くと、彼は軍帽を脱ぎ、その顔を露わにした。顔の輪郭に、遙か昔に出会った人物との既視感が蘇つた。色白だが、威圧的な風貌。かつて皇帝と呼ばれた人物の面影だ。

「ギウンター・プロイツェンと申し上げる。貴君に我が直属の臣下として従うことを願いたい。これは命令ではない、貴君の意志に委ねられるべきことである」

離れていた時代が交叉した瞬間であつた。

反乱鎮圧の報せがギウンターの元に届いたのは、発生から僅か1時間後であった。内通者から情報を受け取っていたとはいえ、皇太子をも巻き込んだ青年将校の大規模な反乱であり、その発生の背景には根深い軍閥同士の対立も絡み、掃討には時間がかかるものと思われる。ところが、その軍閥の対立を逆手に取り、老獪な手段でたちまちの内に反乱を鎮圧したのは、彼が先ごろPK師団に編入したばかりのゼネバス古参兵、シユテルマーの功績であった。

任務を終え、彼の前に跪いたシユテルマーは、短く鎮圧成功の報告をした。

面識あるはずの、仮面を脱ぎ去った病床のガイロス皇帝からの労いの言葉にも、慇懃な姿勢で称賛を受け入れるのみである。

ギウンターは、彼の野望を成し遂げる上で、有能な人材を確保できたことに満足していた。惑星大異変以降、抜け殻のようになって軍の閑職で燻ってきたこの兵士の實力を見抜いたギウンターの見識が、如何に高いものかも窺われる。

時代は着実に彼の望むべき方向へと推移していた。肅清された皇太子の後を襲って奉じられたのは、生後1年に満たない皇太孫ルドルフであり、長きに亘りガイロス帝国の摂政職の血縁に連なってきた、名家プロイツェン家の嫡子がその職に就くのは過去の慣例からの自然な流れとされた。

ギウンターの摂政職就任は、プロイツェン家並びその他貴族層の歴史に於いて大きな意味を持っていた。

ここで、『ガイロス帝国』と称する場合、時代によって多少ニュアンスが異なることを確認しておきたい。また『暗黒大陸』という名称も、多少の使い分けが必要となっていることも確認したい。

まず、第一次大陸間戦争当時のヘリック共和国側から見て、ガイロス帝国は雪と氷に鎖された謎の大陸であったため『暗黒大陸』の呼称が使用され、ガイロス側でも、精強な印象のある『暗黒軍』という呼称を好んで使った。

デッドボーダーやヘルディガンナーなど初期に参戦したゾイドは漆黒の「暗黒ゾイド」と呼ばれたが、ことゾイドに関しては「暗黒」には二つの意味合いがあった。

一つは言うまでもなく、そのゾイドの色だが、二つ目の理由が、その武装にあった。デッドボーダーの重力砲は、引力に対を成す斥力、暗黒物質ダークマターを取り込み放出するという驚異的な古代ゾイド文明の技術を応用したものである。つまり暗黒物質を操るゾイドという意味合いがあったのだ。

その後大異変により惑星の環境が変化し、永久凍土が融け気候が温暖化し食料生産性が向上したこの大陸を「暗黒」と呼ぶには違和感が生じた。また、ニクスとテュルクに暗黒大陸が分断され、以前より豊かな国土となったニクスの住人には、未だ謎の残るテュルクこそが暗黒大陸であり、自ら「暗黒」大陸と呼ぶことを好まなくなっていた。

ゾイドに関しても、大異変以降ディオハリコンの産出量が激減し、純正のガイロス製ゾイドの生産が滞る一方、併呑したゼネバス帝国設計の機体生産が増えていった。共和国軍にとって見慣れたゼネバス系ゾイドは、もはや暗黒ゾイドとは呼べなくなっていた。

更には、西方大陸エウロペへの入植が両国共に行われ、そこに居住するガイロス系住民とヘリック系住民の住み分けも2060年当初は判然とせず広大な雑居地状態となり、北回歸線付近の明るい陽射しと温暖な気候帯に住む人々を「暗黒軍」と呼んでみたところで文字通り「場違い」であり、両国民の間から、次第にこの呼称は消えて行った。

大異変が一つの節目であれば、それに遡るもう一つの節目が、霸王ガイロスによる暗黒帝国統一前後での時代区分である。

混同しがちだが、ヘリックI世と対立し、和解した後に暗黒大陸に渡った、ゼネバスの外祖父に当たる戦士ガイロスと、霸王ガイロスとが同一人物であるとは認め難い。

根拠として、ヘリックI世の生誕が恐らく1900年前後。その彼と対立した戦士ガイロスは、ほぼ同年齢かそれ以上であるはずだ。

霸王ガイロスの没年は2097年と判明している。

もし二人が同一人物であるとしたならば、霸王ガイロスは享年20歳以上となる。いくら長寿のゾイド人とはいえ無理があることは明白だ。

霸王ガイロスの帝国は、戦士ガイロスの暗黒大陸移住以降、急激に勢力を伸ばし、たちまちの内に暗黒大陸を統一している。技術や戦略の面で、霸王ガイロスと戦士ガイロスとの間には、何らかの接触があったのだろう。そして恐らく霸王ガイロス（※接触以前に「ガイロス」の名前を使用していたかは不明）は、戦士ガイロスの称号を、暗黒大陸内で群雄割拠する部族国家を統一するために利用したものと思われる。これは霸王ガイロスが素顔を見せず、常に仮面をつけていた理由の一つだろう。

ところで、暗黒大陸が統一され、ガイロス帝国が成立する一方、没落していったのがプロイツェン家を含む貴族層であった。

平和とは言えないまでも、緩やかな結合の部族国家が点在していた暗黒大陸内では、世襲制に基づいた貴族の存在があった。

ところが戦士ガイロスの移住により呼び込まれた実力主義は、血縁に頼る貴族層を凋落させた。変わって台頭してきたのが、シユバルツ家を代表とする軍閥勢力である。これは丁度、地球の中世における社会構造の変化に類似している。

霸王ガイロスは、多くの軍閥を従え、対立する部族を次々と討伐、併呑していった。その中には、ジェンチェン・パルサンポ達の属する古代ゾイド人の一群も存在した。

形式的な貴族の位階など、霸王ガイロスの前では意味もなく、暗黒帝国統一以降は、名称が残るだけとなった。

プロイツェン家は代々摂政職に就いていたと言われるが、暗黒大陸を統一する以前のことであり、所詮一部族族長の補佐役、摂政とは名ばかりの形式的な官職に過ぎなかった。猜疑心の強い皇帝ガイロスは、統一後摂政職の設置を久しく認めなかった。大異変以降もその支配体制は変わらず、貴族層は没落の一途を辿っていた。

しかし、シユテルマーによって鎮圧された反乱は、ガイロス帝国内部に動揺を起こした。

没落寸前の貴族層は、今回のギユンターの摂政就任に歓喜した。衰えを見せ始めた老いた霸王ガイロスの威光を利用し、再び広大なニクスの大地に権力を及ぼすことできるかもしれない。未だ幼いルドルフにも、政務を司る力はない。よって事実上の最高権力者として、ギユンターは君臨したのだ。

軍閥勢力への対抗上、貴族層は挙ってギユンターを支援し、形ばかりに召集される帝国議会の席上で、全面的な摂政への政権委託を宣言した。

ここで、摂政と軍閥との政争に突入するかと思われた時、後の西方大陸戦争突入直前とは比較できないものの、ギユンターは大幅な軍事予算の増額を承認し、ゼネバス系ゾイドを中心とした戦闘ゾイドの再生産を開始させる。それまでは反乱の発生を恐れ、戦闘ゾイドの生産を最低限に抑えていた霸王ガイロスの政策からの転換である。

名目上はヘリック共和国への脅威から自国を守るため、統一共和国大統領ルイズ・キヤムフォードに関する情報を操作し、あたかも直近に侵略を開始するが如く喧伝し、作動可能な中型ゾイドの生産と訓練を強化していく。予算が増額され、地位も向上した軍閥達は、貴族層同様に摂政の政策を歓迎した。

軍事予算の増額は、関係する軍需産業を中心に、軍服を作る縫製工場、レーションを作る食品工業、兵舎を増築する建設業など様々な分野での景気拡大を促し、刹那的ではあるにせよ、帝国臣民生活の向上に貢献した。ガイロス皇帝が軍備の拡大を抑制したのは、反乱への警戒ばかりではなく、資源と市場の限界があるニクスに於いて、急激な軍需産業の拡大は同時に急激な恐慌をもたらすことも配慮した上でのことだった。ところがギユンターは、目先の豊かさを国民の前には下げることと絶大な支持を取り付け、政権運営を安定化させた。

ヴァルハラ宮前の広場で行われる軍事パレードは年々華やかさと物々しさを増大させ、帝国臣民にとっても、戦争は備えるべきから起こすべきものへと思想に変化していった。よもや、それがガイロス帝国とヘリック共和国の共倒れを狙う、ギユンターの陰謀とも知らずに。

国内体制の安定を図る一方で、ギユンターは、常に海の向こう側の共和国の動きに注目していた。

ギユンターは、前年に共和国新大統領に就任したルイーズ・キヤムフォードが、かつて旧首都ダークネスにて行われたゼネバス皇帝崩御の葬列で出会ったあの女性であること、そして自分の異母姉であることを最期まで知らなかったとされている。

だが、情報収集能力に長けた彼ほどの謀略家が、果たしてルイーズⅡエレナという事実を本当に察知できなかったということが信じられるだろうか。

隠遁生活同然のシュテルマーでさえ、共和国側で流された『ルイーズ・キヤムフォードはゼネバスの娘だった!』という記事に接している。彼女がいくら血の縛りを否定も肯定もしなかったとはいえ、ギユンターがその真偽を確認しなかったとは信じ難い。共和国内部では、誰もが触れようとしなない公然の秘密として、ルイーズⅡエレナの事実を受け入れていた。彼女の政治が優秀であれば、血の縛りなど拘る必要はないと、共和国選挙民たちは考えていたからだ。

よってそれをギユンターが知らないとは到底思えない。敢えて言えば、ギユンターは知らないのではなく知ろうとしなかったのではないだろうか。

彼が、息子ヴォルフの補佐官ズイグナー・フオイアー大尉に対して、ルイーズに関する情報をヴォルフに徹底して隠蔽するよう指示したという記録が残されている。これこそが、ギユンターが彼女を姉と認識していた証拠ではないだろうか。

ルイーズがヘリック共和国の国家元首に選出されたという事実は、正式にゼネバス皇帝の継承権を持つギユンターにとって、焦燥感を抱かせたはずだ。

あの葬列を見送った日に、父の無念を晴らすと誓って以来幾星霜が過ぎ去り、彼は未だに十分に目的を達成していない。彼が望んだのは皇帝の位であり、ゼネバス帝国の再興であり、摂政という仮初の為政者ではなかった。

着実に復興を遂げ、ゼネバス帝国領を呑み込み巨大化するヘリック

共和国に対し、大陸が分断され、温暖化したとはいっても国力では大きく水を空けられているガイロス帝国である。ギウンターの野望達成への加速度を与えたのが、他ならぬルイーズの大統領就任だったとすれば、実に皮肉なことだろう。

その後もギウンターは、政治犯の逮捕や処刑、そして思想転向による影の師団への編入を継続し、PK師団の増強と、鉄（アイ）竜（ゼン）騎兵団（ドラグーン）の編成に尽力した。シュテルマー達旧ゼネバス出身者の活躍もあり、ガイロス帝国内での摂政ギウンター・プロイツェンの地位は盤石となっていく。

ここで素朴な疑問が湧く。

なぜギウンターは、初代ネオゼネバス帝国皇帝に即位しながら、直後に共和国上陸部隊30個師団とガイロス軍残存部隊30個師団を道連れに、ブラツデイデスザウラーとともに爆破消滅してしまったのか。それをゼネバス帝国復活のための犠牲であり禊であると解釈するのは易しい。しかし若い嫡子ヴォルフに全てを託すよりも、生き永らえてネオゼネバス帝国の地位を盤石にする事は考えなかったのだろうか。

更に踏み込んで、上記の如くルイーズⅡエレナが自分の姉であると知っていたとすれば、同じゼネバスの血を引く者として、彼女との共存——少なくとも共和国国民との共存ではなく——を望み、彼女の命だけでも救おうとしなかったのか。

これも飽くまで推測に過ぎないが、彼の一連の行動の背景には、彼自身の遺伝上の障害が関わっている可能性があるのではないだろうか。

彼の誕生に先立ち、マリーが二度の流産をした原因は、劣勢弱有害遺伝子によるものである。彼自身もアルビノという特徴を負ってこの世に生を受けている。それぞれの理由が、母マリーと父ゼネバスとの血の縛りによるものであることは、母の残した手紙から彼自身も秘密を知っていたはずだ。

彼にはアルビノとは別の、流産した二人の兄弟（或いは姉妹）同様の障害が潜在的に存在し、成長するに従って彼自身の身体を蝕んでい

たのではないか。

彼の冷酷な気質は、彼自身に残された時間が日一日と削られていく中で形成されたものとも解釈できる。とすれば、自らの命と引き換えに、若年の嫡子ヴォルフに後を託した理由にもなりうるだろう。血の縛りに拘った結果が、ヘリツクとゼネバスの対立を生み、ギウンター自身とエレナとの対立を生んだ。そしてまた、ガイロスの血を引くルドルフが健在な限り、再び血縁を巡っての対立が起こるかもしれない。

世襲に拘る血縁の為政者全てを、根刮ぎ巻き添えにして散つてしまえば、この星の呪われた歴史も断ち切れると考えたのではないか。

但し、この考察では、ギウンターの継嗣であるヴォルフの存在が矛盾してくる。

無論、ギウンターとて人の子であり、自分の息子可愛さに初期の目的を忘れ、自分の斃れた後を任せたと考えるのは自然である。

ところで、果たしてヴォルフは本当にギウンターの息子なのであるうか。

現在ガイロス側のどの資料を探しても、ヴォルフの母親の特定ができない。何より、ヴォルフはギウンターに“似ていない”のだ。

アルビノという形質を持つギウンターと、通常値のメラニン色素を持つヴォルフの容姿があまり似ていないことは別として、即位後公開されたヴォルフの肖像も客観的に見てギウンターと似ているとは言い難い。

勿論、母より受け継いだ形質が色濃く反映された結果と考えられなくもない。だが、ギウンターが最期まで懸念していたこと、ヴォルフの中にある優しさは、全くギウンターの血を引き継いでいないとすれば、似ていないのは当然であろう。

もしギウンターが弱遺伝子を有していたとすれば、その血を受け継がせることは自分と同じく長くは生きられない子女を残すことにも繋がってしまう。彼は全くムーロアの血を引かないヴォルフという養子を迎え、自分自身とエレナ、そしてルドルフを葬ることによって、血の縛りを断ち切り、新しい世代でのネオゼネバス帝国復興を図った

のではないだろうか。

付記として、ヘリツクⅡ世の息子は早々に為政者の道を歩むことを避けていた。それ故にギュンターは彼を巻き込む必要性は低いと判断し、対象外に置いたとも考えられる。

真相究明のための残された可能性は、ヴォルフ・ムーロアが自身の遺伝子の調査結果を公表することだが、その調査が実施され、なおかつ公表される可能性も限りなく低い。

全ての真相は、ヴァルハラ爆発と共に灰燼に帰している。今となつては、確認の方法も無い。

(2099—2101)

49 (2099年)

何人もの子どもたちが、ローザを囲んで笑っている。思わず踊り出したくなる軽快で単純なメロディもあれば、ゆったりと郷愁を誘う穏やかな曲も流れてくる。原色で彩られた鮮やかな絵画や工作物が壁一面に掲示され、中にはゴジュラスやウルトラザウルスを描いたと思われるものも多い。

子どもたちの笑顔はどこまでも明るく純粹だ。甲高く嬌声を上げる子もいるが、いまのエレナにとっては最高の励みであった。

「あ、大統領」

年長の男の子が、指を差してエレナを見る。

「ティヤール君、人を指さしちやだめよ」

男の子は気にもせずにエレナを見つめ、彼女の元に近づいてくる。途中、車輪がカーペットの上に落ちた積み木に邪魔され進めなくなった。すると一番近くにいた女の子が無言で積み木を取り除く。

「ありがとう」

車椅子の男の子は大きな声でお礼をしたが、女の子は無言のまま微笑むだけであった。

「みんな、相変わらず元気ですね」

「本当に。でも、だからこそ油断はできないの」

言葉とは裏腹に、ローザの笑顔は子どもたちに負けない。どこにもでもあるような保育施設だ。敢えて違いを挙げれば、そこが身体機能や知的能力に障害を持つ子どもたちの集まる児童養護施設であるという点だけだった。

ヘリックが永逝した後、ローザは残された長い余生を未亡人という位置づけで満足するような女性ではなかった。かつて親衛隊に所属し、ゾイドの操縦から格闘技に至る技能を習得していたにも関わらず、彼女が選んだのは意外にも知的障害児に関わる施設を運営することであった。

ガイロス皇帝が最初に授かった嬰兒を見捨てたように、戦時の特異性は障害を持つ人々に優しくはなく、それはヘリック共和国内に於いても程度の差こそあれ変わりはなかった。

リチャードのような熟練した兵士救済の手段としては、義手や義足、精神衛生上の治療措置など手厚い看護は与えられたが、成育後にも国家に貢献する可能性の低い、特に知的な障害を有する児童には共和国政府は十分な援助を施すこともなく、飽くまで家庭の問題として黙視してきた。

ローザの考えは違っていた。夫の死後、ヘリックシティの議場で立場を越えて訴えた。

「優しさとは、強い人に与えるのではなく、弱い人と共有するものです」

反対意見も多数見受けられ、彼女の提案は否決寸前であったが、ヘリックの残した資産と生前親交のあった人脈を駆使し、漸く承認の議決を獲得した。

ヘリックの生前よりも、むしろ彼女の活躍は精彩を放っていた。連邦共和国内に次々と養護施設を創設し、それまで各家庭の奥に隠され健全者達からの目に触れることを避けてきた児童達を次々と受け入れ、その教育に全力を尽くしていく。当初、周囲の先入観による揶揄と、彼女の元大統領夫人という立場からの無用な疑念のため運営に齟齬が生じる場面も多々あったが、粘り強い説得と、彼女の何事にも負けない努力が理解を生み、着実に施設の運営は軌道に乗っていた。

「弱者を見捨てることは自分を見捨てることです。なぜならいつ自分が弱者の立場になるかわからないのだから。そして彼らは私たちに多くの貴重なものを学ばせてくれます。弱い者への優しさを知れば、他の誰に対しても優しくなれるのだから」

彼女はまるで慈母のように全てを包み込んで、児童の救済を訴え続けていた。2099年の時点では、既にローザは名誉職に退いても良い年齢であったが、彼女は子どもたちの中に飛び込んでいき、一緒に遊ぶのが常であった。

「ぼく、デスザウラー、さいきょう」

「ゴルドスがやられて泣いちゃったわ」

視線が子どもと同じだ。そして輝いている。

「今度はケンタウロスで勝負よ」

「ずるい！ かいぞうゾイド、いはん」

エレナより年上のはずなのに、エレナにはローザが自分より若々しく見えた。

「ルリーズもいらっしやいよ。遊びましょう」

喃語しか発声できないが、明るく微笑む女の子。平衡感覚に障害を持つため、覚束ない足取りで近寄り袖に縋り付く男の子。管の着いた機械を背負ったまま、緩慢に歩く女の子。瞳は虚ろで視線が定まらないが、どこまでも明るく笑う男の子。

互いの障害を補い、助け合って遊んでいる。玩具は均等に配分され、唾液が口元から流れている子には別の子どもが拭いてあげている。会話のできない子にはハイタッチをしてメッセージを送り、トイレに行けない子を車椅子の別の子が手をとって連れていく。

「あぶないよ」

見れば、かなり身長も伸びた男の子が盛んにその場で垂直に跳び上がっている。トランス状態に陥っているのか、嬉しいとも苛立たしいとも判らず、ただ無為に垂直に跳躍を繰り返す。周囲には小さな子もいれば、足元には踏めば必ず足を取られて転んでしまう積み木も転がっている。

ローザが手を差し伸べる前に、明らかに年下と思える視点の定まらない女の子が、跳躍を繰り返す男の子の手を握って窘（たしな）める。

「だいじょうぶ。みんないっしょ」

視線を女の子に向けた男の子は更に二回ほど跳んだ後、輝く様な笑顔を浮かべてカーペットに座り込んで床のおもちやで遊び始めた。

障害の垣根など存在しない。みんな同じ星に住む友たちとして尊重し合っている。なんて素敵なお景だろう。

エレナは足元にあった素朴なゾイドのおもちやを拾い上げた。思

い出深いゾイドだ。あの日の出来事が蘇る。

「よおし、このガンブラスターで遊ぶわよ。」

どこからでもかかってこい！ でもなるべく正面から」

子どもたちが笑った。エレナが遊びの輪に入ると、すぐに歓声に包まれた。

夕方、帰宅を促す唄が流れるまで、彼女は子どもたちと遊び続けた。

※

くたくたになり応接間のソファーにもたれ掛りながらも、エレナは心地よい疲労感を味わっていた。

「本当は、この様な事でローザさんに御迷惑はお掛けしたくはなかった。ただ、どうしても自分を納得させることができないのです。誰かに話を聞いて欲しかった」

ローザにも、エレナが何の目的で自分を訪ねたのか予想はついていない。

「わかっていますよ。大統領職の激務と心労は」

エレナとは対照的に、終日子どもたちと遊び通し、カーペットの上と一緒に駆け回っていたにも係わらず、ローザは背筋を伸ばし、優雅で気品ある姿勢を崩してはいない。

(さすが元親衛隊。鍛え方が違うのね)

二の腕と首筋を軽く叩き、エレナも姿勢を正そうとしたが、すぐに断念した。その姿勢の如く、今の彼女は心身ともに疲れ切っていたのだ。

「議会が紛糾しているのね。やはり西方大陸へのガイロス軍進駐問題ですか」

「悩んでいます。この国が採るべき道を。」

ニクシー基地への大部隊駐屯ばかりを問題視していますが、そもそも原因を作ったのは共和国です。エウロペに眠る古代ゾイド文明の未知のテクノロジーを始め、独自の進化を遂げたゾイド野生体、地下に眠る大量の金属鉱脈、そして未開発の広大な大地を求め、我が国は、政府主導による大規模入植を行いました……」

ヘリック共和国連邦の各州国は、増大した人口と大異変の復興事業

完了に伴う新たな建設業の発展先を求めて流離う資本の投資先として、民意を建前にして西方大陸に先を争うように入植していた。

帝国軍ニクシー基地からも遠く、温暖で四季の変化に富む南エウロペ大陸に統治の既成事実を成立させるために、共和国はイセリナ山東方に早々とニューヘリックシティを建設し、多数のコロニーを周囲に衛星都市の如く据え付ける。北エウロペを中心としたそれまでの入植は、個人規模の穏やかなものであったが、ニューヘリックシティー建設は意表を突く形で行われたため、帝国の態度を一層硬化させていた。

「戦争は回避したい。でも、因果応報とも言えますが、こちらが戦争に应诉することを待ち望むかのようにガイロス帝国はこれ見よがしに軍を投入してくる。交渉の場を提示しても、帝国の摂政職に就いた人物はそれを黙殺し、相変わらずレットドラストの戦い以来正式な国交は断絶したままです。

正体の見えない存在は、徒（いたずら）に不安を煽ります。識者であれば自制も利きますが、大衆受けをする開戦論を振り翳（かざ）し、世論を無責任に誘導する輩（やから）も見受けられます。

民主主義とは、民意を背景に営まれるものと考えていますが、孤立した大衆が個々の要求だけを無為に主張しはじめたら、それはただの利己主義です。このような世情を、もし伯父様が御存命であれば、何と答えただろうかと思うのです」

ローザは静かに頷（うなず）きながら傾聴していた。エレナにしても、結論が出ないことを知っていた。

「私にもわからないわ、あの人だったらどう決断したか。きつとルーズと同じく悩み抜いたでしょう。でもあなたの公約通り、戦争を避けて経済の発展を重視し、国民が平和で豊かな生活を築き上げたことは評価できると思いますよ」

「ええ、確かに。ですが繁栄の裏側には大いなる矛盾が潜んでいました。資本は常に更なる投資先を必要とします。経済発展の目標値を達成すれば、今度は更に上の目標達成が求められる。あたかもそれは“無間地獄”と呼ばれる永遠に続く欲望を満たす連鎖を生み出しま

した」

「お金を大切にすることは否定しません。ですが、お金で買える幸せは
お金が無くなれば不幸になります。『経済発展によって大事なものを
無くしてしまった』と嘆く人がいますが、それは間違っています。

無くしてはいません。お金で買えない幸せが見えなくなっている
だけです。それに気付くことが、対立を防ぐ手掛かりとなるのではな
いでしょうか。

ルーズは、なぜ私がこの施設を始めようと考えたと思いますか」
素直に思っていたことを告げる。

「子どもが好きだから。そして心身に障害を持つ人達を助けてあげた
かったから、でしょうか」

ローザは静かに笑った。

「買いかぶり過ぎよ。私はそんなに立派な人間ではないわ。私は、私
が大好きで、私が幸せになりたかったから始めたことなのです」

その言葉を聞いた瞬間、エレナの脳裏に閃光が奔る。ガニメデの郊
外で出会った深山幽谷の人物の言葉と重なったのだ。ローザは続け
る。

「知ってしまったの。とても多くの子どもたちが、日の当たる場所に
出ることなく、一生を暗い部屋の中で過ごしているのを。」

悲しくなりました。その子も、抱え込んでいる家族も。その気持ち
は、夫に恵まれ、息子に恵まれ、不自由なく過ごしてきた私を苦しめ
ました。この気持ちを無くすためには、あの日、共和国首都から妹と
共に脱出するトンネルの中、まだ結ばれる前のあの人が救いの手を差
し出したように、私自身が動き出さなければどうしようもなくなつて
いたのです。

先ほどあなたが手にしたガンブラスターのおもちゃは、あなたとあ
なたの目の前の子ども達に遊んでもらうことで、存在する意味を与え
られました。箱の中に入っていたのでは存在しないのと同じです。
汚れても、傷ついても、きつと遊んでもらった方が幸せでしょう。

私は誰からも愛されずに生きることが望みません。誰一人例外な
く誰かを愛し、誰かに愛されるから生きられるのです。だからその夢

を叶えたかった。

あの子たちには将来職業に就いてもらいたい。社会に参加し、一方的に与えられるのではなく与える喜びも伝えたい。誰かの為になる事が自分の幸せに繋がることを。だから出来る限り、お金の価値とは別の尺度で互いを助け合う術を身に付けさせています。そして一応は形にすることが出来ました」

エレナは、子ども同士が助け合っていたことの意味を理解した。ローザが顔を上げてにっこりと微笑む。

「だから今も幸せです」

遠い昔に聞かされた話だ。その時彼女の隣には、結ばれる前の愛する人もいた。思わず涙腺が緩むのを覚え、慌てて眼鏡が曇った振りをして目尻を拭った。

微笑んだ後、ローザは少し硬い表情になる。視線を窓の外に向け星空を見上げた。

「誰かがやらなければならぬことを、自分ができるのは貴重です。大統領という立場上泥を被らなければならぬことも多い。それが戦争という最悪の行為であれば尚更でしょう。でも、いまあなたが身を引いたらどうなるでしょうか」

核心を突かれた気分であった。例えば血塗られた為政者という汚名を負ってでも、やはり自分には正面から立ち向かわなければならぬ責任がある。

知らぬ内に、また眼鏡が曇っていた。そして滲んだ涙と共に拭き取った。エレナの気持ちを察してか、ローザは話題を変える。

「夫との思い出話をしてもいいですか」

唐突ではあったが、ローザから伯父ヘリックの思い出を聞くのは初めてであった。小さく頷くと、ローザは少し視線を上に向け静かに語り出した。

「結ばれた頃の私は、いつもがむしやらに突き進む夫の背中に惹かれました。男は、常に成長し続けて欲しかったから。

いつまでも夢ばかり追い続けて、つまらない事に拘ったり、意地を張ったり、裏付けもないプライドを気にしたり。結局何歳になっても

子どものまま。言うことをきかないゴジユラスみたいに」

その女性は柔らかな微笑みを浮かべる。

「でも、そこが素敵だった。心の平安が訪れるのは、彼が永遠の眠りに着いてからで構わないと思っていたし、事実そうになりました」

彼女は何かを思い出したように俯き、静かに笑った。きつと素敵に思い出なのだろう。

「損な役回りかもしれない。自己犠牲という言葉が何度も過ったものでした。」

自分の人生を割いてまで、女が男の為に尽くすことは不条理だと思う。

でも、多かれ少なかれ、人は誰かに支えられ、そして支えながら生きていくもの。その中で、一番身近になる「他人」が愛したひとだと思えるのです。どちらかが犠牲になるのではなく、互いに支え合って生きて来たと考えればいい。

長い生活の間では、腹が立つことも沢山ありました。でも結局許してしまうのが、愛し合っていた証拠です——どうしても許せなければ、先程の言葉の様に考えれば気が楽になりました、「男はゴジユラスと同じ」って——そして先立たれた後も二人が共に歩んだ人生に悔いなく余生を過ごせることは最高の幸せです」

美しい女性だと思った。だがエレナは、自分もローザと同じぐらい美しいだろうと自負した。瞳の奥にはリチャードの笑顔が浮かんでいた。

「ところで博士は何と」

「相変わらずです。政治に関しては、もう僕の口出しできるものではないよ」と言っただけで。ただこんなことも言っていましたね。

「超巨大なキャノン砲を、ウルトラザウルスに装備して敵の目の前に突きつければ充分抑止力になるんじゃないか。威力だけを見せなければいいし、長持ちさせなければいいんだろう。なんなら基本設計は任せてくれ」と。

面白そうなることになるとすぐに乗り気になって。キャロルも呆れていましたわ」

「昔から変わらないのね、博士は」

互いの心の絆が見えるかの如く、二人は笑った。

「今日は久しぶりに楽しかった。明日からの活力を得ました」

「議場に戻るのですね。くれぐれも身体を壊さないように。あなたはあなただけのものではないのですから」

「はい、ありがとうございます」

母のような、姉のような友人の言葉だった。

「がんばってね、ルーズ」

とても素敵な笑顔だった。

50 (2099年)

西方大陸戦争が勃発した時点で、彼女は政治家として敗北していた。

世代が変わり、かつての戦争の惨禍を記憶する者が減り、国内の復興が節目を迎え、資本が新たな投資場所を模索し始めた時点で、両国の視線が西の大地に向けられるのは自然な流れであった。

まずガイロス帝国にとっては、即位したての幼帝ルドルフの支配体制を盤石にするために、これは起こさざるを得なかった戦争である。後のプロイツェンの反乱により、この開戦が単純に摂政の野望から生み出されたものと解釈されがちだが、90個師団もの大部隊を編成し派遣できたのは、彼の思惑に同調する帝国内の軍閥の存在があったからこそである。

ガイロス帝国建国以来、既得権力を保持し続けてきた支配層にとって、共和制思想ほど危険なものはない。惑星大異変以降の40年の空白期間には、少なからず共和国からの思想が帝国内にも流入していた。マルガリータ暖流の届かない雪と氷に鎖されていた北の暗黒の大地にも、大異変による温暖化した気候の変化に伴って、民衆の間にも思想の変化が訪れていた。その萌芽を早めに摘み取る為にも、戦争の開始は必要なものであったのだ。秘密警察組織としてのプロイツェンナイツの設立容認も、当初の任務は国内に燻る共和制思想家を取り締まるための小規模なものでしかなかった。国内の反動思想の趨勢を利用し、自らの権力強化を成し遂げたギユンターの政治力は、間違いなく巧妙であった。

一方の共和国にとって、デルダロス海を挟んだ温暖な気候の西方大陸エウロペは、魅力的な資本の投下先として映っていた。惑星大異変は、両国に幾つかの対称的な事象を齎^{もたら}していた。それらは概ね^{おおむ}、中央大陸に存在するヘリック共和国にとって不利な結果を伴っていた。具体的には以下のようなものである。

① 破砕した第三衛星Deと巨大彗星ソーンの破片の落下が赤道付近に集中したため、低緯度域に位置する中央大陸デルポイには大き

な被害を及ぼした。

一方高緯度域に位置する暗黒大陸ニクスには、プレートとの破断による大陸分断や、アンダー海沿岸地域での津波被害などあったものの、隕石落下による直接被害は共和国軍に比べて少なかった。

② トライアングルダラスの磁気異常は増大し、中央大陸では大型ゾイドはおろか、中型でさえ作動もままならない状況が長く続いた。

ところが北磁極に近い暗黒大陸では、トライアングルダラスの磁気をゾイド星の地磁気が抑えたため、中央大陸よりは影響が少なかった。但し、もともと人口の少ないガイロス帝国では、戦死による生産人口の減少と南方の低緯度地域での津波被害の影響は避けられず、異変直後は西方大陸への進出は困難であった。

③ 温暖で豊かな生産性を誇った中央大陸、特に旧共和国領の大陸の東側は、大異変の影響により荒廃し、隕石落下が終息して以降も成層圏に舞い上がった煤塵により日光が遮られ、農業生産も儘ならない状況が数年続いた。これが西方大陸移住の促進された理由である。

一方暗黒大陸では、地軸の移動に伴い永久凍土層が融けて肥沃な腐葉土層が現れ、新たな穀倉地帯を生み出した。そして温暖化に伴う氷河の融解と、大陸の分断によって生まれた新たな水路が海上交通網を円滑化させ、予想外の豊かさを暗黒大陸に齎した。

西方大陸戦争発生時点で、表面上ガイロス帝国とヘリック共和国の国力が拮抗して見えたのは、以上のように惑星大異変の影響が少なからず存在したことによる。しかし、その影響が完全終息し、共和国側の生産態勢が本格的に稼働し出すと、両国の勢力は逆転する。

以上に挙げた自然条件の他に、政治的な背景も加える必要がある。仮にギンターの野望が達成されずとも、帝国は必ず軍事行動を起こしたであろう事は、冒頭で述べた通りである。翻って共和国側では、軍備増強を避けていた、①③以外の理由がある。

④ 国内に、旧ゼネバス帝国民を抱え込んでいたこと。

共和制を標榜し、国内宥和を掲げる共和国政府にとって、軍備拡張よりも国政の安定を図る必要があった。隕石衝突という未曾有の天災が原因であっても、民衆の生活水準の維持ができなければ国政の安

定は危うい。それが最近併合されたばかりの帝国住民であれば尚更のことだ。戦闘ゾイドの生産に振り分けられる資産があれば、旧共和国領の住民を差し置いてでも、旧帝国地域住民への援助の充実を迫られた。もしここで援助が滞り、食糧不足などの事態が発生すれば、一部に旧態依然とした勢力が根付く帝国領で、大規模な暴動が発生することも限らない。

⑤ 彼女自身の出生に関する問題。

エレナが夫の後を引き継いで、政治の舞台に昇り明らかになったその名から、大衆は彼女の出自を問題視した。彼女の立候補時には、対立候補や右傾の共和国急進勢力たちが挙ってその生まれを指摘批判した。正面切つての公表はその度毎たびごとに避けてきたものの、彼女の出自の秘密は暗に多くの国民の知るところとなり、一部では激しい反対意見も発生した。

しかし、彼女が立候補した時期は、大異変から30年が経過し、旧帝国民にも平等な選挙権が与えられていた。共和国国民としての制度に取り込まれていく反面、未だ彼らの中には、嘗てかつの皇帝の面影をその娘に投影していた。皮肉なことに、彼女が憎んだ血の縛りへの旧帝国地域住民の支持と、そして冷静に彼女の政治力を評価する知識層の支持により、彼女は夫の成し得なかった大統領職への就任を果たしたのだ。

だがそれは、血塗られた一族に連なる行為を抑えることを彼女に意識させた。

仮に軍事力を増強すれば、後ろ指を指され「やはりあの父の娘だ」と言われることが、彼女にとって、そして彼女の父に対する思いにとつても、到底認められることではなかったのだ。関連して、最後に以下の理由が挙げられる。

⑥ 軍産複合体MICの政治活動の読み違い。

立候補の初期の時点から、軍事行為の不拡大（※縮小ではない）方針を表明していた彼女に対し、軍事関連企業では、早々に組織挙げての不支持宣言を出していた。この様なMICの動きに、当時の世論は一斉に企業側への批判に移り、民衆は関連企業への激しい不買運動な

どを展開した。惑星大異変の記憶と共に、かつての中央大陸戦争・第一次大陸間戦争の記憶が厳然として人々の心の中に残っていたため、企業内部でも離反が起こるなど、時期を読み違えたM I C側は国民の多くを敵に回してしまったのだ。

共和国首都陥落時の失踪により、平和を愛した悲劇の女性大統領という印象が強いが、彼女は決して非戦論者ではなかった。必要悪としての国家権力の暴力装置の存在は少なからず認めており、ウルトラザウルス・ザ・デストロイヤーの建造、派遣などを取ってみても、平和主義者とは到底認められないことは自明である。

大統領に就任した後に顕在化したガイロス帝国の軍事力増強への対抗として、段階的な軍事力強化とゾイドの再生産も考えた。だが支持を受けた反戦派の手前、それを行うことが躊躇われたのだ。国民の多くには、当面だつて暗黒軍の脅威が目に見えない以上、政策変更への理解を得られるには困難が伴う。M I C側との関係も、決して良好とは言えない事情も重なり、結果開戦への準備が遅れることとなったのだ。

M I C側が早めに彼女の政策方針を理解し、協力体制をとっていれば、或いは西方大陸戦争緒戦における共和国側の大敗は防ぐことができたかもしれない。それは彼女の出自に拘った故、共通理解を得ようとしなかったM I C側の失策である。

以上の様に、大異変以前にもまして人口も産業も拡大し、西方大陸を含め組織も領域も増大した共和国は、容易に回頭の出来ない巨艦の如く、その時宜に合わせた政策の変更を機敏に行えないほどに行政組織が肥大化していた。

また、ヘリツク共和国元首である大統領に、政治的な権力と軍事的な統帥権を同時に掌握させ続けたことは、外交など対外的に重要な大統領の活躍の場を狭めてしまった。

地球人類は数世紀をかけて大衆政治・衆偶政治に容易に転化しうる民主制というものを、多くの試行錯誤を繰り返しながら扱ってきた（※注：現在も繰り返している国家は多い。この物語が遠い未来の出来事であることを忘れてはならない）。そして世襲制から漸く脱却し

たばかりの中央大陸住民たちには、未だ民主制の孕む危険性を理解し
きることではできなかった。

封建的な中央集権国家であるガイロス帝国がいち早く復興したの
も、このような共和国の状況に鑑みても理解できる。

それでもエレナは政治の表舞台に立って、共和国国民の繁栄と安全
を守る義務を負った。政治家は政治を円滑に行って当然であり、失政
は忽ちの内に激しい批判の矢面に立たされる。だから大統領就任以
来、一度として気の休まることはなかった。

任期中、彼女は全力をあげて走り抜けてきた。それでも戦争を食い
止めることはできなかったのだ。そして西方大陸戦争、第一次全面会
戦は、三倍の兵力を擁する帝国軍の前に敗退した。

深夜の大統領官邸の執務室は、静寂に包まれていた。古ぼけた大時
計の、時を刻む音だけが響いている。

窓の外には、霞みがあった月が執務机の上に置かれた紙片を照らし
ている。そこに記された報せに、彼女は記憶の中の忌まわしい過去を
蘇らせた。

『オリンポス山は、デスザウラーのコア暴走により完全消滅』

少女の頃に見た大口径荷電粒子砲の奔流を思い浮かべる。しかし
爆発の規模からも、それがかつてのものと同種の機体ではなく、遙か
に強力で、破壊能力に特化されたものであることが容易に推測され
た。

「大統領、お疲れのようですが」

ふと気づくと、傍らには大統領秘書官のデキツエリンが青磁の
ティーカップを携えて立っていた。

彼女が入ってくるのに気が付かないなんて。確かに今の私は疲れ
ているのかもしれない。

軽く礼を言うと、カップを手にした。温められた琥珀色の液体を見
つめつつ、香りを楽しむ。

あの頃のことをふと思い出す。よく火傷しなかったものだ。それ
だけ若かったのだろう。今はデスザウラー復活の脅威に直面してい
ても、知らぬ間にこうして紅茶の香りを楽しむ余裕がある。白髪の混

じつた彼女の後ろ髪には、既に髪飾りは消えていた。

「この香りはセルンティーですね」

書類を机から動かし、カップの受け皿を置くスペースを確保する。「御明察です。エウロペ西方のセルン村で収穫された貴重品です。閣下は紅茶バリスタ並みですね」

「紅茶を昔から飲み慣れているだけですよ。それにデルポイ産のものより香りの深みがあるからすぐにわかります」

戦争さえ起きなければこの香りをいくらでも楽しめたのに、という言葉が脳裏を過ぎる。

しかしそれは些細なことだ。一時の寛ぎに浸ると、彼女は迷いを断ち切るように毅然として立ち上がった。

「戦況を確認します。軍の責任者を総司令部に招集してください」

灯りが落とされた司令部の中、共和国軍の配置図が示される。北エウロペ地域は、東端のロブ基地を除いて帝国軍を表す赤い表示で一杯だった。

「敵は現在ブロント平原のニクシー基地を拠点に北エウロペを東進、ヘリペデス湖を制圧後、東端のロブ基地に猛進中です」

「増援部隊の編成と現地到着予定はどうなっていますか」

「編成表と日程について、これより画面にて説明します」

退却した味方部隊の中、彼女は意識するともなく『独立第11機甲大隊』の文字を探していた。

画面が大きくスクロールして、北エウロペ地区から南エウロペ地区へと移動し、更にその最南部付近に、目標を示す光点が点滅する。共和国の敷いた防衛陣と、古代遺跡を示す記号が示される。主戦場から遠く離れた、その名を知る人も少ない遺跡である。

「分離した敵の小規模な部隊が、南エウロペのエルガイル海岸を目指して進んでいます。帝国の次の目標は、ガリル遺跡と推測されます」
「古代ゾイド文明のラビリンズですね。昔の友人に聞いた歴史遺跡と、こんなところで再会するとは思ってもみませんでした」

「御存知でしたか。一応補足説明をさせていただきます」

よろしく、と相槌を打ち説明を聞きながら、またも彼女は過去の記

憶に引き戻されていた。

あの人も話し好きでしたね。興味がある事を見つけると、聞きもしないのにいつまでもその話をしていた。

不謹慎だが、不意に思い出し俯いていた。

「閣下、御気分が優れないのですか」

「いいえ、大丈夫。気にしないで続けてください」

集中が途切れている。やはり疲れが蓄積しているのかもしれない。ただ、今のは決して不快な記憶ではなかった。

「限定的にオーガノイドシステムを組み込んだゾイドを先行させています」

聞きなれない用語に、彼女は僅かに首を傾げた。

オーガノイドシステム。古代ゾイド文明の遺跡から発掘された未解析の技術である。

元来、戦闘ゾイドの開発は、地球人類の移民船飛来から飛躍的に強化されてきた。武器の技術的な面では、飛来した地球人に敵うものではない。

ところが、失われた古代ゾイド文明とは、ゾイド自身の持つ能力を限界まで高めて利用するという、より生命の根源に踏み込む形での強化を行うものだった。外的な改造ではなく内的なもの。だが、その有り余るエネルギー利用法を持ちながら、古代ゾイド文明は滅び去ってしまった。

彼女は、この失われていたテクノロジーに触れることが、かつて大口径電粒子砲に恐怖した如く、新たに現れた二つ目のパンドラの箱であるように思えてならなかった。

それでも既に共和国側で実戦投入がなされ、その他にゾイド増産の為に利用されている。

「先のオリンポス山の事例を含め、敵の狙いはオーガノイドシステムの完成を目指していることと推察されます」

現在のゾイド開発の先端技術までは理解できないが、かつてゾイドを扱った経験がエレナとしては、この未知の古代技術に頼る事には不安があった。

「諜報部の入手した情報によると、敵も同システムを利用した新型ゾイドを戦線に投入しています。今後技術局との連携を図り、ゴジュラス等への応用も考えております」

危険性はないのだろうか。

むしろ別の形での、古代ゾイド文明の遺物を応用できないか。例えば装甲材などだ。無機物の有機的結合。例えばゴジュラスであれば、その金属生命体の根源を生かし、それまでにない斬新なゾイドを開発できないかと。

後に、オーガノイド戦争とも称される第二次大陸間戦争前期の古代ゾイド文明の遺物を巡る争奪戦の渦中に、彼女は巻き込まれていた。

ヘリック共和国大統領ルイーズ・エレナ・キヤムフォードは、その大統領職最後の任期末に、ガイロス帝国との開戦という最大の難題を突き付けられていた。

51 (2100年)

「キヤムフォード大統領閣下は、本気でそれを仰っているのですか」
そう言うと、マイケルは口を噤んだ。

予測されたことだった。ゾイドの開発を捨て、長きに亘り精巧な義手と義足、そしてその他の身体の欠損部分を補うための技術開発に携わって来た彼に対し、その願いが過去の古傷に触るような行為であることも知っていた。

だが、共和国大統領として、共和国軍最高司令官として最適な手段を探った結果が、かつての恩師に対する無礼であっても必要な選択であったのだ。

「先日の義手の修復と、息子の件と併せ、重ねて御迷惑を掛けるのは心苦しい。ですが、今の私は公人としてお願いしています。

この願いがどれほど先生に対する侮辱的行為であるかは判っておりません。ですが、この戦争を一刻も早く収めるためにも必要なものと、現在の私の立場から判断しました。無論、お断りされるのは自由です。ここは伯父ヘリックが築き上げた共和国、強制されてまで建造する義務はありません」

エレナは、大統領執務室に仄かに香る紅茶の残り香を感じながら、掛けた眼鏡のレンズ越しに、毅然としてマイケルを見つめていた。

「いくら彼が奇抜な発想をするとはいえ、1200mmのウルトラキャノンなどという化け物じみた巨砲を使って敵基地を制圧するなんて。増して、それを二機のゴジュラスでサポートして、反動を抑えるなど。確かに僕は、かつて父と共にデスザウラーの加重力システムの開発に取り組み、大口径荷電粒子砲の反動を抑える方法も研究しています。それに、生前のチェスター教授からも、技術者としての興味から非公式にウルトラザウルスの構造も学んでいる。君はそのことを知った上で、僕にこのプランを実行させようとしているのだね」

「はい」

既に、この瞬間の大統領執務室は、かつての恩師と教え子、憧れの男性と少女との関係ではなく、大統領と優秀な技術者という共にプロ

フエッショナルな立場での、いわば対等の関係の交渉の場となっていた。

「先生の技術力があれば完成可能なはずです。私が先生に依頼するのは、かつてのゼネバス帝国の技術者が、最後に残されたウルトラザウルス「リパブリック」を改修し、この戦争に区切りをつけるため、そして我儘かもしれませんが、私にとっても一つのけじめをつけるためです。この改装計画、お受け頂けませんか」

「即答しなければならぬですね」

エレナは黙って頷いた。

「仮に、僕が依頼を断ったらどうするつもりですか」

「他の技術者に依頼します。この装備は、我が軍の戦略上、是が非でも必要なものなのです。無論、マイケル・ハーマンに及ぶ完成度は望みませんが」

古時計の時を刻む音だけが響く。二人のだけの空間を、永い沈黙が支配した。

控えめにドアを叩く音がする。エレナが短く応える。

「失礼します」

執務室に、紅茶を淹れたポットを持ったデキチェリンが入室する。セルンティーの香しさが部屋に満ちた。

その香りに、硬化したマイケルの態度も幾分緩んだようだった。応接用のソファーに深く座り直し、デキチェリンからティーカップを受け取る。口元にカップを近づけ、まだ口にするには熱過ぎる事を確認し、一度テーブルに戻した。

「思い出すね。君はいつも慌ただしく飲んでいた」

琥珀色の液体を見つめながら、彼は静かに呟いた。

「恥ずかしいから止めてください」

既に老成の域に達しようとしている女性とは思えないほど、彼女は初々しくはにかんだ。

「……シユテルマー君は健在なのだろうか」

「そうですね。あんな事さえなければ、ここに一緒に座っていたかもしれないのに。無事であればいいのですが」

二人の間には、故郷で過ごした日々の記憶が蘇っていた。

「彼は今どこに」

マイケルは、卓上に飾られている幸せそうな家族の写る小さな写真に目をやった。

「独立第一機甲大隊は、現在北エウロペに展開中です。オーガノイドシステムという未解析の古代ゾイド文明の技術を搭載した、ガイロスの小型ゾイドに苦戦していると聞きます」

マイケルはふと遠い目をした。

「昔、オールドヴァイン君が研究していたのは知っている。でも僕には手を出すことは出来なかった。あれは、恐ろしい物だ。だから君にも、伝えることはしなかった」

ゾイドを愛した技術者故に、オーガノイドシステムを使用する事が容認できないのだろう。マイケルは続けた。

「ガイロス帝国がそのシステムを使って、父のデスザウラーを復活させようとしているのも知っている。それもより凶暴にして。」

あのシステムはコアを消耗させ、寿命を削り取るゾイドの生命を弄ぶようなものだ。

でもそれを倒すために、また別の手段と武器で戦うことが正しいとは、どうしても思えない」

青磁のカップを持つ彼の手が、小刻みに震えている。

「御無理はなさらないください。私が願うのは、ゾイドを理解しゾイドを愛している人に、最後のウルトラザウルスを託したいだけです」

「彼は何と言っているのですか」

「散々反対されましたよ。まだ実現できると決まっていな内から『そんなものを使うことは、ゾイド乗りの戦い方ではない』とか、『軍人としての誇りを汚すものだ』とか。久しぶりに会話が出来たと思ったら、相変わらずの口ぶりだ。どうしてこうなのでしょう」

普段の気丈な女性大統領とは違った、悩める母親の姿がそこにはあった。

「そんな彼が、完成したこの機体を使うと思えますか」

「ロブは頑固者だけれど愚か者ではありません。戦略的にも戦術的にも重要な価値を持つ完成後のこの機体を必ず使用するはずですよ。もしそれでも意地を張るようだったら、大統領として強権を発動して、息子をコクピットに縛り付けてみせます」

「言い出したら聞かないのは、親子ともども皇帝陛下譲りだね」
「お父さまとは関係ありませんわ」

如何にも不服そうに反発する。少女時代を思わせる仕種に、マイケルは思わず微笑んでいた。

「細君が言っていたよ。君は『エディプスコンプレックス』という言葉を知っているかい」

「古い心理学用語ですね。確か父親と息子がライバルで、母親に息子が憧れることでしょう。私たち親子は正反対の事例ですね」

マイケルは、漸く飲み頃になった紅茶を味わいながら、楽しそうに語り出した。

「気楽に聞いて欲しい。細君が言うには、ロブにとっての君は、憧れの母親であると同時に、踏み越えて行かねばならない父親でもあるというのだよ。つまりはオイディプスに於ける母イオカステと父ライオスのどちらの役割も担ってしまった。特にリチャード君が早世して以来、ライオスの役割が特に強くなってしまったとね。」

彼が君の元を飛び出したのも、君がいつまでも越えられない偉大な父親のようであったからと知っているのさ」

「ジューデューさんがそんなことを。今度会ったら、一言言わせてもらわなければね」

彼女は増々不服そうな表情になる。紅茶の湯気に、いつの間にか曇ってしまった眼鏡を外しレンズを拭き取る。彼女のカップは未だ注がれたままであった。

「お互いに、偉大な父を持つと苦勞するものだよ。結局僕も、デスザウラーを凌ぐゾイドは完成出来なかった」

マイケルは静かにカップを受け皿に置いた。

「思い出すね。彼が我が家に転がり込んできた日の事を」

ティーポットの中に、飲み頃になった紅茶がまだ残っていることに

気付き、耐熱ガラス製のポットをゆったりと揺らす。

「ロブが、リチャードの亡くなった本当の理由を知ってしまったので

す。
決して復讐をしてはいけない。憎しみの感情からは何も生まれな
い以上、人間を恨むことはしないで欲しい。この意味が理解できるよ
うになってから、あの子に伝えてくれ。

あの人が最期に残した言葉です。彼に伝えるには、まだ早かった」
マイケルは二杯目をカップに注ぐ。

「『ゼネバス軍の元技術士官であり、ゾイド設計技師、及び操縦者で
あったマイケル先生なら、僕の願いも叶えられるでしょう』。鬼気迫
る形相で玄関先に立っていた時には驚いた。すぐにわかったよ。君
が真相を話してしまったのだな、と」

カップに少し口をつけ、記憶の糸を手繰り寄せるかの如く、視線を
エレナから逸らした。

「リチャードの選択は間違っていないと、私でさえ今漸く思えるよう
になっていくくらいです。若いロブに納得しろと言われても、無理も
ありません」

彼女も机上の家族写真を手に取り、暫く凝視した。

「それからが大変だったよ。戸籍の変更と士官学校への入学手続き。
いきなりあんな大きな息子が出来たら、僕たちだって困惑する。で
も、彼の気持ちもわかるし、他ならぬ君からの頼みだ。

それに前から彼を気に入っていたジュディーが乗り気になってし
まったのも、厄介だったね」

「本当に感謝しています」

ゆっくりと頭を下げるエレナに目をやりながら、彼は二杯目の紅茶
を飲み干した。

「お受けしましょう」

マイケルが顔を上げた。

「僕にとっての最後のゾイドを。今度こそ、本当に父ドン・ホバートを
超える為。かつての王女エレナ様及びルイズ・キャムフォード大統
領閣下の為。ついでに、味わい深い紅茶を御馳走になったお礼に」

「ありがとうございます」

エレナは立ち上がり、再び深く頭を下げた。それに応えてマイケルも立ち上がる。互いに堅い握手を交わすと、彼は堪えていた気持ちを曝け出すかのように語り出した。

「今度発案者に会ったら伝えてください。」

非常識にも程があると。この期に及んで、これ以上大統領に妙な知識を与えないでくれと。少しは設計、建造する側的身になって欲しい。力学、材料工学、炸薬の改良に弾道計算。いくら計算上で優秀なシミュレーションが出て、誰でも容易に造れるものと造れないものがある。その上、技術者の能力を見透かして、大統領まで巻き込み外堀を埋めるようなやり方で建造を押し付けるのはフェアじゃないと。今度同じことをしたら、僕はキャロラインに頼んで君のコーヒートを熱湯にしてもらうぞ、とね」

半ば冗談、半ば本気で、マイケルは発案者個人に対して延々と不平を溢していた。

偉大な技術者は、最後に不平を漏らさなければ納得できないのかもしれない。

ウルトラザウルス・ザ・デストロイヤー建造の決定。

1200mmウルトラキャノン設計主任技術者、マイケル・ハーマン。

エウロペへの最強軍団派遣に続き、共和国軍の本格的反攻が開始された。

52 (2100年)

「大統領親衛隊？ そんなお飾りが何になります。今、兵を欲しているのは前線です。私などを守っている暇があったら今すぐエウロペに向かいなさい。そして、戦場で歯を食いしばって戦っているあなたの友を救うのです」

大統領政務記録に残されているこの言葉が、当時の戦況の全てを語っている。

最強軍団と称される共和国増援部隊20個師団が、この年の6月に中央大陸旧ゼネバス帝国領ユビト湾より西方大陸ロブ基地を目指して出撃した。並行して彼女は、共和国にただ一機残されていた大統領専用機、ウルトラザウルスに1200mmウルトラキャノンを装備させるための改装を開始させた。結果的に西方大陸戦争の勝利へ導いた決戦兵器となったが、当初その開発及び装備、並びに運用に関して、稀にしか一致しない軍・政府・世論が、足並みを揃えて反対意見を訴えていた。

反対の趣旨は、凡そ次のようなものである。

① 時代がかった大艦巨砲主義を、今更採用することの無意味さ。ただでさえ機動力の劣るウルトラザウルスに、本体の重量に匹敵する装備を施すのは、著しく移動速度を削ぐことであり、第二次大陸間戦争以降高速ゾイドが主力となっている流れに逆行する。

② ①に関わって、プテラスボマー、ストームソーダー、そして再生途上のサラマンダーなど空戦ゾイドの生産が軌道に乗れば、攻撃機の到達範囲はウルトラキャノンとは比較にならないほど広大となる。同装備を建造する予算があれば、オーガノイドシステムを応用した培養槽で多数の空戦ゾイドが生産できる。同時期に開発費を計上されたデストロイヤー兵団専用のデストロイドゴジュラス2機も、ウルトラザウルス再配備予算と加えると天文学的な数値に上っていた。

③ 常識ともいえるが、大砲には発射数が限られている。一つ目は装弾数の問題。二つ目は砲身の耐久性の問題である。ニクシー基地周辺の帝国軍を一瞬にして殲滅させたことから、その破壊力は実戦で

証明されているが、基地陥落と同時に砲は使用不可能となり、「ウルトラザウルス・ザ・キャリアー」として再改装され、再度多大な軍事予算が費やされたことも事実である。対価に見合った効率が得られるかは、実戦投入以前からも疑問符が付けられていた。

④ 最後に消極的な意見として、ヘリック共和国の象徴として残されていた貴重な最後のウルトラザウルスを派遣することが、銃後で戦況を見守る国民たちにどのような影響を及ぼすか、ということである。かつて共和国首都は第一次大陸間戦争時代に、ギルベイダーによる空襲で大きな被害を受けた。ただでさえ最強軍団を西方大陸に送り込み、後方での兵力が手薄になっている状態で、最後の首都防衛の要ともなる当時最強ゾイドを出撃させてしまうことに不安はないか。そして万が一、ウルトラザウルスが沈むようなことがあれば、国民の士気にも大きく影響するのではないか。マッドサンダー、キングゴジラスと、ウルトラザウルス以降も共和国では超巨大ゾイドの開発は行われたが、旗艦ゾイドとしてウルトラザウルスに匹敵するものではない。まさにヘリック共和国の象徴的なこのゾイドだけは、残しておきたいという心情からも出た意見である。

それぞれの反対意見に対し、彼女には大統領の立場としても、そして彼女自身の考え方としても、一部の意見については詳細に説得し、一部の意見については大統領権限を発動させて、ウルトラザウルスの戦線投入を承認させた。

以下の証言は、西方大陸戦争が終息し、第二次大陸間戦争が発生するまでの短期間に集められた彼女の書簡や側近に語った意見をまとめたもので、十分な信頼性があるわけではない事を予めお断りしておく。

①について↓彼女は、ウルトラザウルスの機動力を敢えて低下させることにより、ニクシー基地の暗黒軍撤退の猶予時間を敢えて与えたのではないかという証言がある。

そもそも西方大陸戦争が、ギンタールによる両軍の消耗戦を目的とした戦闘であったため、最初から帝国側には勝機がなかったことが判明しているが、彼女の中にも帝国軍西方大陸上陸部隊が殲滅されるの

は時間の問題との認識があったのではないか。彼女の失踪後、政務記録の片隅に「敵の命でも無闇に奪って良いわけがない」という走り書きが残されていた。

最低限の犠牲と、破壊の象徴としての巨砲を誇示することにより、帝国軍の戦意を喪失させるためにも、この装備と巨大ゾイドを派遣したのではないか、といわれている。

②について↓空戦ゾイドの攻撃力は認めているが、彼女の中には二つ気掛かりがあったらしい。一つはやはりオーガノイドシステムを利用し、コアの培養を行うことへの不信感である。共和国ゾイドの再生は、手厚い保護政策によって機体数を増やしたと表向きは言われているが、その実、帝国同様オーガノイドシステムを応用して培養されていた。但し、マッドサンダークラスの超大型ゾイドとなると、施設の関係で採用できなかったが。

そしてもう一つが、空戦ゾイドによって出撃する兵士を失うことである。どれ程被害が少なくとも、戦死者が出ないということは奇跡である。人道上的理由に加え、パイロットの養成は容易ではなく、その貴重な兵士を失うことは開発費に変えられないと判断したのではないだろうか（なお、誘導弾などの長距離ロケット兵器は、トライアングルダラスの磁気嵐により使用不可能であることも付け加えておく）。

③について↓以前から彼女の中に、共和国側で、敵の大口徑荷電粒子砲に匹敵する武器を開発するとすれば何か、という思いがあったらしい。

兵器開発は、ただ発想すればいいというわけではない。それを実現させるための技術と予算が必要である。予算は政治面で扱うとして、技術面で1200mmという化け物じみた巨砲を開発しようなどという夢想家は、到底軍の内部で認められるはずがなかった。

ところが、その巨砲の設計開発を成し遂げる程の技術者が存在したのだ。②にも関わってくるが、サポートとしてデストロイドゴジュラスを配備するという奇想天外な運用法を彼女に示唆した、前述に二人の人物がいたのである。

④について↓もし彼女がセイバリオンではなく、ウルトラザウルスで首都に立て籠もっていたとすれば、後のアイゼンドラグーンの侵攻も別の展開が予想されただろうか。だが、戦後に多くの軍事評論家達が彼女のウルトラザウルス派遣について下した評価は、決して間違ったものと判定していない。

アンダー海会戦時に、ウルトラザウルスはトライアングルダラスの磁気異常に巻き込まれ、制御不能となっている。侵攻してきたダークスパイナーのジャミングウェーブによる攻撃を受ければ、同様に敵の制御下に置かれ、共和国領内に更なる多大な破壊を齎した可能性もある。むしろ共和国内部に強力なゾイドが残っていないからこそ、破壊を免れたともいえる。我々は彼女が失踪してしまった結果を知っているがために、これが彼女自身の失策と考えてしまいが、ダークスパイナーの存在を予想できなかった段階で、既に結論は出ていたと言えよう。むしろギョクンターとその息子ヴォルフのゾイドの開発技術と運用法を賞賛すべきだろう。

その後、西方大陸戦争はニクシー基地の陥落によって終結。エウロペから一掃された帝国軍は、改造ホエルカイザー『モビーディック』による空襲や、量産型デスステインガーKFD『キラール・フロム・ザ・ダーク』などの攻撃を継続したが、戦局は変わることもなく、共和国軍の暗黒大陸第三次上陸部隊の発進となった。

この頃から彼女は、提示する和平案を悉く無視し、戦闘の継続だけを目的とするガイロス帝国の摂政ギョクンター・プロイツェンの行動に疑念を抱いていた。彼が優秀な謀略家であることは間違いない。でなければ、ガイロス帝国の軍閥統制などできない。ところがオリンポス山の件といい、デスステインガーの暴走といい、戦略に無駄が多すぎるのだ。

ニクシー基地突入時、最期まで抵抗したエレファンダーのパイロットが「ヴォルフ様のために」と叫んだという報告を受けた。それは戦死した彼らにとって、命に代えても守り抜きたかった人物の名前である。

しかし、未だに母の違う弟の存在を知らないエレナにとって、その

名が誰を示すかも知らず、よもや西方大陸に甥が駐留していたことなど予測もつかなかった。共和国諜報機関の情報網をも攪乱した、ギウンターの情報操作はまさに完璧であったと言えよう。

これは、歴史の経過を俯瞰した上で述べるため、彼女の評価を不当に下げたしまうかもしれないが、もし彼女が、公式に自分がゼネバスの娘と表明していたとしたら、あるいは戦況は大きく変化していたかもしれない。

旧ゼネバス兵を動員する理由として、ギウンターはその嫡子ヴォルフ・ムーロアを掲げていた。だが、血脈から言えばエレナの方がより皇帝ゼネバスに近い存在である。敵の国家元首が、失われた皇帝の娘と知れば、旧ゼネバス兵の戦意は大いに削がれただろう。

改装されたウルトラザウルス・ザ・キャリアーが、帝国軍より奪取したニクシー基地より出撃したという報告を受けた後も、彼女の中には底知れない胸騒ぎが燻っていた。

主力を吐き出してしまい、防衛部隊の手薄になった共和国首都。そしてギウンターの背後に横たわる野望。

彼女は、かつて惑星大異変の直前に感じたのと同じくらいの不安を感じていた。

急がなければならない。

机の中からマイクロディスクを取り出すと、彼女は執務室の隣の部屋に設けられた製図台の装置にデータを打ち込み始めていた。

あのひとが追い求め続けた幻の野生体。彼の思いに応えるためにも、機体に適合する設計図を完成させなければならぬ。

彼女が選んだのは、古代ゾイド文明の生み出した、オーガノイドシステムとは別のテクノロジーである。古代ゾイドチタニウム合金と呼ばれる装甲は、コアに負担を強いることなく、野生体本来の格闘能力や機動性を最大限に発揮する。

そして、この機体には、あの時放った命の輝きを最期の武器として装備させることにした。

あのひとと、あのゾイドへの最上級の畏敬を込めて。

間に合わないかもしれない。それでも彼女は信じていた。

嘗て父が自分に託したように、未来は必ず次の世代が引き継いでくれる。

今まで全力で駆け抜けてきた。だから、きっと受け継ぐ者は現れるだろうと。

「ロブ……」

ふとその名を呟いた時、彼女は大統領から、母親の顔へと変わっていた。

トリム高地、ビフロスト平原、ウルド湖戦線、ウイグリド平原。相次いで伝えられる戦況報告に、エレナは焦燥感を募らせていた。最前線で戦う息子から、敵の精鋭第一装甲師団長との秘密会談の実施を告げられた。その内容次第では、作戦の根本的な見直しを強いられることにもなりかねない。

戦況は各方面軍で重大な局面を迎えている。上辺で干戈を交えつつ、水面下では和平交渉を行う矛盾に心が痛む。一方、戦争が綺麗ごとでは終えられないことも事実だ。

閃光師団レイフォースが大陸の西端ユーミルで接触したという鉄竜騎兵団アイゼンドラグーンと名乗る謎の軍団の動向が全く掴めない。共和国諜報機関の総力を挙げて調査しているガイロス帝国の実質的指導者である摂政プロイツェンの思惑は、恰もブラックホールの中心に居座るが如く、謎に包まれたままだった。

「閣下、御承認をお願いします」

エウロペからニクスに変更された兵力配置図が戦況表示板に浮かび上がる司令部の中、共和国軍総司令官を兼任し多忙を極めるエレナの眼前に、古色蒼然とした書類が届けられた。書面を一瞥すると、隣の補佐官に命じる。

「司令部全員に確認します。声に出して読んでください」

素早く敬礼を済ませ、エレナから手渡された書類を胸の高さまで持ち上げると、司令部全員に聞こえる低い男性の声が朗々と響いた。

「ヘリック共和国暗黒大陸派遣軍所属、機動陸軍機甲師団強襲戦闘隊へのマッドサンダー50機編入を承認する。同部隊は、ヴァーヌ平原東方よりゲフィオン山脈東端を迂回し、西方からのウイグリド平原方面軍と共にヴァルハラへの進軍、敵首都挟撃を目的とする。以上」
「作戦への異議のある方は今すぐこの場で発言してください」

エレナの問い掛けと一人の将官の挙手と、彼女の視線に応じての発言まで僅か数秒の間だった。

「貴重なマッドサンダー部隊の集中投入は回避すべきです。ビフロス

ト平原やウルド湖などの西側へも部分投入すれば、膠着した戦線を突破できます」

数人の将官が同意を示し頷く。視線がエレナに注がれる。「ウツドワード少将の意見はこの場にいる多くの方が懸念されている事で、戦況が許せばマッドサンダーの分散投入の方が効果的なのは認めます。ですが……ご覧ください。諜報部によると、帝国軍強襲部隊は、帝都東部方面に大量のデスザウラーを受領したとの確実な報告を受けました」

司令部の中が一瞬にして凍り付く。

「ゲフィオン山脈東端のセシリムリル市から迂回したデスザウラー部隊は、恐らくヴァーヌ平原を突き抜けて西に進み、最終的にはエントランス湾を狙うはずです。もしここに唯一対抗可能なマッドサンダーを配置しなければ、暗黒大陸派遣軍は補給線を絶たれて全軍孤立します。」

兵力の漸次投入の愚はどなたも御承知でしょう。その上で何か補足があれば、意見はお伺いします」

「諜報部の情報は確実ですか。『ブラッディデーモン血塗れの悪魔』とは名ばかりの、粗悪な改造ゾイドである可能性もあります」

「粗悪品は量産しません。我が軍の諜報機関の優秀さもまた御存知でしょう。帝国も我が軍と同様に、デスザウラーの集中投入により一気に戦況を挽回しようとしています。苦しいのは共和国だけではありません」

エレナは周囲の将官を見回した。

「これは決定事項です。軍総司令官として命令します。全マッドサンダーをヴァーヌ平原へ投入してください」

彼女を中心に、全員が一斉に敬礼する。伝令兵は、彼女の署名した書類を恭しく受けとり、隔壁を兼ねた扉の向こうに去って行った。

目まぐるしく明滅する兵力配置図の光の中、彼女の脳裏に一人の名前が同じように明滅している。ニクシー基地撤退戦で最後まで抵抗していたエレファンダー部隊の搭乗員が叫んだ言葉だ。

(ヴォルフとは、一体何者なのだろう)

彼女は無言のまま、輸送部隊を示す光点が海上を移動する様子を見つめていた。

帝国軍が、切り札のデスザウラーを全機セシリムリル市街戦に投入した背景には幾つかの理由がある。

本来であれば、50機を分散して各戦線に配置し、強化された大口径荷電粒子砲で共和国軍を蹂躪することが目的であった。だが、サラマンダー、ストームソーダー、レイノスなどの飛行ゾイドによって制空権を奪われている以上、鈍重なホエールキングで限られた機数のデスザウラーを輸送することはリスクが多すぎた。また、デスザウラーは山岳戦に対応していないため、ヴァルハラ南方のゲフィオン山脈を越えることが出来なかった。

山脈西方のウイグリド平原では、既に共和国軍のヴァルハラへの挟撃戦が開始されている。デスザウラー部隊の分散配置が適わない以上、集中投入によって乾坤一擲の打撃を共和国軍に与えるしかない。結果、未だ共和国軍の兵力の薄い山脈東方を迂回し、ヴァーヌ平野を打通、一気にエントランス湾を攻略する戦略へと結びついたのである。

これは帝国軍にとっても大きな賭けであった。その理由は、帝国軍武器開発局のオーガノイドシステムを応用したデスザウラー復活第二計画が頓挫していたからだ（※『消された死竜』参照）。当初、ニクスの各生産拠点で建造されたデスザウラーが数百機単位で戦線に投入される予定であった。漸く幼体培養によってマッドサンダーの生産数を整えた共和国軍と異なり、帝国軍は地の利を生かした一大反攻の可能性もあった。もしデスザウラーの建造が続いていけば、ガイロス帝国軍、そしてネオゼネバス帝国軍のその後の動向にも大きな影響を与えていたかもしれない。

結局この戦闘に投入させたデスザウラーは、全機がマッドサンダーとの激戦の末相討ちとなり破壊され、これ以降セイスモサウルスの開発により、再び部隊を編成されることはなかった。

帝国、共和国の血みどろの戦いを尻目に、ネオゼネバス帝国復興を目差す鉄竜騎兵団^{アイゼントラグーン}は着実に作戦を進行させていた。

ギンターが摂政就任を果した段階から、旧ゼネバス帝国領にあたる中央大陸西側の地域に、数人から十数人単位での秘密工作員の上陸が敢行され続けていた。延べ人数にして数百人に達した彼らの使命は、物質的な破壊工作ではなく思想的な破壊工作である。旧ゼネバス帝国臣民の中に紛れ込み、来るべきその日に向けて潜伏すること。旧ゼネバス帝国領コミユニティー内での何気ない会話の中に、ヘリック共和国統治への不満、大統領制度の欺瞞、軍への不信感、そしてゼネバス帝国統治時代の素晴らしさを説き、時代の逆行を謀っていた。

しかし所詮過去は過去でしかない。いつまでも少年時代に見た夕日の美しさを黙したまま思い描いていたのでは、いま目の前に昇る現実の朝日の美しさを見ることはできない。為政者への不満を唱えるだけでは何も生み出さない。長い間の平和と繁栄に浮かれ、批判のための批判を繰り返し、大衆一人一人がエレナの唱えた普遍的責任を忘れ去ったとき、民主制は容易に衆愚政治へと転化する。急激な経済復興と突然の西方大陸戦争の勃発により、旧ゼネバス帝国臣民達は所謂アノミー状況にあり、それがギンターの放った思想的な刺客の最高の標的となったのだった。

トライアングルダラス海域に近い海底に、黒い巨大な塊が着底していた。海底の岩礁にも見えるそれは、しかし人為的に建造された輪郭を有している。ザリガニの形をしているが、全体を隙間無く覆う海藻類が、その本体を隠していた。

頭部と思われる中央に、幽かな灯りが漏れており、それが巨大なゾイドであることが判る。灯りの奥、海底の水圧と静寂に囲まれたブリッジに、一人の士官を従えた若い軍人が大型モニターを凝視していた。画面には現在も死闘の続くガイロス帝国領ニクスが投影され、その大陸南東に、デスザウラー部隊投入を示す光点が明滅している。彼は画面から視線を逸らさないまま呟く。

「いよいよだね、ズイグナー」

傍らに控える士官が無言で頷いた。何が始まるのかは、両者ともに理解していた。

ヴォルフ・プロイツェン。語るべくもなく、帝国最高権力者ギン

ターの息子である。若くして軍務に就いた摂政の息子ヴォルフは、忽ちの内に大佐の地位を得ていた。

ガイロス帝国には、重力砲に代表される共和国をも凌ぐ驚異的な技術力を有する一方で、旧態依然とした世襲制を墨守する保守的な制度も現存していた。地球の古代律令制時代に存在した蔭子制を思わせる、有力者の息子には優先的に高い位を授けるという制度である。貴族であれば士官学校に優先的に進学が許され、卒業後には中尉以上の任官が約束された。数箇月間戦場に身を置けばすぐに昇進し、安全な後方での指揮が可能となる。戦場を知らない将官の指揮の元、戦場で闘うのは主に旧ゼネバス兵という構図が出来上がっていた。

また、有力な貴族や軍閥は、自分の後継者や親族をガイロス皇帝官邸警護大隊に配属されることで、徴兵期間の消化を行った。それは、決して最前線などに送られることの無い、煌びやかなお飾りの軍隊である。ギンターの軍備拡張政策に伴い、期せずして大量の資金を手にした有力者達は、その資金を自分たちの子息を警護隊に編入させることを目的に、摂政への様々な贈与——端的に言えば賄賂——を行った。ギンターは受け取りを拒むこと無く、次々と宮廷警護隊に軟弱な貴族や軍閥の子息を送り込んだ。結果、警護隊は弱体化し、摂政の元には莫大な裏資金が蓄積されることとなる。PK師団をはじめ、アイゼンドラグーン鉄竜騎兵団設立の為の資金捻出を行えたのも、この裏資金によるものが大きい。

これらが全てギンターの反乱の為の基礎固めと気付いていた者は当時殆どいなかった。唯一、第一装甲師団長カール・リヒテン・シユバルツは、弱体化する警護隊の現状を指摘したと言われるが、彼自身も摂政の反乱までは予想がつかず、自らの継嗣を送り込んでいた他の軍閥達によって、この指摘は不問にされてしまっていた。

ガイロス帝国軍人の戦意は次第に失われ、虐げられた旧ゼネバス兵達はますます精強になっていく。権力者という地位からも、謀略者という存在からも、ギンターはガイロス帝国を手中に収めていたとも言える。

ヴォルフは初めての出撃に3個師団もの兵力を満載したホエール

キング10隻を率いてエウロペに進出した。これに異議を唱える者は無く、むしろ凶悪なヘリック共和国軍と戦う若き戦士として帝国内で大々的に喧伝された。

結果としてウルトラザウルス・ザ・デストロイヤーを旗艦とするデストロイヤー兵団の活躍によってニクシー基地が陥落し、ガイロス帝国エウロペ派遣軍は敗走する。この時同時に敗走した指揮官ヴォルフ大佐を、栄光に満ちた出撃時の称賛の反動により、帝国内で密かに、張り子の虎ならぬ「張り子の狼」と蔑称した者は多い。彼は親の威光を笠に着た無能な指揮官として失意の末に隠遁し、再びガイロス帝国領でその姿を現すことはなかった。

だが、ヴォルフの行動を嘲笑った人々は、既にその時点でギンターの策略に嵌っていた。彼のエウロペに渡った本来の目的は戦闘に参加する事ではなく、豊富な兵力を背景にして、未開の大地に眠る古代文明オーガノイドシステムのインターフェイスを探り当てることであった。つまり3個師団の兵力全てが擬装でもあったのだ。周囲を油断させ、欠けたピースであるオーガノイドそのものを発掘した。量産型デステインガーKFDを生産した後には、彼は密かに^{アイゼンドラグーン}鉄竜騎兵団に合流する。隠遁と称して姿を消した後は、再びエウロペに渡りトライアングルダラスの秘密回廊へと共和国軍を導き、エントランス湾での共和国軍上陸の為の露払いを行う。更にはユーミルで共和国軍の閃光師団^{レイフォース}と戦闘を行い、そこで彼は、戦士としても、後にネオゼネバス帝国第二代皇帝に即位する為の指導者としても最高の経験を得ていた。

再確認をしておく、ヴォルフは非常に優秀な人物である。その性来の才能に加え、父ギンターから厳然とした軍人と為政者としての心得を伝授された。ギンターは彼にとって優秀な教育者であった。肉親としての感情を交えることなく、淡々と知識と実践能力を彼に伝えた。ヴォルフもまた、優秀な教え子であった。父の教唆を理解し、実践し、体得した。だが彼は、父の教えを体得する程、日を追って表情の乏しい、感情を外に表さない陰鬱な少年へと変化していった。優秀であるが故に、彼の前に横たわる冷厳な未来を垣間見てしまったか

らだ。父の願いに応えるのが、膨大な犠牲を伴うことに。敵である共和国軍を始め、生まれ育ったニクススの地に住むガイロスの民、そして同胞であるという旧ゼネバス兵たち。『一将功成りて万骨枯る』。それが例え肉親でも、友人でも、恋人でも。感情を残していたのでは張り裂けてしまう。いっしか彼は、感情を切り離す術を身に着けていった。

戦いの大義は理解できる。できるが、所詮は殺し合いである。彼もまた、ゾイドが大好きな少年であり、子どもの頃からこの金属生命体を操っていた。戦いは人の命だけではなく、ゾイドの命も擦り減らす。それら全てを押し潰しても、叶えなければならぬ未来とは何なのか。もし彼に祖父ゼネバス・ムーロアの激情が僅かでも受け継がれていれば、つまりもつと我儘であれば、悲劇は防げたのかもしれない。だが彼は我儘になり切れなかった。彼は優し過ぎたのだ。

「あの人は何をしている」

姿勢を変えず、ヴォルフはモニターを見つめる。

「例のアイアンコングのコクピットにて待機しております」

「機体との信頼を深める為か。古風だね」

皮肉ではなかった。父が補佐役として派遣したその元ゼネバス親衛隊の古参兵の行為が、純粹に羨ましかったのだ。

ゾイドに信頼を寄せて一体となる。ゾイド乗りとしては憧れだ。自分も同様に、ニクシー基地以来戦ってきた愛機バーサークフューラーと共に過ごす時間が欲しかった。野生の本能を剥き出しにして戦ったあの時の如く、一度は理解し合えた機体だったのだから。

だが、為政者として運命付けられている彼には、それが許される時間も手段も残されていない。

「数少ない中央大陸戦争を知る者です。共和国首都攻略戦では、必ず役に立つ人材で御座います」

「そうか」

ヴォルフは、左の腕に古傷を持つ、自分以上に無表情な老兵の姿を思い返していた。

54 (2101年)

ギユンターはシュテルマーに全幅の信頼を置いた。そしてシュテルマーは、ゼネバスの最期の真相もルイーーズ・エレナの出自も知っていた。

ギユンターが欲したのは、暗黒大陸ニクスの覇権ではなく、中央大陸デルポイの支配であったといわれる。しかし異母姉ルイーーズがヘリック共和国大統領に就任している事実は、彼にとっても同じ血を引く者が亡き父の偉業を達成したと考えるても良いはずだ。彼個人の支配欲を満たすのが目的であれば、大陸制覇を前に爆死した説明もつかない。

歴史の狭間に埋もれた、偉大な父ゼネバスの犠牲的行動に見合った功績を捧げる為に、その名を冠するゼネバス帝国再興に拘ったと考えれば、彼が命を懸けてまでネオゼネバス帝国建国に執着した充分な理由付けとなるだろうか。

ギユンターの非凡な才を顧みした場合、それでは余りに感情に流され過ぎている。彼ほどの人物であれば一連の行動に更に合理的な理由付けが必要だ。

彼自身の人生の持ち時間については以前の章で考察したが、それは別に、旧ゼネバス系住民の存在がゼネバス帝国再興の最大の動機ではないだろうか。

中央大陸戦争が2051年に終結し、ニカイドス島からゼネバス兵達はゾイドと共に拉致、鹵獲され暗黒大陸に渡った。だが、仮に拉致された兵士の当時の年齢が20〜40歳前後として、40年が経過した2099年からの第二次大陸間戦争に於いて、依然ゼネバス兵が最前線で戦い続けている理由を説明できない。当時の兵士がそのまま参戦するとは思えない。しかし、ガイロス軍の中には、旧ゼネバス兵という枠組みが厳然として残っていた。また、PK師団や鉄竜騎兵団アイゼンドラグーンを編成できるほどの旧ゼネバス兵の人員も確保されていた。

つまり、暗黒大陸に渡ったのは兵士だけではなく、その家族も共に移住して後継者が誕生していたとしなければ、辻褄が合わないのだ。

例として、2099年オリンポス山攻略戦で撃破されたセイバータイガーのレコーダーに残されていた音声がある。

「ゼネバス帝国の残党だと虐げられたスコルツェニー家の俺が、ガイロス帝国に勝利をもたらしたのだ」

これはゼネバス帝国の亡命貴族であるスコルツェニー家という一族が、ガイロス帝国内に存在していた証拠ともなる。つまり旧ゼネバス兵であるステファン・スコルツェニー少尉個人はなく、彼の所属する一族の存在を示している。

暗黒大陸に面する中央大陸北西の、ダラス海やウラニスク海にガイロス軍が出没し、旧ゼネバス系住民を大規模に拉致したという記録はない。少なくとも、スコルツェニー家は血縁関係を維持したままガイロス帝国内に留まっている。つまりゼネバス兵の家族は、望んで暗黒大陸の地に渡ったと考えられる。人口の少ないガイロス帝国にとって、人的資源はヘリック共和国に対抗するためにも必要だった。恐らくは拉致した兵士を通じてその家族に呼びかけたのだろう。

「共和国軍による帝国住民への復讐、大量虐殺」、「敗戦後の帝国領への共和国支配による圧政と搾取」、「暗黒大陸は理想の新天地」。

ゼネバス帝国消滅の混乱に乗じて、根拠のない噂や裏付けのないユートピア思想を喧伝するのは簡単である。ホエールカイザーを使用した大規模な移動ではなく、恐らく人員輸送用のブラキオスやウォディックを利用し、共和国の管理が及ぶ前に、共和国に察知されることなく秘密裏に移送を行い、巧みに暗黒大陸の地に家族ぐるみで自発的入植を促したのではないか。

そして渡った暗黒大陸で待ち受けていたのが、いつまでも続くゼネバス系住民に対する差別であったとしたら。

ギウンターはただの冷徹な為政者ではない。もし霸王ガイロスと同じ轍を踏んでいたのであれば、老いたとはいえ存命中の猜疑心の強い皇帝によって粛清されていたことだろう。彼が巧みに（皇帝を含めた）人心を把握し、権力の中枢に上り詰めた能力は、エレナと同じくムーロアの血を引く者の証しとも考えられる。

そして彼が、同じ故郷を持つゼネバス系住民が、祖国の大地がない

という理由によって差別される姿を見たとすればどう考えるか。

残された人生の持ち時間の中で、早急に彼らゼネバスの民を救済する為には、如何にしてもその祖国を取り戻すことを必要と考えたのではないか。それは暗黒大陸ニクスの地では意味がない。中央大陸の、嘗てのゼネバス帝国領しか認められなかった。カシル村に向かうエレナがヘリツクに唱えたゼネバス帝国再興の理由と同様に、それが故郷に縛られた民族の宿命であることを、地球人の幾つもの悲しい歴史も証明している。

ネオゼネバス帝国建国の意義全てを、果たしてギウンターが後継者ヴォルフに全て伝えていたかは疑問である。それを理解するには、ヴォルフはまだ若すぎたからだ。

「貴君には息子ヴォルフの護衛として随伴してもらおう」

ヴァルハラかしずの深部、立ち並ぶデスザウラーの群れを前にして、老兵に、ギウンターは静かに命じた。一機だけ、血の色に染め上げられた機体がある。ブラッディデスザウラーと呼ばれるその専用機を除き、50機のデスザウラー大隊は、翌日国防軍に編入されヴァーヌの戦闘に向かう予定となっている。その威容に少しも動じることない老兵が、少し視線を上に向けた。

「言いたいことは判っている。私の最期の務めに殉じることが、貴君の以前のからの願いであったこともだ。だが、ヴォルフはまだ若い。ズイグナーも、先のブラッディデーモンでの戦闘の傷が癒えずにいる。優秀な兵が息子に欲しいのだ」

彼は無言のままであった。

「貴君には感謝している。ここまで私の為に貢献してくれた。礼を言う」

ギウンターの言葉は、儀礼的なものではない。臣下の兵に対し、決して侮ることなく謝辞を込めていた。

「祖国再興を達成する為、孤独に策謀を巡らせる中、同じ目的に向かって付き従ってくれた貴君には、友情とも呼べる感覚を抱いてきた。

シユテルマーよ、友への餞はなむけの言葉として聞いて欲しい。貴君の任務は、私が現世に留まっている間までだ。以降は貴君自らの判断に委ね

ることとする。私に対しての義理立ては充分果たしてもらった。余生は己の望みのままに生きて良いのだ」

シュテルマーはまだ沈黙している。

「不条理であることは、私自身も知っている。だが、貴君の想い人は私の姉でもあるのだ。我が父よりその行く末を託された以上、貴君にとっても撞着が残るだろう。」

ヴォルフとともに中央大陸に渡るのは理由付けに過ぎぬ。姉の最期を見届けて欲しいのだ」

老兵が、極度に寡黙であることを知った上で、ギウンターは語りかけていた。その言葉の裏側にある意味を悟ったシュテルマーが、緩慢な動作で深く黙礼をする。

「さらばだ、シュテルマー」

ギウンターとシュテルマーの別れだった。

「時はきた。今こそゼネバスの旗の元、戦う時だ。ヘリック、ガイロス を打ち倒し、長きに渡る屈辱の歴史に終止符を打て。そして、我らが祖国、中央大陸に還るのだ」

ギウンターによる新帝国建設の演説は、単なる挑発行為ではなく、ヘリック共和国、ガイロス帝国両国に潜伏していた破壊工作員への一斉蜂起の合図でもあった。

目的はテロ活動による破壊行為ではない。大衆を扇動して騒擾を発生させることだった。表面上は一般人に扮した工作員が、集団で広範囲の破壊活動に移る。敢えて流言飛語を撒き散らし、パニック状態をひき起す。卑劣にも、その噂は旧ゼネバス領民衆の相次ぐ反乱と破壊活動が発生しているというものが大半であった。既に共和国内には旧ゼネバス系住民が混在していて、単純な住み分けは出来なくなっていた。結果、互いの疑心暗鬼が高まり、古くからの共和国系住民でさえ、ゼネバス人と間違われ襲撃される事件が続発した。治安部隊によってある地域の騒乱が終息すると、次に破壊工作員は別の地域で騒擾を繰り返し、あたかも共和国全土でゼネバス系住民が数多く反乱を起しているかのような状況を作り出した。

グランチャーとダークスパイナーのジャミングは、共和国内の一般

の通信網もズタズタに切断し、正確な情報の入手を閉ざす。

耳目を塞がれ、集団ヒステリー状態に誘導された共和国では、軍さえもその情報操作の罠に陥った。不確かな噂が、やがて口伝に絶対正確な情報として独り歩きを始める。冷静に状況を判断しようとする指導者がいれば、作員が暗殺、或いは放火、小爆発を起こしてパニックを増長する。荷電粒子砲も、サウンドブラスターも必要は無い。コミュニケーションを破壊するには、ただ人間の信頼関係を断ち切るだけで充分であった。

ギウンターのネオゼネバス帝国建国宣言以降から、磁気嵐は一層激しくなり、ニクスからの一切の通信を遮断し、ロブ・ハーマン中佐と敵の第一装甲師団長との会談の結果も、ヴァーヌでの戦闘の経過も中央大陸に届かなくなった。全ては鉄竜騎兵団アイゼンドラグーンによるジャミングによるものである。

意外なところから、敵地の状況が齎された。

惑星大異変以降、共和国領各地に設置されたプレートグランドカストロフの移動を監視する地震計が、大規模な振動波を感知したのだ。震源は敵の帝都ヴァルハラ、深度は極端に浅い場所であった。それは地震ではなく、何らかの人為的に起された爆発と考えるのが的確である。

共和国、国立天文台所長ファン・ネムポセは、観測されたデータを基に大統領府への緊急回線を初めて使用した。

「ルイーズ・キヤムフォードです。天文台の責任者です。御用件を手短にお願います」

「大統領閣下、ヴァルハラで大規模な爆発振動が観測されました。このデータが事実とするなら恐らく都市部は壊滅しています」

大異変以降設置された緊急回線は、皮肉にも戦況報告に使用されることとなった。

「諜報員から、ヴァルハラの閃光を確認したとの連絡を受けました」
「全軍出撃。旧ゼネバス領の同士たちと連携しつつ、共和国残存部隊を撃滅せよ。最終目的は、共和国首都……ヘリックシティーだ」

中央大陸北東、共和国軍重要港湾都市クック。深夜の海岸線に、無数の漁火が現れた。だが、軍港周辺での海族の漁業は禁じられてい

る。漁船の類とは別の物体が、次々と浮上を開始しているのだ。

嘗てギルベイダーの低空侵入を許している共和国防衛線は、海上すれすれの敵の存在にも対応できる低空レーダーの設置も行ってはいた。だが、肝心の有事に直面した時、レーダー機器は一切の機能を停止していた。

「二体、何が起きたのだ……」

観測員たちは、突然の電波障害に当惑した。暗い海岸線には驟雨が降り注ぎ、視界も開けない。

共和国軍港クックでも、電波障害の為首都を含めた各地域との通信は一切不通となっていた。緊急事態を察知したクック市所属の海上部隊は、配備されている7機のハンマーヘッドを哨戒の為に出击させ、状況確認を試みた。また、地上に配属されたばかりの新鋭スナイプマスター部隊を沿岸に配置し、緊急事態に備え予想される敵の上陸地点へ警戒配備をした。防衛部隊の判断に、一切誤りはなかった。

クック湾を臨む雨滴の隙間には漆黒の水平線が広がっていた。

白波に洗われる水平線の一画が、不自然に盛り上がる。

低気圧に伴う高潮の塊に見えたかもしれない。だが波濤は砕かれることなく隆起を続け、やがて海面を引き裂き巨大な岩礁が二つ浮上した。岩礁表面には無数の海草や牡蠣が付着し、それが長く海底に潜伏していたことを示している。驟雨に紛れる水沫を滴らせ、岩礁は次第に沿岸に接近を始めた。それぞれの岩礁の中央に司令塔らしき突起物が備えられているのを沿岸警備のハンマーヘッドが察知した。無線不通のため、直接基地司令部へ向かい浮上を試みたが、海面を離水した瞬間ハンマーヘッドは撃墜されていた。岩礁の後方には更に巨大な塊が浮上していた。

レーダーとしての機能も併せ持つ触角だけは、微細な振動を伴うため海草の類は付着せず黄金の輝きを放っている。触角の奥より現れた黒い塊を、共和国兵がそれをゾイドであると認識するには暫く時間が必要であった。

ザリガニのハサミの部分に当たる、分離航行も可能な二隻の突撃揚陸艇ネプチューンとポセイドンの後方から、二隻と同様に海草と牡蠣

るだけであつた。

無数の海草や牡蠣に覆われていた船体壁面の一部が、ずりりと剥離する。来るべきこの日に向けて、密かに疑似装甲の下に描いていた蛇と短剣をあしらつた真紅の紋章が現れた。

「ガイロス……いや、違う。あの紋章は……ゼネバスだ」

歴史の中にしか残っていなかった国章が、再び現代に蘇つた。

海草に覆われたネプチューンとポセイドンの内部、そしてドラゴンネスト本体背後の甲殻がぱっくりと開き、表面とは異なる幾何学的な構造物の中より、シウトウルムフューラー、デイロフォース、ライガーゼロイクス、グレイヴクアマなど、無数のゾイドが吐き出される。ゾイド群を発進させつつ、ドラゴンネスト本体も8本の歩脚を地表面に突き刺し、移動そのものを武器として進撃する。

立ち並ぶ港湾施設を薙ぎ倒し、周囲の建造物全てを眼下に見ながら移動する錆色の機体は、縮尺という概念が破綻した幻想と悪夢とが混在する現実である。表面の有機体生物が焼け落ちる匂いが基地周辺に漂っていた。

船体中央の扉が開き、背鰭を波打たせながらダークスパイナード部隊が一斉に出撃した。漸く帝国軍の強襲を理解し、迎撃に出た共和国ゾイドに向けジャミングウェーブを打ち放つ。途端に動きが凍りつき、やがて共和国ゾイドは味方に向かって攻撃を始めた。

パンツァーユニットに換装されていたライガーゼロは、操られるまま大量の実体弾を撒き散らし、周囲一面を火の海と化す。コマンドウルフの同士で格闘が始まる。どちらもジャミングウェーブで操られている。同士討ちをさせることで、共和国ゾイドの漸減と、大衆へのパニックを増長させているのだ。ゴルドスが、無差別にレールガンの連射を始める。大加速度を誇る砲撃は、クック市街に無数の火の手を燃え上がらせる。

依然、共和国軍のレーダースクリーンは白濁したままだつた。それはアイゼンドラグーンは鉄竜騎兵団の装備する電子戦ゾイドのグランチャーと、ダークスパイナーによる電波妨害の結果である。奇しくもそれは、ちょうど60年前のZAC2041年、バレスシア湾にて行われたゼネバス帝国軍の

上陸作戦の再現でもあった。海岸に哨戒線を張って防衛に当たっていた警備部隊のスナイプマスターも、突然の上陸部隊に成す術もなく撃破された。

燃え盛る焰の中、ドラグーンネストが聳え立つ。その中の旗艦『ネアンデル』の張り出したブリッジで、ヴォルフは何の感慨もないかのように炎の海を見下ろしていた。

彼の表情が僅かに変化する。

その時、眼下の中央格納庫から、炎に溶け込む深紅のアイアンコングが出撃していた。

増援部隊も要請できないまま、軍港クックは数時間にして陥落した。そこがネオゼネバス帝国にとってのエントランス湾になった。

国立天文台所長から緊急回線を受けてから僅か数十分。次に齎されたのは、クック湾陥落の報せであった。

「グラント、クロケット、マウントジョー、そしてマウントアーサーに部隊を集結。サラマンダー、レイノス、ストームソーダーなどの空戦ゾイドを優先的に呼び戻して。」

地上部隊はライガーゼロを中心に再編成、到着地に於いて優先的にパンツァーユニットに換装、高速戦闘は現地のシールドライガー部隊に任せ、砲撃戦を担当するように。

残っているゴジュラスは、可能な限りヘリックシティー防衛線構築に努め、敵の侵入を防いでください。ロブとはまだ連絡は取れないの」

「……ハーマン中佐からは、依然連絡がありません」

咄嗟に階級ではなく、息子の名前を呼んでいた。確かヴァルハラ攻略の為に移動していたはず。もし天文台の報告通りならば、爆発に巻き込まれている可能性もある。

絶望的かもしれない。本当なら、この場に倒れ込みたかった。それでも大統領という職責の重さが彼女を律した。今立っていないければ、共和国国民全てが倒れてしまう。

「みなさん、そのまま聞いてください」

エレナは司令部に響き渡る声で叫んでいた。

(2101―2111) (最終章)

55 (2101年)

8秒間鳴って2秒間休止の繰り返し。

敵襲を告げる警報が、湖畔の町ウイルソンに不穏な輪唱を奏でて響き渡る。48年前のギルベイダー空襲を契機に、共和国各都市では定期的に防空避難訓練を実施してきた。しかし、それはどこか空々しいイベントで、開戦初頭の戦場が遠い西方大陸、或いは転戦した後の暗黒大陸ニクスということもあり、新たな世代を迎えた共和国民衆にとって嘗ての黒い翼が再び故郷の地に乱舞することなど予想だにできなかったからだ。

事実、ギルベイダーが蘇ることは無かった。

敵は空からではなく、地上を這ってやってきたのだ。住民は、それが決して訓練ではない現実に戦慄していた。

大統領の緊急招集を受け飛来した防空戦闘隊第27飛行大隊所属、マミ・ブリジット少尉は、愛機ストームソーダーをその上空で旋回させながら茫然自失の一言を告げた。

「航空部隊に、何ができるの」

眼下には、全長136mの巨大ザリガニが数体、棚引く爆炎を纏いながら、長々とその巨体を横たえていた。

旗艦『ネアンデル』を中心にX字の陣形を組んだアイゼンドラグーン5隻から編成される鉄竜騎兵団^{アイゼンドラグーン}北部方面軍は、クツク湾陥落の後ウイルソン川沿いに南下、ウイルソン市攻略に及んだ。

先行する『フェルトフォーファア』と『トイフェルスカマー』は、突撃揚陸艇ネプチューンとポセイドンを盾として共和国残存部隊を文字通り踏み潰しながら突進する。巨体を支えるマグネツサーシステムは、時速50km以下に速度を落とすことなく進撃。ゴルドスの105mm高速レールガンも、ゴジュラスガナーのロングレンジバスターキヤノンもそれを押し留めるには至らなかった。ドラグーンネストは、その巨体が最大の武器であった。蟻と象との戦い、いや、それ以

上の体格差では、到底対抗することは不可能である。避弾経始に優れ、深海の大水圧にも耐えられる曲面重装甲に覆われた全高40mの巨大標的に向け、迎え撃つ共和国軍地上部隊がどれ程砲撃を加えても、目に見えた効果を与えることが出来ない。

同時刻、戦略爆撃隊所属のサラマンダー機、及びレイノス4機が飛来し、空中からドラグーンネストへの攻撃を敢行する。爆装は可能であったが、爆撃を行うには市街地に近すぎた。サラマンダーは地上すれすれまで降下し、AZ高熱火炎放射器、及びバルカンフラックスによるピンポイントでのドラグーンネストの関節部分への直接攻撃を繰り返す。狙い澄ました重機関銃の砲弾が炸裂する度に、標的は内部から黄色い粘着性の物質を撒き散らす。歩脚が軋みを上げて動きを止めるが、残りの歩脚を使って直ぐまた移動を再開する。それでもサラマンダーは歩脚の付け根にあたる蛇腹状の関節部にバルカンの攻撃を集中し、遂には1本を切断することに成功した。大木の如き歩脚が本体から脱落し、見守る共和国軍地上部隊からの歓声を聞く前に、サラマンダーは一条の光芒によって撃墜された。見れば、背甲部分のカタパルトから出現したシュトゥルムフューラーが、集束荷電粒子砲の一撃で鋼鉄の翼を貫いたのだ。炎に包まれ落下するサラマンダーを、残った歩脚がめちやくちやに踏み潰し、ドラグーンネスト『フェルトフォーファー・キルフエ』は何事もなかったように進撃を続けた。

次に飛来した緑色のレイノスが、3連装ビーム砲と72mmバルカン砲を乱射しながら急降下、迫り出したブリッジ目掛け、脚部スパイククローでの肉弾戦を試みる。だがその直前、機体が突然硬直した。凍り付いたように羽を固定したまま、ドラグーンネストの右舷後方に墜落、地表に小爆発の硝煙を残して消えていった。巨体の中央ハッチの隙間から、ジャミンググウェーブを発生させるグランチャーのレーザースwordが垣間見えていた。

パンツァーユニットに換装したライガーゼロ部隊が、サラマンダーの決死の攻撃によって歩脚が切断された左舷に集中し、ハイブリッドキャノンの連射に加え、グレネードランチャー、マイクロホーミング

ミサイル等無数の実体弾を発射する。左舷が炎に包まれ、金属片と黄色い有機体を撒き散らし、遂には『フェルトフォーファー・キルフェ』の巨体が鎮座した。だがそこまでであった。

共和国軍ゾイドの操縦者達は、自分の機体が動かないことに気が付いた。硝煙に包まれる中、目の前に黒々とした巨大な壁が迫って来るのを知ると同時、全ての機体が踏み潰された。ジャミングウェーブによって行動不能にした上で、ネプチューンをザリガニのハサミ同様に使って地上部隊を薙ぎ払ったのである。

ウイルソン市に、鋼材を解体するスクラップ工場と同じ音が響き渡る。バリバリという金属が捻じ曲げられる騒音に紛れ、無数のゾイドの悲鳴が含まれていた。シールドライガーのものと思われる、最強の硬度を誇るレーザーサーベルが数本、巨大ザリガニの去った轍に残されていた。

累々と散乱する残骸を尻目に、ドラグーンネストは地上の大艦隊として首都ヘリックシティーに迫っていた。

※

開かれた濃紺のケースには、黄金の輝きを保つゼネバスの紋章と、どれ程磨いても黒く焼け焦げた跡を拭い去ることの出来なかった同じ物が並んで収められている。父との思い出と、少女の頃の記憶が過ぎる。共和国大統領に就任して以来、公私に亘って身に着ける機会は無かった。追憶にのみ存在すると思えた同じ紋章を掲げた軍団が、いま彼女に向かって迫って来る。

「お父さん、誰の言葉でしたか。『歴史は繰り返さないが韻を踏む』とは」

2つの紋章を見比べながら、エレナは呟いていた。

伯父ヘリックがあの日を回顧していた時に耳にしたことがある。

「私の聞き違いだったのかも知れないが……」

グランドカタストロフ
惑星大異変の最中の、キングゴジュラスを前にした父ゼネバスの言葉だ。

——娘を守ってやってくれ。私はもう一人、守らねばならぬ者のために行く——。

「もう一人」とは誰の事だったのか。長年エレナは、その人物が、自分の母とは別の妻にあたるマリー・プロイツェンだと思い込もうとしていた。ヴァーノンが査問の場に於いて、元皇帝の巡幸を誘引する条件としてその女性と引き合わせたことを告げていたからだ。

しかし、娘であるエレナと同列に語られた「もう一人」の人物が、元の正妻であると解釈するには違和感があった。真相を語らぬまま父はこの世を去り、エレナはその「もう一人」がマリーであると納得させていたのだ。

ネオゼネバス帝国の建国宣言は、奇しくも彼女の中で燻り続けている疑念を吹き掃った。

マリー・プロイツェンの実子であり、ガイロス帝国摂政職にあったギユンター・プロイツェン・ムーロアが、ゼネバス・ムーロアの正式な後継者を名乗ったからだ。

散逸していた事実が雪崩を打って繋がり、彼女の眼前に迫ってきた。ムーロア一族の血の呪いはいつまで韻を踏むのか。彼女の戦ってきた敵は、父の遺した「もう一人」の真相であり、遂に見えることまみの無かった異母弟であった。

そして新たに明らかになった事実がある。ニクシー基地撤退での帝国軍エレファンダー部隊兵士が叫んだ人物のことだ。天文台がヴァルハラの変を観測して以降消息を絶ったギユンターに代わり、即座に第二代皇帝を宣言したヴォルフ・プロイツェン・ムーロアは、彼女の甥であった。

見事な戦略だった。シート海、アクア海、そしてレッドリバー方面から同時に侵攻を開始したとの報告を受けていた。残存部隊とはいえ決して少なくはない予備兵力を有する共和国軍に対し、巨大要塞型ゾイドを以て直接本土に上陸し、忽ちの内に圧倒、こうしている今も首都に向けて包囲網を狭めている。戦況は悪化の一途を辿り、防衛線が次々と突破されていく。

彼女は気付いていた。支えきれない事を。

諦めるのか。

戦いが長引けば、それだけ民衆は苦しみ、死傷者も増える。国家の

責任者として、国民の生命を守るのは当然だ。無駄な戦闘を避け、いち早く降伏すれば被害は最小限で抑えられる。勝利に拘り、多くの血を流すことは望まない。恩讐を捨て、自らの血に繋がる指導者に身を寄せれば平和裏に運ぶのではないか。

警報が鳴り響く司令部内、彼女の中では降伏か徹底抗戦かの選択が激しく鬩ぎ合っていた。降伏に傾く彼女の心の中で、絶えず相反する彼女自身の心の声が響いていた。「それでいいのか」と。

この国は、伯父ヘリックが築き上げ、その指導者の地位を彼女が受け継いだ。だが、それは世襲によつて渡されたものではない。敢えて出自に触れず、彼女がゼネバスの娘である事を公言しなかった理由は、国民の選択に先入観を抱かせたくなかったから、この国の民衆の賢明さを信じたからだ。そして彼女は選ばれた。だからこの国は彼女の所有物ではない。この国の民衆のものだ。この国が繁栄できたのも、共和制という個人の責任に基づき、個人が成長しようとする意識を定着させ、積み重ねられて来た努力と、尊い犠牲によつて築き上げられてきたからこそなのだ。

厳しい環境にあるから、強力なゾイド野生体が育まれるのと同様に、保護されるだけでは国家も国民も成長できない。皇帝というある特定の個人にのみ政治の責任を担わせ、それに全面的に従うことは、表面上どれ程善政を布こうとも国民個人の成長を促さない以上、国家の成長も望めない。

時代の針は逆行できない。温かな母の胎盤をどれ程思い描いても、生まれ出た以上最早懐かしい胎内に戻る事は許されない。目先の平和を求め譲歩してみても、何れは必ず自由を求める争いが起こる。ここで自分が妥協をしたら、将来にはいまの戦乱以上の犠牲者を生む。

既に自分の手は血塗られている。ならば最期まで甘んじて汚名を受けよう。彼女は決断した。

「戦争は勝たなければなりません。理由などありません。それが戦争です」

エレナの透き通った声が、司令部内に凜として響き渡る。

「よつて、勝てない戦いならば負けないうように戦うべきです」

相克する訓示に、司令部内の幕僚達は当惑した表情を浮かべ俯いた。「大統領まで絶望してしまったのか」、彼らの瞳は挫折感に打ちひしがれ、輝きを失いかけている。エレナは周囲を見回し、穏やかな口調で語り出した。

「ネオゼネバス帝国を名乗る集団は、ヴァルハラでの出来事を含め、本日この侵攻を何年も前から準備してきたに違いありません。主力を欠いた我が軍の残存兵力で対抗できないことも見据えて襲撃してきたのであれば、正面から決戦を挑んでも勝算はありません」

危険な賭けだ。言葉を選ばなければ、司令部に混乱を起こしかねない。彼女は深く息をつく。

「勝算が無ければ、戦って死ぬか捕らえられるかです。私は、貴重な兵と乗り慣れたゾイドが失われることを望みません。」

思い出してください。なぜヘリックⅡ世前大統領は、約束された王の地位を捨て、共和制を布いたのかを。

命あるものは、生まれ出た瞬間から死に向かって突き進む運命を背負っています。唯生きるだけであれば、支配者に従い、自分の思想なども捨て去り、惰眠を貪って生きることが可能でしょう。

しかし、私たち人間は、生まれて子孫を残し死ぬだけの生命ではありません。生存本能とは別に、限られた時間の中で『生きる意志』を持つ唯一の存在です。ゾイドは次の世代にコアを残し、私たちは知識を残します。いま共和国が減んだら、これまで多くの尊い犠牲の上に積み重ねてきたものが崩れてしまう。それはヘリック共和国の敗北ではなく、人間としての敗北です。そんなこと、私は絶対に許せません。例えば屍を踏み越えてでも、この国を、いえ、この星の歴史を守り抜くのが私たちの義務であり権利であることを心に刻み込んでください。

現在交戦中の全部隊に到達してください。『絶対に死んではいけない。目先の勝利に拘るのではなく、生き残って再起を図るのだ』と」固唾を呑んで彼女の訓示に集中していた幕僚達が、次々と視線を上げていく。いつしか握り締めた拳に力が漲っていく。

「かつて我が国は首都を奪われ、崩壊寸前まで追い込まれたことがあ

ります。しかし、結果は我が国の勝利で終わりました。どれほど負け続けようと、最後の一戦に勝った者が勝者と呼ばれるのです。蛮勇を諫め、次の戦いに備えるために、敢えて屈辱を選ぶのも勝利の手段であることを厳命し、退却を含めた作戦行動を再考せよと伝えてください。以上です」

幕僚達が一斉に敬礼をする。将官達には、彼らの中心で微笑むエレナが、未だ現実世界で出会ったことの無い勝利の女神の姿と重なっていた。

アイゼンドラグーン
鉄竜騎兵団の破竹の進撃の理由を再確認する。

(1) ダークスパイナーのジャミングウェーブによる攻撃。

↓動けなくなった相手を一方的に蹴りものにして蹂躪、若しくは鹵獲する。その脅威は今まで何度も論じられてきたため略するが、共和国にとって致命的だったのは、鹵獲された共和国軍ライガーゼロは全てイクスアーマーに換装され戦線に投入されたことであった。

(2) ライガーゼロイクスによる奇襲。

↓ダークスパイナーの脅威を察知した共和国軍は、徐々にその電子戦ゾイドへの攻撃を集中するようになる。容易に敵陣へ進出できなくなったダークスパイナーに代わり、鹵獲により機体数を増やしたライガーゼロイクスが光学迷彩によって姿を消し、先陣を切つて突入、基地の奥底まで侵入し、中枢施設を破壊した。

(3) シュトウルムフューラーの集束荷電粒子砲による長距離攻撃。

↓長距離の火器を欠くネオゼネバス帝国軍にとって、荷電粒子砲を装備するバーサークフューラーは制圧兵器としても貴重な存在である。基本装備のバスタークロウの格闘性は高いが、敢えてこのゾイドを格闘戦に使用せず、シュトウルムアーマーに換装した上で中々長距離での荷電粒子砲攻撃によって共和国基地の主要施設やゾイド群を破壊し制圧するための高速移動する自走砲として運用した。

補足として、荷電粒子ビームはその名の如く粒子に電荷を持ち、地磁気の影響により曲射が可能である。この点が同じ光学兵器である中性粒子ビームとの違いであり、後者は直進性に優れているが「見えている物しか撃てない」という弱点がある。地磁気と惑星の地表曲面

率を概算したうえで発射した場合、精密射撃こそ難しいものの、荷電粒子砲は遠距離射撃も可能であった。この運用法が、後のセイスマサウルスに受け継がれることとなる。

(4) SSゾイドによる機動力を生かした急襲。

↓(1) ↓(3)の攻撃を受け、弱体化した共和国軍の掃討をSSゾイドが機動力を生かして行う。小回りの利くSSゾイドは、共和国軍ゾイドのコクピットや関節部分など、正面から戦って破壊するのではなく、急所を突いて作動不能にすることが目的である。

アイゼンドラグーン 鉄竜騎兵団Ⅱネオゼネバス帝国軍の戦術は、それまでの格闘に重点を置いたゾイド戦と一線を隔していた。敵が対抗できない状況に追い込んでから止めを刺すのである。

ところで、いくら共和国軍が主力を欠いていたとはいえ、ギユンター(若しくはヴォルフ)の私兵に過ぎない規模の鉄竜騎兵団が、なぜ広大な中央大陸を短期間で制圧できたかが疑問である。

例えば(1)のジャミングウエーブによる攻撃は対ゾイド戦闘には圧倒的に有効だが、共和国軍の武力はゾイドだけではない。歩兵、つまり一人一人の兵士が持つ武器に効果は無く、ゲリラ戦などの根強い抵抗は可能であった。

対人戦闘に最も有効と思われるデスピオン等の24ゾイドをアイゼンドラグーン鉄竜騎兵団が装備していたという記録は無い。同部隊はSSゾイドの生産に力点を置いており、アイゼンドラグーンの搭載量以外にも操縦者の絶対的不足の問題が残る。一方の共和国軍は、市街戦に持ち込んで戦闘を長期化させることもできたはずだ。

目の前で味方のゾイドが次々と撃破される姿を見て、共和国国民が絶望的な感情に陥り、敵の統治を受け入れたという推察は余りに杜撰としか言えない。人々の感情が、単純な暴力による支配を受け入れる時代は既に終わっている。この惑星に於いて未だ完成されていないとはいえ、民主制という自らの主権を行使し政治を行う国家形態を成立させた時点で、封建主義的な暴力による支配体制など成立しえない。

何より、ネオゼネバス帝国側の絶対的な人員不足が説明できない。

西方大陸戦争開戦時に於いて、ガイロス帝国軍は90個師団、総員約180万人の派兵を行った。正式な規模は確認できないが、仮にPK師団や鉄竜騎兵団アイゼンドラグーンの兵力をその10%強と見積もって、最大10個師団、人員20万人としても(※もしこれ以上の兵力を所有していたとすれば、それは最早隠蔽不可能である)、中央大陸に派兵し、戦闘以外に占領地域を統治できる能力を有する兵士Ⅱ官僚はどれ程存在するのだろうか。

比較として、2053年にヘリック共和国がゼネバス帝国を破り併呑した時、兵力は共和国が圧倒し、大統領府を中心とした政治機構も健在であった。軍と政治が分離され、支配する為の官僚も存在していた。それでも尚且つ、各地での支配体制、特に旧ゼネバス帝国領での不満は残り、完全支配には程遠く、結果ヘリックの死後連邦共和制という緩やかな結合に移行せざるを得なかった。但し、旧帝国領からの不満が取り上げられているということは、それだけ主権を各州国に与えていた証拠でもあり、自由な言動も保障されていた証明ともなる。

翻って鉄竜騎兵団アイゼンドラグーンの占領政策はどの様に展開されたのか。兵士は官僚ではない。増して旧ゼネバス兵という限られた枠の中、それも壮年を過ぎた熟達した老兵をヴァルハラに残してきた鉄竜騎兵団アイゼンドラグーンに、支配政策に長けた者が数多く存在していたとは考え難い。

旧ゼネバス帝国領では、確かにネオゼネバス帝国の支配を望んだ地域もある。かつて州国として分裂していた期間の名残として、容易に分離し支配を受け入れる素地はあった。しかし一度共和制、そして自由経済を受け入れ、繁栄を味わってしまった大衆に、軍事優先の統制経済を行うネオゼネバス帝国の支配を快く思う者は少ない。ヴォルフの行った皇帝権力を背景とした弱者救済の封建的社会保障政策も、所詮理想主義に過ぎなかった。肥大化したビューロクラシーの前では、旧態依然とした皇帝権力の維持など不可能である。繰り返すが、時代は逆行できないのだ。

ギンターの遺志は、虐げられている旧ゼネバスの民の大地を奪還することであったと以前考察した。その仮定の上に考察を重ねると、ギンターの遺志が果たして正しくヴォルフに伝わっていたのか

疑われる。或いはギユンターが意図的にそれを伝えなかつたのではないかとまで思われる節がある。

ギユンターは凡庸な為政者ではない。彼が敢えて戦乱を起し、自己と、ガイロス皇帝ルドルフと、そしてエレナを葬る事により、全ての遺恨を断ち切つて新たな時代を築き上げるための強引な措置を選択したと仮定した。ギユンターが若いヴォルフに帝国成立の責任全てを任せ、中央大陸に向かわせたという事実は、ギユンターの中でアンヴィバレントな感情が鬨ぎ合っていたのではないだろうか。

不条理ではあるが、ギユンターは期待していたのかもしれない。彼が描いた未来と、息子ヴォルフが築く未来が異なる事を。シュテルマーを息子の補佐役に付け、そしてシュテルマーに特別な仕様のアイアンコングを託したことも、その証左と考えられる。

ヴォルフは勝ち過ぎた。いや、勝たされたとも言える。共和国軍首都防衛の要、マウントアーサーを陥落させた後、破竹の勢いで中央大陸各地を制圧したが、数年後の共和国軍の反攻を見れば主力が温存されていたことは明白である。次々と打ち破られる共和国軍防衛線からも、実質的な部隊や人員は既に洋上、若しくは中央山脈に脱出していた。暗黒大陸ニクスから転進してきた派遣軍と、中央山脈及びグランドバロス山脈に立て籠もった部隊、そして凱龍輝の開発に見られるガイロス帝国と東方大陸の支援を受けた脱出部隊。それらはエレナの『絶対に死んではいけない』という宣言に忠実に従い、彼女の願いに応えたといえる。つまり勝てない戦いを避けて退却も恐れず行動し、再起を図つたのだ。

ギユンターの優秀な後継者、第二代皇帝ヴォルフ・ムーロアの最大の弱点は、彼自身にもどうしようもないこと、つまり彼の若さだった。彼がゼネバス派とヘリック派の隔てなく全ての民衆に愛を注ぎ、長い戦争に苦しむ民衆の暮らしを思つてブロックス導入による軍事費の大幅削減という善政を布いたとしても、それは画餅に過ぎなかつた。彼の要求した共和国への「議会の解散」「軍の解体」という占領政策は最大限譲歩したつもりであつたらう。だが、共和制の根本となる議会を封印され、それまで長きに渡つて戦つてきた軍組織を一気に解体す

ることは、共和国の体制を完全に否定する措置である。

かつてヘリックは『世界を知らぬ者は、自分の国をも知らない』と語ったが、リチャードとエレナが軍組織の暫時削減を訴えたのとは対照的である。ガイロス帝国で生まれ育ち、外部の風に吹かれたことの無い若者にとって、共和国残存兵力の根強い抵抗は理解できなかったのだ。

エレナとヴォルフとの決定的な違いは、それを支える人材である。ヴォルフにズイグナー・フォイアー大尉という補佐官がいたとはいえ、その関係はエレナとキャロライン同様に一方的である。エレナにとってのシュウ、マイケル、ヘリック、そしてリチャードの立ち位置にある人材は、若い彼にはいなかった。政治的に、そして精神的に支える人材を根本的に欠いていた。

従って、後ろ盾となるべき父ギウンターの自爆死はますます不可解となる。彼がなぜ死を選んだのか、本当の理由は未だに不明である。

ヴォルフは孤独であった。孤独であるが故に、幼い頃からの友人であった亡き女性を想い、戦場で出会った共和国軍レオマスターとの邂逅を望み、戦場を駆け抜けたに違いない。彼もまた、時代の激流に巻き込まれた一人であった。

56 (2101年)

クック湾へのドラグーンネスト上陸から7週間。共和国首都へリックシティーに迫ったヴォルフは、未だに降伏勧告を受け入れないルイーズ・キヤムフォード共和国大統領の姿勢に苛立ちを隠せなかった。

勝てないと判っているのに、なぜ降伏しない。

ヴォルフはエレナとの会見を純粋な政治的判断として望んでいた。共和国元首がネオゼネバス帝国皇帝の降伏勧告を受け入れることにより、より平和裏に占領政策を進めるためである。しかし、勧告は黙殺されたまま話し合いの場にも着こうとしない。ルイーズ大統領とは国民の生命を最大限に尊重する良識ある人物と聞いており、無駄な血を流さないためにも、彼女ならばすぐに交渉のテーブルに着くことを予測していたヴォルフにとっては理解し難いことだった。

共和国大統領は、自ら死を選ぶことで国民の団結を凶ろうとしているのではないか。

進撃するドラグーンネスト艦隊旗艦『ネアンデル』のブリッジで、ヴォルフは唇を噛み締めた。もしそうだとすれば、厄介なこととなる。彼女の望み通り彼女の命を奪ってしまったのは、共和国軍残存部隊が死力を尽くして反攻するに違いない。たとえ力でねじ伏せたとしても、長く怨恨が残り統治に支障が出るのは明らかだ。ヴォルフにとって、共和国政府組織を維持したまま支配するのが理想であった。父ギウンターが放った情報工作員が、新たにガイロス帝国の逆襲という脅威論を喧伝し、ネオゼネバス帝国による統治の必要性を根付かせようとしている。圧倒的な進撃も、首都を陥落させてしまえば必然的に鈍化するだろう。

「ズイグナー、どうあつてもルイーズ大統領を生きて捕らえるようにと全軍に厳命してくれ」

「御意に御座います、皇帝陛下」

「やめてくれ。今は誰もいないのだから」

ヴォルフはその尊称で呼ばれることが嫌いだった。ズイグナーだ

からこそ言えた不満だ。他の兵が一人でもいれば受け入れたが、ブリッジでは今まで通りの階級章で呼んで欲しかったのだ。

ふと、ヴォルフは振り返り、背後に控えるその補佐官に尋ねた。

「あいつはどうした。私がクック湾での最大の軍功を賞賛しても挨拶にも来ない。父から特別のアイアンコングを譲り受けているにも関わらず、礼を欠いているのではないか」

自分でも饒舌になっていることがわかる。ヴォルフはあの老兵を疎ましいものと感じていた。作戦に干渉するわけでもなく、見かけ倒しの無能な兵士でもない。しかし、過度なまでに寡黙で何を考えているのか判らない。なぜ亡き父はあの老兵を自分に同伴させたのかも判らない。「頼りになる者だ」以外の説明も無かった。

ヴォルフの感情を逆撫でしたのは、彼が仄かな香りを漂わせていたからだ。最前線での戦闘は長期間に及ぶため、特に女性兵士の間では香水を使う者もいたが、その老兵は武骨な風貌に不釣り合いな強く甘い香りを漂わせていた。軍規に背くわけでもなく、指摘する事も躊躇われたが、ヴォルフには老兵への特異で軟弱な印象を拭い去ることが出来なかった。

「依然、例のアイアンコングのコクピットにて待機しております」

ヴォルフは心の中で舌打ちをし、再び背を向けた。羨ましかった。自分にももっとゾイドと繋がる時間が欲しいと。若い彼には相談相手が欲しかったが、老兵はいつもあのアイアンコングのコクピットに座り、世捨て人のように瞑想している。ヴォルフの焦燥はゾイドと繋がることのできる老兵への妬みでもあった。

「一体何なのだ、あのPKは」

「陛下、僭越ながら、あれはPKではなく『E型』と呼称される機体であります」

彼は自分が一層不機嫌になり、そんな自分に更に嫌気がさしたため、口を噤んだ。僅かに目配せをする。補佐官は「話を続ける」という無言の訴えを察知した。

「整備兵によれば、機体の構造がより野生体に近くなっているとのことでした。或いはライガーゼロやバーサークフューラーなどと同様

の実験機とも思われます」

実験機が次々と戦場に投入されていることは彼も認識していた。彼自身、実験機であったバーサークフューラーの素体を操縦し、ニクシー基地撤退作戦を成功させている。同様の機構を、アイアンコンングに組み込んでいることも予測された。納得できないのは、なぜ父ギユンターは機体スペックの詳細を自分にも告げず、そしてあの老兵にそんなものを与えたかである。装甲の塗装は、彼のバーサークフューラーにさえ施されていない、父とともに爆発したブラッディデスザウラーと同じ鮮血の赤である。ブラッディレッドそれだけでも亡き父からの信頼の深さが窺われる程の兵が、なぜ自分に礼を尽くさないのか。鬱積する感情は、既に嫉妬にも近かった。

「私専用の新型ゾイドの開発は進んでいるのか」

ヴォルフはライガーゼロの素体に、新たな装備を加えた機体の開発を命じていた。ズィグナーが少し口籠る。

「御提案されましたエナジーチャージャーの搭載を見送らせて頂ければ、直ぐにでも完成できるのですが」

「あれはゾイドに新しい力を吹き込むものだ。父があいつにあのアイアンコンングを与えたように、新皇帝たる私にも新しいシステムを搭載した新しいゾイドが必要だ。開発の中止は許さない。技術局の全力を挙げて、エナジーライガーの完成を急がせろ」

彼は感情と行動とを切り離す能力に長けており、焦燥感に駆られることは少なかった。しかし幼い頃から仕えてきた補佐官にとって、彼のいつになく強硬な口調から、若き皇帝が何を考えているのか予想がついていた。

(陛下はあの共和国軍閃光師団レイフォースのレオマスターとの対決を望んでおられる)

補佐官として、この若き皇帝を守るためにも、ゾイドへの搭乗は避けて欲しかった。一方で、若く、そして孤独な若者には最早ゾイドとの繋がりにしか己の存在を認められなくなっていたのも判っていた。止むを得ない。

「御意のままに」

ヴォルフは補佐官に背を向けたまま頷いた。ズイグナーは知っていた。彼の顔には、少年が新しい玩具を与えられた時のような笑みが湛えられていることを。

ドラグーンネストは更に共和国首都に向けて進軍を続けていた。
ブラディレット
鮮血の赤に染め上げられた機体は、炎を背に幽鬼の如く溶け込み揺らめいた。

そのゾイドの戦い方は、アイゼンドラグーン鉄竜騎兵団Ⅱネオゼネバス帝国軍の戦い方と違っていた。古き時代からの格闘戦、ゾイド同志の殴り合いによる白兵戦。敢えてジャミングウェーブの影響を受けていない敵を探し、正面から破壊する。長距離攻撃用のビームランチャーを背負いながらも、その赤いゾイドが使用することは稀であった。

新鋭ケーニツヒウルフがスナイパーライフルを構えているのを目視確認する。マズルフラッシュと同時に、マニューバスターを全噴射させ、炎が覆う空に赤い巨体を舞いあがらせた。飛び上がった跡には一秒の何分の一かの差で徹甲弾による穿孔が刻まれる。射撃した直後の無防備な状態のケーニツヒウルフの直上から舞い降りた。その白い狼型ゾイドの頸部をスナイパーライフルの砲身ごと押し折る。悲痛な声を上げ、アイアンコングの足元に白い機体が横たわった。未だに電源の残る三連スナイパースコープが燐光を発していたが、コアの破壊と共に灯りを消して行った。

再配備されたガンブラスターが背部のローリングキャノンを回転させ始めた。黄金砲と呼ばれた嘗ての煌めきは無く、機体の印象は大きく異なっていたが、思い起せば彼にとって忌まわしい記憶の残る機体である。射撃の軸線さえ逸らせば何の脅威にもならない。超電磁シールドが作動を始める前に、コングは驚異的な跳躍で側面に回り込み殴りつけた。幾つもの砲身が吹き飛び、無様に横転する。

脆い。あの時のパイロットとは比べ物にならない。共和国軍にはまともな兵士が残っていないのか。

硝煙の立ち込める正面から、長大な砲身を背負った銀色の影が近づいて来る。次の瞬間、3本の鉤爪が繰り出された。咆哮する巨体、宿命の強敵であるガナー装備のゴジユラスである。搭乗するパイロツ

トは、共和国軍でも誇り高きゴジユラスドライバーに違いない。コクピットの中、緊張と喜びが入り混じる。

もし貴様が引導を渡してくれるのであれば本望だ。だが、自分に止めを刺すだけの価値があるか、見定めさせてもらおう。

スラストアーを逆方向へ噴射、牽制として連装電磁砲をゴジユラスの足元に放つ。ゴジユラスは怯まない。電磁砲の砲撃を脚部に受けても進撃を止めず、前傾姿勢を取って突入してくる。

面白い。お前もまた古いゾイド乗りか。

乾いた唇を舐めると、4連装グレネードランチャーを斉射しながらコングを跳び退かせた。ゴジユラスは振り向きざまに尾を振り方向転換する。

いい動きだが、その装備が命取りだ。

背部のロングレンジバスターキャノンが、僅かに機体の動きを妨げた。長大な砲身も接近戦に持ち込んでしまえばデッドウェイトに過ぎない。赤いゾイドは迫りくるバイトファンクをすり抜け、背後のフェルタンクごと両腕のハンマーナックルで叩き付ける。

ゴジユラスが背中を弓なりに仰け反らせて倒れ込む。頭長高の高さが災いして、直ぐに起き上がれない。倒れたままの背中にキャノンもスタビライザーも無視して、鋼鉄の拳を無茶苦茶に打ち据える。腕を振り下ろす度に、甲高い音とともに重金属の塊が^{ひしゃげ}拉げていく。背中と首、胴体と尻尾の付け根から亀裂が奔る。

ゴジユラスが悲鳴を上げた。剥き出しとなった頸部と胴体後部を両腕で掴み、力任せに引き裂く。

ブチッ、という筋繊維の千切れる音が連鎖的に起こる。同時に轟くゴジユラスの断末魔。

ブチッ、ブチッ、ブチッ！

頭部に繋がった脊髄のような太い神経索がずるりと引き出され、無数のケーブルを纏ったまま高々と掲げられた。

黒い潤滑油らしき液体を撒き散らし、巨体が三つに崩壊した。首を抜かれたにも関わらず、横たわった長さは元の二倍弱になっている。コングは手にした首を大地に叩き付けると、開ききったバイトファン

グの口腔目掛けて踏み付けた。下顎を欠いたゴジュラスの首が墓標となつて、虚しく空を見上げていた。

嘗て「戦場の赤い悪魔」と呼ばれた機体があつたが、銀色の宿敵の屍を片足で踏み付け、炎の中でドラミングをする姿はまさに赤い悪魔の再来であつた。

ふと、アイアンコングの頭部が瓦礫と化した共和国軍基地の建造物の上で背鰭を蠢かせるゾイドに向けられた。

ダークスパイナー、忌々しい奴。

ジャミングウェーブという最強の武器を持つそのゾイドを、アイアンコングは苛立たしげに見据えていた。

全知全能の神とやらが存在するのであれば、なぜ未だに人を苦しめる。神への帰依が安息を齎すというのなら、素面しちふよりも酔っ払いの方が幸せというのと同じだろう。人は宗教的な確信をもっている時以上に、完璧かつ快活に悪を成すことはない。偶像を崇めたところで、人間への冒瀆に過ぎない。

シユテルマーは、戦鬪を終えたコクピットの中で一人苦痛に悶え苦しんでいた。左腕の古傷が更に化膿し、老体故に健常とは言い難い肉体も蝕み続けていたからだ。古傷周辺の体組織の壊死により腐敗した肉体が異臭を放ち始めたため、止むを得ず強い香りの香水を振り掛けていた。本来アイアンコングは並列複座式であるが、E型と呼ばれるこの機体は幸いにして一人でも操縦は可能であつた。コ・パイロットの搭乗を固辞し、極力人との接触を避け、ゾイドとの精神的な繋がりを持つとの名目で、一人このコクピットに座り続けた。ここであれば、間断なく続く左腕の激痛に耐えかね呻いても気付かれることはない。操縦に関しては、サブシステムが音声認識によつて代行するので、彼の絞り出すような嗚声でも操縦に支障はない。シユテルマーにとつて、傷の悪化が露見し、戦線から離脱させられることだけは避けなかつたのだ。

若き皇帝の軍は着実に進撃速度を上げている。戦略戦術共に見事であつたが、そのあまりの速さに疑念を抱いた。潮が引く様に共和国軍は前線から離脱していく。それは2044年に共和国軍が首都を

陥落させられた時にも似ている。彼の立場からは、ここで若き皇帝に忠告をすべきと感じる一方で、この虚しい自分の人生の最後に首都を立て籠もる人物との邂逅を思い描いていた為に戦場を離れることは出来ず、進撃の速度を下げることも望まなかった。左腕の状態からも、自分に残された時間は僅かなのだと知っていた。

彼は、自分を見出し、長きに亘り仕えてきた摂政ギウンター・プロイツェンが爆死したことも知っていた。予兆はあったが彼の予測していた時期より遙かに早かった。死に赴く者を何人も見送ってきたシユテルマーであつても、ギウンターの死は予想外という印象は否めなかつた。

—— 姉の最期を見届けて欲しいのだ ——

あの日、ギウンターが告げた言葉だ。彼にとつても叶えたい希望であつた。

また取り残された。

若き日の焦燥感や寂寥感を抱くことはなかつた。自分もすぐに後を追うに違いない。その時にこそ、先に逝つたギウンター、ゼネバス、父ガンビーノ、そして無数の戦友達と語り合えるだろう。

「待っていてくれ」

彼の眩きを聞いたのは、彼の座したゾイド、アイアンコング “E” のみだつた。

※

ヴォルフ・ムーロア皇帝率いる鉄竜騎兵団^{アイゼンドラグーン}||ネオゼネバス帝国軍の中央大陸進撃は、寡兵にも拘らず三方同時攻撃という信じ難い作戦を採用していた。主力部隊に当たるヴォルフのドラグーンネスト艦隊を便宜上北部方面軍と呼ぶと、僅かに早くにウラニスク工業地帯を襲撃したドラグーンネスト3隻で編成される西部方面軍と、旧ゼネバス帝国首都を急襲した改ホエールキング級『モビーディック』1隻の南部方面軍という別働隊が存在していた。

戦略の基本中の基本として、二方面同時攻撃の愚は誰もが知るところであり、一気呵成に攻め上げる勇壮さとは裏腹に失敗した事例は数多く、成功例は殆どない。だが、圧倒的に兵力に余裕の無いネオゼネ

バス帝国軍にとって、兵力増強と中央大陸の制圧は急務であり、作戦の失敗は即ち全滅を示していたからこそ、三方同時攻撃という奇策を採ったのだった。

共和国首都の制圧は、もちろんヘリック共和国の中枢を牛耳るためのものである。但し、そこで仮にエレナⅡルイズ大統領を掌握、若しくは殺害できたとしても、万が一の事態に備え副大統領はヘリックシティーに存在せず、エレナの旧選出区であるセシリア市に待機していた。ヴォルフの北部方面軍は、部隊を更に3分し首都攻撃に当たったため、大陸東側のセシリア山やクーパー湾方面にまで襲撃部隊を割くことは出来ず、首都を陥落させただけでは、ヘリック共和国を崩壊させることは不可能であった。

西部方面軍が襲ったウラニスク工業地帯は、親ゼネバス派が多数存在する地域で、予め多くの工作員によつて情報操作が行われ、水面下でのネオゼネバス帝国受け入れ準備を整えていた。ドラグーンネストの上陸により手薄な共和国守備隊を排除すると、休眠状態であった旧ゼネバス帝国ゾイドの生産ラインを再稼働させ、一斉に帝国ゾイドの生産を軌道に乗せた。また、周辺地域住民からのネオゼネバス帝国軍義勇兵を募集し兵力増強を図り、急造ながらも軍の再編を行った。

実際問題として、長年ヘリック共和国の管理下にあり兵役からも遠ざかっていた旧ゼネバス帝国領住民に戦闘行動は荷が重すぎた。制圧後の戒厳令下の街中には、似合わぬ軍服を纏い、重々しく小火器を引き摺る兵士が溢れ返った。暗黒大陸ニクスで戦い抜いた歴戦の共和国兵が反転してくれば、到底太刀打ちできるような軍隊ではないことは誰の目にも明白である。従つて急務とされたのが、本来のゾイドと並行して、キメラ型と呼ばれるブロックスゾイドの生産であった。自己学習型で独立して駆動するキメラ型無人ゾイドであれば、俄か作りの軍隊でも辛うじて戦闘が行える。そしてブロックス対応型の大型ゾイドとしての、後の主力となるセイスモサウルスの生産を、ウラニスクにて開発を始めさせたのだった。

一方の南部方面軍は、山岳部に位置する旧ゼネバス帝国首都を攻略する為に改ホエールキング級『モビーディック』が使用された。モ

ビーディック型の戦線初投入は、西方大陸戦争終結後の陥落したニクシー基地急襲であったが、ギウンターがこの機体を開発させた本来の目的こそ、この帝都奪還作戦であった。『モビーディック』7番艦にあたるこの改造ホエールキングは、やはり手薄な共和国守備隊を自動操縦のザバットとグレイヴクアマの攻撃により制圧。ゼネバス帝国の象徴であった王城を奪還し、形式的な首都（実質的にはヴォルフのいるマウントアーサーが中心である）の再建を宣言し、ネオゼネバス帝国の正式な建国を中央大陸に知らしめた。各方面軍はそれぞれの制圧地域を着実に広げ、ネオゼネバス帝国の建国の既成事実を打ち建てた。彼らには一刻も早く大陸を安定化させる必要があったのだ。

冷静に考えれば感情的にも数学的（＝絶対的）にも、直近のガイロス帝国脅威論は杞憂に過ぎない。ヴァルハラで兵力の大部分を削ぎ落され、ネオゼネバス帝国成立により残存部隊の多くが脱落し、皇帝ルドルフを欠き、摂政ギウンターが爆死したのだ。どの部隊を率いて、中央大陸の軍と復讐戦に望めるといえるのだろうか。

後見人となったカール・リヒテン・シュバルツ准将（昇進後）が親共和国派に属していたことは有名だが、彼によって救出された若きガイロス皇帝ルドルフもまたゾイド好きの少年であった。救出後、中央大陸に進路を向けるロブ・ハーマン中佐（当時）が搭乗したウルトラザウルス・ザ・キャリアーに憧れの視線を向ける天真爛漫な瞳に、もはや戦乱を望む野望は存在しない。

皮肉なことに、ギウンターの望んだ新たな世代は着実に育まれていたのだ。ヴォルフと、ルドルフと、そしてロブ・ハーマン。この星の戦乱は、着実に終息に向けて歩み出していた。それはかつてヘリックが願い、ゼネバスが望み、リチャードが、そしてエレナが思い描いた未来でもあったのだ。

人間の可能性に期待するという、深山幽谷の人物の唱えた未来は近づいていた。

57 (2101年)

いままで一日一日を悔いなく過ごしてきた。最早やり残したことはない。

エレナは自分の役割が終わりつつあるのを悟っていた。

嘗て伯父ヘリックが嘆いたように、後継者の育成を怠る事はなかった。副大統領と共に避難している閣僚は、夫と過ごした思い出の町セシリアで新たな政府を築きあげてくれるだろう。いずれは息子と共に新しい国を支えてくれるに違いない。自分にできるのは、少しでも新しい世代に橋渡しするための負荷を減らすこと。大統領である自分が未だ首都に立て籠もり抵抗を続けていれば、敵は必ずやってくる。自分が敵の立場であれば、広大な共和国領を統治する為にも大統領の掌握を望むはずだ。だからこそ、露骨ではないものの敵を惹き付ける形での脱出方法を選んでいった。自分の命と引き換えに。

エレナは濃紺のケースをそつと閉じていた。父と、そして母との思出。自分がムーロアに繋がる証しでもあるこの紋章を携え脱出することはできない。

(さようなら、お父さま、お母さま)

エレナは心の中で、紋章との別れ、そしてムーロアの血との別れを告げた。

隔壁越しに間断なく鳴り響く警報の中、扉の向こう側に人の気配を感じた。準備が整ったのかもしれない。

「鍵は開いています」

「失礼します」

扉の向こう側に佇んでいたのは、脱出準備を報告に来た兵士ではなく、数年来彼女の秘書役を務めてきた、まだあどけなさの残る女性であった。幾分荒げた呼吸から、すぐに言葉を発することができないでいた。全てを察したエレナは、静かに惜別の言葉を告げる。

「あなたの務めは終わりました。私のモルガを使って脱出してください。

大丈夫、きつとみんなが守ってくれます。モルガをお願いします。お

母様は確か今は南エウロペでしたね。セーラブ先生にも宜しくお伝えください」

それに反し、デキツエリンは母親譲りの大きな瞳を潤ませ懇願した。

「考え直してください。降伏したっていいじゃないですか。敵は命までは取らないでしょう。戦場を強行突破するなんて無謀です。命を無駄にしないでください」

彼女はいつになく感情的であった。情熱的なブローニヤの娘らしい。砲撃音が遠雷の様に司令部に響く。堪らずデキツエリンはエレナに縋りつき泣いていた。

「私は大統領……ルイーズおばさまと、お別れしたくないのです」

エレナは既視感に襲われた。自分はデスファイターで出撃したマイケルと同じことをしている。残される者の悲しみを知っていたはずなのに、立場の違いが悲劇を繰り返すことを痛感した。できることは、あの日の恩師と同じ行動をとるしかない。彼女は縋りつくデキツエリンの肩を優しく支え、見上げる大きな翠緑の瞳を見つめ微笑んだ。

「もしこの戦争が無くとも、あなたは愛する人を見つけ、家庭を持ち、新たな命を育てるために必ず私と別れなければならなかった。そのときが少し早くやってきただけです」

涙ぐむデキツエリンの手をそっと握る。

「これは私がリチャードとの結婚に悩んでいる時に、前大統領夫人であるローザさんから聞いた言葉です。

『二人が共に幸せになる自信があるのなら、思いの丈をぶつけなければいい。理屈で割り切ろうとしてはいけない。この感情に合理的な解釈は不可能です。解決する方法はたった一つ。自分の気持ちに素直になればいい』。

素敵でしょ。私はそして、最高の男性と結ばれました。彼と共に過ごした時間は短かったけれど、後悔はありません。だって、最高の人生だったから。

あなたには本当にお世話になりました。私には娘はいなかったけ

れど、まるであなたを自分の娘の様に思っていました。出来の悪い母親でした。ごめんなさいね。

でも、これは母親として思うことです。きっとブローニヤも同じことを考えるでしょう。約束です。生き残って、必ず素敵な人を見つけてくださいね」

デキツエリンに、エレナの掌の温もりと、覆すことの出来ない意志の固さが伝わった。大きな瞳から涙が零れ落ちる。

「泣かないでください。私だって悲しいのだから。さあ、顔を上げて。

お願いがあります。あのディスクと、例の箱を持ってきてください」

デキツエリンは袖で思いきり涙を拭った。

「了解しました」

待機する部屋を去り、荷物を取りに駆け出す彼女は、母親譲りの大きな瞳が素敵な大人の女性へと成長していた。

「ありがとう」

その背中に向け、エレナは呟いていた。

共和国軍首都脱出部隊は、奇しくもヴォルフの部隊と同様に三つに分かれていた。第一の部隊は首都に立て籠もり徹底抗戦を続ける。彼らに許されていなかったのは、自決を選ぶことである。弾薬を撃ち尽くし、抵抗する手段を失った後は潔く投降するのを条件としていた。

第二の部隊は、地下隧道を使って脱出する部隊である。2044年にデスザウラーによって首都が陥落した折、掘削された隧道は未だに健在で、一本はマウントジョーにまで、もう一本はグランドバロス山脈まで続いていた。懸念されたのは、このトンネル作戦はネオゼネバス帝国側にも察知されている可能性があり、隧道入り口からの追撃も考えられた。

第三の部隊が、セイバリオンを主とした脱出部隊である。本来であれば敵のSSゾイドに対抗する為に開発された試作機を、大統領を乗せて敵中突破させようというのである。信じ難い事に、この情報は敢えて敵側に察知されることを前提として強行されていた。エレナは

自分の命を囿にしてまでも、第二部隊の脱出を優先させたのだ。この時彼女は永訣の辞を各方面に送っていた。一通は行方の知れない息子の座乗するウルトラザウルスへ。一通はガニメデ市にいるマイケルへ。そしてその郊外の、深山幽谷に住む恩師へと。

脱出部隊の兵力を三つに分断することにより、もともと手勢の少ない帝国北部方面軍の兵力も分散させることに成功した。

準備は整った。立ち並ぶ幕僚を前にして、彼女は惜別のため手を差し伸べた。

幕僚数人が一斉に彼女の手を握る。言葉を発することなく、粛々と別れの儀式が行われていく。数回で握手を終えた後、彼女はデキツエリンから渡された小ぶりのアタツシユケースを開いた。中には、3枚のデータディスクが入った小さな金属ケースと、片手程の長さの箱が入っていた。

「大統領。首都脱出の手筈が整いました」

幕僚の傍らに、ひとりの兵士がいた。

「脱出機のパイロットを務めるトミー・パリスであります」

「ロブの腹心だった方ね。静養で本国に戻っていたと聞きましたが、もう傷はよろしいの?」

「はっ」

「では、貴方にお願ひがあります」

そう言って、エレナは小さな金属ケースだけをパリスに渡した。

「これをロブに、私の息子に渡して欲しいの」

まるで愛おしい人を抱く様に、彼女の手の中にもう一つの箱が残された。彼女の見上げる先には、小型のライオン型ゾイドが聳えていた。手渡されたヘルメットを目深に被る。ゾイドに乗るのは久しぶりだった。

「セイバリオン、宜しく頼みます」

知らぬ間に、エレナは言葉を発していた。そしてゾイドにも人にも変わらず慈愛の言葉を発することの出来るその女性大統領を目にした時、パリスは必ず彼女を守り通す決意を固めた。

(自分には勝利の女神がついている)

「出るぞー」

剥き出しのコクピットの上、彼は誰に告げるともなく叫んでいた。

※

「陛下、共和国軍がトンネル作戦を敢行するようです」

「性懲りもない。同じ手が二度も通じるものか。ガンタイガーとディマンティス部隊を回し、一気に蹴散らせ」

抑揚の無い言葉が補佐官に告げられる。若き皇帝の元に補佐官は跪く。

「工作員が把握したところによると、ルイーズ大統領はゾイドを使って脱出するとの確実な情報を得ました。兵力の大部分はトンネルに向かっています。我々のもう一つの目的は大統領の確保です。如何なされますか」

忌々しげにヴォルフが振り向く。

「それをなせ先に言わない。大統領の確保が先決だ。ガンタイガーはイクスの援護に向ける。ダークスパイナー部隊も回せ、絶対に生きて捕まえろ」

「御意」

ズイグナーは復唱し、背後の士官に兵力移動を命じる。明滅する兵力配置図は、共和国軍残存部隊の動向を明確に示している。味方を示す矢印が、共和国軍の抵抗の中心と察知される基地に向けられる。もう一つの矢印は、共和国首都中心部から伸びた隧道入り口に向けられていた。

※

「まさかもう一度このトンネルを使うとは思わなかったぞ」

そう言つて壮年を迎えた兵が高らかに笑った。

「見ろよ、このスコップを。60年前に親父が使った記念に受け取つたものだ。親父はモグラと呼ばれたことを誇りに思っていた。『俺は誰も殺さず、誰よりも多くの命を救ったことが誇りだ。そしてこのスコップは俺の命の恩人だ』とね」

それが兵士の強がりでしかなく、そのスコップが果たして本当に2044年の共和国首都脱出トンネル作戦で使用されたものかなど判

らない。だが人々は信じたかった。この脱出が成功することを。薄暗い明かりの中、無数の共和国民衆が歩む中、精一杯の勇気を奮い立たせるように、その兵士は先頭に立って歩んで行った。兵士が呟いた。

「ルリーズ、今の僕に出来ることはこんなことしかないんだ」

兵士の傍らには、クリーム色の髪留め（バレッタ）を付けた女性が伴っていた。

脱出部隊の殿を守るシャドーフォックスの索敵レーダーに反応がある。

“後方から接近する敵がいる。ゾイド部隊は後方へ回れ”

歩兵部隊の通信機に警戒を告げる報告が伝わる。手勢は少ない。前方に工兵ゾイドのスピノサパーを残し、シャドーフォックス、ガンズナイパー、カノントータスが固める。

隧道の首都方向から、カサカサと無数の脚を擦る音が聞こえて来る。カマキリ型SSゾイド、デイマンティスが隧道を辿って追撃してきたのだ。

機動力を欠くカノントータスや、高速戦闘を得意とするシャドーフォックスには狭い隧道内での戦闘は圧倒的に不利である。また、火器は流れ弾による壁面の崩落や落盤の可能性もあり使用は躊躇われ、ガンズナイパーの豊富な武装も封じられている。一方のデイマンティスは、SSゾイドという特性と、何よりその数を生かして進撃してくるため優位は動かない。卵囊から生まれたてのカマキリが獲物を求めて湧き上がるような光景は、追撃を受ける共和国部隊にとって悪夢であった。4本の捕脚を忙しく蠢かせ、鎌にあたる2本のハイパーファルクスを振り上げている。前方の数機が、腹部の羽根を広げた。イオンブラスターを噴射し、一気に躍りかかろうとしているのだ。暗闇に光る無数の赤い眼が不規則に揺らめき接近する。共和国脱出部隊は、絶体絶命かと思われた。

跳び上がったデイマンティスの機体が、最後尾のガンズナイパーの直前で、まるで見えない壁に遮られたように急停止する。後続の機体が衝突し、脚部を絡ませ落下する。不可解な事に脱出部隊のゾイドは

火器を使用しておらず、まるで虚空から何かが引き寄せたかの如く、デイマンティスは次々と見えない壁に阻まれ落下していった。事態を把握できず、闇雲に跳び上がったデイマンティスは、機体同士が折り重なり隧道を塞いでいく。無抵抗のまま忙しげに脚部を蠢かすデイマンティスの群れを、狙い澄ましたシャドーフォックスのAZ30mm撤甲レーザーバルカンが貫いた。燃え上がる炎の壁が、帝国追撃部隊の進軍を遮った。共和国脱出部隊は、脱出の為の貴重な時間を稼ぎ出すことに成功した。

それは首都進攻の直前まで配備が遅れ、実戦投入された時にはまだ十分に性能が知られていなかった共和国軍SSゾイド、メガレオンのアームキャッチャーによる攻撃であった。ニクスのトリム高地から齎されたライガーゼロイクスの残骸よりステルス能力と光学迷彩の技術を解析し、その性能を強化小型化したメガレオンは、隧道の暗闇と相まって無敵の能力を発揮した。隧道に配備されたのは僅かに5機。だが光学迷彩によって姿を消したこの共和国軍SSゾイドは、狭い隧道の中では脅威であった。

デイマンティス部隊にとっては、露出したコクピットが被害を拡大させた。見えない敵によって撃墜された残骸が道を塞ぎ、追撃を妨げる。無数のデイマンティスが残骸の奥で蠢く姿を見ながら、青く塗装された1機の古びたモルガを含む共和国脱出部隊は、隧道を駆け抜けていった。

※

「大統領を乗せたゾイドは小型機と判明。各方面に陽動を含めた脱出を開始した。包囲網を狭め脱出路を絶ち必ず確保せよ。最悪の場合生死は問わない」

短い通達文には『画像添付・①陽動を含む共和国大統領脱出ルート・②ルイズ・キャムフォード大統領』とある。シユテルマーは、議事堂の上で、折れた稲妻を意匠とした国旗を睥睨し、モニターに画像を展開した。

彼は陥落した大統領府の前で、自分の葬った無数の共和国ゾイドの残骸を見下ろしていた。コングの眼下を、最後まで抵抗を続け投降し

た共和国兵が捕虜として後頭部に両手を回して一列に歩かされている。背筋を伸ばして歩むその姿から、彼らが決して虚勢を張っているのではなく、何かの使命を着実に成し遂げた充実感が漲っているのを、シユテルマーは敏感に感じ取っていた。残骸には重装甲を誇るゴルドスやカノントータスが多く、コクピットは一様に開かれている。操縦者は死ぬまで戦ったのではなく、可能な限りの戦闘の後、機体を捨てて脱出しているのだ。思い起せば、抵抗部隊は長距離射程を誇るゴルドスの105mm高速レールガンも、旧装備に換装されたカノントータスの大口径突撃砲も、有効射程の遙か遠くから砲撃を開始していた。もちろん、ダークスパイナーのジャミングウェーブの到達距離に接近させない為の戦略とも言えるが、それ以前に、砲撃は単なる時間稼ぎであったことが抵抗部隊の未除去のデータから判明したのだ。

抵抗部隊の本来の目的は、ゾイドを使用した大統領の脱出であった。送信された配置図より、陽動を含む大統領搭乗機が脱出を図る経路は5本。それぞれが制圧された共和国首都の中を扇状に広がって移動している。そのどれかに大統領が向かっている。確率は五分の一だが、彼にとって選ぶ経路は決まっていた。

エレナであれば、きつとこの道を選ぶに違いない。

シユテルマーが目指したのは、5本の中で最も移動距離の長いルートであった。

地図をスクロールした画像の下に、眼鏡を掛けた初老の女性の映像が映る。ギョンターによる情報封鎖以来、久しく目にしていなかった姿だった。貴種に繋がる品格は隠しようもなく、年齢を重ねたからこそ醸し出す美しさもまた輝いている。万感の想いが込み上げる。だが、思い出に浸っている余裕はない。画像が北部方面軍の全部隊に送付された以上、共和国大統領の捜索に拍車がかかるに違いない。通信装置を確認し、敢えて音声をマイクに拾わせる様に告げた。

「ジエノサイドモードへ移行する」

躊躇うことなくシユテルマーは禁忌の機能を発動させ、目差す脱出ルートに向けてアイアンコンングEを発進させていた。

※

エレナは激しい振動に耐えていた。機外では激しい格闘戦が繰り広げられている。迂闊に言葉を発すれば舌を噛む。今はただ黙って戦闘の行方を見守る他ない。揺れ動くモニターに映るのは敵の赤い小型ゾイドであり、遠方で巨大な背鰭を靡かせる緑色のゾイドも見える。周囲には敵の砲撃が降り注いでいるはずなのに、彼女を乗せたセイバリオンは一定のリズムを刻んだまま駆けて行く。

「大統領、御無事ですか」

振り回される仮設シートの中、エレナは周囲を取り囲む殺意を感じながらも、それを越えた安らぎを覚えていた。

不思議と死の恐怖が湧いて来ない。必ずこの窮地を越えることができるという確かな希望があった。目差す先は中央山脈、2044年に使用していた秘密の地下司令部である。首都脱出が成功すれば、途中でタートルシップと合流し移動する手筈だった。その時エレナは少女の頃見たケック村の美しいミストラルを思い描いていた。村は隕石の直撃により跡形もなく吹き飛んでおり、今は見る影もない。そして仮に戻ったとしても、旧ゼネバス帝国領にあたるその地域は既にネオゼネバス帝国軍の制圧下にあるはずだ。人は死を間近にして、過去を振り返るといふ。その時が近づいて来たと思う一方、それでもエレナの心は澄み切った湖水の様に鎮まっていた。

トミー・パリス大尉という若者の顔は、人生を共に過ごしたひとと似ていた。戦場で瀕死の重傷を負い、絶望の淵を彷徨い、それでも諦めずに立ち上がる。

(リチャード……)

最愛の亡き夫に面影が重なる。そしてもう一人の顔がエレナの脳裏を過った。あの日キングゴジュラスで隕石を防ぎ、息子を救うために命を散らした父、ゼネバスの姿である。

(お父様は、リチャードと会えたのでしょうか)

死後の世界など信じてはいない。死は自分を含め誰にでも平等にやってくる。自分にとって最愛の人々との再会を夢見ても許されるだろう。

突然セイバリオンの歩調が変わる。何かを警戒しているのだ。

(待ち伏せ?)

パリスは培った戦士の嗅覚で、見えない敵の存在を察知したのだろう。小さなモニターでは外の様子を窺い知る事はできないが、緊張はエレナの乗る仮設シートにも伝わってくる。シートの丁度真上にコアがあるため、SSゾイドの薄い装甲越しにコアの鼓動が響いてくる。歩みを止めず、しかし微細に歩調を変化させていく。

エレナの身体が激しく揺さぶられた。セイバリオンが跳んだのだ。モニターに一陣の閃光が過る。それは闇の獣王ライガーゼロイクスの狙い澄ましたストライクレーザークローだった。だが、タイミングをずらされ、空を切ったイクスの右前脚は、セイバリオンの渾身のハイフリークエンシブレードによって鮮やかに薙ぎ払われていた。

※

「クック湾基地より入電、現在大陸西より所属不明の大型飛行物体が接近中。機体の規模からして、ホエールキング級2隻と思われるが、味方識別コード無し……。つい先ほど索敵圏外に離脱」
「ガイロス軍でしようか」

「奴らが今更何をしに来るのだ。進路は確認できたのか」

まだ若い通信兵は、覚束ない仕草で機材の操作を行う。

「西に向かった後、中央山脈付近で消失」

「動向を確認しろ、再び接近した場合に備えておけ」

復唱した後、通信兵はズイグナーに再度敬礼をし直した。

「まだ何かあるのか」

「大型飛行物体消失の直前に、突撃部隊より緊急入電があり、報告が前後しました。実は……アイアンコングEが、戦線を離脱しました」

ズイグナーが告げると、皇帝ヴォルフは露骨な舌打ちをした。

「やはりそんなことか。構わぬ、何処へなりとも行けばよい」

大統領の捕捉はできないものの、首都制圧戦は完了している。今更老兵一人とゾイド1機を失ったところで何の損失もない。むしろ陰鬱な影を引き摺る人物がいなくなったただけ僥倖と思えた。だが、補佐官が続けて告げた報告は若き皇帝を極めて不愉快にさせた。

「シユテルマー殿の最後の通信に『ジエノサイドモードへ移行』との

音声記録が残っておりました」

ヴォルフは身を固くした。それはIFF（敵味方識別）シグナルの制約を無視し、敵味方の区別なく攻撃を可能にする機能である。敢えてそのモードに移行した事実を通信記録に残している以上、あの老兵はヴォルフのネオゼネバス帝国に反旗を翻したと判断していい。

——父は何故、あんな奴を自分に随伴させたのだ——

「ルイーズ大統領の捕捉に加え、本時刻を以てシユテルマーとアイア
ンコングEを共和国軍同様に掃討対象に修正、敵性ゾイドと認識せ
よ。奴は歴戦の強者だ。赤いコングを発見した場合、直接戦闘に移ら
ずダークスパイナーのジャミングウェーブを待て。裏切り者を逃す
な」

エナジーライガーが完成していれば。

ヴォルフの焦燥は、嘗てシユテルマーが最終兵器ギルベイダーの完
成を望んだ感情と重なっている。歴史はここでも韻を踏んでいた。

※

イクスの攻撃を躲した後、セイバリオンは首都を取り巻く小高い丘
に向け、再び一定のリズムを刻んで駆けていた。心地よい振動に揺ら
れる仮設シートの中、エレナは緊急脱出用のレバーを見つめ思いを巡
らせ続けていた。

自分が生き延びれば、再び争いの中心に立ち続けることだろう。思
えば、三期目の大統領就任を最後に隠棲するはずが、戦乱の発生に巻
き込まれ身を引く機会を失っていた。これまで無我夢中で戦ってき
たが、今戦っている相手が自分の甥であり、肉親であることに寂寥感
を募らせていた。父と伯父のような、忌まわしきムーロアの血の呪い
を受け継ぐことは避けたかった。肉親同士が争い合う世界など、決し
てこの星に良い影響を与えるはずがない。そして、やはり肉体の老い
を感じないわけはいかなかった。果たして自分がこのまま、共和国の
中心に存在して良いものなのだろうか。

安易に命を絶って責任を投げ出すことだけは彼女の倫理観が許さ
なかった。生きることには権利であると同時に義務であり、自分はリ
チャードの分まで生き延びなければならなかったからだ。

エレナは小箱を抱きしめた。

彼女には確信があった。セシリアに脱出した閣僚や、パリス少尉をはじめ息子を支えてくれる人々、そしてヘリック共和国を惑星大異変（グラントカタストロフ）の廃墟から立ち上がらせた無数の意志が、必ずこの国を再興させてくれることを。

セイバリオンの歩みが止まる。パリスは脱出した首都を、雪辱を誓うために見下ろしているに違いない。モニターに、燃え上がる首都の遠望が映る。

「ロブ、こんな母親を許してくれるでしょうか」

機体の停止したその瞬間、エレナは無心に目の前のレバーを引いていた。

音もなく開かれたハッチから、エレナはシートごと落下する。シートに施されたウレタンが緩衝材となり、身体を地表にぶつけることなく着地した。腹部ハッチが開いていることも知らず、セイバリオンは再び先ほどと同じ歩みで走り出した。

「ありがとうございます、トミー・パリス少尉。あなたの武運を祈念します。ロブを宜しく」

エレナはヘルメットを脱いで立ち上がり、思いを込めて手を振り続けた。

58 (2101年)

……東方大陸、ですか？……

「ああ、本当ならエウロペを回った後に行く計画だった」

……もしかして、レツドラストで伯父様の申し出を失礼な言い訳で断ろうとした理由って……

「実はそうだったんだ。ロブ平原に立ち寄ったのも、一度デルポイに戻り、資金集めを含めた渡航準備のためだった。偶然君と再会しなければ、あの後東方大陸に渡っていたはずだ」

……あなたの放浪癖は知っていましたが、そんなことを考えていたのですね……

「ブランドカストロフ東方大陸は、惑星大異変でゾイド野生体が壊滅的な打撃を受けたという。そこでその大陸の住民は、人造のゾイドコアを開発し、人工のゾイドを運用しているそうだ。野生の本能に溢れたゾイドも魅力的だが、完全に人工のゾイドというものも興味が湧くだろう？」

……そんな場所に行つて、戦争が起こつて帰れなくなつたらどうするつもりだったのですか……

「この惑星は広い。東方大陸、そしていつか南方大陸まで冒険して、その地でまた新しいゾイドに出会いたい。その為にも、戦争なんか起きない世界を一刻も早く築き、この惑星を自由に行き来できるようにするのが夢なんだ。だから頑張っているんだよ」

……あなたがいつも口にしていた平和な世界を作るといふ目的は、それだったのですね……

「ミスターの様な博愛主義者にはなれないからね。でも、自分の趣味の為に平和を築くというのも現実的だろう。君は軽蔑するかい？」

……いいえ、あなたらしくて素敵だと思います。いつの日にか、リチャードと一緒に行ってみたい、東方大陸に……

夢を見ていた。

岩陰に落下した仮設シートを立て掛け、疲れ切った身体を横たえたことまでは覚えている。微睡みであったのか、過労の為一時的に意識を失っていたのかは釈然としない。眼下に首都を望みつつ、いつしか

エレナは生前のリチャードと交わした過去の記憶が蘇っていた。

鼻につく硝煙の匂いが現実を引き戻した時、漠然とではあるが彼女は自分の目指すべき新天地に思いを馳せていた。

東方大陸。そのまだ見ぬ大地こそが、自分にとって新天地と成り得るのではないか。近年漸く交流を開始したばかりで、エウロペ以上に未知の場所である。しかし、そこであれば自分の出自は問われる事無く心穏やかに過ごせるのではないかと。

渡航手段は？ 一人きりで生活できるのか？ 住民は温和なのか、また文化水準は？

何もかも判らない。それでも、再会した時の鏝広の帽子を目深に被ったりリチャードの姿を思い出し、エレナは花のように笑った。

「あなたは遅しかったのですね」

小箱を抱え立ち上る。丘から見下ろすヘリックシティーは、次第に火災も下火になっている。大規模破壊を望まないヴォルフは、最低限の戦闘を以て都市機能の維持を命じ、迅速な消火活動を行った。これは占領統治後の共和国国民へのアピールでもある。

隧道に侵入した部隊と、セイバリオンを含む脱出部隊を追ったため、市街地で稼働するネオゼネバス帝国軍ゾイドも減っている。共和国軍が一方的に圧倒されたことも、首都の荒廃を避ける理由となった。

さよなら、ヘリックシティー。おじさまの築いた町、そして私の故郷。

エレナは心の中で別れを告げ、東に向けて歩み出した。繰り返される別れを胸に、エレナは海を目差していた。

しかし、運命は彼女を時代の拘束から容易に解き放つことはなかった。

5つの脱出ルートをそれぞれ追ったネオゼネバス帝国の追撃部隊は、4つまでの脱出機を捕捉し、それぞれにルイーズ大統領が乗っていないことを確認していた。内2機は、パイロット共々ゾイドごと黒鉛の如く炭化して撃破されたが、大統領らしき死体は確認されなかった。ヴォルフにしてみれば、共和国脱出部隊が三つに分離しているこ

とも掌握しており、更に彼の中で、第四の選択肢としてルイズ大統領が脱出を試みるのではないかという憶測を生んだ。それは民間人に紛れての包囲網の脱出である。対策として市街に戒厳令を布くと同時に、首都周辺の境界付近に小型ゾイドを伴った検問所を多数配置し、森林地帯を含む大規模な大統領捕獲作戦を発動させた。如何にしてもヴォルフは、ルイズ大統領を捕縛しなかったのだ。何機ものゾイドが群れを成し、大統領の搜索を開始した。そして後方から万全の防衛態勢を整えるために、ダークスパイナーとそのジャミングウェーブに操られ、無人のまま稼働する無数の共和国軍ゾイドをも随伴させていた。

そうと知らないエレナは、無防備に山の稜線に沿って無心に海を目指していた。全ての地位を擲ってしまい、疲労も手伝って、緊張感も警戒感も途切れていたのだ。索敵能力にも優れた小型飛行ゾイドが、頭上を音もなく哨戒飛行をしていることも気付かず。

アイゼンドラケン
鉄竜騎兵団Ⅱネオゼネバス帝国軍が開発したSSゾイドで唯一飛行能力を持つグレイヴクアマのサーモセンサーには、孤独に山の稜線を歩く人影がくつきりと浮かび上がっていた。情報は直ちにドラグーンネストに送信され、五つの脱出ルートとの関係を照会された。追撃部隊とは別の、都市制圧部隊のイクスを中破し脱出した共和国軍の青いSSゾイドの情報は既に把握していた。青いSSゾイドの脱出方向とは若干の誤差があるが、その延長上にあることに違いは無い。それ以外にも、無数にルイズ大統領関連の情報は入って来るが、そのどれもが信憑性も無く、実際捕縛してみればただの民間人である事例ばかりであった。無為に同様の行為を続ければ、今後の統治にも禍根を残す。ヴォルフはこのグレイヴクアマの情報を最後に、大統領の捕縛を諦める決意を固めていた。

「ダークスパイナー3機、及び鹵獲したゾイドを伴い、山岳地帯を逃亡中と思われる人物を確保せよ。ズィグナー、この作戦を最後に、ルイズ大統領探索は諦める。あとは皇帝である私がこの大陸を纏めて見せる。いいな」

「御意のままに。最終作戦としてのダークスパイナー部隊を回しま

す」

補佐官が機敏に命令を伝える傍らで、ヴォルフは唇を固く噛み締めていた。

期待はしていない。今度もきつと違うだろう。

それでもけじめをつけたかった。

彼は共和国大統領を確保した後には、捕虜としてではなく、為政者の心得とはどんなものなのか、真剣に尋ねようと密かに思っていた。彼は頼られるばかりではなく、頼れる存在が欲しかった。それはズィグナーのような信用できる家臣ではなく、父ギユンターの如く自分を包み込んでくれるような存在だ。10年以上共和国の指導者として統治してきたルイーズ・キヤムフオード大統領であれば、彼が為政者として成長する手掛かりが得られるのではないかという淡い期待を抱いていた。

「所詮、勝手な夢さ」

聞こえぬように、ヴォルフは呟いていた。

山の斜面に貼り付く様に刻まれた狭い山道を辿り、エレナは歩き続けていた。小箱を背中に括り付け、暗い山道を手探りで進む。脚力に自信はあったが、やはり肉体の衰えは避けられなかった。唯一の幸いは、セイバリオンに搭乗する際、耐久性に優れたパイロットスーツに着替えていたことだ。落下の衝撃や茂みの小枝から、彼女を傷つけることなく守ってくれた。ただ、ヘルメットだけは視界が狭まるため脱いでしまっていた。

眼鏡が土と煙で汚れ、前方の確認が難しい。不安定な足場で、ハンカチを取り出し汚れを拭う。しかし汚れはこびり付き、簡単には拭いきれなかった。

「こんなものですね」

エレナは立ち止まり、息を吹きかけ悠然とレンズを拭いた。

曇っているのは、見えるものも見えなくなる。

拭き終わり、再びかけ直したレンズの先に、エレナは不思議な物体を発見した。

赤いドーム状のものが、緩やかに回転しながら接近してくる。森林

に阻まれ、全景は見えないが、まるでガスタンクを半球状に切断したようなものだ。接近するに連れ、幾つもの関節が擦れ合う音が響く。典型的な多脚式ゾイドの移動音だ。エレナは身構えた。

ドームの真下から、巨大な鋏とその中で回転するガトリング砲の煌めきを目にした。キラードーム、電子戦に優れた重装甲の蟹型ゾイドであった。

キラードームは既に、グレイヴクアマからの情報を元に索敵し、エレナの位置を把握していた。しかし作戦を確実なものにするため、増援部隊の到着を待っていたのだ。森林を突き破り、巨大な鋏を振り上げたキラードームは、8本の歩脚を忙しげに動かしながらエレナに迫る。エレナは怯まずに、両方の鋏の間をぬって、キラードームとは反対の方向に駆け出した。進むべき道とは別方向だが止むを得ない。山肌から離れ駆け出したエレナをキラードームは牽制を込めてガトリング砲を放つが、ゾイド星特有の金属粒子を含んだ樹木が彼女の盾となり、至近弾を到達させることを阻む。

エレナは安堵していた。あの蟹型ゾイドであれば、森林地帯は最も不得手とするフィールドだ。逃げ切る事も難しくない。ただ、なぜ蟹型ゾイドが単機で接近していたのか不思議であった。

彼女の疑問は、絶望的な解答を提示した。

「ガンズナイパー、スナイプマスター、それにシールドライガーまで」
キャノピーは割れ、コクピットに人影は無い。右腕を失い、左のウィーゼルユニットを欠くガンズナイパーが項垂れたまま立ち塞がった。小刻みに振動し、漸く稼働している。

最大の特徴であるロングレンジスナイパーライフルを備えた尾部を途中から失い、ザンスマツシャーもだらしなく垂れ下がったスナイプマスターは、口腔から漏れ出した循環液を滴らせている。

インタークーラーを失い、右のレーザーサーベルの折れたシールドライガーは、高速ゾイドとは思えないほど緩慢な動きで迫って来る。見れば、右前足は関節と逆方向に曲がり、右後脚も動かないまま引き摺られている。どの機体も稼働不能と言えるほどの損傷を受けている。幽鬼の如く迫る無人の共和国ゾイドの奥で、背鰭を蠢かすゾイド

がある。背鰭に印されたピンク色の光が、群れた別生物の眼光の様に輝く。ジャミングウェーブによって無人ゾイドの操縦をしているのだ。背後にはキラードーム、前方には半壊した共和国鹵獲ゾイド、そしてダークスパイナー。エレナは完全に取り囲まれていた。

シールドライガーのストライクレーザークローは、鋭さの欠片もなく地表に叩きつけられる。ガンスナイパーもスナイプマスターも、身体ごと覆い被さるように彼女の退路を断つ。歓喜の踊りを捧げるかのように、ダークスパイナーの背鰭が怪しいピンク色の紋様を揺らめかせる。

歩兵部隊が到着してしまえば終わりだ。最悪の予測が現実になるのは近い。

「ここまでの……」

エレナは悔しさに天を仰いだ。薄らと水平線が白んでいる。絶望的な夜明けを迎えるのか。共和国首都の陥落と、大統領捕縛という絶望的事実を国民に知らしめて。

潔く自決をすればいいのか。

ただ、自ら命を絶つことだけは、やはり選べなかった。生命に対する冒険は避けたかったからだ。

涙がエレナの頬を濡らす。悲しいからか、悔しいからかは判らない。自分に負けた気がした。これまでの努力が水泡に帰した気がした。自分のやってきたことが全否定された気がした。寂しくて仕方なかった。

「リチャード、お父様」

苦し紛れに、愛しい人々の名前を叫んでいた。だが、最初に叫んだ二人は、すでにこの世に存在してはいなかった。

「シユウ！ キヤロル！」

二人がいま何処にいるか、この混乱の中では確認できない。

「ブローニヤ、セーラブ先生」

遠くエウロペの地で診療を続ける友の名を呼んでも、届くはずもない。

「マイケル先生」

優秀な技師、そして勇敢な戦士も年老いた。

「ロブ……」

遠くニクスの地で連絡を絶った息子の名前を呼んでも、今はあまりに遠すぎる。

もう、叫ぶ名前も無かった。自分にはもう、頼れる人は残っていない。

エレナの心は崩れ落ちる寸前であった。

ふと、もう一人だけ思い浮かんだ名前があった。遠い記憶に封じ込められていた名前だ。忘れていたのに、こんな時に思い出すなど。

エレナは無心にその名を叫んでいた。

「シユテルマー……」

幽鬼の如きシールドライガーが弾丸の様に薙ぎ払われ吹き飛んだ。

巨大な剛腕が、ガンスナイパーとスナイプマスターを同時に掴むと、頸部を持ったまま思いきり樹木目掛けて叩き付け、串刺しにする。怯むキラードームを蹴り上げ、ダークスパイナーに投げつけると、背鰭に命中しバランスを崩して横倒しとなった。

エレナの目の前に、赤い小山のようなゾイドが聳え立っていた。

「アイアンコング Mk-2……まさか」

PKの存在を知らず、ましてE型を知らないエレナは、その赤いコングを伝説の赤い悪魔と同一視していた。しかし、その機体を操作しているのは謎のコマンドーではない。関節の可動域を広げたアイアンコングEは、頭部コクピットを地表面ぎりぎりまで落としハッチを開く。ヘルメットを脱いだ下から現れたのは、鋭い眼光を放つゼネバス帝国兵であった。

彼も彼女と同じように年老いていた。左腕は力無く撓垂れ、頭には白髪が雑じる。しかし、エレナは時の流れに逆らい、彼が変わらずに生きてきたことを感じ取った。絞り出すような嗄声で彼が告げる。

「飛び立った籠の鳥を求めて鳥兎怱怱、やっと巡り合うことができました」

間違いない。あの日交わした言葉の答えだ。込み上げる想いを抑えながらエレナが告げる。

「そこに気まぐれな鳥が舞い戻る止まり木はありますか」

操縦席の彼は、深く刻まれた眉間の皺を綻ばせる。

「この止まり木は野生と同じく過酷なもの。それと御承知おきならばお戻りください」

「はい」

迷いは無かった。エレナはアイアンコングEの並列タンデムの操縦席に這い上がる。

二人を乗せたアイアンコングEのコクピットハッチが閉じ、コングの眼は鮮やかに輝いた。

ダークスパイナーのジャミングウェーブの運用法には3種類ある。

① その名の如く強力なジャミングを行い、ゾイドの活動を停止させること。

② ゾイドの破壊衝動のみを増幅し、野良ゾイド同様本能のまま破壊を行わせること。

③ 操縦系統を完全に制御し、味方機同様に操縦すること。

戦闘ゾイドは、鹵獲されても容易に敵に使用されないよう、起動キーや生体認証、若しくは特殊なコードを入力しなければ稼働できなくなっている。だが、ジャミングウェーブは生体体としてのゾイド自体を操るため、後付の鹵獲防止装置など意味を成さなかった。例を挙げれば、共和国軍のライガーゼロは前記③の運用法により鹵獲防止装置が解除されないままにコンバットシステムを起動させられ、システムを完全に書き換えられた。その後イクスパーツに換装され、ネオゼネバス帝国軍兵士によって操縦されることとなる。

孤独な逃避行をするエレナを襲ったシールドライガー、ガンズナイパー、スナイプマスターは、前記②のジャミングウェーブ運用によるものである。生命体としてのゾイド本来の思考を封印し、単純な破壊を行うだけで、そのゾイドの機体が傷つくことも忘却してしまう。イメージとして、覚醒剤を大量に摂取した直後の麻薬中毒患者と考えればいいだろう。ゾイドは生命体としての生存本能さえも封印してしまう。無差別に破壊する機体は敵にパニックを起し、基地施設の破壊や同士討ちを促す効果がある一方で、集団の戦闘行動は不可能となる。

ジャミングウェーブの当初の目的は①の単純に敵の動きを止めることであり、それ以外の運用は副次的なものであった。それでも運用次第では恐るべき能力を発揮する。シユテルマーとエレナを乗せたアイアンコングEの周囲から無数のゾイド群が湧き上がって来た。た。

コングのリーダーに“enemy”を示す数十の光点が浮かぶ。

林の向こうから現れたのは、②で運用された半壊したゾイドではなく、③の運用によって整然と隊列を組んだガンズナイパー群と、AC装備のコマンドウルフ部隊であった。コクピットにはやはり人影はないが、軍事パレードの行進の如く、一糸乱れず同一の動きを取っている。『機械仕掛けの』という表現がこの場合適切であるか疑問だが、正確に動きをトレースして接近して来ていた。

「操られている」

コングのコクピットで、二人の眩きが重なる。

エレナも瞬時に状況を判断した。

最初に襲いかかったシールドライガーやガンズナイパーのように、1機のダークスパイナーで異種のゾイドを同時に操作することは出来ない。結果、ジャミングウエーブ運用②となる。だが同一機であれば、オート balancer などの自律機能だけをゾイド各個体に任せ、一斉に戦闘行動を行わせることは可能だ。1機のダークスパイナーに一種類のゾイドから編成される部隊を操作させ、戦闘行動をさせる。遠望する先に2機のダークスパイナーがあり、先程キラードームを投げつけたものに加え計3機。恐らく奥の2機が、それぞれガンズナイパー部隊とコマンドウルフ部隊を操っているに違いない。十数機の機体が、一斉に四肢を同時に動かし迫る姿は、嘗て見たことの無い不気味な光景であった。

ウルフのロングレンジキャノンが仰角を付けると同時、ガンズナイパーのミサイルポッドハッチが解放される。発射の閃光と共に、コング目掛けて無数の弾丸が飛来した。

ウルフのキャノンはまだ試射のため、至近弾こそあれ命中弾は皆無であったが、ガンズナイパーのミサイルはホーミングタイプのため十数発がコングの赤い装甲に直撃し破壊した。先ほどとは全く違った攻撃パターンである。間合いをとって攻撃する無人ゾイドに対抗する為、コングはビームランチャーの発射態勢を整える。左腕を地につけ、右腕を銃身に添えた時、周囲が一斉に燃え上がるような着弾が起こった。試射を終えたウルフが、着実に照準を合わせて来たのだ。足場を取られ、軸線をずらされたビームランチャーの光条が虚空に吸い

込まれていく。激しい振動によりシュテルマーの身体がエレナに凭れ掛かった。

一瞬、甘い香りが漂う。しかしエレナは、その香りの奥にある異様な匂いに気が付いた。

「あなた、左腕が」

彼の左腕が殆ど動いていない。腱が切断されたかのように、だらりとぶら下がっている。多くの傷病者を診た経験を持つエレナには、その仕種から、彼の左腕が完全に壊死している事を察知したのだ。

「操縦桿も握れないはず、出来ることを命じてください」

「音声認識とサブシステムで代行しています。包囲網を突破するまでの辛抱です」

「もう虚勢を張るのは止めましょう」

弾着音に紛れ、エレナの透き通った声が響く。

「もう、お互い痩せ我慢なんて懲り懲りなんです。」

シュテルマー、一緒に戦いましょう。一緒に生き残りましょう」

老兵の鋭い眼光がエレナに向けられた。僅かに眉間に皺を寄せた後、武骨な風貌に似合わない穏やかな笑みが湛えられる。

「姫様は、相変わらず気丈で御座いますね」

「頑固なのは父親譲りですよ、お互いにね」

見つめ合ったのは、一秒の数分の一でしかなかった。それでも二人の心は瞬時に繋がっていた。数十年の時を越え、巡り合った旧知の友は、互いを隔っていた期間など物ともせず、一体となってアイアンコングの操縦を始めていた。

少女時代、エレナは父に付き添われてアイアンコングのコクピットに座ったことがある。戯れにマイケルと共に操縦したこともあった。ガイロス帝国によって複製された機体は、E型故に一部簡素化されていたものの操作法は変わらない。シュテルマーの左腕が届かないコ・パイロットシート of 火器管制を一手に引き受け、無人の共和国ゾイドに向け火を開いた。

10連発自己誘導ロケット弾ランチャーのハッチを開く。ウルフの足元目掛け、斉射する。顔れ横転するメタリックブルーの機体を

睥睨しながら、エレナはすぐさまビームランチャーへのエネルギー充填を行う。シユテルマーはハイマニューバーブースターを点火し、瞬間的ではあるが空中に機体を舞い上がらせた。

ビームランチャーへの充填完了、3秒間の照射が可能だ。軸線に哀れな操り人形と化したガンズナイパー群が映る。「御免なさい」とエレナは心の中で呟く。

「ファイアー！」

迷いを断ち切る為にエレナが叫ぶ。横殴りの閃光に薙ぎ倒されるガンズナイパー群を眼下に、赤い巨体は大地を揺らして敵の眼前に着地した。間合いを詰められ格闘戦に即応できない生き残りのガンズナイパーをアイアンハンマーナツクルが叩き付けた。吹き飛ぶ小型ゾイド群の奥、傀儡くわいの主であるダークスパイナーの背鰭が見える。コングの機体二つ分、あと僅かでハンマーナツクルのリーチである。ブースターを再点火し、思いきり剛腕を叩き込もうとした直前であった。

コングの動きが不意に重くなった。駆動系に異物が挟まったような感覚だ。

正面のダークスパイナーに気を取られ過ぎていた。後方から接近していたもう1機に、指向性のあるジャミングウェーブを撃ち込まれたのだ。

コングは右腕を伸ばしたまま、凍り付いたように機動を停止する。コンソールにシステムフリーズのメッセージが表示され、火器管制も一斉にダウンする。前のめりに倒れ込むコングの背中に、背鰭の無いダークスパイナーが接近してきた。

その背中にはキラードームが乗っていた。背鰭を失った1機目は、攻撃を重点に置いたクラスパイナーに合体していたのだ。

地表に這いつくばって無防備に背中を晒すコングを前に、クラスパイナーはジャイアントクラブをコングのマニューバスターに叩き付けた。バーニアスタビライザーが弾け飛び、TVM地对地2連装戦術ミサイルのランチャー部も筆り取られる。生き残っていたガンズナイパーが、一斉にAZ144mmスナイパーライフルの発射態勢

を取った。照準の中心に、既に焼け焦げて装甲を幾つも失ったコングが横たわる。左の剛腕でコクピットを漸く庇うようにしているが、ガンズナイパーの徹甲弾を受ければ防ぎようもない。

「姫様、潮時の様です。脱出してください」

「まだそんなことを言うの」

シュテルマーは、その武骨さに似合わず言葉に詰まる。隣に座る女性性は、確かに共和国を率いていた人物であったことを実感する。

「もういいのです。私の役目はとつくに終わっているのだから。最期くらい、あなたと一緒にいても、亡き夫は許してくれるでしょう」

「いいえ、許されません」

彼は、彼女の凜とした言葉をも遮った。

「あなたは生きねばならぬ方、今あなたを死なせるようなことがあれば、リチャード・キャムフォード殿に顔向けできません」

エレナは自分の夫の名を、彼の口から聞くことに驚くと同時に感動していた。彼は亡き夫を含めた上で、自分を受け入れているのだと。

生き残らなければならぬ。改めてその気持ちを強くする。そしてそれは、隣に座るひととの人生である。離れていた時間を取り戻すためにも、漸く訪れた自分の時間を生きるためにも。

ジャイアントクラブが間断なく叩き付ける。装甲は崩れ、機体の関節が歪む。徹底的に叩き付けた後、頃合いを見て離れていく。キラースパイナーが退いた後方に、動かない標的目掛けてガンズナイパーのスナイパーライフル発射態勢が整ったのだ。

二人は願った。

力が欲しいと。

それは敵を倒すための力ではなく、互いに生き抜く力だ。

このひとと生きたい。

生き残りたい。

互いを支え合い、人を支え合い、殺戮のために生きた人生を拭い去り、誰かを幸せにするために生きていきたい。

平和な世界を作るため、自分を含めた全ての人々を幸せにするため、ゾイドと人とが平和に生きる、素晴らしい世界を作るため。

シュテルマーは願った。

エレナは強く願った。

二人の手は、いつしかアイアンコングEの操縦桿に重なり、強く握り合っていた。

「姫様と一緒に生きていきたい」

「シュテルマーと一緒に生きていきたい」

「最後まで、一緒です」

「私もです、シュテルマー」

エレナが顔を上げた。

「今だから、素直に言えます。ずっと慕っていました。あなたを愛しています」

コングの機体が、神々しい輝きに包まれた。

輝きが、飛来した徹甲弾を跳ね返し、アイアンコングEは機体ごと光の繭に包まれていった。

E型と称されるアイアンコングは、敢えて通常の改造機と同じ開発コードを与えられ開発されていた次期主力ゾイドの先進技術実証機(Advanced Technological Demonstration X, ATDX)であった。"E"が示す意味とは"Evolute(進化)"である。

これまでガイロス帝国軍が研究開発してきたゾイドは、あくまで兵器として量産化を考えたものが根底にあったが、このE型コングは「生命体」としてゾイドの進化を目指したものであり、これまでのゾイドとはコンセプトそのものが大きくかけ離れたものとなっていた。

開発の経緯として挙げられるのが、やはりオーガノイドシステムの存在である。古代ゾイド文明の遺跡から解析された謎の技術は、ガイロス帝国軍部やその関係者、並びにゾイド研究者達に、ゾイドとは一体どのような存在であり、その進化を人の手で進めることは可能であるのか、そして現在この星の盟主として君臨するゾイド星の人類との遺伝子的繋がりはどこにあるのか、という疑問を投げ掛けた。

兵器ではなく生物としてのゾイドを徹底研究するという目的のため、研究は軍部の独占ではなくヴァルハラ科学大学を拠点に帝国政

府関係者、民間企業なども一体となって続けられ、実験が連日繰り返された。

テストベツトとしては、最も扱いやすく生命力に溢れたゾイドをということで選ばれたのがコング型であり、類人猿型と人との関係性をも突き詰めた結果でもある。外形はアイアンコングを素体にしており、装甲などもそのまま流用しているのでバックパックから肩へ伸びているパイプを除けば一見するとそれほど変わるものではない。また、アイアンコングと同じ外観パーツを使用していたが故に同武装をそのまま装着することもできた。ギョントアが、敢えてE型にPK仕様の武装を装備させたのも、重武装化の目的と同時に、その本質を隠蔽するためでもあった。

E型は、オーガノイドとは違った進化の形態を模索するものとして、ヴァルハラ大学に於いて数機の実証機が完成する。だが結果的に、首都ヴァルハラで起きた爆発により実証機が消失。多くの技術者も巻き添えとなり命を落としていた。このことから研究計画も頓挫したが、ギョントアがシユテルマーに与えた機体はヴァルハラの研究施設から密かに接収され残された、唯一の“エヴォルトシステム”を搭載する実証機であったのだ。

装甲が剥ぎ取られ、素体状態に変化したアイアンコングEのフレームが輝く。ゾイドコアを中心に、光が血流の如く体内を駆け巡る。シリンダーやサーボモーターが瞬時に表皮に呑み込まれ、臓器を思わせる微細で有機的な組織へと変化する。無数のケーブルが脊索となつて、背部を支える神経節の支柱となる。脊索から光の束が伸び、先端には星状体つまり巨大ニューロンによるシナプスが形成され、瞬時に無数の細胞分裂を繰り返し桑実状の神経節を形成する。ガングリオンと呼ばれる巨体の反応速度を高める体節毎に存在する疑似的な小脳となり、再生されたサーボモーターに覆われる。肩が、胸が、大腿部が次々とケーブルの束に覆われ、隆々とした筋繊維を形成する。透き通った頭部コクピットにエレナとシユテルマーの人影が浮かび上がるが、光はシルクの羽を広げたように全てを温かく包み込み、キャノピーから金色の輝きを放ちつつ全てのフレームの形成を終えた。

本体の周りを旋風の如く舞い続けていた赤い装甲板の破片が、フレームの変化に同調して徐々に形を成していく。一つのパーツが変化するたびに閃光が奔り、母鳥に寄り添う雛鳥の如く次々に素体フレームに装着されていく。戦火に晒されていた鮮血ブラディレッドの赤が神々しい煌めきの赤へと変化し、機体のほぼ全体を包む。オーガノイドシステムを遥かに上回る強烈な再生能力がコングの機体を再構成し、雄々しさと繊細さを兼ね備えた優美な姿を戦場に顕現していく。極限状態の中、エヴォルトシステムは操縦者達の強い意志に共鳴し、機体を更新る新たな生命体へと変身させたのだ。

「これは……」

ゾイドの意志より齎されたメッセージ。二人はコンソールのマルチディスプレイに浮かぶ“Evolution”の文字を読み取った。

旋風を拭い去り、再び大地に降り立った時、アイアンコングEは新たな生命を得たゾイド、『アイアンコング・エヴォルトオーネ』へと生まれ変わっていた。

60 (2101年)

「この姿は……」

「自分にも、わかりません」

エレナはふと、記憶の淵に留めていた会話を思い出した。

「シユウから——あの時ガンブラスターであなたと戦った共和国の科学者です——聞いたことがあります。進化生物学を学んでいた彼の友人が、断続平衡説といわれるゾイドの種としての跳躍的進化は人の意識に感応し、突然変異をも超越した急激で神秘的な能力が存在するはずだと主張したことを。」

私は笑って言いました。『人の意志の力でそんなに都合よくゾイドが変身できるのでしたら、マイケル先生達技術者はお払い箱ですね』と。

でも今、私たちは強く願ったはずです。生き残りたい、それも二人で。この機体はその想いに応える機能が備わっていたのではないのでしょうか」

エレナの話を聞きながら、シユテルマーはあの日最後に見たギョクターの背中を思い出していた。死出の旅路に向かうには違和感があった。何かに期待をしている気がした。その一つが遺していく息子ヴオルフ・ムーロアであり、もう一つが自分とこの機体、そして自分が救うであろう姉エレナのことではなかったかと、今更ながらに思えた。それは亡きゼネバス・ムーロアが持っていた諧謔、葛藤の中に隠した矛盾する答えを、ゼネバスの息子ギョクターが受け継いでいた証拠と思えた。

「閣下、感謝いたします」

シユテルマーは静かに呟く。

遠く見渡す水平線に、朝日が昇っていた。

突然のエヴォルトに呆然としていたダークスパイナーだが、再び強力な指向性のあるジャミングウェーブを撃ちこんできた。しかし、それに対抗する為にエヴォルトしたアイアンコング・エヴォルトツォーネにとって、もはや何の効果もなかった。

周囲に散乱していた連装電磁砲、大型ビームランチャーを拾い上げると、電磁砲をハードポイントに装着しビームランチャーを抱え込む。そして背中と腕から伸びたケーブルを2本の腕と5本の指で器用に引き出し装備する。それは既に金属生命体としてのゾイドではなく、ゾイドコアを媒介にして人に似せた生物——いわゆるホムンクルス——である。『人間型ゾイド』にも見えた。

エレナは、ビームランチャーの充填率が異様に早い事に気付いた。コアが活性化している。それに負担も少ない。エネルギーゲージ一杯になったビームランチャーを構え、エヴォルツオーネは雄叫びを上げる。

「照射10秒、行けます……シユテルマー、あのゾイド達、殺さずに倒せますか」

昔と変わらず、ゾイドにも愛情を注ぐ姿に過去が蘇る。

「脚部を狙います」

右腕でシユテルマーがトリガーを引く。伸びる閃光がウルフの足を薙ぎ払い、次々と横転させて行く。AC部隊はほぼ壊滅となるが、その爆炎の向こう側に、再びAZ144mmスナイパーライフルの発射態勢を取ったガンズナイパーが出現、一斉に徹甲弾を発射した。

ゾイドとしては信じられないほどの柔軟性で、射線から身体を逸らし直撃を避ける。マニューバラスターは既に破壊されているにも拘らず、それ以上の跳躍力で一気にガンズナイパー群の元に接近、ビームランチャーを逆手に持って棍棒の様に振り回し、残る機体を完全に打ち据えた。

前傾姿勢を取り、ジャミングウェーブを発生していた2機のダークスパイナーも、自らの攻撃が通じないことを知り慌てて格闘形態に変形する。

「殺さないでー」

シユテルマーは無言で頷くと、ダークスパイナーの蠢く背鰭を掴み力の限り筆り取った。頸部を僅かに捻じ曲げられ止めの手ハンマーナックルを受けたダークスパイナーは、2機とも森林の中に吹き飛ばされ動かなくなった。コアに損傷はない。戦闘ゾイドとしては再起

不能だが、死ぬことには至らないだろう。エヴォルツオーネの前には、キラースパイナー1機のみが残っていた。

その時シュテルマーは、エヴォルツオーネの圧倒的な能力により敵が残る1機となったことに油断していた。彼らはキラードームがそのドーム内に強力な通信装置を装備していることを知らない。背負われたキラードームは戦闘の経過を逐一報告し続け、更には増援部隊さえも呼び寄せていた。増援のダークスパイナー3機が、5機のゴルドスと十数機のカノントータス、そして3機のゴジュラス部隊を率いてエヴォルツオーネの元に接近しつつあった。そうとは知らないシュテルマーは、残った1機のキラースパイナーを睨みつけていた。「あれはどうしますか」

「何とか、命を奪わず倒せますか」

「昔から無茶を言う方ですね。いいでしょう、やってみます」

彼は自分が饒舌になっていることに気付いた。これが人との触れ合い、愛した人、いや、愛するひととの触れ合いなのかと。

自分の人生は終わったはずだ、などというのは思い違いに過ぎないと知った。

老いたとはいえ、今自分は生きている。生きて戦っている。

それも憎しみの為ではなく、復讐の為でもなく、敵を含めて生き残るために。

人生とは戦いに相違ない。でもそれは、互いの命を奪い合う殺伐とした戦いではなく、互いに高め合うための競い合いだ。

ゾイドは互いに競い合うことで進化を遂げてきた。

我々人類も、さしてゾイドと変わりはないはずだ。

生きてこそ、生き抜いてこそ命は育つ。

そしていつしか死を迎えた時、後の世代に競い合った知識と経験を残し、時代を積み上げていくのだ。

死ぬことは何時でもできる。

生き抜くことの方が、遥かに苦しく、厳しいものだ。

それでも生まれてしまった以上、生きていくほかない。

下を向いて、過去を振り向きながら生きるより、前を向いて進むほ

うが正しい道筋を見ることが出来る。

自分は残り僅かの人生であつても、想い人と再び出逢うことが出来た。その幸運に感謝しよう。

「エレナ様」

「ルリーズと呼んでください」

「ルリーズ……様、共に生きましょう」

「はい、互いに命尽きるまで」

アイアンハンマーナックルが、キラースパイナーの脚部を削ぎ落とし、ジャイアントクラブを根こそぎ引き抜き圧倒する。

累々と横たわるゾイド群を足元に、アイアンコング・エヴォルツォーネは輝く朝日の陽射しを浴び、雄々しく勝鬨のドラミングをしていた。

戦いを終えたコクピットの中、シュテルマーが左腕を抱え込んで蹲る。限界を超えて肉体を酷使してきた反動が襲ったのだ。

思わずエレナは彼に寄り添い、シュテルマーの左腕を持ち上げる。

「これ程までに悪化していたなんて」

ゆつくりと持ち上げた感覚で、エレナは悟った。彼を正面から見据え、静かに言葉を選びながら告げる。

「どうか驚かないでください。私は看護師として傷病兵の治療に携わってきました。様々な症例を見てきた経験から申し上げます。あなたのこの腕はもう……」

「切断する以外に救済の方法がないのですね」

苦痛に歪む表情を浮かべながら、彼は悲しげに笑って即答した。

「覚悟はできていました。ただ、こうして生き永らえたことこそ奇跡と思っています。甘んじて艱難辛苦を受け入れましょう」

エレナは僅かな沈黙の後、小さく首を横に振る。背負っていた小箱を取り出し、シュテルマーの前に置き、そつと蓋を開いた。

緩衝材に埋もれた箱の中から現れたのは、手入れが行き届いた、使い込まれた跡の残る左腕の義手であった。

「リチャードの遺したものです。これを使ってください。きっと夫も喜んでくれるでしょう」

エレナは微笑みながら泣いていた。まるで思春期の少女の様に大粒の涙を流しながら。その義手に、計り知れないほどの切ない思い出が詰まっているからに違いない。全てを擲なげうつて去つてきたにも関わらず、一つだけ携えてきたものが亡き夫の形見であり、なおかつそれを自分に託そうとするエレナに、シユテルマーは彼女の気持ちが真実であることを確信した。

「ありがとうございます、ルイーズ。是非とも使わせてください」

「ありがとうございます、シユテルマー。私の全てを受け入れて頂けて」

箱からそつと取り出し持ち上げる。

「……手術は可能でしょうか」

「この惑星で最高の医師を知っています。いま南エウロペにいるはずですよ。任せてください」

眼鏡を額に持ち上げて涙を拭いながらエレナが微笑む。シユテルマーはいつの間にか左腕の痛みが和らいでいたことに気付いた。

コクピットにアラート音が響く。ディスプレイに再び「enemy」を示す光点が無数に現れる。

「そんな……」

確認されたのは、数十機から編成される鹵獲ゾイドの大部隊である。

或いはこのエヴォルツオーネであれば、倒せない数ではないだろう。だが、先程の様にゾイドの生命を奪わずに戦うことは不可能と思える兵力である。

これ以上、ゾイドの命を奪いたくない。しかし四方から迫るダークスパイナー率いる部隊は、完全にエヴォルツオーネを包囲していた。

「覚悟してください。ゾイドを倒さずして、脱出は叶いません」

「止むを得ません」

言つてからも、エレナは悲痛な気持ちを拭い去ることができなかつた。

突然、頭上に赤い翼を持つ黒いゾイドが現れた。

背部の銃身から放たれた強力な光が、幾つもの鹵獲ゾイドを薙ぎ払う。

光に纏わりつくプラズマから、その兵器が荷電粒子砲であることだけはわかるが、これほどの破壊力を持つ飛行ゾイドは、エレナの記憶に無かった。

傍らで、シユテルマーも呆然としていたが、あるゾイドの名前を口にした。

「ガンギヤラド。なぜあんな機体が」

黒いドラゴン型ゾイドだ。惑星大異変グランドカタストロフによって絶滅したと思われる。黒いガイロス帝国純正の大型ゾイドである。大きく旋回を続けながら、次々とハイパー荷電粒子砲でダークスパイナを狙い撃ちにしていく。ジャミングウエーブの届かない上空から、ガンギヤラドは悠々と傀儡師の背鰭を撃ち抜き、呪縛する操り糸を切断していく。カノントータスが、ゴルドスが、そしてゴジュラスが、呪縛を解かれ次々と進軍を停止する。後方で背鰭であるジャミングブレードを撃ち抜かれたダークスパイナが退却していく。直接戦闘が回避されたことに、エレナは胸を撫で下ろしていた。

ガンギヤラドから錘の付いた細いケーブルが伸び、エヴォルツオーネの前に落下した。有線での通信を行うつもりなのだろう。シユテルマーは機体を操作し、ケーブルを拾い上げた。

「聞こえるか、赤いコング。上を見る」

ガンギヤラドのパイロットからの通信だ。不思議な事に、その声に二人とも聞き覚えがあった。言葉に従い空を見上げる。

朝焼けに染まる茜雲を纏い、直上から降下する巨体が現れた。見る見る地上に接近すると、空一面を覆うばかりのホエールキングが2隻出現した。

『秩序オレンと知恵マニと調和ニペを与え賜え』、と書いてあります」

エレナは船体の下部に記されていた古代ゾイド文字を読んでいた。エレナにとつてあの深山幽谷の宮殿で出会った、見覚えのある言葉であった。通信が立て続けに送られる。

「これから貴様らを釣り上げる。余計な物は捨てて平地に来い」

「誰だお前は。何故我々を助ける」

シユテルマーが呼びかける。それはエレナも同じ気持ちであった。

“馬鹿者が。俺の声を忘れたのか。おめでたい奴らだな。ヴァーノン・ワングユルだよ”

「ヴァーノン中佐―」

二人の言葉が重なる。

“その階級章で呼ぶな。古傷に触られるようだ。俺はキリンデインの糞ジジイに頼まれて、貴様らを助けにきたんだよ。わざわざ出向いてやったんだ、さっさとホエールキング『パルデン・ラモ』に乗れ”

嘗ての慇懃無礼な口調は消え去り、言葉は口汚く荒々しい。しかし彼が本音で生きている温かみが伝わる。エレナは知った。人は変われるものなのだ。

ネオゼネバス帝国軍の一瞬の間隙について強行着陸したホエールキング『パルデン・ラモ』は、エレナたちの乗るアイアンキング・エヴォルトツオーネを収容すると、僚機である『ドルジエ・シユクデン』と共に緊急浮上する。強力なジャミング出力とステルス性能を併せ持ち、尚且つ希少で強力なガンギヤラドの護衛を伴った2隻のホエールキングは、ネオゼネバス帝国の追跡を容易く振り解き、西に向かって飛び去って行った。

「所属不明の2隻のホエールキングは、西方に進路を取り、飛び去ったとの報告です。偶然帝都上空を哨戒中の『モビーディック』が2隻の機影を確認しましたが、南エウロペ方面に向かったとしか確認できておりません。防空部隊の不手際、遺憾ともし難く、管轄者として面目次第も御座いません」

ヴォルフを前にして、ズイグナーは深々と頭を垂れていた。止むを得ないことと知っていた。どれほど共和国軍を圧倒したとはいえ、中央大陸全土を勢力下に置いたわけではない。警戒網の穴を突いて脱出することなど造作もないのだ。それに若き皇帝にしてみれば、幼い頃より仕えてきた忠臣に、これ以上の屈辱的な姿勢を取らせることは忍びなかった。怒りが無いわけではないが、今更老兵が一人去ったことで悔やむ感情は湧いて来なかった。あるのは幾つかの疑問であった。

「なぜそのホエールキングを捕捉出来なかった。増して我が軍最強の『モビーディック』であれば尚更であろう」

「恐れながら陛下、敵はそれをも上回っておりました」

「ガイロス帝国なのか」

ズイグナーは届いていた報告書に目を落とし、自身も信じ難いという表情を浮かべ答える。

「艦種こそホエールキングですが、速度やステルス性、機動性などスペックが桁違いです。一部技術的な点で古代ゾイド文明と通じており、或いは形が同じだけの全く別種の機体かとも思われます」

あり得ることであった。巨大な輸送ゾイドであるホエールキングは、その亜種であるホエールカイザーから派生的に開発されたものである。ドラグーンネストの如く、強制的に巨大化させたゾイドと異なり個体差も大きい。謎の機体が南エウロペに向かっていることから、未知の技術が採用されている可能性は存在する。今更目の前の律義な補佐官を責めたところで、見失ってしまったという結果は変わらない。

「シユテルマーとアイアンキングEはどうした」

「依然、確認できません。可能性としては」

「もういいよ」

ヴォルフは思わず以前から交わしていた口調で、その補佐官の言葉を遮った。

聞きたくもなく、責めたくもなかった。

「もういい。下がって共和国領の統治計画を再考しておいてくれ。ルイズ大統領が見つからない以上、我々だけでやらねばならぬのだから」

俯きながら、ズイグナーが恭しく去って行く。ヴォルフは久しく親しい言葉を交わさなくなってしまった、育ての親ともいえるその補佐官の姿を寂しく思い返していた。

一方のズイグナーも、決して若き皇帝に悟られぬ場所で、安堵していた。

『ムーロア一族の血の縛りを断ち切るために、息子に我が姉と会い見

えることの無いよう取り謀れ。これは貴君とシユテルマーのみが知る事で良い』

ギユンターより託されたのは、伯母殺しという不名誉な称号をヴォルフに背負わさないための苦肉の策であった。敢えてシユテルマーにエレナを救わせることにより、後にヴォルフが彼女との血縁を知り、己の血の呪いに苦悶することの無いように謀ったのだ。或いはこの若き皇帝がエレナと出会った時、その思想に感化され、帝国再興の目的が揺らぐことを恐れたのかもしれない。

何れにせよ、ギユンターも同じゼネバスの血を引く者として、エレナが再び為政者の地位に就く事が無いのを予測していたのであろう。シユテルマーはギユンターの餞の言葉の裏側を理解し、ズイグナーも若き皇帝の穢れを防ぐため尽力した。

これらは紛れもなく皇帝への裏切りである。だがそれは、最高の忠誠心から発したものである。

その後、叔母殺しの汚名を被ることなく、ヴォルフはこの惑星にネオゼネバス帝国中興の歴史を記すこととなるが、彼の生涯を描くのはこの物語の主題ではないので省くこととする。

ただ一つだけ言えるのは、この若き皇帝も、その後多くの人々と出会い、そして成長していったということだった。

61 (2111年)

海から吹き渡ってくる風が、彼女を温かく包み込む。

遙かに望む山並みから滔々と流れ出た雪解け水は、新緑の大地を潤わせ、新たな生命の息吹きを次々と産み出している。

小川のせせらぎを聞きながら、彼女は小さく呟いた。

「春が、来たのね」

無邪気な嬌声が聞こえる。山間の村落に戯れる子ども達が、一斉に彼女の周りを取り囲む。

「ばあちゃん、おはよう」

「おはようございます、みんな」

思い思いの服装と、様々な年齢や種族の何人もの少年少女が、彼女の背後の建物に入って行く。所々に粗い丸太の木目と節がのこる木造の学び舎に、賑やかな子どもたちの歓声が満ちていた。

都市部を遠く離れ、時折訪れる航空便以外に交通手段を持たないこの村では、彼女は貴重な知識の担い手であった。

東方大陸は、嘗て地球からの移民船が不時着した後、一部の住民が第一次中央大陸戦争の混乱を避け入植していた。そこで独自の文化形態を育み、独自のゾイドを飼育して長く暮らしていたが、大陸間の交流が深まり、特にその10年前より始まった中央大陸との交易は、この東の大地に様々な恩恵をもたらしていた。

幸いなことに、東の大陸には戦禍が及ぶことは無く、戦争によって研鑽された優れた科学技術が数多く伝わり、急激な近代化を成し遂げていた。それに対し、その技術を学ぶにあたり、異なった言語を含め中央大陸に関する知識を有する者はこの地には稀だった。

その頃、村の山間にひっそりと暮らし始めた夫婦らしき二人の住人があった。

何処からともなく現れたその二人は、巨大な赤いゾイドを使い、村人たちに許可を得た上で山間の荒野を開墾し、ほぼ自炊での生活を営んでいた。

その大きな赤いゾイドが中央大陸由来の機体であることは確かで、

村人たちは二人が中央大陸からの移民であろうと噂した。しかし、戦乱を知らず、足る事を知る村人にとって、二人の存在は興味を抱かせる対象ではなかった。

転機は、村で起こった事故からだった。

村はずれの一本の大木に、戯れに登っていた少年が足を滑らせ大けがをする。

全身を強く打ち、腕の骨も折れ、頭部から夥しい出血の為、村では救済の見込みは無いと諦めかけていた。

丁度その時、食料の調達に訪れていた二人のうち、老いた女性の方が瞬時に的確な応急措置を施し、少年の一命を取り止める。

忽ちの内その噂は小さな村を駆け巡り、治療を求めて山間の小屋に村人たちが訪れた。

女性は快く応じた。語学力に長けた彼女は、東方大陸の言語も自在に会話したが、もう一人の男性の方は、無愛想なまま小屋の外で作業に勤しむだけであった。

いつしか二人が中央大陸に関わる豊富な知識を持つことも伝わり、学びを求めて最初は青年達が、そして次に子どもたちが、徐々に集まるようになっていた。

老いたとはいえ気品ある女性は美しく、人々から慕われていた。

子どもは無邪気であるが故に、時に残酷な場合もある。

「ねえ、なんであのじいちゃんは右腕と左腕の長さが違うの？」

遠くで黙々と巻き割りの作業に勤しむ老いた男性を指さし、少年が尋ねた。

「ここにいる子どもの中で、同じ顔をした人はいるかな」

彼女は静かに微笑んで、少年の問い掛けに問い掛けを以て応えた。

「2人いるよ。だって双子だもん」

「でも、他にはいないよね」

少年は頷く。

「人はみんな違うもの。大人になると、もっと違ってくるもの。違うから嬉しい、違うから楽しいのです。例えば、あなたはどのゾイドが好きですか」

「エナジーライガー！」

即答する少年。しかし、東方大陸では目にしたことは無いはずだ。齎された断片的な情報から知った、それは憧れの存在なのだ。

「凄いゾイドみたいですよ。でも、この世界全てが、みんな同じゾイドしかないなくなったら、どう？」

「つまらない。他にも好きなゾイドはいろいろあるから」

「それと一緒に。あのひと……あのじいちゃんも、いろいろあったのよ。だからいろいろ。ここにもいろいろな子がいるでしょ。歩けなかったり、話せなかったり、見えなかったり。それでいいの。だからみんな違って楽しいの。」

さあ、今日は何のお話をしましょうか……」

彼女と手を繋ぎ、少年は一緒に小屋に入って行った。

「手紙は見ましたか」

微笑む彼女とは対照的に、彼は無言のままだった。

「写真が入っていて……ほら、懐かしいでしょ。みんな元気だったのね」

同封されていた写真を取り出し、彼の前に示した。

「覚えていますか、このゾイドの名前」

彼は銀色の左腕で写真を手に取る。

「……珍しいな、カノンフォートにオルディオス、それに青いレイノスか」

「あの日私が操縦しようとして海に落ちかけた時、あなたがダークホーンで引き上げてくれた」

「あの時の機体か。よくこの時代まで保存されていたものだな」

「どうやら惚けてはいないようですね」

彼女の戯れに、彼は不服そうに顔を背けながらも、目を細めて写真を見つめている。同封されていた手紙は、お世辞にも達筆とは言えない文字で、近況を伝える便りが記されていた。

あれからガイロスと交渉して、漸く探し出すことができた。重撃砲は欠損していたけれど、奇跡的にコアは無事でした。大異変の衝撃で

休眠状態になっていたのが幸いだったようだ。細君はとても喜んで早速乗り回しているよ。

オルディオスもやっとレストアが完了した。パーツ捜しには苦労したんだ。

それと、見てくれ！

長年交渉してきて、往年の「クレイジーホース暴れ馬」から譲り受けることに成功したよ。君たちから聞いていた、あの時のレイノスだ。暗黒大陸から共に帰還したゾイドだから、彼もなかなか手放してくれなかったけれど、僕の努力の甲斐あって漸く手に入れたんだ。

でも、細君にまた怒られた。「いくら息子たちが巣立った後とはいえ、ゾイドを幾つ買い揃えば気が済むの！」と。その日のコーヒーは熱湯だったよ。

なぜ女性は判ってくれない。自分でもカノンフォートを乗り回しているのに。

君のからも細君に言ってくれないか。真剣にお願いしたい気分だ。

(※注：この部分が線で消されている)

君が去ってからもう10年たつのだね。

あれから世界は随分変わったよ、若き皇帝陛下も含めてね。

因習に拘り続けた連中も、漸く気付いたようだ。

君の描こうとしていた世界がどのようなものは、僕にも想像できないけれど、少なくともこの星の人々は互いに歩み寄ろうとする気持ちが生まれている。

思えば随分時間がかかったものだ。それでも人間は着実に成長してきた。

絶望なんてものは、詭弁に過ぎない。ホロトロービックフリージング世界没落体験という奴で、平和な時期にはまたぞろ妙な噂がたつものだ。所詮、不幸は論理ではなく感情であって、その感情に対して論理的な解答を求める事なんかできない。僕はそんな輩に対しては断固対決していく心算だよ。

君たちも、遠い東の地で静かに暮らしているのだろう。戻って来いとは言わない。以前の手紙に記されていたように、君にとっての故郷は、もうこの惑星自体なのだからね。

彼の墓碑は、君の息子がしつかりと管理している。相変わらず君への不満は溢しているけど、理解もしているようだ。君の息子だ、心配はないだろう。

細君からも宜しくとのこと。機会があれば、そこに一度行ってみていね。ウルトラザウルスにレイノスを載せて。

二人の幸せを祈っている。

それでは。

追伸

カノンフォートを探しにニクスに行くため、ニカイドス島を経由して渡ったのだが、立ち寄った漁村で面白い話を聞いた。

なんでもその漁村には、昔ゼネバス皇帝をニカイドス島まで運んだタクチエルさんという老人がいて、〃皇帝陛下様をお助けしたのはこの儂じゃ！〃と言い張っているそうだ。

今でも中古のダークネシオスで、息子と一緒に漁をしているそうだが、村では本気で信じている人は少ないとのことだ。

彼の話は本当だろうか、興味が湧かないかい？

幾分は愚痴に近くなっていたが、写真の中で3機のゾイドの前で微笑む二人の姿は、幸せそのものであった。

「大陸は、平和になったのでしょうか」

彼はやはり無言であった。

だがそれは、寡黙な彼の肯定の意味での沈黙であると知っていた。

子ども達の声が一層騒がしくなる。彼女にとっての務めの時間だった。

彼女は立ち上がり、窓を開けた。

春風が花の香りを運び、小鳥が囀っている。

「お父さま、私はここにいます。ここで生きていきます」

見上げる先には、どこまでも続く青空が広がっていた。